

博士学位請求論文

指導教員 松田和信教授

菩薩藏經の梵漢藏四本対照研究

佛教大学大学院文学研究科仏教学専攻

象 本

目 次

目 次	i
凡 例	vii
序 論	1
一、先行研究	1
二、問題の所在	4
三、梵文写本の発見、提供、恩恵	5
四、本論の目的と方法	6
第一章、梵漢藏四本の経名	9
第一節、原典の経名について	9
第一項、問題の所在	9
第二項、sūtrānta.....	11
第三項、dharmaparyāya.....	16
第四項、『菩薩藏經』における sūtrāntaとdharmaparyāyaとの関係	17
第五項、小結	22
第二節、漢藏三訳の経名	22
第一項、玄奘訳の経名について	22
第二項、法護と惟浄との共訳の経名	25
第三項、藏訳の経名	25
第四項、小結	25
第三節、菩薩藏 (bodhisattva-piṭaka) とは何か	26
第一項、はじめに	26
第二項、菩薩藏と十二分教	26
第三項、菩薩藏と一切法	31
第四項、菩薩藏と六度	33
第五項、菩薩藏と断疑	35
第六項、菩薩藏と三宝の興隆および無上正等正菩提	36
第七項、實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』に説かれる菩薩藏の十義	38
第八項、小結	40
第四節、結び	41

第二章、梵漢藏四本の関係	43
第一節、四本の品立て	43
第二節、四本内容上の異同点	44
第一項、はじめに	44
第二項、梵文写本にのみ存在する内容	44
第三項、前四品、第十一品、第十二品における異同	49
第四項、玄奘訳のみ異なるケースについて	55
第五項、「慈悲喜捨品」の末尾における六波羅蜜多に対する列举	57
第三節、結び	57
第三章、『菩薩藏經』の内容	59
第一節、『菩薩藏經』の内容概観と全体構造	59
第二節、「家主品」に説かれる解脱道	60
第一項、解脱道を説く舞台と原因	60
第二項、四諦の内容	61
第三項、四諦の果報	74
第三節、虚妄分別、非如理作意、十二縁起の三者関係	76
第一項、『菩薩藏經』「家主品」に説かれる三者関係	76
第二項、非如理作意と無明	78
第三項、虚妄分別と非如理作意	79
第四項、小結	82
第四節、「金毘羅藥叉品」の位置づけ	83
第五節、成仏道としての菩薩藏法門	87
第一項、はじめに	87
第二項、願——發菩提心	87
第三項、信——如来の十不思議に対する信	102
第四項、行——四無量心・六波羅蜜多・四摂事	104
第五項、果——成仏の授記	110
第六節、結び	110
第四章、『菩薩藏經』と他經との関係	113
第一節、はじめに	113
第二節、『菩薩藏經』の序分と他經	113
第三節、『菩薩藏經』の正宗分と他經	114
第一項、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」と『大集經・無尽意菩薩品』の「無尽法門」	114
第二項、「菩薩藏法門」、「無尽法門」の内容対応系統	117

第三項、小結	121
第四節、「菩薩藏法門」、「無尽法門」の前後関係	121
第一項、先行研究の見解	121
第二項、それぞれの構造について	122
第三項、「十善巧」と「八方便」	124
第四項、小結	129
第五節、『菩薩藏經』に見られる編集の痕跡	130
第一項、『菩薩藏經』「菩薩藏法門」の由来と不備	130
第二項、『菩薩藏經』玄奘訳「道善巧」相当箇所の不備	130
第三項、四力と五力	133
第四項、「菩薩道」と「菩提道」	135
第五項、小結	138
第六節、『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の「悲無量心」と他經	138
第一項、「十種大悲無量」と「修集大悲十六事」	138
第二項、「十種大悲轉相」と「大悲無尽」	149
第三項、小結	153
第七節、『菩薩藏經』「如來の不思議品」と他經	153
第八節、『菩薩藏經』と『四分律』および『増一阿含經』	154
第九節、『菩薩藏經』と『大乘理趣六波羅蜜多經』	158
第十節、結び	159
第五章、漢訳『菩薩藏經』の特徴	161
第一節、はじめに	161
第二節、玄奘訳の加筆箇所	161
第三節、玄奘訳の誤り——四無量波羅蜜多——	169
第一項、はじめに	169
第二項、問題の所在	170
第三項、maitrīpāramitāsūdyogaḥかmaitrī pāramitāsūdyogaḥか	171
第四項、四無量波羅蜜多はインド由来の概念であろうか	174
第五項、小結	180
第四節、惟浄訳、法護訳の特徴と不適切な点	181
第一項、惟浄訳の特徴及び不適切な点	181
第二項、法護訳の特徴及び不適切な点	182
第五節、結び	185

第六章、『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」に見られる施者	187
第一節、問題の所在	187
第二節、「布施波羅蜜多品」における施物の内容	187
第三節、世間財物を施すことの果報	190
第四節、紡織者スートラチュナカ (Sūtracūṇaka) の説話	195
第五節、結び	198
第七章、『菩薩藏經』に見られる出家主義的性格	199
第一節、はじめに	199
第二節、序分の検討	199
第三節、正宗分の検討	199
第一項、家と家族について	200
第二項、婦人や妻について	204
第三項、出家について	208
第四項、阿蘭若住について	219
第四節、結び	221
結 論	223
一、編纂された経典としての『菩薩藏經』	224
二、菩薩藏の一切法化	225
三、時機に応じて変化する教え	225
四、『菩薩藏經』の翻訳から見えること	226
五、玄奘訳『菩薩藏經』から見えること	226
六、在家菩薩から出家菩薩へ	227
付録Ⅰ『菩薩藏經』梵漢蔵四本の前四品、第十一品、第十二品の異同表	229
第一「家主品」異同表	229
第二「金毘羅菓叉品」異同表	232
第三「菩薩觀察品」異同表	232
第四「如来の不思議品」異同表	233
第十一「般若波羅蜜多品」異同表	239
第十二「大自在天授記品」異同表	244
付録Ⅱ『菩薩藏經』「菩薩藏法門」、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」との対応例	251
『菩薩藏經』「菩薩藏法門」、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の内容対応系統Ⅰ	251
『菩薩藏經』「菩薩藏法門」、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の内容対応系統Ⅱ	261

略 号	273
参考文献	275
あとがき	287

凡 例

本稿で用いた漢訳資料はいずれも『大正新脩大蔵經』に基づき、引用に際してはSATのものを用いた。また、読者の便を計り、筆者によって一部見やすいように補助記号を加筆した。また訓点も筆者によって訂正を加えた。

また、本稿で用いた梵文『菩薩藏經』は、イェンス・ブローリック(Jens Braarvig) と松田和信等の翻刻、校訂作業途中のものを提供いただいた。その為、頁数を示すことができず、本文引用の際には写本の頁数及び行数を示した。また、作業途中の資料であったため、本稿で使用する際には筆者が最終的な校訂を施した。主に、文章を区切るダング等がそれである。しかし、それらの校訂はいずれもイェンス・ブローリック(Jens Braarvig) と松田和信等の校訂を参照して行ったものである。ここに記して、謝意を表したい。また、本稿中で梵文写本と記述する際には、当該の資料を指すものとし、脚注では校訂と記述する際には、両氏等の梵文写本の校訂研究を指す。

また、本稿では写本でVirāma記号が用いられている箇所では、「*」を付加した。また、写本で、代用Anusvāraが用いられている箇所では、修正を加えず、そのまま代用Anusvāraを用いた。また、写本では幾つかの書き癖があり、それらを明記せずに適宜修正した。例えば、satva > sattva等である。

また、本經の梵文写本にはない、漢蔵訳中にある内容を〔 〕で示す。また、文意を明確にするために適宜〔 〕を用いて訳語を補った。

また、本稿では敬称を省略した。

本稿では菩薩藏經という語が広義的な意味のものと狭義的な意味のものの二種類が用いられる。經典群を指すような広義的な菩薩藏經については<菩薩藏經>と記載し、狭義的な宝積部第12經としての菩薩藏經については『菩薩藏經』と記載し、読解の便を図った。

序 論

一、先行研究

宝積部の第12経『菩薩藏経』については、古来、中国仏教の伝統において、注目されることはあまりなかった。そのなか、近代仏教学では、主に、平川彰[1971]を始め、高崎直道[1974]、Ulrich Pagel[1995]、杜継文[2008]によって、研究が行われている。

平川彰[1971]は「菩薩藏経の種類と内容」、「菩薩藏の存在と仏伝文学」、「六波羅蜜多と菩薩藏経」、「菩薩藏の資料」という四つの視点から、菩薩藏および<菩薩藏経>について考察を行った。その中、「菩薩藏の存在と仏伝文学」という視点において、「菩薩藏」は、単数の経ではなく、多くの経を集めたものであり、初期大乘経典が作られた時に、それらの総名として、声聞乗の三藏に対して用いられた名称が「菩薩藏」であると推定している。また、「そして、総名がそのまま別名にも用いられたため、<菩薩藏経>と言われる経典がいくつか存在することになったのであろう」とも推定している。すなわち、平川の推論に基づけば、当該の宝積部第12経『菩薩藏経』は、菩薩藏あるいは<菩薩藏経>という総名でよばれている特定の一経典であることが分かる。また、氏は、「六波羅蜜多と菩薩藏経」という視点において、「菩薩藏経は、般若経とは異なった系統であって、六波羅蜜多を一一細説し、強調し、仏教の修行を六波羅蜜多にまとめようとしている経典である」とみなす。また、「菩薩藏の資料」という視点では、部派の論書、大乘経典、大乘論書にいろいろな形で菩薩藏・<菩薩藏経>が登場することから、「菩薩藏経が大乘仏教で古くから有力であったことが知られるであろう」、「菩薩藏経が唯一の経典でなく、多数の経典の叢書（蔵, *piṭaka*）であったという推定を強めるものである」として、<菩薩藏経>が最早期の一類の大乘の経典群の総称である可能性を推す。以上のように氏は、論文で広義的な、総名としての菩薩藏あるいは<菩薩藏経>という語について詳しく考察を行っている。しかしながら、別名として『菩薩藏経』とよばれる宝積部第12経の本『菩薩藏経』については、ただ「菩薩藏経の種類と内容」において、『菩薩藏経』の漢訳の経緯および各品の内容について概説するにとどまり、経典自体の内容は分析しなかった。

次に、高崎直道[1974]は、先の平川彰の理解、すなわち、「菩薩藏経が唯一の経典でなく、多数の経典の叢書である」という説を認める。そしてその上で、「「菩薩藏経」とは広義には大乘経典のすべてがそれに該当することとなる」として、平川が想定したものよりも広い菩薩藏経観を提示する。また、<菩薩藏経>という総名をそのままに別名として用いている特定な経典である、玄奘訳『大菩薩藏経』については、高崎氏は、「形は経でも、内容的には論典に近いと言わざるを得ない」と見解を述べて、『大菩薩藏経』が「論母」(*mātrka*) 的性格の「摂大乘」(*mahāyānasamgraha*) 経である可能性を提示する。その主張の根拠は大きく挙げて二点である。まず、第一の点であるが、『大菩薩藏経』では六波羅蜜多を一つの重要なテーマとして掲げ、その六波羅蜜多品では諸経に説かれる菩薩行を集める点である。そして、第二の点は、『大菩薩藏経』が「多くの経典からその材料を得て編集されたもの」という点である。これらの点とともに、『大菩薩藏経』が大乘の教説の総まとめを目的としているといえよう。このことから氏は『大菩薩藏経』を、『瑜伽師地論』中の菩薩地と同様、大乘の所説のすべて

にわたっての総撰 (saṃgraha) 的性格を持つアピダルマ的經典であるとみなすのである。また、氏は論証の際に、『大菩薩藏經』の内容と『大集經・無尽意菩薩品』の内容とを詳しく対照することによって、両者が緊密な関係を持つことも示唆する。

また、Ulrich Pagel [1995]はその研究の中で、「大乘文献中の菩薩藏經」¹、「菩薩藏經に対する分析」²、「大宝積部中の菩薩理想」³、「他經典伝統の文脈中での菩薩藏經の菩薩の諸教義と諸実践」⁴、「菩薩藏經の第十一品に対する翻訳」⁵という五つの章から、この宝積部の第12經の『菩薩藏經』に対する研究を行っている。本研究は『菩薩藏經』に焦点をあてた膨大な研究である。そこで章毎に、その内容の詳細を述べたい。

まず、第一章では、「菩薩藏」という語が、大乘の成立前にすでに存在し、後に、大乘の作者たちによって、その適用範囲が変更されて新たな意味合いが含まれた、と述べる⁶。そのうえで、氏は、大乘經典中で、「菩薩藏」という語の用例を検討し、時には、一切の仏法が含まれているものとして扱われ、時には、大乘藏 (Mahāyānapīṭaka) として用いられ、時には、声聞藏と独覺藏に対しての位置づけられるものとして扱われることに言及する。また、「菩薩藏」を単独な經典の名称として用いるのは、*Lokadharapariṣcchā* (『持人菩薩經』 (紀元265-313年の間に竺法護によって漢訳)) が最初ではないかと指摘している⁷。また、氏は宝積部の第12經の『菩薩藏經』と『無尽意所説經』 (*Akṣayamatīnirdeśa*) との両者の関係についての検討も行う。結果的に氏は、『菩薩藏經』は『無尽意所説經』を利用して成立したとする高崎[1974]の理解とは異なる見解を述べる。また、氏は玄奘がインドから帰国後、最初に『菩薩藏經』を翻訳した意図を分析する。結果、玄奘は『菩薩藏經』において六度・四無量心・諸菩提分法といった教義によって描かれている菩薩理想 (bodhisattva ideal) が、後世の菩薩理想の形成に手本となっていたことを見だし、最初に翻訳したのではないかと分析している。また、氏は、大宝積部 (Mahāratnakūṭa Collection) が作り出された土地について、南インド起源説ではなく、中央アジア起源説を重視する旨を述べ、玄奘と菩提流志 (Bodhiruci) がインドから中国に将来した梵文の大宝積部の經典は、中央アジアからインドに伝来したものと推測する。

次に、第二章では、『菩薩藏經』における各品の内容が概説される。そして、本經の文学特徴 (literary traits) に対する分析において、散文の部分 (prose sections) には散逸で冗長な叙述のスタイルが用いら

¹ The Bodhisattvapīṭaka in Mahāyāna Literature.

² Analysis of the Bodhisattvapīṭaka.

³ The Bodhisattva Ideal in the Mahāratnakūṭa Collection.

⁴ The Bodhisattva Doctrines and Practices in the Bodhisattvapīṭaka within the Context of other Scriptural Traditions.

⁵ Translation of Chapter Eleven of the Bodhisattvapīṭaka.

⁶ Ulrich Pagel [1995, p. 7] Throughout the centuries, in Mahāyāna literature the term Bodhisattvapīṭaka has been applied in a number of distinct ways. Reported by Hsuang-tsang and Paramārtha indicate that the term originated in the early, pre-Mahāyāna, schools. In later times, it was taken up by Mahāyāna writers who altered its scope of application and imbued it with new connotations.

⁷ Ulrich Pagel [1995]は蔵訳『持人菩薩經』を検討し、そこで登場する「菩薩藏」こそが別称、すなわち単独經典としての菩薩藏經の初出であると分析する。しかしこの検討は無批判に享受できるものではない。なぜなら、漢訳『持人菩薩經』では次のように示される。

佛言。持人。若有菩薩觀是法品。大智慧業無極明本。積大功德不可限量。若將來世受是法品持諷誦讀。及餘深經菩薩篋藏。諸度無極勤心奉行。魔事因緣不能得便。不爲罪蓋之所覆蔽。(T14.641b16-20)

当該の文脈では、「菩薩藏 (菩薩篋藏)」を単独の經典として言及しているのが判断しづらく、むしろ総称的に用いられているように見受けられるからである。従って、この点についてはより批判的な検討が必要であろう。

れることを指摘し、このような大量な例示が用いられる叙述のスタイルが話題の間のつながりの障碍となっていることも指摘する⁸。

次に、第三章では、菩薩理想 (the bodhisattva ideal) という概念から、大宝積部を全体にわたり考察する。考察の結果、大宝積部は49の経から構成されているが、「菩薩」に対して強い関心を持っているのは、そのうち24の経でしかない⁹。そして、それらの24経中、菩薩の実践である六度の一つ一つを細説するのは『菩薩藏經』だけであり、他の23の経においては、六度を付随的に言及するにとどまる。また、解説を施すとしてもその中の幾つかに限って解説するのであり、六度全体的に細説を行うことはない。つまり、六度に対して、一貫性を持ち、且つ十分な理解を伴う解説は、『菩薩藏經』以外、他の23の経のいずれにも認められない¹⁰。このような検討結果にもとづいて、『菩薩藏經』は、菩薩の六度という実践に対する描写が最も詳細であることから、高く評価され、大宝積部中の菩薩のビジョンの最も中心に位置する經典とみなすことができる¹¹。と指摘する。

次に、第四章では、他の伝統的な經典との比較を通じて、『菩薩藏經』に説示される発心、四無量心、六度、四摂事等の教義と実践の項目に対する詳細な分析を行う。氏は、『菩薩藏經』に説かれている〔六度等の〕諸実践の項目が初期のものである性格を持つ点、及びそれらの諸実践の項目の相互の間の分断がはっきりされていない点や文章の表現形式に若干の混乱性を持つ点等、幾つかの点から、『菩薩藏經』が大乘の早期に作り出された經典であると分析する¹²。

次の第五章では、蔵訳『菩薩藏經』より、第十一「般若波羅蜜多品」をサブタイトルで区切りながら英文に翻訳を行う。以上がUlrich Pagel [1995]の研究の大綱である。

杜繼文 [2008] は、『菩薩藏經』を様々な菩薩行一般に対する概括と総結を行う經典であると位置づける¹³。また、如来の相状と徳性から、その第四「如来不思議性品」に説かれている如来の十不可思議法および菩提に対する紹介も行う。そして、氏は、『菩薩藏經』の「四無量・六波羅蜜多・四摂法」という菩薩行の構造は、「六波羅蜜多」を主な菩薩実践としている般若類經典以降に現れた新しいもので、その後的大乗仏教の菩薩道にとって、重要な貢献であるとも述べる¹⁴。

⁸ Ulrich Pagel [1995, p. 83] The prose sections of *the Bdp* are dominated by a rather rambling narrative style..... The narrative style with its wealth of examples tends to interfere with the flow of conceptual links between individual topics.

⁹ Ulrich Pagel [1995, p. 97] I set out to scan the forty-nine sūtras for material on the bodhisattva. In all, I identified twenty-four sūtras that share a keen interest in the bodhisattva.

¹⁰ Ulrich Pagel [1995, p. 120]...there is only one text that discusses all six of them in detail, namely *the Bdp*. Other sūtras refer to them either in passing or take up individual perfectongs, but none of them gives a coherent, comprehensive account of their operations.

¹¹ Ulrich Pagel [1995, p. 121]...., it was highly esteemed for the detail in which it describes the training of the bodhisattva. Above all, its exposition was commended for the treatment of the six perfections..... *the Bdp* was thought to be at the very heart of the Ratnakūṭa's vision of the bodhisattva.

¹² Ulrich Pagel [1995, p. 326] many of the *Bdp*'s propositions belong to the incipient phase of the bodhisattva doctrine; the early nature of the practices and their loose divisions, the formal exclusion of skillful means, the basic path structure and the ill-organised form of presentation, they all imply an early origin of the *Bdp*.

¹³ 杜繼文 [2008, p. 472] 「《菩薩藏經》对全部菩萨行的概括和总结」。

¹⁴ 杜繼文 [2008, p. 502]。

二、問題の所在

先に述べたように、平川彰 [1971] と高崎直道 [1974] によれば、菩薩藏經には総名と別名の二種類があることが指摘されている。つまり、広義的な菩薩藏經とは、特定の一经を指すのではなく、多数の大乗經典の叢書の総名としてのものである。一方、狭義的な菩薩藏經とは、その菩薩藏經という名称を有する固有の經典、すなわち別名として使っている特定な經典を指すものである。例えば、宝積部第12經の『菩薩藏經』、鳩摩羅什訳『菩薩藏經』（三卷）、僧伽婆羅訳『菩薩藏經』（一卷）等が狭義的な菩薩藏經である。しかし、平川彰 [1971] がその研究の中で、焦点を当てているものは広義的な菩薩藏經であり、狭義的な菩薩藏經のひとつであるこの宝積部第12經の『菩薩藏經』については、その漢訳の経緯、各品の内容に対する概要的な紹介はするものの、詳細な検討は施されなかった。また高崎直道 [1974] は、この宝積部第12經の『菩薩藏經』が論典的性格を持つことを明らかにしたが、検討を行う箇所は部分的であり、未だ未検討の箇所は多く、検討の余地を残しているといっても過言ではないであろう。また、Ulrich Pagel [1995]の研究において特段、注視すべき点は、この宝積部の第12經の『菩薩藏經』を大乘仏教の早期に出来上がられた經典と位置づける点であろう。氏は前掲の二者と違い、宝積部の第12經の『菩薩藏經』を丹念に分析する。しかし、その分析は蔵訳文献に準拠したものであり、漢文文献、特に玄奘訳『菩薩藏經』が十分に参照されているとは言えない。また、この点については、J. W. De Jong[1996, pp. 176-182]によって強く指摘されている。例えば、四正断（/勤）（samyakprahāṇa）を説く文脈中、戒对治とは何かという説示がある。その説示の末尾の箇所に、『無尽意所説經』中では、「戒蘊（*śīla-samūhāra*）」という言葉があるが、『菩薩藏經』（第十一品）では「戒（*śīla*）」と記されるにとどまる¹⁵。この両經の差異について、Ulrich Pagel [1995, pp. 44-45]は、これを『無尽意所説經』が『菩薩藏經』の材料を利用して少し変化を加えたという一例として挙げている。しかし、これに対して、J. W. De Jong[1996, p. 177]は、そこで「戒蘊（morality aggregate）」ではなく「戒（morality）」を用いているのは、蔵訳『菩薩藏經』に限られ、実は、玄奘訳『菩薩藏經』では、『無尽意所説經』と一致で、「戒聚」でしている¹⁶、と指摘する。また、『菩薩藏經』の第十一品の、「〔菩薩は〕義を依所とし、文（字）を依所としない（*arthaṃ pratisarati na vyamjanam*）」という説示に関しても同様の誤解が指摘されている。Ulrich Pagel [1995, p. 46] はこの点について次のように述べる。

¹⁵ 『菩薩藏經』 (P Wj209b2-4) :

[illegible]

当該箇所に対するUlrich Pagel [1995, p. 44]の翻訳は次の通りである。

[Non-virtuous factors] counteract moral conduct, concentration and discriminative understanding. What is counteractive of moral conduct? Factors that corrupt moral conduct and some other [factors] that impair it, that is counteractive of moral conduct.

『無尽意所説經』 (P Bu166b7-167a1) :

གང་འདི་རྒྱུ་ཁྲིམས་ཀྱི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་དང་། ཉིང་དཔེ་རྒྱུ་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་དང་། ཤེས་རབ་ཀྱི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་སོ། ཇོ་ཡང་རྒྱུ་ཁྲིམས་ཀྱི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་གང་ཞིང་། གང་འདི་རྒྱུ་ཁྲིམས་ཉན་པ་དང་། གང་དག་གཞན་གྱི་རྒྱུ་ཁྲིམས། གང་ཉན་པ་མཐོང་བའི་རྒྱུ་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་སུ་གྱུར་པ་འདི་ནི་རྒྱུ་ཁྲིམས་ཀྱི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་ཞིག་ཡིན། །

当該箇所に対するUlrich Pagel [1995, p. 44-45]の翻訳は次の通りである。

Factors that corrupt moral conduct and some other [factors] that impair it, viz., factors that counteract the morality aggregate, that is counteractive of moral conduct.

16 玄奘訳『菩薩藏經』のこの箇所の内容は、次の通りである。「所謂尸羅戒所對治。定所對治。慧所對治。云何名爲戒所對治。舍利子。言對治者。所謂犯戒及餘一切發起。毀犯尸羅之法。諸妙戒聚之所對治。如是名爲戒所對治。」(T11.310a3-6)

Another interesting, though somewhat more ambiguous, variant reading is found in the discussions regarding the practice of having recourse to the meaning and not to the letter (arthapratisaraṇena bhavitavyaṃ na vyañjanapratisaraṇena). In the *Bdp*, we learn that the letter instructs the bodhisattva “not to abandon any sentient being”, but the *Akṣayamatīnirdeśa* changes the sentence to say that the letter teaches bodhisattvas “to renounce all possessions”.

すなわち、Ulrich Pagel [1995, p. 46]は、当該箇所 of 文言について、『無尽意所説經』は『菩薩藏經』を利用しつつその中に説かれている「[文（字）(vyamjana) とは、菩薩に] あらゆる有情たちを棄てない[くださいと教示するものである。]」という句を「[文（字）とは、菩薩たちに] すべての所有物を放棄する[と教えるものである。]」という句に変更した、と指摘している。しかし、これに対して J. W. De Jong[1996, p. 177] は次のように述べる。

On p.46 Pagel remarks that in the *Bdp* the letter instructs the bodhisattva “not to abandon any sentient being” whereas the *Akṣayamatīnirdeśa* has “to renounce all possessions”. Here also Xuanzang’s translation agrees with the *Akṣayamatīnirdeśa* (T.310, p. 303c9).

すなわち、ここでも玄奘訳『菩薩藏經』が『無尽意所説經』と一致していることが指摘され、Ulrich Pagel [1995, p. 46]が当該箇所を検討する際に、『菩薩藏經』の玄奘訳を参照せず蔵訳だけを参照していることを指摘する。すなわち、J. W. De Jong[1996]の二つの指摘から、Ulrich Pagel [1995]は、『菩薩藏經』の蔵訳だけを使って、その漢文の玄奘訳を参照していないか、参照していても精密ではなかったことが見受けられる¹⁷。一方で、平川彰 [1971]、高崎直道 [1974]、杜継文 [2008] ¹⁸は、殆んど『菩薩藏經』の蔵訳ではなく玄奘訳に準拠し、玄奘訳を中心に検討したものである。また、『菩薩藏經』には法護と惟浄の宋訳本が存在するが、上述の先行研究ではいずれにおいても利用されていない。従って、『菩薩藏經』のその三訳本を綿密に対照した研究は未だ嘗て存在しない。さらに、先行研究の段階では『菩薩藏經』の梵文写本は発見されておらず、梵本が発見された今こそ、『菩薩藏經』を梵本、蔵訳、玄奘訳、宋訳の四本を用いて、綿密に比較対照を行いつつ研究する必要があると言えよう。

三、梵文写本の発見、提供、恩恵

この宝積部の第12経『菩薩藏經』の梵文写本は、近年ラサのポタラ宮で発見されたものであり、近年、オスロ大学のイエンス・ブローリック(Jens Braarvig)や佛教大学の松田和信等によって出版が進

¹⁷ また、J. W. De Jong[1996, p. 181]はUlrich Pagel [1995]が玄奘訳を参照していないことを受けて、次のようにコメントしている。

It is to be hoped that future students of the *Bdp* will take into account the Chinese translations. Xuanzang’s translation is important for two reasons.....

¹⁸ また、杜継文 [2008] には玄奘が翻訳したこの經典の内容を、玄奘の自身の思想的観点に基づくものとする理解が時折見え、訳経者と翻訳經典の両者の思想を混濁して分析する。この点にも問題があると言えよう。

められているものである。そのため従来の研究においては梵本は参照されておらず、比較研究に用いる大きな価値が存在する。また、梵文写本を参照したうえで、他の三訳と対照し、そのうえで『菩薩藏經』に対する研究を行うことによって、藏訳や漢訳からは分析しづらかった本来の性向なども、より原意に近い形で分析することが可能となる。一例を上げれば当該の經典タイトルについて等がそうである。また、四本をそれぞれ比較研究することによって、漢藏三本、すなわち玄奘訳、宋訳、藏訳の諸訳が梵文原典をどのぐらいに忠実に翻訳されているのか、またそれらの系統がどこに位置するのかといった点も推測することが可能になるであろう。また、それに伴い、それらの諸訳の特徴と不適切な翻訳点も明らかとなるであろう¹⁹。

四、本論の目的と方法

さて、先に紹介した平川彰 [1971]、高崎直道 [1974]、杜繼文 [2008] 等の先行研究では、宝積部第12經の『菩薩藏經』に対しては紙面の問題もあってか、具体内容の詳細については踏み込まない。また、Ulrich Pagel [1995]は詳細な研究であるものの、『菩薩藏經』の藏訳に準拠した研究であり、完全なものとは言い難い。一方で、先にも触れたように平川彰 [1971]、高崎直道 [1974]、杜繼文 [2008] は『菩薩藏經』の玄奘訳を中心に検討したものであり、藏訳に関しては詳細には検討されない。すなわち、この『菩薩藏經』に対して、その諸本を精密に対照して行われた研究は、今までなかったと言えよう。そのようななか、本研究に際しては『菩薩藏經』の梵本テキストの提供を受け、参照することが叶った。そこで本研究では梵漢藏の四本を精密に比較検討することによって、全面的な視角から本『菩薩藏經』の全体を詳細に分析する。特に明らかにしたい点としては、本『菩薩藏經』の梵漢藏の四本の經名および菩薩藏の意味、その四本の異本の関係、修道論上における説法の配置、全經構造と内容、本經に説かれている虚妄分別と非如理作意と十二縁起との三者の関係、他經との関係、三訳本の特徴と不十分な点、本經が持つ性格などを想定している。そこで、本研究では、以下のような章を設けて、研究を行う。

まず、第一章では、「sūtrānta」と、「dharmaparyāya」という二つの単語の検討によって、本經の梵文原典の經名を分析する。次に、『開元釈教錄』、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』等の經錄を使って、本經の玄奘訳が『菩薩藏經』や『大菩薩藏經』と經名に差異が存在する理由について検討を行う。さらに、本經の宋訳本と藏訳本の經名、訳者に対する紹介を行う。最後に、菩薩藏と、十二分教・一切法・六度・斷疑・三宝の興隆・無上正等正菩提との関係に対する分析、および實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』に説かれる菩薩藏の十義に対する列举によって、本經の經名中にある「菩薩藏」という用語の歴史的位置づけを明らかにし、「菩薩藏」とは何かを明らかにする。

次に、第二章では、諸訳において品立てと内容に異同点があることから、この四本は系統を異にする異本であることを明らかにする。さらに、本經の前四品、第十一品、第十二品における異同、道善

¹⁹ 例えば、『菩薩藏經』の梵文写本を『大集經・無尽意菩薩品』と対照してみれば、梵文の *vipaśyanā* が、『大集經・無尽意菩薩品』では、「慧」(T13.210a23)と訳されており、基本的な訳語が用いられていないケースもあると理解できる。このように、梵文写本によって受ける事のできる恩恵は数知れない。

巧の順序、および四摂法中にある布施の数目、第五品の末尾に列挙されている六波羅蜜多の項目に対する分析によって、本經の梵文写本と他の三訳のそれぞれが参照したであろう梵文原典の先後関係を明確にする。

第三章では、本經を序分、正宗分（主要部）、流通分の三つの構造に分けて、それぞれの内容的意味合いを検討する。区分としては、本經の前二品を序分とし、第三品から第十二品の世尊の本生譚までの内容を本經の正宗分（主要部）とし、その世尊の本生譚の後にある本經の受持・流通功德を説く内容を本經の流通分として区切る。次に、修道論的視点に基づく分析として、世尊が序分の第一「家主品」で賢護などの五百在家者たちに説かれている仏法を「解脱道」（声聞菩提道）と分類し、世尊が本經の第三「菩薩觀察品」から第十二「大自在天授記品」（その中にある本經の流通分の内容を除く）までに説かれている仏法を「成仏道」（仏菩提道）と分類して、二分し、本經の配置区分から本經の意図を考察する。その結果、前者、「解脱道」は四諦でまとめ、「成仏道」は「願」（菩提心を発、菩薩になる）、「信」（仏果を信じる）、「行」（四無量・六度・四摂法を行ずる）、「果」（成仏授記を受ける）という四つの修行の段階によってまとめる、といった点が明らかとなる。また、本章でも、本經の梵文写本に対する解説、四本対照を並行して行う。そのうえで、本經に登場する「虚妄分別」（abhūtaparikalpa）の意味を明らかにし、また、それと非如理作意と十二縁起との三者の関係も明らかにする。

第四章では、本『菩薩藏經』と他經との関係を検討する。まず、本經の序分の内容を他經との関係から検討する。次に、本經の正宗分の内容を他經との関係から検討する。まず、前者の検討では、本經の序分としての前二品の内容が、大乘經典としての本經の独創なものであることを明らかにする。次に、後者の検討では、本經の「菩薩藏法門」の内容と『大集經・無尽意菩薩品』の「無尽法門」の内容との比較から、両法門が一致もしくは類似点が非常に多いことを指摘する。さらに、両法門にある慈と慈無尽との内容対応の例、および布施波羅蜜多と布施無尽との内容対応の例を挙げて、両法門の対応関係の分類を明らかにする。その上でこの両法門はどのような影響関係にあるのかについて検討をおこなう。検討においては、両法門の構造、両法門にある「十善巧」と「八方便」、「菩薩藏法門」に編集の痕跡があるという幾つかの視点から、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」は『大集經・無尽意菩薩品』の「無尽法門」より新しくできたものである可能性を指摘する。また、『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の「悲無量心」中の「十種大悲無量」と、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の「修集大悲十六事」との対照、および『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の「十種大悲轉相」と『大集經・無尽意菩薩品』の「大悲無尽」との対照より、『菩薩藏經』は、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』と『大集經・無尽意菩薩品』の二者から素材を取り入れるものの、現存する他の經典に基づかない独自性もあることを明らかにする。また、『菩薩藏經』「如來の不思議品」の十力不思議、四無畏不思議、十八不共法不思議という三項目の内容と、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の「如來が有する三十二業」の内容との対照から、対応点より、『菩薩藏經』が『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』より増広された性質を明らかとする。また、『菩薩藏經』「如來の不思議品」の「如來の光明不思議」の内容と『起世經』「三十三天品」の内容との比較から、『起世經』も『菩薩藏經』の創作上の材料源の一つである可能性も提示する。さらに、本『菩薩藏經』「大自在天授記品」、『四分律』「受戒捷度之一」、『增一阿含經』「馬血天子問八政

品」（以下『増一阿含・八政品』）の三者のそれぞれにある雲（Megha）に対する燃灯仏授記の物語の比較により、『四分律』、『増一阿含経』は、本『菩薩藏経』が創作上の一つのソースである可能性を明示にする。また、『菩薩藏経』第二「金毘羅菓叉品」にある釈尊の授記前兆の内容と、『増一阿含・八政品』にある燈光如来（燃灯仏）授記前兆の内容との対照、および『菩薩藏経』「如来の不思議品」に挙げられている墨（maṣi）の譬喩の内容と、『増一阿含・八難品』第三経にある墨の譬喩の内容との対照により、『増一阿含』と本『菩薩藏経』の関係性を明らかにする。最後に、本『菩薩藏経』と『大乘理趣六波羅蜜多経』との比較、および『大乘理趣六波羅蜜多経』と『大集経・無尽意菩薩品』の比較により、本『菩薩藏経』と『大乘理趣六波羅蜜多経』とは、直接的な関係を有さず、両経共に『大集経・無尽意菩薩品』から材料を取り入れた可能性を指摘する。また、『菩薩藏経』と以上の諸経律との関係を論じる際に、『菩薩藏経』が他経から材料を取り入れると同時に、本経独特の内容も具備することをも指摘する。

第五章では、本『菩薩藏経』の三訳の傾向および不適切な訳語について検討する。まず、玄奘訳と梵文写本を対照し、玄奘訳には部分的であるものの加上箇所がある傾向を指摘する。次に、玄奘訳に登場する「四無量波羅蜜多」という概念を分析し、玄奘三蔵が *maitrīpāramitāsu* という語を誤読したことから登場した概念である可能性を指摘する。さらに惟浄訳は直訳的な傾向を持つこと、法護訳ではよく梵文原文に不忠実な翻訳を行っていた可能性、藏訳が極めて直訳的な傾向を持つことを指摘する。

第六章では、『菩薩藏経』「布施波羅蜜多品」で説かれる布施の施者は在家出家いずれの菩薩であるかについて検討する。まず、本品の所施物の内容からその施者が誰かを究明する。本品に挙げられている施物の内容は四阿含といった初期仏教系の資料に見られるものである。そこで、四阿含にみられる施者の記述と照らして検討を行い、菩薩の特性を考察する。次に、本品が世間財物の布施のみを強調する点に注目し、紡織者スートラチュナカ（*Sūtracūṇaka*）が布施によって成仏する例などを参考にしつつ、本品における布施を施す者が誰かを明らかにする。

第七章では、まず、『菩薩藏経』の序分が出家主義的性格を持つことを概説する。そして、『菩薩藏経』の正宗分においても、家や家族に対して惜しみしないこと、婦人や妻を敵視すること、出家と梵行を成仏の必須な前提とすること、阿蘭若処住をアピールすること、という幾つかの点より、出家主義的性格を持つことを明らかにする。

以上、七章からなる検討によって、先行研究では未だ分析されていなかった『菩薩藏経』という経典の特性を様々な視点から多角的に検討し、本経典の性格を明らかにすることが本稿の目的である。そしてそれは大乘仏教とは何か、菩薩とは何かといった近代仏教学における不朽の命題を明らかにする一助となりえるであろう。

upasaṃkramyāyusman tam ānanda (6) tathāgatasyāśanam dharmāśanam varāśanam pravarāśanam
sarvatrailokyapratīṣṭāśanam buddhāśanam (l) yatrāsane tathāgato niṣadya sarvasattvānugrahaprasāstam
bodhisattvapiṭakam nāma sūtrāntam bodhisattvacaryāniṣyandam bhāṣiṣyate (l) etac ca
sarvasattvasaṃśayasampratipādanam sarvasattvasaṃśayacchedanam
sarvasattvasaṃśayasamutpatticcheda(7)nam imaṃ tathāgatasūtrāntam bhāṣiṣyate bahujanahitāya
bahujanasukhāya lokānukampāyai arthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca (l) prajñapayat
āyusmān ānando bhagavataḥ āśanam (l) tatrāṣṭaṣṭibhir devakoṭībhir ekaikaṃ duṣyam tathāgatāya dattam
yāni tatrāsane prajñaptāny abhūvan (l) nyaṣīdad bhagavāṃ prajñapta evā(8)sane (l) niṣadya bhagavāns tām
devaputrām gāthābhir adhyabhāṣata ||

【訳】 その時、多くの千の天と、多くの千の葉叉と羅刹（rākṣasa）と、多くの千百の乾闥婆と緊那羅と大蛇と、多くの千の人と非人と、多くの千百の那由他俱胝の有情とによって取り囲まれ、前に置かれている世尊は、偉大な仏の威力と、偉大な仏の神力と、偉大な仏の神通と、偉大な仏の神変と、偉大な仏の威光とによって、光明を放っている。大地を震動させ、花の雨を降らせ、千百の那由他俱胝の楽器を奏させながら、両足が車輪の大きさ程の諸々の蓮華に置いている。金毘羅の息子であるシャーイラ（śaila）葉叉によって、〔諸障礙を〕除かれ、準備された道に従って、山の王である鷲峯であるところ、そのところに行った。到着してから、〔世尊は、〕「阿難陀長老よ。法の座であり、最上の座であり、極最上の座であり、一切の三つの世界を乗り越えた座であり、仏の座である彼如来の座を〔敷いて下さい〕、如来はこの座のところに坐ってから、一切衆生に対する利益のために称賛され、菩薩行に導く菩薩藏という sūtrānta を説こう。〔言い換えれば、〕これも、多くの人々の利益のために、多くの人々の安樂のために、世間に対する憐愍のために、天たちと人間たちとの利益と安寧と安樂とのために、彼は一切衆生には疑惑があると認め、一切衆生の疑惑を断ち、一切衆生の疑惑の起原を断つこの如来の sūtrānta を説こう〔という〕」と〔言った〕。阿難陀長老は世尊の座を敷く。その中、六十八俱胝の天たちは一人ずつに如来のために布を布施した。それら〔布〕はその座に敷かれた。世尊は正に敷かれた座に坐った。坐ってから、世尊はそれら天子たちに諸偈によって話した。

ここで、世尊は聴衆に対して「一切衆生に対する利益のために称賛され、菩薩行に導く菩薩藏という sūtrānta を説こう（ sarvasattvānugrahaprasāstam bodhisattvapiṭakam nāma sūtrāntam bodhisattvacaryāniṣyandam bhāṣiṣyate）」と述べている。当該の記述は本經典の教えを示しているものと思われる。仮にそうであれば、『菩薩藏經』の梵文原名は、bodhisattvapiṭaka-sūtrānta が想定できよう。

しかし、その一方で、梵文写本のコロフォンには、「菩薩藏という dharmaparyāya である大乘經完了 (bodhisattvapiṭakam nāma dharmaparyāyam mahāyānasūtram samāptam)」²³と記されている。また、当該

²³ MS142a3.

のbodhisattvapiṭaka dharmaparyāyaという名称は、本經の第五「慈悲喜捨品」から、第十二「大自在天授記品」²⁴までに、およそ60回程²⁵も登場する。

では、bodhisattvapiṭaka-sūtrāntaと、bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāyaの両者の内、いずれが本来の梵文の原題なのであろうか。この点を明らかにするべく、今は、sūtrānta、dharmaparyāyaという両語の検討から、分析を行いたい。

第二項、sūtrānta

(一)、『菩薩藏經』に用いられる訳語について

梵文原典中、sūtrāntaが登場する箇所を玄奘は次のように翻訳する。

爲欲利益一切衆生故。說大乘菩薩行所依經。名微妙吉祥大菩薩藏。此經能令一切衆生疑山崩墮。此經能令一切衆生疑網斷絕。此經能令一切衆生疑根不生。此大乘經利益安樂諸衆生故。哀愍大衆及諸天人。是故如來方爲開闡。(T11.205b4-9)

ここで、玄奘は二回登場するsūtrāntaをすべて「經」と訳していることが見て取れるが、一つ目のsūtrāntaの箇所に、玄奘が「菩薩藏」の前に、「微妙」・「吉祥」・「大」という形容詞を付けること、および二度目の箇所では、「經」の前に、「大乘」を付けることから、玄奘が意味上 sūtrānta を sūtra と区別しようと考えていた可能性が見いだせる。

次に、法護等訳では次のように翻訳する。

攝受一切衆生。稱揚演說彼菩薩藏(歳は蔵の誤写)甚深正法。成辦一切菩薩勝行。除去一切衆生諸有疑惑。開明正慧斷諸疑網。如來說此甚深經典。廣爲悲愍利益安樂天人世間一切衆生〔。〕(T11.791c16-20)

ここで、法護は、その一つ目のsūtrāntaを「甚深正法」と訳し、二つ目のsūtrāntaを「甚深經典」と訳していることが分かる。つまり、法護にとって、sūtrāntaは、sūtraより以上の意味を持つことが窺えよう。

最後に、藏訳では次のように翻訳を行う。

²⁴ 本經は四本に異なる品立てを有する。しかし、検討の便宜上、本稿では、玄奘訳に従い、十二品の区分を用いる。品立ての差異については、第二章の第一節の「四本の品立て」にて検討を行うので、そちらを参照されたい。

²⁵ 第五「慈悲喜捨品」に3回(MS53b8、MS54a1、MS54a6-7)；第九「精進波羅蜜多品」に27回(MS85a3、MS85a5、MS85b1、MS85b3、MS85b4、MS86a5、MS88a3、MS106a2(2回)、MS106a3、MS106a8、MS106b1、MS106b2(3回)、MS106b3、MS106b4、MS106b5、MS106b6、MS106b8、MS106b8-107a1、MS107a3(2回)、MS107a6、MS108a3-4、MS108a4、MS108a5)；第十一「般若波羅蜜多品」に18回(MS115a5、MS115a6、MS115b4(2回)、MS115b4、MS116b3、MS117a4、MS117a8(2回)、MS117b6、MS118a1(2回)、MS118b3(2回)、MS133a3(2回)、MS133a4、MS133b4)；第十二「大自在天授記品」に12回(MS138a6、MS138b1、MS138b6、MS139a1、MS139a2、MS141b5、MS141b6、MS141b7(3回)、MS141b8、MS142a3)。

以上のことから、-antaという語は玄奘訳でみられた「甚深」、「正」等といった語との関係が認められよう。

(三)、先行研究における解釈

Sūtrāntaという語はいくつかの先行研究で取り扱われている。今はそのうち、特に関係のある四つを紹介してみたい。

まず、村上真完 [1998, p. 2] は次の点を指摘する。sūtrānta (經典) はsūtra (經) の中で大部分でまとまっているものを指すようである点、パーリ語ではsuttantaといい、多くは長大な經典の經名に用いられている点である。また、Milan SHakya[2010, p. 49]はこの語について「Sūtra is also called Sūtrānta (Pāli: Sūttānta). In other words, the theories propounded on the basis of the Sūtra are called Sūtrānta.」と述べている。また、種村隆元 [2016, p. 74, fn. 11] は「sūtrāntaは「他の經典により解釈される根本經典」の意味であろうか？」とも述べている。

さて、この語について室寺義仁 [2011] が詳細な検討を行っている。その全貌を詳しく紹介すれば次の通りである。まず、「玄奘による数多の翻訳用語の中に、sūtraを「經」、sūtrāntaを「經典」として、あまり意味上の区別は図られていないように判断されるものの、原語そのものの相違を、訳出上、知らしめる訳し分けの工夫が行われている事例を確認することができる」³²と述べたうえで、『瑜伽師地論』『菩薩地』における二箇所でのsūtrāntaの用例を挙げて、「『菩薩地』中、sūtraとsūtrāntaなる両用語の使用上の区分がはっきりと行われており、端的に言えば、經典 (sūtrānta) とは、「空性と合致した」(śūnyatā-pratisaṃyukta) 如来の所説 (tathāgata-bhāṣita) である」と指摘する³³。次に、『八千頌般若經』におけるsūtrāntaの用例を挙げて、「經典 (sūtrānta) とは、「六波羅蜜多と合致した」書写されたもの (likhita) であるとの趣旨で理解し得ることになる³⁴」と述べている。そして、最後に、『金剛般若經』と『法華經』を挙げて、sūtrāntaはevaṃrūpaṃ sūtrāntam (このような經典) という表現で現われることを指摘する。また、『金剛般若經』でそのような表現が現われる場面は、①「正法が滅びるような時代において」(saddharma-viparopā-kāle)、②唱道することによって、他の人々から輕蔑されるであろうものとして語られる、という特徴をもつことが述べられている³⁵。以上が氏のsūtrāntaとsūtraに関する見解である。

(四)、室寺説と『菩薩藏經』の整合性

さて、先の箇所で、室寺義仁 [2011] によるsūtrāntaをsūtraに関する見解が示されたが、氏の見解は『菩薩藏經』にも適応できるのであろうか。氏の見解と『菩薩藏經』を比較しつつ検討を試みてみたい。

³² 室寺義仁 [1998, p. 157]。

³³ 室寺義仁 [1998, pp. 157-158]。

³⁴ 室寺義仁 [1998, pp. 158-159]。

³⁵ 室寺義仁 [1998, pp. 159-160]。

yena kenacit paryāyeṇemāny evaṃrūpāṇi sūtrāntaratnāni śroṣyanti śrutvā ca yat kiñcin mātram antaśaḥ ekāṃ api catuspadīm gāthām udgrahīṣyanti te māreṇa pāpīyasāparyaviheṭhitā⁴² bhaviṣyanti (||) te na bahujanapratīṣṭhā bhaviṣyanti (||) na bahujanapūjītā bhaviṣyanti (||) na bahujanaprasānsitā bhaviṣyanti (||) (MS86b3-4) ⁴³

【訳】〔彼らは〕何かの因縁によって、このような種類の経宝を聞くであろう。そして、聞いてから、少しだけ〔の教義〕乃至一つの四句偈さえも会得する彼らは、悪魔によって害されるであろう。彼らは大衆によって受け入れられないであろう。〔彼らは〕大衆によって供養されないであろう。〔彼らは〕大衆によって称賛されないであろう。

以上、室寺義仁〔1998〕が指摘した特性と『菩薩藏經』の関係を分析してきたが、『菩薩藏經』は、『八千頌般若經』と『金剛般若經』という般若類經との近しさが見えると言えよう。

(五)、『菩薩藏經』における sūtrānta の意味

先行研究との関係を見たが、次は『菩薩藏經』における sūtrānta の意味を検討してみたい。

第二品「金毘羅葉叉品」で説かれた「sarvasattvānugrahaprasastam bodhisattvapīṭakam nāma sūtrāntam bodhisattvacaryāṇiṣyandam bhāṣiṣyate」という文言における「bodhisattvapīṭakam nāma sūtrāntam (菩薩藏という sūtrānta)」は、『菩薩藏經』では、第一「家主品」の内容である賢護等五百の家主たちに解脱道(声聞菩提道)の説示や、第二品の金毘羅葉叉たちに対する授記説示を含まない。すなわち、ここで用いられる「菩薩藏という sūtrānta」が示す内容は、本經の前二品以外の第三品から十二品の流通分箇所が始まる所まで、品にしておよそ十品の内容なのである。また、第三品から十二品当該箇所までの各品に説かれている内容を分析すれば、これらは大小乗修道上の総まとめめ的なものであると言えよう⁴⁴。すなわち、当該箇所 で用いられた sūtrānta は「經 (sūtra) ⁴⁵ 中の帰結的なあるいはまとめめ的な教説」と理解されよう。故に、当該箇所における「bodhisattvapīṭakam nāma sūtrāntam」というのは、「菩薩藏という經 (sūtra) のまとめめ的な教説」となる。すなわち、先に登場した「sarvasattvānugrahaprasastam bodhisattvapīṭakam nāma sūtrāntam bodhisattvacaryāṇiṣyandam bhāṣiṣyate」は「一切衆生に対する利益のた

⁴² 校訂では、pāpīyasā paryaviheṭhitā とある。

⁴³ 藏訳 (D Ga104b3-4, P Wil17a7-8, H224b4-6) :

ནུས་གངས་འགའ་ཞིག་གིས་འདི་ལྟ་བུའི་མདོ་ལྟོན་མཚན་གྱི་པར་འགྲུར་ཏེ། ཐོས་ནས་གང་ལྟར་ཟད་ཅམ་ཐུ་ཚིག་བཞི་བའི་ཚིགས་ལུ་བཅད་པ་གཅིག་འཛིན་པ་དེ་དག་ལ་བདུད་ལྷིག་ཅན་ཡོངས་ལུ་འཚོ་བར་འགྲུར་གོ། དེ་དག་ལ་སྐྱེ་བོ་མང་པོ་དག་འབར་མི་འགྲུར། སྐྱེ་བོ་མང་པོས་མཚན་པར་མི་འགྲུར། སྐྱེ་བོ་མང་པོས་བསྐྱོད་པར་མི་འགྲུར་གོ།

玄奘訳 (T11.265c15-18) :

隨以何等差別因緣。遇得聽聞如是經寶。既聞法已。於此經中但得少分微淺之義。乃至受持一四句頌。復爲惡魔燒亂障蔽。不爲衆人之所敬問及以供養稱讚信奉。

法護訳 (T11.845a11-14) :

以是因緣於諸契經。聽聞稱讚受持讀誦。爲人演說乃至一四句偈。爲魔波旬之所燒惱。不能建立受持讀誦。興顯供養種種稱讚。

⁴⁴ 本經が「菩薩藏という sūtrānta」には小乗の教法をも詳細に説く原因は、『摩訶般若波羅蜜經』にある菩薩は「若聲聞道、辟支佛道。菩薩道、應具足知」(T8.375c3-4) という説示から窺われる。

⁴⁵ ここの「經」は、広義的な sūtra を指す。

めに称賛され、菩薩行に導く菩薩藏という経（sūtra）のまとめた教説を説こう。」という翻訳を施すことが可能であろう。

また、上述したように、「菩薩藏という sūtrānta」の内容は、本経の前二品を除いての第三品からの十品の内容⁴⁶を指している。また、大乘の成仏道の立場からみれば、本経の第三品から第十二品までは、第三品：菩提心・菩薩が有すべき徳性、第四品：如来の十不思議、第五品：四無量心、第六～十一品：六波羅蜜多、第十二品：四摂法など、という本経の趣旨である成仏道（仏菩提道）に関する内容を説かれている。従って、ここでは、この「菩薩藏という sūtrānta」（bodhisattvapīṭakam nāma sūtrāntam）の中の sūtrānta は、限定複合語（Tatpuruṣa）として、「経（本経）⁴⁷の主要部⁴⁸」とも理解されるであろうか。

第三項、dharma-paryāya

dharma-paryāya（Pāli, dhamma-pariyāya）は、玄奘訳では、一般に「法門」と訳す。その中の paryāya（Pāli, pariyāya）は、動詞 pari-√i に由来し⁴⁹、「周廻すること」「巻き付くこと」等をその第一義とする⁵⁰。また、『梵和』では、それを「総合文」とも理解している⁵¹。この二つの点から見れば、paryāya という語は、まとめるという意味がその共通項として想定できるであろう。このような点から、dharma-paryāya という用語は、法の中よりまとめたものという意味であると理解できるのではないだろうか。

また、dharma-paryāya については、宇井伯寿 [1966, p. 326] は、カルカッタ・バイラート法勅の第六「法門」項において、次のように述べている。

（六）法門 dhamma-pariyāya. 通常法門とは経の中に説かれて居る説を指すが、茲では経を指すのが直接の意味とも見られる。然し恐らくこれ等の 経中の教説を指すのであろう。

すなわち、ここでは、氏は、dhamma-pariyāya を「経中の教説を指すもの」としている。ついでに、dhamma-pariyāya という語は、アショーカ王の経石に既に現われているから、比較的古い時代から使われてきたものであろう。また、長尾雅人 [1940, p. 980] は次のようにも述べる。

⁴⁶ 第十二品の流通分の内容を除く。

⁴⁷ この「経」は、本経である『菩薩藏経』を指す。

⁴⁸ この「主要部」は、本経の全経において「正宗分」と視される。

⁴⁹ 長尾雅人 [1940, p. 979]、前田恵学 [1957, p. 30]。

⁵⁰ 長尾雅人 [1940, p. 979]。また、BHS. II. (p. 335) では、それを arrangement, disposition for doing anything, way, means; manner 等と解している。パーリ仏教では、紀元後五世紀の注釈家 Buddhaghosa が pariyāya を、①vāra (turn, course), ②desanā (instruction, presentation), ③kāraṇa (cause, reason, case) という三義で解釈している (Cf. T.W. Rhys Davids and W. Stede [1921-1925, p. 433b])。また、paryāya に対するチベット語 རྒྱུ་གཞི་ལྟར་ is, 『藏漢大辞典』(上册, p.1563) では、それを「品類、差別、門類」と解しているが、Tibetan-English Dictionary (p.758a.) では、それを ① specification, enumeration; ② treatise, dissertation, a paper と理解している。

⁵¹ 『梵和』(p. 764)。

仏典においてはpariyāya特にdharma-pariyāyaなる語が「法門」と訳せられて常に用いられるのであるが、それは上述のprakāra及び特にavasara⁵²の義を強く含むものであろう。例えば対告衆の各々の機根に従い、その環境時機に従って、即ち各々のavasaraに従って、佛の説法が各種の法門と称せられるものであろう。

すなわち、氏は、dharma-pariyāyaを「prakāra（品類）及びavasara, nirmāṇa（機会・分位）の義を強く含むものである」と理解しているのである。また、前田恵学〔1957, p. 29, 30〕は、パーリ聖典中の実例をもとに、パーリ聖典におけるpariyāyaについて、次のように述べる。

本来のパリヤーヤ (pariyāya) は、散文を主体として教理要綱をまとめたものと言うことができる。パリヤーヤは、經典の一部をなすに止まる場合もあるし、あるいはパリヤーヤが經典の一部あるいは主要部をなし、従ってパリヤーヤなくしてはその經典の成立しえない場合もある。

また、その中の「pariyāya」という語は、前田博士〔1964, p. 540〕では次のように述べられる。

原始佛教聖典一特に今は主としてパーリ聖典を念頭におくが一中には、屢々dhammapariyāya（訳すれば、法門）とかまた略してpariyāyaとかの称呼の下に或は種の比較的類型化した形において教理要綱が説かれている。

つまり、「pariyāya」という語は、dhammapariyāyaの略称とみなせよう。

第四項、『菩薩藏經』における sūtrānta と dharmapariyāya との関係

さて、前田恵学〔1957, p. 29, 30〕の研究に基づけば、(dhamma)pariyāyaは散文を主体として教理要綱をまとめたものであり、經典の一部あるいは主要部をなし、それなくしてはその經典の成立しえない場合のあるものといえよう。そして、そのような観点から『菩薩藏經』にみられるこれらの用語を検討すれば、先で検討したような『菩薩藏經』に登場するsūtrāntaは、dharmapariyāyaと同趣旨の意味内容をもつことが想定できよう。なんとなれば、「菩薩藏というsūtrānta」の内容も、經 (sūtra) の中の帰結的な・まとめの的なものであり、また、十品よりなる「菩薩藏というsūtrānta」の内容も、本經にとって絶対になくしては本經が成立しえない部分だからである。

また、両者が同義の関係を持つことを示唆する文言が『菩薩藏經』中にも認められる。例えば、第九「精進波羅蜜多品」には次のような内容が認められる。

梵文写本 (MS85a2-5) ⁵³ :

⁵² 長尾雅人〔1940, p. 979〕はavasaraの他、nirmāṇaについても指摘している。

⁵³ 藏訳 (D Ga101b4-102a2, P Wi113b8-114a6, H220a6-b6) :

… (l) ca śāriputra bodhisattvo (3)mahāsattva anivartyena vīryeṇa samanvāgato bhavati svakāyajīvitānirapekṣaḥ (l) ca tīvraṃ vīryaṃ samjanayya bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ paryeṣate⁵⁴ tyantaṃ śṛṇoty udgrhṇāti dhārayati vācayati paryavāpnoti pareṣāṃ apy ārocayati vistareṇa samprakāśayati likhitvā dhārayati (l) tat kathaṃ kāyajīvitānira(4)pekṣo bhavati (l) iha śāriputra bodhisattvaḥ pareṇa tarjyate ya imān evaṃrūpān sūtrāntān udgrahīṣyamti dhārayiṣyanti vācayiṣyanti paryavāpsyanti pareṣāṃ apy ārocayiṣyanti vistareṇa samprakāśayiṣyanti likhitvā dhārayiṣyanti tathatvāya pratipatsyante teṣāṃ vayaṃ śaraśaktiśatena kāyaṃ viddhā jīvitād vyaparopayiṣyāmaḥ (l) tatra śāripu(5)tra bodhisattvo na bibheti nottrasyati na samtrasyati na samtrāsam āpadyate uttare dṛḍhaṃ vīryaṃ samjanayya bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ na jahāti na viprajahāti notsrjati (l) tīvrādhimuktiś ca bhavati (l) dṛḍhādhimuktiś ca bhavati (l) dṛḍhakṣāntiś ca bhavati (l) dṛḍhavīryaś ca bhavati (l)

【訳】…。また、舍利弗よ。退転のないの精進を成就した菩薩摩訶薩は、自分の身と命とに対して惜しまない。そして、強度な精進を起して、菩薩藏法門（bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ）を求めて、持続的に「この菩薩藏法門を」聞き、受け入れ、記憶し、読誦し、熟達し、他人にも説いて詳細に解説し、書写して保存する。その身と命とに対して惜しまないとは何か。さて、舍利弗よ。菩薩は、もし「我々は、このような経（sūtra）のまとめ的な教説（evaṃrūpān sūtrāntān）を受け入れ、記憶し、読誦し、熟達し、他人にも詳細に説いて解説し、書写して保存すし、真如のために努力する彼らの身を、百の矢と槍とによって、貫いて命を奪おう」〔と言っている〕他人によって、脅されるならば、舍利弗よ。その時に、菩薩は恐れぬ、驚かぬ、震えぬ、驚愕しない。〔そして、彼は〕それ以上に堅固な精進を起して、菩薩藏法門（bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ）を断念しなく置き去らなく捨てないであり、そして、熱い確信を生じ、堅固な確信を生じ、堅固な忍耐を生じ、堅固な精進を生じる。

ここでは、「このような経（sūtra）のまとめ的な教説（evaṃrūpān sūtrāntān）」と「菩薩藏法門（bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ）」とが相互の言い換える語であることがみてとれよう。

1. 此の經に於て、菩薩摩訶薩は、自分の身と命とに対して惜しまない。そして、強度な精進を起して、菩薩藏法門（bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ）を求めて、持続的に「この菩薩藏法門を」聞き、受け入れ、記憶し、読誦し、熟達し、他人にも説いて詳細に解説し、書写して保存する。その身と命とに対して惜しまないとは何か。さて、舍利弗よ。菩薩は、もし「我々は、このような経（sūtra）のまとめ的な教説（evaṃrūpān sūtrāntān）を受け入れ、記憶し、読誦し、熟達し、他人にも詳細に説いて解説し、書写して保存すし、真如のために努力する彼らの身を、百の矢と槍とによって、貫いて命を奪おう」〔と言っている〕他人によって、脅されるならば、舍利弗よ。その時に、菩薩は恐れぬ、驚かぬ、震えぬ、驚愕しない。〔そして、彼は〕それ以上に堅固な精進を起して、菩薩藏法門（bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ）を断念しなく置き去らなく捨てないであり、そして、熱い確信を生じ、堅固な確信を生じ、堅固な忍耐を生じ、堅固な精進を生じる。

玄奘訳（T11.264b9-23）：

舍利子。菩薩摩訶薩具足成就不退正勤。而能不顧所重身命。發大精進求菩薩藏微妙法門。殷重聽聞受持讀誦究竟研尋通達義趣。廣爲他人敷演開示。或復書持如理修學。〔是名菩薩摩訶薩行菩薩行。〕〔舍利子。〕云何名爲不顧身命。舍利子。菩薩〔摩訶薩。行正勤波羅蜜多時。〕設爲於他所加恐怖。〔作如是言。〕若汝於此菩薩藏經。受持讀誦。乃至廣爲他人開示書持。如理修學者。我當以百具箭稍。貫舉汝身。除斷汝命。舍利子。菩薩〔摩訶薩。〕當於爾時。〔雖聞此言曾不入心。〕無恐無怖無驚無畏。發〔四〕堅固勇猛威勢。於菩薩藏〔微妙〕法門。轉加精進。不棄不捨不遠不離。具足成就猛利信解堅固信解堅固堪忍堅固正勤。

法護等訳（T11.843c26-844a7）：

〔次當〕發起不退具足勇猛精進。不惜身命堅固勇悍志求修習。此菩薩藏正法明文。復能書寫受持聽聞讀誦。解其義趣爲人解說。〔又菩薩摩訶薩於諸契經。〕亦復教人聽聞書寫受持讀誦。解其義趣爲他人說。舍利子。〔譬如有人行眞實行。執持種種金剛器仗。與〕百〔人戰而無怯懼。勇捍敵衆〕不惜身命。菩薩〔摩訶薩。行精進行亦復如是。〕應當堅固發起最上精進。志求菩薩藏正法會無棄捨。發勝解行不退精進〔。〕

⁵⁴ 校訂では、paryeṣamteとある。

次に、sūtrānta、dharmaṃparyāyaという語が dharmaratna（法宝）、sūtra（經）という語に言い換えられていることが次の箇所から見て取れる。

梵文写本（MS86a5-b6）⁵⁵：

tatra śāriputra ye te sattvā bhaviṣyanti puṇyabalopastabdhāḥ adhyāśayasamprasthitāḥ anuttarāṃ samyaksaṃbodhiṃ ta imān evaṃrūpāṃ sūtrāntāṃ⁵⁶ śroṣyanti śrutvā codāraṃ prītiprāmodyaṃ pratilambhyate (|) (‘)tyartham bodhisattvapīṭakam dharmmaparyāyam paryavāpsyanti pratipatyāvasampādayiṣyanti (|) yaiḥ punas tathāgataśāsane śravaṇīyo dharmah yena kenacit kāra(6)ṇena yena kenacid ārambaṇenāvaśāḥ⁵⁷ śroṣyanti śrutvā codāraṃ prītiprāmodyaṃ pratilambhyante (|) te prītiprāmodyajātā dṛḍhataraṃ vīryam ārambhyante (|) ta evaṃrūpād bodhisattvapīṭakadharmaratnāt kiṃcin mātraṃ sāram ādāsyanti ||

……（中略）punar aparaṃ śāriputra tasmin samaye bhikṣavo bhaviṣyanti mārādhiṣṭhitāya imāni sūtrāṇi śrutvā bahujanasya purataḥ pratikṣepsyanti kavitaḥ kany etāni sūtrāṇi naitāni buddhabhāṣitāni bhaviṣyanti (|) punaḥ śāriputra tasmin samaye bhikṣavo sarveṇa sarvaṃ na śroṣyanti ||

【訳】そこで、舍利弗よ。福力によって支えられ、深心によって無上正等正菩提に出発した衆生たち、彼らはこのような〔經（sūtra）のまとめ的な教説〕を聞くであろう。そして、聞いてから広大な快樂と歡喜とを得る。彼らは菩薩藏法門を非常に熟達するであろう。正行によって成就するであろう。また、如来の教えの中に、聞かれるべき法があれば、彼らは、何かある因と何かあ

⁵⁵ 藏訳：

དེ་ལ་ཤུ་རིམ་གྱི་མཆོད་པ་ལྟར་ལྟར་གྱི་ཐུགས་ཀྱིས་ཉེ་བར་བརྟན་པ། ལྷག་པའི་བསམ་པས་ཐྱ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྟོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་ལ་ཞུགས་པ་འབྱུང་བ་དེ་དག་འདི། །ལྷ་བའི་མདོ་ལྟེ་འདི་ཉན་པར་བྱེད་དེ། ཐོས་ནས་ཐུ་ཆེར་དགའ་ཞིང་མགྱ་བ་ཐོབ་པར་འབྱུང་། བྱང་ཆུབ་མཆོག་དཔའི་ལྷོ་མེད་ཀྱི་ཆོས་ཀྱི་ནུས་གྲངས་རབ་ཏུ་ཁྱེད་ཆུབ་པར་བྱེད་པར་འབྱུང་། །ནུ་ཏུན་གྱིས་བསྐྱབ་པར་འབྱུང་། །ཡང་གང་གིས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་བསྐྱར་པ་མཉན་པའི་ཆོས་ལུ་བྱས་པར་བྱུར་བ་དེ་དག་ལྷ་ལ་འདང་། དམིགས་པ་ལ་ལས་དབང་དུ་མ་བྱུར་པར་ཉན་པར་བྱེད་དེ། ཐོས་ནས་ཐུ་ཆེར་དགའ་བ་དང་། མགྱ་བ་ཐོབ་པར་འབྱུང་། དེ་དག་དགའ་བ་དང་། མགྱ་བ་སྐྱེས་ནས་བཞོན་འབྱུང་། ཤིན་ཏུ་བརྟན་པ་ཚོས་པར་འབྱུར་ཏེ། དེ་(དེ་ལ་ཉེ་དག་ཏུ་直す) འདི་ལྷ་བའི་བྱང་ཆུབ་མཆོག་དཔའི་ལྷོ་མེད་ཀྱི་ཆོས་དཀོན་མཆོག་ལས་སྤེང་པོ་རྩལ་ཟད་ཙམ་ལེན་པར་འབྱུར་རོ། ། (D Ga104a2-5, P Wi116b4-8, H223b7-224a4)

……（中略）ཤུ་རིམ་གྱི་གཞན་ཡང་དེའི་དུས་ན་བདུད་ཀྱིས་བྱིན་གྱིས་བརྟམས་པའི་དགེ་སྤྱོད་དག་འབྱུང་བར་འབྱུར་ཏེ། གང་མདོ་ལྟེ་འདི་ཐོས་ནས་སྐྱེ་བོ་མང་པོའི་མདུན་དུ་མདོ་ལྟེ་འདི་ནི། རང་བཟོར་བྱས་པ་ཡིན་ཏེ། འདི་ནི། སངས་རྒྱལ་གྱིས་གསུངས་པ་མ་ཡིན་ནོ། །ཞེས་སྤོང་བར་འབྱུར་རོ། ། ཡང་ཤུ་རིམ་གྱི་དེའི་དུས་ན་དགེ་སྤྱོད་གང་མཆོག་ཅན་ཅན་ལྟར་ཡང་འབྱུང་བར་འབྱུར་རོ། ། (D Ga104b6-7, P Wi117b3-5, H225a2-4)

玄奘訳：

舍利子。爾時復有無量衆生。福果所資住增上意。爲求無上正等覺故。聽是經典。聞已當獲廣大歡喜。於菩薩藏微妙法門。極善研習如說修行。又舍利子。爾時當有於如來教樂聞法者。彼諸衆生隨以何等〔差別〕因緣。遇得聽聞如是經典。聞已當獲廣大歡喜。生歡喜已發堅精進。能於如是大菩薩藏微妙法寶取少寶分。(T11.265b25-c3)

……（中略）舍利子。當爾之時。有諸苾芻。惡魔持。故聞是經已。於衆人前當起誹謗言。是經典諸文。華者之所造作。實非佛說。由如是故。有諸苾芻。於是經典全不聽受。(T11.265c24-27)

法護等訳：

舍利子。時彼有情。福力具足內心正行。當得阿耨多羅三藐三菩提。又此有情。於諸契經而能聽誦。愛樂受持極大歡喜。於菩薩藏正法。受持讀誦修行成辦甚大歡喜。亦復如是。我說是人能於一切如來教中。而得成就。設復有人不專讀誦。以因緣故暫來聽受。作意愛樂生大歡喜。亦復獲得最上第一堅固精進。乃至如是於菩薩藏正法眞實微妙行相。能以少分爲他人說。(T11.844c20-29)

……（中略）復次舍利子。又苾芻衆爲魔所持。於諸契經不能聽聞讀誦。時魔波旬現大衆前。種種毀謗。此諸契經非佛所說。但是世間虛假文飾。舍利子。〔彼大衆中〕有諸苾芻。〔聞是語已。於〕一切〔處魔力所加。〕悉不聽受(T11.845a21-25)

⁵⁶ 写本にはsūtrāntām の語がないものの、校訂者はチベット語訳に準拠して、ta imān evaṃrūpāṃ (Tib. adds: mdo sde)と校訂する可能性を提示する。

⁵⁷ 当該箇所について校訂者は次のようにテキストを想定する。yaiḥ punas tathāgataśāsane śravaṇīyo dharmah [kṛ t. .i + + + + +(?)(Tib. byas par gyur ba)] yena kenacit kāra(6)ṇena yena kenacid ārambaṇenāvaśāḥ.

る縁とによって、自然に〔この菩薩藏法門を〕聞くであろう、そして、聞いてから広大な快樂と歡喜とを獲得する。快樂と歡喜とを得た彼らは堅固な精進を着手する。彼らはこのような菩薩藏の法宝から、幾つかの精髓を獲得するであろう。

……（中略）舍利弗よ。その他、その時に、魔によって指図された故に、比丘たちは、これらの經を聞いてから、大衆の面前に「これらの經は捏造からなつたもの (kavita) ⁵⁸であり、これらの經は仏によって説かれたものではないであろう」と誹謗するであろう。舍利弗よ。さらに、その時に、比丘たちは、完全に〔これらの經〕すべてを聞かないであろう。

また、dharmaṃparyāyaという語とsūtraという語とが、相互に置換可能な単語として現われていることが、第九「精進波羅蜜多品」に認められる。つぎのとおりである。

梵文写本 (MS88b3) ⁵⁹ :

tatra śāriputra mahāyānasamprasthitair evamrūpaṃ dāruṇaṃ vivaṇṇaṃ saddharmavipralopaṃ drṣṭvā bhūyasya mātrayā mahāvīryabalavegaṃ samjanaya (I) idam evaṃ sūtraṃ yad idaṃ bodhisattvapiṭako dharmaparyāyaḥ atyārthaṃ śrotavya udgrahītavyo likhitvā dhārayitavyaḥ pareṣāṃ ārocayitavyaḥ vistareṇa samprakāśayitavyaḥ (I)

【訳】そこで、舍利弗よ。大乘に出発した故に、激しく公開的にこのような正法を破壊することを見てから、彼〔菩薩摩訶薩〕は、さらに偉大なる精進力の勃発を生じて、このような經 (sūtra)、すなわち、菩薩藏法門を甚だしく聞き、受け入れ、書写して保存し、他人たちに説き、詳しく解説する。

ここでは、sūtrāntaやdharmaṃparyāyaがsūtraに換言されていることから、sūtrānta、あるいはdharmaṃparyāyaは、sūtraの性格をも持つことがみてとれよう。そして、sūtraの性格を持つということは、すなわち、sūtrānta、dharmaṃparyāyaという両者は、理論上、それぞれが単独に經典として存在することできるということを示唆していよう⁶⁰。そして、そうであれば、本經の第三「菩薩觀察品」から第十二「大自在天授記品」までの内容は、それだけで単独な經典としてみなすことができよう。しか

⁵⁸ BHS. II. (p.174) では、kavitaを「fanciful, thought up, invented」等の意味と理解している。

⁵⁹ 藏訳 (D Ga108b1-3, P Wi121b5-7, H230a7-b2) :

དེ་ལ་ཤེས་པ་ཆེན་པོ་ལ་ཡང་དག་པར་ཞུགས་པས། འདི་ལྟ་བུའི་མི་བཟོད་པ་དང་། མི་བཟླགས་པ་དང་། དམ་པའི་ཆས་རབ་ཏུ་འཇིག་པ་མཛོང་ནས་བཟོན་འགྲུས་ཆེན་པོའི་སྟོབས་ཀྱི་ཤུགས་རབ་ཏུ་བསྐྱེད་དེ། འདི་ལྟ་བུའི་མདོ་ཐེངས་ལྔ་ལ་ཞུགས་པས་དཔའི་ཐུ་སྟོང་གི་ཆས་ཀྱི་ནམ་གྲངས་འདི་རབ་ཏུ་མཉན་པར་བྱ། ལཱ་དང་བར་བྱ། ཡི་གེ་རྩིས་ནས་བཅད་བར་བྱ། ལཱ་ལ་ཡང་གོ་བར་བྱ། ཐུ་ཆེན་ཡང་དག་པར་རབ་ཏུ་བསྟན་པར་བྱའོ།

玄奘訳 (T11.267c22-27) :

復次舍利子。當來之世。法欲滅時復有菩薩摩訶薩。安住大乘。行毘利耶波羅蜜多者。見如是等諸惡衆生。誹謗毀滅是正法已。倍增振發勇猛正勤大精進力。於是經典大菩薩藏微妙法門。慇懃聽受書持讀誦。廣爲他人開示演說。

法護等訳 (T11.847a4-8) :

爾時、舍利子。〔及諸大苾芻等。於大衆中聞是〕修習大乘行者。於諸險難能行正法。各各發起廣大無量堅固勇猛精進之力。如是行相。於此大乘菩薩藏正法。聽聞讀誦書寫受持展轉教示廣爲人說。

⁶⁰ 例えば、dharmaṃparyāyaが単独の經典として存在可能である事については、Hubert Durtが既に言及している。次の通りである。

“hōmon法門, sk. dharmaparyāya, which may have existed as an independent Mahāyāna text.” (Jonathan A. Silk[2014, p.166, fn.36])

また、sūtrānta、dharmaṃparyāyaの置換可能な単語としては、先に示したもの以外にも、dharmaが挙げられる。例えば、第九品には次のような内容が示される。

keciĉ chāriputra ĉemān evaṃrūpāṃ dharmāṃ saṃvivaduḥ saṃvidanti saṃvetsyanti (1) vā sarva ete imāny
evaṃrūpāni sūtrāni prativikṣiyuḥ pratikṣipanti pratikṣepsyanti (1) api tu punaḥ (5) śāriputra ity evaṃrūpāni
tathāgatabhāṣitāni sūtrāntāni padavyaṃjanāni dharmaparyāyāc chrutvā na saha śramaṇeṇādhimokṣyante (1)
tais tathārūpaiḥ sattvair avaśyaṃ pratikṣeptavyāni ye vāpāyagamanīyakarmāṇaḥ |

当該箇所の内容からは、evaṃrūpa sūtrāntaとbodhisattvapiṭaka dharmaparyāyaとが、相互に換言されていることが見受けられる。さらにはsūtrānta あるいはdharmaparyāya は、dharma(ratna (法宝)、sūtra (経)、dharma (法) としても換言されることが確認できる。つまり、第九品の内容に基づくのであれば、bodhisattvapiṭaka-sūtrāntaあるいは bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāyaは、受け入れ・記憶・読誦・熟達・他人に詳細に説いて解説・書写して保存すべきもの、特に、経巻として書写されるものとして用いられていることが確認できよう⁶³。

若自讀誦解說書寫、修多羅、毘尼阿毘曇摩多羅迦 (māṭṛka)、菩薩藏者。亦教他人讀誦解說書寫。(T26.63b26-28)
また、『瑜伽師地論』においても、次のように同趣旨の内容を述べている。

第五項、小結

以上、本節では經典名を明らかにすべく、検討をおこなった。その結果明らかになったことを整理すれば次の通りである。

1. sūtrāntaとsūtraとは違うものである。sūtrāntaとは、經（sūtra）の中の帰結的なあるいはまとめ的なもの（教説）であると理解される。また、具体的な一經中においては、sūtrāntaはその經の成立としてなくてはならない主要部（正宗分）を指すとも理解される。
2. dharmaparyāyaという用語は、1. に述べているsūtrāntaとは同義を持つ。
3. sūtrāntaとdharmaparyāyaとは、相互に換言語として使用される。
4. その他、その両者とも言い換える語は、dharmaṣaṭka（法寶）、sūtra（經）、dharma（法）等⁶⁴もある。つまり、sūtrāntaとdharmaparyāyaとは、広義上には、sūtra（經）をも指す。

そして、以上の四点に基づくならば、本經の第二品の末尾の少し前に説かれている「sarvasattvānugrahaśaṣṭaṃ bodhisattvapiṭakaṃ nāma sūtrāntaṃ bodhisattvacaryāṇiṣyandaṃ bhāṣiṣyate」という文言の中の「bodhisattvapiṭakaṃ nāma sūtrāntaṃ」という語と、本經の全經の末尾の「bodhisattvapiṭakaṃ nāma dharmaparyāyaṃ mahāyānasūtraṃ samāptaṃ」という内容に含まれる「bodhisattvapiṭakaṃ nāma dharmaparyāyaṃ」という語との両者は、一方が一方の置換された言葉であると見なせよう。そして、經典全体の末尾の「bodhisattvapiṭakaṃ nāma dharmaparyāyaṃ mahāyānasūtraṃ samāptaṃ」という言葉から、本經は、本經の主要部の名称を「bodhisattvapiṭaka-sūtrānta」として用い、または、「bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāya」を全經の經名として使っていることも分かるであろう。すなわち、梵文原典としての本經の經名は、Bodhisattvapiṭaka-sūtrānta or -dharmaparyāyaが正しいと考えられよう。

第二節、漢藏三訳の經名

第一項、玄奘訳の經名について

さて、『菩薩藏經』の漢訳には、『大宝積經』第十二会に編入された「菩薩藏会」（玄奘〈602-664年〉訳）と、『仏説大乘菩薩藏正法經』（法護⁶⁵〈980-1058年〉と惟浄〈973-1051年〉との共訳）の二種が存する。その中、智昇『開元釈教録』（730年）卷八には次のようにある。

復次於大乘中有十法行。能令菩薩成熟有情。何等爲十。謂於大乘相應菩薩藏攝契經等法。書持供養惠施於他。若他正說恭敬聽聞。或自翫讀或復領受。受已廣音而爲諷誦。或復爲他廣說開示。獨處空閑思量觀察隨入修相。（T30.706c22-27）

⁶⁴ 例えば、saddharma（正法，MS88b3）もある。

⁶⁵ 智旭〈1599-1655年〉の『閱藏知津』卷三によると、法護は中印度の沙門である。（『明嘉興大藏經』第三十一卷，p. 807c）。

『大菩薩藏經』二十卷、見内典錄。今編入寶積、當第十二會。貞觀十九年五月二日、於西京弘福寺翻經院譯至九月二日、畢沙門智證筆受、道宣證文。(T55.555c5-6)

この記述によれば、「菩薩藏會」は『大宝積經』に編入される前に、『大菩薩藏經』と呼ばれていたことが窺える。また、『開元釈教錄』のほか、静泰『衆經目錄』卷一⁶⁶、道宣〈596-667年〉『大唐内典錄』(664年)卷六⁶⁷および『統高僧伝』卷四⁶⁸、靖邁〈627-?年〉『古今訳経図記』卷四⁶⁹、明佺等『大周刊定衆經目錄』卷五⁷⁰等の経録あるいは伝記から、『大菩薩藏經』は二十卷であり、貞觀十九年に弘福寺で玄奘によって翻訳されたものであることが分かる。また、『統高僧伝』卷四には「其年〔貞觀十九年〕五月、創開翻譯『大菩薩藏經』二十卷」と記されていることから、『大菩薩藏經』は玄奘が印度留学から帰国後の初訳業である經典であることも分かる。また、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』卷六には次のような記述が認められる⁷¹。

貞觀十九年……法師自洛陽還至長安、即居弘福寺將事翻譯。……丁卯、法師方操貝葉、開演梵文、創譯『菩薩藏經』、『佛地經』、『六門陀羅尼經』、『顯揚聖教論』等四部。其翻『六門經』當日了、『佛地經』至辛巳了、『菩薩藏經』、『顯揚論』等歲暮方訖。

この記述によれば、『菩薩藏經』という経名の經典が玄奘によって貞觀十九年(645)に弘福寺で訳されたものであることが分かる。また「丁卯、法師方操貝葉、開演梵文、創譯『菩薩藏經』」という記述から、『菩薩藏經』は玄奘が帰国後の初訳業であることも分かる。すなわち、『菩薩藏經』という経名の經典の訳者、訳された年代と場所等は先に掲げた『大菩薩藏經』と一致していることが分かる。従って、『菩薩藏經』は『大菩薩藏經』とは同一の經典であることが推測される。

また、この推測は玄奘が自分の翻訳した經典を皇帝に呈上する「進経論等表」⁷²の記述からも傍証される。その記述は次の通りである⁷³。

二十年春正月甲子。又譯『大乘阿毘達磨雜集論』。至二月訖。又譯『瑜伽師地論』。秋七月辛卯、法師進新譯經論現了者。表曰。沙門玄奘言。……唯玄奘輕生獨逢明聖。所將經論咸得奏聞。蒙陛下崇重聖言賜使翻譯。比與義學諸僧等。專精夙夜不墮寸陰。雖握管淹時未遂終訖。已絕筆者見得

⁶⁶ 『大菩薩藏經』二十卷、四百一十紙、貞觀年玄奘於弘福寺譯(T55.182a9-10)。

⁶⁷ 『大菩薩藏經』二十卷、四百一十紙、唐貞觀年玄奘於京師弘福寺譯(T55.286b17-18)。

⁶⁸ 「帝曰：自法師行後造弘福寺、其處雖小、禪院虛靜、可爲翻譯。……〔法師〕既承明命返迹京師。……其年〔貞觀十九年〕五月、創開翻譯『大菩薩藏經』二十卷。余爲執筆、并刪綴詞理。其經廣解六度四攝十力四畏三十七品諸菩薩行。合十二品。將四百紙」(T50.455a10-19)。

⁶⁹ 「以貞觀十九年迴靶。上京見帝于洛。帝大悅即命所將梵本六百五十七部。勅於西京弘福寺翻譯。……到二十二年、已譯之經奉以奏聞。……譯……『大菩薩藏經』一部二十卷」(T55.367a16-b10)。

⁷⁰ 『大菩薩藏經』一部二十卷四百一十紙右唐貞觀十九年三蔵玄奘於西京弘福寺譯。出内典錄(T55.400a7-9)。

⁷¹ 慧立、彦棕、T50.252b14-254a10。

⁷² 『寺沙門玄奘上表記』、T52.818a4。

⁷³ 慧立、彦棕、T50.252b14-254a27。

五部五十八卷。名曰『大菩薩藏經』二十卷。『佛地經』一卷。『六門陀羅尼經』一卷。『顯揚聖教論』二十卷。『大乘阿毘達磨雜集論』一十六卷勒成八秩。

ここで「名曰『大菩薩藏經』二十卷」とあることから『大菩薩藏經』とは『菩薩藏經』の別称であることが明らかになる。さらに『大唐大慈恩寺三藏法師伝』では、「文武聖皇帝。又讀法師所進『菩薩藏經』美之。因勅春官作其經後序」(T50.258a17-20)と言及される。故に、貞觀二十年(646)秋、玄奘が「進經論等表」中、翻訳し終わった『菩薩藏經』を『大菩薩藏經』と呼んだことが分かる。そして、その巻数は二十巻であるとも言及されている。また、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻三では、玄奘が印度遊学中に『菩薩藏經』を手に入れたことが詳しく述べられている⁷⁴。さらに『開元釈教録』巻九に『大菩薩藏經』は玄奘によって印度遊学中に入手されて将来されたことも述べられている⁷⁵。さらに『続高僧伝』に記述された『大菩薩藏經』が玄奘によって印度から帰国後、最初に訳された經典であること、および『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻六に記述された『菩薩藏經』が玄奘によって印度から帰国後の初訳として訳された經典であることを併わせてみれば、『大菩薩藏經』は『菩薩藏經』と同一であることは間違いないであろう。

なお、ここで言及した諸經録には『大菩薩藏經』と記述されているが、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』のほか、北宋・道誠『釈氏要覧』⁷⁶、元・劉謐『三教平心論』⁷⁷には『菩薩藏經』と記述されている事例もある。

『菩薩藏經』が『大菩薩藏經』と呼ばれていた原因は不明であるが、玄奘訳『菩薩藏經』(二十巻)が翻訳される以前に、鳩摩羅什(344-413年/350-409年)訳『菩薩藏經』(三巻)⁷⁸と僧伽婆羅(459-524年)訳『菩薩藏經』(一巻, T24)が既に存在していることは事実である。よって、前二訳の『菩薩藏經』と区別するために、玄奘らは貞觀十九年に訳された『菩薩藏經』を『大菩薩藏經』と呼んだのではないかと筆者は推測している。なんとすれば、巻数に注目してみれば、玄奘訳『菩薩藏經』は他の二者よりはるかに多いからである。また、『大宝積經』は菩提流志によって唐の神龍二年(706)から先天二年(714)までの九年間で完成されたものであるから⁷⁹、唐の貞觀十九年に玄奘によって翻訳された『大菩薩藏經』は「菩薩藏会」として『大宝積經』に編入される迄に、少なくとも半世紀程度、単独經典として流通していたことになる。

⁷⁴ 「從吠舍釐南境、去菟伽河百餘里、到吠多補羅城。得『菩薩藏經』(T50.236a5-7; 吠多補羅城(svetapura))。

⁷⁵ 「及大寶積。此經都有四十九會。上代譯者摘會別翻、而不終部帙。往者貞觀中、玄奘法師往遊印度、將梵本還。於弘福寺譯『大菩薩藏經』。即是寶積第十二之一會」(T55.570b2-6)。

⁷⁶ 「人道十苦。『菩薩藏經』云。人有十苦之所逼迫。一生苦。二老苦。三病苦。四死苦。五愁苦。六怨苦。七苦受。八憂苦。九煩惱。十流轉大苦」(『釈氏要覧』巻中, T54.291c4-7)。

⁷⁷ 「唐世人主如太宗之聰明英武。……稱皇帝菩薩戒弟子。及玄奘法師之譯經也。則爲之序。而名之曰御製三藏聖教序。覽『菩薩藏經』。愛其祠旨微妙也。則詔皇太子撰『菩薩藏經』序」(『三教平心論』巻下, T52.788a15-21)。

⁷⁸ 鳩摩羅什訳『菩薩藏經』(=『大宝積經』「富樓那会」(T11)): 吐魯番出土殘巻によれば、『仏説菩薩藏經』という経名である。(『台東区立書道博物館図録』, 2015, p.102)。

⁷⁹ 「『大宝積經』、一百二十巻、單重合譯、神龍二年創首、先天二年功畢」(『開元釋教録』巻第九, T55.569b5)。

第二項、法護と惟浄との共訳の経名

さて、『仏説大乘菩薩藏正法經』については、『閲蔵知津』卷三に次のような記述が認められる。

『仏説大乘菩薩藏正法經』（四十卷、今作二十卷）、（南辞安北如松）宋中印土沙門法護等訳、即第十二「菩薩藏会」異譯⁸⁰。

ここで智旭は『仏説大乘菩薩藏正法經』が玄奘訳『菩薩藏会』の異訳であると述べているのである。その他、基弁（1722-1792年）も『仏説大乘菩薩藏正法經』は『宝積經』第十二「菩薩藏會」の「同本異譯」であると述べている⁸¹。また、湛慧（1676-1747年）の『成唯識論述記集成編』卷四に「佛説」の語を取り去って、經典名を『大乘菩薩藏正法經』としたことが述べられている⁸²。

第三項、蔵訳の経名

さて、『菩薩藏經』を蔵訳では འཕགས་པ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཐཱ་ཤྲོད་ཅེས་བྱ་བ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདོ།（聖なる菩薩の蔵と呼ばれる大乘の經）⁸³と翻訳しているが、本經はSurendrabodhi, Śīlendrabodhi, Dharmatāśīla の三人⁸⁴による共訳であり、宝積經（デルゲ版No.56；北京版No.760；ラサ版No.56等）⁸⁵に収められている。また、本訳は『デンカルマ目録』と『パンタンマ目録』の両者に記載されている⁸⁶ので、9世紀前半には既に訳されたものと見られる。

第四項、小結

以上本節では『菩薩藏經』の転籍名について検討をおこなってきた。四本の経名を表で示すと、次のようになる。

⁸⁰ 『明嘉興大蔵經』第三十一卷, p. 807c。

⁸¹ 『菩薩藏經』合二十卷。竺法護譯也。『辨中邊論』引此經十七卷。與今文大同也。已上有人考。基辨詳有人考云。有人云竺・法護譯二十卷者。檢明蔵目録。云『佛説大乘菩薩藏正法經』二十卷者。舊作四十卷。惟浄譯。後竺・法護等校譯作二十卷者現存。『寶積經』中與十二「菩薩藏會」同本異譯。予對檢如有人云。無別名『菩薩藏經』者。由此『演秘』所云亦別本歟。予閱『寶積經』「菩薩藏會」。如秋篠云。此皆縁彼智。又『演秘』中云『辨中邊論』與『菩薩藏經』説意相違。恐非歟。章主意非經論説意別（『大乘法苑義林章師子頻伸鈔』第十六卷, T71.764c28-765a4）。

⁸² 『大乘菩薩藏正法經』宋・西天三蔵賜紫沙門法護等譯（T67.88a5）。

⁸³ また、この蔵訳からのモンゴル語訳『菩薩藏經』も存在する。

⁸⁴ 本經の蔵訳全經の末尾に、ラサ版（380b4-5）では、本經の蔵訳者の名前を「ལུ་རེ་ཐུ་བོ་ཐོ་ཏི་ (Surendrabodhi)」、「ཤྲོ་ལེ་ཐོ་ཏི་ (Śīlendrabodhi)」、「ཐཱ་ཤྲོ་ཏི་ཤྲོ་ལ་ (Dharmatāśīla)」と書いてある。A Catalogue of the Comparative Kangyur (bka'gyur dpe bsdur ma) (Paul G. Hackett[2012, p. 22])では、ラサ版と同じく、本經の三訳者の名前を「Surendrabodhi, śīlendrabodhi, Dharmatāśīla」と書いてある。しかし、本經蔵訳のデルゲ版（Ga205a7）と北京版（Wi234a2）とでは、ラサ版での「ཐོ་ཏི་ (bodhi)」が付いている二人訳者の名前中に、「ཐོ་ཏི་ (bodhi)」が付いてない。

⁸⁵ デルゲ版、北京版、ラサ版という三つのバージョンの成立の年代につて、デルゲ版カンギュルは、1729-1733年であり、北京・乾隆版カンギュルは、1737年であり、ラサ版カンギュルは、1934年である（「浄土教の総合的研究」研究班[1999, p. 7]の小野田俊蔵・上田千年の両氏の「解説」に基づく）。

⁸⁶ 芳村修基[1974, pp. 109-114]；川越英真[2005, pp. 122-126]。

經典名			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
bodhisattvapiṭaka-sūtrānta/ bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāya	菩薩蔵経/ 大菩薩蔵経/ 菩薩蔵会（『大宝積経』の第十二会）	佛說大乘菩薩蔵正法経 /大乗菩薩蔵正法経	འཕགས་པ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཐུགས་ཅན་ཅེས་ཅིག་གི་ཐོན་པའི་མངོ། （聖なる菩薩の蔵と呼ばれる大乘の経）

これらを眺めれば、梵文写本と玄奘訳が一致、あるいはほぼ一致して「菩薩蔵」という経名で本経を呼んでいることが分かる。また、法護等訳と蔵訳では「菩薩蔵」を中心の語として經典名を立てることも分かる。要するに、四本それぞれの經典名から、本経は「菩薩蔵」を説く經典であることが見て取れる。また、法護等訳の経名は、玄奘訳の『菩薩蔵経』という経名、及び梵文原典の経名より、「佛説」、「大乘」、「正法」という幾つかの単語が増えたことも見て取れる。同時に、蔵訳の経名も、玄奘の経名と梵文原典の経名より、「聖なる（འཕགས་པ་）」、「大乘（བྱེད་པ་ཆེན་པོ་）」という単語が増えている。つまり、經典名の検討に基づくのであれば、玄奘訳は梵文原典に他と比べ、最も忠実に翻訳していることが認められる。それと同時に、蔵訳と法護等訳の經典名から、それぞれの訳者は、その経名に上述した諸単語を加えることによって、該当經典を、その大乘性と正統性を強調する一方、神聖化をも狙っていたことが想像できよう。

第三節、菩薩蔵（bodhisattva-piṭaka）とは何か

第一項、はじめに

『菩薩蔵経』というタイトルともなっているbodhisattvapiṭakaとは一体何であるのか。本節ではその点について検討してみたい。玄奘訳等では、piṭakaは蔵と翻訳されるが、他の漢訳では、「篋蔵」とも訳される⁸⁷。すなわち、このbodhisattvapiṭakaは、「菩薩蔵」の他、「菩薩篋蔵」とも訳することが可能である⁸⁸。

第二項、菩薩蔵と十二分教

（一）、菩薩蔵と本生

法蔵部（Dharmaguptaka）では、経蔵・律蔵・論蔵・呪蔵・菩薩蔵という五蔵があると言われる。例えば、湛慧撰『成唯識論述記集成編』は次のように述べている。

⁸⁷ 望月信亨 [1933, p. 3024a-c]。

⁸⁸ 「菩薩篋蔵」という訳語は、鳩摩羅什（344-413年/350-409年）と仏陀跋陀羅（359-429年）以前に訳された漢訳仏典に現れる場合が多い（支婁迦讖〈147年に洛陽に至る〉訳『佛說阿闍世王經』を除く、『佛說阿闍世王經』では、「菩薩蔵」という訳語を使っているからである。また、鳩摩羅什と仏陀跋陀羅と同時代の竺佛念（350-417年）訳『菩薩處胎經』にも「菩薩蔵」という訳を使っている）。例えば、[吳] 支謙〈195頃-254頃〉訳『維摩詰經』、[西晋] 竺法護〈239-316年〉訳『文殊師利佛土嚴淨經』、『等集衆徳三昧經』、『持人菩薩經』、『佛說魔逆經』、『文殊師利普超三昧經』、竺法護と同時代の聶承遠訳『佛說超日明三昧經』、[西晋] 安法欽訳『佛說道神足無極變化經』、また、同様に晋代に訳された『佛說摩訶衍寶嚴經』に認められる。しかし、竺法護は『文殊師利普超三昧經』に、「菩薩篋蔵」と「菩薩蔵」という訳語を共に使っている。また、鳩摩羅什と仏陀跋陀羅とは各自の訳著に「菩薩蔵」という訳語を使い、[隋] 闍那崛多（523-600年?）は『四童子三昧經』と『大威徳陀羅尼經』とに「菩薩篋蔵」という訳語を用いる。

また、上に述べた、支婁迦讖（147年に洛陽に来る）訳『佛說阿闍世王經』には「菩薩蔵」という語があることから、「菩薩蔵」は、支婁迦讖より以前に、インドに存在したということが想像できる。

宗輪論云。次後於此第三百年。從化地部流出一部。名法藏部。(中略)從人以立論主名。此部師說。總有五藏。一經。二律。三阿毘達磨。四呪。即明諸呪等。五菩薩。即明本菩薩行事等。(T67.77a24-b3)

すなわち、菩薩藏は、その五藏中の一つであり、「本菩薩行事」を指すのである。これは、また、『大乘阿毘達磨集論』の「何等本生。謂宣說菩薩本行藏相應事。」(T31.686b15)という記述とも対応する。以上の検討の結果、『成唯識論述記集成編』に記述されている「五、菩薩、即明本菩薩行事等」という言葉中の「本菩薩行事」というのは、すなわち、「本生」のことを指しているといえよう⁸⁹。

(二)、菩薩藏と方等(広)

大衆部(Mahāsāṃghika)に属すると言われている『分別功德論』によれば、菩薩藏は、「諸方等經」を指すものと示される。次のようである。

阿難復思惟。經法浩大當分作三聚。阿難獨生此念。首陀會天密告阿難曰。正當作三分耳。即如天所告。判作三分。一分契經。二分毘尼。三分阿毘曇。(中略)故曰三藏三脫冥迹玄會。(中略)所謂雜藏者。非一人說。或佛所說。或弟子說。或諸天讚誦。或說宿緣三阿僧祇菩薩所生。文義非一多於三藏。故曰雜藏也。佛在世時。阿闍世王問佛菩薩行事。如來具爲說法。設王問佛。何謂爲法。答法即菩薩藏也。諸方等正經。皆是菩薩藏中事。先佛在時已名大士藏〔。〕阿難所撰者。即今四藏是也。合而言之爲五藏也。或有一法義。亦深難持難誦不可憶。(T25.32a5-b13)

すなわち、『分別功德論』では、「經法」(仏法)は經(契經)・律(毘尼)・論(阿毘曇)三藏に分けるものの、「非一人說。或佛所說。或弟子說。或諸天讚誦。或說宿緣三阿僧祇菩薩所生。文義非一多於三藏」として經・律・論の三藏以外の内容もあることを示す。そして、そのような内容は「雜藏」と呼ばれる。おろらく、「雜藏」から、「菩薩藏」が独立する⁹⁰。そして、この「菩薩藏」は、「諸方等正經」を指す⁹¹。印順[1981, p. 550]によれば、この四阿含經の以外にある「方等經」は、「九分教」中の「方広」と同じであると推定されている⁹²。

⁸⁹ 澄禪撰『三論玄義檢幽集』には「真諦云：(中略)、目連滅後。法護習爲五藏。一經藏。二律藏。三論藏。四呪藏。五菩薩本因。即名菩薩藏也。」(T70.465b21-23)とある。すなわち、真諦の所伝によれば、法護(藏)が修習する五藏中の「菩薩藏」は、「菩薩本因」を指すのである。印順法師によれば、この「菩薩本因」は、「本生」である。(印順[1981, p. 500])

⁹⁰ 印順[1981, p. 550]は菩薩藏は雜藏から独立したものであると主張する。しかし、竺佛念(350-417年)訳『菩薩處胎經』では、「雜藏」は「十住菩薩藏」の後にできたものと想定しており(T12.1058b21)、印順[1981, p. 550]の見解を無批判に享受することはできない。

⁹¹ 従って、法藏部が所伝と言われている『四分律』では次のようにのべる。

如是生經、本經、善因緣經、方等經、未曾有經、譬喻經、優婆提舍經、句義經、法句經、波羅延經、雜難經、聖偈經、如是集爲雜藏。(T22.968b23-26)

このように法藏部では、「方等經」は雜藏に属している。そして、この「方等經」は、四阿含經以外のものである。

⁹² 印順[1981, p. 537]は次のように述べる。

在「四阿含經」以外、別有「方等(即「方廣」)經」的存在。(中略)四阿含經以外的「方廣」,雖不能確切的知道是什麼,但性質與「九分教」中的「方廣」相同,是可以確定的。

『分別功德論』の他、いくつかの諸經論においても「菩薩藏」は十二分教の「方廣」を指していることを確認できる。經典に関してはいくつか例示すれば次の通りである。

①鳩摩羅什〈344-413年/350-409年〉訳『仏説千佛因縁經』：

於像法中有一比丘名一切忍。持菩薩藏行菩薩法。遊巡村落常説此偈

佛住平等空 法性相亦然

僧依無爲會 三寶義無異

了本性相空 歸依處寂滅

常行眞如道 乃應菩薩行

忍辱進大比丘常説此偈。時華光林中有千梵志。修四梵行慈悲喜捨。聞此比丘讚三寶義名。身心歡喜。即白比丘。於何經中有如此義。比丘白言。大調御師。於大方等眞實經中。説佛法僧平等空慧住一相中。(T14.70b24-c5)

②曇無讖〈385-433年〉訳『菩薩地持經』：

彼菩薩求法者。何法求、云何求、何故求。何法求者。略説。求菩薩藏。聲聞藏。外論。世工業處智。十二部經。唯方廣部是菩薩藏。餘十一部是聲聞藏。(T30.902c19-23)

③求那跋摩〈367-431年〉訳『菩薩善戒經』：

云何名大乘。有七事大故名大乘。一者法大。法大者。菩薩法藏於十二部經最大最上故名毘佛略。

二者心大。心大者。謂發阿耨多羅三藐三菩提心。三者解大。解大者。解菩薩藏毘佛略經。(菩薩地功德品, T30.999c24-28)

佛所說道爲諸菩薩及諸聲聞。佛涅槃後集結藏時。聲聞藏中除菩薩名。菩薩藏中安菩薩名。是故方等名菩薩藏。(畢竟地住品, T30.1012c13-15)

また論としては、次のようなものが挙げられる。

①弥勒説・玄奘訳『瑜伽師地論』：

「當知於彼十二分教。方廣一分唯菩薩藏。」(T30.500c16-17)

「謂十二分教中菩薩藏。攝方廣之教。」(T30.548c14)

②無性造・玄奘訳『攝大乘論積』

「此經即是菩薩藏攝。故名方廣」(T31.427a15-16)

以上のように、一部の経論では、菩薩藏が、十二分教の「方広」を指していることが確認できる。そして、法藏部と大衆部から、菩薩藏が經藏・律藏・論藏等の諸藏と並列されていることも分かる⁹³。しかし、無著著『大乘阿毘達磨集論』では、上述した構造と異なる形が提示される。次の通りである。

云何法決擇。法者。謂十二分聖教。何者十二。一契經。二應頌。三記別。四諷頌。五自說。六緣起。七譬喻。八本事。九本生。十方廣。十一希法。十二論議〔。〕（中略）如是契經等十二分聖教三藏所攝。何等爲三。一素怛纜藏。二毘奈耶藏。三阿毘達磨藏。此復有二。一聲聞藏。二菩薩藏。契經、應頌、記別、諷頌、自說。此五、聲聞藏中、素怛纜藏攝。緣起、譬喻、本事、本生。此四、二藏中、毘奈耶藏并眷屬攝。方廣、希法。此二、菩薩藏中、素怛纜藏攝。論議一種、聲聞菩薩二藏中、阿毘達磨藏攝。（T31.686a21-c3）

ここでは、十二分教、經律論三藏、菩薩藏、声聞藏それぞれの関係を明言している。先ず、十二分教は經（素怛纜）・律（毘奈耶）・論（阿毘達磨）の三藏に摂せられる。そして、十二分教あるいは經・律・論の三藏は声聞藏と菩薩藏との二つに分けられる。そして、十二分教のうち、契經と、應頌と、記別と、諷頌と、自說との五つは声聞藏の經藏（素怛纜藏）の所摂であり、緣起と、譬喻と、本事と、本生との四つは声聞藏と菩薩藏との両者の律藏（毘奈耶藏）の所摂である。また、方広と、希法との二つは菩薩藏の經藏の所摂である。論議に関しては、声聞藏と菩薩藏との二藏中の論藏の所摂である。以上の諸関係を図で示すと、次のようになる。

『大乘阿毘達磨集論』の十二分の配当

	声聞藏（十支）	菩薩藏（七支）
契經	經藏所撰	
應頌		
記別		
諷頌		
自說		
緣起	律藏所撰	
譬喻		
本事		
本生		
方廣		經藏所撰
希法		
論議	論藏所撰	

⁹³ また、『菩薩處胎經』では、菩薩藏は、声聞藏と戒律藏と並列されている他、最初出の經に第五とされている。「最初出經、胎化藏爲第一。中陰藏第二。摩訶衍方等藏第三。戒律藏第四。十住菩薩藏第五。雜藏第六。金剛藏第七。佛藏第八。」（T12.1058b19-22）

つまり『大乘阿毘達磨集論』では、一切仏法が、声聞蔵と菩薩蔵との二つに分けられ⁹⁴、そして、声聞蔵と菩薩蔵とはそれぞれに経律論の三蔵の性格を有し⁹⁵、菩薩蔵は、十二分教中の「方広」、「希法」、「縁起」、「譬喩」、「本事」、「本生」、「論議」の七つを含むこととなるのである。

さて、このように、菩薩蔵が経律論三蔵の性格を有することについては、幾つかの例が挙げられる。例えば、論蔵を有することについては、『瑜伽師地論』卷第五十に関連する記述が存在する。次の通りである。

又此菩薩地亦名菩薩藏摩怛理迦 (*māṭṛka*, 論母)。亦名攝大乘。(T30.575b9-10)

何以故。此菩薩地顯示一切菩薩藏中略標廣釋諸門攝故。(T30.575b18-19)

この点も先の主張を傍証するものと捉えることができよう。また、毘目智仙（6世紀）訳『三具足經憂波提舍』の次の記述から、菩薩蔵は、律の性格を持つことも窺える。

又菩薩藏修多羅中。廣說無量如來戒故。(T26.363b11-12)

またこのような点は経録資料の検討からも窺うことができる。例えば、梁・天監五年（506年）に僧伽婆羅によって訳出されており、懺悔を主題としている『菩薩蔵經』が『大唐内典録』では「大乘律」に編入されている⁹⁶。このように、『菩薩蔵經』は律の性格をも有する。

また、菩薩蔵と大乘の関係としては、次のような文言がある。

求那跋摩（367-431年）訳『優婆塞五戒威儀經』：

如是住菩薩戒者。日應供養諸佛若塔若像、次供養法若行法人。及菩薩藏大乘經典。(T24.1117a21-22)

那連提耶舍（490-589年）訳『大悲經』：

爲欲憐愍利益安樂諸衆生故。發如是心、多聞持菩薩藏。稱揚大乘顯發大乘。」(T12.955b12-13)

⁹⁴ 別の分類としては、『菩薩處胎經』では、釈尊の経法が八つの蔵に分けられている。

最初出經、胎化蔵爲第一。中陰蔵第二。摩訶衍方等蔵第三。戒律蔵第四。十住菩薩蔵第五。雜蔵第六。金剛蔵第七。佛蔵第八。是爲釋迦文佛經法具足矣。(T12.1058b20-23)

⁹⁵ また、世親造・眞諦訳『攝大乘論釈』においても、菩薩蔵は経律論の三蔵を持つことが説かれる。次の通りである。

此菩薩蔵凡有幾種。亦有三種。謂修多羅。阿毘達磨。毘那耶。此三由上下乘差別故成二種。謂聲聞蔵、菩薩蔵。此三及二云何名蔵。由能攝故。」(T31.154b2-5)

また、吉蔵撰『法華義疏』の「所言三蔵者凡有三種。一者小乘三蔵。二者大乘自有三蔵。如攝大乘論說。三者…。(T34.596c23-25)」という言葉からも、声聞蔵と菩薩蔵とは小乗と大乘との区別が含意されていることが見て取れよう。

⁹⁶ 『大唐内典録』：

大乘律合二十部三十一卷四百二十紙。『優婆塞戒經』六卷或七卷八十二紙、是在家菩薩戒。（中略）『梵網經』二卷三十四紙、後秦羅什譯。『菩薩蔵經』九紙、梁天監年僧伽婆羅於楊都譯。(T55.320a19-28)

『大乘莊嚴經論』：

三藏或二攝者。三藏謂修多羅藏毘尼藏阿毘曇藏。或二謂此三由下上乘差別故。復次爲聲聞藏及菩薩藏。問彼三及二。云何名藏。答由攝故。謂攝一切所應知義。(T31.609c3-6)

知礼〈960-1028年〉述『金光明經玄義拾遺記』：

聲聞名藏意彰純小。菩薩佛藏唯詮於大。(T39.46a19-20)

以上の資料に基づけば、菩薩藏は大乘を指し示し、その一方で声聞藏は、小乗を示していることが見て取れる。また、声聞乗と菩薩乗の関係については、『大乘阿毘達磨集論』に次のような記述が認められる。

聲聞藏法菩薩藏法等。從如來法身所流。何因緣故以香鬘等供養恭敬菩薩藏法。便生廣大無邊福聚。非聲聞藏法。以菩薩藏法是一切衆生利益安樂所依處故。能建大義故。無上無量大功德聚所生處故。(T31.688a22-26)

この文言から、菩薩藏は、「一切衆生利益安樂所依處」であり、「無上無量大功德聚所生處」である故に、声聞藏より優れていることが読み取れる。

また曇無讖〈385-433年〉訳『菩薩地持經』には次のようにある。

如來爲諸菩薩聲聞緣覺。行出苦道說修多羅。結集經藏者。以說菩薩行立菩薩藏。說聲聞緣覺行立聲聞藏。(T30.958b29-c2)

この文言に基づけば、すなわち、菩薩の行を説くために菩薩藏を設定し、声聞と緣覺との行を説くために声聞藏を設定する、ということが分かる。また、当該箇所注目すべき点は、声聞藏は、声聞と緣覺（辟支仏）との両方のことを含むことである⁹⁷。

第三項、菩薩藏と一切法

菩薩藏について、支婁迦讖〈147年来洛陽〉訳、文殊師利法門類の經典である『佛說阿闍世王經』（以下、『阿闍世王經』）では、次のように説かれている。

文殊師利。於二夜說菩薩藏。諸法莫不從是。若功德法若無功德法。若俗若道。若有罪若無罪。若有餘若無餘。若脫若不脫。一切盡入是藏。何以故。用諸法故。無所不得故。譬若三千大千刹土。含受百億國土。百億日月。百億須彌山。百億大海。盡入三千大千。亦不凡法亦不道法盡入其中。

⁹⁷ だが、「辟支仏藏」という語も經典中によく現れている。例えば、那連提耶舍訳『月燈三昧經』：「云何名習於多聞。謂修習受持聲聞藏、辟支佛藏、菩薩藏故。」(T15.616c13-15)

聲聞辟支佛法若菩薩法盡入其中。何以故。悉總持諸行故。持聲聞持辟支佛持菩薩。若如樹其根堅住者。本莖枝葉華實皆而成好。菩薩藏者無所不持。無所不成。一切持諸功德法。悉持薩芸若心。
(T15.398a5-16)

また、『阿闍世王經』の異訳本である『文殊師利普超三昧經』(竺法護〈239-316年〉訳)では、次のように説示している。

時濡首童眞。於中夜爲菩薩大士。講三篋藏菩薩祕典。何謂菩薩篋藏祕要。都諸經法無不歸入於此篋藏。若世俗法度世法。有爲法無爲法。若善法不善法。有罪無罪法。有漏無漏法。悉來歸趣入菩薩藏。所以者何。菩薩篋藏經典要者。曉了一切諸法之誼。譬族姓子此三千大千世界。百億四天下大地。百億日月。百億須彌山王。百億大海。悉卷合入三千大千世界爲一佛土。如是族姓子。若凡夫法及餘學法。若聲聞法緣覺法。若菩薩法及與佛法。悉來入歸菩薩篋藏。所以者何。菩薩篋藏一切攝護。聲聞緣覺將養大乘。譬族姓子。其樹根株堅固盛者。枝葉華實則爲滋茂。又族姓子。設有攝取菩薩篋藏菩薩大士。則爲攝取一切諸乘。將養一切衆德之法。(T15.417c8-22)

また、上述した両經の異訳本であるとも視される『佛說未曾有正法經』(法天〈?-1001年〉訳)では、次のように述べている。

爾時妙吉祥菩薩於中夜分。復爲諸菩薩宣說菩薩藏法門。告諸菩薩曰。諸大士。當須了知菩薩藏法門。未有一法非菩薩藏攝。所有世間出世間法。有爲無爲。若善不善。有相無相。有漏無漏等法。皆是菩薩藏故。善男子。譬如三千大千世界。其中有百億四大洲。百億日月百億須彌山。百億大海。皆不離三千大千世界所攝。菩薩藏法亦復如是。所有凡夫法。聲聞法緣覺法。乃至諸佛法。亦不離菩薩藏攝。所以者何。聲聞乘緣覺乘諸佛乘皆同一故。譬如大樹莖幹枝葉繁密茂盛皆一本故。菩薩藏爲本出生三乘法無異無別。其量廣大不可度量。(T15.439b22-c5)

また、『阿闍世王經』とその異訳本との他、竺法護訳『賢劫經』では、次のように説かれている。

譬如船師度人往反而無窮極。以菩薩藏總持之篋。敷演深要道法之眞。(T14.8b18-19)

また、玄奘訳『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』には、次の説示がある。

若諸國王及以臣庶一切施主。於今釋迦牟尼佛正法中。能爲法事自種善根。或教他種。謂於大乘素咀纚藏。所有甚深空性相應諸大乘經。謂『般若波羅蜜多經』。『妙法芬陀利迦經』。『金光明經』。『金剛手藏經』。『首楞伽摩三摩地經』。『幻喩三摩地經』。『大神變三摩地經』。『集諸功德三摩地經』。『還

如來智印三摩地經』。『具諸威光三摩地經』。『寶臺經集諸菩薩三摩地經』。『諸佛攝受經』。『集請問經』。『梵王問經善吉問經』。『勇猛問經』。『能滿問經』。『海龍王問經』。『無熱惱龍王問經』。『樹幢龍王問經』。『寶掌問經』。『寶髻問經』。『虛空音問經』。『虛空吼問經』。『幻網問經』。『寶女問經』。『妙女問經』。『善臂問經』。『師子問經』。『猛授問經』。『金光女問經』。『說無盡慧經』。『說無垢稱經』。『未生怨王經』。『諦實經』。『那羅延經』。『佛花嚴經』。『蓮華手經』。『十佛名經』。『無量光衆經』。『極樂衆經』。『集淨華經』。『大集經』。『入一切道經』。『寶幢經』。『寶聚經』。『寶篋經』。『彩畫經』。『高頂王經』。如是等大乘經。有百俱胝部。黨差別復有大乘毘奈耶藏。阿毘達磨藏衆多部類。一切皆是菩薩藏攝。 (T49.14a12-b3)

また、『瑜伽師地論』卷第五十では、「如薄伽梵於菩薩藏所攝一切微妙經典」(T30.575b15-16)と述べている。

従って、『阿闍世王經』などの經論の記述に基づけば、菩薩藏は、「總持之篋」であって、功德のあるの法および功德のないの法、世俗の法および聖道の法、有為の法および無為の法、善法および不善法、有漏法および無漏法、罪のあるの法および罪のないの法、解脱できるの法および解脱できないの法、有相の法および無相の法、凡夫法、聲聞法、辟支仏法、菩薩法、乃至一切「甚深空性」と相応する「諸大乘經」・大乘律藏・論藏、一切微妙經典、一切仏法を含むこととなる。つまり、菩薩藏に含まれない法は存在しない。すなわち、「未有一法非菩薩藏攝」とも言えよう。

第四項、菩薩藏と六度

菩薩藏を六度と説く經論が一部に存在する。今はそれを検討してみたい。まず、『分別功德論』では、次のように述べている。

昔大天聖王具四梵堂。展轉相紹。乃至八萬四千王。皆有梵堂。唯大天一人是大士。其餘皆是小節。以是言之。大乘難辯⁹⁸多趣聲聞。彌勒亦知阿難部分三藏。然猶懼後學、專習空法、斷結取證。是以顯揚大乘。分爲別藏。故説六度諸行。大士目要也。(中略) 此六度無極事。盡在菩薩藏。不應與三藏合。(T25.33b2-3)。

「以其集此六度大法爲一分。此即菩薩藏也。」(T25.32c8-13)

『分別功德論』の記述に基づけば、六度諸行（即ち、六度大法）とは、別藏（＝大乘）であり、すなわち、菩薩藏となる。つまり、六度を説く法は即ち大乘であり菩薩藏となる。

⁹⁸ 辯＝辨㊦㊧。

また、『分別功德論』の他、『文殊師利佛土嚴淨經』⁹⁹、『持人菩薩經』¹⁰⁰、『持世經』¹⁰¹、『佛說摩訶衍寶嚴經』¹⁰²、『月燈三昧經』¹⁰³、『十住毘婆沙論』卷第九¹⁰⁴、『瑜伽師地論』¹⁰⁵、『佛說大迦葉問大寶積正法經』¹⁰⁶、『佛說海意菩薩所問淨印法門經』¹⁰⁷にも、六度＝菩薩藏、という説示が認められる。

しかし、『大寶積經』「郁伽長者會」（康僧鎧〈252年前後に來洛陽〉訳）、および『十住毘婆沙論』卷第八¹⁰⁸では、菩薩藏＝修行六波羅蜜＋修方便、という説示が見られる。例えば、『大寶積經』「郁伽長者會」には、次のように説かれる。

如佛如來入於涅槃。是入僧坊觀於一切諸比丘德。誰是多聞。誰是說法。誰是持律。誰持阿含。何等比丘持菩薩藏。誰阿練兒。（中略）彼近多聞爲修聞故。親說法者修行決定。近持律者調伏結使不墮犯中。親近持於菩薩藏人。於學修行六波羅蜜及修方便。近阿練兒修學獨處。（T11.476c28-477a12）

また、『十住毘婆沙論』卷第九の「四法品第十九」から、六度は菩薩藏法中の諸多内容の一種であることが分かる。次のとおりである。

問曰。何等是菩薩大藏法。何等是能過一切魔事法。何等是能生無量福德法。何等是能攝取一切善法。答曰

諸菩薩有四 廣大藏妙法

四攝諸善法 菩提心爲先

何等爲四。一得值佛。二得聞六波羅蜜。三於說法者心無瞋閼。四以不放逸心樂住阿練若處。是爲四大藏。（T26.67a12-19）

⁹⁹ 虚空之中不見伎樂悲和之音。自然而作其音。不宣愛欲之辭。恒出佛法六度無極菩薩篋藏經法之音。隨意所好聞經法音。如念即解皆發正覺。見佛疑滅聞經解達。（T11.899b20-24）

¹⁰⁰ 佛言。持人。若有菩薩觀是法品。大智慧業無極明本。積大功德不可限量。若將來世受是法品持誦誦讀。及餘深經菩薩篋藏。諸度無極勤心奉行。魔事因緣不能得便。不爲罪蓋之所覆蔽。（T14.641b16-20）

¹⁰¹ 『持世經』囑累品第十二：

持世。若諸菩薩於後末世時。得值是經及餘深經。菩薩藏所攝與諸波羅蜜相應。是人爲魔事所覆。不爲業障所惱。（T14.666a15-18）

¹⁰² 復次迦葉。菩薩成就四法善不衰退增長善法。云何爲四。一者樂聞善法不樂聞非法。樂六度無極菩薩篋藏。二者下意不慢衆生。三者……（T12.194b26-29）。

¹⁰³ 童子。爾時德音王請大菩薩衆。爲欲滿足六波羅蜜菩薩藏大陀羅尼善巧方便自在無礙。是故於其夜中請大菩薩衆在於佛前而爲法會。時百千萬那由他燈皆悉熾明。（T15.598a12-16）

¹⁰⁴ 四未聞經聞不信受。何等是增長善根四法。一所未聞經求之無厭。所謂六波羅蜜菩薩藏。二於衆生除憍慢心謙遜下下。三……（T26.66a14-17）。

¹⁰⁵ 又諸菩薩於五種處常當欣讚。何等爲五。一者值佛出世常得承事。二者於諸佛所常聞六種波羅蜜多菩薩藏法。三者……（T30.546a22-25）。

¹⁰⁶ 常願聞其善 非願聞諸惡

恒行六波羅 而求菩薩藏（T12.201c19-20）。

¹⁰⁷ 復次海意。有四種法。於大乘中而爲障難。何等爲四。一者惡聞。所謂尋求外道文籍。二者於其六波羅蜜菩薩藏正法不樂聽受。三者……（T13.503b24-27）。

¹⁰⁸ 是在家菩薩敬禮塔已。求造諸比丘說法者。所持律者。讀修多羅者。讀摩多羅迦者。讀菩薩藏者。作阿練若者。（中略）若遇持律者。應當請問起罪因緣罪之輕重滅罪之法及阿波陀那事。問已修學行。若遇讀修多羅者。應當請問諸阿含諸部中義習學多聞。若遇讀摩多羅迦應利衆經憂陀那波羅延法句者。應當學習如是等經。若遇讀菩薩藏者。應當請問六波羅蜜及方便事問已修學。若遇阿練若。應學其遠離法。（T26.63a2-18）

このように、菩薩藏とは六度であることが説かれている。そして、『菩薩藏經』中の六度の記述は膨大な量であり、布施波羅蜜多から般若波羅蜜多までそれぞれに一品が立てられて説かれており¹⁰⁹、六度を重視していた点はこの点からも読み取れる。すなわち、六度は、菩薩藏の内容の主眼であったことは間違いないであろう。

第五項、菩薩藏と断疑

さて、次に、菩薩藏と断疑の関係について検討してみたい。玄奘訳『菩薩藏經』には、次のような説示がある。

尊勝座佛座。如來之座。我當於此坐。爲欲利益一切衆生故。說大乘菩薩行所依經。名微妙吉祥大菩薩藏。此經能令一切衆生疑山崩墮。此經能令一切衆生疑網斷絕。此經能令一切衆生疑根不生。此大乘經利益安樂諸衆生故。哀愍大衆及諸天人。是故如來方爲開闡。(T11.205b3-9)¹¹⁰。

このように、菩薩藏が説かれた目的は一切衆生の疑いを断ずるため、すなわち断疑が目的であると説かれる。また、玄奘以前に訳された經典、例えば、竺法護訳『持人菩薩經』にも次のようにある。

佛言。持人。若有菩薩觀是法品。大智慧業無極明本。積大功德不可限量。若將來世受是法品持誦誦讀。及餘深經菩薩篋藏。諸度無極勤心奉行。魔事因緣不能得便。(中略)如是持人。佛下印封斷一切疑。最後末世現得四義自在之業。行菩薩大士法。受是經典而擁護之。(T14.641b16-26)

また、鳩摩羅什訳『持世經』においても、複数の記述が確認できる。次の通りである。

是智高王佛多爲諸菩薩。說是斷一切衆生疑喜一切衆生心菩薩藏經。(初品,T14.644a29-b2)
持世。是閻浮檀金須彌山王佛。爲諸菩薩亦說是斷衆生疑菩薩藏經。(本事品,T14.663b23-24)
持世。是無量光德高王佛。爲諸衆生多說如是之法。所謂般若波羅蜜。及菩薩藏斷一切衆生疑喜一切衆生心經。(本事品,T14.664b29-c2)
持世。若諸菩薩於後末世時。得值是經及餘深經。菩薩藏所攝與諸波羅蜜相應。是人不爲魔事所覆。不爲業障所惱。(中略)持世。我今說是法印爲斷後世一切疑故。(囑累品, T14.666a15-23)

また、同様に、鳩摩羅什訳『佛說華手經』においても次のように確認できる。

¹⁰⁹ 『菩薩藏經』の内容の詳細については、本稿の第二章・第一節、「四本の品立て」を参照のこと。

¹¹⁰ 梵文写本：yatrāsane tathāgato niṣadya sarvasattvānugrahaśastam bodhisattvapīṭakam nāma sūtrāntam bodhisattvacaryāniṣyandam bhāṣīyate (|) etac ca sarvasattvasaṃśayasampratipādanam sarvasattvasaṃśayacchedanam sarvasattvasaṃśayasamutpatticcheda(7)nam imam tathāgatasūtrāntam bhāṣīyate bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai arthāya hitāya sukhāya devānām ca manuṣyāṇāṃ ca (|) (MS15b6-7, 訳文は本章・第一節・「第一項、問題の所在」に示している)；法護等訳 (T11.791c16-20)；藏訳：(D Kha280a5-7, P Dsi306b1-4, H41a5-b2)。

爾時網明白彼佛言。今此大光及大音聲誰之所爲。彼佛答言。西方去此。過于無量阿僧祇國。有世界名娑婆。佛號釋迦牟尼。今現在爲菩薩。說攝一切法斷衆生疑令衆歡喜菩薩藏經。(網明品,T16.130b4-8；如相品, T16.132a10-14)。

また、僧伽婆羅訳『菩薩藏經』においても次のように確認できる。

是時帝釋白佛言。世尊。當何名此經。云何受持。是時佛告帝釋。橋尸迦。此經名滅業障礙。汝當受持。亦名菩薩藏。汝當受持。亦名斷一切疑。如是受持。(T24.1089c21-24)

その他、同様に玄奘訳に訳された『大般若波羅蜜多經』にも、次のように確認できる。

又舍利子。諸佛世尊若去來今若十方界。將欲開示斷一切疑微妙甚深菩薩藏法。必有如是無量無邊最勝清淨功德衆集。若有如是無量無邊最勝清淨功德衆集。必說如是斷一切疑微妙甚深菩薩藏法。(T7.1074a2-7)

以上、いくつかの用例を紹介してきたが、これらの用例から、菩薩藏は、「断一切疑」を目的として説かれるものであることが分かる。

第六項、菩薩藏と三宝の興隆および無上正等正菩提

さて、次に菩薩藏と三宝の興隆についてみていきたい。『菩薩藏經』の第十二章「大自在天授記品」では、菩薩藏と三宝の興隆について、次の説示がある。

梵文写本 (MS141b6) ¹¹¹ :

tat kasya hetor (|) bodhisattvapīṭakam dharmaparyāyam atyarthaṃ śrutvodgrhya dhārayitvā vācayitvā paryavāpya parebhyo (‘)py ārocya parebhyāś ca vistareṇa samprakāśya trayānām ratnānām avyavacchedāya pratipanno bhavati (|)

【訳】それは何故か。菩薩藏法門を懇慫に聞いて、受け容れて、記憶して、読誦して、熟達して、他人たちのためにも説いて、また他人たちにも詳細に解説して、三宝を途切れさせないために、正行が生じる〔故にである〕¹¹²。

¹¹¹ 玄奘訳： 何以故。若於是經受持讀誦。乃至爲他分別說者。能令三寶永不斷絕。(T11.321c15-17)

法護等訳： 即得紹隆三寶使不斷絕。(T11.885c10)

藏訳： དེ་མེད་ཕྱིར་ཞེན། བླ་ཆུབ་མཆོག་དཔའི་ཐེ་མཛུགས་ཀྱི་རྣམ་གངས་ཤིན་ཏུ་མཉན་ཏམ། རྒྱུང་སམ། བཟུང་ངམ། གཞན་དག་ལ་བརྗོད་དམ། གཞན་དག་ལ་བྱ་ཆེར་ཡང་དག་པར་རབ་ཏུ་བསྟན་ན། དཀོན་མཆོག་གསལ་གྱི་གདུང་རྒྱན་མི་འཆད་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་ཞུགས་པ་ཡིན་ན། (D Ga204b5-6, P Wi233a5-7, H379b5-7)

¹¹² また、佛駄跋陀羅 (359-429年) 訳『大方廣佛華嚴經』卷第九にも、次のように説かれる。

大願成滿得菩薩藏。隨其所應而化度之。已能不捨諸波羅蜜。隨所請衆生皆悉度脫。興隆三寶永使不絕。(T9.458c21-24)

所謂不斷佛種。是菩薩藏。開示佛法無量威德故。增長法種。是菩薩藏。出生智慧廣大光明故。住持僧種。是菩薩藏。(T10.302a19-21)

次に、菩薩藏法門と無上正等正菩提との関係について見てみたい。『菩薩藏經』「持戒波羅蜜多品」には、次のように説かれる。

【訳】菩薩藏に安住している菩薩は、極貧乏の断ちに達する、すなわち、無上正等正菩提に〔達する〕。

37

tatra khalu bhagavān āyusmantam śāriputram āmantrayate sma (l) tasmāt tarhi śāriputra mahāyānasamprasthitaiḥ kulaputraiḥ kuladuhitṛbhir vṛvā kṣipram anuttarām samyaksaṃbodhim abhisamboddhukāmair ayam eva bodhisattvapiṭako dharmaparyāyaḥ tīvram cchandaṃ saṃjanayya atyartham śrotavya udgrahītavyo dhārayatavyo (6) vācayitavyaḥ paryavāptavyaḥ parebhyo (‘)py ārocayitavyaḥ¹¹⁵ parebhyas ca vistareṇa saṃprakāśayitavyaḥ (l) (中略) ayam śāriputra bodhimārgo yo yaṃ bodhisattvapiṭako dharmaparyāyas (l) tat kasya hetor (l) bodhisattvapiṭake dharmaparyāye anuttarā samyaksaṃbodhir nibaddhā (l) bodhisattvapiṭake ca śāriputra dharmaparyāye bo(8)dhisattvānām dhanam upanikṣiptam (l) athāham śāriputra bodhisattvapiṭake dharmaparyāye śikṣitaḥ samucchadatām anuprāptaḥ (l)

【訳】その時、世尊は続いて長寿の舍利弗に話しかける。「舍利弗よ。それ故に、大乘に出発しており、速やかに無上正等正菩提を証得することを欲する善男子たちあるいは善女子たちによって、正にこの菩薩藏法門が強烈な願樂を生じてから慇懃に聞かれるべきであり、受け容れられるべきであり、記憶されるべきであり、読誦されるべきであり、熟達されるべきであり、他人たちにも説かれ、詳細に解説されるべきである。

(中略) 舍利弗よ。この菩薩藏法門は正に菩提道である。それは何故か。菩薩藏法門中、無上の正等正菩提が結ばれている〔故にである〕。また、舍利弗よ。菩薩藏法門中、菩薩たちの財宝が下されている〔故にである〕。舍利弗よ。それ故、私は菩薩藏法門を学んで完全な断滅性に達している。

このように、菩薩藏は無上菩提を結果とすることがみてとれる。また、『佛說阿闍世王經』には「菩薩藏者。入無央數法。而自然逮成佛。」(T15.398a27-28) と、説かれており、この点は先の理解の傍証となりえよう。つまり、菩薩藏とは、無上正等正菩提に結びつけるもの、すなわち、成仏に至る手段であることがあきらかになる。

第七項、實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』に説かれる菩薩藏の十義

さて、實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』卷第五十七では、菩薩藏とは何かについて十義を述べる¹¹⁶。そこで、今は、その十義とは何か、検討してみたい。まず、当該の文章は次の通りである。

佛子。菩薩摩訶薩。有十種藏。何等爲十。所謂不斷佛種。是菩薩藏。開示佛法無量威德故。增長法種。是菩薩藏。出生智慧廣大光明故。住持僧種。是菩薩藏。令其得入不退法輪故。覺悟正定衆

¹¹⁵ 校訂では、arocayitavyaḥとある。

¹¹⁶ 竺法護(239-316年)訳『度世品經』においても、十義によって、菩薩藏の意味を説く。次の通りである。何謂菩薩藏。(中略)菩薩復有十事藏。何謂爲十。數一切法修精進藏。解知諸法悉無所生。照明奉持諸佛經要。班宣辯才諸法本末。曉了隨時。衆義無量。悉不可獲。普令目見諸佛神足所興變化。而以方便。等御諸法。常見諸佛。未曾違遠。識別義權不可思議諸幻成想。若見諸佛衆菩薩等。欣然大悅。逮致法藏。是爲菩薩十事藏也。(T10.630c25-633a21)

生。是菩薩藏。善隨其時。不逾一念故。究竟成熟不定衆生。是菩薩藏。令因相續。無有間斷故。爲邪定衆生。發起大悲。是菩薩藏。令未來因。悉得成就故。滿佛十力不可壞因。是菩薩藏。具降伏魔軍。無對善根故。最勝無畏大師子吼。是菩薩藏。令一切衆生。皆歡喜故。得佛十八不共法。是菩薩藏。智慧普入一切處故。普了知一切衆生。一切刹。一切法。一切佛。是菩薩藏。於一念中。悉明見故。是爲十。(T10.302a18-b2)

【訳】 仏子よ。菩薩摩訶薩は、十種の蔵を有する。十とは何か。すなわち、①仏種を断じさせないものである。〔この仏種を断じさせないもの〕は菩薩蔵である。仏法の無量威徳を開示する故にである。②法種を増長させるものである。〔この法種を増長させるもの〕は菩薩蔵である。智慧の広大な光明を生じる故にである。③僧種を継続に存在させるものである。〔この僧種を継続に存在させるもの〕は菩薩蔵である。彼ら〔衆生たち〕を不退の法輪に入らせる故にである。④正定〔聚の機類の〕衆生を覚悟させるものである。〔この正定聚の機類の衆生を覚悟させるもの〕は菩薩蔵である。よく彼ら〔衆生たちの適当な〕時に従う、一念〔の間の時間をさえも〕逃させない故にである。⑤最終に不定〔聚の機類の〕衆生を成熟させるものである。〔この最終に不定聚の機類の衆生を成熟させるもの〕は菩薩蔵である。間断なくに因を相続させる故にである。⑥邪定〔聚の機類の〕衆生のために、大悲を起すものである。〔この邪定聚の機類の衆生のために大悲を起すもの〕は菩薩蔵である。未来の因をすべて成就させることができる故にである。⑦仏の十力を円満するための壊すことできない因というものである。〔この因であるもの〕は菩薩蔵である。魔軍を降伏させるかつ対治のない善根〔を持つ〕故にである。⑧最勝かつ無畏な大獅子吼するものである。〔この最勝かつ無畏な大獅子吼するもの〕は菩薩蔵である。一切の衆生をすべてに歓喜させる故にである。⑨十八の不共仏法を得るものである。〔この十八の不共仏法を得るもの〕は菩薩蔵である。智慧は普く一切処に入る故にである。⑩一切衆生・一切国土・一切法・一切仏を普く了知するものである。〔この一切衆生・一切国土・一切法・一切仏を普く了知するもの〕は菩薩蔵である。一念において、すべてを明らかに見る故にである。これらは十である。

ここでは、菩薩蔵とは、まず、既に上述したとおり、三宝を途切れさせないものであることが指摘される。そして、第二に正定聚・不定聚・邪定聚の三類根機の衆生たちを救うものと規定する。第三に、仏の十力を円満する因と規定する。第四に、最勝かつ無畏な大獅子吼するものと規定する。第五に、十八の不共仏法を獲得するものと規定する。最後に、一切衆生・一切国土・一切法・一切仏をすべて了知するものと規定する。以上が、實叉難陀訳『大方廣佛華嚴經』に示される、菩薩蔵の義である。

さて、『瑜伽師地論』卷第四十六中には次のような記述がある。

有八種法能具足攝一切大乘。一者菩薩藏教。二者即於如是菩薩藏中。顯示諸法真實義教。三者即於如是菩薩藏中。顯示一切諸佛菩薩不可思議最勝廣大威力之教。四者…… (T30.548c28-549a3)。

この記述に基づけば、菩薩藏とは、諸法の真実義を示す教えであり、一切諸仏・菩薩の不可思議・最勝・広大な威力を示す教えであることが分かる。

さて、『菩薩藏經』の第三「菩薩觀察品」、第四「如來の不思議品」は、菩薩の優れた徳性と如來の想像できない程の十不思議を説く品であるが、この十不思議は先に挙げた「八種法」中の「三者」と合致する。また、第三「菩薩觀察品」は、「四法印」という諸法の真実義をも詳しく説いている¹¹⁷ので、この第三「菩薩觀察品」は、その「二者」とも一致する。

第八項、小結

以上、本節では菩薩藏とは何かという点について『菩薩藏經』の文言を重視しつつ多角的に検討を行ってきた。得られた結論をまとめれば、次のようになる。

1. 菩薩藏とは、部派仏教の時代乃至早期に訳された大乘經典中、例えば、法藏部あるいは大衆部あるいは鳩摩羅什前後に訳された大乘經典では、十二分教中の一支、例えば、「本生」あるいは「方広」のみを指すものであり、經律論三藏およびその他の諸藏と並列されていたものであった。しかし、時代を経て、經律論の三藏を有するになり、十二分教の「方広」、「希法」、「縁起」、「譬喩」、「本事」、「本生」、「論議」の七支を含むになり、さらに、一切の法あるいは一切經典・仏法を含むに至ったのである¹¹⁸。
2. 菩薩藏とは、主に「声聞藏」（辟支仏藏はその中に含まれている）との対比において、菩薩行（釈尊が成仏前に菩薩である時に行われていた修行）を説く經典群の呼称であり、大乘經典を指すものである¹¹⁹。
3. 菩薩藏は、内容上、六度を主眼とするものである。
4. 菩薩藏は、一切疑を断つために説かれるものである。
5. 菩薩藏は、三宝を途切れさせないものである。
6. 菩薩藏は、一切衆生を救うものであって、一切衆生の利益と安樂の所依処であり、無上無量の大功徳聚の所生処である¹²⁰。

¹¹⁷ sarvabuddhā(3)nām ca bhagavatām bhāṣitasya bhūtārtham anugacchati (||) sarvadharmās tathāgatena abhisamkṣipyā caturbhir dharmmodānair nirksiptāḥ (||) katamais caturbhir (||) yad idaṃ sarvasaṃskārā anityā | sarvasaṃskārā duḥkhā | sarvadharmā anātmānaḥ | śāntaṃ nirvāṇaṃ (||) anityāḥ sarvasaṃskārā iti……. (MS20a2-3)

【訳】彼〔菩薩〕は諸仏・世尊たちの説かれた真実の義に通達する。如來は四つの法の鴈陀南 (udāna) によって一切法を圧縮してまとめた。四つとは何か。すなわち、諸行は無常であり、諸行は苦であり、諸法は無我であり、涅槃は寂靜である。諸行は無常であるとは……

¹¹⁸ 本經である『菩薩藏經』に説かれている菩薩藏は、その一切法を含む菩薩藏である。

¹¹⁹ 平川彰 [1971, pp. 14-15, p. 20] は次のように述べる。

「菩薩藏」は単数の經ではなく、多くの經を集めたものであったのではなからうか。「藏」という言葉はもともとそういう意味である。声聞乗の三藏にたいして、初期の大乘經典が若干作られたとき、それらをまとめて「菩薩藏」と呼んだのではなからうか。そして総名がそのまま別名にも用いられたため、菩薩藏經と言われる經典がいくつか存在することになったのであろう。さらにまた総名の菩薩藏を用いる經典が、ある場合には別名の別の經名でも呼ばれたのではなからうか。阿闍世王經の場合には、そのように考えられる。即ち初期大乘教団において、実際に「菩薩藏」が編集されたと考えたい。

「菩薩藏經が唯一經典でなく、多数の經典の叢書 (藏, Piṭaka) であったという推定を強めるものである。この氏の見解に基づけば、『菩薩藏經』、鳩摩羅什訳『菩薩藏經』、僧伽婆羅訳『菩薩藏經』は、その「菩薩藏」という「総名がそのまま別名にも用いられた」經典であると言えよう。詳細は本稿の序論を参照。

7. 菩薩藏は諸法の真実義を示す教えである。
8. 菩薩藏は、一切諸仏・菩薩の最勝・廣大・不可思議な威力を示す教えである。
9. 菩薩藏は、無上正等正菩提と結ぶもの、仏になるものあるいは如来十力・不共仏法などの仏果を獲得するものである。

このような列举に基づけば、菩薩藏は様々な性質を持つものであることがみてとれる。しかしいずれにせよ、仏道的手段であることには変わりなく、一言にまとめるのであれば、仏を目指す菩薩が所依とするべき教えであると言えよう。

第四節、結び

以上、本章では、『菩薩藏經』という經典名に焦点を当てて幾つかの角度から検討を行った。その結果、次の点が明らかとなった。第一に『菩薩藏經』の梵文原典としての經典名は、*Bodhisattvapiṭaka-sūtrānta* あるいは、*Bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāya*が適切であり、両者ともに「まとめたもの」という意味合いを持つこと、第二に『菩薩藏經』は菩薩藏を説くことを主眼としていること、第三に菩薩藏は様々な性質があるが、まとめれば仏を目指す菩薩が所依とするべき教えといえること、第四に、經典名に「大」や「聖なる」といった形容詞が次第に付加されていき、神聖化していったこと、以上の点が明らかとなった。

¹²⁰ 『大乘阿毘達磨集論』(T31.688a24-26)。

第二章、梵漢藏四本の関係

第一節、四本の品立て

『菩薩藏經』の前十品の品立ては全四本で共通するのであるが、それ以後の品立てが諸本で異なる。玄奘訳は般若波羅蜜多品を第十一とし、大自在天授記品を第十二とし、全十二品とする。一方、法護等訳はそれら両品を勝慧波羅蜜多品とし、全十一品とする。また、梵文写本、藏訳では、第十静慮波羅蜜多品より後に品を立てずとする。表で示すと、以下ようになる。

『菩薩藏經』の四本の品立て				
	玄奘訳	法護等訳	藏訳	梵文写本
第一品	開化長者品第一	長者賢護品第一	ཁྱེ་མ་བདག་གི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (家主品第一)	gṛhapatiparivartto nāma prathamah (家主品第一)
第二品	金毘羅天受記品第二	無怖夜叉品第二	གནོད་ཕྱིན་ཅེ་འཛིགས་ཀྱི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (金毘羅藥叉品第二)	kimbhīrayakṣaparivartto nāma dvītiyah (金毘羅藥叉品第二)
第三品	試験菩薩品第三	菩薩觀察品第三	བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་བརྟག་པ་ ཞེས་བྱ་བའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (菩薩觀察品第三)	bodhisattvapāriṣā nāma tṛtiyah parivarttaḥ (菩薩觀察品第三)
第四品	如來不思議性品第四	如來不思議品第四	དོ་བཞིན་གཤམས་པའི་བསམ་ཀྱིས་ མི་ཁྱབ་པའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (如來不思議品第四)	tathāgatācīmtyaparivarttaś caturthaḥ (如來不思議品第四)
第五品	四無量品第五	慈悲喜捨品第五	བྱམས་པ་དང་། རྗེད་ཇི་དང་། དགའ་བ་དང་། བདེ་སྤྱོད་ཀྱི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (慈悲喜捨品第五)	Maitrīkaruṇāmuditopekṣā parivarttaḥ pañcamah (慈悲喜捨品第五)
第六品	陀那波羅蜜多品第六	布施波羅蜜多品第六	ཕྱིན་པའི་པ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (布施波羅蜜多品第六)	Dānapāramitāparivarttaḥ ṣaṣthaḥ (布施波羅蜜多品第六)
第七品	尸羅波羅蜜多品第七	持戒波羅蜜多品第七	ཚུལ་ཁྲིམས་ཀྱི་པ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (持戒波羅蜜多品第七)	śīlapāramitā parivartto nāma saptamah (持戒波羅蜜多品第七)
第八品	羼底波羅蜜多品第八	忍辱波羅蜜多品第八	བཟོད་པའི་པ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (忍辱波羅蜜多品第八)	kṣāntipāramitā parivarttānām āṣṭamah (忍辱波羅蜜多品第八)
第九品	毘利耶波羅蜜多品第九	精進波羅蜜多品第九	བརྩོན་ལགུས་ཀྱི་པ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (精進波羅蜜多品第九)	vīryapāramitāparivartto nāma navamah (精進波羅蜜多品第九)
第十品	静慮波羅蜜多品第十	禪定波羅蜜多品第十	བསམ་གཏན་ཀྱི་པ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལུ་ཞེས་བྱ་བ། (静慮波羅蜜多品第十)	dhyānapāramitāparivartto nāma daśamah (静慮波羅蜜多品第十)
第十一品	般若波羅蜜多品第十一	勝慧波羅蜜多品第十一	品名なし	品名なし
第十二品	大自在天授記品第十二			

上表から、『菩薩藏經』の四本は品立ての段階で、すでに差異を有することが見て取れよう。

第二節、四本内容上の異同点

第一項、はじめに

『菩薩藏經』四本は大凡の対応が認められる。例えば、第三品の合致箇所から一箇所を挙げると次の通りである。

梵文写本 (MS16b4-5) :

katibhir bhagavan dharmmaiḥ samanyāgatā bodhisattvā mahāsattvā anavadyakāyakarmāṇo bhavanti (|)
anavadyavākkarmāṇaḥ (|) anavadyamanaskarmāṇaḥ (|) paśuddhakāyakarmāṇaḥ (|)
paśuddhavākkarmāṇaḥ (|) paśuddhamanaskarmāṇaḥ (|) acalitakāyakarmāṇaḥ (|) acalitavākkarmāṇaḥ
(|) acalitamanaskarmāṇo bhavanti |

【訳】世尊よ。菩薩摩訶薩たちは何れ程の諸法を備えれば、過失のない身業を持つ者となるのか。過失のない語業を、過失のない意業を、清浄な身業を、清浄な語業を、清浄な意業を、不動なる身業を、不動なる語業を、不動なる意業を持つ者となるのか。

藏訳 (D Kha281b6-7, P Wi308a4-5, H43b4-6) :

བཙུན་པོ་འདུག་ ཆོས་དྲ་དང་ཐུན་ནི། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྒྱལ་གྱི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དག་ལགས། འག་གི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དང་། ཡིད་གྱི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་
དང་། ལུས་གྱི་ལས་ཡོངས་སུ་དག་པ་དང་། འག་གི་ལས་ཡོངས་སུ་དག་པ་དང་། ཡིད་གྱི་ལས་ཡོངས་སུ་དག་པ་དང་། ལུས་གྱི་ལས་མ་གཡོས་པ་དང་། འག་གི་ལས་མ་གཡོས་པ་དང་། ཡིད་གྱི་ལས་མ་གཡོས་པ་
རྒྱལ་གྱི་ལས་ལགས།

玄奘訳(T11.205c24-28):

世尊。菩薩摩訶薩成就幾法。身業無失。語業無失。意業無失。成就幾法。身業清浄。語業清浄。意業清浄。成就幾法。身業不動。語業不動。意業不動。

法護等訳(T11.792b21-23):

世尊。菩薩摩訶薩成就幾法。即得身業無諸過失。語業無諸過失。意業無諸過失。身業清浄語業清浄意業清浄。身業無動語業無動意業無動。

上記では完全な合致が認められる。しかし全体を通して、このように完全に合致するわけではなくて、四本中、相異箇所も存在する。従って、次は、相異箇所から、梵漢蔵四本間の関係について考察したい。

第二項、梵文写本にのみ存在する内容

『菩薩藏經』の全十二品¹²¹中、梵文写本にのみ存在する内容が認められるのは第三「菩薩觀察品」、第五「慈悲喜捨品」、第八「忍辱波羅蜜多品」、第十「静慮波羅蜜多品」、第十二「大自在天授記品」の五品である。それらを一品ずつ紹介したい。

¹²¹ 上の「品立て」の表が示しているように、本經は四本に異なる品立てを有する。しかし、検討の便宜上、本稿では、玄奘訳に従い、十二品の区分を用いる。

まず、「菩薩観察品」では、「katibhir bhagavan dharmmaiḥ samanvāgatā bodhisattvā mahāsattvā …… bhūmibhūmyākramaṇakuśalāś ca bhavanti anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair nāyakabhūtā vināyakabhūtā …… bhavanti (【訳】世尊よ。菩薩摩訶薩たちは何れ程の諸法を備えれば、……地から地に登ることに対する善巧を持つ者となるのか、世間諸法によって汚されたことのない者となるのか、指導者となるのか、調伏者となるのか、……)」という舎利弗が世尊に質問する箇所がある。その中、「anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair (【訳】世間諸法によって汚されたことのない者となるのか)」という内容は梵文写本にのみ存在する。

次に、「忍辱波羅蜜多品」中、菩薩は、破戒し、悪法を持ち、多くの貪瞋痴を持ち、頑固であり、教化し難い衆生たちを利益する具体的な例を挙げる箇所、即ち、修行の最後時、命が尽きた根を持つ菩薩が一口だけ肉を手に入れることができた時に、その自分の命にかかる食物である一口の肉を、飢え渴いた人に乞われた時に、菩薩はその人の樂受のために、一口の肉を乞いて来る人に与えたという話と、その話の直後にある28項の偈文を説く箇所である。その箇所¹²²は次の表で示す。

忍辱波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘 訳	法護等 訳	蔵訳
<p>1、sacec chāriputra kaścīd eva bodhisattvo nuttarāṃ samyaksambodhiṃ samprasthito bhavet (।) tena caika āmiṣālopo grhīto bhaved (।) athāgacchet kaścīd eva puruṣo jighatsitaḥ pipāsitaḥ (।) sa tasyāmiṣālopaṃ yāced (।) evaṃ ca vaded (।) yo mamāmiṣālopaṃ dadāti tasya sarvāṇi pūrvakṛtāni kuśalamūlāni naśyanty (।) utpannaṃ ca buddhasahasraṃ virāga(3)jyati (।) kalpaśatasahasraṃ ca mahāniraye pacyati (।) tatra śāriputra bodhisattvena sa puruṣaḥ sādhu ca suṣṭhu ca paripraṣṭhavyaḥ śrūtāni bhoḥ puruṣa etāny ādīnavasthānāni (।) kācit punas te sukhā vedanā utpatsyate idam āmiṣālopaṃ grhītvā (।) saced vaded utpatsyati mama sukhā vedanā (।) tatra bodhisattvenādīnacittanānavalinacitta(4)vīryeṇa aparitasyanācittanāpratihatācittena vigatamalamātsaryacittena tasya puruṣasya tad āmiṣālopaṃ dātavyaṃ tat kasya hetor (।) mama ca vighāto bhavatu (।) asya ca puruṣasya sukhā vedanā utpadyatu (।) sarvasattvā hi mayā sukhītā kartavyā (।) vāyam¹²³ caiva tāvat saṃmukhasthitaṃ puruṣaṃ sukhitaṃ kariṣyāmaḥ ayam śāriputra(5)bodhisattvānām apramāṇakarūṇo dharmmaḥ śīlārakṣaguptaye saṃvarttate bodhipratilābhāya ca saṃvarttate </p> <p>atha khalu bhagavāms tasyāṃ velāyāṃ imā gāthā abhāṣata (MS83a2-5)</p> <p>1、【訳】舎利弗よ。もし菩薩が無上正等菩提に向かっているとすると、そして彼〔菩薩〕は一つの一口の肉が手に入ったとする、その時、或る飢え渴いた人がやって来て、彼は彼〔菩薩〕に一口の肉を乞いたい、このように言うことでしょう。「私に一口の肉を与える人、その人のすべての前世になした善根は失われる、そして〔その人は世に〕現れた千仏を避けて、百千劫の間、大地獄で苦しめられる。」</p> <p>舎利弗よ。そこで、菩薩はその人に善く適確に訊ねるべきである。</p> <p>「おお！人よ！それらの苦しみに留まることが聞かれた。しかしながら、この一口の肉が手に入れば、あなたには多少の樂受が生じるであろう。」</p> <p>もし〔その人はこのように〕言うならば、「私には樂受が生じてほしい。」</p> <p>そこで、愉快なる心を持ち、懈怠のない心によって精勤を持ち、厭のない心を持ち、障碍のない心を持ち、不浄とケチを離れた心を持つ菩薩によって、その人にその一口の肉が与えられるべきである。それは何故か。自分に苦しみがあれば！この人には樂受があれば！なぜならば、私によってすべての衆生が樂になる</p>	なし	なし	なし

¹²² 表中1の散文sacec……(MS83a2)から29の偈文kṣāntibala upeto maitracittarṣabhāms ca '

karuṇamuditalābhī sarvakleśāṃ apekṣaḥ ||(MS83b4)」までの内容は梵文写本にしか存在しないことが梵文写本の校訂者によって既に指摘されている。

¹²³ 校訂では、iyamとある。

べきであるから。そして、我々 ¹²⁴ こそが直ちに目の前にいる人を楽にすべきである。舍利弗よ。これが菩薩たちの無量悲の法であって、戒の守りに導き、そして、菩提の獲得に導くのである。 その時、世尊は直ちに次の諸偈を説いた。			
2、puribhavagatīṣu pūrvayogo jīnasya abhāni puruṣasimho bhikṣusaṃghasya madhye (MS83a5) 2、【訳】過去の諸々の有難中、勝者には本生がある、 〔彼は〕比丘僧〔団中〕の人中獅子のようなものとして輝いている。	なし	なし	なし
3、yada ṛṣi pariśuddhaś cāribhir gocarāṣī giriḡahananivā(6)ṣī śīlavadbhramacārī (MS83a5-6) 3、【訳】その時に、諸修行によって清浄された仙人は行境にとどまっていて、 山の深い〔ところに〕住んでいて、持戒にて梵行を行っている。	なし	なし	なし
4、tasya kaliśaṭheno mārāpāpīmatena paṃcaśatanārāṇām ukta ākrośanārtham* 4、【訳】彼〔勝者〕には、カリ (kali) の詐偽と魔の悪意とによって、 罵詈雑言のために、五百の人たちによって言われたことがある。	なし	なし	なし
5、te ca sādā abhikṣṇam prṣṭhato syānubaddhā rātridivā ṛṣeṣ te vāg anīṣṭām vacinsu 5、【訳】また、彼ら〔五百の人たち〕は常に間断なしに彼の背後から付き纏う。 彼らは夜と昼に仙人に真逆さまに (avāg) 諸々の不快を感じさせる〔言葉〕 を言う (vacinsu: √Vac, 3pers. pl.)。	なし	なし	なし
6、sthita apī ca niṣaṇṇam caṃkramantaṃ śayānam grāmagatasamānam vīthiye anvaṃānam 6、【訳】立っている間にも、座っている間に〔も〕、経行している間に〔も〕、 眠っている間に〔も〕、 同様に、村落にいる間に〔も〕、街道に行っている間に〔も〕、	なし	なし	なし
7、api ca gṛhagataṃ vai niṣayantaṃ gṛhāto raṇyagata athāpi vācabhāṣī anīṣṭām 7、【訳】家にいる間にも、その家より出ている間に〔も〕、 また、阿蘭若にいる間にも、〔彼らは彼に〕諸々の不快を感じさせる言葉を話 しかける。	なし	なし	なし
8、evam adhiṣṭhi hanto paṃcavarṣaḥ śatāni sadasamitanubaddhās tarjanaṃ bhartsanārtham 8、【訳】このような害されたことが五百年間に続いていた。 罵詈雑言と脅かしをするために、〔彼らは〕常に、相続的に〔彼を〕付き纏って いた。	なし	なし	なし
9、na ca mama khiladoṣo ekacittaṃ pi āsī maitravatā spharitvā sarvalokaṃ carāmi 9、【訳】そうではあるが、私には憎悪の心が一つさえもない。 私は有する慈を一切世間に遍満して修行する。	なし	なし	なし
10、api ca mama abhūṣī cintanā tasmī kālē yebhi prakṛti sattvā mārḍavā sūratās ca 10、【訳】また、その時に、私には〔次の〕考えがあった。 〔それは〕これら〔修行〕によって、衆生たちの本性を柔和と淳良にするので ある。	なし	なし	なし
11、na ca ahu kulaputrā kevalānam ca(8)rāmi ye tu durdamasattvā te tu nirvāpayiṣye 11、【訳】また、私は単なる善男子たち〔のために〕修行するのではなく、 教化し難い衆生たち、まさに〔彼らを〕私は涅槃に導きたい。	なし	なし	なし
12、eva paramasuddhaś cīrṇa kalpā hy anantāḥ jagati hitasukhāya sarvalokasya artham* 12、【訳】そのような最上の清浄行が無量劫間に〔行われた〕、なぜならば、 一切世間の有情に利益と安樂をするためであるから。	なし	なし	なし
13、duḥkhitapraja viditvā rāgadoṣapradīptam mohadavaprayuktā ākulā bhyolīnā 13、【訳】貪と瞋によって燃えられていて、愚痴の焼きによって縛られていて、 困惑して 恐怖の中に沈んでいて苦しんでいる有情を知ってから、	なし	なし	なし

¹²⁴ ここの「我々」は梵文写本中のiyamをvayamの誤写として訳されたのである。

14、sa [++] da saptāhaṃ bhaktacchedakṛte jagaddhitasukhārthaṃ yuktā prayuktebhi ++ 14、【訳】彼は ([++] da) …七日間断食をし、 有情の利益と安楽のために、諸加行によって、勤行し… (++)	なし	なし	なし
15、yuktu bhavi gṛhīto hy āmiśālopaṃātraṃ carima caryana kāle āyu kṣīṇendriyeṇa 15、【訳】修行の最後の時に、命が尽きた根〔感官〕と繋がれた〔勝者〕が一口だけ肉を手に入れた。(MS83a8-84b1) (案：修行の最後の時に、命が尽きた根を持つ〔勝者〕が一口だけ肉を手に入れることができた。)	なし	なし	なし
16、tasya puruṣu kaści kṛcchraprāpto hy upetya eva bhāṇi dadāhī āmiśālopu mahyaṃ 16、【訳】苦しみに陥っている或る人が彼に 近づいて、こう言った。「あなたは私に一口の肉を与えなさい」。	なし	なし	なし
17、yo ca mama dadasyā āmiśālopu kaścit tasya kuśalamūlaṃ sarvu naśyāmy aśeṣaṃ 17、【訳】また、或る人は「私に一口の肉を与えとする者、 その者のすべての善根を私は残さずに滅して、	なし	なし	なし
18、sahasrajina svayambhū so virāgeti sattvo kalpaśatasahasraṃ puruṣa pa(2)cyī hy apāye 18、【訳】「彼という衆生が千の自在者である勝者を避け、 〔彼という〕人が百千劫間に悪道で苦しめられ、	なし	なし	なし
19、sarvaḡaṇavihīṇaḡ svargasaukhyāpanīto duḡkhitu vyasanaprāpto nityu bhotī daridro 19、【訳】「一切の功德が失われ、天上の安楽も失われ、 苦難と災厄に陥り、恒久に貧しくなる」と。	なし	なし	なし
20、tatra sukhadādeno bodhisattvena tasya sa puruṣu vadita [bho śruta ādīnavāni 20、【訳】その時に、安楽を与える菩薩はその人にこう言った。「おお！〔以上 言った〕諸々の損が聞かれた、	なし	なし	なし
21、kim puna tava muhūrtaṃ kalpamātraṃ ca etaṃ bhaviṣyati sukhasaukhyaṃ bhuktvaṃ ālopaṃātraṃ 21、【訳】「あなたはほんの少しの間さえも、これ〔一口の肉〕を〔食べたこと がない〕、一劫程の長い間は言うまでもない。 一口程の〔肉〕を食べて安楽と幸福が生じるであろう」と。	なし	なし	なし
22、saukhya sa vidādeyyā saukhyaprāpto bhaviṣye dadati gadavi(3)ghno bodhisattvo narasya 22、【訳】彼は「私は幸福を手に入れたい、幸福が得られたことができない」と。 言われた損失〔を受けても〕菩薩は〔その〕人に施す。	なし	なし	なし
23、tac ca parityajante cittam utpadyate (‘)sya mama bhavatu dukhu sarva bhotu etasya saukhyaṃ 23、また、それを施して彼〔菩薩〕には発心があった。 「私には苦があれ！こ〔の人〕には一切の幸福があれ！」と。	なし	なし	なし
24、tatha mama imi sattvā mocitavya dukhebhyaḡ paṃcagata pra [+++++ ś]lyeva sattvā 24、【訳】衆生たちは… (pra [++++] 〔毒〕箭の如く五趣にいる、 私にとって、それらの衆生たちが諸苦から解放されるべきである。	なし	なし	なし
25、oghi caturbhi prāptā uhyamānā hy anāthāḡ kṛṣṇapalikha(Edg. Parikha)paṅke śīdayantātmasaṃjñā 25、【訳】〔衆生たちは〕四瀑流によって得られたもの〔の中〕に住んでいて庇 護がない。 暗黒な溝と泥沼のような我現に沈んだ。	なし	なし	なし
26、yo ca utsahi evaṃ bodhisattvo mahātmā jagati hitasu(4)khārthī ātmasaukhye anarthī 26、【訳】また、自分の幸福に求めなく有情に利益と安楽をすることを求める というようなことができ偉大な精神をもつ菩薩、	なし	なし	なし
27、so ca na mucī māraṃ dharṣayitvā sasainyaṃ prāpuṇi varabodhiṃ uttamārtha hy avighnaṃ 27、【訳】彼は従者たちに伴われた魔を降伏しても、〔歩みを〕中止しない、	なし	なし	なし

無上最勝菩提を獲得するために乱されない。			
28、na ca mama khiladoṣo mānu darpaṃ ca īrṣyaṃ bhayada purima + + bodhim eṣa rtham agryāṃ 28、【訳】私には怨恨と高慢と尊大と嫉妬がない、 この最上菩提ために、昔から + + [衆生たちに] 恐怖させること [をしない]。	なし	なし	なし
29、kṣāntibala upeto maitracittarṣabhāms ca karuṇamuditalābhī sarvakleśāṃ apekṣaḥ (MS83b4) 29、【訳】忍辱力は諸慈心の宮殿に入るものであり、 悲と喜を得るものであり、一切の煩悩を観察するものである。	なし	なし	なし

次に、「慈悲喜捨品」では、梵文写本にのみ存在する内容は二箇所がある。一つは慈 (maitrī) について説く内容中の一箇所であり、さらに一つは捨 (upekṣā) について説く内容中の一箇所である。それを以下の表で示す。

慈悲喜捨品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏訳
nirāmiṣaṇyaśaṃbhāropacitā (I) (MS55a1) （【訳】[慈は] 肉欲がなく、福德の集積によって積み重ねたものである。）	なし	なし	なし
śuśrūṣuṣv aśuśrūṣuṣv anadhivāsanatā (I) (MS57b1-2) （【訳】[捨は] 聞こうと欲しいことと聞こうと欲しくないことに対して執着しないのである。）	なし	なし	なし

次に、「静慮波羅蜜多品」では、菩薩の神通とは何か、智慧とは何かが説かれている内容中、直前の内容を重複した箇所がある。その箇所の内容は梵文写本にのみ存在する¹²⁵。その内容は以下の表で示す。

静慮波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏訳
yad rūpābhaṣeṣu kṣayadharmatayā jñānaṃ na ca sāṅskārikriyā idam ucyate te jñānaṃ punar aparaṃ śāriputra yat sarvaśabdābhaṣaṃ śṛṇoti(6)yam ucyate bhijñā (I) (MS112a5-6) （【訳】諸色の顕示において、滅の本質を了知しても現証しないこと、これが智慧と呼ばれる。その他、舍利弗よ。一切声の顕示を聞くこと、これが神通と呼ばれる。）	なし	なし	なし

最後に、「大自在天授記品」の最後に、即ち、本経の最後ろに帰敬文がある。その帰敬文の内容が梵文写本にしか存在しない。その内容は以下の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏訳
namaḥ sarvajñāya namo bhagavate vītarāgāya namaḥ sarvaśāśvadbodhisatvāḥ (MS142a1) （【訳】一切智のために、帰命する。離欲者である世尊のために、帰命する。一切仏・菩薩 [...のために]、帰命する。）	なし	なし	なし

¹²⁵ 梵文写本では、その直前の内容を重複した箇所は法護等訳に存在しないことは指摘された。

第三項、前四品、第十一品、第十二品における異同

		梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳	件数
第一品	表 1	×	○	○	○	3
	表 2	×	○	×	×	1
	表 3	○	○	×	○	3
第二品	表 4	×	○	○	○	1
第三品	表 5	○	×	×	×	1
第四品	表 6	○	○	×	○	7
	表 7	×	○	×	×	3
	表 8	×	○	○	○	9
第十一品	表9	×	○	○	○	4
	表10	×	○	×	×	9
	表11	○	○	×	○	3
第十二品	表12	×	○	○	○	1
	表13	×	○	×	×	4
	表14	○	○	×	○	12

家主品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏訳
	何等爲十。一者奪命。二者不與取。三者邪婬。四者妄語。五者離間語。六者僞語。七者綺語。八者貪著。九者瞋恚。十者邪見。長者。(我見衆生)由是十種不善業故。(T11.197b12-16)	何等爲十。一者殺生。二者偷盜。三者邪染。四者妄言。五者綺語。六者兩舌。七者惡口。八者貪。九者瞋。十者邪見。如是十種不善業道。(T11.783c1-4)	བཅུ་གང་ནིན་འདི་རྩ་གྲོ་མིག་གཅིད་པ་དང་། མ་ཁྱིན་པར་ལེན་པ་དང་། འདོད་པལ་ལྟག་པར་གཞུམ་པ་དང་། བརྟན་ཏུ་སྒྲུབ་དང་ཁ་ཐེར་པ་དང་། འག་རྒྱལ་པོ་དང་། ཚིག་གྲུ་པ་དང་། ལུན་པ་ལེན་པ་དང་། གནོད་ལེན་པ་དང་། ལྟག་པར་རྩ་བ་དང་བརྟན་ཏུ་ཁྱིན་པ་དང་། མི་དག་པ་བཅུད་ལས་གྲོ་ལས་རྩམས་གྲིས་ (D Kha257b6-7, P Wi286b7-287a1, H10b7-11a2)

49

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

次に、表 2 の系統を示す。当該箇所は、世尊によって老死 (jarāmaraṇa) から無明 (avidyā) までという順序で十二因縁が説かれている箇所である。その中、有 (bhava) の説示において玄奘訳にのみ、「福及非福不動業等」に言及する記述が存在する。表で示すと、次の表ようになる。

家主品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
bhava iti kim* yad idaṃ kāmabhavo rūpabhavaḥ ārūpyabhavaś ca ayam ucyate bhavaḥ (MS8b4) (【訳】有とは何か。すなわち、欲〔界〕の有であり、色〔界〕の有であり、無色〔界〕の有である。これが有と呼ばれる。)	云何爲有。所謂欲有色有。及無色有。福及非福不動業等。是名爲有。 (T11.199c29-200a2)	何名爲有。謂欲有色有無色有。此名有。 (T11.786a26-27)	དཔལ་ཞེས་བྱ་བ་ཤར་ཞིན། འདི་ལྟ་སྒྲི། འདི་དྭ་པའི་མིང་པ་དང་། གཞུགས་ཀྱི་མིང་པ་དང་། གཞུགས་མེད་པའི་མིང་པ་སྒྲི། དེ་ནི། མིང་པ་ཞེས་བྱ་ཞི། (D Kha267b3, P Dsi293a5-6, H21a1-2)

次に、表 3 の系統を例示する。当該箇所は、世尊が出離を求める者たちに対して、「解脱するためには、いかなる法にも執着してはいけない」と説示する箇所の一つである。当該箇所は長文であるにも関わらず、法護等訳にのみ存在しない。次の表で示す。

家主品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
tatra gr̥hapatayaś cakṣur na parinirvṛtaṃ peyālaṃ yāvac chrotraṃ ghr̥ṇaṃ jīhvā kāyo mano na parinirvṛtaṃ yāvad vijñānadhātur na parinirvṛtaḥ api tu gr̥hapatayo yo vijñānaṃ prafītyābhūtagrāhaḥ aham iti vā mameti vā tasya vigamaḥ parinirvānaṃ (I) kasya vigamaḥ parinirvānaṃ (I) rāgasya vigamaḥ parinirvānaṃ (I) dveṣasya vigamaḥ parinirvānaṃ (I) (2)mohasya vigamaḥ parinirvānaṃ ajñānasya vigamaḥ parinirvānaṃ tat punar gr̥hapatayaḥ ajñānaṃ nātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ vigataṃ (I) api tv ajñānaṃ vigataṃ jñānaṃ utpannaṃ tatra gr̥hapatayaḥ katamaj jñānaṃ (I) yad idaṃ kṣayaājñānaṃ tatra katamat kṣayaājñānaṃ (I) atītaṃ na kṣayaājñānaṃ anāgataṃ na kṣayaājñānaṃ pratyutpannaṃ na kṣaya(3)jñānaṃ (I) api tu gr̥hapatayaḥ yat prafītyājñānaṃ vigataṃ jñānaṃ utpannaṃ tasyājñānasya vigamāt* (I) vijñānaṃ ¹²⁹ prafītyājñānaṃ vigataṃ jñānaṃ utpannaṃ (I) vijñānadhātuś ¹³⁰ ca na mama (I) yo na mama sa na parigr̥hītaḥ (I) yo na parigr̥hītaḥ sa utsṛṣṭaḥ(I) ya utsṛṣṭaḥ sa muktaḥ (I) kuto muktaḥ (I) ātmagrāhān muktaḥ (I) sattvagrāhāt jīvagrāhāt pudgalagrāhād uccheda(4)grāhāc chāśvatagrāhān muktaḥ (I) parikalpān muktaḥ (I) sa na parikalpayati aparikalpayan na kalpayati na vikalpayati (I) kin na kalpayati (I) aham iti na kalpayati (I) mameti na kalpayati (I) sa apacinoti nopacinoti utsṛjati nopādādāti (I) utsargāt parinirvṛtaḥ mukto niḥṣṛtaḥ vipramukto viśamyuktaḥ(I) kuto niḥ(5)sṛtaḥ (I) sarvaduḥkhebyo niḥṣṛtaḥ (I) niḥsaraṇārthikair yuṣmābhir	復次諸長者。眼非寂滅。耳鼻舌身意亦非寂滅。色非寂滅。乃至識界亦非寂滅。然諸長者。因於識界起不實執。或計爲我及以我所。若離於此即是寂滅。遠離何等而得寂滅。謂遠離貪而得寂滅。離瞋離癡及以無智而得寂滅。復次諸長者。過去無智不可遠離。未來無智不可遠離。現在無智不可遠離。然離無智而得智生。諸長者。何等爲智。所謂盡智。何等		དཔལ་ཞེས་བྱ་བ་དང་གཞུགས་མེད་ཀྱི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་མ་ཡིན་ནོ། །ཞོང་མ་བཞིན་དུ་ཐུང་ཏི་ན་པ་དང་། ལྷ་དང་། རྩི་དང་། ལྷ་ལ་ཡིན་པའི་མིང་པ་ཞེས་བྱ་བ་ར་ཤེས་པའི་ཁམས་ཀྱི་བར་དུ་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་མ་ཡིན་མོད་དཀྱིལ་ཞེས་བྱ་བ་ལ་བརྟེན་ཏིང་དང་དཔེ་ཞེས་ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ར་འཛིན་པ་དེ་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་ཡོད། །གང་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་ཡིན་ཞེས། འདི་དྭ་ཆགས་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་ཡོད། །ཞེས་པ་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་ཡོད། །གཉིས་ཀྱི་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་ཡོད། །མི་ཤེས་པ་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་སྒྲི། ཡང་ཁྱིམ་བདག་རྩམས། མི་ཤེས་པ་ནི། འདས་པ་དང་། དྭ་རྩེ་དང་། མ་འོངས་པ་ལ་མེད་པར་ཐུང་པ་མ་ཡིན་མོད་དཀྱིལ་ཞེས་བྱ་བ་དང་བྱམ་བ་ནི་ཡོངས་སུ་ཐུང་ན་ལས་འདས་པ་སྒྲི། ཁྱིམ་བདག་རྩམས། དཔལ་ཞེས་བྱ་བ་

¹²⁹ 校訂では、jñānaṃとある。玄奘訳では、「識」とある。蔵訳では、「ཀླུ་ལ་(眼に)」とある。
¹³⁰ 校訂では、jñānadhātuśとある。玄奘訳では、「識界」とある。蔵訳では、梵文写本と一致で「ཤེས་པའི་དབྱིངས་(智界)」とある。

<p>gr̥hapatayo na kaścīd dharma upādātavyaḥ (।) tat kasya hetor (।) upādānato hi gr̥hapatayo bhavo bhavati nānupādānataḥ (MS11a8-b5)</p> <p>【訳】家主たちよ。その中、眼は寂滅に達さない。略言すれば、乃至、耳も鼻も舌も身も意も寂滅に達さない。乃至、識界は寂滅に達さない。されど、家主たちよ。識に縁って我あるいは我所という虚妄な執着が生じるので、それ【識】を離れてから寂滅に達する。何かを離れてから寂滅に達するの。貪欲を離れてから寂滅に達する。嗔恚を離れてから寂滅に達する。愚痴を離れてから寂滅に達する。無智を離れてから寂滅に達する。その故に、また、家主たちよ。無智とは過去をも、未来をも、現在をも離れたことがないという。されど、無智を離れたことは〔すなわち〕智が生じることである。家主たちよ。その中、智とは何か。すなわち、尽智である。その中、尽智とは何か。尽智とは〔すなわち〕過去がないという、尽智とは〔すなわち〕未来がないという、尽智とは〔すなわち〕現在がないという。(tatra katarat kṣayajñānam atītaṃ na kṣayajñānam anāgataṃ na kṣayajñānam pratyutpannam na kṣayajñānam) されど、家主たちよ。無智を離れたことに縁って智が生じる、それは無智を離れてから智が生じるという。識 (vijñāna) は無智を離れたことによって智が生じる。そして、識界 (vijñānadhātu) は我所がない。我所がないである者、彼は取らないである。取らないである者、彼は捨てをする。捨てをする者、彼は解脱になる。何かから解脱になるのか、我に対する執着から解脱になる、衆生に対する執着から解脱になる、命に対する執着から解脱になる、補特伽羅に対する執着から解脱になる、断に対する執着から解脱になる、常に対する執着から解脱になる、分別から解脱になる。彼は分別しない。分別をしなかったの、分別することもない、分別しないこともない。何かを分別しないか。我というのを分別しない、我所というのを分別しない。彼は〔我と我所を〕減少したり、増加しなくしたり、捨てたり、取らなくしたりとする。捨てから、寂滅に達する、解脱になる、出離になる、救われたことになる、分離されたことになる。何かから出離になるのか、一切苦から出離になる。家主たちよ。出離を希求するあなたたちは、決して一つの法をさえも取らないべきである。それは何故か。家主たちよ。取から有 (bhava) が生じ、無取から〔有が生じ〕ないから。)</p>	<p>盡智。過去非盡智。未來非盡智。現在非盡智。然諸長者。因離無智而智得生。此智不遠離智。因離識無智故而智得生。而此識界非是我所。若非我所則不取著。若不取著即是最上。若是最上是即解脱。何處解脱。於我執所而得解脱。有情壽命乃至於一切分別執所。而得解脱。行者若能於執解脱則不分別。若不分別。則非分別非不分別。何等不分別。謂不分別我及我所。行者爾時離散不積。捨而不取。捨故寂滅。解脱除遣。最勝解脱。離諸繫縛。於何除遣。一切苦處而得除遣。汝諸長者。若求出離。勿於一法而生取著。何以故。若有取著則有怖畏。若無著者則無怖畏。(T11.201c7-27)</p>	<p>གང་ཞིན། འདི་ལྟ་བུ་མཐད་པ་ ཤེས་པ་ལོ། དེ་ལ་ཟད་པ་ཤེས་པ་ གང་ཞིན། ཟད་པ་ཤེས་པ་ནི། འདས་པ་མ་ཡིན། ཟད་པ་ཤེས་པ་ནི། མ་འོངས་པ་མ་ཡིན། ཟད་པ་ཤེས་པ་ ནི། ད་ལྟར་བྱུང་པ་མ་ཡིན་མོད་གྱི། ཁྱེས་པ་དང་ལྷན་ཁུགས་ལ་བརྟན་ཏེ་ མི་ཤེས་པ་དང་བླ་མ་ནས་ཤེས་པ་སྐྱེ་ ས་པར་གྱུར་པ་དེ་ནི། མི་ཤེས་པ་ དང་བླ་མ་པའི་ཤེས་པ་ལོ། མེག་ལ་བརྟན་ཏེ་མི་ཤེས་པ་དང་བླ་ མ་ནས་ཤེས་པ་སྐྱེས་ཀྱང་ཤེས་པའི་ དབྱིངས་ནི། ང་ཡི་བ་མ་ཡིན་ནོ། གང་ང་ཡི་བ་མ་ཡིན་པ་དེ་ཡོངས་སུ་ མ་བཟུང་བའོ། གང་ཡོངས་སུ་ མ་བཟུང་པ་དེ་ལྷངས་བའོ། གང་ལྷངས་པ་དེ་ལྟེན་བའོ། གང་ལས་ལྟེན་ཞིན་པ་དང་གཏུ་འཛིན་ པ་ལས་ལྟེན་མཉམས་ཅན་དུ་ འཛིན་པ་དང་། ལྟེན་ཏུ་འཛིན་ པ་དང་། གང་ཟག་ཏུ་འཛིན་པ་དང་། ཆད་པར་འཛིན་པ་དང་། ཉག་པར་ འཛིན་པ་ལས་ལྟེན་ཡོངས་སུ་ རྟོག་པ་ལས་ལྟེན་དེ་ཡོངས་སུ་མི་ རྟོག་གོ། ཡོངས་སུ་མི་རྟོག་པས་ མི་རྟོག་ནམ་པར་མི་རྟོག་གོ། ཅི་ལ་མི་རྟོག་ཅི་ན། བཞེས་མི་ རྟོག་ངའི་ཞེས་མི་རྟོག་གླེང་མི་ གསལ་གྱི་ཅིང་གསལ་ཅེས། ར་ མེད་དོ། ལེན་པ་མེད་ཅིང་ལྷངས་ པས་ཡོངས་སུ་སྤྱང་ན་ལས་འདས་ སོ། ལྟེན་ལོ། ལྱུང་ངོ། ར་བ་ཏུ་ན་ མ་པར་ལྟེན་ལོ། ལྟེན་ལོ། གང་ནས་ བྱུང་ཞིན་ལྟེན་བསྐྱེད་ཆམས་ཅན་ལ་ ས་བྱུང་ངོ། ཁྱེས་པ་དང་གཏུ་ རྟོགས་འབྱུང་བར་འདོད་ན། ཆོས་གང་ཡང་རྒྱང་བར་མི་བྱའོ། དེ་ཅིའི་ཕྱིར་ཞིན་ཁྱེས་པ་དང་གཏུ་ རྟོགས་ལེན་པས་ནི་ཁྱིད་པར་འགྱུར་ གྱི་མི་ལེན་པས་ནི། མ་ཡིན་ནོ། (D Kha272a5-b6, P Dsi298b1-299a3 , H29a4-30a3)</p>
---	--	--

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

第二「金毘羅菓叉品」の異同は表4に挙げた一系統のみである。ここでは、それは仏陀になると発心したシャーイラという名前の金毘羅の息子が世尊の授記を聞いてから、世尊のこれから鷲峯 (grddhrakūṭa) に行くことを知ってから、その世尊の鷲峯に行く道を種々の掃除と飾りを行おうと思っているという文脈の中にある「今私は如来のところで少し善根を植えべきである」という箇所である。この箇所は梵文写本にないが、他の三本にはある。次の表でその異同内容を示す。

金毘羅菓叉品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	我當復應於如來所殖少善根。(T11.204b26)	我今宜應於世尊所少植善根。(T11.791a12-13)	བདག་གིས་བཅོམ་ཞུན་འདས་ལ་དག་བའི་རྩ་བ་བྱ་ཆེན་པོ་ཞིག་བསྐྱེད་དོ། (D Kha278b2-3, P Dsi304b7, H38b5-6)

第三「菩薩觀察品」の異同も表5の一系統のみである。その内容は次の表で示す。

菩薩觀察品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
anupalīptās ca bhavanti lokadharmair (I) (MS16b5) 【訳】世間諸法によって汚されたことのない者となるのか。			

第四「如来の不思議品」の異同は凡そ三系統に分類できる。次はそれぞれを一例ずつ紹介する。

まず、表6の系統を例示したい。当該箇所は、如来の智が不思議であると説かれている文脈で、十方の世界の水の中に、一切塵を作っても、勝者に示されば、勝者はそれらすべての塵を知るという喩えを作る偈文の箇所である。しかし、その偈文は法護等訳にのみ存在しない。その例示する内容は次の表で示す。

如来の不思議品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
eva daśaḍiśāsū lokadhātūṣu pāṇsu (I) sarvu raju karitvā darśayeyyā jīnasya (I) sarvu tada gaṇeyyā nāsti kāmṣān asaṃgo (I) eḍṣu sugatānāṃ jñāna ākāśatulyo (MS 24a4-5)(偈文) (【訳】 そのように十方の世界の水の中に、 一切塵を作って勝者に示す、 その一切〔塵〕は〔勝者にとって〕計算できる ものとなり、無疑惑なものとなり、無障礙なも のとなる。 諸善逝の此の如きの智は虚空と等しいであ る。)	如是十方界 塵水示如来 佛智等虚空 遍曉無疑滯 (T11.211b10- 11)		འདི་ལྟར་ཐུགས་བསམ་དག་གི་འཛིན་ཏུན་ལམས་ཀྱི་རྒྱལ་ ཐམས་ཅད་རྒྱལ་དུ་བྱས་ནས་ཐུལ་བ་ནམས་ལྟོན་ནི། དེ་དག་ཐམས་ཅད་བསམ་ཡང་ཆགས་མེད་ཐེ་ཚོས་མེད། དེ་ལྟར་བདེ་བར་གཤེགས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ནས་མཁའ་བཞིན། (D Kha294a5-6, P Dsi3214-5, H63a6-7)

また、それと同傾向の異同が他に六例は存在する。

次に、表7の系統を例示したい。ここは、如来の第五の如来力である根の力と精進の差別を知る力によって衆生に衆生の根にふさわしい法を演説する文脈で、如来の種々の根智は虚空の如く不可思議であり、無辺無際であって、人が如来の根智の辺際を求めることは即ち虚空の辺際を求めることであるという箇所である。その内容が玄奘訳にのみ存在する。以下の表で示す。

如来の不思議品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	舍利子。如来種種根智。不可思議無邊無際與虚空等。若有欲求如来諸根智力邊際者。不異有人求虚空際。諸菩薩摩訶薩聞是根力如虚空已。信受諦奉清淨無疑。倍復踊躍深生歡喜發希奇想。(T11.219b11-15)		

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

次に、表8の系統を例示する。当該箇所は、如来の十力の中の如来の第七力即ち如来の静慮と解脱と三摩地と三摩鉢地の雑染と清浄の生起を知る力が説かれる文脈で、衆生たちの雑染を生じる因とは何か、縁とは何かに対する答えの中にある「一切衆生の雑染の因は不如理な作意であり、一切衆生の雑染の縁は無明である」という箇所である。その内容は梵文写本にのみ存在しない。例示の内容は以下の表で示す。

如来の不思議品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	舍利子。由不稱理作意爲因無明爲縁。令諸有情發起雜染。 (T11.220b23-24)	謂即一切衆生諸雜染中。不如理作意是因。無明是縁。 (T11.807a21-22)	ལམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཀུན་ནས་ཉན་མངས་པའི་བྱ་ནི། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པའོ། ལམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཀུན་ནས་ཉན་མངས་པའི་བྱ་ནི། མ་ཤིག་པའོ། ། (D Kha23a5-6, P Dsi26a1-2, H98a3-4)

また、それと同傾向の異同が他に八例は存在する。

第十一「般若波羅蜜多品」の異同も凡そ三系統に分類できる。ここでもそれぞれを一例ずつ紹介したい。

次に、表9の系統を例示したい。ここは、般若が一切有為法と共に住まないと言われている文脈で、般若は業障と、煩惱法障と、見障と、報障と、智障と、相続的な習気とは共に住まないという箇所である。しかし、その内容が、梵文写本のみ存在しない。表で示すと、次のようになる。

般若波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	如是般若不與業障同止。不與煩惱障法障見障報障智障同止。乃至不與一切隨俗習氣而共同止。(T11.299 b10-12)	悉不共住。又於業障煩惱障法障見障報障智障。乃至一切相續習氣。悉不共住(T11.871b14-15)	ལས་ཀྱི་བློའ་པ་དང་། ཉན་མངས་པའི་བློའ་པ་དང་། ཚས་ཀྱི་བློའ་པ་དང་། ལྷ་བའི་བློའ་པ་དང་། ལྷ་མ་པར་བློན་པའི་བློའ་པ་དང་། མི་ཤིས་པའི་བློའ་པ་ནས་བཞག་ཀྱི་མཚམས་སྦྱར་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་བར་དང་ལྷན་ཅིག་དུ་མི་གནས། (D Ga164b6-7, P Wi186b5-6, H316a2-3)

また、それと同傾向の異同が他に三例は存在する。

次に、表10の系統を以下の表で例示する。ここは、義を依所とし、文を依所としない、智を依所とし、識を依所としない、了義の経を依所とし、不了義の経を依所としない、法性を依所とし、補特伽羅を依所としないという菩薩の四つの依所に対する善巧が説かれている文脈で、なぜ菩薩摩訶薩が智を依所とし、識を依所としないのか説かれている箇所である。しかし、その内容は玄奘訳にのみ存在する。表で示すと、次のようである。

般若波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	復次舍利子。云何菩薩摩訶薩。依趣於智不依趣識。舍利子。菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多故。善巧了知諸有言教數取趣義。是名爲識此不應依。諸有言教如法性義。即是於智此應依趣。 (T11.304a6-10)		

また、それと同傾向の異同が他に八例は存在する。

次に、表11の系統を表で例示したいと思う。当該箇所は、本品の品末の偈文で後ろからの第二番目の偈文中の「そして常に怠惰しない」という箇所である。その内容は法護等訳にのみ存在しない。以下の表で示す。

般若波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
ca sadā bhoti atandrito (MS133b7) (【訳】そして常に怠惰がなくなる)	於彼惛沈常遠離 (T11.315c13)		རྟུ་བྱ་གཞུག་པ་མེད་པ་དང་། (D Ga191a1, P Wi186b5-6, H358b3)

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

第十二「大自在天授記品」の異同は凡そ三系統に分類できる。ここでもそれぞれを一例ずつ紹介したい。

まず、表12の系統を示したい。ここは、放光 (dīpaṃkara) 如来を供養するために、雲(megha)という名前の少年が七本の青蓮華を持つ少女から蓮華を買おうとした時、彼女に自分が昔に如来に布施したことを話す文脈で、玄奘訳の「内宮妃后」と相当内容である箇所である。しかし、その内容が梵文写本にのみ存在しない。以下の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	内宮妃后(T11.318b18)	嫫女(T11.883a29)	ལྷ་མོ་ (D Ga197a7, P Wi224a8, H368a2)

また、それと同傾向の異同が他に存在しない。

次に、表13の系統を例示したい。当該箇所は、雲という名前の少年は七つの蓮華を持つ少女から蓮華を買ってから放光如来に散華して供養する時に、百の天子たちも虚空から天上の諸々の蓮華と諸々の天上の旃檀香 (candana) によって放光如来に散華して供養する文脈で、玄奘訳の「拘賈陀花奔荼利花」と相当内容である箇所である。しかし、その内容は玄奘訳にのみ存在する。次の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
	拘賈陀花奔荼利花(T11.318c17)		

また、それと同傾向の異同は他に三例が存在する。

最後に、表14の系統を例示したいと思う。ここは、ナラダッタ (Naradatta) という名前の長者の息子が世尊の前から菩薩藏法門、諸仏と諸菩薩の功德を聞いてから、偈文で自分の発心を述べる文脈で、「そして、小く劣った乗である声聞乗を放棄してから、

如来よ。あなた様のように私はそのようになりたい」という内容を説く一偈の箇所である。しかし、この一偈は法護訳にのみ存在しない。以下の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
śrāvakayānaṃ ca varjitvā hīnaṃ yānaṃ kaṇīyasaṃ bhaviṣye īdṛśaś caiva yādṛśo si tathāgata (MS139b1) 【訳】そして、小さく劣った乗である声聞乗を放棄してから、 如来よ。あなた様のように私はそのようになりたい	遠彼聲聞乗 兼濟下乗者 願我於來世 如今日世尊 (T11.320a1 2-13)		ཐུག་པ་ཐུང་ཅུ་ཐུག་པ་དམན། ། ཉན་ཐོས་ཐུག་པ་ཐུང་ཅུ་ཐུག་པ་དམན། ། དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐོད་ཅི་འད། ། དེ་འདྲ་ཁོ་ན་ལྟར་པར་ཤོག། (D Ga201a1, P Wi228b5, H373b4)

また、それと同傾向の異同が他に十一例は存在する。

以上の14項の表から検討した結果、次の四点が明らかとなる。1) 梵文本、玄奘訳、法護等訳、蔵訳の四本はそれぞれ完全に一致せず、別本である。2) 今回の六品に関しては、法護等訳にのみ存在する、蔵訳にのみ存在するという異同はない。3) 一方、玄奘訳にのみ存在するという異同が複数存在する。4) 梵文本にのみ存在するという異同は一件しかない。

以上の四点を踏まえれば、四本中、少なくとも法護等訳と蔵訳は近い系統に属すると言えるであろう。梵文本も法護等訳と蔵訳の二本に近い系統に属するものであると考えられる。

また、梵文写本、法護等訳、蔵訳の三本は近い系統に属するものであることが、玄奘訳「般若波羅蜜多品」相当箇所における道善巧の順序と、玄奘訳「大自在天授記品」相当箇所における四摂法中の布施内容に対する検討からも分かる。

第四項、玄奘訳のみ異なるケースについて

玄奘訳のみ大いに異なる箇所が二箇所存在する。それは、「般若波羅蜜多品」中の道善巧の説示順序と、「大自在天授記品」の四摂法中の布施の内容である。

まず、玄奘訳「般若波羅蜜多品」の道善巧について見てみたい。ここでは諸法を列挙する順序に異なりが認められる。図示すれば次の通りである。

			道善巧の説示順序
梵文写本	法護訳	蔵訳	玄奘訳
1 四念処 MS126a7-128b5	1 四念処 T11.875c28-877b19	1 四念処 D Ga176b7-181a4, P Wi200b8-205b5, H335a5-342a3	1 四念処 T11.307b4-309c4
2 七覚支 MS128b5-129a5	2 七覚支 T11.877b-877c18	2 七覚支 D Ga 181a4-182a4, P Wi205b5-207a1, H342a3-343b5	2 四正勝（勤/断） T11.309c13-310b16
3 八正道 MS129a5-b5	3 八正道 T11.877c18-878a15	3 八正道 P Wi 207a1-208a4, D Ga182a4-183a5, H343b5-345a7	3 五根 T11.310b17-c22
4奢摩他・毘鉢舍那 MS129b5-130a4	4奢摩他・毘鉢舍那 T11.878a15-b10	4奢摩他・毘鉢舍那 D Ga183a5-184a3, P Wi208a4-209a4, H345a7-346b4	4 五力 T11.310c23-311b10
5 四正勤（断） MS130a4-b6	5 四正願（勤/断） T11.878b10-c15	5四正勤（断） D Ga184a3-185a6, P Wi209a4-210b2, H346b4-348b4	5 七覚支 T11.311b11-311c29
6 五根 MS130b6-131a6	6 五根 T11.878c16-879a7	6 五根 D Ga185a6-185b7, P Wi210b2-211a5, H348b4-349b3	6 八正道 T11.312a1-312b26
7 五力 MS131a6-b2	7 五力 T11.879a7-b5	7 五力 D Ga185b7-186b5, P Wi211a5-212a4, H349b3-351a1	7 奢摩他・毘鉢舍那 T11.312b27-313a9
8合一の道 （ekāyana mārga） MS131b2-5	8一聖道 T11.879b16-29	8 菩薩達の道 （ <i>ཐུང་རྒྱལ་ལོ་མཉམས་དཔལ་འཛུམས་ཀྱི་ལམ་</i> ） D Ga186b5-187a5, P Wi212a4-b4, H351a1-b5	8 一趣道 T11. 313a9-b5

このように玄奘訳のみ、顕著に異なる。また、この点については後に節を立てて検討を行うため、今は異なることを指摘するにとどめ、内容の検討については後節¹³¹を参照されたい。

次に、玄奘訳「大自在天授記品」の相違箇所を見てみたい。ここでは、布施、愛語、利行、同事という四摂法が説かれるが、その中の布施に差異が認められる。梵文写本、法護等訳と蔵訳では財施と無畏施と法施という三つの布施が説かれている。玄奘訳では財施と法施という二つの布施しか説かれていない。次の表で示す。

四摂法中の布施			
梵文写本	法護等訳	蔵訳	玄奘訳
tatra katamad dānaṃ yad idam āmiśadānaṃ (財施) abhayadānaṃ (無畏 施) dharmadānaṃ (法施) idam ucyate dānaṃ (MS134a1) 【訳】その中、布施とは何か。すな わち、財の布施と無畏の布施と法の布 施である。これが布施と呼ばれる。）	云何布施。謂財施法 施及無畏施。 (T11.881a28-29)	དད་ལ་བྱིན་པ་གང་ཞིན།འདི་ན་གྱི། ཐང་ཞིང་བྱིན་པ་དང་། (財 施) མི་འཇིགས་པ་བྱིན་པ་དང་། (無畏施) ཚད་བྱིན་པ་གྱི། (法施) དེ་ནི། བྱིན་པ་ལོ། < D Ga191b4, P Wi217b4-5, H 358b7-359a1>	云何名爲如是攝法。 童子 所言施者具有 二種。一者財施。二 者法施。是爲布施。 (T11.316a7-8)

¹³¹ 第四章第五節第二項『『菩薩藏經』玄奘訳「道善巧」相当箇所の不備』。

以上、道善巧の順序と四摂法中の布施から、玄奘訳が使った梵文原本は、ポタラ宮に保存されている梵文写本、法護等訳、蔵訳の三者とはかなり遠い関係にあることが分かる。また、玄奘訳「大自在天授記品」の相当箇所における四摂法について、四本の中、説かれている布施の数から見れば、玄奘訳が使った梵文原本は、ポタラ宮に保存されている梵文写本、法護等訳が使った梵文原本、蔵訳本が使った梵文原本より古層に属するものではないかとも考えられる。

第五項、「慈悲喜捨品」の末尾における六波羅蜜多に対する列举

また、本経の「慈悲喜捨品」の末尾に、慈悲喜捨を既に詳細に開示したが、次は六波羅蜜多を詳細に開示するという文脈がある。その中、六波羅蜜多に対する列举がある。その列举の内容は梵文写本と法護等訳にのみ存在し、他の二本には存在しない。それを次の表で示す。

「慈悲喜捨品」における六波羅蜜多に対する列举			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
katamāḥ ṣaṭ* (i) tadyathā dānapāramitā śīlapāramitā kṣāntipāramitā vīryapāramitā dhyānapāramitā prajñāpāramitā (i) imāḥ ṣaṭ pāramitāḥ soddeśaṃ sanirdeśaṃ vistareṇa samprakāśayati (i) (MS58al-2) 【訳】六とは何であろうか。すなわち、布施波羅蜜多であり、持戒波羅蜜多であり、忍辱波羅蜜多であり、精進波羅蜜多であり、禪定波羅蜜多であり、智慧波羅蜜多である。これらの六波羅蜜多を陳述と解説で詳細に開示する。)		何等爲六。所謂 布施波羅蜜多。 持戒波羅蜜多。 忍辱波羅蜜多。 精進波羅蜜多。 禪定波羅蜜多。 勝慧波羅蜜多。 如是宣說諸波羅 蜜多。 (T11.822b4-7)	

したがって、このように梵文写本と法護等訳にのみ存在する内容があることから、四本の中、梵文写本、法護等が使った梵文原本は他の二訳が使った梵文原本より新層に属するものではないかとも考えられるであろう。また、上文の「第二項、梵文写本にのみ存在する内容」中に既に述べたように、本経の「菩薩観察品」、「慈悲喜捨品」、「忍辱波羅蜜多品」、「静慮波羅蜜多品」、「大自在天授記品」中、梵文写本にのみ存在するという内容があるので、このポタラ宮に保存されている梵文写本は法護等訳が使った梵文原本よりもっと新層に属するものではないかとも考えられるであろう。

故に、四本の中、一番新しいのはこのポタラ宮に保存されている梵文写本であると考えられる。

第三節、結び

以上の検討結果、梵文写本にのみ存在する内容があること、前四品、第十一品、第十二品における異同から、四本は系統を異にする異本であることが分かる。さらに四種の異本の中で、ポタラ宮に保存されている梵文写本と法護等訳が使った梵文原文と蔵訳が使った梵文原文の三本は近い系統に属するものであることが推測される。その他、玄奘訳が使った梵文原文は以上の三本とはかなり遠い関係があることも分かる。また、玄奘三蔵が翻訳に使用した梵文原典は他の三本より古層に属するものも推測されるであろう。同時に、「慈悲喜捨品」中、梵文写本と法護等訳にのみ存在する内容があるこ

とから、梵文写本、法護等訳が使った梵文原本は他の二訳が使った梵文原本より新層に属するものであると考えられる。また、「菩薩観察品」等の五品中、梵文写本にのみ存在する内容があることから、このポタラ宮に保存されている梵文写本は法護等訳が使った梵文原本よりもっと新層に属するものであるとも考えられる。

第三章、『菩薩藏經』の内容

第一節、『菩薩藏經』の内容概観と全体構造

宝積部第12經の全十二品よりなる『菩薩藏經』の内容概観と全体構造については、賢護（Bhadrāpāla）を中心とする五百の家主（gṛhapati）が世尊に勧化されて出家して解脱になる話を説く第一「家主品」と、金毘羅という薬叉の供養を受けて、世尊が金毘羅とその眷属に授記し、さらにシャーイラ（Śaila）という金毘羅の息子が世尊に供養することを説く第二「金毘羅薬叉品」との前二品は、本經の因縁分（序分）という性格を持つ。そして、第一品では、主な内容は賢護など五百の家主が、世尊によって勧化され、諸過失を有する世間から出離して解脱になるという解脱道を説く。

正宗分（本文）に入って、第三「菩薩觀察品」では、菩提心および菩薩が有すべき徳性を説く、第四「如来の不思議品」では、如来の身・声・智・光明・戒と三摩地・神通・力・無畏・大悲・不共佛法の十不思議およびそういう仏果を信じることを説く。また、慈悲喜捨の四無量心を説く第五「慈悲喜捨品」の後、第六品から第十一品までは、六波羅蜜多を布施から般若までそれぞれに一品に仕立てて説く。さらに最終第十二品はまず四摂法と世尊の本生譚が説かれ、最後に流通分として經典の受持・流布を勧めて本經は終わる。本經の正宗分の内容はすなわち、本經の主要部 bodhisattvapiṭaka-sūtrānta（or bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāya, 菩薩藏法門）の内容である。同時に、本經の正宗分の内容は、成仏道（仏菩提道）を説く内容である。本經の構造を表で示せば、次のようになる。

『菩薩藏經』全經構造			
構造	修道論	主な内容	品名
序分 （法会因縁分）	解脱道 （声聞菩提道）	出家、解脱（五百の家主は、解脱法要を聞き、出家し、解脱になる）	第一「家主品」
		授記（金毘羅薬叉は授記を受け、菩薩藏法門の聞法衆の一員になる）	第二「金毘羅薬叉品」
正宗分 （主要部— bodhisattvapiṭaka- dharmaparyāya （菩薩藏法門））	成仏道 （仏菩提道）	願（菩提心を発して、菩薩になる）	第三「菩薩觀察品」
		信（如来の十不思議である仏果を信じる）	第四「如来の不思議品」
		行（四無量・六度・四摂法を行ずる—菩薩の 実践道を行ずる）	第五「慈悲喜捨品」
			第六「布施波羅蜜多品」
			第七「持戒波羅蜜多品」
			第八「忍辱波羅蜜多品」
			第九「精進波羅蜜多品」
			第十「禪定波羅蜜多品」
			第十一「般若波羅蜜多品」
			第十二「大自在天授記品」 四摂事
		果（成仏の授記を頂く）	世尊の本生譚
流通分			受持功德、流通

上表に示されているように、修道論から言えば、本經の主な内容は、解脱道（声聞菩提道）と成仏道（仏菩提道）との二つに分けられる。そのうち、解脱道の内容は、本經の序分中の第一「家主品」に説かれている。成仏道の内容は、第三「菩薩觀察品」から第十二「大自在天授記品」までの内容¹³²に説かれている。

第二節、「家主品」に説かれる解脱道

第一項、解脱道を説く舞台と原因

世尊がマガダ（magadha）〔国〕の諸々の国土中に遊歴し、王舎大城（rājagṛha mahānagara）の鷲峯山（gṛdhrakūṭa parvata）に居た時、ある日の朝、比丘僧伽に伴われているゴータマ世尊が、乞食のために鷲峯山から王舎大城の城内へ移動の途中、世尊の名を慕って、王舎大城の城内から鷲峯山へ世尊を拝謁しに行った大富長者である賢護等の五百の家主たちは、世尊と出会った。それから、その鷲峯山から王舎大城の城内へ移動の途中が舞台になって、本品である「家主品」の話が展開する。

さて、第一「家主品」の主人公とも言える賢護であるが、本品の検討の前に、その特性について紹介しておきたい。第一「家主品」では、賢護について、次のように説かれている。

梵文写本 (MS1b4-6) ¹³³ :

atha khalu bhagavān magadhē(5)ṣu janapadeṣu janapadacārikām carann anupūrveṇa yena rājagrhaṁ mahānagarān tenopasaṁkrānta upasaṁkramya bhagavān rājagrhe mahānagare viharati gṛdhrakūṭe parvate |

tena ca samayena rājagrhe mahānagare bhadrapālo nāma śreṣṭhī grhapatiḥ prativasati (I)

pūrvāvaropitakuśalamūlah pūrva(6)buddhakṛtajinādhikārāḥ ādhyo mahādhano mahābhogah

prabhūtasvāpateyaḥ prabhūtavittopakaranah prabhūtājātarūparajataḥ prabhūtadhanadhānyakośakoṣṭhāgārāḥ

prabhūtamanimuktāvaiddūryaśamkhaṣīlāpravādaḥ prabhūtahastyaśvostragavedakah

prabhūtadāsīdāsakarmakarapauruṣeyah |

【訳】その時、世尊はマガダ〔国〕の諸々の国土で人間を遊歴することを行っていて、漸次に王舎大城であるところ、そのところに近づいた。到達してから世尊は王舎大城の鷲峯山に住する。

また、その時に、賢護という家主が王舎大城に住む。〔彼は〕過去に植えた善根を持ち、過去仏に

¹³² 第十二品の流通分の内容を除く。

¹³³ 蔵記 (D Kha256a2-5, P Dsi282a4-7, H3a3-b2) :

[illegible]

玄奘訳 (T11.195a29-b4) :

爾時世尊。大眾圍繞。供養恭敬尊重讚歎。漸次遊行至摩揭陀國。詣王舍大城住鷲峯山。時王舍城中有大長者。名曰賢守。已曾親覲過去諸佛宿殖善根。福感通被大族大富。資產財寶無不具足。（ここでは、玄奘は、概略的に訳している。）

法護等訳 (T11.781a23-28) :

爾時世尊徐緩。而至摩伽陀國。次第經行至王舍大城。到已止於鷲峯山中。是時王舍城中。有一長者其名賢護。宿植善本於先佛所廣作佛事。具大財富廣多主宰受用之物。積以金銀財穀庫藏。增集摩尼眞珠磲磬珊瑚吠瑠璃等。及諸象馬牛羊奴婢侍從并營作人。

対して仏陀にふさわしい供養を行ったり、富であり、多くの金銭を持ち、大財を持ち、多くの自己の財産を持ち、多くの財物と資具を持ち、多くの黄金と銀を持ち、多くの金銭と穀物に富んでいる貯蔵室と倉庫を持ち、多くの摩尼と真珠と瑠璃と碑磔と水晶と珊瑚を持ち、多くの象と馬と駱駝と牛と羊を持ち、多くの婢と僕（しもべ）と作業人を持つ者である。

このように、賢護という者は、とても富んだ長者として描かれているのであるが、過去に植えた善根を持っていることにも注目したい。

さて、第一「家主品」の内容についても簡単に説明を施したい。第一品では賢護等の五百の家主たちが、遠くから来て、無数の威儀を持つゴータマ世尊を見て、心を浄信とする。また、世尊に近づいてから、世尊の体は金色の身と三十二の大丈夫相を成就しており、八十随好によって莊嚴されており、大衆に勝る威徳（lakṣmī）と、威力（tejas）と、名声（yaśas）と、光輝（prabhā）と、美貌（rūpa）などの一切世間の不可思議かつ希有な法を具足する事に感心し、偈を用いて世尊の功德をほめたたえる。そして、このような功德を備えている世尊に彼の出家の原因を訪ねた。世尊は在家者には十の苦患などの諸々の過失があることを見てから自分が出家したと答えた。目の前の世尊が悟った者であると知った賢護等の五百の家主たちは、十の苦患などの諸々の過失を有する世間すなわち輪廻から、解脱になるために、世尊に解脱の法を求めた。そこで、世尊は彼らに生死流転の諸苦から解脱道を説いて、彼らは出家し、阿羅漢となり解脱をえた。以上が「家主品」の大綱である。

先にも簡単に説明したように、彼ら家主たちは仏より四諦の教えを聞き、それによって出家し、阿羅漢となる。例えば、小乗仏教の教理では、解脱するまで、少なくとも三生に渡り修行する必要があると言われる。つまり恐らくは、過去世植えた善根を有するという表現は、彼らが今世で阿羅漢果に到達するであろう小乗仏教の教理に基づいた伏線なのであろう。

このような点からも、当該の第一品が解脱道を説くものであり、声聞乗、すなわち小乗的な視点を重視していることが読み取れよう。

第二項、四諦の内容

（一）はじめに

さて、次に第一品「家主品」の内容についてみていきたい。本品では、四諦という文言が直接登場することはないが、内容を吟味すれば、ここで説示されている解脱道は、四諦の内容に他ならない。今から四諦のそれぞれと思われる点について検討を行いたい。

（二）、苦諦の内容

解脱するためには、まず苦を知り、出離心を生じる必要がある。故に、世尊は賢護長者たちに十の概念で一組となる法の九組を用いて、在家者である世間衆生の諸々の過失、すなわち、諸苦によって苦しめられていることを示すのである。

さて、まず、世尊は、自らの出家の原因として、世間衆生の十の苦患 (daśa upadrava) を示す。その内容は、次の通りである。

梵文写本 (MS3a6-7) ¹³⁴ :

atha khalu bhagavān bhadrapālaṃ śreṣṭhinaṃ grhapatim etad avocat* | upadrutaṃ batedaṃ grhapate
lokasanniveśaṃ dṛṣṭvā daśabhir upadravaiḥ (|) katamair daśabhir (|) yad idaṃ jātyupadraveṇa |
jaropadraveṇa | vyādhyupadraveṇa | maraṇopadraveṇa | śokopadraveṇa (|) paridevopadraveṇa |
duḥkhopadraveṇa | daurmanasopadraveṇa | upāyāsopadraveṇa | saṃsāropadraveṇaiva daśamena (|) ebhir
grhapate daśabhir upadrutaṃ lokasanniveśaṃ dṛṣṭvā anuttarāṃ samyaksaṃbodhiṃ lapsyāmīti
śraddhayā 'gārād anagārikāṃ pravrajitaḥ ||

【訳】その時、世尊は家主である賢護長者にこのように言った。「ああ！家主よ。この世間衆生が十の苦患によって苦しめられているのを見てから、〔私は出家をした。〕十とは何か。すなわち、生まれの苦患であり、衰老の苦患であり、病気の苦患であり、死の苦患であり、悲しみの苦患であり、悲嘆の苦患であり、苦の苦患であり、憂慮の苦患であり、悩みの苦患であり、第十は正に輪廻の苦患である。家主よ。世間衆生がこれらの十の苦患によって苦しめられているのを見てから、私は無上正等正菩提を獲得すべきであって、淨信によって家より家なき状態へ出家した」と。

ここで、世尊は、世間の衆生が、生 (jāti)・老 (jarā)・病 (vyādhi)・死 (maraṇa)・悲しみ (śoka)・悲嘆 (parideva)・苦 (duḥkha)・憂慮 (daurmanasa)・悩み (upāyāsa)・輪廻 (saṃsāra) からなる十の苦患 (daśa upadrava)によって、苦しめられているのを見て、このような苦患を取り除くべく、無上正等正菩提を獲得するために、家から出て出家者となったことが説かれる。すなわち、苦しみを十事一組の概念を用いて説明しているのである。

そして、引き続き、世間の衆生が被る苦しみを十事八組によって説明する。①敵対しつつ、十の加害事 (daśa āghātavastu) によって相互に損害し¹³⁵、②十の悪見の深淵 (daśa kudṛṣṭigahana) に墮し¹³⁶、

¹³⁴ 蔵訳 (D Kha258a7-b3, P Dsi284b2-5, H7a3-7) :

དེ་ནས་བཅས་ཐུན་འདས་ཀྱིས་བདག་ཚོང་དཔོན་བཟང་སྒྲིང་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་བཀའ་རྒྱུ་ཤི། གྲི་མའི་ཁྱིམ་བདག། འཇིག་རྟེན་གནས་པ་འདི་ནི། གཙོ་བོ་བསུས་གཙོས་པར་མཐོང་གྱེ། བསུ་གང་ཞེན། འདི་ལྟ་གྱེ། སྐྱེ་བས་གཙོ་བོ་བདད།
ཤ་བས་གཙོ་བོ་བདད། ན་བས་གཙོ་བོ་བདད། འཆི་བས་གཙོ་བོ་བདད། ལྷ་དན་གྱིས་གཙོ་བོ་བདད། སྐྱེ་ཐུགས་འདོན་པས་གཙོ་བོ་བདད། ཐུག་བཟུལ་གྱིས་གཙོ་བོ་བདད། ཡིད་མེ་བདེ་བས་གཙོ་བོ་བདད། འཇུག་པས་གཙོ་བོ་བདད།
འཁོར་བས་གཙོ་བོ་བདད་བསུ་གྱེ། ཁྱིམ་བདག། འཇིག་རྟེན་གནས་པ་གཙོ་བོ་འདི་བསུས་གཙོས་པར་མཐོང་ནས་སྐྱ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྟོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་ཐོབ་པར་བྱའོ། ། ཞིས་དད་པས་ཁྱིམ་ནས་ཁྱིམ་མེད་པར་རབ་བྱ་བྱུང་ངོ། །

玄奘訳 (T11.196a22-b1) :

爾時世尊告賢守長者曰。長者當知。我觀世間一切衆生。爲十苦事之所逼迫。何謂爲十。一者生苦逼迫。二者老苦逼迫。三者病苦逼迫。四者死苦逼迫。五者愁苦逼迫。六者怨恨逼迫。七者苦受逼迫。八者憂受逼迫。九者痛惱逼迫。十者生死流轉大苦之所逼迫。長者。我見如是十種苦事逼迫衆生。爲得阿耨多羅三藐三菩提。出離如是逼迫事故。以淨信心捨釋氏家趣無上道。

法護等訳 (T11.782a26-b4) :

爾時世尊告賢護等諸長者言。諸長者。我見十種諸燒亂法世間合集。斯苦甚大。何等爲十。一者生爲燒亂。二者老爲燒亂。三者病爲燒亂。四者死爲燒亂。五者憂爲燒亂。六者悲爲燒亂。七者苦爲燒亂。八者煩惱爲燒亂。九者愁歎爲燒亂。十者輪廻爲燒亂。如是十種諸燒亂法。世間合集我見是已。是故我乃淨信出家。趣證阿耨多羅三藐三菩提果。〔。〕

¹³⁵ 梵文写本 (MS3b1-4) :

vidviṣṭaṃ batedaṃ grhapate lokasanni(2)veśaṃ dṛṣṭvā anyonyapratighātakam daśabhir āghātavastubhiḥ (|) katamair daśabhir (|) yad idaṃ ātmano me (‘)narthaḥ kṛta utpadyate cetasa āghātaḥ anarthaṃ karoty utpadyate cetasa āghātaḥ | anarthaṃ kariṣaty utpadyate cetasa āghātaḥ priyasya me (‘)narthaḥ kṛta utpadyate cetasa āghātaḥ | priyasya me (‘)narthaṃ (3)karoty utpadyate cetasa āghātaḥ | priyasya me anarthaṃ kariṣaty utpadyate cetasa āghātaḥ | apriyasya

復次長者。惡道深險世間合集。斯苦甚大。漸向惡趣增長惡趣廣開惡趣。謂不善業有其十種。〔何等爲十。一者殺生。二者偷盜。三者邪淫。四者妄言。五者綺語。六者兩舌。七者惡口。八者貪。九者瞋。十者邪見。如是十種不善業道。〕漸向惡趣增長惡趣廣開惡趣。我見是已。爲令出離諸險惡道。是故我乃淨信出家。趣證阿耨多羅三藐三菩提果

punar aparaṃ gr̥hapate kleśopakṣe(8)śaṃkleśamalopagatam batemaṃ lokasanniveśaṃ dr̥ṣṭvā daśabhiḥ saṃkleśaiḥ (1) katamair daśabhir (1) yad idaṃ mātsaryamalasaṃkleśeṇa | dauḥśīlyamalasaṃkleśeṇa | vyāpādamalasaṃkleśeṇa | kausīdyaamalasaṃkleśeṇa (1) vyākṣepamalasaṃkleśeṇa | (MS5a1)daus̥|prajñīyamalasaṃkleśeṇa | aśuśrūṣāsaṃkleśeṇa | vicikitsāmalasaṃkleśeṇa | anadhimuktimalasaṃkleśeṇa (1) agauravamalasaṃkleśeṇa ca daśamena | ebhir gr̥hapate daśabhiḥ saṃkleśaiḥ saṃkṣiptaṃ lokasanniveśaṃ dr̥ṣṭvāsaṃkṣiptaṃ anuttarāṃ samyaksambodhiṃ prāpsyāmīti śraddhayā agārād anagārikāṃ pra(2)vrajitāḥ ||

蔵記 (D Kha262a4-b1, P Dsj287a6-b2, H11b1-7) :

[illegible]

復次長者。我觀世間一切衆生。由於十種染污法故。處在煩惱墮煩惱垢中。何謂爲十。〔一者〕慳垢染污。〔二者〕惡戒垢染污。〔三者〕瞋垢染污。〔四者〕懈怠垢染污。〔五者〕散亂垢染污。〔六者〕惡慧垢染污。〔七者〕不遵尊教垢染污。〔八者〕邪疑垢染污。〔九者〕不信解垢染污。十者不恭敬垢染污。長者。我見衆生以如是等十染污法之所染污。爲得阿耨多羅三藐三菩提證於無染無上法故。以淨信心捨「釋氏」家趣無上道。

復次長者。煩惱隨煩惱。諸雜染垢世間合集。斯苦甚大。雜染有十。何等爲十。〔一者〕慳恪垢雜染。〔二者〕毀戒垢雜染。〔三者〕瞋恚垢雜染。〔四者〕懈怠垢雜染。〔五者〕散亂垢雜染。〔六者〕惡慧垢雜染。〔七者〕無聞¹⁴¹垢雜染。〔八者〕疑惑垢雜染。〔九者〕無信解垢雜染。十者不尊重垢雜染。如是十種諸雜染法世間合集。我見是已。普令安住無雜染法。是故我乃淨信出家。趣證阿耨多羅三藐三菩提果。〔。〕

(4)punar aparaṃ gr̥hapate samyuktam batemaṃ lokasanniveśaṃ jñātvā yad idaṃ mithyāmātsaryasaṃyojanena paryavanaddham (1) imaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ avidyāpātaleṇa | praskannaṃ batemaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ mohaparikhayā (1) uhyamānaṃ batemaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ kā(5)maughena (1) marmaviddhaṃ batemaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ icchāśalyeṇa (1) saṃdhuḥṣitaṃ batemaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ krodhopanāhādhumēṇa | ādīptaṃ batemaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ rāgāgninā | saṃcchannaṃ batemaṃ gr̥hapate loka sanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ doṣa(6)viṣeṇa | āvṛtaṃ batemaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ nivarāṇakaṇṭakena | vīryāvasannaṃ imaṃ gr̥hapate lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā yad idaṃ sansārāṭavikāntāreṇa | ebhir gr̥hapate daśabhiḥ (5b1)paryavanāhaiḥ paryavanaddham lokasanniveśaṃ dr̥ṣtvā śraddhaya 'gārā anagārikāṃ pravrajitah ||

【訳】「ああ！在家者よ。その他、すなわち、嫉妬と慳貪との結びつきによってこの世間の衆生が縛られているのを見てから、〔私は出家した。〕在家者よ。すなわち、無明の膜によってこの世間衆生が覆われているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、愚痴の塹壕によってこの世間衆生が陥られているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、愛欲の瀑流によってこの世間衆生が押し運ばれているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、欲望の箭によってこの世間衆生が〔身体の〕致命的な部位が貫通されているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、忿怒と憎悪の煙によってこの世間衆生が燻されているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、食欲の火によってこの世間衆生が燃え上がられているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、嗔恚の毒によってこの世間衆生が充滿されているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、障礙の棘によってこの世間衆生がとり囲まれているのを見てから、〔私は出家した。〕ああ！在家者よ。すなわち、輪廻の森と荒野によってこの世間衆生が精進が費やされているのを見てから、〔私は出家した。〕在家者よ。これらの十の巻きつきによって世間衆生が縛られているのを見てから、〔私は〕淨信によって家より家なき状態へ出家した」と。

[illegible]

(五)、道諦の内容

1. 道諦について

さて、家主品では、引き続き、諸法が無我であり無常であることを示し、それを理解する必要性を述べる。すなはち、解脱するためには世間をそのように見る必要があるのであり、それが解脱に至るための手段としての正見であるとも言えよう。すなわち、一見すれば当たり障りの無い説示にも見えるが、当該の記述は道諦を説示するものにほかならない。この点を傍証する資料として『佛説諸法本無經』の記述が挙げられる。そこでは「若見諸法無有。彼即修道。」(T15.765c17)とあり、まさに今の解釈と同義といえ、無常や無我の説示を道諦に配することができる¹⁴⁷。以下にそれぞれの説示を紹介したい。

2. 諸法無我

まず、世尊は賢護など五百の家主たちに、六根・六境・五蘊・六界が無我すなわち、諸法が無我であることを示す。先にも述べた通り、この説示こそ、解脱への道を示しているといえよう。その内容は、次の通りである。

梵文写本 (MS7b5-8a3) ¹⁴⁸ :

[illegible]

玄奘訳 (T11.201b12-c6) :

諸長者。汝等應知。誰於寂滅而便入證。諸長者。眼不入寂滅。耳鼻舌身意不入寂滅。然因於眼起諸妄執。或計爲我。或計我所。若遠離者即是寂滅。遠離何等而爲寂滅。若遠離貪即是寂滅。若遠離瞋即是寂滅。若遠離癡即是寂滅。若離無智即是寂滅。復次諸長者。過去無智不可遠離。未來無智不可遠離。現在無智不可遠離。然要因於遠離無智而正智起。諸長者。何等爲智。所謂盡智。何等盡智。過去非盡智。未來非盡智。現在非盡智。然諸長者。因離無智而此智生。此智不遠離智。因離眼無智而此智生。又諸長者。眼非我所。若非我所則不取著。若不取著即是最上。若是最上即是解脫。何處解脫。於我執所而得解脫。有情執所。壽命執所。數取執所。斷常執所。一切執所。乃至分別執所而得解脫。行者若能於執解脫。則不分別。若不分別。則非分別非不分別。何等不分別。所謂不分別我及以我所。行者爾時於一切法離散不積。捨而不取。捨故寂滅。解脫除遣。最勝解脫離諸繫縛。於何等處名爲除遣。一切苦處而得除遣。汝諸長者。若求出離。勿於一法而生取著。何以故。若有取著則有怖畏。若無取著則無怖畏。〔。〕

法護等訳 (T11.788a11-29) :

又諸長者。所言入者。何所入邪。謂非眼所入。非耳鼻舌身意所入。又諸長者。若執眼從緣成。此即著我我所離於涅槃。云何離涅槃。謂貪故離涅槃。瞋故離涅槃。癡故離涅槃。無智故離涅槃。諸長者。無智者不離過去。不離未來。不離現在。決定無智離智¹⁴⁶所生。何名爲智。所謂盡智。何名盡智。謂即過去無盡智。未來無盡智。現在無盡智。緣法無智離智所生。彼無智離智。即眼從緣離智所生。眼者無我。若無我即無取。若無取即無捨。若無捨即解脫。云何解脫。謂我執解脫。衆生執解脫。壽者執解脫。人執解脫。斷常執解脫。一切執解脫。分別執解脫。彼無分別已。即無能分別所分別。法無分別亦不離分別。云何無分別。謂我我所俱無分別。若我無分別即無取捨。若無取捨即所入解脫。若法離繫。若法非離繫皆得出離。何所離邪。謂離一切苦。諸長者。當求如是出離之法。然於是中無法可取。何以故。若有所取即生怖畏〔。〕

¹⁴⁷ 今挙げた資料の他にも『大方等無想経』に類似する記述が認められる。次の通りである。

世尊。如佛所說若見諸法無常無樂無我無淨。是人則見上道下道得須陀洹果。乃至得阿耨多羅三藐三菩提。
(T12.1104a5-8)

¹⁴⁸ 蔵訳 (D Kha265b2-266a4, P Dsi291b4-292a6, H18a7-H19b1) :

དེ་ནས་བཙམ་ལྟར་འདས་ཀྱིས་བྱིས་བདག་ལྟ་བུ་ཙམ་པོ་དེ་དག་ལ་བཀའ་སྩལ་པ། བྱིས་བདག་རྣམས་མིག་ནི། ཐར་པར་མི་འདོད་དོ། ཇི་ཅིའི་ཕྱིར་ཞེ་ན། མིག་ནི་བྱེད་པ་མེད་པ། ལམ་བ་མེད་པ་སྟེ། མིག་ནི་མི་སེམས་ཤིང་རྣམ་པར་མི་རིག་གོ།

aththa khalu bhagavāṃs tāni pañcamātrāṇi gr̥hapatīśātāny āmantrayate sma || cakṣur gr̥hapatayo na moktukāmaṃ (|) tat kasya heto(6)r (|) niśceṣṭaṃ nirvyāpāraṃ cakṣur na cakṣuś cetayati na vijānāti tasmāt tarhi gr̥hapatayaś cakṣur nātmety adhiṣṭhātavyam* | śrotraṃ ghr̥ṇaṃ jihvā kāyo mano gr̥hapatayo na moktukāmaṃ | tat kasya hetor (|) niśceṣṭaṃ nirvyāpāraṃ mano (|) na manaś cetayati na vijānāti (|) tasmāt tarhi gr̥hapatayo mano (‘)py anātmety adhiṣṭhātavyam ||

rūpaṃ gr̥hapa(7)tayo na moktukāmaṃ (|) tat kasya hetor (|) niśceṣṭaṃ nirvyāpāraṃ rūpaṃ na rūpaṃ cetayati na vijānāti tasmāt tarhi gr̥hapatayo rūpaṃ anātmety adhiṣṭhātavyam | śabda gandho rasah spraṣṭavyā dharmmo gr̥hapatayo na moktukāmas (|) tat kasya hetor (|) niśceṣṭo nirvyāpāro yāvad dharmah | rūpaskandho gr̥hapatayo na moktukāmaḥ (|) (8)tat kasya hetor (|) niśceṣṭo nirvyāpāro rūpaskandhaḥ | na rūpaskandhaś cetayati na vijānāti | tasmāt tarhi gr̥hapatayo rūpaskandho (‘)py anātmety adhiṣṭhātavyam | vedanāskandhaḥ samjñāskandhaḥ saṃskāraskandho vijñānaskandho gr̥hapatayo (MS8a1)na moktukāmas (|) tat kasya hetor (|) niśceṣṭo nirvyāpāro vijñānaskandho na vijñānaskandhaś cetayati na vijānāti | tasmāt tarhi gr̥hapatayo vijñānaskandho (‘)py anātmety adhiṣṭhātavyam |

pr̥thivīdhātur gr̥hapatayo na moktukāmas (|) tat kasya hetor (|) niśceṣṭo nirvyāpāraḥ pr̥thivīdhātur na (2)pr̥thivīdhātuś cetayati na vijānāti (|) tasmāt tarhi gr̥hapatayaḥ pr̥thivīdhātur apy anātmety adhiṣṭhātavyam abdhātus tejodhātur vāyudhātur ākāśadhātur vijñānadhātur gr̥hapatayo na moktukāmas (|) tat kasya hetor (|)

玄奘訳 (T11.199b2-23) :

復次諸長者。色不求解脫。何以故。色無作無用故。色不能思不能了別。是故諸長者。色亦非我應如是持。如是聲香味觸法法不 求解脫。何以故。法無作無用故。法不能思不能了別。是故諸長者。法亦非我應如是持。

復次諸長者。地界不求解脫。何以故。地界無作無用故。地界不能思不能了別。是故諸長者。地界非我應如是持。如是水界火界風界空界識界。識界不求解脫。何以故。識界無作無用故。識界不能思不能了別。是故諸長者。識界非我應如是持。

爾時世尊。告五百長者言。汝等各欲求解脫者。而彼解脫從何所求。諸長者。眼不欲解脫。何以故。眼本無轉亦復無作。眼無所思亦無了知。是故應知。眼本不從我之建立。諸長者。耳鼻舌身意不欲解脫。何以故。〔耳鼻舌身〕意。

諸長者。色不欲解脫。何以故。色無所轉亦復無作。色無所思亦無了知。是故應知。色本不從我之建立。聲香味觸法不欲解脫。何以故。法無所轉亦復無作。法無所思亦無了知。是故應知。法本不從我之建立〔。〕

又復長者。地界不欲解脫。何以故。地界無轉亦復無作。地界無思亦無了知。是故應知。地界不從我之建立。水火風空識界不欲解脫。何以故。識界無轉亦無所作。識界無思亦無了知。是故應知。識界不從我之建立。〔。〕

cakṣur gr̥hapatayaś cāturmahābhautikam anityam adhravam aśāśvatam asāraṃ durbalaṃ ja(7)rjaram
itvaram anāśvāsikam duḥkhaṃ bahurogaṃ bahūpadravaṃ (l) tatra bhavadbhir gr̥hapatayaś cakṣuṣi nīśrayo
na karaṇīyaḥ | śrotraṃ ghrāṇaṃ jihvā kāyo mano gr̥hapatayaḥ cāturmahābhautikam anityam adhravam
aśāśvatam anāśvāsikam asāraṃ jarjaram ābādhikam duḥkhaṃ bahurogaṃ bahūpadravaṃ (l) tatra
bhavadbhir gr̥hapatayo (8)manasi nīśrayo na karaṇīyaḥ | api ca gr̥hapatayaḥ evaṃ śikṣitavyaṃ phenabhūtam
idaṃ cakṣur aparimardanakṣamaṃ | budbudabhūtam idaṃ cakṣur acirasthāyī |
(中略(l)) aparyantasthāyīdaṃ cakṣuḥ maraṇaparyavasānaṃ | yathā cakṣur gr̥hapatayaḥ anugantavyaṃ tathā
śrotraṃ ghrā(4)ṇajihvākāyamaṇaḥ || peyālaṃ || yāvat sarvadharmā anugantavyāḥ ||

【訳】家主たちよ。眼は四大からなるので、無常であり、堅固ではないであり、不変でないであり、無核心であり、弱いであり、脆いであり、頼るに足らないであり、不安定であり、苦であり、多病であり、多苦患である。そこで、家主たちよ。あなたたちによって、眼の中に依所が作られないべきである。家主たちよ。耳と鼻と舌と身と意は四大からなるので、無常であり、不堅牢であり、不変でないであり、不安定であり、不堅固であり、脆いであり、苦痛であり、苦であり、多病であり、多苦患である。そこで、家主たちよ。あなたたちによって意の中に依所が作られないべきである。また、家主たちよ。このように学ばれるべきである。この眼は泡の如き、擦りに堪えない。この眼は水泡の如き、永く存在できない。

(中略。)この眼は無限に存在していない、死で終わるからである。家主たちよ。眼が了知されるべきであるように、そのように耳と鼻と舌と身と意も〔了知されるべきである〕。略言すれば、乃至、一切法が了知されるべきである。

ここでは、眼などの六根の無常を述べ、その事に基づいて、眼等の六根を依所とするべきでないことを述べる。また、同様の論理で一切法に至るまですべては無常であり、頼りにならないものであり、依所とすべきではないことを述べる。以上のように、家主品では無常を述べる。そしてこれは道諦の説示にほかならない。

4. 小結

以上、無常と無我の説示を確認した。このように、家主品では無常や無我が理解すべき対象として説示される。そしてそれは解脱のために必要な要素であり、道諦とみなせるのである。

諸長者。我說是眼四大所造。無常無住。無恒不堅之法。羸弱速朽難可保信。衆苦所集多病多害。汝諸長者。眼爲如是不應依止。耳鼻舌身意亦復如是不應依止。當如是觀。復次諸長者。眼如聚沫不可撮摩眼如浮泡不得久住。(中略。)眼無住際終歸磨滅。諸長者。眼爲多過應如是觀。乃至於意一切諸法亦復如是。

法護等訳 (T11.787b19-c10) :

又諸長者。眼者四大所造。無常無強而不究竟。無堅無力速朽之法。斯不可信。多苦多惱衆病所集。是故諸長者。眼無依止亦無造作。耳鼻舌身意。亦復如是。四大所造。無常無強而不究竟。無堅無力速朽之法。斯不可信。多苦多惱衆病所集。是故諸長者。意無依止亦無造作。諸長者。是等諸法應如是學。此眼如聚沫不可撮摩。眼如浮泡不得久立。(中略。)此眼畢竟無邊際處。後當歸死。諸長者。汝等當知。眼既如是。耳鼻舌身意其義亦然。總略乃至彼一切法應如是知。

第三項、四諦の果報

先の検討では、家主品の説示内容が実は四諦のおしえであったことを分析した。そこで、次に、その四諦のおしえの果報がどのように表現されているのかについて、検討してみたい。まず、次のように説かれる。

梵文写本 (MS12a8-b1) ¹⁵⁰ :

atha khalu teṣām* (MS12b1)paṃcamātrāṇām gr̥hapatiśātānān tasminn eva pr̥thivīpradeśe sthitānām virajo
vigatamalam dharmmeṣu dharmmacakṣur viśuddham | tad yathā śuddham vastram apagatakr̥ṣṇam raṃge
prakṣiptam kṣipram eva raṃgam gr̥hṇīyād evam eva teṣām paṃcānām gr̥hapatiśātānām tasminn eva
pr̥thivīpradeśe sthitānām virajo vigatamalam dharmesu dharmmacakṣur viśuddham ||

【訳】その時、それらの五百程の家主たちは、正にその地のところに立っているうちに、諸法の中に、無塵になって、離垢になって、法眼が清浄になった。例えば、衣服が顔料の中に置かれて顔料を取ってから正に速やかに黒さがなくなって清浄になる。正にそのように、それらの五百程の家主たちは、正にその地のところに立っているうちに、諸法の中に、無塵になって離垢になって法眼が清浄になった。

このように、これらの教えの果報として、家主たちは法眼の清浄を獲得しする。また、注目すべき点は、この段階では在家者として果報を得ている点である。ついで家主たちは、次の段階へと進む。次の通りである。

梵文写本 (MS13a7-8) ¹⁵¹ :

atha khalu tāni paṃcamātrāṇi gr̥hapatisātāni bhagavantam etad avocan* | labhemahi vayam bhagavam
bhagavato ntikāt pravrajyam labhemahi vayam sugatasvāntikād upasampadam bhiksubhāvam (1)

¹⁵⁰ 蔵訳 (D Kha274a1-2, P Dsi300a4-6, H31b5-7) :

[illegible]

玄奘訳 (T11.202b19-22) :

爾時五百長者。聞是法已。即於此處遠塵離垢。於諸法中得法眼淨。如無黑淨衣置染器中速受染色。如是諸長者法眼清淨亦復如是。〔。〕

法護等訳 (T11.788c21-24) :

爾時五百長者。聞佛宣說甚深正法。即於如是中路方處。遠塵離垢得法眼淨。譬如白衣不雜塵黑易受染色。此五百長者。於是方處遠離塵垢法眼清淨。亦復如是。〔。〕

¹⁵¹ 藏訛 (D Kha275b3-5, P Dsi301b7-302a1, H34a7-b2):

དེ་ན་མ་བཅུ་ཐུང་འདུག་ཀྱིས་བདག་ལ་བུ་ཅན་པོ་དེ་དག་གིས་འདྲི་སྐད་གསུམ་གསུམ་གྱི་། །བཅོམ་ཐུང་འདས་བདག་ཅག་རྣམས་ཀྱིས་བཅོམ་ཐུང་འདས་ལས་རབ་ཏུ་བྱུང་བ་རྟེན་པར་གྱུར་ཅིག ། །བདག་ཅག་རྣམས་ཀྱིས་བོད་བོར་གཤེགས་པ་ལས་ལམ་རྟེན་པར་རྟོགས་པ་དེའི་མྱོང་གི་དངོས་པོ་རྟེན་པར་གྱུར་ཅིག ། བཅོམ་ཐུང་འདས་ཀྱིས་དག་མྱོང་དག་རྒྱུར་ཤོག་ཅེས་གསུངས་པ་དང་། དེ་ཉིད་ཀྱིས་རྩོད་ཐུང་ཐུང་པར་དག་རབ་ཏུ་བྱུང་བར་གྱུར་གྱི། དེ་ཉིད་ཀྱིས་ལམ་རྟེན་པར་རྟོགས་པ་དང་། དེ་ཉིད་ཀྱིས་དག་མྱོང་གི་དངོས་པོར་གྱུར་གྱི། །

玄奘訳 (T11.203a8-11) :

爾時五百長者白佛言。世尊。我等今者欲於佛所出家。受具足戒修清淨行。未審世尊垂愍聽不。佛言。善來苾芻。即名出家具足戒已成苾芻法。

法護等訳 (T11.789b17-21) :

爾時五百長者。聞佛所說如是正法。心開意解。前白佛言。世尊。我等今者快得善利。〔於佛法中淨信〕出家。復於佛所圓具淨戒。爾時佛言。善來諸苾芻。即時諸長者。〔鬚髮自落袈裟著身。〕成苾芻相。〔。〕

(8)āgacchata bhikṣava iti bhagavān avocat* | saiva teṣām āyusmatām pra[vra]jyābhūd asāv evopasaṃ]padāsāv eva bhikṣubhāvaḥ |

【訳】その時、それら五百程の家主たちは、世尊にこう言った。「世尊よ。我々は世尊の前から出家することを得させたいです。我々は善逝の前から具足戒を受けて比丘の形に変わることを〔得させたいです〕」と。「比丘たちよ！来てください」と世尊は言った。それ¹⁵²があつてこそ、それらの寿を有する者たちは出家者になった。それがあつてこそ、〔彼らは〕具足戒を受けた。それがあつてこそ、〔彼らは〕比丘の姿に変わった。

ここで、法眼の清浄を獲得した家主たちは、世尊に出家を志している旨を伝える。その結果、彼らは、世尊の前で具足戒を受け、袈裟を着、髪を切り、鉢を持ち、比丘の姿となる。このように先の段階では在家者であった家主たちが、具足戒を備えた比丘へと変貌するのである。そして家主たちはさらに次の段階へと進む。次の通りである。

梵文写本 (MS13a8-b1) ¹⁵³ :

gṛhitās tair hi kāṣāyāḥ keśās ca tehi¹⁵⁴ ccheditāḥ()

pātraṃ gṛhītaṃ sarvebhis tatraiva arhatā bhutā ||

【訳】彼らは袈裟を着た、彼らは髪を切った、

鉢を持った。正にそこで、〔彼らの〕すべては阿羅漢になった。

ここで、家主たちは比丘になり、そして阿羅漢果を獲得する旨が述べられる。つまり、在家の家主たちが四諦の教えを通じて、出家し、比丘となり、そして比丘の最終到達地点でもある阿羅漢となるのである。そして、この四諦を通じて阿羅漢となるのは有部をはじめとする小乗の一般的な修行法であり、声聞乗の修行方法が意識されたものであるとも考えられよう。そして、阿羅漢となった家主たちがそのまま、金毘羅菓叉 (Kimbhīrayakṣa) などの大衆と共に、世尊が説こうとする菩薩行に導く菩薩蔵という名前の經典の聞法衆となるのである。つまり、菩薩蔵という教えは、在家、出家ともに享受できる教えであり、声聞乗の最終到達地点である阿羅漢を得た者が、更にその先を志す教えでもあるのが、この家主品の検討から見いだせるのである。

¹⁵² 「それ」：ここでは、世尊の「比丘たちよ！来てください」という言葉を指す。

¹⁵³ 蔵訳 (D Kha275b5-6, P Dsi302a2, H34b3) :

དེ་དག་གིས་ཉི་མཁའ་རྒྱུ་ལོག་པ་། དེ་དག་གིས་ཉི་མཁའ་རྒྱུ་ལོག་པ་།
ལུ་མཁའ་རྒྱུ་ལོག་པ་ལྟར་ནས་། དེ་ཉི་མཁའ་རྒྱུ་ལོག་པ་ལྟར་ནས་།

玄奘訳 (T11.203a12-13) :

袈裟執受已 其髮自然斷

一切皆持鉢 即座成羅漢

法護等訳 (T11.789b23-24) :

汝念受持袈裟衣 鬚髮自落皆清淨

執持應器善相圓 一切皆成阿羅漢

¹⁵⁴ 校訂では、te hi とある。しかし、ここでは、tehi, tad の Instr. pl. (BHS. I. p. 116, §21.46)。そして、蔵訳では、「彼らによって (དེ་དག་གིས་)」と訳している。

第一項、『菩薩藏經』「家主品」に説かれる三者関係

梵文写本 (MS8a6-b1) ¹⁵⁵ :

¹⁵⁵ 藏訳 (D Kha266a7-b6, P Dsi292b3-293a2, H19b7-20b3) :

玄奘訳 (T11.199c4-21) :

法護等訳 (T11.785c28-786a15) :

¹⁵⁶ 校訂では、samskāranām bhavati praiñāptih avidyāyām asatyāmとある。

prajñaptiḥ | jātyām satyām jarāmaraṇasya bhavati prajñaptiḥ | jātyām asatyām jarāmaraṇasya na bhavati
prajñaptiḥ |

ここでは虚妄分別が何を引き起こすのかについて言及される。関係の順序を整理すれば次の通りである。

そして、虚妄分別が存在しなければどうなるかについても言及され、虚妄分別がなければ、十二支縁起そのものが存在しなくなることが述べられる。つまり、ここでは虚妄分別は非如理作意の因であること、また、非如理作意が十二縁起の無明支の因であることが明らかに示されている。すなわち、『菩薩藏經』ではこれら三者に密接な関係があることを見出すのである。

[illegible]

梵文『菩薩藏經』では、無明→……→老死という十二支縁起説しか説かれていない¹⁵⁸からである。つまり、虚妄分別や非如理作意等の無明以前の項目は十二支縁起の背景を述べたものであり、それを説くことが家主品の特徴であり、新たな支分縁起が述べられたのではないのである。

では、このような虚妄分別と非如理作意と十二支縁起の関係は、玄奘以前に訳された大乘經典にすでに存在するのであろうか。その点について今から考察してみたい。

第二項、非如理作意と無明

まずは、非如理作意と無明とについて、考察をしたい。非如理作意と十二縁起の無明支との関係については、二系統の經典に分けられる。一つは、非如理作意と無明とは因と果との関係（非如理作意→無明）とするもの。もう一つは、両者は互いに因果関係（非如理作意↔無明）とするものである。

まずは前者の系統を説くものについて見ていきたい。例えば、曇無讖〈385-433〉訳『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』では、次のように説かれている。

云何名因。云何名縁。若諸衆生思惟不善。是名生死因縁。因不善思惟故生長無明。是故不善爲因無明爲縁。因無明故則生於行。是故無明爲因諸行爲縁。（中略）因生則有老死等苦。是故生則爲因老死爲縁。（T13.16c8-21）

ここでは不善思惟（≡非如理作意）が無明の原因であると述べられる。このような傾向を述べる經典として、玄奘以前に訳された大乘經典、例えば、竺法護〈239-316〉訳『大哀經』（『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の異訳、T13.424a6-9）と『度世品經』（T10.649a29-b3）と『宝女所問經』（T13.466a17-18）、智嚴共寶雲〈4-5世紀頃〉訳『大方等大集經・無盡意菩薩品』（T13.197c15-21）、求那跋陀羅〈394-468〉訳『大方廣寶篋經』（T14.477c12-21）、曇摩流支〈弘始七（405）年来華〉訳『如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經』（T12.247a5-9）、僧伽婆羅〈479-502年来華〉訳『度一切諸佛境界智嚴經』（T12.252c19-21）、菩提留支〈508年西域から来洛陽〉訳『大薩遮尼乾子所説經』（T9.355c12-16）等¹⁵⁹が挙げられる。以上

法護等訳（T11.807a21-27）：

云何是因。云何是縁。謂即一切衆生諸雜染中。不如理作意是因。無明是縁。無明爲因行爲縁。行爲因識爲縁。識爲因名色爲縁。名色爲因六處爲縁。六處爲因觸爲縁。觸爲因受爲縁。受爲因愛爲縁。愛爲因取爲縁。取爲因有爲縁。有爲因生爲縁。生爲因所縁（ここの「所縁」は「老死」の誤写）爲縁。

¹⁵⁸ 梵文写本（MS37a3-4）：

tatra katamo hetuḥ katamaḥ pratyayaḥ (|) avidyā hetuḥ saṃskārāḥ pratyayaḥ (|) saṃskāro hetuḥ vijñānaṃ pratyayo (|) vijñānaṃ hetuḥ nāmarūpaṃ pratyayaḥ (|) nāmarūpaṃ hetuḥ ṣaḍāyatanam pratyayaḥ (|) ṣaḍāyatanam hetuḥ sparśaḥ pratyayaḥ (|) sparśo hetuḥ vedanā pratyayo (|) vedanā hetuḥ trṣṇā pratyayaḥ (|) trṣṇā hetuḥ u(4)padānaṃ pratyayar (|) upādānaṃ hetuḥ bhavaḥ pratyayo (|) bhavo hetuḥ jātīḥ pratyayo (|) jātir hetuḥ jarāmaraṇapratyayaḥ (|)

【訳】その中、「衆生たちの雑染が生じるための」因とは何か、縁とは何か。無明は因であり、諸行は縁である。諸行は因であり、識は縁である。識は因であり、名色は縁である。名色は因であり、六処は縁である。六処は因であり、触は縁である。触は因であり、受は縁である。受は因であり、愛は縁である。愛は因であり、取は縁である。取は因であり、有は縁である。有は因であり、生は縁である。生は因であり、老死は縁である。

¹⁵⁹ 玄奘と同時代あるいは後の時代に訳された經典、例えば、地婆訶羅〈613-687〉訳『方廣大莊嚴經』（T3.608a9-21）、實叉難陀〈652-710年〉訳『大方廣佛華嚴經・離世間品第三十三之七』（T9.664c21-23）、般若〈781/782年来華〉共牟尼室利〈?-811年〉訳『守護國界主陀羅尼經』（T19.547a17-24）等にも、無明の因は非如理作意であることを説かれている。また、論典である『阿毘達磨大毘婆沙論』でも、「無明因者。謂不如理作意。」（T27.121c28-29）とある。

のように、非如理作意を十二縁起の無明支の直接の因（非如理作意→無明）と想定する經典群が想定できる。

また、一方的な因果関係ではなく、非如理作意と無明との相互的な因果関係（非如理作意↔無明）を述べる經典も存在する。例えば、曇無讖訳『大般涅槃經』である。次の通りである。

世尊。如來昔於十二部經說言。不善思惟因縁生於貪欲瞋癡。今何因縁乃說無明。善男子。如是二法互爲因果互相增長。不善思惟生於無明。無明因縁生不善思惟。（T12.583a9-12）

ここでは明らかに無明が不善思惟の因であり、かつ、不善思惟が無明の因であると説かれている。

以上、様々な經典を見てきたが、『菩薩藏經』に説かれた非如理作意→無明という非如理作意と十二縁起の無明支との関係は、玄奘以前に訳された大乘經典の中に多く確認することができる。

おそらく、このような概念構造、すなわち、非如理作意は無明の因である、あるいは両者が互いに因となるという説の起源は、『雜阿含』第334經『有因有縁有縛法經』にある。そこでは次のように説かれている。

無明有因有縁有縛。何等無明因無明縁無明縛。謂無明不正思惟因。不正思惟縁。不正思惟縛。不正思惟。有因有縁有縛。何等不正思惟因。不正思惟縁。不正思惟縛。謂縁眼色。生不正思惟。生於癡。縁眼色。生不正思惟。生於癡。彼癡者是無明。（T2.92b29-c6）

また、『雜阿含』は、有部系の教団に伝承されていたものと言われている¹⁶⁰。しかしこのことから直結して、『菩薩藏經』を含む上記の大乘經典創作者が有部の経蔵に基づいたとは言い難い。なぜならば、部分的に有部の経蔵と合致する点があるものの、合致しない点もあるからである¹⁶¹。ただ、『菩薩藏經』と関係經典については後に詳細に検討を施す¹⁶²ので、今はふれない。

第三項、虚妄分別と非如理作意

1. はじめに

先に無明と非如理作意については検討を行った。そこで、次は、虚妄分別と非如理作意との関係を考察する。虚妄分別という語は、唯識の典籍によく使われる概念である。この点について松田和信[2017, p. 3]は次のように述べる。

¹⁶⁰ 榎本文雄 [1986, p. 931]。

¹⁶¹ 松田和信 [2017, p. 2] は次のように述べる。

本項（非如理作意とは何か）のソースはMN, no. 2, Sabbāsava, PTS, MN, vol. 1, p. 8, 中阿含No. 10『漏盡經』, 増一阿含 No. 6. シャマタデーヴァに引かれる同經とは文章が相当異なる。菩薩藏經創作者の知識は有部阿含からでなく、他部派の阿含か。

¹⁶² 本稿の第四章・「第八節、『菩薩藏經』と『四分律』および『増一阿含經』」を参照。

『菩薩藏經』等の大乘經典における虚妄分別は唯識思想との関連は見られない。

そこで、今は『菩薩藏經』等の大乘經典に絞って、虚妄分別と非如理作意との関係を考察してみたい。

2. 「家主品」における虚妄分別の意味

まず『菩薩藏經』における虚妄分別の取扱について探ってみたい。『菩薩藏經』「家主品」では、虚妄分別とは何かについて、次のように説かれている。

梵文写本 (MS9b2-5) ¹⁶³ :

abhūtaparikalpe saty ayoniśomanasikārasya bhavati prajñaptiḥ (l) abhūtaparikalpe asati
ayoniśomanasikārasya (3)na bhavati prajñaptiḥ |

abhūtaparikalpa iti kim* | yad idaṃ ātmā sattvo jīvaḥ puruṣapudgalo jantur manuḥ mānavaḥ kārako
vedakaḥ ayam ucyate abhūtaḥ ¹⁶⁴ (l) aśrutavān prthagjanāḥ ātmeti vā kalpayati parikalpayati (l)
sattvajīvapuruṣamanujamānavakārakavedaka iti kalpayati parikalpayaty(l) ayam ucyate a(4)bhūtaparikalpaḥ
| iti hy abhūtaparikalpe saty ayoniśomanasikārasya bhavati prajñaptiḥ | abhūtaparikalpe asaty
ayoniśomanasikārasya na bhavati prajñaptiḥ | ayoniśomanasikāre saty avidyāyā bhavati prajñaptiḥ ||
ayoniśomanasikāre asaty avidyāyā na bhavati prajñaptiḥ | avidyāyām satyām saṃ(5)skārāṇām bhavati
prajñaptiḥ | avidyāyām asatyām saṃskārāṇām na bhavati prajñaptiḥ | peyālam || yāvaj jātyām jarāmaṇasya
bhavati prajñaptiḥ | jātyām asatyām jarāmaṇasya na bhavati prajñaptiḥ |

¹⁶³ 藏訳 (D Kha268b2-5, P Dsi294b5-295a3, H23a6-b7) :

ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་ཡོད་ན། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་གདགས་པར་འབྱུར་གྱི། ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་མེད་ན། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་གདགས་པར་མི་འབྱུར་གྱི།
ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་གང་ཞིན། འདི་ལྟ་སྟེ། བདག་དང་། ལམས་ཅན་དང་། སྟོག་དང་། རྒྱལ་ཅན་དང་། གང་ཟག་དང་། རྒྱུ་བཟོ་དང་། ཤིང་ལས་སྐྱེས་དང་། ཤིང་ཅན་དང་། རྒྱུ་བཟོ་དང་། རྒྱུ་བཟོ་དང་། རྒྱུ་བཟོ་དང་། རྒྱུ་བཟོ་དང་།
དེ་ནི་ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་ཞེས་བྱའོ། ། སྟོན་མི་སྟེ་བོ་ཐོས་པ་དང་མི་ཐུན་པ་རྣམས་བདག་ཅས་རྟོག་ཅིང་ཡོངས་སུ་རྟོག་པ་དང་། ལམས་ཅན་དང་། སྟོག་དང་། རྒྱལ་ཅན་དང་། ཤིང་ལས་སྐྱེས་དང་། ཤིང་ཅན་དང་། རྒྱུ་བཟོ་དང་།
ཚོར་བ་པོ་ཞེས་རྟོག་ཅིང་ཡོངས་སུ་རྟོག་པ་དེ་ནི་ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་ཞེས་བྱའོ། །
དེ་རྣམས་ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་མི་རྟོག་པ་ཡོད་ན། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་གདགས་པར་འབྱུར་གྱི། ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་མེད་ན། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་གདགས་པར་མི་འབྱུར་གྱི། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་གདགས་པར་མི་འབྱུར་གྱི།
མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་ཡོད་ན། མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་ཡོད་ན། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་མེད་ན། མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་མེད་ན། མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་མེད་ན། མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་མེད་ན། མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་མེད་ན།
འདྲ་བྱེད་རྣམས་གདགས་པར་མི་འབྱུར་པ་ནས་སྐྱེ་བ་ཡོད་ན། ཅེ་ནི་གདགས་པར་འབྱུར་གྱི། རྒྱུ་བཟོ་དང་། ཅེ་ནི་གདགས་པར་མི་འབྱུར་པའི་བར་དུ་གོང་མ་བཞིན་དུ་བྱུར་རོ། །

玄奘訳 (T11.200b11-24) :

諸長者。不實分別。若有則有假立不正作意。不實分別若無。則無假立不正作意。

云何名爲不實分別。謂我。有情。命者。丈夫。數取。生者。意生。摩納婆。作者。受者。是名不實。而諸無聞凡夫。妄起如是我分別。有情分別。命者分別。丈夫分別。數取分別 (梵本にはない)。生者分別。意生分別。摩納婆分別。作者分別。受者分別等分別故。是爲不實分別。

諸長者。如是。不實分別。若有則有假立不正作意。不實分別。若無則無假立不正作意。諸長者。不正作意若有。則有假立無明。不正作意若無。則無假立無明。無明若有則有假立諸行。無明若無則無假立諸行。如是乃至生若有。則有假立老死。生若是無。則無假立老死。

法護等訳 (T11.786c15-28) :

虚妄分別有故。不如理作意即可施設。虚妄分別無故。不如理作意無所施設。

何名虚妄分別。謂我人衆生壽者補特伽羅儒童意生作者受者。此名虚妄〔。〕愚夫異生無聞之者。於我人衆生壽者等中。而生遍計。此名分別。總而言之故名虚妄分別。

此虚妄分別有故。不如理作意即可施設。虚妄分別無故。不如理作意無所施設。此虚妄分別及不如理作意有故。無明即可施設。二法無故。無明亦復無所施設。無明有故。而彼諸行即可施設。無明無故。諸行亦復無所施設。總略而言。乃至生法有故。而彼老死即可施設。生法無故。老死亦復無所施設。

¹⁶⁴ 校訂では、kāra[ko vedakaḥ ayam ucyate abhūtaḥ]とある。また、ここでは、両漢訳 (玄奘：是名不實；法護等訳：此名虚妄)によれば、ayam ucyate abhūtaḥとなるが、藏訳の「དེ་ནི་ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པ་ཀུན་ཏུ་རྟོག་པ་ཞེས་བྱའོ།」によれば、ayam ucyate abhūtaparikalpaḥとすべきであろう。

【訳】虚妄分別が存在しているとき、非如理作意の仮名があるが、虚妄分別が存在していないとき、非如理作意の仮名はない。

虚妄分別とは何か。すなわち、我 (ātman, アートマン)・衆生 (sattva)・命者 (jīva)・丈夫 (puruṣa)・補特伽羅 (pudgala)・生物 (jantu)・人 (manuṣa)・摩納婆 (mānava)・作者 (kāraṇa)・受者 (vedaka)であるもの、こういうものが虚妄 (abhūta) と呼ばれる。〔法を〕聞いたことのない凡夫は、我 (アートマン) というものを〔誤って〕作り出して分別し、あるいは、衆生・命者・丈夫・人・摩納婆というものを〔誤って〕作り出して分別する。これが虚妄分別と呼ばれる。

だから、虚妄分別が存在しているとき、非如理作意の仮名があるが、虚妄分別が存在していないとき、非如理作意の仮名はない。非如理作意が存在しているとき、無明の仮名があるが、非如理作意が存在していないとき、無明の仮名はない。無明が存在しているとき、諸行の仮名があるが、無明が存在していないとき、諸行の仮名はない。略言すれば、乃至、生が〔存在しているとき〕、老死の仮名があるが、生が存在していないとき、老死の仮名はない。

ここでは、虚妄分別 (abhūtaparikalpa) 中の虚妄 (abhūta) は、アートマン (ātman) 等とされることが分かる。それによって、ここの虚妄分別 (abhūtaparikalpa) とは、アートマン等の実在でないものを〔誤って〕作り出して分別するという意味で取れるであろう¹⁶⁵。また、ここでは虚妄分別が非如理作意の因であると繰り返されていることも確認できる。

3. 非如理作意の因について

先に述べたように、『雑阿含』第334経「有因有縁有縛法経」では非如理作意と無明とは相互に因となるものであった。では、大乘經典ではどうなのであろうか。今は、『菩薩藏経』以外の大乗経論における、非如理作意の因について考察してみたい。まず、関連する記述が、曼陀羅仙共僧伽婆羅訳『大乘宝雲経』に見られる¹⁶⁶。次の通りである。

是諸煩惱從何縁生。是諸因縁復依何生。即得知見煩惱因縁則是無明。無明因縁不善思惟。不善思惟復何因生。不聽正法。不聽正法復何因縁。不近善友。(T16.266c24-28)

ここでは、非如理作意の因として「不聽正法」が上げられていることが見て取れる。また、別の概念を因としてあげる經典が存在する。實叉難陀訳『大方廣佛華嚴経』である。内容は次の通りである。

¹⁶⁵ 松田和信 [2017, p. 3] はこの点について次のように述べる。

唯識思想では、經典に説かれる虚妄分別を依他起性と解釈した。

¹⁶⁶ また、『大乘宝雲経』以前に訳された『菩薩地持経』にも関連する記述が認められる。次の通りである。

彼一切縁起名想言説。所謂無明行識名色六入觸受愛取有生老病死憂悲苦惱。是名煩惱隨説因。(中略) 不近善友、聽受正法。習不正思惟。無明等生。是名攝因。(T30.903c2-8)

この内容に基づけば、『大乘宝雲経』において、「不聽正法」を非如理作意の因とする内容は、『菩薩地持経』から影響を受けた可能性も想起される。

不正思惟。起於妄行。行於邪道罪行福行不動行。積集增長。於諸行中。植心種子。有漏有取。復起後有。生及老死。（T10.193c21-23）

ここでは、非如理作意の因として「妄行」が上げられていることが見て取れる。このように、大乘經典を分析すれば、非如理作意の因としては、「不聽正法」や「妄行」が挙げられることが理解できよう。

一方、大乘論書においては經典とは異なる見解が示される。『成唯識論述記』には次のように説かれる。

【問】無明以誰爲因。無因應有始。有因應無窮。【答】以不如理作意爲因。（中略）【問】老死有果不。若無者生死應有終。有者應無窮。此亦應説 【答】有。謂憂悲苦惱。（中略）【問】非理作意以誰爲因。憂悲以誰爲果。【答】此顯輪轉因果已周故、不須説。即是影顯已具足故。（T43.525a8-b2）

当該箇所は、無明の因、老死の果、非如理作意の因等について言及する箇所である。その中、非如理作意の因とは何かと問題を提起した際に、「此顯輪轉因果已周故、不須説。即是影顯已具足故」と述べて、非如理作意の因とは何かについて答えない。つまり、ここでは因は存在しない、つまり「無因」とであると解答しているとみなせよう。また、同一の見解を示すものとして、法蔵述『華嚴經探玄記』卷第十三に「一不自生。二不他生。三不共生。四不無因生。」という四句を解釈している文脈中に、挙げられている。ここでは小乗における「非如理作意」の原因について言及する。次の通りである。

四、小乗中、許無明支前、不正思惟、託虛而起。似若無因。（T35.351a27-28）

ここでは、小乗の立場として、無明支の前の不正思惟は無因であることが示される。つまり、『成唯識論述記』と同様に、非如理作意の因として無因を説くのである。

以上、いくつかの経論を参照したが、非如理作意の因としては、「不聽正法」や「妄行」や「無因」が想定されていることが確認できた。つまり、「家主品」で説かれたように、非如理作意の因を虚妄分別とするのは、『菩薩藏經』独自のものであると言えよう。

第四項、小結

以上、本節では、十二支縁起の因として説かれる虚妄分別や非如理作意について検討を行った。その結果、当該箇所は、十四支縁起として説かれたものではなく、あくまで十二支縁起生起の背景を述べたものであることが確認された。そして、無明の原因として非如理作意を想定する点については、様々な経論で確認することができ、一般的な考え方であったことも確認できた。その一方で、虚妄分別を非如理作意の因とする考え方は、他の経論に見出すことができず、『菩薩藏經』「家主品」独自の考え方であったことが指摘できた。つまり、非如理作意の原因として、アートマン（ātman）等の実

atha khalu śailo yakṣaḥ kimbhīraputraḥ imān evaṃrūpān mārgavyūhān kṛtvā audārikam ātmabhāvam
 abhinirmimīya saparśatkaḥ tuṣṭa udagra āttamanāḥ pramuditaḥ prītsaumanasyajataḥ saṃhr̥ṣṭacittaḥ
 kalyacitto mṛducitto viprasa(6)nnacitto vinivaraṇacittaḥ prahlāditacitto buddhanimnacitto
 dharmanimnacittaḥ saṃghanimnacitto bodhyacalacitto (‘)kāmpyacitto samacittaḥ
 sarvatrailokyaprativiśiṣṭacittaḥ sarvasattveṣu maitracittaḥ karuṇācitto muditācittaḥ upekṣācittaḥ
 sarvabuddhadharmabhājanacittaḥ sārācitto dṛḍhacittaḥ abhedyacitto (‘) (7)pūticittaḥ
 śrāvakaḥ pratyekabuddhabhūmyapatanaḥ sarvabodhisattvabhūmiṣpādanacittaḥ yena bhagavāṃs
 tenopasaṃkrāmad (l) upasaṃkrama bhagavataḥ pādaḥ śīrasābhivandya bhagavantam triṣṭradakṣiṇīkṛtya
 ekānte sthāt* (l) ekāntasthitaś ca śailo yakṣaḥ kimbhīraputraḥ prāṃjalībhūto bhagavantam gāthābhir
 adhyabhāṣata |

kṛtā me lokanāthasya agrā pūjaniruttarā |

agro buddhaḥ siyāṃ¹⁶⁹ loke agradharmāṇa deśakaḥ |

daśabhir balaiḥ samupeto vaiśāradye pratiṣṭhaḥ |

tvareyam artham sattvānāṃ yathā kurvasi nāyaka ||……

【訳】 その時、金毘羅の息子であるシャーイラ葉又はそれらのような種類の道に対する莊嚴をしてから、巨大なる身体を現出して眷属とともに歓喜と喜悅と狂喜と歓樂と快樂と愉快が生じながら、嬉しい心・安樂な心・柔軟な心・清浄な心・障礙を離れた心・清涼な心・仏に趣く心・法に趣く心・僧伽に趣く心・菩提から去らない心・動揺しない心・無等の心（asamacittaḥ）¹⁷⁰・一切の三つの世界を乗り越えた心・一切衆生のための慈心と悲心と喜心と捨心・一切仏法の器になる心・堅固な心・堅牢な心・破壊されないべき心・腐敗しない心・声聞と独覺の地に陥らない心・一切菩薩地を成就する心を持って、世尊がいるところ、そこに近づいた、近づいてから、頭によって世尊の両足に敬礼して世尊を右に三回に廻ってから、一面に立った。また、一面に立っているシャーイラ葉又はという金毘羅の息子は合掌して諸偈によって世尊に話した。

私は世間の庇護者に対して最勝な無上供養をした。

私は世間に最勝な諸法を演説し、最上者である仏陀になりたい。

十力を具足し、〔四〕無畏に安住してから、

導師よ。あなた様がするように、〔そのように〕衆生たちに対する利益することを私は待ちきれないほど早くしたい。……

願我當圓於十力 歡喜善住四無畏
 廣大利益諸衆生 如佛世尊諸所作
 ……

¹⁶⁹ 筆者： siyāṃ = siyā, opt. √As (BHS. I .p. 205) ; また、法護訳では「願我當得～」という訳から、このsiyāṃを√Asのopt. 1sg.であると推測する。

¹⁷⁰ 梵文写本では、ここでは(a)samacittaḥか或はsamacittaḥかはどちらでも読めるが、玄奘訳では「無等等心」とある。法護訳でも「無等等心」とある。蔵訳でも「མི་མཉམ་པ་དང་མཉམ་པའི་མཉམ་པ་ (無等等心)」とある。

このように、本品では、シャーイラが成仏道の教えを強く渴望していることが読み取れる。つまり、菩薩蔵法門はシャーイラの願いを仏が聞き入れる形で説かれるのである。

さて、仏に成仏道の説示を強く望んだシャーイラは仏や比丘たちに施しを与える。次の通りである。

梵文写本 (MS15a1-5) ¹⁷¹ :

atha khalu tasya (2) śailasya yakṣasya kimbhīraputrasyaitad abhavat* | itaḥ kila bhagavāṃ gr̥ddhrakūṭaṃ parvatarājam abhiroksyati (|) tatra mārṣā yathāśaktiyathābalaṃ bhagavataḥ pūjakarmaṇe autsukyam āpadyadhvam* ||

atha khalu śailo yakṣaḥ kimbhīraputraḥ saparivāro rājagṛhaṃ mahānagaram upādāya yāvad gr̥ddhrakūṭaḥ parvatarājaḥ sa(3)rvan taṃ mārḡam apagataśarkarakatḥallasthānukaṇṭakam akarot* | śuddham ādarśamaṇḍalam ivākarot* sarvāvantan taṃ mārḡam śuddham kṛtvā gandhodakapariṣiktam akarot* (|) nīrantaracīvaraprajñaptam ca taṃ mārḡam akarot* (|) puruṣapramāṇamātram ca puṣpasamstarasamstṛtam ca taṃ mārḡam akarot* (|) cchatradhvajapatākāsamaṇḍamkṛtam ca (4) taṃ mārḡam akarod (|) abhijātasāravaraḡandhaghaṭikāni dhūpitam ca taṃ mārḡam akarot* (|) avasaktapaṭṭadāmasamaṇḍamkṛtam copary antarikṣam akarot* (|) nānāttūryaninādanirghoṣam ca taṃ mārḡam akarot* (|) iṣukṣepapramāṇamātram cotpalakumudapuṇḍarīkasamaṇḍchannam cakravākanikūjitaṃ ca taṃ mārḡam akarot* | suvarṇapaṭṭaprajña(5)ptaṇ ca taṃ mārḡam akarot* (|) hemajālasaptaratnajālasamaṇḍchannam ca taṃ mārḡam akarot* (|)

【訳】その時、金毘羅の息子であるシャーイラ〔という名前の〕彼薬叉には次の考えがあった。人の言う如く、世尊はこれより山の王である鷲峯に登るであろう。そこで、諸子らよ。あなたたちは能力の及ぶ限りと力の及ぶ限りに、世尊を供養するために、熱心を起してください。

¹⁷¹ 蔵訳 (D Kha278b2-279a1, P Dsi304b6-305a5, H38b4-39a7) :

དེ་ནས་གནོད་བྱིན་ཅི་འཛིགས་ཀྱི་བུ་རི་བོ་འདི་ལྷ་ས་ཏུ་སེམས་པར་བྱུང་། བཙུག་ཡུལ་འདི་ནས་རིའི་རྒྱལ་པོ་བྱ་ཆོད་ཀྱི་ཕུང་པོའི་རི་ལ་གཤེགས་ཞེས་གྲགས། [བདག་གིས་བཙུག་ཡུལ་འདི་ནས་ལ་དགེ་བའི་རྩ་བ་བྱ་ཆོད་པོ་ཞིག་བསྐྱེད་དོ། ལྷ་ས་ལོ། དེ་ནས་གནོད་བྱིན་ཅི་འཛིགས་ཀྱི་བུ་རི་བོས་རང་གི་འཁོར་ལ་སྐྱས་པ། གྲོགས་པོ་དག་ཤེས་པར་གྱིས་ཤིག། བཙུག་ཡུལ་འདི་ནས་རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ཀྱི་གོང་ཁྱེད་ཆོད་པོ་ནས་རིའི་རྒྱལ་པོ་བྱ་ཆོད་ཀྱི་ཕུང་པོའི་བར་གྱི་ལམ་དེ་ཐམས་ཅད་གསལ་གསལ་དང་། གྲིམ་དང་། རྫོང་དུ་མ་དང་། ཆོར་མ་རྒྱས་མེད་པར་བྱས་སོ། ཁའ་ཡོང་གི་དཀྱིལ་འཁོར་སྒར་དག་པར་བྱས་སོ། ལམ་དེ་དག་ཐམས་ཅད་བསལ་ནས་སྐྱོས་ཀྱི་རྒྱས་ཀྱི་ནུ་ཁྱ་ཆག་ཆག་བཏབ་སོ། ལམ་དེར་གོས་ནི། མཚན་མེད་པར་བཏོང་ངོ། ལམ་དེར་མེ་གང་ཙམ་ཏུ་མེ་རྟག་གིས་ཆལ་བར་བཟུམ་སོ། ལམ་དེ་དག་ཏུ་གདུགས་དང་། རྒྱལ་མཚན་དང་། བ་དན་དག་གིས་ཤིན་ཏུ་བརྒྱན་དོ། ལམ་དེར་བདུག་སྐྱོས་དམ་པའི་སྤྱིང་པོར་བ་ཀྱི་རྫོད་ནས་བདགས་སོ། རྗེང་གི་བར་སྐང་ལས་དར་གྱི་ལྷ་མི་དབྱངས་ཏེ་ཤིན་ཏུ་བརྒྱན་དོ། ལམ་དེར་སེལ་སྐྱར་སྐྱ་ཆོགས་ཀྱི་སྐྱ་འཁྲུལ་པར་བྱས་སོ། ལམ་དེ་ནས་མདའ་རྒྱང་གང་ཚུན་ཆད་ཙམ་མེ་རྟག་ལྟུགས་ལ་དང་། ཀུ་མ་ཏ་དང་། བུ་དཀར་པོས་ཁབས་མེད་རྩལ་སྐྱ་འབྱེད་པར་བྱས་སོ། ལམ་དེ་གསེར་སྐྱབས་པས་རབ་ཏུ་གཤེགས་སོ། ལམ་དེ་གསེར་གྱི་དཔ་བ་དང་། རིན་པོ་ཆེ་སྐྱ་བདུན་གྱི་དཔ་བས་རབ་ཏུ་གཤེགས་སོ།

玄奘訳 (T11.204b24-c11) :

爾時金毘羅子世羅。[即於佛前開佛授記。歡喜踊躍得未曾有。]作如是念。今者世尊將往鷲峯山王。[我當復應於如來所殖少善根。作是念已。告其衆曰。卿等當知。如來當發王舍大城昇鷲峯山。]卿等宜可發勇猛心。隨其力能辦諸供養。時彼世羅即與官屬。從王舍城至鷲峯山。中間道路屏除草穢。瓦礫石株^板毒刺。極令遍淨如明鏡面。又以香水霑灑其地。敷勝妙衣遍于中路。散布名華量與人等。燒妙堅香順路普熏。列樹幢旛¹⁷¹懸諸寶蓋。於虛空中張施繒綵。條別間設羅布其上。又作種種天諸音樂。前後充滿。其路極廣盡一箭道。皆遍覆以水生諸花。所謂羶鉢羅花[鉢特摩花]拘質陀花奔茶利花。又以鴛鴦勝鳥間錯其花。行列道側。於彼道上。又以金縷繒綵而用敷之。上施七寶所成殊妙等網。遍覆于道。

法護等訳 (T11.791a11-26) :

爾時大山夜叉即作是念。世尊今時往詣王舍大城鷲峯山中。[我今宜應於世尊所少植善根。即時告語彼自會中夜叉衆言。]諸仁者。[汝等當知。世尊將詣王舍大城鷲峯山中。]汝等宜應發勤勇心各隨力能爲佛世尊作供養事。[。]時大山夜叉又言已。即與自會眷屬。從王舍大城乃至鷲峯山中。所經道路皆悉除去土石砂礫。如淨圓鏡。於道路中以淨香水周匝遍灑。復以妙衣於其道中相續布設。復於道中處處安施。等人分量諸殊妙花。幢幡寶蓋種種莊嚴。復¹⁷¹置殊妙塗香寶瓶及諸妙香。寶繩交絡垂諸花瓔。以爲嚴飾。復於空中奏妙音樂。又復敷置盡一箭道。優鉢羅花。俱母陀花。奔拏利迦花等。復有異鳥翔鳴道中。金繩交絡有七寶網。及以金網彌覆其上。[。]

その時、金毘羅の息子であるシャーイラ菓叉は眷属に伴われて王舎大城より山の王である鷲峯までのそれ道にすべてに砂と礫と杭と棘とを除くことをした。円い鏡のように清浄にした。それ道のすべてを清浄にしてから、香水によって注ぎまわることをした。また、それ道に隙間のない衣服によって敷くことをした。また、それ道に人の量の程の花の層によって散り敷くことをした。また、それ道に傘蓋と旗布によって虚空 (ākāsam)¹⁷²を飾ることをした。また、それ道に純粹であり、堅固であり、最も精選された諸々の香炉を香を焚くことをした、また、それ道に掲揚されている絹の吹き流しによって、上空をみごとに飾ることをした。また、それ道に種々の音楽の音によって、響き渡ることをした。また、それ道を箭の射程の広さほど〔の範囲に〕青蓮華と白睡蓮華と白蓮華とによって覆うことと、鴛鴦によって轉ることとをした。また、それ道に金色の布によって敷くことをした。また、それ道に黄金の瓔珞と七宝の瓔珞によって覆うことをした。

このように、シャーイラは仏の教えを聞くことを強く願い、説法されるであろう場所である鷲峯山への道を飾る。このことから、このような装飾は聞法衆が行うべき、聞法前の供養として説示されているのであり、菩薩藏法門の内容とは一線を画する内容となっていると言えよう。

また、世尊は、諸々の金毘羅菓叉たちに授記する際に、数居る中から、特に彼を名指し、授記を行う。今は、その偈文中の一偈を見てみたい。

梵文写本 (MS14b2-3)¹⁷³ :

putras tatra kimbhīrasya śailo nāma mahardhikaḥ |

tasyā(3)pi cittam utpannam buddho loka bhava ahaṃ ||

【訳】その中に、ある金毘羅には大神通を持ち、シャーイラ (śaila) という名前の息子がいる。

彼にも「私は現世に仏陀になる」という発心があった。

ここでは、シャーイラは成仏の発心を有する者として描かれる。後述するが¹⁷⁴、成仏するためには発心が必要である。つまり、ここでシャーイラは、菩薩藏法門の享受者として、聞法衆の代表として表現されているのであろう。

¹⁷² ākāsam : 玄奘訳ではそれに対する訳があるが、法護等訳と藏訳ではそれに対する訳がない。

¹⁷³ 藏訳 (D Kha277b5-6, P Dsi304a2, H37b3) :

དེ་ནས་ཅི་འཇིགས་དེ་ཡི་ལུ། རིན་ཆེན་ཐུང་པོ་ལྟུང་།
འཇིག་རྟེན་སངས་རྒྱལ་པ་དཔག་ཅིང་། དེས་ཀྱང་ལེགས་དེ་བཞུགས་པ་རྒྱལ།

玄奘訳 (T11.204a13-14) :

金毘子世羅 具大神通力

亦發大願心 我當成等覺

法護等訳 (T11.790b28-29) :

夜叉有子名大山 受夜叉身具神力

大山夜叉發淨心 願我當得成佛果

¹⁷⁴ 第三章第五節第二項。

以上、見てきたことに基つけば、「金毘羅葉叉品」は菩薩藏法門の説示に先立ち、状況を整えることを意識した内容となっていることが見て取れる。つまり、先に述べた第一品「家主品」と同様に、菩薩藏法門を直接的に述べた内容ではないのである。また、後の第三品から菩薩藏法門が説かれるが、授記の条件に適っていることから、授記の対象者としてシャーイラが挙げられる。つまり、『菩薩藏經』ではこのシャーイラが聞法衆の代表として表現され、菩薩藏法門を享受するのである。

第五節、成仏道としての菩薩藏法門

第一項、はじめに

本章の第一節で、『菩薩藏經』の構造を表で示したが、第三「菩薩觀察品」から第十二「大自在天授記品」までの内容¹⁷⁵、すなわち、菩薩藏法門の内容は、成仏道の説示と言えよう。この成仏道であるが、修道論的に分析すれば、次の四つの段階に区分することができる。それぞれを一文字でまとめれば、次のようになる。

第三品：願（発菩提心、菩薩になる）

第四品：信（如来の十不思議である仏果を信じる）

第五品より第十二品の四摂事までの内容：行（四無量心、六波羅蜜多、四摂法を行ずる）

第十二品における世尊の本生譚の内容：果（成仏の授記を頂く）

今は、この区分に従い、菩薩藏法門という成仏道の内容を検討してみたい。

第二項、願—発菩提心

（一）、はじめに

仏となるためには菩提を志す心である菩提心を起こす必要がある。そしてこのような菩提心を有するものが菩薩と言われる。さて、第三品「菩薩觀察品」では、菩提心を起こすことと、菩提心を起こした者が有すべき徳性が説かれている。そこで、今はこのような仏に至る段階を「願」として位置づけ、第三品の内容を菩提心と、菩提心を有する者の特性の二点から分析してみたい。

（二）、菩提心

『菩薩藏經』において菩薩藏法門、すなわち成仏道の説示は、第三品における舎利弗の世尊に対する質問から始まる。舎利弗は菩薩はいかなる法を備えれば良いのかと世尊に尋ねる¹⁷⁶。その質問に対して世尊は次のように述べる。次の通りである。

¹⁷⁵ 第十二品の流通分の内容を除く。

¹⁷⁶ 梵文写本（MS16b4-6）：

evam ukte āyusmāṃ cchāripuro bhagavantam etad avocat* | katibhir bhagavan dharmmaiḥ samanvāgatā bodhisattvā mahāsattvā (1) anavadyakāyakarmāṇo bhavanti anavadyavākkarmāṇaḥ anavadyamanaskarmāṇaḥ pariśuddhakāyakarmāṇaḥ(5) pariśuddhavākkarmāṇaḥ pariśuddhamanaskarmāṇaḥ acalitakāya-karmāṇaḥ acalitavākkarmāṇaḥ acalitamanaskarmāṇo bhavanti | na śakyās te mārair mārā-kāyikābhir vā devatābhiś cālayitum |

梵文写本(MS17a1-2)¹⁷⁷：

atha khalu bhagavān āyusmantam śāriputram etad avocat* (I) (2) ekadharmmeṇa śāriputra samanvāgato bodhisattva etāṃś cānyāṃś cāparimitān buddhadharmān pariḡrṇāti katamenaika-dharmmeṇa yad idam āśayasampannena bodhicittenānena śāriputraikadharmmeṇa samanvāgato bodhisattvaḥ etāṃś cānyāṃś cāparimitān buddhadharmān pariḡrṇāti |

【訳】その時、世尊は舍利弗長老にこう言った。「舍利弗よ。一法を備えた菩薩はこれら〔諸法〕と他の無量の諸仏法を摂受する。どんな一法か。すなわち、深心 (āśaya) を備えた菩提心である。舍利弗よ。この一法によって成就された菩薩は、これら〔諸法〕をも、他の無量の諸仏法をも掴む」と。

ここで世尊は舍利佛に対して、「深心 (āśaya) を備えた菩提心」を備えるべきであると述べる。そして、この菩提心を備えることによって、他の様々な法を獲得することができると示す。つまり、深心

tataḥ sarvajñatā cittotpādāt* | bhūmibhūmyākramaṇakuśalāś ca bhavanti anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair nāyakabhūtā(6) vināyakabhūtā pariṇāyakabhūtā ulkabhūtāḥ tīrthabhūtāḥ setubhūtāḥ naubhūtāḥ tārakāḥ pāragā bhavanti layanāni trāṇāni śaraṇāni parāyaṇāni ca bhavanti sarvasattvānām (I) na ca śakyante tataḥ sarvajñatācittotpādād vinivarttayitum* ||

【訳】そのように言われた時に、舍利弗長老は世尊につぎのことを言った。「世尊よ。菩薩摩訶薩たちは幾つかの法を備えれば、過失のない身業を持つ者となるのか、過失のない語業を持つ者となるのか、過失のない意業を持つ者となるのか、清浄な身業を持つ者となるのか、清浄な語業を持つ者となるのか、清浄な意業を持つ者となるのか、不動なる身業を持つ者となるのか、不動なる語業を持つ者となるのか、不動なる意業を持つ者となるのか。彼らは諸魔あるいは諸魔の従者に属する天たちによって、一切智に発心することから動揺されないのか。彼らは地から地に登ることに対する善巧を持つ者になり、世間諸法によって汚されたことのない者になり (anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair と相当する内容は玄奘訳と法護訳と蔵訳とにない)、指導者となり、調伏者となり、導き回る者となり、炬火となり、梯子となり、橋となり、船となり、渡る者となり、彼岸に行く者となり、また、一切衆生たちの諸々の住み所となり、諸々の避難処となり、諸々の帰依となり、諸々の最後の頼りとなるのか。また、彼らはそれ一切智に発心することからやめさせられることできない者となるのか」と。

蔵訳 (D Kha281b5-282a3, P Dsi308a2-8, H43b3-44a3)：

དེ་ནས་ཅེས་བཀའ་རྒྱལ་ནས་བཅོམ་ཐུན་འདས་ལ་ཚད་ཐུན་པ་ཤུ་འི་བྱ་ལ་འདི་རྒྱ་ཅེས་བཀའ་དྲི་། ཁཛཱ་ཐུན་འདས་ ཅོས་ཏུ་དང་ཐུན་ན། བྱང་རྒྱལ་མེས་དཔལ་རྣམས་ལུས་ཀྱི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དག་ལགས། ངག་གི་ལས་ཁ་ ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དང་། ཡིད་ཀྱི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དང་། ལུས་ཀྱི་ལས་ཡོངས་སུ་དག་པ་དང་། ངག་གི་ལས་ཡོངས་སུ་དག་པ་དང་། ཡིད་ཀྱི་ལས་ཡོངས་སུ་དག་པ་དང་། ལུས་ཀྱི་ལས་མ་གཡོས་པ་དང་། ངག་གི་ལས་མ་གཡོས་པ་ དང་། ཡིད་ཀྱི་ལས་མ་གཡོས་པ་རྣམས་ལགས། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་མེས་བསྐྱེད་པ་དེ་ལས་བདུད་དམ་བདུད་ཀྱི་མིས་ཀྱི་ལྷ་རྣམས་ཀྱིས་བསྐྱེད་མི་རྣམས་པ་རྣམས་ལགས། ས་ནས་སར་འཕར་བ་ལ་མཁས་པ་རྣམས་ལགས། མེས་ཅན་ཐམས་ཅད་ ཀྱི་འདྲན་པར་ བྱར་པ་དང་། རྣམ་པར་ འདྲན་པར་བྱར་པ་དང་། ཡོངས་སུ་འདྲན་པར་བྱར་པ་དང་། རྒྱན་མར་བྱར་པ་དང་། རྟོགས་སུ་བྱར་པ་དང་། རམ་པར་བྱར་པ་དང་། བྱར་བྱར་པ་དང་། རྒྱལ་བ་པོ་དང་། བ་ཙེ་ཏུ་འགྲོ་བར་བྱར་པ་ དང་། གནས་དང་། མགྲོན་དང་། རྒྱལ་དང་། དཔྱད་གཉན་ཏུ་བྱར་པ་དང་། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་མེས་བསྐྱེད་པ་དེ་ལས་བསྐྱེད་པར་མི་རྣམས་པ་རྣམས་ལགས།

玄奘訳 (T11.205c24-206a3)：

舍利子白佛言。世尊。菩薩摩訶薩成就幾法。身業無失。語業無失。意業無失。成就幾法。身業清淨。語業清淨。意業清淨。成就幾法。身業不動。語業不動。意業不動。不爲天魔及魔軍衆之所燒轉。從初發一切智心修行正行。地地增勝善巧方便。爲一切衆生作勝導師。爲普導師。爲大照炬。爲大梯陞。爲橋爲船。爲濟度者。爲彼岸者。爲舍爲救。爲歸爲趣。而能不捨一切智心。

法護等訳 (T11.792b20-28)：

爾時、尊者舍利子即白佛言。世尊、菩薩摩訶薩成就幾法。即得身業無諸過失。語業無諸過失。意業無諸過失。身業清淨語業清淨意業清淨。身業無動語業無動意業無動。天魔外道力不能制。然後深發一切智心。地位諸善次第得成。能爲一切衆生作所歸向。作光明炬。作大河流。作大橋梁。作大船筏濟渡一切到於彼岸。爲舍爲救爲歸爲趣。於一切智心而無動轉。

¹⁷⁷ 蔵訳 (D Kha282a6-b1, P Dsi308b5-7, H44b1-3)：

དེ་ནས་བཅོམ་ཐུན་འདས་ཀྱིས་ཚད་ཐུན་པ་ཤུ་འི་བྱ་ལ་འདི་རྒྱ་ཅེས་བཀའ་རྒྱལ་དྲི་། ཤུ་འི་བྱ་ བྱང་རྒྱལ་མེས་དཔལ་རྣམས་ལུས་ཀྱི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དག་ལགས། གཞན་ཡང་དཔག་ཏུ་མེད་པ་དག་ཡོངས་སུ་འདྲན་དྲི་། ཅོས་གཅིག་པོ་གང་ཞེ་ན། འདི་རྒྱ་གྲི་ བསམ་པ་ལུན་སྤྱོད་ཅེས་བཀའ་དྲི་བྱ་ཤུ་འི་བྱ་ བྱང་རྒྱལ་མེས་དཔལ་རྣམས་ལུས་ཀྱི་ལས་ཁ་ན་མ་ཐོ་བ་མ་མཆིས་པ་དག་ལགས། གཞན་ཡང་དཔག་ཏུ་མེད་པ་དག་ཡོངས་སུ་ འདྲན་དྲི་།

玄奘訳 (T11.206a17-21)：

爾時佛告長老舍利子。善哉善哉。吾今當爲分別解說。舍利子。菩薩摩訶薩成就一法。則能攝受汝所問法及餘無量無邊佛法。何者一法。謂菩提心及備信欲。舍利子。是名菩薩摩訶薩成就一法則能攝受無邊佛法。

法護等訳 (T11.792c13-17)：

爾時世尊告尊者舍利子言。舍利子。汝今當知。菩薩若能成就一法。於一處於多處。普能攝受無量佛法。何者一法。所謂發起深固大菩提心。此即是爲菩薩成就一法於一處於多處。普能攝受無量佛法。

を備えた菩提心こそが、仏を志す求道者が最初に追求すべきものであると言えよう。では、ここで述べられた「深心 (āśaya)」や「菩提心」とは何なのであろうか。『菩薩藏經』における取扱をそれぞれ見てみたい。

梵文写本(MS17a2-6)¹⁷⁸：

【訳】その時、舎利弗長老は世尊に次のことを述べた。「世尊よ。深心とは如何なる種類のものか、菩提心とはどんなものか」と。そのように言われた時に、世尊は舎利弗長老に次のことを言った。

[illegible]

世尊。何等名爲信欲具足。復以何義名菩提心。佛告舍利子。信欲具足者。是謂堅實不可壞故。是謂牢固不可動故。言不動者無蹶失故。無蹶失者能善住故。能善住者不退轉故。不退轉者觀衆生故。觀衆生者大悲根本故。大悲根本者不疲倦故。不疲倦者成熟衆生故。成熟衆生者善知自樂故。善知自樂者無希望故。無希望者不染資具故。不染資具者爲衆生依故。爲衆生依者觀待下劣衆生故。觀待下劣衆生者爲救濟故。爲救濟者爲歸趣故。爲歸趣者不卒暴故。不卒暴者善觀察故。善觀察者無怨嫌故。無怨嫌者善調信欲故。善調信欲者無所存故。無所存者善清淨故。善清淨者妙鮮白故。妙鮮白者內離垢故。內離垢者外善清淨故。舍利子。如是堅實難壞。乃至內離於垢外善清淨者。是名信欲具足也。

舍利子白佛言。世尊。云何名深固。云何名菩提心。佛告舍利子言。深固者。即是眞實不破壞故。堅固無動故（按：梵文寫本では「*ṛddho calatvāt acalo skhalitatvāt*」とある）。無動即無退屈故。無退屈即善安住故。善安住即無退轉故。無退轉即善觀察衆生故。善觀察衆生即大悲根本故。大悲根本即廣大心故。廣大心即善知成熟衆生法式故。善知成熟衆生法式即自在妙樂故。自在妙樂即無種類故。無種類即無愛著故。無愛著即攝受衆生故。攝受衆生即善能觀察劣弱衆生故。善能觀察劣弱衆生即爲救爲歸不起恚心故。不起恚心即善觀視故。善觀視即無所得故。無所得即善意樂故。善意樂即無所有故。無所有即善清淨故。善清淨即自潔白故。自潔白即內無垢故。內無垢即外清淨故。舍利子。此如是等。從眞實不破壞至內無垢外清淨。斯諸法門乃名深固。

kīdrśam bodhicittam (|) anavamṛdyan tac cittam sarvakleśaiḥ (|) ananuprabaddham tac cittam anyayānāspr(7)haṇatayā (|) dṛḍham tac cittam asaṃhāryam sarvaparapravāḍibhiḥ | abhedyam tac cittam sarvamāraiḥ | dhruvam tac cittam kuśalamūlasaṃbhāropacitavāt | acalam tac cittam buddhadharmasprhaṇatayā (|) susthitam tac cittam bodhisattvabhū(MS17b1)myām | nirantaram tac cittam apratipakṣatvāt* (|) vajropamam tac cittam sarvabuddha-dharmmanirbhedikatayā (|) samam tac cittam aviśamatvāt sarvasattvāśayeṣu (|) viśuddham tac cittam prakṛtyasaṃkliṣṭatvāt* (|) vimalam tac cittam prajñāvabhāsakara(2)tvāt* (|) vistīrṇam tac cittam sarvasattvāvākāśatvāt | vipulan tac cittam gaganasadrśatvāt* (|) anāvaraṇam tac cittam asaṅgajñāna-saṃpreṣitam(|) sarvatrānugatam tac cittam mahākaruṇāvvyavacchinnatvāt* (|) abhigamanīyam tac cittam vidvatpraśastatvāt* (|) bī(3)jabhūtam tac cittam sarvvabuddhadharmāṇām | pratiṣṭhānam tac cittam sarvasukhavastūṇām | prañidhyudgatam tac cittam śīlena | durāsadam tac cittam kṣantīyā | durdharṣam tac cittam vīryeṇa | upaśāntam tac cittam dhyānaiḥ | anupaghātam tac cittam prajñāsaṃbhāreṇa | api ca mūlam tac cittam tathāgataśīlaskandhasya samādhiskandhasya prajñāskandhasya vimuktiskandhasya (|) (4) mūlam tac cittam tathāgatavimuktijñānadarśanaskandhasya (|) mūlam tac cittam daśānām tathāgatabalāṇām | caturṇām vaiśāradyanām aṣṭadaśānām āveṇikānām buddhadharmāṇām | api ca śāriputra bodhimayam tac cittam tenocyate bodhicittam iti (|)

【訳】菩提心とはどんなものであろうか。それ心は一切煩惱によって破壊されないものである。それ心は他の乗に対す熱望のない故に、魅惑されないものである。それ心は一切他の言論によって奪われないものである。それ心は一切魔によって破壊されないものである。それ心は善根の資糧によって積み重ねられた故に、不易のものである。それ心は仏法を熱望する故に、不動のものである。それ心は菩薩地によく安住したものである。それ心は対治されない故に、中断されない

佛復告舍利子。菩提心者何相何貌。舍利子。菩提心者無有過失。不爲一切煩惱之所染故。菩提心者相續不絕。不爲餘乘中所證故。菩提心者堅固難動。不爲異論所牽奪故。菩提心者不可破壞。一切天魔不傾敗故。菩提心者常恒不變。善根資糧所積集故。菩提心者不可搖動。必能獨證諸佛法故。菩提心者妙善安住。於菩薩地善安住故。菩提心者無有間斷。不爲餘法所對治故。菩提心者譬如金剛。善能穿徹佛深法故。菩提心者勝善平等。於諸衆生種種欲解無不等故。菩提心者最勝清淨。性不染故。菩提心者無有塵垢。發明慧故。菩提心者寬博無礙。含受一切衆生性故。菩提心者廣大無邊。如虛空故。菩提心者無有障礙。令無礙智遍行一切無緣大悲不斷絕故。菩提心者應可親近。爲諸智者所稱讚故。菩提心者猶如種子。能生一切諸佛法故。菩提心者爲能建立。建立一切喜樂事故。菩提心者發生諸願。由戒淨故。菩提心者難可摧滅。由住忍故。菩提心者不可制伏。由正勤故。菩提心者最極寂靜。由依一切大靜慮故。菩提心者無所匱乏。由慧資糧善圓滿故。復次舍利子。菩提心者即是如來尸羅蘊三摩地。蘊般羅若。蘊解脫。蘊解脫智見。蘊之根本也。又菩提心者即是如來十力四無所畏十八不共佛法之根本也。舍利子言。菩提心者謂以此心用菩提爲生體故名菩提心。

法護等訳 (T11.793a4-24) :

又舍利子。菩提心者。謂即彼心無諸過失。一切煩惱不能隨逐。彼心不樂餘乘。彼心堅固不爲一切邪外語言之所壞亂。彼心不破。一切魔衆而不能動。彼心決定。長養一切善根本行。彼心不動。愛樂佛法故。彼心善住。登菩薩地故。彼心無上。無對治故。彼心如金剛。一切佛法善決擇故。彼心平等。無高下故。彼心於一切衆生意樂清淨。自性無染故。彼心無垢。慧光照故。彼心廣大。容受一切衆生故。彼心無染。如虛空故。彼心無障礙。觀無礙智故。彼心於一切處隨應了知。大悲無斷故。彼心現證。清淨稱讚故。彼心成就一切智種子。圓滿一切佛法故。彼心安住普施一切樂事。誓願最勝故。彼心圓具淨戒。無缺犯故。彼心修持忍辱。離諸恚故。彼心精進。不懈怠故。彼心禪定。近寂靜故。彼心無害。具慧行故。又復彼心是眞實根本。成就如來戒蘊定蘊慧蘊解脫蘊解脫知見蘊。彼心是眞實根本。圓滿如來十力四無所畏十八不共法故〔。〕又舍利子。菩提所成之心。名菩提心。

もの(nirantaram)¹⁸⁰である。それ心は一切仏法を貫く故に、金剛の如きのものである。それ心は一切衆生に対する深心(āśaya)の中に、不平等であることのない故に、平等である。それ心は本性が汚されたことのない故に、清浄である。それ心は智慧によって光明を作る故に、離垢である。それ心は一切衆生を受け容れる余地がある故に、広大である。それ心は虚空と類似性がある故に、広いである。それ心は無礙智によって促されたので(anāvāraṇam tac cittam asaṅgajñāna-sampreṣitam)¹⁸¹、無障礙である。それ心は大悲が限定されない故に、一切に遍在する。それ心は賢者による称赞がある故に、親近されるべきなものである。それ心は一切諸仏法の種子となるものである。それ心は一切安樂事の基盤となるものである。それ心は持戒の故に、誓願から生じたものである。それ心は忍辱の故に、敵のないものである。それ心は精進の故に、打ち勝たれないものである。それ心は諸静慮によって和らげられたものである。それ心は智慧の資糧がある故に、損害されないものである。また、それ心は如来の戒蘊と三摩地蘊と般若蘊と解脱蘊との根本である。それ心は如来の解脱智見の根本である。それ心は如来の十力と四無畏などの十八不共仏法の根本である。舍利弗よ。それ心は菩提からなるので、菩提心と呼ばれる。

ここでも深心の時と同様に、多くの表現で菩提心について説明が施される。その説明は要点を絞れば四系列といえよう。まず、不動や中断されないなどという表現によって示される堅牢さ。第二に、衆生に対する平等さや無碍さによって示される利他性。第三に、清浄さや離垢性によって表現される離欲性。第四に、一切諸仏法の種子や、一切安樂事の基盤といった表現を用いて示される仏果の根源性である。この内、前の三種の系統は菩提心そのものの性質を言い表したものであり、深心とも対応するものである。しかし、今注目すべきは、四番目の系統、仏果の根源性である。これは、菩提心によって期待される果報が述べられたものであり、この点によって、まさしく菩提心こそが仏果の基盤となることが表現されていると言えよう。

以上、深心と菩提心の二つの視点から分析を行った。その結果、『菩薩藏經』では深心は利他性と密接な関係を有し、菩提心は仏果の基盤となるものとして理解されていることが分析できよう。

(三)、菩薩および菩薩が有すべき徳性

さて、先の検討では、深心と菩提心のそれぞれを分析した。本品では、深心を備えた菩提心を有する有情が菩薩と呼ばれる。この菩薩はもっとも優れた有情である等と説明される¹⁸²。そのような菩薩、

¹⁸⁰ ここでは梵文写本では「nirantaram（不斷,中断されない）」とあり、玄奘訳では「無有間斷」とあるが、藏訳と法護訳では「無上」とある。

¹⁸¹ anāvāraṇam tac cittam asaṅgajñāna-sampreṣitam: この文言について藏訳は「མཉམས་དེ་ནི།ཐམས་ཅད་མཆོད་པའི་ཡེ་ཤེས་ལ་བརྟེན་པའི་ཕྱིར་སྐྱབས་པའི་པའོ།」として翻訳する。法護訳では「彼心無障礙。觀無礙智故。」とする。玄奘訳では「菩提心者無有障礙。令無礙智遍行一切無緣大悲不斷絕故。」とする。このうち、玄奘訳に基づけば、sampsreṣitamという語が翻訳されていない。そうであれば、玄奘が参照したであろう原典では「anāvāraṇam tac cittam asaṅgajñānam sarvatrānugataṁ (tac cittam) mahākaraṇāvyavacchinnavāt」とあったのであろうか。

¹⁸² 梵文写本：api ca śāriputra bodhimayaṁ tac cittam tenocyate bodhicittam iti (||) evam āśayabodhicitta-samanvāgataḥ śāriputra bodhisattvo bodhisattva ity ucyate (||) udā(5)rasattva ity ucyate (||) pravarasattva ity ucyate (||)

すなわち、深心を伴う菩提心を起こした者がどのような特性を有するのかについて様々な文言を用いて説明される。長文であるので三度に分けて引用すれば次の通りである。

梵文写本 (MS17b7-18b7) ¹⁸³ :

sarvatrailokyaprativiśiṣṭasattva ity ucyate (॥)……. (MS: 17b4-7; 藏: D Kha283b2-7, P Dsi309b8-310a6, H46a6-b6 ; 玄奘
 訳T11.206c8-20 ; 法護等訳: T11.793a24-b6.)

¹⁸³ 藏訛 (D Kha283b7-285b5, P Dsi310a6-312a4, H46a6-49b3) :

[illegible]

玄奘訳 (T11.206c21-207b19) :

爾時佛告舍利子。諸菩薩摩訶薩。由具如是淨信欲故。發阿耨多羅三藐三菩提心已。心多淨信。樂觀賢聖。樂聞正法。樂不慳吝。開舒心手。而行大施。欣樂大捨。樂均普施。於諸衆生心無罣礙。心無穢濁。心無憤亂。心不間雜。於業業報深心奉敬。無疑無慮。知黑白法果報不壞。乃至命難。不起諸惡。永離殺生不與取。邪淫行。妄語。乖離語。僞惡語。綺語。貪染。瞋恚。[愚癡。]邪見。爲斷如是不善業道。受持奉行十善業道。由具信故於諸沙門若婆羅門。正至正行具德具戒。其心純淨成調順法。具足多聞勤行諮問。修正作意。調善寂靜。親近寂滅不起諍訟。非不愛語。善知信欲。非不善知。善法相應。遠諸惡法。不掉不高。性離躁動。性離僞言。語無浮雜。守念正住。心安妙定。善斷有本。不中毒箭。捨離重擔。超度疑慮。及以後有諸佛世尊。菩薩摩訶薩。聲聞[獨覺]。於如是等善知友所。如實覺已親觀敬仰奉事將遇。行者如是於善知友身行奉事。復以法施而攝受之。宣說妙法示教讚喜。所謂若行陀那得大財富。若行尸羅得生天樂。若好多聞獲得大慧。若修諸定便離繫縛。復爲開顯種種微妙清淨勝法。此是布施此布施報。此是慳吝此慳吝報。此是尸羅此尸羅報。此是犯戒此犯戒報。此是忍辱此忍辱報。此是瞋恚此瞋恚報。此是正勤此正勤報。此是懈怠此懈怠報。此是靜慮此靜慮報。此是亂心此亂心報。此是智慧此智慧報。此是惡慧此惡慧報。此身妙行此身妙行報。此身惡行此身惡行報。此語妙行此語妙行報。此語惡行此語惡行報。此意妙行此意妙行報。此意惡行此意惡行報。此善此不善。此應作此不應作。此若作已感得長夜義利安樂。此若作已感得長夜非義非利非安樂果。舍利子。行者如是爲諸善友。宣說是法示教讚喜。已覺知堪任大法器者。即爲開示甚深微妙空相應法。所謂空法。無相法。無願法。無行法。無生法。無起法。無我法。無數取法。無壽命法。無衆生法。復爲開示甚深緣起。所謂此有故彼有。此生故彼生。無明緣行。行緣識。識緣名色。名色緣六處。六處緣觸。觸緣受。受緣愛。愛緣取。取緣有。有緣生。生緣老死愁歎憂苦身心焦惱。如是種種生起純大苦聚。又此無故彼無。此滅故彼滅。謂無明滅故行滅。行滅故識滅。乃至生滅故老死滅。如是乃至純大苦聚滅。舍利子。又應爲說。此中無有一法。是有可得而可滅者。何以故。由彼諸法從因緣生。無有主宰。無有作者。無有受者。從因緣轉。又無一法流轉旋還。亦無隨轉。由癡妄故假立三界。從煩惱苦之所流轉但假施設。行者如是如實觀察癡妄之時。無有一法能作餘法。若於是中無有作者。作者不可得故。乃至無有一法流轉旋還。流轉旋還不可得故。舍利子。行者若聞如是甚深法已無疑無慮。善入諸法無罣礙性。是人若不著於色。不著受想行識。不著眼色及以眼識。不著耳鼻舌身意法及以意識。皆不可得故[。]

法護等訳 (T11.793b6-794a4) :

iti hi śāriputra bodhisattva āśayenānuttarāyām samyaksaṃbodhau cittam utpādyā śrāddho bhavati (|) prasā(18a1)dabahulāḥ | āryānām darśanakāmo (|) dharmam śrotakāmaḥ (|) amatsarī ca bhavati (|) muktatyāgaḥ prasāritapāṇiḥ vyavasargābhirato dana-saṃvibhāgarataḥ | aprati[ghā]tacittaś ca bhavati sarvasattvānām antike akaluṣacitto luḍḍitacittaḥ avyavakīrṇacittaḥ | sa karma ca karmavipākam cābhiśraddadhāti avakalpayati pattīya(2)ti niṣkaṃkṣo nirvicikitsaś ca bhavati | sa kṛṣṇasuklānām dharmānām phalam avipranaṣṭam iti viditvā jīvitahetor api pāpam karma na karoti (|) sa prāṇābhighātāt prativirato bhavaty adattādanāt kāmamithyācārāt mṛśāvādāt paiśunyaṭ pārūṣyāt saṃbhinnapralāpād abhidhyāyā vyāpādāt mithyādr̥ṣṭeḥ prativirato bhavati (|) i(3)mām daśakuśalām karmapathām prahāya daśakuśalām karmapatham samādāya varttate (|) sa śrāddhaḥ saṃty ete śramaṇabrahmaṇāḥ samyaggaṭhāḥ samyakpratipannāḥ śīlavanto guṇavanto peśalāḥ kalyāṇadharmāṇo bahuśrutāḥ śrutābhiyuktā yoniśomanasikāraprayuktāḥ dāntāḥ śāntāḥ upaśāntāḥ na vighrahavādino nā(4)priyavādināḥ kuśalāśayāḥ nākuśalāśayāḥ kuśalasamprayuktāḥ sarvākuśaladharmaparivarjitāḥ anuddhatā anunnattā acapalā amukharā avyavakīrṇavacasa upasthitasmṛtayaḥ susamāhitacittāḥ ucchinnabhavanetrīkāḥ āvr̥ḍhaśalyā apahṛtabhārāḥ tīrṇakāṃkṣāḥ tīrṇavicikitsā kṣīṇapu(5)nar-bhavāḥ (|) buddhā bhagavanto bodhisattvāś (|) ca mahāsattvāḥ buddhaśrāvakāś ca tathārūpāḥ śramaṇabrahmaṇāḥ kalyāṇamitrāṇī¹⁸⁴ viditvā sevate bhajate paryupāste ārāgayati na virāgayaty abhirādhayati na virādhayati (|) tasya tāni kalyāṇamitrāṇy avirādhitāni santi (|) dharmānugrahaṃ kurvvanti dhārmyākathayā sandarśayanti sa(6)mādāpayanti samuttejayanti saṃpraharṣayanti (|) dānam mahābhogātāyai samvarttate (|) śīlam svargopapattaye śrutam mahāprajñātāyair bhāvanam viśaṃyogāya saṃprakāśayanti (|) idam dānam idam dānasya phalam (|) idam mātṣaryam idam mātṣaryasya phalam (|) idam śīlam ayam śīlasya vipākah (|) idam dauḥśīlyam ayam dauḥśīlyasya

此菩薩於阿耨多羅三藐三菩提心。淨信深固廣多清淨。樂見諸聖樂聞深法。心無慳惜廣行施捨。常樂出離心無障礙。於一切衆生無雜亂心。無退墮心無流散心。有業有報淨信無疑。諸所施作悉離疑惑。於善惡法不壞果報。此如是等善了知己。於身命緣不造罪業。遠離殺生偷盜邪染妄言綺語兩舌惡口貪瞋邪見。如是十不善業皆悉斷除。十善之業常所修集淨信諦理。於沙門婆羅門中。常修正道具戒清淨廣多聽受一切善法。聞已勤行深固作意。而善調伏遍寂近寂。離諸諍訟無非愛語。心意純善無不善意。勤行善法離不善法。無高無下亦不輕動。離諸讚毀安住正念。妙等引心斷三有縛。拔除毒箭去諸重擔。樂住寂靜度諸疑悔不受後有。常於諸佛世尊菩薩摩訶薩及沙門婆羅門所。親近恭敬隨順奉事無相違背。而常不離諸善知識。攝受正法宣正法門示教利喜。謂布施大富持戒生天。多聞大慧修習相應如是宣說。此是布施得布施果。此是慳恪得慳恪果。此是持戒得持戒果。此是犯戒得犯戒果。此是忍辱得忍辱果。此是瞋恚得瞋恚果。此是精進得精進果。此是懈怠得懈怠果。此是禪定得禪定果。此是散亂得散亂果。此是智慧得智慧果。此是愚癡得愚癡果。此身善所行得身善所行果。此身惡所行得身惡所行果。此語善所行得語善所行果。此語惡所行得語惡所行果。此意善所行得意善所行果。此意惡所行得意惡所行果。此是善此是不善。此所應作。此不應作。此所施作。於長夜中利益安樂一切衆生。此所施作於長夜中。而不利樂一切衆生。此如是等。於善知識所。宣說正法示教利喜。知是大法器者。即當宣說甚深法門。謂空解脫門。無相解脫門。無願解脫門。無造無作無生無起無我無人無衆生無壽者。及說甚深緣生之法。所謂有法。有故有生。即無明緣行。行緣識。識緣名色。名色緣六處。六處緣觸。觸緣受。受緣愛。愛緣取。取緣有。有緣生。生緣老死憂悲苦惱。如是即一大苦蘊集。以不有故。即無所生。無生即滅。謂無明滅即行滅。行滅即識滅。識滅即名色滅。名色滅即六處滅。六處滅即觸滅。觸滅即受滅。受滅即愛滅。愛滅即取滅。取滅即有滅。有滅即生滅。生滅即老死憂悲苦惱滅如是即一大苦蘊滅。然於是中無有少法若生若滅而實可得。何以故。一切法緣生故。無主宰無作者無受者。因緣所轉。是故此中無法可轉。亦非無轉亦非隨轉。無實所生三界施設。從煩惱轉。從苦所轉故有施設。一切皆是無實所生。若於此中如實觀察。即無有少法而爲作者。若無作者即無所作。於勝義諦中都無所得。如是所說無法可轉。亦非無轉。菩薩摩訶薩於如是等甚深之法聞已信解不生疑悔。入一切法無礙智門。是故不著色受想行識。不著眼耳鼻舌身意色聲香味觸法。不著眼界色眼界識界乃至意界法界意識界。

¹⁸⁴ 校訂では、kalyāṇamitrāṇīmiとある。

vipā(7)kaḥ | iyaṃ kṣantir ayaṃ kṣāntyā vipākaḥ | ayaṃ vyāpādo yaṃ vyāpādasya vipākaḥ(1) idam vīryam
ayaṃ vīryasya vipākaḥ | idam kausīdyam ayaṃ kausīdyasya vipākaḥ | imāni dhyānāny ayaṃ dhyānānām
vipākaḥ | iyaṃ vikṣiptacittatā ayaṃ vikṣiptacittatāyā vipākaḥ (1) iyaṃ prajñā ayaṃ prajñāyā vipākaḥ | (8)
idam dauṣprajñyam ayaṃ dauṣprajñasya vipākaḥ (1) idam kāyasucaritam ayaṃ kāyasucaritasya vipākaḥ (1)
idam kāyaduṣcaritam ayaṃ kāyaduṣcaritasya vipākaḥ | idam vāksucaritam ayaṃ vāksucaritasya vipākaḥ (1)
idam vāgduṣcaritam ayaṃ vāgduṣcaritasya vipākaḥ | (MS18b1)idam manaḥsucaritam ayaṃ
manaḥsucaritasya vipākaḥ | idam manoduṣcaritam ayaṃ manoduṣcaritasya vipākaḥ | idam kuśalam idam
akuśalam idam karaṇīyam idam akaraṇīyam | idam kṛtaṃ dīrgharātram arthāya hitāya sukhāya saṃvarttate |
idam kṛtaṃ dīrgharātram anarthāyāhitāyā 'sukhā(2)ya saṃvarttate evaṃ tasya tāni kalyāṇamitrāṇi dharmyā
kathayā sandarśayanti samādāpayanti samuttejayanti saṃpraharṣayanti (1) bhājanam ca viditvā gambhīrām
kathām samādāpayanti (1) yad idam śūnyatākathāyo ¹⁸⁵ nimittakathām apraṇihitakathām
anabhisamskārakathām ajātakathām anutpādakathām nairātmyaniḥsattvaniśjīvakathā(3)n niśpudgalakathām
gambhīrakathām pratītyasamutpādakathām prakāśayanti | yad utāsmiṃ satīdam bhavaty asyotpādād idam
utpadyate | yad idam avidyāpratyayāḥ (1) saṃskārāḥ saṃskārapratyayaṃ vijñānam (1) vijñānapratyayan
nāmarūpaṃ (1) nāmarūpapatyayaṃ ṣaḍāyatanam (1) ṣaḍāyatanapatyayaḥ sparśaḥ (1) sparśapatyayā vedanā
(1) vedanāpatyayā tṛṣṇā (1) tṛṣṇāpra(4)tyayaṃ upādānam (1) upādānapratyayo bhavaḥ (1) bhavapatyayā jātiḥ
(1) jātipratayā jarā-maraṇaśokaparidevaduḥkhadaurmanasyopāyāsāḥ sambhavanti (1) evaṃ asya kevalasya
mahato duḥkhaskandhasya samudayo bhavati (1) yad utāsmiṃ satīdam bhavaty (1) asya nirodhād idam
nirudhyate (1) yad idam avidyānirodhāt ¹⁸⁶ saṃskāranirodhāḥ yāva(5)d evaṃ asya kevalasya mahato
duḥkhaskandhasya nirodho bhavati | na punar atra kaścīd dharmas saṃvidyate yasya samudāgamo vā
nirodho vā (1) tat kasya hetoḥ (1) pratītyasamutpannā hi sarvadharmāḥ asvāmikāḥ akārakā avedakā
hetupratyayatayā saṃvarttante (1) na cātra kaścīd dharmas saṃvarddhāte nānuvarttate nānuparivarttate (1)
abhūtasam̐mohena ¹⁸⁷ traidhātukaprajñaptir bhavati (1) kleśavarttanyā duḥkhavarttanyā prajñaptir bhavati (1)
abhūtasam̐mohaṇ ca yathābhūtaṃ vyupaparīkṣamāṇā na kaścīd dharmāḥ kasyacid dharmasya kārako
bhavati yatra ca kārako nāsti kriyāpi tatra paramārthato nopalabhyate (1) tatra na kaścīd dharmāḥ
saṃvarttate na vivarttata iti vaktavyaḥ (1) sa i(7)mān evaṃrūpāṃ gambhīrān dharmāṃ śrutvā na kāmḥkṣate
na vicikitsati asaṅgatāś ca sarvadharmāṇām avatarati (1) sa rūpe na sajjati vedanāsaṃjñāsaṃskāravijñāneṣu
na sajjati cakṣuṣi rūpe cakṣurvijñāne ca na sajjati śrotre ghrāṇe jihvāyām kāye manasi dharmeṣu
manovijñāne ca na sajjati (1)

【訳】 だから、舍利弗よ。菩薩は深心によって無上正等正菩提に発心してから、淨信を持っている
者とり、沢山の信仰を持つ者となり、諸々の聖なる者たちに対する見に欲し、法を聞きに欲し、
また慳貪しなくて気前のよくに布施し、広げた手を持ちながら喜捨を喜び、施物を分けることを

¹⁸⁵ 筆者：śūnyatākathāyo: ここではśūnyatākathāのAc. f. pl.? (BHS. I . p. 67, §9.90)。

¹⁸⁶ 校訂では、avidyā nirodhātとある。

¹⁸⁷ 校訂では、abhutasam̐mohenaとある。

楽しみ、また、一切衆生の前に、嗔恚のない心と汚れない心と乱れない心と間に混ざったことのない心が生じる。また、彼は業と業の果報を信じて思惟して受け入れて疑いを持たなく躊躇いをも持たなくなる。彼は黒と白の諸法の果が消え失わないであると知ってから命の理由のためさえも悪業を為さない。彼は殺生から離れた者となり、不与取と邪淫と妄語と両舌と粗悪語と綺語と食欲と嗔恚と邪見から離れた者となる。これらの十不善業道を棄断して、十善業道を受け取る。正しく通達したのであり、正しく修行したのであり、戒を有し、徳行あり、熟練であり、善なる性質を有し、多聞であり、聞を勤行し、如理作意を精勤し、温順であり、寂靜であり、和らげられたのであり、論争しないのであり、粗野に話さないのであり、善の考え方をもち、不善の考え方を持たないのであり、善に相応したのであり、一切不善の法を離れたのであり、謙遜であり、倨傲しないのであり、冷静であり、饒舌しないのであり、乱雑な言葉を持たないのであり、安住した念を持ち、よく専念している心を持ち、〔次の〕生まれに導くことが断たれたのであり、〔毒〕箭が引き抜かれたのであり、重荷が取り除かれたのであり、疑いも横切られたのであり、躊躇いも横切られたのであり、再生も横切られたのであるという諸仏・世尊と諸菩薩摩訶薩と仏の諸声聞たち (buddhaśrāvakās)¹⁸⁸ [と同じような質を持つ] 沙門と婆羅門たち、淨信を持つ彼はそのような沙門と婆羅門〔などの者〕たちが善友であると知ってから、彼らを親近し、従い、供養し、厭きなしに喜ばせ、倦怠なしに満足させる。彼にはいる満足させられたそれらの善友たちは法による恩恵を与え、法の教えによって開示し、勸化し、励まし、喜ばせる。「布施は大富のために存在する、戒は天界に行って生まれるために〔存在する〕、聞は大慧のために〔存在する〕、修習は束縛から自由になるために〔存在する〕」と彼らは開示する。「これは布施である、これは布施の果報である。これは慳貪である、これは慳貪の果報である。これは持戒である、これは持戒の果報である。これは破戒である、これは破戒の果報である。これは忍辱である、これは忍辱の果報である。これは嗔恚である、これは嗔恚の果報である。これは精進である、これは精進の果報である。これは懈怠である、これは懈怠の果報である。これらは諸静慮である、これは諸静慮の果報である。これは散乱である、これは散乱の果報である。これは智慧である、これは智慧の果報である。これは愚慧である、これは愚慧の果報である。これは身の善行である、これは身の善行の果報である。これは身の悪行である、これは身の悪行の果報である。これは語の善行である、これは語の善行の果報である。これは語の悪行である、これは語の悪行の果報である。これは意の善行である、これは意の善行の果報である。これは意の悪行である、これは意の悪行の果報である。これは善である、これは不善である。これは為すべきことである、これは為さなければいけないことである。これが為されたら、長夜の中に利益と福利と安樂になる、これが為されたら、長夜の中に不利益と不福利と不安樂になる」とそのように彼のそれら善友たちは法の教えによって開示し、勸化し、励まし、喜ばせる。〔彼が〕器であると知ってから、諸々の奥深い教えを勧め、すなわち、空性の諸教えと無相の教えと無行の教えと無生の教えと無起の教えと無我・無衆

¹⁸⁸ buddhaśrāvakās (仏の諸声聞)：藏訳と法護訳ではそれに相当する内容はない。

生・無命の教えと無補特伽羅の教えと奥深い教えである縁起の教えを開示する。すなわち、これがある時に、これがある。これの生から、これが生じる。すなわち、無明という諸縁があつて諸行がある。行という縁があつて識がある。識という縁があつて名色がある。名色という縁があつて六処がある。六処という縁があつて触がある。触という縁があつて受がある。受という縁があつて愛がある。愛という縁があつて取がある。取という縁があつて有がある。有という縁があつて生がある。生という縁があつて老と死と悲しみと悲嘆と苦と憂慮と悩みがある。そのように、この純一の大きな苦蘊の生起がある。すなわち、これがある時に、これがある。この滅から、これが滅する。(yad utāsmin satīdaṃ bhavaty asya nirodhād idaṃ nirudhyate)¹⁸⁹すなわち、無明の滅から、諸行の滅がある。そのように、乃至、この純一の大きな苦蘊の滅がある。生起あるいは消滅があるもの、そ〔のもの〕には法が決して存在しない。それは何故か。一切諸法は縁起であつて無主宰であり、無作者であり、無受者であり、因縁によって生じるからである。また、その中、法は決して生長することもない、相続することもない、流転することもない。虚妄からなる妄想によって三界の仮名が生じ、煩惱の存在と苦の存在の仮名が生じる。また、虚妄からなる妄想を如実に観察することによって、法が決してない、法の作者も決してない。またもし作者が存在しないならば、実にその場合に作られるものも得られない。そこで、法は決して生じることもない、滅することもないと言われるべきである。彼はこれらのような種類の奥深い諸法を聞いてから、疑いも持たなくて躊躇いも持たなくて一切法に対する無著性に悟入する。彼は色に愛着しない、受・想・行・識にも愛着しない、眼と色と眼識にも愛着しない、耳・鼻・舌・身・意・諸法・意と意識にも愛着しない。

梵文写本 (MS18b7-19b3)¹⁹⁰ :

¹⁸⁹ 梵文写本では「yad utāsmin satīdaṃ bhavaty asya nirodhād idaṃ nirudhyate」とあるが、玄奘訳では「又此無故彼無。此滅故彼滅。」とある。法護訳では「以不有故。即無所生。無生即滅。」とある。藏訳では「**འདི་ལྟགས་པས་འདི་ལྟགས་ཀྱི།** 」とある。

¹⁹⁰ 藏訳 (D Kha285b5-286b6, P Dsi312a4-313a5, H49b3-51a4) :
 འདི་ལྟགས་པས་འདི་ལྟགས་ཀྱི། ཞེས་དང་། རྒྱ་རིམ་གྱི་དེ་ལྟར་དང་པ་ལ་གནས་པའི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དང་མེད་ཀྱི་སངས་རྒྱས་ལ་སྐྱ་བ་ལས་ཡོངས་སུ་མི་ཉམས། ཚས་ཉན་པ་ལས་ཡོངས་སུ་མི་ཉམས། དགེ་འདུན་ལ་བསྐྱེན་པ་ལས་ཡོངས་སུ་མི་ཉམས་སོ། རྒྱ་ལ་དང་ལྟ་བུ་སྐྱེ་བ་དེ་དང་དེ་དག་ཏུ་སངས་རྒྱས་ལ་བསྐྱ་བ་དང་བྱམ་བར་མི་འགྲུམ། ཚས་ཉན་པ་དང་བྱམ་བར་མི་འགྲུམ། དགེ་འདུན་ལ་བསྐྱེན་པ་ལྟར་བྱེད་པ་དང་བྱམ་བར་མི་འགྲུམ། སངས་རྒྱས་བཅོམ་ཐུན་འདས་རྒྱུས་ཀྱི་བྱུང་ཐུན་ལྟར་འགྲུམ་ཏེ། དེ་དང་དེ་དག་ཏུ་སྐྱེས་ནས་ཀྱང་བཅོམ་འགྲུས་ཚུལ་ཞིང་དགེ་བའི་ཚས་ཡོངས་སུ་ཚས་ལ་བ་ལ་བཅོམ་པར་འགྲུམ་རོ། རྒྱ་བཅོམ་འགྲུས་བཅུ་ལྟམ་པས་ཀྱིས་ཀྱི་གནས་མི་འདོད་པར་འགྲུམ། ལུ་ཐོད་དང་ལུ་མི་འདོད་པར་མི་འགྲུམ། བྱ་ལོ་དང་། བྱ་ལོ་དང་། བྱ་ལོ་དང་། ལས་བྱེད་པ་དང་། རྒྱ་ལས་འཛིན་པ་དག་མི་འདོད་པར་འགྲུམ། ཡོངས་སུ་བཟང་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་འོར་ལྷ་བ་མི་འདོད་པར་འགྲུམ་ཏེ། དེ་སྐྱེས་ནས་འདོད་པ་ལ་མ་ཅེས་པར་ན་ཚོན་གཞིན་རྩེ་ལས་སུ་བཅོམ་ཐུན་འདས་རྒྱུས་ཀྱི་བྱུང་ཐུན་ལ་ལ་དང་པས་ཀྱིས་ནས་ཀྱིས་མེད་པར་ལྷུ་རྩེ་རབ་ཏུ་འབྱུང་ངོ། རྒྱ་དང་པས་རབ་ཏུ་བྱུང་ནས་དགེ་བའི་བཤེས་གཉེན་མཆོག་དང་ཐུན་ཞིང་དགེ་བའི་བཤེས་གཉེན་དང་འགྲོགས། དགེ་བའི་བཤེས་གཉེན་ལ་རྟོག་པས་དགེ་བའི་བསམ་པ་རྟེན་པར་འགྲུམ་རོ། རྒྱ་དགེ་བའི་བསམ་པ་དང་ཐུན་པས་དགེ་བའི་ཚས་རྒྱུས་ཉན་ཅིང་སྐྱབ་པ་སྤྱིང་པར་བྱེད་པར་འགྲུམ་ཏེ། ཆོག་སྐར་ལེན་པའི་རྟོད་ཐུན་པར་མི་འགྲུམ། མང་དུ་ཐོས་པ་ཡོངས་སུ་ཚས་ལས་འོས་པར་མི་འགྲུམ། ཇི་ལྟར་ཐོས་པའི་ཚས་རྒྱུས་གཞན་ལ་ཡང་བྱ་ཆར་ཡང་དག་པར་རབ་ཏུ་རྟོན་ཏེ་ཐང་མེད་པའི་སེམས་ཀྱིས་རྟེན་པ་དང་འགྲུམ་ཏེ། ཆོག་སུ་བཅད་པ་ལ་མ་མེ་ལེ་ཞིང་རང་གི་ཆོག་ཡོངས་སུ་མི་སྤྱིང་བར་གཞན་ལ་ཚས་ཐོན་ཏེ། ཇི་ལྟར་ཐོས་པ་དང་། ཇི་ལྟར་ཐོས་པས་ཀྱང་སྟོག་ལ་མི་སྐྱབ་པར་འགྲུམ། འདོད་པ་ལྟང་ཞིང་ཆོག་ཤེས་པར་འགྲུམ། རབ་ཏུ་དཔེན་པ་དང་ཤེས་པར་འགྲུམ། གསོ་སྦྱ་བ་དང་། དག་པ་སྦྱ་བ་དང་། དགོན་པ་ལ་དགའ་བ་དང་། ཇི་ལྟར་ཐོས་པའི་ཚས་རྒྱུས་ཀྱི་དོན་ལ་ཉེ་བར་རྟོག་པ་དང་། དོན་ལ་རྟོན་གྱི་ཡི་གེ་ལ་མི་རྟོན་པ་ཡིན་ཀྱང་དང་། མི་དང་། ལྷ་མ་ཡིན་ཏུ་བཅས་པའི་འཛིན་ཏེན་གྱི་རྟེན་དུ་བྱུར་པ་དང་། བདག་འབའ་ཞིག་གི་ཕྱིར་ཞུགས་པ་མ་ཡིན་གྱི་སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཕྱིར་འདི་རྩ་ལྟེ་ཐག་པ་ཆེན་པོ་སྦྱར་མེད་པ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཡི་གེས། མི་མཉམ་པ་དང་མཉམ་པའི་ཡི་གེས། འཛིན་ཏེན་གསུམ་པོ་ཐམས་ཅད་ལས་ཀྱང་པར་དུ་འཕགས་པའི་ཡི་གེས་ཡོངས་སུ་ཚས་ལོ། འག་ཡོང་པ་སྐར་བྱེད་པར་འགྲུམ་ཏེ། དེ་ལ་བག་ཡོད་པ་གང་ཞེ་ན། འདི་རྩ་ལྟེ་དབང་པོ་ཡང་དག་པར་སྤོས་པའོ། རྒྱ་ལ་དབང་པོ་ཡང་དག་པར་སྤོས་པ་གང་ཞེ་ན། གང་མིག་གིས་གཞུགས་མཛང་ནས་མཛན་མར་མི་འཛིན་མཛང་ནས་སུ་མི་འཛིན། གཞུགས་ལ་ཆགས་པ་དང་། ཉེས་དམིགས་དང་། འབྱུང་བ་ཡང་ཡང་དག་པ་ཇི་སྐྱབ་བཞིན་དུ་རབ་ཏུ་ཤེས་སོ། རྒྱ་བཞིན་དུ་རྩ་བས་སྦྱ་དང་། ལྷས་དྲི་དང་། ལྷས་རྩི་དང་། ལྷས་ཀྱིས་རིག་བྱ་བ་དང་ཡོད་ཀྱིས་ཚས་ཤེས་ནས་མཛན་མར་མི་འཛིན་མཛང་ནས་སུ་མི་འཛིན་ཚས་རྩམས་ལ་ཆགས་པ་དང་། ཉེས་དམིགས་ཀྱང་ཡང་དག་པ་ཇི་སྐྱབ་བཞིན་དུ་རབ་ཏུ་ཤེས་པ་འདི་ནི། བག་ཡོད་པ་ཞིས་བྱོལ། གཞན་ཡང་རྒྱ་རིམ་གྱི་བག་ཡོད་པ་ཞིས་བྱོལ་བ་ནི་གང་བདག་གི་སེམས་དུ་བ་དང་། གཞན་གྱི། ཉེས་སྤྱད་བདག་ཉོན་མོངས་པ་ལ་དགའ་བ་རྟོན་པ་དང་། ཚས་ལ་དགའ་བའི་རྩེས་སུ་འགྲོ་བ་དང་། འདོད་པ་ལ་རྩམ་པར་རྟོག་པ་དང་། གཞོད་སེམས་ཀྱི་རྩམ་པར་རྟོག་པ་རྩམས་མི་འབྱུང་བ་དང་། རྩམ་པར་འཛིན་པར་རྟོག་པ་རྩམས་མི་འབྱུང་བ་དང་། ཆགས་པའི་མི་དགེ་བའི་ཅབ་རྩམས་མི་འབྱུང་བ་དང་། ཞེ་སྤང་གི་མི་དགེ་བའི་ཅབ་རྩམས་མི་འབྱུང་བ་དང་། གཏི་སྤྲུག་གི་མི་དགེ་བའི་ཅབ་རྩམས་མི་འབྱུང་བ་དང་། ལྷས་ཀྱི་ཉེས་པར་རྟོན་པ་དང་། བག་གི་ཉེས་པར་རྟོན་པ་དང་། ཡིད་ཀྱི་ཉེས་པར་རྟོན་པ་མི་འབྱུང་བ་དང་། ལྷས་བཞིན་མ་ཡིན་པ་བྱེད་པ་མི་འབྱུང་བ་དང་། ཐེག་པ་མི་དགེ་བའི་ཚས་ཐམས་ཅད་མི་འབྱུང་བ་དང་། བག་ཡོད་པ་ཞིས་བྱོལ། །

玄奘訳 (T11.207b19-207c20) :
 復次舍利子。菩薩摩訶薩信受如是性空法已。不退見佛。不退聞法。不退奉僧。在在所生不離見佛。不離聞法。不離奉僧。面生佛前猛勵正勤志求善法。是人住正勤已。不戀居家男女眷屬奴婢僕使及諸資具。是人為姪欲所燒。速於今生捨盛年樂。以淨信心於佛法中出家入道。既出家已得善知識善伴善友。善住思惟善住信欲。由善住信欲故。善聽聞法堅奉修行。不但言說以為宗極覺慧成就。樂求多聞無有厭足。如所聞法以無染心為他廣演。於諸利養恭敬

evam ca śraddadhātī prakṛtiśūnyāḥ (8) sarvadharmāḥ (I) evam śraddhā pratiṣṭhitaḥ śāriputra bodhisattvo na parihīyate buddhadarśanān na parihīyate dharmaśravaṇān na parihīyate saṃghopasthānāt (I) sa yatra yatropapadyate (I) tatra tatrāvirahito bhavati buddhadarśanena (I) (MS19a1) avirahito bhavati dharmaśravaṇena | avirahito bhavati saṃghopasthānena | saṃmukhībhūtānān ca buddhānāṃ bhagavatām upapadyate | tatra tatra copapannaḥ sann ārabdhavīryo bhavati kuśaladharmmaparyeṣṭyabhiyuktaḥ(I) sa ārabdhavīryaḥ sann anarthiko bhavati gṛhāvāsena (I) anarthiko bhavati putraduhitṛbhīr(I) anarthiko bhavati (2) dāsīdāsakarmakarapauruṣeyair (I) anarthiko bhavati sarvaparigrahoparodhaiḥ (I) sa kṣipram eva jātyā 'vikriḍitaḥ kāmair bhadrakena vayasā buddhānāṃ bhagavatām śāsane śraddhayā agārād anagārikāṃ pravrajati (I) sa śraddhayā pravrajitaḥ satkalyāṇamitraḥ kalyāṇamitrasahāyaḥ kalyāṇamitrasaṃkalpaḥ kalyāṇāśaya(3)tām pratilabhate | sa kalyāṇāśayaḥ kalyāṇāṃ dharmāṃc chṛṇoti pratipattisāraś ca bhavati (I) na vākyaramayā buddhyā samanvāgato bhavati (I) atṛptaś ca bhavati bahuśrutyaparyeṣṭyā (I) yathāśrutāmś ca dharmmāṃ pareṣāṃ vistareṇa saṃprakāśayati (I) nirāmiṣeṇa cittenāpratikāṃkṣamāṇo lābhasatkāraślokaṃ na ca svavākya-pariva(4)rjitaṃ pareṣān dharmāṃ deśayati (I) yathāśrutam yathāsthitaṃ tathaiva pareṣān dharman deśayati | dharmaśravaṇikeṣu ca mahāmaitrīm pratilabhate (I) sarvasattveṣu ca mahākaruṇāṃ avakrāmati (I) sa bahuśrutaḥ sann anapekṣo bhavati kāye jīvite (I) ca alpeccho bhavati saṃtuṣṭaḥ (I) praviviktaś ca sūrataś ca bhavati (I) subharaś ca supoṣaś cāraṇyara(5)taś ca (I) yathāśrutānān ca dharmāṇāṃ artham upaparīkṣate (I) arthapratisaraṇaś ca bhavati na vyamjanapratīsaraṇaḥ (I) pratīsaraṇaś ca bhavati sadevamānuṣāsurasya lokasya (I) na kevalam ātmārthe yuktaḥ sarvasattvārthāyānuttaram mahāyānaṃ paryeṣate | yad idam buddhajñānaṃ asamasamajñānaṃ sarvatrailokyaprativiśiṣṭajñānaṃ (I) a(6)pramādaparamaś ca bhavati | tatra katamo pramādaḥ (I) yad idam indriyasamyamaḥ (I) tatra katara

名譽情無希望。不捨正義妄爲他說。如其所聞如其所住而爲說法。於聽法衆起大慈心。於諸衆生起大悲心。舍利子。行者如是有多閑放。不顧身命。少欲知足。寂靜欣樂。易滿易養。樂處空閑。如所聞法觀察其義。依於實義不依於文。爲諸天人阿素洛界之所依止不專爲己。爲諸衆生求於大乘。所謂佛智無等智無等等智。勝出一切三界之智。舍利子。我說是人獲得第一不放逸法。舍利子。云何名爲不放逸法。所謂諸根寂靜。何等諸根寂靜。所謂眼見於色不取相貌。如實覺知色味色患及色出離。如是耳所聞聲。鼻所嗅香。舌所嘗味。身所覺觸。意所識法。不取相貌。如實覺知法味法患及法出離。舍利子。如是名爲心不放逸。復次不放逸者。調伏自心善護他心。除樂煩惱趣樂正法。不行欲覺恚覺覺覺。不行貪不善根瞋不善根癡不善根。不行身惡行語惡行意惡行。不行不如理作意。不行一切惡不善法。此則名爲不放逸也。

法護等譯 (T11.794a4-794b22) :

如是信解一切法自性皆空。舍利子。菩薩若住如是信解即不減失。常見諸佛亦不減失。常聞正法復不減失。常承事衆。世所生不離見佛不離聞法不離承事清淨之衆。現前值遇諸佛出世。在在所生發大精進勤求善法。所發精進不爲無義利事。謂舍宅居止無義利事。妻子眷屬財寶受用。及奴婢等無義利事。及餘一切欲樂遊戲取著過失無義利事。善能棄捨。於佛如來正法之中淨信出家。以彼清淨出家心故。近善知識而常不壞。思惟善法得善意樂。所聞善法真實修行。不著文字所成勝慧。深心具足樂法無厭。勤求多聞如所聞法。爲他廣說無愛著心。不爲怖求名聞利養。爲他說法不背自語。爲他說法如其所聞如其所住一一隨應爲他廣說。如所聞法。起大慈心。不越一切衆生大悲之心。爲多閑放不惜身命。少欲喜足樂寂靜處。離諸憒鬧善能資養。隨所聞法善觀察義。攝受正義不著於文。隨所攝受。於一切世間天人阿修羅衆中。不獨行於自利益事。但爲勤求無上大乘。利樂一切衆生。所謂佛智無等等智。一切三界最勝智。於他所作而不放逸〔。〕

復次佛告舍利子言。云何名爲不放逸法。所謂常當攝護諸根。云何名爲攝護諸根。謂眼見色已不執其相。亦復不執隨形妙好。亦不愛著 (= 著) 色等諸味。如實了知出離之法。如是耳聞其聲。鼻嗅其香。舌了其味。身覺其觸。意知其法。皆不執相。亦復不執隨形妙好。亦不愛著諸法等味。如實了知出離之法。如是所說名不放逸、又舍利子。不放逸者。謂自調心已善護他心。去除煩惱現證法樂。無所伺察。欲尋瞋尋害尋無所伺察。貪不善根瞋不善根癡不善根無所伺察。身業惡行語業惡行意業惡行。無所伺察。不深固作意。無所伺察。總略乃至一切罪業不善諸法。皆無伺察。如是所說名不放逸〔。〕

indriyasamyamaḥ (।) yac cakṣuṣā rūpaṃ dṛṣṭvā na nimittagrāhī bhavati nānuvyamjanagrāhī (।)
rūpasyāsvādaṃ cādīnavaṃ ca nissaraṇaṃ ca yathābhūtaṃ prajānāti | evaṃ śrotreṇa śabdān* ghrāṇena
gandhān* jihvayā rasān kāyena spraṣṭavyā(MS19b1)ni manasā dharmān vijñāya na nimittagrāhī bhavati
nānuvyamjanagrāhī dharmāṇaṃ cāsvādaṃ cādīnavaṃ ca niḥsaraṇaṃ ca yathābhūtaṃ prajānāti (।) ayam
ucyate (‘)pramādaḥ ||

punar aparaṃ śāriputrāpramāda ity ucyate yat svacittadamaṇaṃ paracittasyāraṅkā | kleśaratyapakarṣaṇaṃ
dharmaṇaṃ anuṣṭhānaṃ (।) apracā(2)raḥ kāmavitarkāṇāṃ (।) vyāpādatarkāṇāṃ apracāro(।)
vihimsāvitarkāṇāṃ apracāro (।) lobhasyākuśalamūlasyāpracāro (।) dveṣasyākuśalamūlasyāpracāro (।)
mohasyākuśalamūlasyāpracāraḥ (।) kāyaduṣcaritasya vāgduṣcaritasya manoduṣcaritasyaāpracāraḥ (।)
ayoniśomanasikāraṇyāpracāraḥ sarveṣāṃ pāpakāṇāṃ aku(3)śālānāndharmāṇāṃ ayam ucyate apramādaḥ ||

【訳】また、そのように、一切法は本性が空であると信ずる。舎利弗よ。そのように淨信に安住している菩薩は仏を見ることから退かない、法を聞くことから退かない、僧伽を奉仕することからも退かない。彼は生まれるところ、どこでも仏を見ることから離されることもない、法を聞くことから離されることもない、僧伽に奉仕することから離されることもないである。また、彼は諸仏・世尊たちが現前にしている間に生まれる。また、彼はどこに生まれても、精進を着手するために、善法を求めることに勤行する。精進を着手するために、彼は家に住むことを惜しみしない、息子と娘たちをも惜しみしない、婢と僕（しもべ）と職人と日雇い人夫たちをも惜しみしない、すべての家族と保有されているものをも惜しみしない。彼は一生の間に諸淫欲によって遊ばずに好都合な壮年のうちに諸仏・世尊の教えに淨信によって家より家なき状態へ速やかに出家する。淨信によって出家した彼は有徳の善友を持ち、善友によって伴われた。善友を思惟して善い深心を持つ。善い深心を持つ彼は、諸々の善法を聞き、正行が堅固になり、また、言葉を固着しない故に、覺慧を成就し、また、多くの聞くことを求める故に、満足にならない、また、聞いた通りの諸法を詳細に他人たちに演説し、また、報酬を追求しない心によって、利得と恭敬と名声を求めずに、自らの主張が除けられた法を他人たちに演説し、[すなわち、]聞いた通りに、あるがままに、正にその様に、他人たちに法を演説し、また、法を聞く者たちに対して大慈を起し、また、一切衆生たちに大悲を下さる。彼は多聞でありつつ、身と命に顧慮しない、また、少欲と知足になり、厭離を非常に喜び、よく保ち、よく養い、山林に住むことを楽しみ、聞いた通りの諸法の義を觀察し、義に頼っているが、文字に頼っていない、天と人間と阿修羅を有する世界の依処になり、単なる自分のために勤行することなく、一切衆生のために、無上大乘を求める。すなわち、仏智と無等等智と一切の三つの世界を乗り越えた智を〔求める〕。また、彼は最上の不放逸者となる。その中、不放逸とは何か。すなわち、根を制御するである。その中、根を制御するとは何か。眼によって色を見てから相も取らない、小相も取らないのであり、色の味も過失も出離も如実に知るのである。そのように、耳によって声を、鼻によって香を、舌によって味

を、身によって触を、意によって法を了知してから、相も取らない、小相も取らないのであり、諸法の味も過失も出離も如実に知るのである。これが不放逸と呼ばれる。

舍利弗よ。その他、自分の心を調伏し、他人の心を保護すること、これは不放逸と呼ばれる。煩惱を楽しむことから遠ざかり、法を楽しむことに従い、諸々の欲覚を行わない、諸々の忿覚を行わない、諸々の害覚を行わない、貪婪という不善根を行わない、嗔恚という不善根を行わない、愚痴という不善根を行わない、身の悪行と語の悪行と意の悪行を行わない、非如理作意を行わない、一切の悪であり、不善である諸法を行わないこと、これが不放逸と呼ばれる。

梵文写本 (MS20a2-6) ¹⁹¹ :

sarvabuddhā(3)nāṃ ca bhagavatāṃ bhāṣitasya bhūtārtham anugacchati (|) sarvadharmmās tathāgatena abhisamkṣipyā caturbhir dharmmoddānair nirkṣiptāḥ (|) katamais̥ caturbhir (|) yad idaṃ sarvasaṃskārā anityā | sarvasaṃskārā duḥkhā | sarvadharmā anātmānaḥ | śāntaṃ nirvāṇaṃ (|) anityāḥ sarvasaṃskārā iti nityasaṃjñināṃ sattvānāṃ nityasaṃjñāprahāṇāya tathāgatena deśi(4)taṃ | duḥkhāḥ sarvasaṃskārā iti sukhasaṃjñināṃ sattvānāṃ sukhasaṃjñāprahāṇāya tathāgatena deśitaṃ* (|) anātmānaḥ sarvadharmā ity ātmasaṃjñināṃ sattvānāṃ ātmasaṃjñāprahāṇāya tathāgatena deśitaṃ | śāntaṃ nirvāṇaṃ ity upalambhaviparyastānāṃ sattvānāṃ upalambhaviparyāsaprahāṇāya tathāgatena deśitaṃ (|) so (‘)nityāḥ sa(5)rasaṃskārā iti śrutvā atyantam anityatām avatarati (|) duḥkhāḥ sarvasaṃskārā iti śrutvā prañidhānavigamam utpādyati (|) anātmānaḥ sarvadharmā iti śrutvā sūnyatāsamādhivimokṣamukhaṃ bhāvayati (|) śāntaṃ nirvāṇaṃ iti śrutvā ’nimittaparicayaṃ karoti na cākāle bhūtakotiṃ sākṣāt karoti (|) iti

¹⁹¹ 藏訳 (D Kha287b2-288a1, P Dsi314a2-314b2, H52a6-53a2) :

སངས་རྒྱལ་བཅོམ་ཐུན་འདས་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་གསུངས་པའི་ཡང་དག་པའི་དོན་ཀྱང་ཁོང་དུ་རྒྱུད་དོ། ཚེས་ཐམས་ཅད་ནི། དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་བསྐྱེས་ཏེ། ཚེས་ཀྱི་མདོ་བཞིན་འདུས་པར་བྱས་སོ། བཞི་གང་ཞེ་ན། འདྲ་བྱེད་ཐམས་ཅད་མི་རྟག་པ་དང་། འདྲ་བྱེད་ཐམས་ཅད་སྐྱག་བསྐལ་བ་དང་། ཚེས་ཐམས་ཅད་བདག་མེད་པ་དང་། ཟུང་ན་ལས་འདས་པ་ཞི་བའོ། འདྲ་བྱེད་ཐམས་ཅད་མི་རྟག་པ་ཞེས་བྱ་བ་ནི། རྟག་པར་འདྲ་ཤིང་ལའི་སེམས་ཅན་རྣམས་ཀྱི་རྟག་པར་འདྲ་ཤིང་ལའི་བྱེད་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་བསྐྱེད་དོ། ཚེས་ཐམས་ཅད་བདག་མེད་པ་ཞེས་བྱ་བ་ནི། བདག་ཏུ་འདྲ་ཤིང་ལའི་སེམས་ཅན་རྣམས་ཀྱི་བདག་ཏུ་འདྲ་ཤིང་ལའི་བྱེད་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་བསྐྱེད་དོ། ཟུང་ན་ལས་འདས་པ་ཞི་བ་ཞེས་བྱ་བ་ནི། དམིགས་པས་བྱིན་ཅི་ལྟག་ཏུ་གྱུར་པའི་སེམས་ཅན་རྣམས་ཀྱི་དམིགས་པས་བྱིན་ཅི་ལྟག་ཏུ་གྱུར་པ་ལྟར་བའི་བྱེད་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་བསྐྱེད་དོ། འདྲ་བྱེད་ཐམས་ཅད་མི་རྟག་པོ། ཞེས་ཐོས་ནས་འདྲ་བའི་རྟག་པ་ཉིད་ལ་འཇུག་པོ། འདྲ་བྱེད་ཐམས་ཅད་སྐྱག་བསྐལ་བའོ། ཞེས་ཐོས་ནས་སྤོང་ལས་དང་བསྐྱེད་དོ། ཚེས་ཐམས་ཅད་བདག་མེད་པའོ། ཞེས་ཐོས་ནས་སྤོང་པ་ཉིད་ཀྱི་ཉིད་ལ་འཛིན་དང་། རྣམ་པར་ཐར་པའི་སྒོ་ལ་སྤོང་མེ། ཟུང་ན་ལས་འདས་པ་ཞི་བའོ། ཞེས་ཐོས་ནས་མཚན་མ་མེད་པ་ཡོངས་སུ་འདྲིས་པར་བྱེད་དོ། རྟག་པོ། ཁ་ཡིན་པར་ནི། ཡང་དག་པའི་མཐའ་མང་ན་སྐར་ཏུ་མི་བྱེད་དོ། དེ་ལྟར་ཤེས་པའི་བྱ་དེ་ལྟ་བུའི་ཚེས་ལ་བཞེན་པའི་བྱ་རྒྱུ་བཞིན་ཐམས་ཅད་ཡོངས་སུ་རྫོགས་པར་བྱེད་དོ།

玄奘訳 (T11.208a17-b4) :

何以故。諸佛世尊所說實義能隨覺了故。舍利子。諸佛世尊具大智力總攝諸法。安處四種鄔陀南中。何等爲四。所謂一切行無常。一切行苦。一切法無我。涅槃寂滅舍利子。所演一切行無常者。如來爲諸常想衆生斷常想故。所演一切行苦法者。如來爲諸樂想衆生斷樂想故。所演一切無我法者。如來爲諸我想衆生斷我想故。所演寂滅涅槃法者。如來爲諸住有所得顛倒衆生。斷有所得顛倒心故。舍利子。是諸菩薩摩訶薩。若聞如來說一切行爲無常者。即能善入畢竟無常。若有聞說一切行苦。則能興厭起離願心。若有聞說諸法無我。則能修習於三摩地妙解脫門。若有聞說寂滅涅槃。則能修習無相三摩地。而不非時趣入眞際。如是舍利子。若諸菩薩摩訶薩。能善修習如是法者。終不退失一切善法。速能圓滿一切佛法〔。〕

法護等訳 (T11.794c20-795a9) :

何能隨順諸佛世尊所說實義。舍利子。諸佛如來總略以其四種法印。攝一切法。何等爲四一者諸行無常。二者諸行是苦。三者諸法無我。四者涅槃寂靜。而一切衆生於諸行無常中。計有常想。若諸衆生斷除常想。此即是爲如來所說。又諸衆生於諸行苦中。計爲樂想。若諸衆生斷除樂想。此即是爲如來所說。又諸衆生於一切法無我中。計爲我想。若諸衆生斷除我想。此即是爲如來所說。又諸衆生於涅槃寂靜理中。起有所得顛倒之心。若諸衆生斷除有所得顛倒心者。此即是爲如來所說。又舍利子。若能了知諸行無常。即能解入空無常性。若能了知諸行是苦。即能離諸願求。若能了知諸法無我。即能觀想空三摩地解脫法門。若能了知涅槃寂靜。即能於諸相中有所修作。亦不非時取證實際。舍利子。如是等法。若諸菩薩勤行相應。即不減失一切善法。速能圓滿一切佛法〔。〕

hi śāriputra(6) evaṃ dharmābhiyukto bodhisattvo na parihīyate kuśalebhyo dharmebhyaḥ kṣipraṇ ca sarvabuddhadharmān paripūrayatīti || ||

【訳】彼〔菩薩〕は諸仏・世尊たちの説かれた真実の義に通達する。如来は四つの法の邬陀南 (udāna) によって一切法を圧縮してまとめた。四つとは何か。すなわち、諸行は無常であり、諸行は苦であり、諸法は無我であり、涅槃は寂靜である。諸行は無常であるとは常想を有する衆生たちの常想の断ちのために、如来によって説かれたのである。諸行は苦であるとは楽想を有する衆生たちの楽想の断ちのために、如来によって説かれたのである。諸法は無我であるとは我想を有する衆生たちの我想の断ちのために、如来によって説かれたのである。涅槃は寂靜であるとは有所得という顛倒を有する衆生たちの有所得という顛倒の断ちのために、如来によって説かれたのである。彼は諸行は無常であると聞いてから、完全に無常性に悟入する。諸行は苦であると聞いてから、願求からの離れが生じる。諸法は無我であると聞いてから、空性の三摩地と解脱門を修習する。涅槃は寂靜であると聞いてから、無相を熟知にし、非時に本際を現証しない。だから、舍利弗よ。法を精勤する菩薩は諸善法から退かないで速やかに一切法を円満する。という

ここでは、このように多くの文言を用いて、菩薩という存在の特性について述べる。このような表現の冗長さや煩雑さは他に類を見ないものである。しかしそれは、それだけ『菩薩藏經』において菩薩という概念が重要であり、多くの文言によって、様々な特徴を表現した結果であろう。また、ここでは無懈怠や不放逸といった概念を説明する形で菩薩の特徴を幾度か述べるのであるが、その際には自利的な内容も含まれるが、衆生への教化、すなわち利他的な性質を伴うものも少なくないと言えよう。

(四)、 小結

以上、第三品の内容を菩提心の性質と菩提心を備えた菩薩の特性という二点から考察した。『菩薩藏經』では菩提心は深心を備える必要があるのであるが、ここでの深心は一般的な用例である堅固さや清浄さといった性質としても述べられるが、特に力点が置かれたのは利他性であり、深心を利他性として解釈するのは『菩薩藏經』の独特な特徴と言えよう。また、菩提心の性質についてはおおよそ、深心の特徴を引き継ぐのであるが、仏果の根源とみなす点については深心には認められず菩提心の独特な性質と言えよう。また、菩薩の特性については多くの文言によって膨大な説明が施される。この点は『菩薩藏經』が菩薩という概念に注視した結果であると考えられよう。そして、菩薩が有するの特性については、自利的なものはもちろんのこと、利他的な性質のものも多く説かれていた。つまり、深心、菩提心、菩薩の特徴では一貫して利他性が重要視されている傾向が見いだせるのである。

また、今回検討した『菩薩藏經』の文言はいずれも、深心を有する菩提心を基点とした因果関係によって成立しているものとも考えられる。菩提心を発してこそ、菩薩は、様々な特性を保持すること

ができるのである。つまり、本第三品では、長文で諸々の菩薩が有すべき徳性を列挙によって、発菩提心、すなわち、願を強調していると言えよう。

第三項、信一如來の十不思議に対する信

成仏道の説示は、願から信、すなわち、第四「如来の不思議品」に続く。第四品は、如来の十不思議を中心にして説くのであるが、十不可思議法を信じるとは、不可思議の仏果を信じることでもある。まず、如来の十不思議について見ていきたい。第四品の最初に次のように説かれている。

梵文写本 (MS20a6-b3) ¹⁹² :

punar aparaṃ śāriputraivaṃ śraddhāpratiṣṭhito bodhisattvo daśasu dharmeṣv acintyaṃ tathāgatam arhantaṃ samyaksambuddhaṃ śraddadhātī patī(7)yaty avakalpayati na vicikitsati bhūyasyā mātrayā utplavate hr̥ṣyati tuṣṭim vindati āścaryādbhutasamjñāṃ cotpādayati (l) katameṣu daśasu (l) yad idam acintyaṃ tathāgatasya tathāgatakāyaṃ abhiśraddadhātī patīyaty avakalpayati na vi(8)cikitsati bhūyasyā mātrayā utplavate hr̥ṣyati tuṣṭim vindati āścaryādbhutasamjñāṃ cotpādayati | yad idam acintyaṃ tathāgatasya tathāgataghoṣaṃ abhiśraddadhātī yāvad āścaryādbhutasamjñāṃ cotpādayati (l) yad i(MS20b1)dam acintyaṃ tathāgatasya tathāgatajñānaṃ | yad idam acintyaṃ tathāgatasya tathāgatābhāṃ | yad idam acintyaṃ tathāgatasya śīlasamādhim* | yad idam acintyaṃ tathāgatasya tathāgataṛddhim* (l) yad idam a(2)cintyaṃ tathāgatasya tathāgatabalaṃ | yad idam acintyāni tathāgatasya tathāgatavaiśāradyāni (l) yad idam acintyān tathāgatasya mahākaruṇāṃ (l) yad idam acintyāms tathāgatasyāveṇikān buddhadharmān abhiśraddadhātī patīyaty

¹⁹² 蔵記 (D Kha288a2-b1, P Dsi314b3-315a3, H53a3-b6) :

[illegible]

玄奘訳 (T11.208b13-24) :

爾時佛告舍利子。是諸菩薩摩訶薩。善住如是清淨信已。復能信受如來應正遍知十種不可思議法。諦奉清淨無惑無疑不異分別。倍復踊躍深生歡喜發希奇想。舍利子。何等名爲如來十種不思議法。舍利子。〔一者〕信受如來不思議身。〔二者〕信受如來不思議音聲。〔三者〕信受如來不思議智。〔四者〕信受如來不思議光。〔五者〕信受如來不思議尸羅及以等觀。〔六者〕信受如來不思議神通。〔七者〕信受如來不思議力。〔八者〕信受如來不思議無畏。〔九者〕信受如來不思議大悲。〔十者〕信受如來不思議不共佛法。

法護等訳 (T11.795a11-28) :

爾時佛告舍利子言。信心住菩薩。於佛如來應供正等正覺十種不思議法中。信解清淨超越分別。離諸疑悔。後復生起身喜心喜適悅之相。發希有想。何等爲十。〔一者〕於佛如來最勝身相不可思議。信解清淨乃至適悅之相。發希有想。〔二者〕於佛如來妙好音聲不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔三者〕於佛如來最上大智不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔四者〕於佛如來微妙光明不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔五者〕於佛如來圓滿戒定不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔六者〕於佛如來廣大神足不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔七者〕於佛如來十種智力不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔八者〕於佛如來四無所畏不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔九者〕於佛如來大悲之心不可思議。信解清淨乃至發希有想。〔十者〕於佛如來不共佛法不可思議。信解清淨乃至發希有想。

avakalpayati na vicikitsati bhūyasyā mātra(3)yā utplavate hr̥ṣyati tuṣṭim vindati āścaryādbutasamjñāṃ
cotpādayati (I)

【訳】その他、舍利弗よ。そのように淨信に安住している菩薩は、十法を、正等正覺であり、阿羅漢である如来の不思議であると信じて、受け入れて、思惟して、疑いを持たなくて、更に躍り上がって、喜んで、満足を感じて、希有であるという想を生じる。十は何か。すなわち、如来の如来身を、不思議であると信じて、受け入れて、思惟して、疑いも持たなくて、更に躍り上がって、喜んで、満足を感じて、希有であるという想を生じる。すなわち、如来の如来声を不思議であると信じて、乃至、希有であるという想を生じる。すなわち、如来の如来智を不思議であり、すなわち、如来の如来光明を不思議であり、すなわち、如来の如来戒と三摩地を不思議であり、すなわち、如来の如来神通を不思議であり、すなわち、如来の如来力を不思議であり、すなわち、如来の如来諸無畏を不思議であり、すなわち、如来の如来大悲を不思議であり、すなわち、如来の如来諸不共仏法を不思議であると信じて受け入れて、思惟して、疑いを持たなくて、更に躍り上がって、喜んで、満足を感じて、希有であるという想を生じる。

如来の十不思議とは、すなわち、如来の、身が不思議、声が不思議、智が不思議、光明が不思議、戒と三摩地が不思議、神通が不思議、力が不思議、〔四〕無畏が不思議、大悲が不思議、不共仏法が不思議、からなる十の不思議である。当該の引用箇所には引き続き、当品では如来の十不思議それぞれに対して、細かく再説される。

では、この十不可思議は何を目的として説示されているのか。この点については次のように述べられる。

梵文写本 (MS20b3-4) ¹⁹³ :

bhūyasyā mātrayaiṣāṃ eva daśānāṃ tathāgatācintyāścaryādbhutānāṃ dharmāṇāṃ arthāya vīryam ārabhate
na sīdati nāvalīyate nodvijaty evaṃ cittam utpādayati kāyaṃ tvaksnāyucarmavāyuyantraṃ śarīraṃ kledam
āpadyatāṃ pariśuṣya tu vā māṇsaśoṇitam na punar aprāptair daśabhis tathāga(4)tācintyāścaryādbhutair
dharmair antarā vīryasya sraṇsanam bhaviṣyati (I) evaṃ śraddhādhimuktaḥ śāriputra bodhisattva imāṃ daśa

¹⁹³ 藏訳 (D Kha288b1-4, P Dsi315a3-6, H53b6-54a3) :

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ངོ་མཚར་དང་། རྒྱུ་ལྡན་བསུ་ལོ་འདྲི་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིར་བཞུགས་ཆེར་ཆོས་ཞིང་མི་ཁྱུ་མཁའ་མཁའ་ལྷན་གྱི་བར་དུ་ལུས་
ཀྱི་པགས་པ་དང་། རྒྱུ་ལྡན་ཐིང་དང་། དཔྱད་ཀྱི་ཤ་དང་། ལུས་པ་དག་རྩ་ཞོག་ལ། ལུས་ཀྱི་ཤ་དང་། ལྷག་བསྐྱམས་ཀྱང་ཁྲུའི་བཞུགས་ཉམས་པར་མི་བྱའོ། ལྷུ་མ་དུ་དེ་རྩར་མེས་བསྐྱེད་དོ། །ཤུ་རིའི་བྱ། དེ་རྩར་དང་པགས་པ་འདི་བྱང་
རྒྱུ་བེམས་དཔལ་འདྲི། དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་འདི་བསུ་ལོ་འདྲི་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིར་བཞུགས་པ་ངོ་མཚར་དང་། རྒྱུ་ལྡན་བསུ་ལོ་འདྲི་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིར་བཞུགས་པ་ངོ་མཚར་དང་། ཡིད་ཆེས། རབ་ཏུ་རྩོག་ཤིང་ཆོས་མི་ལ། རྒྱ་ཆེར་དགའ་མགུ་རྩེ་རངས་པ་རྩྭ་དོ། །

玄奘訳 (T11.208b24-c2) :

舍利子。是名十種不思議法。若有菩薩摩訶薩。爲求法故興起正勤。不怯不退不生捨離發如是心。我今未得不思議法。寧使風所轉身皮肉筋骨受大苦惱。或復血肉乾枯竭盡。要必勤行精進中無暫廢。如是舍利子。已得信解諸菩薩摩訶薩。若聞如是如來十種不思議法。信受諦奉清淨無疑。倍復踊躍深生歡喜發希奇想。

法護等訳 (T11.795a29-b6) :

如是十種如來應供正等正覺不可思議希有之法。住信菩薩精進勤求。不怖不懈心無動轉。乃至身肉皮骨筋脈血髓乾枯焦瘁。若未能得如來十種不思議法。於其中間不生疲倦。精進勤求必當獲得。舍利子。住信菩薩於佛如來如是十種不思議法。應當如是信解清淨。乃至發希有想〔。〕

tathāgatasyācintyāścaryādbhutadarmān abhiśraddadhāti pattīyaty avakalpayati na vicikitsati bhūyasyā
mātrayā utplavate hr̥ṣyati tuṣṭim vindati ||

【訳】正にこれら十の如来の不思議であり、希有である法のために、更に落ち込みなしに、畏縮なしに、倦厭なしに精進を着手して、「私は身の皮膚と筋と皮と呼吸器官と骨の腐敗に陥っても、そして、たとえ肉と血を枯れさせても、如来の不思議であり、希有である十の法が獲得されていない間に、決して精進のゆるめが生じないとしましょう」というように心を生じる。舍利弗よ。そのように浄信と深信とを持つ菩薩は、これらの如来の不思議であり、希有である十法を、信じて、受け入れて、思惟して、疑いを持たなくて、更に躍り上がって、喜んで、満足を感じる。

ここでは、如来十法の存在を信じ、そして、それを證得できるものであると信じる必要が述べられる。つまり、この信心の獲得こそが仏果に向かい絶え間ない精進を可能にする原動力となるのである。

第四項、行―四無量心・六波羅蜜多・四摂事

(一)、はじめに

第四品「如来不思議品」では仏果の存在と仏果の果報に対する信が述べられた。そこで、続く第五品から第十二品では、その仏果を獲得するための方法として、いくつかの実践徳目、菩提道(bodhimārga)が往昔の大蘊如来(Mahāskandha)が当時の精進行童子(Vīryacarita kumāra)に説法という形で述べられる。その実践徳目とは、四無量心・六波羅蜜多・四摂事の三類である。そこで、そのような実践徳目を述べる品を総じて行として区分した上で、その内容について検討してみたい。

(二)、四無量心

まず、第五「慈悲喜捨品」の内容は、品名の通りに、慈悲喜捨からなる四無量心の説示である。慈悲喜捨の四無量心は、本来、禅観の一種として目されてきたものであるが¹⁹⁴、『菩薩藏經』では、四無量心を第十「静慮波羅蜜多品」に摂めない。『菩薩藏經』では六波羅蜜多の前に配置し、単独の一品として「慈悲喜捨品」という品名¹⁹⁵を立て、膨大な文量を用いて説明を行う。つまり、『菩薩藏經』は四無量心を利他行の実践徳目とし¹⁹⁶、非常に重視していることがうかがえよう。第五品の本文について

¹⁹⁴ 例えば、『大乘理趣六波羅蜜多經』では、慈悲喜捨の四無量心(T8.903c20-905c19)をその「静慮波羅蜜多品」中に置いて説かれている。

¹⁹⁵ 玄奘は、「四無量品」と品名を立てている。

¹⁹⁶ 例えば、竺法護訳『賢劫經』「佛言。菩薩行道。以大慈悲護於十方。及化他人諸不逮者。以六度無極四等四恩六通善權。化衆生類。所度無底使長安隱。」(T14.8a28-b1)という説示から、慈悲などの四無量心は菩薩の「行道」という実践徳目の内容になっていることが分かるであろう。また、平川彰が述べた「第五四無量品は、清浄信に安住した菩薩は、菩薩藏法門の器であるとして、その修行の第一歩として四無量心を説く。」(平川彰[1971, p. 12])、および高崎直道が『菩薩藏經』と他經との関係について述べた「全体として、本經は『大集經』の諸品と密接な関係があり、特に〈菩薩行〉つまり四無量・六波羅蜜多・四摂法と經の列举する項目に関しては、ほとんど全面的に『無尽意所説經』に対応している。」(高崎直道[1974, p. 51])という言葉から、慈悲喜捨の四無量心は、修行の実践徳目であることも分かる。その他、島義厚「四無量心と廻向」：「四無量心(cattvāry apramāṇāni)とは、慈(maitrī)・悲(karuṇā)・喜(muditā)・捨(upekṣā)の四つの心行が無量であるとされる。大乘仏教においては、

は、本稿の第四章にて詳細に検討するので、今は、検討しない。そこで、今は、成仏道中の行の検討として、成仏道中の第五「慈悲喜捨品」の位置づけ、すなわち、次品等との関係について若干の言及を行いたい。

四無量心に細かく言及する論書として『大智度論』が存在する。そこでは四無量心と六波羅蜜の関係について次のように述べる。

若菩薩但行四無量心。不名發趣大乘。六波羅蜜相合故。名爲發趣大乘。四無量心生六波羅蜜。
(T25.389a4-6)

【訳】もし菩薩は、四無量心だけを行ずれば、これは、大乘に発趣することであると言わない、〔四無量心と〕六波羅蜜とを合わせて〔行じて〕こそ、これは、大乘に発趣することであるという。四無量心は六波羅蜜多を生じる。

つまり、四無量心と六波羅蜜多とを合わせて行ずるのは、大乘の特有の修行の方法であるといえよう。そして、六波羅蜜多は四無量心から生じる故に、四無量心の次は六波羅蜜多を説くことになると言えよう。

(三)、六波羅蜜多

成仏道中の行の第二は六波羅蜜多である。そして、この六波羅蜜多こそが、『菩薩藏經』の中心的内容であると言えよう。また、『菩薩藏經』では六波羅蜜多に関する文量が最も多く、布施から般若まで、六波羅蜜多の支分のそれぞれに一品を設け、非常に詳しく述べる¹⁹⁷。さて、内容の詳細な検討は後の章¹⁹⁸に譲るとして、今は六波羅蜜多を述べる各品の内容について触れたい。

まず、第六「布施波羅蜜多品」では、施物の内容、清浄な布施方法、布施の功德、布施の実例、布施と発心の関係などの内容について、説かれる。施物の内容については、財施だけを説かれ、法施と無畏施がほとんど説かれていないことは、本「布施波羅蜜多品」の一つの特徴であろう。このような点については、本稿の第六章に詳しく述べる。また、本品では清浄な布施方法と布施の功德についても十にまとめる形で述べる。また、本品では、スートラチュナカ (Sūtracūṇaka) という名前の紡織者の布施の実例を挙げて、僅かな布施でも多くの功德が生じるということを示している。その僅かな布施でも多くの功德が生じる原因は、「発心が広大であることと関係している。もし、広大な布施しても、発心がなければ、その時に、その広大な布施は粗暴な施者の布施となるであろう」(MS61b1-2) と説明する。

大乘菩薩道の利他行の実践徳目とされ、それが仏の衆生救済の中心たる大慈大悲として集約されてゆくものである。」とも述べている。(島義厚 [2007, p. 34])

¹⁹⁷ 平川彰博士はこの『菩薩藏經』の六波羅蜜多について、次のように述べられている。「ここには六波羅蜜の内容が非常に詳しく述べられており、般若經などには見られない詳しい説明がある。六波羅蜜多の解釈においても、般若經とは異なる説明があり、明らかに異なる系統である。」(平川彰 [1971, p. 12])

¹⁹⁸ 本第六品の一部分内容の詳細も、本稿の第四章と第六章に示している。

続く、第七「持戒波羅蜜多品」では、十善業道によって身・口・意による三つの善行を説き、また、深心からの十法 (daśadharmā āśayatas) ¹⁹⁹、十種の発心を説き、さらにその善根によって、成就された功德を種々の四法にまとめて説く。また、知られべき十種類の清浄戒を五つ通りに説き、さらに一切有為法に喜ばない想を起すことを説く。また、得念 (Samṛtipratilabdha) 菩薩の物語によって、一切衆生に平等心を起して一切衆生に父母の想を起すことを説き、そのような父母想から生じる四種類の厭離を説く。そして、最後に、破れたことのないの戒 (khaṇḍaśīla) など44種類の戒 (śīla) を列挙する。以上が本品の主たる内容である。

続く、第八「忍辱波羅蜜多品」では、まず忍辱 (kṣānti) の忍耐 (adhivāsana) あるいは堪忍 (kṣamāvat) の意味、および忍辱は完全に悟りに達する前に菩薩が長期間に行ずる菩薩行であることを説き²⁰⁰、さらに世尊は自分が仏陀になる前に菩薩として忍辱を修習していた物語によって、主に辱めを忍耐するあるいは堪忍する意味で忍辱を説き、さらに菩薩の忍辱とは何か (katamā bodhisattvakṣānti) を説き²⁰¹、最後に、究竟の忍辱 (atyantakṣānti) と無生忍 (anutpattikṣānti) を説く²⁰²。

¹⁹⁹ 玄奘訳では、「十種極重深心」と訳す、惟浄訳では、「十種善法」と訳す、蔵訳では「བསམ་པའི་ཚལ་བཞུ་ (深心の十法)」と訳す。

²⁰⁰ 梵文本 (MS80b8-81a1) :

tatra katamā śāriputra bodhisattvasya kṣāntipāramitā (|) yasyām udyukto bodhisattvaḥ bodhisattvacaryām carati | iti hi śāriputra bodhisattvaḥ kṣamāvām bhavati adhvāsana-jātyaḥ śītoṣṇasya (|) jighatsāyāḥ pipāsāyāḥ vātātapa-damśamaśakasarīṣṭ(MS81a1)paśaṃsparśānām duruktadurāgatānām vacanapathānām kṣamāvām bhavati | utpannotpannānām śārīrīnām vedanānām duḥkhānām tīvrānām kharānām kaṭukānām prāṇahāriṇīnām māraṇāntikānām kṣamāvām bhavaty adhvāsana-jātyaḥ | dīrgharātram mayā śāriputra pūrvam anabhisambuddhena bodhisattvacaryām caratā kṣāntir bhāvitā ||

【訳】舍利弗よ。この〔六波羅蜜多〕中に、菩薩の忍辱波羅蜜多は何か、菩薩はそ〔の忍辱波羅蜜多〕に精勤に菩薩行を行ずる。舍利弗よ。だから、堪忍の本性を持つ菩薩は忍耐を持つ。〔即ち〕寒さと熱さと、飢と渇きに対する〔忍耐を持ち〕、諸々の〔大〕風と烈日と、諸々の蛇や蚊や蛇との接触に対する〔忍耐を持ち〕、諸々の悪意を持ってかけられた粗悪語である語道に対する忍耐を持つ。〔また、菩薩は〕繰り返し生じた身体に鋭く硬く劇しく致命的で死に至る程の苦受に対する堪忍の本性を持つ。舍利弗よ。かつて、私が未だ完全なる悟りに達しておらず菩薩行を行っていた時、長期間に忍耐を修習した。(蔵訳 : D Ga96a1-4, H211b5-212a3; 玄奘訳 : T11.261b24-c6; 法護等訳 : T11.841b6-16)

²⁰¹ 梵文本 (MS83b6-84a6) :

tatra katamā bodhisattvakṣāntiḥ (|) avyāpādo bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | akrodho bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | avihinsā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā (|) avivādo bodhisattvakṣā(7)ntir draṣṭavyā | anupaghāto bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | ātmānurakṣaṇam bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | parānurakṣaṇam bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | kāyānurakṣaṇatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | [vākanurakṣaṇatā] bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā (|) cittānurakṣaṇatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | yonīśaḥ pratyavekṣaṇatā bodhisattvakṣāntir draṣṭa(MS84a1)vyā | nirvrttivirāgatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | karmavipākapratisaraṇatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | kāyapariśuddhi bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | vākipariśuddhi bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | cittapariśuddhi bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | devamanuṣyasampānnānubhavanatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā (|) bodhisattva-tathāgatalakṣaṇānu(2)vyamjanaparipūrītā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | tathāgatavāgbrahmasvararutaravitapratilambho bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | bodhisattvacaryā sarvakuśalamūlāvipraṇāśatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | sarvaparopakrameṇātikramaṇatā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | sarva pratyarthikanighātāratā bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | samkṣiptena tathāgatabalavaiśā(3) radyāveṇikamahākaraṇāmahāmaitrīmahāmuditāmahāpekṣāsarvabuddhadharmaparipūrīr bodhisattvakṣāntir draṣṭavyā | api ca śāriputra bodhisattvakṣāntir nāma (|) yadā kruṣṭo na pratyākroṣati pratisrutkāghoṣasamasuviditatvāt* (|) tāḍito na pratitāḍayati kāyapratibimbavat* (|) kruddheṣu na pratikrudhyati māyopamācittasu-nirīkṣitatvā(4)t* (|) so (|) varṇena na pratihanyate varṇena nānūṇiyate svaguṇaparipūrṇatvāt* (|) lābhena na hrīyate alābhena nāvalīyate dāntaśāntatvāt* (|) yaśasā na vismayate ayaśasā na skhalati sunīrīkṣitavistīrṇabuddhitvāt (|) nindayā nāvanamate praśansayā nonnamate susthitāprakampyatvāt* (|) duḥkhena na parikhidyate sattvāpekṣatvāt* (|) sukhena na (5) hrīṣṭi saṃskṛtasukhānityatvāt* (|) sarvabhavagatyupapattyaniśritatvāt* lokadharmair na lipyate (|) svapīdās utsahamte parānutpīḍanatvāt* | bodhyaṅgasambhāraparipūrṇatvād aṅgapratyāmgottamāṅgacchedam utsahate (|) buddhakāyābhilaṣitatvāt* kāyavikarttanām utsahate (|) sukṛtakarmabalādhānatvāt* sarvaviprakārā marṣayati (|) i(6)yaṃ śāriputrocyate bodhisattvakṣāntiḥ ||

続く第九「精進波羅蜜多品」は、内容が非常に豊富な一品である。まず、退輟のない精進によって成就された菩薩摩訶薩は、自分の身と命に対して惜しまなく、強度な精進を起して、菩薩藏法門を求めて、継続的に聞き、受け入れ、記憶し、読誦し、熟達し、他人にも説いて詳細に解説し、書写し

【訳】ここで、菩薩の忍辱とは何か。無嗔は菩薩の忍辱と見なされるべきである。無忿怒は菩薩の忍辱と見なされるべきである。不害は菩薩の忍辱と見なされるべきである。無論争は菩薩の忍辱と見なされるべきである。無侵害は菩薩の忍辱と見なされるべきである。自分を保護することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。他人を保護することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。身を守護することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。語を守護することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。意を守護することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。如理に観察することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。寂滅と貪欲を離れることは菩薩の忍辱と見なされるべきである。業報に準拠することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。身を清浄することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。語を清浄することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。意を清浄することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。天〔の果報〕と人〔身の果報〕の獲得を経験することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。菩薩と如来の相好を円満させることは菩薩の忍辱と見なされるべきである。如来声としての梵浄な音声と言語と呼び声を証得することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。諸菩薩行と一切の善根とを生滅させないことは菩薩の忍辱と見なされるべきである。一切の敵の襲いから逸らすことは菩薩の忍辱と見なされるべきである。一切の対抗者を征服することを喜ぶことは菩薩の忍辱と見なされるべきである。簡略に、如来の力と無所畏と不共〔法〕と大悲と大慈と大喜と大捨とである一切仏法を成就することは菩薩の忍辱と見なされるべきである。

舍利弗よ。さらに、菩薩の忍辱は〔次のようである。〕〔即ち、〕罵られた時に、罵り返さない。〔罵られた声が〕反響の声と同じようなものがよく知られたからである。打たれた〔時に〕、打ち返さない、身が〔まるで水中における太陽或いは月の〕映像〔のようなもの〕であるからである。諸々の忿怒に対して忿怒を返報しない。幻と類似する心がよく観察されたからである。彼〔菩薩〕は誹謗によって破られなくて、称赞に対して、得ようと努力しない、自分の徳が円満されたからである。得によって、喜ばれない、無所得によって、〔気持ち〕沈まれない。

〔心が〕調伏されて寂靜〔の状態〕であるからである。名声されても、慢心しない、侮辱されても、〔心が〕動揺しない。よく観察して広大な理性を持つからである。嘲弄されても、〔心が〕下げられない、喝采されても、〔心が〕揚がらない。よく安住して動揺されるべきがないからである。苦によって、苦しめられない、衆生を憐憫するからである。楽によって、喜ばれない、有為の楽が無常であるからである。世間法によって、汚されない、一切の有趣の生まれに頼らないからである。自分の諸々の苦痛を耐える、他人に苦痛を与えないからである。肢体と頭との切断することを耐える、菩提支の資糧が円満されたからである。身体の分割することを耐える、仏身が希求されたからである。一切の害を耐える、善行力〔を増長する〕ためである。舍利弗よ。これが菩薩の忍辱と言われる。(蔵訳：D Ga99b4-100b2, P Wi111b2-112b2, H217a6-218b4；玄奘訳：T11.263b10-c16；法護等訳：T11.842c24-843a20)

²⁰² 梵文写本 (MS84b4-85a1)：

tatra katamātyantakṣāntiḥ (I) yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatra dṛṣṭyapakarṣo na śūnyatāyāḥ samāropah | yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatra vitarkāpakarṣo nānimittasamāropah (I) yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatra prañidhānasyāpakarṣo nāpranīhitasya samāropah (I) yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatrābhisamkā(5)rasyāpakarṣā nānābhisamkārasya samāropah | yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatra kleśasyāpakarṣo na saṃkleśakṣayasya samāropah | yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatrākuśalasyāpakarṣo na kuśalasya samāropah (I) yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatra sāvadhyāpakarṣo nānavadyasya samāropah || peyālam* || (6)sarvatra vistareṇa karttavyam | yaḥ śūnyatāyā anugamo na tatra saṃsārasyaāpakarṣo na nirvāṇasya samāropo (I) yātra kṣāntir iyaṃ ucyate tyantakṣāntiḥ | yat ajātaṃ na janitaṃ na saṃjātaṃ notpannaṃ na tasya kaścit sambhavaḥ | asambhavatvād akṣayaṃ | yac cākṣayaṃ iyaṃ sātyāntakṣāntiḥ (I) (MS85a1)yan na saṃskṛtaṃ nāsaṃskṛtaṃ na samāropah nārpitaṃ na vardhitaṃ nopanayo nāpanayaḥ na tasya kaścid utpādaḥ (I) yaś cānutpādaḥ tad akṣayaṃ (I) yaivaṃ kṣāntir iyaṃ ucyate (‘)nutpattikṣāntiḥ |

【訳】そこで、究竟忍耐とは何か。空性には従うことがあっても、その時に、〔邪〕見の減少がないならば、空性には増益がない。空性には従うことがあっても、その時に、尋の減少がないならば、無相（無自性）には増益がない。空性には従うことがあっても、その時に、希求すること〔願〕の減少がないならば、希求しないこと（無願）には増益がない。空性には従うことがあっても、その時に、諸行（造作）の減少がないならば、無作（無為）には増益がない。空性には従うことがあっても、その時に、煩惱の減少がないならば、完全に煩惱を尽くすことには増益がない。空性には従うことがあっても、その時に、不善の減少がないならば、善には増益がない。空性には従うことがあっても、その時に、罪の減少がないならば、無罪には増益がない。等々、すべての場合に敷衍されるべきである。〔乃至〕空性には従うことがあっても、その時に、生死〔輪廻〕の減少がないならば、涅槃には増益がない。凡そ以上の中における忍耐はそれが究竟の忍辱と言われる。凡そ未だ生まれないのであり、生まれたのではないであり、現れたのではないであり、起ったのではないのであるもの、そのものは何れも生ずるものではない。不生の故に、滅がないである。凡そ滅がないであるもの、そのものは〔言った〕その究竟の忍耐である。凡そ有為ではないのであり、無為ではないのであり、増益ではないのであり、損ではないのであり、増長ではないのであり、奪い去るのではないのであり、持ち来るのではないのであるもの、そのものは何れも生ずるものではない。無生であって、滅がないのである。凡そこのような忍耐が無生忍と呼ばれる。(蔵訳：D Ga101a2-b1, P Wi113a3-b2, H219a8-220a1；玄奘訳：T11.264a10-27；法護等訳：T11.843c5-17)

て保存するということを述べる。さらに譬喩を作って菩薩摩訶薩は自分の身と命とに対して惜しまない程に堅固な忍辱と堅固な精進とを行うことも説明する。また、本品では、仏法が滅する時に、衆生たちがこの菩薩蔵法門に対する態度も説かれている。すなわち、仏法が滅する時に、この菩薩蔵法門を聞いてから、この菩薩蔵法門に夢中になって受け入れる人もいるし、誹謗する人もいるし、そして、すべてを聞かない人もいるし。そのこの菩薩蔵法門に夢中になって受け入れる人は、戒の無障礙清淨（śīlānāvaraṇaviśuddhi）を成就し、刹那具足の獲得の無障礙清淨（kṣaṇasampratīlamābhānāvaraṇaviśuddhi）を成就し、直面に仏陀を見ることがと会うこととの無障礙清淨（sammukhabuddhadarśanasamavadhānānāvaraṇaviśuddhi）を成就し、弥勒如来を見てその見た同時に無障礙清淨を成就し、という四つの無障礙清淨（cetasṛbhir anāvaraṇīyābhiḥ pariśuddhibhiḥ）を成就する。また、この菩薩蔵経を修習する者にとって、注意すべき十の障礙（daśāntarāya²⁰³）、菩薩の五つの減損の法（hāniya dharma）なども説かれる。また、本品では、末法の思想が強調され、悪比丘の像が幾つかの箇所でも描写されていることは注目に値しよう。また、本品でも、何回も譬喩と過去世の物語とを使って、本品の内容を記述する。例えば、善見（sudarśanas）などの六悪比丘の物語、嬰兒（dāraka）の物語、律儀（Saṃvara）と律儀住（Saṃvarasthita）という名前の二菩薩の物語、飢えている犬（bubhukṣita kurkkura）の譬喩、〔良〕菓アガダ（agada）の譬喩等がある。その中、律儀と律儀住という二菩薩の物語中、その二菩薩に行われていた精進に対する描写から、菩薩摩訶薩によって行じられる精進の力強さが窺えるであろう。

また、第十「静慮波羅蜜多品」では、まず四禪（catur dhyāna）を説き、次に天眼（divya cakṣu）・天耳（divya śrotra）・他心知（paracittajñāna）・宿住（pūrvanivāsa）・神足作証通（ṛddhividhisākṣātkriyābhijñā）という五神通（pañcābhijñā）、およびその五神通の各自の神通智業の円満（ābhijñājñānakarmaparipūri）のことを詳しく説き、さらに、神通と智慧との不同を説く²⁰⁴。また、サマーヒタ（samāhita）とサマー

²⁰³ antarāya: 障礙。法護等訳ではそれを「魔事」と訳している。

²⁰⁴ 梵文写本（MS112a5-b1）：

tatra katamā śāriputra bodhisattvasyābhijñā katamaj jñānaṃ (I) yad divyena (5) cakṣuṣā rūpāṇi paśyati iyaṃ ucyate bhijñā (I) yad rūpābhāseṣu kṣayadharmatayā jñānaṃ na ca sākṣātkriyā idam ucyate jñānaṃ || punar aparaṃ śāriputra yat sarvaśabdābhāsaṃ śṛṇōtiyaṃ ucyate bhijñā (I) yad śrutapūrvantānābhilāpyatā idam ucyate jñānaṃ || punar aparaṃ śāriputra yat sarvasattvacittacaritaṃ prajānātīyaṃ ucyate bhijñā (I) yac cittanirōdhajñānaṃ na ca nirōdhasākṣātkriyā idam ucyate jñānaṃ || punar aparaṃ śāriputra yat pūrvakoṭyasamgasmaranātā idam ucyate bhijñā (I) yat tryadhvāsaṅgajñānābhedaṃ idam ucyate jñā(7)naṃ || punar aparaṃ śāriputra yat sarvaśeṭragamanāgamanateyaṃ ucyate bhijñā (I) yad ākāśaśeṭrajñānāvataranātedaṃ²⁰⁴ ucyate jñānaṃ || punar aparaṃ yad abhijātadharmaṃprasthānateyaṃ ucyate bhijñā (I) yat samadharmaṃpāśyanātedaṃ ucyate jñānaṃ || punar aparaṃ yat sarvalokakarmjñānateya(8)m ucyate bhijñā (I) yat sarvalokāsaṃsrṣṭateyaṃ ucyate jñānaṃ (I) punar aparaṃ yat sarvaśakrabrahmalokapālābhībhavanateyaṃ ucyate bhijñā (I) yat sarvaśrāvakaṃpratyekabuddhardhijñānātedaṃ ucyate jñānaṃ || iti hi śāriputremāś cābhi(MS112b1)jñā idam ca jñānaṃ tad ucyate bhijñājñānakarmaparipūriḥ ||

【訳】舍利弗よ。その中、菩薩の神通とは何か、智慧とは何か。天眼によって諸色を見ることが、これが神通と呼ばれる。諸色の顯示において、滅の本質を了知しても現証しないこと、これが智慧と呼ばれる。その他、舍利弗よ。一切声の顯示を聞くこと、これが神通と呼ばれる。風聞によって知られたのを話さないべきであること、これが智慧と呼ばれる。その他、舍利弗よ。一切衆生の心行を知ること、これが神通と呼ばれる。心の寂滅を了知しても現証しないこと、これが智慧と呼ばれる。その他、舍利弗よ。前際を無障礙に記憶すること、これが神通と呼ばれる。三世を無障礙に了知して分別すること、これが智慧と呼ばれる。その他、舍利弗よ。一切国土に行くことと来ること、これが神通と呼ばれる。虚空と国土を了知して趣くこと、これが智慧と呼ばれる。その他、優れた法へ進むこと、これが神通と呼ばれる。平等法を見ること、これが智慧と呼ばれる。その他、一切世間を喜ばせること、これが神通と呼ばれる。一切世間によって影響されないこと、これが智慧と呼ばれる。その他、一切帝釈と梵天と世界の守護者を勝ること、これが神通と呼ばれる。一切声聞と独覚の神変を知ること、これが

パンナ (samāpanna) とを説き、また、菩薩の希奇未曾有な法性 (bodhisattvasyāścaryādbhutadharmatā) を説き、さらに菩薩の諸禪定が無相であることを説く。そして、最後に、静慮波羅蜜多が何を先行とするのかについて述べる。以上が「静慮波羅蜜多品」の内容である。

第十一「般若波羅蜜多品」では、まず般若の四十一の聞相 (ekacatvāriṃśat-ākāra) および正行 (pratipatti) を説き、さらに正見 (samyagdr̥ṣṭi) を生じるための聞 (他人からの声 (paratas ghoṣa) を聞く) と思 (如理作意/如理思惟 (yoniso manasikāra)) とを説き、また、如理方便 (yonisaḥ prayoga)、如理觀察 (yonisaḥ paśyin)、無見 (adarśana)、如理証入 (yonisaḥ praveśa)、如理句 (yonisaḥ pada)、正確性を持つ見の流れ (yathā vaddarśanaṇiṣyanda)、智慧が一切有為の範囲の諸法と共に住まない (prajñā saṃskṛtāvacarair dharmmaiḥ sārddham na saṃvasati) ことを説く。さらに般若分別 (prajñā vibhāṅga) すなわち、蘊善巧と、界善巧と、処善巧と、諦善巧と、無礙解善巧と、依処善巧と等の大小乗の一切法に対する十の善巧²⁰⁵を非常に詳しく説き、さらに般若と諸波羅蜜多の義を説く。そして、最後に、この菩薩蔵法門を受持する善男子たちあるいは善女人たちは五つの十の功德利益 (daśaguṇānuśaṃsa) を獲得することを説く。以上が成仏道中の行における六波羅蜜の箇所である。

(四)、四摂事

第十二「大自在天授記品」の前半部分は四摂事が述べられる。そしてこれは成仏道中の行における第三に位置づけられよう。四摂事とは、布施・愛語・利行・同事という四つの内容からなる概念である。そして本品では、それぞれの内容について詳しく説かれている。その際に注目すべき点は、四摂事のそれぞれを四種類の菩薩に配当する点である。まず、第一の布施を初発心の菩薩たちに配し、第二の愛語を行が獲得された菩薩たちに、第三の利行を不退転の菩薩たちに、第四の同事を一生補処の菩薩たちに配して説明を行っている²⁰⁶。つまり、『菩薩蔵経』では四摂事が菩薩の修行階梯を述べる概念として援用されるのである。この点は『菩薩蔵経』の独自性とも言えよう。

(五)、小結

本項では成仏道中の行という視点から、第五品から第十二品までの内容を確認した。その結果、その内容は、四無量心・六波羅蜜多・四摂事の三類に区分することができよう。また、通常、四無量心は静慮波羅蜜多に組み込まれるのであるが、『菩薩蔵経』では、六波羅蜜多の前提となる修行徳目として四無量心を位置づける。これは『菩薩蔵経』の特徴であり、これこそは利他性を強調したものとも言えよう。そして、四無量心を発し、六波羅蜜多を行ずる菩薩は次第に仏への段階を進めていくのであるが、『菩薩蔵経』ではその段階を説明する際に四摂事という概念を援用する。四摂事をこのように用いる点も『菩薩蔵経』の独特な特徴であるとも言えよう。

智慧と呼ばれる。だから、舍利弗よ。これらは神通である、これは智慧である。〔ということ、〕これが神通の智業の円満と呼ばれる。(D Ga151b2-152a1, P Wi176b6-171a7, H294a7-295a3 ; 玄奘訳 : T11.291b18-c7 ; 法護等訳 : T11.866a1-a17)

²⁰⁵ この十善巧の詳細は、本稿の第四章で述べてい。

²⁰⁶ ここでは、四摂事のそれぞれを四種類の菩薩に当てる点は平川彰 [1971, p. 12] に言及されたことがある。

以上、本項の検討の結果、『菩薩藏經』では仏教一般に登場する概念を枠組みとして受容し、独自の解釈を施すことによって、声聞乘的な阿羅漢果を目指す解脱道ではなく、菩薩乘的な仏果を目指す成仏道として、独自の修行体系を構築していると言えよう。

第五項、果一成仏の授記

第十二「大自在天授記品」の後半部分では、成仏の授記が行われる。当該箇所を成仏道中の「果」と位置づけて、その内容を紹介したい。

第三品より成仏道として述べられた、菩薩藏法門は、釈尊の前世である精進行童子に対する大蘊如来の説法として述べられたものであった²⁰⁷。しかし大蘊如来はその世では、精進行童子に成仏の授記を与えなかった²⁰⁸。時代は移り、精進行童子は、大蘊世尊より阿僧企耶 (asamkhyeya) 劫の後、宝肢 (Ratnāṃga) ²⁰⁹如来の世に、善慧 (Suprajña) という名前の長者として生まれる。そして、さらに時は流れ、彼は宝肢如来より阿僧企耶劫の後、放光 (dīpaṃkara, 燃灯) 如来の世において、雲 (Megha) という名前の少年婆羅門として生まれた。そして、この時、放光如来は、少年の雲に対して「将来、釈迦牟尼という名前の如来になる」という授記を与えるのである。以上が成仏道中の「果」に区分される第十二「大自在天授記品」の後半部分内容である²¹⁰。このように、『菩薩藏經』は成仏道における行の果報として授記が与えられることを述べるのである。

第六節、結び

以上、本章では、『菩薩藏經』の内容を分析すべく、その全貌を追った。

まず、第一節では『菩薩藏經』が声聞乘的な解脱道と菩薩乘的な成仏道に大きく二分できることを指摘し、その区分に則って、以下の節で検討を行った。つぎに、第二節では解脱道にあたる第一品について検討を加え、その内容は実質的に四諦の教えにほかならないことを看破した。また、第三節では家主品の集諦相当箇所を詳細に分析し、非如理作意の原因として虚妄分別を挙げる性質が特徴的である点を指摘した。第四節では第二品の分析を通じて、第二品の聞法衆の説示は、『菩薩藏經』の本質的なものではなく、あくまで後述する菩薩藏法門である成仏道を述べるための準備にすぎないことを

²⁰⁷ 例えば、経文は次のように説かれている。syāt punas te śāriputra evaṃ kāmṃkṣā vā vimatir vānyaḥ sa tena kālena tena samayena vīryacarito nāmnā kumāro (‘)bhūt* (‘) na punar evaṃ draṣṭavyaṃ (‘) tat kasya hetor (‘) ahaṃ sa tena kālena tena samayena vīryacarito nāmnā kumāro bhūvaṃ | (MS134b7-135a1) (【訳】また、あなたには、その時かの時にいた精進行と名付ける童子は別人であるというような狐疑あるいは疑惑があるであろうか。決してそのように見なさないべきである。それは何故か。その時かの時に〔いた〕精進行と名付ける彼童子は私であったからである。)

²⁰⁸ na ca mān sa bhagavāṃ vyākṛtavān bhaviṣyasi tvam anāgate (‘)dhvani tathāgato rhan samyaksambuddhaḥ (MS135a1-2) (【訳】しかし、彼世尊〔大蘊如来〕は私に「汝は未来世に阿羅漢であり、正等正覚である如来になるであろう」という授記しなかった。)

²⁰⁹ 玄奘訳では「寶性」と訳している。法護等訳では「寶身」と訳している。藏訳では「དཀོན་མཚོག་ཡན་ལག་ (宝支肢)」と訳している。

²¹⁰ また、この釈尊の前世の授記物語の他にも、ナラダッタ (naradatta) 菩薩と彼の諸眷属の成仏の授記物語についても触れられる。

も指摘した。つづく第五節では第三品より十二品までの成仏道の内容を分析した。その結果、成仏道は四つに区分することができるとして、第三品は：願（発菩提心、菩薩になる）であり、第四品は：信（如来の十不思議である仏果を信じる）であり、第五品から第十二品の四摂事までの内容は：行（四無量心、六波羅蜜多、四摂法を行ずる）であり、第十二品における世尊の本生譚の内容は：果（成仏の授記を頂く）に区分できることを指摘した。また本節の検討において、『菩薩藏經』は既存の単語や枠組みを受容するも、その内容については独自の解釈を施し、利他を重視する独特な思想を保持していることを指摘した。

第四章、『菩薩藏經』と他經との関係

第一節、はじめに

『菩薩藏經』のおおよその内容については前章で既に述べた。さて、『菩薩藏經』と他の經典との関係については、高崎直道[1974]等によって『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』や『大集經・無尽意菩薩品』等と関係があることが既に指摘されている。しかし、それらの対応の詳細については未だ明らかになったとは言い難い。そこで本章では、『菩薩藏經』の性質を明らかにすべく、それら二つの經典との対応関係についてより詳細に検討し、さらには先行研究によって指摘されていない対応經典を調査し、分析を行いたい。

第二節、『菩薩藏經』の序分と他經

まずは『菩薩藏經』の序分に相当する、第一「家主品」とまた、第二「金毘羅葉叉品」と他の經論との対応関係について分析する。

まず、第一「家主品」についてであるが、高崎直道 [1974, pp. 50-51] は、本品の「不正作意」(ayoniśomanasikāra 非如理作意、不善思惟) 以下の十二因縁を説くという箇所が、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』²¹¹ (以下、「陀羅尼自在王品」あるいは『陀羅尼自在王經』)・『大集經・無尽意菩薩品』²¹² (以下、「無尽意菩薩品」あるいは『無尽意所説經』) と一致²¹³し、『陀羅尼自在王經』・『無尽意所説經』

²¹¹ 『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』：曇無讖(385-433年)訳、梵文名 Dhāraṇīśvararājāsūtra、竺法護(239-316年)訳『大哀經』(梵文具名 Dhāraṇīśvararāja-paripṛcchā-sūtra/ Tathāgatamahākaraṇīrdeśa-sūtra) の異訳、チベット語訳 འཕགས་པ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་སྤྱིར་རྒྱུ་ཆེན་པོ་དེས་པར་བརྒྱན་པ་ཞེས་བྱ་བ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདོ། (D No.147, P No.814, H No.148)

²¹² 『大集經・無尽意菩薩品』：梵文名 Akṣayamatimirdēśa、智嚴・寶雲(4-5世紀頃)共訳、竺法護訳『阿差末菩薩經』の異訳、チベット語訳 འཕགས་པ་ལྷོ་གླས་མི་ཐད་པས་བརྒྱན་པ་ཞེས་བྱ་བ་ཐེག་པ་ཆེན་པོའི་མདོ། (D No.175, P No.842, H No.176)

²¹³ この三經のすべてがチベット語訳があるが、ここでは、それらの漢訳だけを示す。

『菩薩藏經』「家主品」(T11.199b29-c21)：是故諸長者。一切諸法不實分別之所生起。依於衆縁羸劣無力從衆縁轉。若有衆縁假立諸法。若無衆縁則無假法。諸長者。一切諸法唯是假立。此中都無生者老者死者盡者起者。唯有永斷諸趣。清淨寂靜可以歸依。如是諸長者。若有不實分別。則有假立不正作意。若無不實分別。則無假立不正作意。若有不正作意則有假立無明。若無不正作意則無假立無明。若有無明則有假立諸行。若無無明則無假立諸行。若有諸行則有假立於識。若無諸行則無假立於識。若有假識則有假立名色。若無有識則無假立名色。若有名色則有假立六處。若無名色則無假立六處。若有六處則有假立於觸。若無六處則無假立於觸。若有於觸則有假立於受。若無於觸則無假立於受。若有於受則有假立於愛。若無於受則無假立於愛。若有於愛則有假立於取。若無於愛則無假立於取。若有於取則有假立於有。若無於取則無假立於有。若有於有則有假立於生。若無於有則無假立於生。若有於生則有假立老死。若無有生則無假立老死。……

『大集經』「陀羅尼自在王品」(T13.16c6-26)：復次善男子。如來知禪解脫三昧煩惱解脫。云何而知。知諸衆生以因縁故貪樂生死。以因縁故貪樂涅槃。云何名因。云何名縁。若諸衆生思惟不善。是名生死因縁。因不善思惟故生長無明。是故不善爲因無明爲縁。因無明故則生於行。是故無明爲因諸行爲縁。因諸行故則生於識。是故行則爲因識則爲縁。因識故則生名色。是故識則爲因名色爲縁。因名色故則生六入。是故名色爲因六入爲縁。因六入故則生於觸。是故六入爲因觸則爲縁。因觸生受。是故觸則爲因受則爲縁。因受生愛。是故受則爲因愛則爲縁。因愛生取。是故愛則爲因取則爲縁。因取生有。是故取則爲因有則爲縁。因有生生。是故有則爲因生則爲縁。因生則有老死等苦。是故生則爲因老死爲縁。煩惱爲因諸業爲縁。諸見爲因愛結爲縁。煩惱爲因五蓋爲縁。是名爲因是名爲縁。而諸衆生以是因縁貪樂生死。何因縁故貪樂涅槃。有二因二縁。令諸衆生樂於涅槃。一者樂喜聽法。二者樂正思惟。復有二種。一者舍摩他。二者毘婆舍那。……(案：「陀羅尼自在王品」のこの内容は、『大薩遮尼乾子所説經』(T9.355c10-22)とは完全に一致している。)

『大集經』「無尽意菩薩品」(T13.197c15-198a3)：云何菩薩觀縁方便。集不善思惟故無明集。無明集故行集。行集故識集。識集故名色集。名色集故六入集。六入集故觸集。觸集故受集。受集故愛集。愛集故取集。取集故有集。

が『菩薩藏經』の第一品に素材を提供したのではないかと指摘している。しかし、家主品のように非如理作意と十二支縁起の無明支を関係づける經典は、本稿の第三章・第三節の「第二項、非如理作意と無明」で既に指摘したように、少なくとも阿含を含め十經は存在する。すなわち、このような説示は仏教一般的に認められるものと言えよう。しかし、先の検討で述べたように、非如理作意と虚妄分別を関係づける性格こそが『菩薩藏經』の特徴であり、その点が他の經論と関係することは見いだせない。つまり、第一品の内容は独特性が強いものと言えよう。

さらに、第二「金毘羅葉叉品」に至っては対応する内容はもちろん、関連するような記述すら他經に見いだすことができない²¹⁴。

従って、以上の二点から、第一「家主品」と第二「金毘羅葉叉品」という前二品の内容、すなわち本經の序分の内容は、『菩薩藏經』の独自のものであると言えよう²¹⁵。

第三節、『菩薩藏經』の正宗分と他經

第一項、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」と『大集經・無盡意菩薩品』の「無盡法門」

(一)、「菩薩藏法門」、「無盡法門」の内容対応表

次は、『菩薩藏經』の正宗分となる菩薩藏法門である成仏道の内容について、他の經論との関係を検討してみたい。

既に『菩薩藏經』の正宗分は『大集經・無盡意菩薩品』と関係がある点については高崎直道〔1974〕が指摘している。そこで、本節では、高崎〔1974〕の指摘を参照して、『大集經・無盡意菩薩品』との関係を吟味する。その際には特に高崎〔1974〕が言及していない点に注目したい。まず、『大集經・無盡意菩薩品』の正宗分の冒頭部を確認すれば次のようにある。

時舍利弗問無盡意。誰字仁者爲無盡意。無盡意言。唯、舍利弗。一切諸法因縁果報名無盡意。所以者何。一切諸法不可盡故。舍利弗言。唯、善男子。願仁〔者〕當說無盡法門。(T13.187a26-29)

有集故生集。生集故老死集。老死集故憂悲苦惱集。若知如是諸苦聚集。是名菩薩觀縁方便。(中略)不善思惟滅則無明滅。無明滅故行滅。行滅故識滅。識滅故名色滅。名色滅故六入滅。六入滅故觸滅。觸滅故受滅。受滅故愛滅。愛滅故取滅。取滅故有滅。有滅故生滅。生滅故老死滅。老死滅故憂悲苦惱諸苦聚滅。若知如是諸苦聚滅。是名菩薩觀縁方便。

²¹⁴ 義淨(635-713年)訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』には、金毘羅葉叉が、執金剛葉叉と協力して、提婆達多をはじめとする五百人が世尊を狙い山頂から投下る石を掴み取ろうとするが、失敗し、自身がその石の一撃で死亡しする説話が含まれている。この説話は金毘羅葉叉という種族が共通するに過ぎず、内容的にはなんら関係しない。以下が内容である。

爾時世尊從座而起。將入深山巖穴之内。于時提婆達多。與五百人發機飛石直擊如來。時執金剛神。以金剛杵於虛空中打石令碎。其石一片欲墮佛身。時金毘羅葉叉接石不著。遂打自身。從斯迸落損世尊足。(中略)時金毘羅葉叉。被石擊身自知必死。便發善念。命終之後生三十三天。(T24.192c10-19)

また、本經典には阿含經に見られる定型表現が幾度となく登場する。しかし、あくまで定型句表現に過ぎず、仏教の教えを説く經典であるならば当然のことであり、その点をもって、特定經典との影響関係を述べるのはいささか早計であろう。また、第四章の第八節でも検討するが、『菩薩藏經』に見られる定型句は『増一阿含經』と近く、両者になんらかの関係はあるであろう。

²¹⁵ 思想上、特に第一「家主品」は、有部阿含からの影響だけでなく、他部派の阿含からの影響もある。詳細は、本稿の第三章・第三節の「第二項、非如理作意と無明」に見る。

次にその正宗分の末尾には次のようにある。

無盡意菩薩今於是大集經中已說其義。若有聞是無盡法門。信解受持讀誦解說。當知是人則爲具足是無盡法。(T13.211b21-24)

これらの内容に基づけば、「無盡意菩薩品」の主要部の内容は、すなわち「無盡法門」²¹⁶の説示であると言えよう。また、『菩薩藏經』と『大集經・無盡意菩薩品』との二者が、序分上、対応できる点はないが、正宗分上、すなわち、「菩薩藏法門」の内容²¹⁷と「無盡法門」の内容とは、一致もしくは類似のところが非常に多い。次は表²¹⁸でこの両法門の内容²¹⁹を示して置きたい。

²¹⁶ 「無盡法門」という語は、最初に現れるのは、『大集經・無盡意菩薩品』の異訳本『阿差末菩薩經』である。そこでは次のように述べられる。

阿差末言。是舍利弗。菩薩所行八十品第而不可盡。諸佛世尊皆由此法。八十無盡而出生矣。阿差末菩薩說是法門不可盡品時。七萬八千人。從本以來未發道心。應時皆發無上正眞道意。五萬二千菩薩。尋時逮得無所從生法忍。一切衆會咸取衆華。若干種香諸寶華蓋。以用供散如來至眞。及阿差末諸菩薩上。奉敬歸此無極經要。

(中略) 善哉善哉、阿差末菩薩。快說此辭、能講頒宣無盡法門。十方諸佛咸共嗟嘆。(T13.610c18-611a11)
また、この經文からも、『阿差末菩薩經』では、「無盡法門」というのは、「菩薩所行」の「八十無盡」を説くものであることが分かる。『大集經・無盡意菩薩品』では、八十無盡の内容をも説いており、対応する。

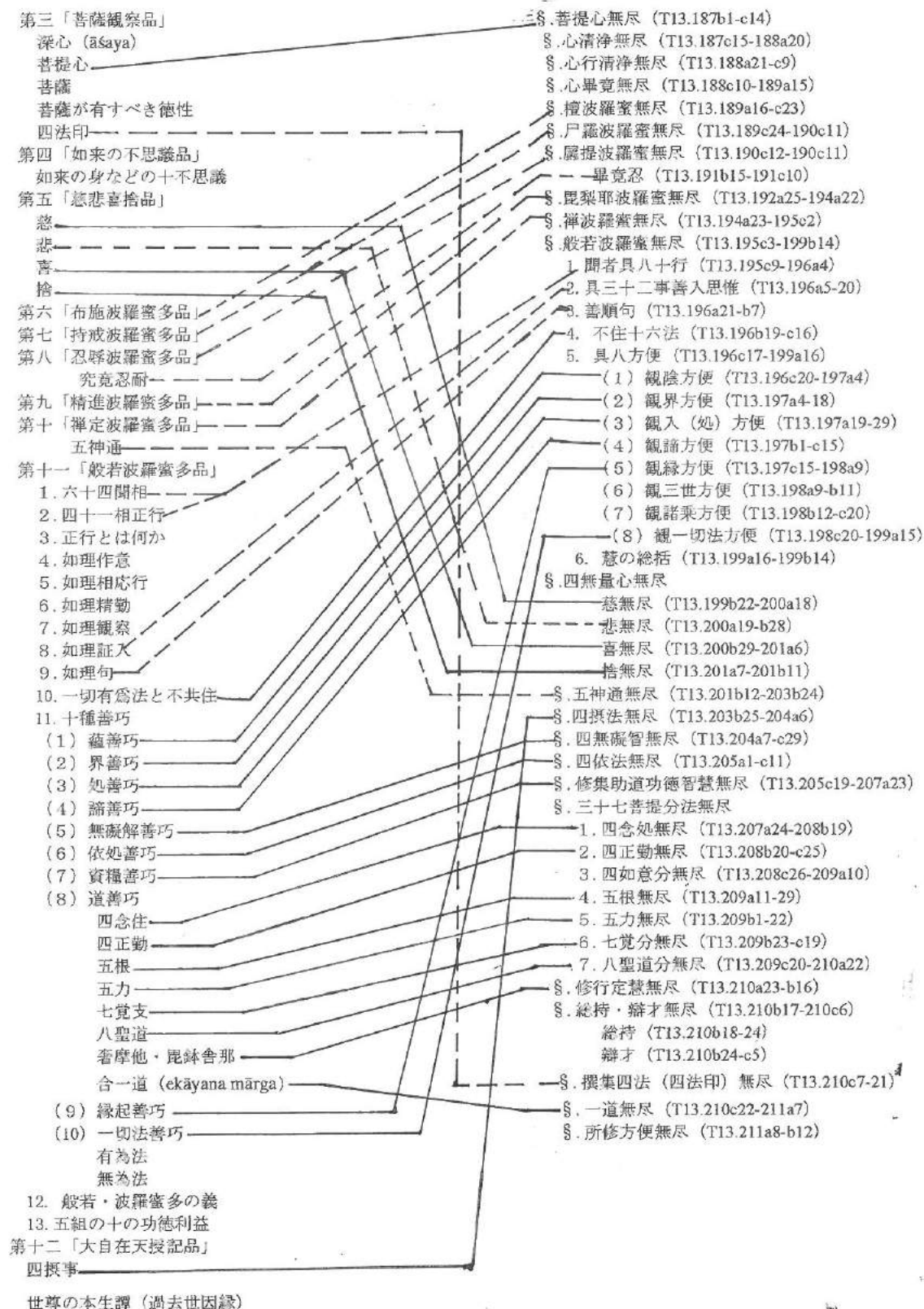
また、佛駄跋陀羅(359-429)訳『大方廣佛華嚴經』卷第五十「入法界品」において、師子奮迅比丘尼が二十九種の対告衆に二十九種の法門を説くことから、「無盡法門」は、仏教中の種々の法門の一つとして使えるものであることも理解できる。次の通りである。

爾時善財。見〔師子奮迅〕比丘尼遍處一切寶師子座。(中略)見處一座。淨居天衆眷屬圍遶。爲說無盡法門。又見處座。悅樂梵等梵衆圍遶。爲說普妙音聲法門。又見處座。無量他化自在天王等。天子天女眷屬圍遶。爲說菩薩清淨自在法門。(中略)又見處座。提頭賴吒天王等乾闥婆男女。眷屬圍遶。爲說無盡法門(西秦(385-431年)聖堅訳『佛說羅摩伽經』では、「歡喜無盡法門」とある。(T10.855c8-11))。又見處座。摩睺羅伽。阿脩羅王等。眷屬圍遶。爲說法界方便智莊嚴法門。(中略)又見處座。十地菩薩眷屬圍遶。爲說無礙三昧法門。又見處座。金剛力士眷屬圍遶。爲說智慧金剛法門。(T9.715b15-716a6)

²¹⁷ 本稿の第三章で既に述べた所であるが、『菩薩藏經』の正宗分の内容は、「菩薩藏法門」を説く箇所である。そして、その内容は、本經の第三「菩薩觀察品」から第十二「大自在天授記品」まで(流通分を除く)の内容である。

²¹⁸ 本表を制作する際には、高崎直道[1974, p. 52]を参照した。また借用するのではなく、批判的に検討し、いくつか訂正を加えた。なお、『菩薩藏經』「菩薩藏法門」十善巧の名称と、道善巧の順序については諸本で異なるがあるが、いまは玄奘訳に準拠して表を製作した。

²¹⁹ 「無盡意菩薩品」には藏訳も存在するが、今は漢訳の内容のみを示す。



前記した『菩薩藏經』『菩薩藏法門』と『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』との対応表に基づけば、内容上、両法門は少なくとも三分の二程度が対応していると言えよう²²⁰。

第二項、「菩薩藏法門」、「無尽法門」の内容対応系統

さて、「菩薩藏法門」と「無尽法門」とに対応関係が認められることは既に述べた。そこで、次に、これらの対応関係を詳細に分析してみたい。両法門の対応箇所は大きく二つの系統に分類することが可能である。まず、第一の系統は、内容も順番も対応する系統（以下、第一系統）である。次に第二の系統は内容が部分的に対応するが、順番が対応しない系統（以下、第二系統）である。それぞれの対応例は本稿の本文に述べれば煩雑になるために付録Ⅱに別して記した²²¹。以下にそれぞれの系統を分析したい。

（一）、第一系統

まず、第一系統について取り扱ってみたい。整理すれば次のようになる。

対応 類型	内容対応系統Ⅰ（ほとんど内容も順番も対応している）		
両法門の 名称	『菩薩藏經』『菩薩藏法門』		『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』
	『菩薩藏經』の所在品 数・品名		
両法門の 一致して いる内 容	第三「菩薩觀察品」	菩提心 （梵文写本：MS17a6-b4； 藏訳：P Dsi309a7-309b8, D Kha283a1-b2, H45b1-46a6； 玄奘訳：T11.206b10-c7； 法護等訳：T11.793a4-24）	菩提心無尽 （T13.187b1-c7）
	第五「慈悲喜捨品」	慈無量心 （梵文写本：MS54b1-55a6； 藏訳：P Wi56b2-58a3, D Ga49b6-51a6, H141b3-144a2； 玄奘訳：T11.235b11-236a23； 惟浄訳：T11.819b24-820a20）	慈無尽 （T13.199b22-200a18）
		喜無量心 （梵文写本：MS57a2-7； 藏訳：P Wi61a6-62a3, D Ga54a5-55a1, H148b3-149b3； 玄奘訳：T11.237c17-238a23； 惟浄訳：T11.821b29-821c23）	喜無尽 （T13.200b29-201a6）
		捨無量心 （梵文写本：MS57a7-b7； 藏訳：P Wi62a3-63a5, D Ga55a1-56a2, H149b3-151a5；	捨無尽 （T13.201a7-201b11）

²²⁰ 両者の対応程度について、高崎直道〔1974, p. 51〕は次のように述べる。

全体として、本經（『菩薩藏經』）は『大集經』の諸品と密接な関係があり、特に〈菩薩行〉つまり四無量・六波羅蜜多・四摂法と經の列举する項目に関しては、ほとんど全面的に『無尽意所説經』に対応している。

²²¹ 付録Ⅱでは、この二つの対応系統それぞれに一例ずつだけを挙げた。内容対応系統Ⅰは、慈と慈無尽の対応関係を例として挙げた。内容対応系統Ⅱは、布施波羅蜜多と布施無尽の対応関係を例として挙げた。

第十一「般若波羅蜜多品」	玄奘訳：T11.238a24-238c14； 惟浄訳：T11.821c24-822a28)	
	一切有為法と不共住 (梵文写本：MS119a8-b6； 藏訳：P Wi186a7-187a7, D Ga164b1-165a6, H315b1-316b6； 玄奘訳：T11.299a18-b29； 法護等訳：T11.871b2-27)	不住十六法 (T13.196b19-c16)
	蘊善巧 (梵文写本：MS119b7-120a3； 藏訳：P Wi187b3-188a6, D Ga165b2-166a3, H317a3-318a2； 玄奘訳：T11.299c13-300a20； 法護等訳：T11.871c5-23)	觀陰方便 (T13.196c20-197a4)
	界善巧 (梵文写本：MS120a4-7； 藏訳：P Wi187b6-188b7, D Ga166a3-b2, H318a2-318b5； 玄奘訳：T11.300a21-b19； 法護等訳：T11.871c24-872a9)	觀界方便 (T13.197a4-18)
	処善巧 (梵文写本：MS120a7-120b4； 藏訳：P Wi188b7-189b1, D Ga166b2-167a2, H318b5-319b3； 玄奘訳：T11.300b20-300c10； 法護等訳：T11.872a10-23)	觀入（処）方便 (T13.197a19-29)
	諦善巧 (梵文写本：MS120b4-121a7； 藏訳：P Wi189b1-190b8, D Ga167a2-168a5, H319b3-321b2； 玄奘訳：T11.300c11-301b25；法 護等訳：T11.872a24-872c15)	觀諦方便 (T13.197b1-c15)
	四 無 礙 解 善 巧 (pratisamvitkausāla) ①義無礙解善巧 (梵文写本：MS121a7-121b6； 藏訳：P Wi190b8-192a4, D Ga168a5-169a5, H321b2-323a4； 玄奘訳：T11.301b26-302a14；法 護等訳：T11.873a9-18)	四無礙智無尽 ①義無礙智無尽 (T13.204a7-b8)
	②法無礙解善巧 (梵文写本：MS121b7-122a3； 藏訳：P Wi192a4-192b7, D Ga168a5-169b6, H323a4-324a3； 玄奘訳：T11.302a15-a23； 法護等訳：T11.873a18-873b7)	②法無礙智無尽 (T13.204b9-26)
	③辞無礙解善巧 (梵文写本：MS122a3-122b1； 藏訳：P Wi192b6-193a6, D Ga169b6-170a5, H324a3-b5； 玄奘訳：T11.302c21-303a18； 法護等訳：T11.873b7-18)	③辞無礙智無尽 (T13.204b27-c12)
	四依処善巧 (pratisaranakausāla) (梵文写本：MS122b5-124b2；	四依法無尽 (T13.205a1-c11)

		藏訳：P Wi194a1-197a4, D Ga170b6-173b3, H325b3-330a3 ; 玄奘訳：T11.303b23-305a10; 法護等訳：T11.873c9-874c8)	
		資糧善巧 (sambhārakaśāla) (梵文写本：MS124b2-125a7; 藏訳：P Wi197a4-200b8, D Ga173b3-176b7, H330a3-335a5 ; 玄奘訳：T11.305a11-307b3; 法護等訳：T11.874c8-875c28)	修集助道功德智慧無尽 (T13.205c19-207a23)
		四念処善巧 (梵文写本：MS125a7-128b6; 藏訳：P Wi200b8-205b5, D Ga176b7-181a4, H335a5-342a3 ; 玄奘訳：T11.307b4-309c4; 法護等訳：T11.875c28-877b19)	四念処無尽 (T13.207a24-208b19)
		七覺支善巧 (梵文写本：MS128b6-129a5; 藏訳：P Wi205b5-206b8, D Ga181a4-182a4, H342a3-343b4 ; 玄奘訳：T11.309c13-310b14; 法護等訳：T11.877b19-877c17)	七覺分無尽 (T13.209b23-c19)
		八聖道善巧 (梵文写本：MS129a5-b5; 藏訳：P Wi207a1-208a4, D Ga182a4-183a5, H343b5-345a7 ; 玄奘訳：T11.312a01-312b26; 法護等訳：T11.877c18-878a15)	八聖道分無尽 (T13.209c20-210a22)
		奢摩他・毘鉢舍那善巧 (梵文写本：MS129b5-130a4; 藏訳：P Wi208a4-209a4, D Ga183a5-184a3, H345a7-346b4 ; 玄奘訳：T11.312b27-313a9; 法護等訳：T11.878a15-878b10)	修行定慧無尽 (T13.210a23-b16)
		四正勤善巧 (梵文写本：MS130a4-130b6; 藏訳：P Wi209a4-210b2, D Ga184a3-185a6, H346b4-348b4 ; 玄奘訳：T11.309c13-310b16; 法護等訳：T11.878b10-c15)	四正勤無尽 (T13.208b20-c25)
		五根善巧 (梵文写本：MS130b6-131a3; 藏訳：P Wi210b2-211a4, D Ga185a6-b7, H348b4-349b3 ; 玄奘訳：T11.310b17-c22; 法護等訳：T11.878c16-879a7)	五根無尽 (T13.209a11-29)
		五力善巧 (梵文写本：MS131a3-131b2; 藏訳：P Wi211a5-212a4, D Ga185b7-186b5, H349b3-351a1 ; 玄奘訳：T11.310c23-331b10; 法護等訳：T11.879a7-b5)	五力無尽 (T13.209b1-22)

		合一道 (ekāyana mārga) 善巧 (梵文写本: MS131b2-5; 藏訳: P Wi212a4-b4, D Ga186b5-187a5, H351a1-b5 ; 玄奘訳: T11.313a9-b5; 法護等訳: T11.879b16-b29)	一道無尽 (T13.210c22-211a7)
		縁起善巧 (梵文写本: MS131b5-132a3; 藏訳: P Wi212b4-213a8, D Ga187a5-b6, H351b53-352b6 ; 玄奘訳: T11.313b6-c9; 法護等訳: T11.879c1-22)	観縁方便 (T13.197c15-198a9)
		一切法善巧 (梵文写本: MS132a3-132b1; 藏訳: P Wi213a8-214a4, D Ga187b6-188b3, H352b6-354a1 ; 玄奘訳: T11.313c9-314a18; 法護等訳: T11.879c23-880a15)	観一切法方便 (T13.198c20-199a15)
	第十二「大自在天授記品」	四摂事 (梵文写本: MS134a1-b5; 藏訳: P Wi217b3-219a2, D Ga191b2-192b5, H358b5-360b5 ; 玄奘訳: T11.316a3-c1 ; 法護等訳: T11.881a26-c3)	四摂法無尽 (T13.203b25-204a6)

本表に基づけば、両者は適宜対応することが確認できる。そして、その中でも、特に『菩薩藏經』の第十一「般若波羅蜜多品」の内容に関して、特段に緊密な対応関係を有することが認められよう。

(二)、第二系統

次に、第二系統に分類することができるものについて表を用いて整理を試みた。次の通りである。

対応 類型	内容対応系統Ⅱ (内容が部分的に対応しているが、順序は不一致)		
両 法 門 の 名称	『菩薩藏經』『菩薩藏法門』		『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』
	『菩薩藏經』の所在品数・品名		
部分的 に 対 応 内 容	第三「菩薩觀察品」	四法印	撰集四法無尽 (四法印無尽) (T13.210c7-21)
	第五「慈悲喜捨品」	悲無量心	大悲無尽 (T13.200a19-b28)
	第六「布施波羅蜜多品」	全品内容	檀波羅蜜無尽 (T13.189a16-c23)
	第七「持戒波羅蜜多品」	全品内容	尸羅波羅蜜無尽 (T13.189c24-190c11)
	第八「忍辱波羅蜜多品」	全品内容	羼提波羅蜜無尽 (T13.190c12-190c11)
	第九「精進波羅蜜多品」	全品内容	毘梨耶波羅蜜無尽 (T13.192a25-194a22)
	第十「禪定波羅蜜多品」	全品内容	禪波羅蜜無尽 (T13.194a23-195c2)
	第十一「般若波羅蜜多品」	六十四闍相と四十一正行 如理証入 (yonīśas praveśa) 如理句 (yonīśas pada)	聞者具八十行 (T13.195c9-196a4) 具三十二事善入思惟 (T13.196a5-20) 善順句 (T13.196a21-b7)

このように主要な教義に関しては各品にわたって対応が見られる。その一方で第二系統においても、第四品と対応する内容が無尽法門に見出すことができなかった。

第三項、小結

以上、本項では『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」と『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の対応関係を二種の系統に分けて分析を行った。その結果、般若波羅蜜品と慈、喜、捨の三つの無量心を中心に両法門に極めて濃厚な対応関係が見いだせた。その一方で、『菩薩藏經』第四品の内容に関しては『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」に対応関係を見出すことができなかった。

第四節、「菩薩藏法門」、「無尽法門」の前後関係

第一項、先行研究の見解

先の節では、『菩薩藏經』「菩薩藏法門」と、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の対応関係を検討し、両者は三分の二程の内容が一致することや、般若波羅蜜品と慈、喜、捨の三つの無量心を中心に緊密な対応関係を見出すことができた。そこで、これら両法門、『菩薩藏經』「菩薩藏法門」と、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の両者のいずれが古いのか、どちらがどちらに影響を与えたのか、前後関係を明らかにすべく、検討を行っていききたい。

さて、これらの関係については、いくらか先行研究に言及がある。そこで、まずは先行研究の指摘を確認したい。平川彰 [1971, p. 20] は次のように述べている。

＜菩薩藏經＞が唯一の經典でなく、多数の經典の叢書（藏，Piṭaka）であり、大乘仏教で古くから有力であったことが知られるであろう。

ここで、氏は、多数の經典の叢書である＜菩薩藏經＞を最初期の大乗經典の一つと推定している。そして総名の＜菩薩藏經＞を別名で用いている本經である『菩薩藏經』は、平川彰が論文中で、その多数の經典の叢書である＜菩薩藏經＞中の一經と位置づけている。つまり、平川彰 [1971, p. 20] の見解に基づけば、『菩薩藏經』は最初期の大乗仏教經典であると言えよう。一方、高崎直道 [1974] は、平川彰 [1971, p. 20] の理解とは異なる見解を述べている。次の通りである。

この經に関しては、古い論典に引用はなく、言及されることもないので、詳細はわからないが、大乘經典としては比較的新しい成立とみられる²²²。

玄奘訳を初訳とし、無着・世親の著作にも引用された痕跡のない『大菩薩藏經』は、三世紀末に竺法護によって漢訳されており（『大哀經』『阿差末經』）、『大智度論』にも引用される（『無尽意所説經』）『大集經』所属の兩經典より後來のもので、それらの所説を取入れたものであることは、ま

²²² 高崎直道 [1974, pp. 46-48]。

ず間違いない。二經に関係ない部分でも、他經からの借用が探せばまだ他に見付かるかも知れない。『大菩薩藏經』は、〈撰大乘〉の〈菩薩藏〉たるにふさわしく、多くの經典からその材料を得て編集されたものらしく、その点、形は經でも、内容的には論典に近いと言わざるを得ない²²³。

つまり、氏は、『菩薩藏經』は『大集經・無尽意菩薩品』（『無尽意所説經』）らの諸經を資料として構築された經典であるとみなしていると言えよう。

その一方、高崎直道〔1974〕とは異なる見解もある。Alex Wayman〔1980〕は『菩薩藏經』は恐らく『無尽意所説經』より古いのではないかと主張する。また、Ulrich Pagel〔1995〕は、Alex Wayman〔1980〕の主張にもとづき²²⁴、いくつかの資料を援用する形でAlex Wayman〔1980〕の主張を擁護し、『無尽意所説經』は『菩薩藏經』を素材として構築されたものであるとする立場を示している²²⁵。つまり、氏は、『菩薩藏經』は、『無尽意所説經』より古いとみなすのである²²⁶。

このように、『菩薩藏經』と『無尽意所説經』の関係について、二つの見解に分かれている。一つは、『菩薩藏經』は、『無尽意所説經』等を素材として構築したものであり、『無尽意所説經』よりも新しいとする見解であり、もう一つは、『菩薩藏經』は『無尽意所説經』の素材となっており、『無尽意所説經』よりも古いとする見解である。では、この二つの相違する見方のどちらが正しいのであろうか。多角的に分析を行い、本稿なりの結論を導き出したい。

第二項、それぞれの構造について

『菩薩藏經』「菩薩藏法門」と、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」との両法門の対応関係については、既に述べた²²⁷。そこで、本項では、前述した対応関係の表にもとづいて、それぞれの構造という点から、前後関係を分析してみたい。

まず、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」であるが、發菩提心→信仏果→行菩薩行（四無量心→六度・四摂事）→授記成仏という構造となっている。一方、『大集經・無尽意菩薩品』（『無尽意所説經』）の「無尽法門」は、菩提心無尽・心清浄無尽・心行清浄無尽・心畢竟無尽・六度無尽・四無量心無尽・五神通無尽・四摂法無尽・四無礙智無尽・修集助道功德智慧無尽・三十七菩提分法無尽・修行定慧無尽・総持辯才無尽・撰集四法（四法印）無尽・一道無尽・所修方便無尽という構造となっている。これら両者を比べれば、「菩薩藏法門」は修行体系という意識に基づいて整備されたものであるのに、「無尽

²²³ 高崎直道〔1974, p. 51〕。

²²⁴ Ulrich Pagel〔1995, pp. 40-41〕。

²²⁵ このような成立順序に関する議論はUlrich Pagel〔1995, pp. 36-48〕に詳しい。また、Ulrich Pagel〔1995, p. 36-37〕では次のようにも述べる。

As part of the discussion of the *Bdp* (*Bodhisattvapiṭaka(sūtra)* の略号) 's position in Mahāyāna literature, I shall next explore the relationship between the *Bdp* and *Akṣayamatīnirdeśa*. Analysis of these sūtras has shown that the *Akṣayamatīnirdeśa* is greatly indebted to the *Bdp* for its material, often to the extent of reproducing entire passages from the *Bdp* verbatim.

また、Jens Braarvig〔2014〕は、Ulrich Pagelのこの『無尽意所説經』が『菩薩藏經』に基づいてできたものという観点を支持している。

²²⁶ 「I propose — until a corresponding body of texts has actually been identified — to confirm the close association between the *Bpb* and *Akṣayamatīnirdeśa*, with the *Bpb* being the earlier of the two texts.」 (Ulrich Pagel〔1995, p. 48〕)

²²⁷ 第四章第三節第一項を参照。

法門」は漫然とした列挙のように見える。このように『菩薩藏經』では、全經の内容を品（parivarta）で区分し、組織化を施しているが、『無尽意所説經』では、区分することなく、漫然と諸法を列挙する。すなわち、両者を比べれば、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」のほうがより、組織化され、整備されたものと言えよう。

このような傾向はいくつかの点でも見いだせる。例えば、五神通について、「無尽法門」では、菩提心無尽や六度無尽などと並列して説く。一方で、「菩薩藏法門」では、それを禪定波羅蜜多品に配置する。これは、五神通が禪定の果報として獲得できる徳目であるから、このように修行体系にもとづいて配備されたものと言えよう。また、四無礙智、修集助道功德智慧、三十七菩提分法等といった徳目について、「無尽法門」では、先程同様に菩提心無尽・六度無尽などと並列して述べるが、「菩薩藏法門」では、そのほとんどが般若波羅蜜多品に配置される。今挙げたものはいずれも仏果の構成要素であり、その本質を般若波羅蜜多とすることからの配備であろう。このように、諸々の徳目の配置構造に着目すれば、「菩薩藏法門」は、「無尽法門」よりも格段に組織化され、整備されたものであることが窺えよう。

また、菩薩行の構造に着目してみても、興味深い傾向が窺える。例えば、「菩薩藏法門」では、四無量心→六度→四摂法という菩薩行の構造を持つ。一方、「無尽法門」では、徳目の相互の関係は希薄であり、説示順序に基づいて構造を分析すれば、六度無尽→四無量心無尽→（五神通無尽→）四摂法無尽という菩薩行の段階が確認できる。このように両者の間には四無量心を六波羅蜜多の前に配置するか、後に配置するかといった差異がみとめられる。

さて、四無量心と六波羅蜜多の関係についてはいくつかの経論でその前後関係が記述される。例えば、最初期に漢訳された大乘經典の一つである『梵摩渝經』（支謙〈196年頃-255年頃〉訳）では次のように説かれる。

吾自無數劫來。行四等心²²⁸布施持戒忍辱精進禪定智慧。拯濟衆生猶自護身。（T1.885b8-10）

また、『大智度論・釈大莊嚴品第十五』にも次のように説かれる。

四無量心生六波羅蜜。（T25.389a6）

このように、四無量心は六度に先立つ徳目として取り扱われるものである。ついで、六波羅蜜多と四摂法の関係も見てみたい。例えば、大乘仏教の早期の經典と見られる『小品般若波羅蜜經』（鳩摩羅什訳）には次のように説かれる。

²²⁸ 四等心：四無量心の別称。

又三世諸佛薩婆若。皆從六波羅蜜生。何以故。諸佛行六波羅蜜。以四攝法攝取衆生。所謂布施愛語利益同事。得阿耨多羅三藐三菩提。」(T8.571c4-7)

この説示に基づけば、四摂法は、六度の直後に行われる行だと理解できる。すなわち、四無量心→六度→四摂法という「菩薩蔵法門」で用いられる順序は、大乘仏教において一般的に認められる順序であったことが理解できよう。

先にも述べたように両法門で述べられる四無量心・六度・四摂法の内容は、ほぼ、全面的に対応している²²⁹。また、『無尽意所説經』は三世紀末に翻訳されているが²³⁰、『菩薩蔵經』の登場は玄奘まで俟つことになる。これらの事象に基づけば、『菩薩蔵經』の「菩薩蔵法門」は『無尽意所説經』の「無尽法門」の内容を組織化したものであると考えられる。そして、それは同時に、『菩薩蔵經』の狙いが菩薩行内容（四無量心・六度・四摂法）の組織化にもあることを明示しよう。

第三項、「十善巧」と「八方便」

(一)、問題の所在

『菩薩蔵經』「菩薩蔵法門」の「般若波羅蜜多品」では「十種善巧」(daśa kauśala)として、十種の徳目が述べられる。一方、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」では、対応する徳目として、「般若波羅蜜多無尽」中の「八方便」が存在する。訳者の違いから一見すれば、違う概念のようにも見えるが、翻訳の差異であり、両者ともkauśalaの訳語である²³¹。では、同じkauśalaであれば、何故、法数に違いがあるのであろうか。今は、その点から両者の前後関係について検討してみたい。

(二)、『菩薩蔵經』以外の善巧

さて、善巧(kauśala)という概念は様々な法数という形で登場する。例えば、瞿曇僧伽提婆(385年に洛陽に来る)訳『中阿含・多界經』²³²や、それと対応する『マッジマニカーヤ』²³³、あるいは『阿毘曇毘婆沙論』²³⁴や『阿毘達磨大毘婆沙論』²³⁵では「知界、知処、知因縁、知処非処」という「四善巧」として登場する²³⁶。また、曇無讖訳『大集經・虚空藏菩薩品』²³⁷、弥勒説『瑜伽師地論』卷第二

²²⁹ 高崎直道 [1974, p. 51]

²³⁰ 前文に指摘されているように、『無尽意所説經』の異訳である『阿差末菩薩經』は三世紀末に既に竺法護(239-316年)によって漢訳された。

²³¹ 『中辺分別論』(T31.455b4-8)では、「勝智」とも訳している。また、例えば、窺基『辯中邊論述記』では、次のような言葉もある。

論曰十善巧者至無爲法善巧。述曰。烈(=列)善巧名。舊言勝智。(T44.15c23-24)

²³² 尊者阿難、悲泣淚出。叉手向佛白曰。世尊。云何比丘愚癡非智慧。世尊答曰。阿難若有比丘。不知界。不知處。不知因縁。不知是處非處者。阿難。如是比丘愚癡非智慧。尊者阿難白曰。世尊。如是比丘愚癡非智慧。世尊。云何比丘智慧非愚癡。世尊答曰。阿難。若有比丘知界。知處知因縁。知是處非處者。阿難。如是比丘智慧非愚癡。(T1.723b7-14)

²³³ Bahudhātuka-sūtra, Majjhima-nikāya, PTS vol. pp.61-67.

²³⁴ 復有說者四善、是：一善知界、二善知入、三善知縁起、四善知處非處。(T28.20c4-5)

²³⁵ 有說四善巧、是謂：界善巧。處善巧。縁起善巧。處非處善巧。(T27.28c7-8)

²³⁶ 宋・法賢訳『佛説四品法門經』にも、類似する説示が認められる。次の通りである。

佛告阿難。言智人者。於法揀擇。善了是非。故名智人。善了者何。善了法境。亦四品類。所謂善了界法。善了處法。善了縁生法。善了處非處法。善能了知如是等法。是故得名爲智人也。(T17.712c13-17)

十七²³⁸・卷四十五²³⁹、『大乘阿毘達磨集論』卷第六²⁴⁰、『顯揚聖教論』卷第十六²⁴¹、『阿毘達磨法蘊足論』卷第十²⁴²では、上述した「界善巧・處善巧・緣起善巧・處非處善巧」という四種の善巧に「蘊善巧」を加えて「五善巧」となる。さらに、『瑜伽師地論』の卷第三では、この「五善巧」に、「根善巧」を加えて「蘊善巧・界善巧・處善巧・緣起善巧・處非處善巧・根善巧」という「六善巧」が説かれる²⁴³が、その卷第三十四では、その「根善巧」の代わりに、「諦善巧」を加えて、「蘊善巧・界善巧・處善巧・緣起善巧・處非處善巧・諦善巧」という「六善巧」が説かれる²⁴⁴。さらに、『顯揚聖教論』卷第十四では、この二種の「六善巧」を合わせて、「蘊善巧・界善巧・處善巧・緣起善巧・處非處善巧・根善巧・諦善巧」という「七善巧」説になる²⁴⁵。つぎに、『大集經・無尽意菩薩品』²⁴⁶、達磨笈多訳『菩提資糧論』²⁴⁷、菩提流志訳『大宝積經・功德寶花敷菩薩會』²⁴⁸、般若訳『大乘理趣六波羅蜜多經』²⁴⁹では、「蘊善巧・界善巧・處善巧・緣起善巧・諦善巧・三世善巧・一切乘善巧・一切法善巧」という「八善巧」が説かれる²⁵⁰。最後に、『中辺分別論』²⁵¹では、「陰勝智、界勝智、入勝智、生緣勝智、處非處勝智、根勝智、世勝智、諦勝智、乘勝智、有爲無爲勝智。」として「十善巧」が述べられる。以上、十善巧までの様々な善巧を見てきた。わかりやすく図示すれば次の通りである。

²³⁷ 復次善男子。菩薩道者。所謂四禪。四無量心。四空定。五神通。三福業。三學。六應敬。六念。四攝法。四念處。四正勤。四神足。五根。五力。七覺分。八聖道分。三解脱門。知陰方便。知界方便。知入方便。知諦方便。知因緣方便。是名爲道。菩薩得成就此道方便。皆能隨順入六波羅蜜道。（T13.115b6-12）

²³⁸ 云何名爲善巧所緣。謂此所緣略有五種。一蘊善巧。二界善巧。三處善巧。四緣起善巧。五處非處善巧。（T30.433c1-3）

²³⁹ 若諸菩薩依是菩薩四無礙解。應知獲得無量最勝五處善巧。一蘊善巧。二界善巧。三處善巧。四緣起善巧。五處非處善巧。（T30.539b14-17）

²⁴⁰ 善巧所緣亦有五種。謂蘊善巧、界善巧、處善巧、緣起善巧、處非處善巧。（T31.687a7-8）

²⁴¹ 善巧境有五種。謂蘊善巧。界善巧。處善巧緣起善巧。處非處善巧。（T31.560a4-5）

²⁴² 佛言。若有於界處蘊。及於緣起。處非處法。得善巧者。是智者數。（T26.501c12-14）

²⁴³ 又復應知蘊善巧攝。界善巧攝。處善巧攝。緣起善巧攝。處非處善巧攝。根善巧攝。（T30.294a19-20）

²⁴⁴ 謂有一類安住獨覺種姓。經於百劫值佛出世。親近承事成熟相續。專心求證獨覺菩提。於蘊善巧、於處善巧。於界善巧、於緣起善巧。於處非處善巧、於諦善巧。勤修學故。於當來世速能證得獨覺菩提。（T30.477c15-20）

²⁴⁵ 復次於此論體九事等中應善了知七種善巧。何等爲七。頌曰

於諸蘊、界、處 及衆緣起法

處非處、根、諦 善巧事應知

論曰。住正法者。應善了達如是七種善巧之事。問何故唯立七種善巧。答世間愚夫多如是計。（T31.545a9-15）

²⁴⁶ 舍利弗。云何菩薩慧者處所、具八方便。何等八。諸陰方便。諸界方便。諸入方便。諸諦方便。諸緣方便。三世方便。諸乘方便。諸法方便。（T13.196c17-20）

²⁴⁷ 此般若波羅蜜所攝方便善巧波羅蜜中。有八種善巧。所謂衆善巧界善巧。入善巧。諦善巧。緣生善巧。三世善巧。諸乘善巧。諸法善巧。此中善巧波羅蜜無有邊際。（T32.523a25-29）

²⁴⁸ 天子復有八法入於智慧。何等爲八一者蘊善巧。二者界善巧。三者處善巧。四者緣起善巧。五者諦善巧。六者三世善巧。七者一切乘善巧。八者一切佛法善巧。是名八法入於智慧。（T11.569b26-c1）

²⁴⁹ 復次慈氏菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多。應修八法云何爲八。所謂蘊善巧、處善巧。界善巧、諦善巧。緣起善巧、三世善巧。一切乘善巧、一切法善巧。（T8.913a5-8）

²⁵⁰ 同様に達摩流支訳『佛說宝雨經』卷第二では、十法を成就して静慮の円満を得るという話し中にも、八の善巧が説かれているが、この八の善巧は、上の「八善巧」説とはほとんど別のものと言える。例えば、その話しは、次の通りである。

善男子。菩薩摩訶薩。成就此十種法故。得靜慮圓滿復次善男子。菩薩成就十種法得般若圓滿。何等爲十。一者無我善巧。二者業果善巧。三者有爲善巧。四者生死流轉善巧。五者捨離生死善巧。六者得二乘善巧。七者大乘善巧。八者捨離魔業善巧。九者得不顛倒般若。十者得無等般若。（T16.291b15-22）

²⁵¹ 真諦訳『中辺分別論』：如是十種眞實。何者爲十。一、根本眞實。二、相眞實。（中略）九、分破眞實。十、勝智眞實。勝智又十種眞實。爲對治十種我執應知。何者爲十。一、陰勝智。二、界勝智。三、入勝智。四、生緣勝智。五、處非處勝智。六、根勝智。七、世勝智。八、諦勝智。九、乘勝智。十、有爲無爲勝智。（T31.455b1-8）

玄奘訳『辯中辺論』：論曰。應知眞實唯有十種。一、根本眞實。二、相眞實。（中略）九、差別眞實。十、善巧眞實。此復十種。爲欲除遣十我見故。十善巧者。一、蘊善巧。二、界善巧。三、處善巧。四、緣起善巧。五、處非處善巧。六、根善巧。七、世善巧。八、諦善巧。九、乘善巧。十、有爲無爲法善巧。（T31.468c12-19）

四善巧	五善巧	六善巧	七善巧	八善巧	十（中辺）
	蘊	蘊	蘊	蘊	蘊
界	界	界	界	界	界
処	処	処	処	処	処
因縁	縁起	縁起	縁起	縁起	生縁
処非処	処非処	処非処	処非処		処非処
		根or諦	根		根
			諦	諦	諦
				三世	世
				諸乗	乗
				一切法	有爲無爲

この表に基づけば、様々な善巧は、阿含に見られた四善巧より、徐々に法数が増加して成立した可能性が見いだせる。つまり、『中辺分別論』・『辯中辺論』に説かれている「十勝智（善巧）」の内容は、上述した『中阿含・多界経』等の「四善巧」と、『瑜伽師地論』巻第二十七・巻四十五・『大集経・虚空藏菩薩品』・『大乘阿毘達磨集論』等の「五善巧」と、『瑜伽師地論』巻第三・巻三十四の「六善巧」、『顯揚聖教論』巻第十四の「七善巧」と、『菩提資糧論』・『大集経・無尽意菩薩品』等の「八善巧」との内容の総纏めであると言えよう。そして、このことに基づくならば、『大集経・無尽意菩薩品』の八善巧は善巧の発展過程の一部であるとみなせよう。

（三）、『菩薩藏経』の十善巧

さきの検討では、様々な善巧を分析し、「無尽法門」に見られる八善巧の立場について分析を施した。次に、『菩薩藏経』に見られる十善巧について分析を施したい。さきに挙げた幾つかの善巧が共通の内容を有していたのに対し、『菩薩藏経』の十善巧は独自性が確認できる。そのうえ、『菩薩藏経』中の「十善巧」の名称は、梵漢蔵四本に異なる箇所が存在する。そこで『菩薩藏経』における「十善巧」の名称を分析した上で、『菩薩藏経』の「十善巧」の立場について分析してみたい。

『菩薩藏経』「般若波羅蜜多品」では、「十善巧」の具体内容を説く前に、十名称を総説する²⁵²。表にまとめれば、次の通りである。

²⁵² 梵文本（MS119b6-7）：

punar aparaṃ śāriputra bodhisattvapīṭakapratīṣṭhito bodhisattvaḥ prajñāpāramitāyāṃ caran* prajñāpāramitāvibhaṅgakuśalo bhavati sarvadharmakauśalam anuprāptnoti (।) tatra katamaḥ prajñāvibhaṅgaḥ (।) yad idaṃ skandhakuśalam dhātukuśalam (7) āyatanakuśalam satyakauśalam pratisamvitkauśalam pratisaranakuśalam vijñānājñānakauśalam bodhyaṅgakuśalam mārgakuśalam pratityasamutpādakauśalam eva daśamaṃ (।) eṣāṃ daśānāṃ kauśalānāṃ (।) yo vibhaṅgaḥ sa ucyate prajñāvibhaṅgaḥ |

【訳】その他、舍利弗よ。菩薩蔵に安住して般若波羅蜜多において行じている菩薩は、般若波羅蜜多の分別における熟練者であって、一切法に対する善巧を得る。その中、般若分別とは何か。すなわち、〔第一は〕蘊に対する善巧であり、〔第二は〕界に対する善巧であり、〔第三は〕処に対する善巧であり、〔第四は〕諦に対する善巧であり、〔第五は〕無礙解に対する善巧であり、〔第六は〕依所に対する善巧であり、〔第七は〕識智に対する善巧（vijñānājñānakauśala）であり、〔第八は〕菩提支分に対する善巧であり、〔第九は〕道に対する善巧であり、縁起に対する善巧は第十である。それらは十の善巧である。〔こういう〕分別であるもの、それは般若分別と呼ばれる。

蔵訳（D Ga165a6-b2, P Wi187a7-b3, H316b6-317a3）：

གཞན་གྱི་ལུ་ལྟར་ཡང་ལྟར་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ལྟར་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བློ་རྒྱུད་ལ་གནས་པ་ཤེས་རབ་ཀྱི་ལ་འོ་ལ་ཏུ་བྱིན་པ་ནས་པར་འབྱེད་མཁས་པ་ཡིན་ཏེ། ཚེས་ཐམས་ཅད་ལ་མཁས་པ་རྩེས་སུ་འཛོལ་གྱི་དེ་ལ་ཤེས་རབ་ནས་པར་འབྱེད་པ་གང་། ཞེན་ལ་འདི་རྩ་གྲོ་ལྟར་པོ་ལ་མཁས་པ་དང་། ལམས་ལ་མཁས་པ་དང་། རྩི་མཆོད་ལ་མཁས་པ་དང་། འདེན་པ་ལ་མཁས་པ་དང་། ལོ་མི་ལ་དག་པར་རིག་པ་ལ་མཁས་པ་དང་། རྩོན་པ་ལ་མཁས་པ་

『菩薩藏經』梵漢藏四本の「十善巧」の名称			
梵文写本	藏訳	法護等訳	玄奘訳
1. skandhakaūsala (蘊善巧)	ཐུང་པོ་ལ་མཁས་པ་ (蘊善巧)	蘊善巧	蘊法善巧
2. dhātukaūsala (界善巧)	ཁམས་ལ་མཁས་པ་ (界善巧)	界善巧	界法善巧
3. āyatanakaūsala (处善巧)	ཐྱེ་མཆེད་ལ་མཁས་པ་ (处善巧)	处善巧	处法善巧
4. satyakaūsala (諦善巧)	བདེན་པ་ལ་མཁས་པ་ (諦善巧)	諦善巧	諦法善巧
5. pratisaṃvitkaūsala (無礙解善巧)	མོ་མོ་ཡང་དག་པར་ཟིག་པ་ལ་མཁས་པ་ (無礙解善巧)	正知善巧	無礙解善巧
6. pratisaraṇakaūsala (依处善巧)	རྟོན་པ་ལ་མཁས་པ་ (依处善巧)	随順善巧	依趣善巧
7. vijñānajñānakaūsala (識智善巧)	རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་ཡི་ཤེས་ལ་མཁས་པ་ (識智善巧)	智識善巧	資糧善巧
8. bodhyaṅgakaūsala (菩提分善巧)	བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ཡན་ལག་ལ་མཁས་པ་ (菩提分善巧)	菩提道善巧	道法善巧
9. mārḡgakaūsala (道善巧)	ལས་ལ་མཁས་པ་ (道善巧)	聖道善巧	緣起善巧
10. pratītyasamutpāḍakaūsala (緣起善巧)	རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་པར་འབྱུང་བ་ལ་མཁས་པ་ (緣起善巧)	緣生善巧	一切法善巧

ここでは第一から第六までは諸本一致するものの²⁵³、第七より第十では玄奘訳のみが異なることが見て取れよう。では、この異なりをどのように捉えれば良いのか、いくらか分析を施したい。

まず、第7番の名称であるが、玄奘は「資糧善巧」と翻訳するが、他の三本はすべて「識智善巧 (vijñānajñānakaūsala, 法護等訳：智識善巧)」とする。しかし、実際に、本文では、「依处善巧」の内容の続き、この「識智善巧」という名称の本文内容を説くべき箇所の内容²⁵⁴は、資糧善巧 (saṃbhāraakaūsala)、すなわち「福資糧善巧」(punyasambhāraakaūsala)と「智資糧善巧」

པ་དང་། རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་ཡི་ཤེས་ལ་མཁས་པ་དང་། བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ཡན་ལག་ལ་མཁས་པ་དང་། ལས་ལ་མཁས་པ་དང་། རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་པར་འབྱུང་བ་ལ་མཁས་པ་དང་བཟུང་། མཁས་པ་རྣམས་བཟུང་། འདི་དག་གིས་རྣམ་པར་འབྱེད་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི། ཤེས་རབ་རྣམ་པར་འབྱེད་པ་ཞེས་བྱའོ། །

玄奘訳 (T11.299c3-13) :

復次舍利子。菩薩摩訶薩。安住大乘大菩薩藏。修行般若波羅蜜多時。獲得般若分別善巧。當知是菩薩摩訶薩。即以此法於諸法中明了通達獲得善巧。舍利子。云何名爲如是般若分別善巧。〔舍利子。如是善巧無量無邊。吾今略說十種善巧。何等爲十。〕所謂蘊法善巧。界法善巧。處法善巧。諦法善巧。無礙解善巧。依趣善巧。〔資糧善巧。〕道法善巧。緣起善巧。一切法善巧。舍利子。如是十種微妙善巧所有分別。若通達者。是則名爲般若分別。菩薩摩訶薩於是善巧應當修學。

法護訳 (T11.871b28-c5) :

復次舍利子。菩薩摩訶薩。行勝慧波羅蜜多行時。於菩薩藏而能安住。於一切法〔以勝慧決擇。〕而能獲得〔十種善巧。〔何等爲十。〕〔一者〕蘊善巧。〔二者〕界善巧。〔三者〕處善巧。〔四者〕諦善巧。〔五者〕正知善巧。〔六者〕隨順善巧。〔七者〕智識善巧。〔八者〕菩提分善巧。〔九者〕聖道善巧。十者緣生善巧。

²⁵³ 法護訳の第五、第六は一見すると違うようにも思えるが、第五「pratisaṃvitkaūsala (無礙解善巧)」を「正知善巧」として訳し、第六「pratisaraṇakaūsala (依处善巧)」を「随順善巧」と訳したに過ぎず、同一の内容であるであろう。

²⁵⁴ 梵文写本 (MS124b2-126a7) : 「tatra katamad bodhisattvasya saṃbhāraakaūsalaṃ (l) dvāv imau bodhisattvānāṃ saṃbhārau (l) katamau dvau (l) yad idaṃ puṇyasambhāro jñānasambhāraś ca | (【訳】その中、菩薩の資糧に対する善巧とは何か。菩薩たちにはその資糧が二つがある。二つとは何か。すなわち、福の資糧と智の資糧とである。)」から、「……(l) imau bodhi(7)sattvasya puṇyasambhārajñānasambhārau | etayoḥ saṃbhārayoḥ kuśalo bodhisattvo mahāsattvaś carati prajñāpāramitāyām || (【訳】……。これは菩薩の福の資糧と智の資糧である。この二つの資糧に対する善巧を持つ菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多において行ずる。)」までである。

藏訳 (D Ga173b3-176b7, P Wi197a5-200b8, H330a3-335a5) : 「དེ་ལ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཚགས་ལ་མཁས་པ་གང་ཞེ་ན། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་རྣམས་ཀྱི་ཚགས་ནི། འདི་གཉིས་ཀྱི་གཉིས་གང་ཞེ་ན། འདི་ལྟ་ཟླ། བསོད་ནམས་ཀྱི་ཚགས་དང་། ཡི་ཤེས་ཀྱི་ཚགས་སོ། །」から「……། དེ་གཉིས་ནི།བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བསོད་ནམས་ཀྱི་ཚགས་དང་། ཡི་ཤེས་ཀྱི་ཚགས་ཀྱི། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་སེམས་དཔའི་ཚན་པོ་ཚགས་རྣམས་པ་དེ་གཉིས་ལ་མཁས་པ་ཤེས་རབ་ཀྱི་པ་རོལ་གྱི་བྱེད་པ་ལ་རྟེན་དོ། །」までである。

玄奘訳 (T11.305a11-307b3) : 「復次舍利子。云何名爲菩薩摩訶薩資糧善巧。舍利子。當知菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故。善能通達二種。資糧何者是耶。謂福及智。」から「舍利子。是爲菩薩智德資糧善巧之行。若諸菩薩摩訶薩。成就如是福智二種資糧善巧。當知修行般若波羅蜜多故。獲是資糧善巧之力」までである。

法護等訳 (T11.874c8-875c27) : 「云何菩薩福智善巧。菩薩行門有其二種。何等爲二。一者福行。二者智行。」から「舍利子。是爲菩薩摩訶薩於勝慧波羅蜜多得智行善巧。」までである。

(jñānasambhāraśāla) という福智資糧善巧を説く。つまり、本文の内容に基づけば、玄奘訳以外の三本のこの「識智善巧」(vijñānajñānakauśala) という名称は、「福智善巧」(punyajñānakauśala) を誤読した可能性が窺える。

また、諸本のうち、「福智資糧善巧」より「縁起善巧」(pratītyasamutpādakauśala) において、玄奘訳のみ順序や項目の違いが存在する。玄奘訳以外の三本では十善巧として列挙する際に、「一切法善巧」を説かず、代わりに、「菩提分善巧」を述べる。一方、玄奘訳では「菩提分善巧」を説かず、末尾に「一切法善巧」を述べる。それに伴い、説示内容の配置も異なる。

表を用いてまとめれば次の通りである。

三本		玄奘訳	
智識善巧		資糧善巧	
無所属	四念処	道善巧	四念処
菩提分善巧	七覺支		四正勤
道善巧 ²⁵⁵	八聖道		五根
	奢摩他・毘鉢舍那		五力
	四正勤		七覺支
	五根		八聖道
	五力		奢摩他・毘鉢舍那
	合一道（ekāyana mārga） ²⁵⁶		一趣道
縁生善巧			縁起善巧
		一切法善巧	

すなわち、三本と玄奘訳に違いが認められるが、三本で不規則な構造になっていた点が玄奘訳では三十七菩提分法に基づいて整理されていると言えよう。また、対応する『大集經・無尽意菩薩品』では当該箇所が『菩薩藏經』の道善巧と同様に、四念処無尽より八聖道分無尽といった順序で説示されている²⁵⁷。

また、玄奘訳が最後に一切法を配置するのは、『大集經・無尽意菩薩品』等の八善巧や『中辺論』の十善巧で最後に一切法を配置していることに影響を受けたのかもしれない²⁵⁸。何れにせよ、玄奘訳では、玄奘が見た梵文に既に整理が施されていたのか、あるいは、玄奘が何らかの意図で整理した可能性が見いだせよう。

以上、諸本と玄奘訳の違いを見て来た。その結果、本經四本の本文に説かれている十善巧の具体的内容に基づけば、玄奘訳の「蘊法善巧、界法善巧、処法善巧、諦法善巧、無礙解善巧、依趣（処）善

²⁵⁵ 法護訳：道分善巧。藏訳：道善巧 (ལམ་པ་མཁས་པ་)。

²⁵⁶ 法護訳：一聖道。藏訳：菩薩達の道。

²⁵⁷ しかし、『菩薩藏經』では説かれなかった四如意が『大集經・無尽意菩薩品』では説かれるといった違いも存在する。また、これらの対応関係については本章の第三節、第一項の「菩薩藏法門」と「無尽法門」との内容対応表を見よ。

²⁵⁸ 『瑜伽師地論』卷第四十七「瑜伽處菩薩相品」(T30.551a7-16) および實叉難陀(652-710年)訳『大方廣佛華嚴經』「佛不思議法品」(T10.245c8-246b10)にも「十方便善巧」が説かれているが、『菩薩藏經』に説かれているこの「十善巧」はその二者とは違う系統なものである。

巧、「福智」資糧善巧、道法善巧、縁起善巧、一切法善巧」という十善巧の名称が最も合理的であるといえよう。故に、以下では玄奘訳に準拠して検討を行う。

(四)、十善巧と八善巧の前後関係

以上、先の検討では、『大集経・無尽意菩薩品』の八善巧と『菩薩藏経』の十善巧のそれぞれについて分析を施した、その結果、『大集経・無尽意菩薩品』の八善巧説は四善巧説から次第に発展してきた過程の一つであることが明らかとなった。では、『菩薩藏経』の十善巧説は『大集経・無尽意菩薩品』の八善巧説より以前のものであろうか。それとも後のものであろうか。

まずは、先のそれぞれの検討結果を一つの表にまとめてみたい。『菩薩藏経』については先の検討に従い玄奘訳に基づいた。次の通りである。

四善巧	五善巧	六善巧	七善巧	八善巧	十（中辺）	十（玄奘訳）
	蘊	蘊	蘊	蘊	蘊	蘊
界	界	界	界	界	界	界
処	処	処	処	処	処	処
因縁	縁起	縁起	縁起	縁起	生縁	諦
処非処	処非処	処非処	処非処		処非処	無礙解
		根or諦	根		根	依趣（処）
			諦	諦	諦	資糧
				三世	世	道
				諸乗	乗	縁起
				一切法	有爲無爲	一切法

また、『菩薩藏経』「菩薩藏法門」と『大集経・無尽意菩薩品』「無尽法門」との二者の内容対応表²⁵⁹に基づけば、『菩薩藏経』の十善巧中の蘊、界、処、諦、縁起、一切法の六善巧が『大集経・無尽意菩薩品』の八善巧中の三世、諸乗以外の六善巧とは完全に対応していることが見て取れる。そして、『菩薩藏経』では、残りの無礙解、依趣（処）、資糧、道の四つの善巧の内容は、いずれも『大集経・無尽意菩薩品』より回収が可能である。また、『大集経・無尽意菩薩品』等の八善巧より『中辺論』の十善巧に展開していったことはすでに前述に述べた。従って、『大集経・無尽意菩薩品』等の八善巧を元として順当に発展したものが『中辺論』の十善巧説であり、別の意図の基、『大集経・無尽意菩薩品』の材料を利用して再編成が行われたのが、『菩薩藏経』の十善巧とも言えよう。

第四項、小結

以上、本節では『大集経・無尽意菩薩品』の「無尽意法門」は、『菩薩藏経』の「菩薩藏法門」の前後関係を、その構造に注目して分析を行った。その結果、『大集経・無尽意菩薩品』の「無尽意法門」は漫然とした構造であったのに対して、『菩薩藏経』の「菩薩藏法門」は修行体系という観点の基、整備が行われている傾向が見て取れた。また、善巧の構造についても『菩薩藏経』の「菩薩藏法門」は

²⁵⁹ 本章の第三節・第一項。

『大集經・無尽意菩薩品』の「無尽意法門」にもとづいて、独自の視点から『大集經・無尽意菩薩品』の材料を利用して再整備を施している傾向が確認できた。以上の検討の結果、構造という点では『大集經・無尽意菩薩品』の「無尽意法門」を基に、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」は組織されたと言えよう。

第五節、『菩薩藏經』に見られる編集の痕跡

第一項、『菩薩藏經』「菩薩藏法門」の由来と不備

本章では『菩薩藏經』と他經との関係として、検討を行ってきた。その結果、『菩薩藏經』の「菩薩藏法門」が『大集經・無尽意菩薩品』の「無尽法門」を何らかの思想のもと、整理・体系化して構築された經典であることが明らかとなったと言えよう。しかし、他の經典を基盤として整備したものであるからか、いくつか思想的に不備とも思われる点が見いだせた。そこで本節では、『菩薩藏經』におけるそのような不備についていくつか言及し、分析してみたい。

第二項、『菩薩藏經』玄奘訳「道善巧」相当箇所の不備

『菩薩藏經』で述べる「十善巧」の内、「道善巧」に関して構造上、玄奘訳に独特な点が見いだせたことは既に述べた。しかし、構造については言及したが、内容については踏み入ることはなかった。そこで、いまはその内容における不備とも思われる点について言及してみたい。

さて、『菩薩藏經』玄奘訳「道善巧」相当箇所の諸本の関係は次のようになっている。先の節で用いた表を再掲すれば次のとおりである²⁶⁰。

三本		玄奘訳	
智識善巧		資糧善巧	
無所屬	四念処	道善巧	四念処
菩提分善巧	七覺支		四正勤
道善巧 ²⁶¹	八聖道		五根
	奢摩他・毘鉢舍那		五力
	四正勤		七覺支
	五根		八聖道
	五力		奢摩他・毘鉢舍那
	合一道 (ekāyana mārga) ²⁶²		一趣道
縁生善巧		縁起善巧	
		一切法善巧	

²⁶⁰ 先の検討では、玄奘訳のみ異質であり、三本を基準とすると述べたが、今は玄奘訳「道善巧」に対応する箇所を検討するため、利便上、「玄奘訳の「道善巧」相当箇所」として、当該箇所を扱う。

²⁶¹ 法護訳：道分善巧。藏訳：道善巧 (ལཱ་ཤ་ལ་ཤུལ་པ་)。

²⁶² 法護訳：一聖道。藏訳：菩薩達の道。

ここでは『菩薩藏經』玄奘訳「道善巧」相当箇所の内容として、四念処善巧、四正勤善巧、五根善巧、五力善巧、七覺支善巧、八聖道善巧、奢摩他善巧・毘鉢舍那善巧、合一道善巧が挙げられる。これら各徳目の内容は、本章の冒頭の「『菩薩藏法門』、「無尽法門」の内容対応表」に既に示したように²⁶³、全面的に『大集經・無尽意菩薩品』と対応する。例えば、『菩薩藏經』の「道善巧」中の「奢摩他善巧・毘鉢舍那善巧」の内容は、『大集經・無尽意菩薩品』の「修行定慧無尽」の内容(T13.210a23-b16)と対応し、「合一道善巧」の内容は、『大集經・無尽意菩薩品』の「一道無尽」の内容(T13.210c22-211a7)と対応する。また、「四念処善巧」、「四正勤善巧」、「五根善巧」、「五力善巧」、「七覺支善巧」、「八聖道善巧」の各項目の内容は、それぞれに『大集經・無尽意菩薩品』の「四念処無尽」(T13.207a24-208b19)、「四正勤無尽」(T13.208b20-c25)、「五根無尽」(T13.209a11-29)、「五力無尽」(T13.209b1-22)、「七覺支無尽」(T13.209b23-c19)、「八聖道分無尽」(T13.209c20-210a22)の各項目の内容と対応する。しかし、『大集經・無尽意菩薩品』には、「四正勤無尽」と「五根無尽」の間に、「四如意分無尽」(T13.208c26-209a10)が説示される。しかし、『菩薩藏經』「道善巧」ではそれに相当する内容は説示されない。すなわち、『大集經・無尽意菩薩品』では、三十七菩提分法が意識され、その構成要素のそれぞれが具備されていたのに対し、『菩薩藏經』では、三十七菩提分法が完全に説かれていないこととなる。図示すれば次の通りである。

では、何故、『菩薩藏經』「道善巧」には「四如意足分善巧」が説示されないのでしょうか。この点について分析してみたい。

²⁶³ 本章第三節第一項。

aniśritam lokadharmaiḥ śīlam lokottaram mune |
śraddadhante bodhisattvā rddhipādān acintiyān ||

菩薩たちは諸神足を不思議であると信ずる。

玄奘訳 (T11.208c12-13) :

あるいは、第十一「般若波羅蜜多品」の冒頭の「般若の聞相 (śruta ākāra)」を説く箇所、すなわち「道善巧」以前の一節では、他の一部の菩提分法とともに登場する²⁶⁶。あるいは、第十一「般若波羅蜜多品」で「弁才無礙解 (pratibhānapratīsamvid)」を説く際に、三十七菩提分法のすべての支分の名称とともに、完全な形ですべて揃って登場することもある²⁶⁷。このように、『菩薩藏經』では、「道善巧」以前に、「四如意足」という単語が既に幾度となく登場していることから、『菩薩藏經』では三十三菩提分法を想定していたのではなく、定型化された一般的な三十七菩提分法を想定していることは明白である。しかし、そうであれば、本經「般若波羅蜜多品」の「道善巧」において、三十七菩提分法の他の支分が全て説かれるにも関わらず、「四如意足」支分の説示が欠落するのは不合理と言えよう。

さて、前述したように、『菩薩藏經』「道善巧」において「四念處善巧」、「四正勤善巧」等の六支分は連続して説かれ、間に他の説示は含まれない。しかし、対応する『大集經・無量意菩薩品』には「四正勤無尽」と「五根無尽」の間に「四如意分無尽」が説かれ、これと対応する内容が『菩薩藏經』にはない。すなわち、『大集經・無量意菩薩品』とこのように呼応する『菩薩藏經』「道善巧」においても、「四如意分善巧」という内容が説かれて然るべきはずである。しかし、実際には存在しない。この点は不合理と言えよう。

佛戒超世間 不依止世法
神足不思議 菩薩能信受

法護等訳 (T11.795b16-17) :

牟尼出世淨妙戒 而不依止世間法
住信菩薩淨信心 信佛神足不思議

²⁶⁶ 梵文写本 (MS115b1) :

…(l) brāhmanavihāraśravaṇākāraṃ abhijñāśravaṇākāraṃ smṛtyupasthānaśravaṇākāraṃ | samyakprahāṇaśravaṇākāraṃ | rddhipādaśravaṇākāraṃ prafītyasamutpādaśravaṇākāraṃ…

【訳】…梵住を聞く相であり、神通を聞く相であり、〔四〕念住を聞く相であり、〔四〕正断を聞く相であり、〔四〕神足を聞く相であり、縁起を聞く相であり、…

蔵訳 (D Ga157b1-2, P Wi178a2-3, H304b1-2) :

…| མདོན་པར་ཤེས་པ་ཉན་པའི་རྣམ་པ་དང་། དྲན་པ་ཉེ་བར་གཞག་པ་ཉན་པའི་རྣམ་པ་དང་། ཡང་དག་པར་ཐོང་བ་ཉན་པའི་རྣམ་པ་དང་། རྟོག་ཅིང་འབྲེལ་བར་འབྱུང་བ་ཉན་པའི་རྣམ་པ་དང་། …

玄奘訳 (T11.295a13-16) :

…。聽聞梵住爲相。聽聞神通爲相。〔聽聞正念正智爲相。〕聽聞念住爲相。聽聞正勝爲相。聽聞神足爲相。聽聞縁起爲相。…

法護等訳 (T11.868c1-3) :

…。樂聞梵行相。樂聞神通相。樂聞四念處相。樂聞四正斷相。樂聞四神足相。樂聞十二縁生相。…

²⁶⁷ 梵文写本 (MS122b2) :

…(l) dānaśīlakṣāntīrīyadhyānaprajñāsarvapratiṣṭhānapratibhānatā (l) smṛtyupasthānasamyakprahāṇardhipādendriyabalabodhyaṅgamārgaśamathavipaśyanāpratibhānatā |…

【訳】…布施と持戒と忍辱と精進と静慮と般若とのすべてに安住する弁才であり、〔四〕念住と〔四〕正断と〔四〕如意足と〔五〕根と〔五〕力と〔七〕覚支分と〔八聖〕道と奢摩他と毘婆舍那とを持つ弁才であり、…

蔵訳 (D Ga170a7-b1, P Wi193b1-3, H325a1-3) :

…| ཐྱིན་པ་དང་། རྣམ་ཐྱིམ་དང་། བཞོད་པ་དང་། བཙུན་ལྟར་དང་། བསམ་གཏན་དང་། ཤེས་རབ་ཐམས་ཅད་ལ་གནས་པའི་ཐྱོབས་པ། དྲན་པ་ཉེ་བར་གཞག་པ་དང་། ཡང་དག་པར་ཐོང་བ་དང་། རྟོག་ཅིང་འབྲེལ་བ་དང་། རྟོག་པ་དང་། ཐུང་རྟོག་ཀྱི་ཡན་ལག་དང་། ལམ་དང་། ཞི་གནས་དང་། རྟག་མཐོང་ལ་ཐྱོབས་པ།…

玄奘訳 (T11.303a25-28) :

…。建立一切布施持戒懷忍正勤靜慮般羅若辯。建立一切念住正斷神足根力覺支道分奢摩他毘鉢舍那辯。…

法護等訳 (T11.873b23-25) :

…。建立一切布施持戒忍辱精進禪定勝慧辯才。建立念處正斷神足根力覺支聖道。奢摩他毘鉢舍那辯才。…

以上の二つの視点から分析したが、この分析に基づけば、『菩薩藏經』に「四如意分善巧」が含まれないのは、不合理である。想像をたくましくすれば、編纂段階における何らかの人為的な過失があり、その結果、欠落するに至ったのではないであろうか。

第三項、四力と五力

さて、『菩薩藏經』「菩薩藏法門」と、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」には緊密な対応関係が見いだせる旨は既に述べたが、両者の相違箇所、すなわち、編集が加えられている可能性のある箇所がいくらか挙げられる、今はそれを紹介したい。

まず、『菩薩藏經』における、「資糧善巧」の「智資糧善巧」中の「四つの支え」²⁶⁸と「四つの戒」²⁶⁹との間に説かれている内容は、『大集經・無尽意菩薩品』の「四力具足智慧」の内容と対応する。しかし、『菩薩藏經』では「五力」を説くのに対して、『大集經・無尽意菩薩品』では「四力」を説く。次の通りである。

『大集經・無尽意菩薩品』(T13.207a3-7)：

菩薩復有四力具足智慧。何等爲四。一者精進力求於多聞得解脫故。二者念力菩提之心不忘失故。三者定力等無分別故。四者慧力修多聞故。是名四力具足智慧。復有四方便具足智慧。

『菩薩藏經』(梵文写本 (MS125b6-7) ²⁷⁰)：

²⁶⁸ 梵文写本 (MS125b6)：

catvāra upastambhā jñānasambhārāya saṃvarttante | katame catvāraḥ | dharmabhāṇakānāṃ dharmopastambhāḥ jñānopastambhāḥ āmiṣopastambho bodhyupastambhāḥ ||

【訳】智の資糧のために、四つの支えがある。四つとは何か。〔すなわち、〕諸説法者に法の支えであり、智の支えであり、美味の支えであり、菩提の支えである。

蔵訳(D Ga175b5-6, P Wi199b4-5, H333b1-3)：

ཉེ་བར་རྟོན་པ་བཞི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཚོགས་སྒྲུབ་འགྲུར་ཏེ། བཞི་གང་ཞེ་ན། ཚས་སྒྲུབ་ན་མས་ཀྱི་ཚས་ཉེ་བར་རྟོན་པ་དང་། ཡེ་ཤེས་ཉེ་བར་རྟོན་པ་དང་། ཟང་ཟིང་ཉེ་བར་རྟོན་པ་དང་། བྱང་ཆུབ་ཉེ་བར་རྟོན་པ་ལོ།

玄奘訳(T11.306b13-17)：

復次舍利子。菩薩摩訶薩。復有四種任持智德資糧善巧。何等爲四。所謂菩薩摩訶薩於說法者以法任持。以智任持以財任持。以菩提功德而用任持。舍利子。是爲菩薩摩訶薩四種任持智德資糧〔。〕

法護等訳(T11.875b23-25)：

又智行中。而復成就四種重擔。何等爲四。所謂法智財物及與菩提。是爲四種。

²⁶⁹ 梵文写本 (MS125b7-8)：

catvāri śīlāni jñānasambhāropacayāya saṃvarttante (||) katamāni catvāri | tad yathā dharmmasauratyaśīlaṃ dharmaparyeṣṭīśīlaṃ dharmanidhyaptīśīlaṃ bodhipariṇamana(8)śīlaṃ (||) imāni catvāri śīlāni jñānasambhāropacayāya saṃvarttante ||

【訳】智の資糧の集積のために、四つの戒がある。四つとは何か。例えば、法を喜ぶ戒がある、法を求める戒がある、法を観察する戒がある、菩提に回向する戒がある。智の資糧の集積のために、これらの四戒がある。

蔵訳(D Ga176a1-2, P Wi199b6-8, H333b5-7)：

ཚུལ་ཁྲིམས་བཞི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཚོགས་གསོག་པར་འགྲུར་ཏེ། བཞི་གང་ཞེ་ན། འདི་རྩ་ལྔ། ཚས་ལ་དེས་པའི་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་། ཚས་ཚལ་བའི་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་། ཚས་ལ་དེས་པར་རྟོག་པའི་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་། བྱང་ཆུབ་ཏུ་བཟོ་བའི་ཚུལ་ཁྲིམས་ཏེ། ཚུལ་ཁྲིམས་བཞི་པ་དང་དག་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཚོགས་གསོག་པར་འགྲུར་ནི།

玄奘訳(T11.306b25-c1)：

復次舍利子。菩薩摩訶薩。復有智德資糧善巧。謂具四種清淨尸羅。能善積集智德資糧。何等爲四。所謂菩薩摩訶薩樂法尸羅。求法尸羅。觀法尸羅。迴向菩提尸羅。舍利子。菩薩摩訶薩。若具如是四種清淨尸羅。能善積集智德資糧善巧之行〔。〕

法護等訳(T11.875b29-c2)：

又智行中成就四戒。何等爲四。謂眞實法戒。勤求法戒。決定法戒。向菩提戒。是名爲四〔。〕

²⁷⁰ 蔵訳(D Ga175b6-176a1, P Wi199b5-7, H333b3-5)：

ཚྭ་བས་ཐ་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཚོགས་སྒྲུབ་ཏེ། ཐ་གང་ཞེ་ན། འདི་རྩ་ལྔ། མས་པའི་ཕྱིར་དང་པའི་ཕྱིར་བས་དང་། ཚས་པ་ཚས་པའི་ཕྱིར་བཟོ་བའི་ཕྱིར་བས་དང་། བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལེམས་མི་བརྟེན་པའི་ཕྱིར་དང་པའི་ཕྱིར་བས་དང་། ཉམས་པ་ཉེད་ཀྱི་ཚས་ལ་

pamcabalāni jñānasam̐bhārāya sam̐varttante | katamāni paṃca (||) tad yathā śraddhābalaṃ adhimukti(7)tāyai
(||) vīryabalaṃ śrutaparyeṣṭyai (||) smṛtibalaṃ bodhicittasam̐pramuṣitāyai | samādhibalaṃ
samatādharmānidhyaptyai (||) prajñābalaṃ śrutabalatāyai (||) imāni paṃcabalāni jñānasam̐bhāropacayāyai
sam̐varttante |

【訳】智の資糧のために、五つの力がある。五つとは何か。例えば、信解のために、信力がある。
聞を求めるために、精進力がある。菩提心を忘失しないために、念力がある。平等性を持つ法を
観察するために、定力がある。聞の力のために、慧力がある。智の資糧の集積のために、これら
の五力がある。

このように『大集経・無尽意菩薩品』では「精進力・念力・定力・慧力」の四法を説くが、『菩薩藏経』
では「śraddhābalaṃ adhimuktitāyai（信解のために、信力がある）」という内容が増加し、「信力」を加え
た「五力」として扱われる。当該箇所は四の法数を述べるべき箇所であり、『菩薩藏経』で信力が加筆
されたのは三十七菩提分法における五力が意識されたことによるのであろう。

この他にも「智資糧善巧」の最末尾では、『大集経・無尽意菩薩品』と緊密に対応するが、
「buddhādhiṣṭhānaṃ ca pratilabhate（また、仏の加持を得る）」²⁷¹という文言が増加が認められる²⁷²。

ཐེག་པ་སྟོན་པའི་ཕྱིར་ཁྱེད་དེ་འཛིན་གྱི་རྒྱལ་བ་དང་། ཐོས་པའི་རྒྱལ་བ་ཀྱི་ཕྱིར་ཐོས་པ་འཇུག་ཏུ། རྒྱལ་བ་ལྟ་བུ་པོ་དེ་དག་ལྟ་ཤིང་ཐོས་གྱི་ཚལ་སྤྱད་པོ། །

玄奘訳（T11.306b18-24）：

復次舍利子。菩薩摩訶薩。復有五種勝力能爲智德資糧善巧。何等爲五。所謂菩薩摩訶薩具足信力爲欲成就信解心故。具足進力求善知識成多聞故。具足念力令菩提心無忘失故。具足定力審諦觀察平等覺故。具足慧力由久修習多聞力故。舍利子。是名菩薩摩訶薩五力智德資糧善巧之行〔。〕

法護等訳（T11.875b25-28）：

又智行中成就五力。一者信力於法勝解。二者精進力勤求多聞。三者念力於菩提心而無忘失。四者定力於一切法決定平等。五者勝慧力復樂多聞。是爲五種。於智行中而得圓滿。

²⁷¹ 『菩薩藏経』：

梵文写本（MS126a5-7）：

punar aparāṃ jñānasam̐bhāraḥ sarvasattvānugamaḥ kṣetrānugamaḥ (||) dānato pi jñānasam̐bhāro draṣṭavyaḥ (||) śīlato (‘)pi kṣāntito (‘)pi vīryato (‘)pi dhyānato (‘)pi prajñāto (‘)pi maitrīto (‘)pi karuṇāto (‘)pi muditā(6)to (‘)py upekṣato (‘)pi jñānasam̐bhāro draṣṭavyas (||) tat kasya hetoḥ (||) yāvaṃto bodhisattvāram̐bhāḥ sarve te jñānādhīnāḥ jñānapūrvam̐gamāḥ jñānapratīsarāṇāḥ (||) sa jñāne sthitaḥ sarvā jñānināṃ pratisaraṇo bhavati (||) sarvamārāś cāvatāraṃ na labhante (||) buddhādhiṣṭhānaṃ ca pratilabhate (||) sarvajñajñānatām cārpayati (||) imau bodhi(7)sattvasya punyasam̐bhārajñānasam̐bhārau | etayoḥ sam̐bhārayoḥ kuśalo bodhisattvo mahāsattvaś carati prajñāpāramitāyām ||

【訳】その他、智の資糧とは、一切衆生に随順することであり、一切〔国〕土に随順することである。布施からも智の資糧が見られるべきである。持戒からも、忍辱からも、精進からも、静慮からも、般若からも、慈からも、悲からも、喜からも、捨からも智の資糧が見られるべきである。それは何故か、菩薩の着手するもの、それらすべては智に従うものであり、智を先行とするものであり、智を依所とするものである。智に住する彼〔菩薩〕は諸々の賢明な者の依所となつて、一切魔は機会を捉えない。また、仏の加持も得る。また、一切知智にも趣く。これは菩薩の福の資糧と智の資糧である。この二つの資糧に対する善巧を持つ菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多において行ずる。

藏訳（D Ga176b4-7, P Wi200b3-8, H334b6-335a5）：

གཞན་ཡང་ཡི་ཤེས་གྱི་ཚལ་ནི། གང་སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཆེས་སྤྱོད་བ་དང་། ཁོང་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཆེས་སྤྱོད་བ་སྟེ། སྤྱོན་པ་ལས་ཀྱང་ཡི་ཤེས་གྱི་ཚལ་སྤྱད་པོ། ཚུལ་ཁྲིམས་དང་། འཛོད་པ་དང་། འཛོན་འགྲུལ་དང་། བསམ་གཏན་དང་། ཤེས་རབ་དང་། ཐམས་པ་དང་སྤྱོད་ཆེ་དང་། འགའ་བ་དང་། བཏང་སྟོམས་ལས་ཀྱང་ཡི་ཤེས་གྱི་ཚལ་སྤྱད་པོ། ཁྱེད་ཅིད་ཕྱིར་ཞེན། ཇི་ཙམ་དུ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཚེས་པ་དེ་ཐམས་ཅད་ཡི་ཤེས་གྱི་ཁར་ལས་པ་ཡི་ཤེས་ཚེན་དུ་འགྲོ་བ་ཡི་ཤེས་ལ་རྟོན་པ་སྟེ། དེ་ཡི་ཤེས་ལ་གནས་པས་ཡི་ཤེས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རྟོན་པར་འགྱུར་གྱི། བདེ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཀྱང་དེ་ལ་གླགས་མི་རྟོན་དོ། །ཁྱེད་ཀྱི་ཕྱིར་ཁྱེད་ཀྱི་རྒྱལ་བ་འཇུག་ཏུ། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡི་ཤེས་ལ་ཡང་གཞིག་པར་བྱེད་དོ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བསོད་ནམས་གྱི་ཚལ་དང་། ཡི་ཤེས་གྱི་ཚལ་ཏུ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་སེམས་དཔའ་ཚན་པོ་ཚལ་རྒྱས་པ་དེ་གཞིས་ལ་མཁས་པ་ཤེས་རབ་ཀྱི་པ་རོལ་ཏུ་བྱེན་པ་ལ་བྱེད་དོ། །

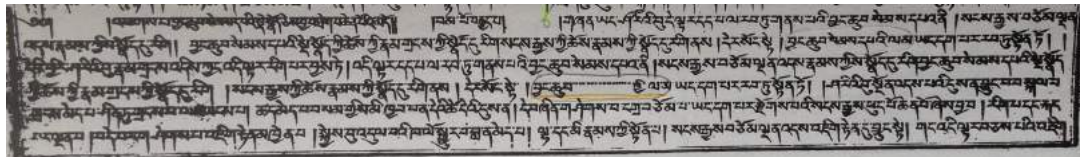
玄奘訳（T11.307a20-307b3）：

復次舍利子。菩薩摩訶薩如是智德資糧善巧。隨遍入於一切行處。何以故。舍利子。當知布施由智資糧而成就故。如是持戒忍辱精進靜慮正慧亦是智德資糧成就。乃至慈悲喜捨一切善法亦因智德資糧成就。何以故。舍利子。菩薩摩訶薩所有發起堅固正行。皆依正²⁷¹智。彼一切行智爲前導。由是菩薩具大智故。爲諸無智之所歸趣。一切惡魔不得其便。諸佛如來所共加護。將得趣入一切智智。舍利子。是爲菩薩智德資糧善巧之行。若諸菩薩摩訶薩。成就如

では、意図的に「菩提薩埵の道」という単語中の「薩埵」を取り去って「菩提の道」としている。そして、その「薩埵」を取り去った痕跡がまだ蔵訳の北京版に残っている²⁷⁵。しかし、『菩薩藏經』では、以後、梵文写本、蔵訳、惟浄訳に共通して、すべてが「菩提道」という語が用いられる。しかし、玄奘訳では、変わること無く「菩薩道」という語を用いる。例えば、大蘊如来は精進行童子（vīryacarita kumāra）が菩薩藏法門の器であり、仏法の器であると知ってから、彼に法を説こうという箇所²⁷⁶や、その直後に菩提道とは何かという質問する箇所²⁷⁷では、他の三本では「菩提道」とする。しかし、玄奘訳のみ異なり、依然として「菩薩道」という用語でしている。しかし、後の内容に入ると、例えば、第七「持戒波羅蜜多品」、第九「精進波羅蜜多品」、第十「静慮波羅蜜多品」、第十二「大自在天授記品」では、玄奘訳も他の三本と同じく「菩提道」という用語に変わる²⁷⁸。従って、本經の最初の「菩薩道」

tad anena te śāriputra paryāyeṇaivam (MS54a1)veditavyam evam (l) śraddhāpratiṣṭhitasya bodhisattvasya buddhā bhagavanto bhājanam iti viditvā bodhisattvapiṭakasya dharmaparyāyasya bhājanam iti viditvā buddhadharmāṇām bhājanam iti viditvopasaṃkramya (2) bodhi{sattva(del.)}mārgam saṃprakāśayanti || (ここでは、この梵文文章より訳した和文と、その蔵訳及び二つの漢訳の内容は本稿の第五章・第四節・第一項に示したい。)

²⁷⁵ その残っている「薩埵」を取り去った痕跡は下図で囲った箇所である。



²⁷⁶ 梵文写本 (MS54a7-b1) :

tena punaḥ śāriputra samayena vīryacaritaḥ kumāra udyānabhūmiṃ niṣkrānto (‘)bhūt sārddham antaḥpureṇa (l) atha khalu mahāskandhas tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho bhājanam batāyam kumāro bodhisattvapiṭakasya dharmaparyāyasya bhājanam batāyam kumāro vīryacaritaḥ kumāro buddhadharmāṇām evam viditvā yena sā udyānabhūmir yena ca vīryacaritaḥ kumāras tenopasaṃkrāmad upasaṃkramya upari viḥāyasi sthitvā vīryacaritāya kumārāya bodhimārgam saṃprakāśayati (l)

【訳】また、舍利弗よ。その時に、精進行童子は後宮の人たちとともに、庭園に出かけた。その時、正等正覚であり、阿羅漢である大蘊如来は「ああ！この王子は菩薩藏という法門の器である」と、「ああ！この王子即ち精進行童子は仏の法の器である」と、このように知って、その遊園地の方向に即ち、精進行童子の前に近づいて、近づき終わって、空中に漂って留まって、精進行童子のために、菩提道を説く。

蔵訳 (D Ga49b3-5, P Wi56a7-b1, H141a6-b2) :

ཡང་གྲུ་མི་བླ་ དེ་ལི་དུ་ན་ན་གཞན་ནུ་བཙན་འགྲུ་ལྷོད་བཙན་མི་འཁོར་དང་ལྷན་ཅིག་ཏུ་སྦྱེད་མོས་ཚལ་གྱི་མར་བྱང་བར་བྱར་ནོ། ། དེ་ནས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཙན་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ལྷན་པ་ཆེན་པོས་ཨོ་མཎོ་གཞན་ནུ་འདི་ནི། ལྷན་པ་སྦྱང་བའི་མཁས་གྲུ་ཆོས་ཀྱི་རྒྱུད་དོ། ། ཨོ་མཎོ་གཞན་ནུ་བཙན་འགྲུ་ལྷོད་འདི་ནི། སངས་རྒྱས་གྱི་ཚལ་རྒྱལ་གྱི་རྒྱུད་དོ། ། ཞིས་དེ་དེ་རྒྱར་རིག་ནས་སྦྱང་མོས་ཚལ་གྱིས་གལ་བ་དང་། གཞན་ནུ་བཙན་འགྲུ་ལྷོད་གལ་བ་དེར་སྟེ་ཕྱིན་ནས་སྦྱང་གི་བར་སྒྲུབ་པ་བཞུགས་ནོ། ། གཞན་ནུ་བཙན་འགྲུ་ལྷོད་པ་ལྷན་པ་གྱི་ལམ་ཡང་དག་པར་རབ་བྱ་རྟོན་ནོ། །

玄奘訳 (T11.235a29-b4) :

舍利子。爾時精進行童子。與諸內宮出遊園觀。時大蘊如來應正等覺。知是童子爲菩薩藏法門之器。又是諸佛正法之器。便往彼園精進行所。既到彼已上住空中。爲是童子開菩薩道。

惟浄訳 (T11.819b17-21) :

是時太子與自官屬。止一殊妙大園苑中。爾時大蘊如來應供正等正覺。知其精進行太子是佛法器。堪可任持菩薩藏正法之器。如是知已即詣園苑。到已爾時處於空中。爲精進行太子說菩提道法。

²⁷⁷ 梵文写本 (MS54b1) :

tatra katamo bodhimārgaḥ yad idaṃ sarvasattveṣu maitrī pāramitāsūdyogaḥ saṃgrahavastuṣv anuvarttanatā ayam ucyate bodhimārgaḥ (l) (この梵文内容に対する和文訳は、本稿の第五章・第三節・第三項・(五)に示したい。)

蔵訳 (D Ga49b5-6, P Wi56b1-2, H141ab2-3) :

དེ་ལ་ལྷན་པ་གྱི་ལམ་གང་ཞིན་འདི་ལྷ་སྦྱེ་ཞིས་མཁས་ཅན་མཁས་ཅན་པ་དང་། ལ་པོ་ལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་རྒྱལ་པ་བཙན་པ་དང་། ལ་བྱ་བའི་དངོས་པོ་རྒྱལ་གྱི་རྫོང་གི་འཇུག་པ་སྟེ་དེ་ནི། ལྷན་པ་གྱི་ལམ་ཞིས་ལྷོ།

玄奘訳 (T11.235b5-10) :

又復讚說三世諸佛。童子當知。云何名爲菩薩道耶。所謂菩薩摩訶薩。於諸有情。精勤修習四無量心。何等爲四。所謂大慈波羅蜜。大悲波羅蜜。大喜波羅蜜。大捨波羅蜜。又勤精進於諸攝法隨順修學。童子。若有菩薩如是修行。是名開菩薩道。

惟浄訳 (T11.819b22-23) :

彼佛告言。太子 此中何名爲菩提道。謂於一切衆生起慈波羅蜜多。隨轉攝法。此即名爲菩提道。

²⁷⁸ 第七「持戒波羅蜜多品」では、ここは、次の二例だけを挙げたい。

1) 梵文写本 (MS64a2) :

ye co mamā ācariyā gurūṇi ye bodhicittam mama samjanenti (l)

deśenti śreṣṭhaṃ varabodhimārgaṃ śāstāra premeṇa upasthihiṣye ||

【訳】私の諸阿闍梨と諸師は私の菩提心を起こす。

諸大師は最も優れた最上の菩提道を開示して、私は愛敬を持って〔その菩提道〕に達したい。

蔵訳(D Ga66b5, P Wi74b7-8, H167b3-4) :

བདག་གི་མཆོད་དོན་ཐོབ་པ་དག་དང་། ཁོང་དག་བདག་གི་བྱང་ཆུབ་སེམས་བརྒྱུད་པ།
བྱང་ཆུབ་དམ་པ་མཆོད་གི་ལམ་སྟོན་ལ། སྟོན་པ་བཞིན་དུ་དགའ་བས་བརྟེན་བཟུང་བ།

玄奘訳(T11.245a9-10) :

若有尊重師 發我慧心者

能宣說勝妙 菩提道大師

法護等訳(T11.827b8-9) :

奉阿闍梨無諂曲 從是我發菩提心

菩提聖道廣宣揚 遵仰師尊常愛重

2) 梵文写本(MS66b7) :

ye dharma arthasamyuktā nirvṛtiye sahāyakāḥ |

bodhimārge ca bodhau ca kalo vyāyamiṭum mama ||

【訳】出離において法の義に相応する諸伴侶〔を作って〕、

私が菩提道と菩提に対して適当な時に精勤修行する。

蔵訳(D Ga71b4, P Wi80a5-6, H175a1) :

ཐོབ་པ་དོན་དང་ཐོན་པ་དང་། བྱང་ཆུབ་འདུག་པའི་སྟོན་པ།
བྱང་ཆུབ་ལམ་དང་བྱང་ཆུབ་ལ། ཁོད་གི་འབད་པར་བྱ་བའི་དུག་།

玄奘訳(T11.247c9-10) :

諸法眞實義相應 能爲寂靜之助伴

趣菩提道與菩提 我宜及時求是法

法護等訳(T11.829c12-13) :

若於諸法義相應 即得同歸出離道

修菩提道證菩提 我當思惟如是事

次に、第九「精進波羅蜜多品」では、次の二例だけを挙げたい。

1) 梵文写本(MS88a7) :

dānato vārayiṣyanti bodhimārgasya kāraṇaṃ (l)

mohiṣyanti ca mārgāto ye yuktā buddhaśāsane ||

【訳】道から彷徨う人たちはもし仏の教えにおいて諸々の精勤するならば、

布施から菩提道の因を捕まえておけるであろう。

蔵訳(D Ga107b7-108a1, P Wi121a3-4, H229b3-4) :

བྱང་ཆུབ་ཀྱི་དེ་ལམ་སྟོན་ལ། རྒྱུན་པ་ལས་དེ་སྟོན་པར་བྱེད།
ལས་སྟོན་པ་སྟོན་དང་པོ་ཐོན་པ། ལས་དག་ལས་ཀྱང་སྟོན་པར་བྱེད།

玄奘訳(T11.267b15-16) :

障彼習行施戒等 菩提聖道之因縁

若有精勤於佛教 當迷惑彼正道路

法護等訳(T11.846c6-7) :

又令癡闇道路中 持六度等眞善行

於諸佛教悉相應 而能獲得菩提道

2) 梵文写本(MS88a8) :

bhikṣuveṣaṃ karitvāna kaukrtyaṃ sa kariṣyati (l)

na eṣa mārgo bodhāya kim atra paridhāvatha ||

【訳】彼は比丘の〔外〕形を示しても、悪事をするであろう。

〔例えば、この如き類の諸経に対して、彼は〕「これが菩提のための道ではないが、汝たちはどうしてそこに走り廻るのか」〔と言った。〕

蔵訳(D Ga108a3-4, P Wi121a6-7, H229b7) :

དགོས་པ་ཆུང་བའི་བྱང་ཆུབ་ནལ། འདི་དེ་བྱང་ཆུབ་ལམ་ཞིག་ལ།
ཅི་ཕྱིར་འདི་ལ་ལོ་སྟོན་ལྟར་ཞིག་ལ། དེ་དེ་རལ་ཏུ་འཁྱོད་པར་བྱེད།

玄奘訳(T11.267b25-26) :

或當變作苾芻形 詐現相親竊言議

謂此非正菩提道 何故在此而奔趣

法護等訳(T11.846c15-16) :

時魔假作苾芻相 巧出語言相誑惑

於衆迅疾生動亂 謂菩提道非眞實

また、第十「静慮波羅蜜多品」では、次の一例だけを挙げたい。

梵文写本(MS115a2) :

<++++>(Tib: sems can bsam pa yoṇs raṅs dga' ba dan l) bodhimārgasya sadānukūlā (l)

という用語から、後に「菩提道」という用語に変更していったと、すなわち、經典内部で統一がとられていないことから、本經は多種のソースから材料を得て編集されたことがわかるのである。つまり、当該の乱れこそが編集の痕跡と言えよう。

第五項、小結

以上、本節では『菩薩藏經』に見られる編集の痕跡についていくつかの点から分析を行った。その結果、『菩薩藏經』には『大集經・無尽意菩薩品』と一致しない点をいくつか存在することが確認できた。そして、それら不一致の点が編纂の過程で様々な過失であれば、矛盾なく理解することができることを述べた。つまり、本節の検討結果は、先の第四節等で導き出された結論、『菩薩藏經』が『大集經・無尽意菩薩品』を素材として編集されたものであることの傍証となるものであろう。

第六節、『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の「悲無量心」と他經

第一項、「十種大悲無量」と「修集大悲十六事」

『菩薩藏經』の第五「慈悲喜捨品」の、慈・喜・捨の三無量心の内容が、それぞれ『大集經・無尽意菩薩品』の慈無尽・喜無尽・捨無尽と一致していることは、既に述べたところである。しかし、悲

pāramitālaṅkṛtaratnacūḍa bodhyaṅgapuṣpadadanāḥ samādhiḥ ||

【訳】衆生の心を狂喜と歓喜とさせる〔三昧〕と常に菩提道に従う〔三昧〕もあり、
波羅蜜多によって飾られた宝髻〔三昧〕と菩提支分に花を布施する三昧もある。

藏訳 (D Ga156b3-4, P Wi177a1-2, H303a1) :

མཉམས་ཅན་བསམ་པ་ཡོངས་རངས་དགའ་བ་དང་། རྒྱལ་བའི་བྱང་ཆུབ་ལྡན་ལ་རྟེན་མཐུན་དང་།
ལ་རྟེན་མཐུན་པ་རྒྱན་དང་དཀྱིལ་མཚན་གཞིག་། ཉིང་འཛིན་བྱང་ཆུབ་ལན་ལག་མེ་ཉིག་ལྟུན་།

玄奘訳 (T11.294c1-3) :

或名歡喜莊嚴土 或名悅豫衆生意

有定名爲一切時 順菩提道三摩地

或定名爲到彼岸 覺分花嚴施寶髻

法護等訳 (T11.868a29-b1) :

光明願得莊嚴刹 令有情意悉歡喜

於正覺道常隨順 莊嚴寶髻波羅蜜

最後に、第十一「大自在天授記品」でも、次の一例だけをあげる。

梵文写本 (MS134a6) :

iti hi śāriputra sa bhagavān mahāskandhas tathāgato (‘)rhan samyaksambuddhaḥ vīryacaritasyemaṃ bodhimārgaṃ samprakāśitavān (I) atītānāgatapratyutpannāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ varṇṇaṃ bhāṣitavān* (I) atha khalu śāriputra vīryacaritaḥ kumāras tasya bhagavato mahāskandhasya tathāgatasyāntikā imaṃ bodhimārgaṃ śrutvā-

【訳】だから、舍利弗よ。彼世尊であり、阿羅漢であり、正等正覺である大蘊如來は精進行〔童子〕に対してこの菩提道を開示した。そして、過去・未來・現在の諸仏・世尊に対する誉め称えをも説いた。舍利弗よ。その時、精進行童子は彼世尊である大蘊如來の前からこの菩提道を聞いて、

藏訳 (D Ga192b5-7, P Wi219a2-4, H360b5-7) :

དེ་ལྟར་གྱི་མི་བླ་ བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དབྱེ་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྟོགས་པའི་སངས་རྒྱལ་ཕྱང་པོ་ཆེན་པོ་དེས་གཞིན་རྒྱ་བཙོན་འབྲུག་རྒྱུད་ལ་བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་དེ་ཡང་བཤད། འདས་པ་དང་མ་ཐུན་པ་དང་།
དེ་ལྟར་བྱུང་བའི་སངས་རྒྱལ་བཅོམ་ལྡན་འདས་རྣམས་ཀྱི་བཟླགས་པ་ཡང་བཤད་དེ། གྱི་མི་བླ་ དེ་ནས་གཞིན་རྒྱ་བཙོན་འབྲུག་རྒྱུད་ཀྱིས་བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཕྱང་པོ་ཆེན་པོ་ལས་བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་དེ་ཐོས།

玄奘訳 (T11.316c2-5) :

舍利子。爾時薄伽梵大蘊如來應正等覺爲是精進行童子。開示如是大菩提道。時彼童子具於佛所聞是法已。又聞讚說過去未來現在諸佛。得大歡喜。

法護等訳 (T11.881c7-10) :

爾時佛告舍利子。彼大蘊如來應供正等正覺。爲精進行太子。於菩提道悉正開示。及過去未來現在諸佛世尊之所稱讚。時精進行太子。於彼佛所。得聞如是菩提正道。

つつ①～⑩の同番号をつけて示してみたい。なお、当該箇所は高崎直道〔1974〕によって指摘されていない箇所であり、筆者が新しく発見した対応箇所である。

まずは、『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の悲無量心における「十種大悲無量」の内容について見てみたい。次の通りである。

梵文写本 (MS555b1)²⁸¹ :

1、tat katham kumāra bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate (I)

① iti hi kumāra bodhisattvas sattvām paśyati satkāyadrṣṭiviniḥbaddhān vividhadrṣṭigatālināms teṣāms satkāyadrṣṭiviniḥbandhprahāṇāya dharmaṃ deśayisyāmīti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate||

1、【訳】では、童子よ。菩薩の衆生たちに対する大悲はどのように起こるのか。

①実に、童子よ。菩薩は有身見によって縛られ、種々な悪見によって付着された衆生たちを観察して、「彼らの有身見による束縛を断ずるために、私は法を説こう。」という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

梵文写本 (MS555b1-2)²⁸² :

2、② punar aparaṃ ku(2)māra bodhisattvaḥ sattvām paśyati asadviparyāsaṣṭhānasthitān anitye nityasaṃjñīnaḥ duḥkhe sukhasaṃjñīna anātmany ātmasaṃjñīnaḥ aśubhe śubhasaṃjñīnaḥ teṣāms asadviparyāsaprahāṇāya dharmaṃ deśayisyāmīti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate ||

2、【訳】②その他、童子よ。菩薩は虚偽かつ顛倒な立場に住している、即ち、無常に於いて常でありと思い、苦なるものを樂なりと思い、無我に於いて我ありと思い、不浄なるものを清浄なりと思うという衆生たちを見て、「彼らの虚偽と顛倒を断ずるために、私は法を説こう。」という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

²⁸¹ 藏訳 (D Ga51b2-4, P Wi58a6-8, H144a7-b2) :

1、གཞན་ཀྱི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདྲིའི་རྒྱུ་ཡིན་པ་ལྟར་འཇུག་ཅིན། ①གཞན་ཀྱི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདྲིའི་མཇུག་ལ་ཐུག་པ་བཞིང་ས་ཤིང་ཐུབ་ཀྱི་རྣམ་པ་མང་པོ་ལ་ཆགས་པའི་སེམས་ཅན་དག་མཐོང་ན་དྲི་དག་གི་འདིག་ཆགས་ལ་ཐུག་པ་བཞིང་ས་ཤིང་ཐུབ་ཀྱི་རྣམ་པ་མང་པོ་ལ་ཆགས་པའི་བྱུང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདྲིའི་རྒྱུ་ཡིན་པ་ལྟར་འཇུག་ཅིན། |

玄奘訳 (T11.236b6-11) :

1、童子。云何菩薩摩訶薩於衆生所發起大悲。①童子。菩薩摩訶薩行大悲時。觀諸衆生虛偽身見之所纏縛。爲諸惡見之所藏隱。菩薩摩訶薩如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法。令其永斷虛偽身見種種纏縛諸惡見等惟淨訳 (T11.820b18-22) :

1、復次太子。云何是菩薩於諸衆生轉大悲心。①所謂菩薩觀見世間一切衆生。堅固執著諸有身見。彼所隨逐乃至諸見。而爲纏縛。菩薩爲說斷除執著之法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心。

²⁸² 藏訳 (D Ga51b4-5, P Wi58a8-b2, H144b2-5) :

2、②གཞན་ཡང་གཞན་ཀྱི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདྲིའི་རྒྱུ་ཡིན་པ་ལྟར་འཇུག་ཅིན། ②གཞན་ཀྱི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདྲིའི་མཇུག་ལ་ཐུག་པ་བཞིང་ས་ཤིང་ཐུབ་ཀྱི་རྣམ་པ་མང་པོ་ལ་ཆགས་པའི་སེམས་ཅན་དག་མཐོང་ན་དྲི་དག་གི་འདིག་ཆགས་ལ་ཐུག་པ་བཞིང་ས་ཤིང་ཐུབ་ཀྱི་རྣམ་པ་མང་པོ་ལ་ཆགས་པའི་བྱུང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདྲིའི་རྒྱུ་ཡིན་པ་ལྟར་འཇུག་ཅིན། |

玄奘訳 (T11.236b12-17) :

2、②復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生安住不實虛偽顛倒。於無常中妄起常想。於諸苦中妄起樂想。於無我中妄起我想。於不淨中妄起淨想。童子。菩薩摩訶薩如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令其永斷虛妄不實諸顛倒故〔。〕

惟淨訳 (T11.820b22-25) :

2、②又復菩薩觀見世間一切衆生。住顛倒處。以無常法計爲常想。苦爲樂想。無我我想。不淨淨想。菩薩爲說斷除顛倒之法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心。

梵文写本 (MS55b2-6)²⁸³ :

3、punar aparaṃ kumāra bodhisattvaḥ sattvān paśyati viparītāṃ (3)kāmālolāṃ (l) te mātaram apy ākrāṃanti bhaginīm apy ākrāṃanti (l) tad bodhisattvasyaivam bhavati (l) anāryasannipāto batāyaṃ lokasanniveśaḥ (l) mukharaparipūrṇaḥ anapatrāpyaparipūrṇaḥ (l) katham hi nāma mātuḥ kuṣṣau garbhaśayyāyām uṣitvā tasyā eva yonimukhān niṣkramya tayaiva sārddham kāmasevām kariṣyanti (l) ekagarbhasamā(4)ruḍhāyāñ ca nāma²⁸⁴ bhagīnyām maithunasamyogam kariṣyanti (l) naṣṭā vīnaṣṭā pranaṣṭā bateme sattvā rāgahatā dveṣahatā mohahatā ajñānahatā dharmacyutā adharmapratīṣṭhitā viṣamadharmasamācārā narakagocarā tiryagyonigocarā yamalokagocarā utpathagocarāḥ | tadyathā kumāra sṛgālaḥ²⁸⁵ śmaśānānte śvabhir upadūtaḥ (5)āsanno mahāprapātasya rātrau rātrau mahāpralāpāt pralapati²⁸⁶ mahāprapāte prapatati | evam eva kumāra sṛgālasamā bateme sattvā | tadyathā kumāra jātyandhaḥ śvabhir upadūtaḥ āsanno mahāprapātasyaivam eva kumāra jātyandhopamā bateme

²⁸³ 蔵訳 (D Ga51b5-52a6, P Wi58b2-59a3, H144b5-145b3) :

3、「若し、復た童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生愚癡顛倒耽嗜愛欲。於母姊妹尚生陵逼。況復於彼餘衆生等。菩薩摩訶薩觀是事已。作如是念。苦哉世間。乃能容止非聖之聚。惡業無愧充滿其中。復作是念。咄哉苦哉。如是衆生曾處母胎。臥息停止生由產門。如何無恥共行斯事。如是衆生深爲大失極可憐愍。種種過患極可訶責。何以故。爲貪瞋癡之所害故。又爲無智所加害故。捨離正法安住非法。修行惡法墮在地獄畜生焰魔鬼趣。如是衆生惡業引故。所往之處行於非道。」
童子。譬如野干於彼塚間爲諸群狗之所搏逐逃迸走避臨大峻崖窮途所逼夜中嗥叫。如是童子。彼諸衆生亦復如是同於野干。復次童子。譬如生盲群狗逼逐臨大坑澗。如是童子。彼諸衆生亦復如是同於生盲。復次童子。譬如園猪行處糞穢兼又食噉初無厭惡。如是童子。彼諸衆生亦復如是同於園猪。
〔如是衆生極可憐愍。〕姪惱所逼於親非親。③爲諸煩惱之所加害。行魔徒黨魔網所縛。纏裹惑網陷沒欲泥。童子。菩薩摩訶薩觀是事已。於彼衆生發起大悲。我當爲彼宣說妙法令其永斷諸欲煩惱故。〕
惟淨訳 (T11.820b25-c11) :

玄奘訳 (T11.236b18-c11) :

3、復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生愚癡顛倒耽嗜愛欲。於母姊妹尚生陵逼。況復於彼餘衆生等。菩薩摩訶薩觀是事已。作如是念。苦哉世間。乃能容止非聖之聚。惡業無愧充滿其中。復作是念。咄哉苦哉。如是衆生曾處母胎。臥息停止生由產門。如何無恥共行斯事。如是衆生深爲大失極可憐愍。種種過患極可訶責。何以故。爲貪瞋癡之所害故。又爲無智所加害故。捨離正法安住非法。修行惡法墮在地獄畜生焰魔鬼趣。如是衆生惡業引故。所往之處行於非道。

童子。譬如野干於彼塚間爲諸群狗之所搏逐逃迸走避臨大峻崖窮途所逼夜中嗥叫。如是童子。彼諸衆生亦復如是同於野干。復次童子。譬如生盲群狗逼逐臨大坑澗。如是童子。彼諸衆生亦復如是同於生盲。復次童子。譬如園猪行處糞穢兼又食噉初無厭惡。如是童子。彼諸衆生亦復如是同於園猪。

〔如是衆生極可憐愍。〕姪惱所逼於親非親。③爲諸煩惱之所加害。行魔徒黨魔網所縛。纏裹惑網陷沒欲泥。童子。菩薩摩訶薩觀是事已。於彼衆生發起大悲。我當爲彼宣說妙法令其永斷諸欲煩惱故。〕

惟淨訳 (T11.820b25-c11) :

3、又復菩薩觀見世間一切衆生。顛倒取著諸染欲事。於所生母及諸姊妹起貪染心。菩薩作是思惟。怪哉世間罪業衆生。愛著欲境非聖所行。邪行充滿。原其所生。居母胎藏次由母產。云何于今反生欲意。姊妹同體出一母胎。豈以染緣共期和合。壞極破壞最極破壞。恣貪瞋癡破毀身心。無智所壞摧滅正法。建立非法行險難法。趣入地獄餓鬼畜生境界。

譬如狐群於其夜分入棄屍林中。起悲惡相伺其所食。世間顛倒染著衆生亦復如是。又如世間生盲之人。不能瞻視諸有色相墮險惡處。染著衆生亦復如是。又如猪群食其殘棄不淨之物。染著衆生亦復如是。

以顛倒染緣③爲染汚所壞。入魔境界魔索繫縛。欲泥陷沒。菩薩爲說斷除染愛之法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心。〕

²⁸⁴ 筆者：nāmaの直前にkatham hi が略された。蔵訳では²⁸³（どうして、なぜ、というわけで）と訳している。

²⁸⁵ 玄奘訳ではsṛgālaḥ を野干と訳している；蔵訳では²⁸³（狐、狐狸）と訳している；惟淨訳ではsṛgālaḥ（単数）を狐群（複数）と訳している。その他、śvabhir (śvan:犬) を訳していない。

²⁸⁶ 筆者：玄奘訳ではmahāpralāpāt pralapatiを「嗥叫」と訳したが、惟淨訳と蔵訳では訳していない。本試訳ではmahāpralāpāt pralapatiを大きい声から小さい声まで絶叫すると訳している。（大きい声から小さい声まで絶叫する原因は大断崖に近づいて落ちているジャッカルは毎晩の始めから力があって大声で叫んで、力の尽して行くことによって叫ぶ声が段々小さくなって行くと推測する。）

sattvāḥ | tadyathā kumāra sūkaraḥ uccāragocaraḥ uccārabhojanaḥ evam eva (6)kumāra sūkarasadr̥śā bateme

sattvāḥ (I)

saiva nāma²⁸⁷ mātā bhaviṣyati saiva bhaginī saiva bhāryā (I) ③ teṣāṃ kleśahatānāṃ sattvānāṃ mārapakṣagocarānāṃ mārapāśabandhanabaddhānāṃ kāmapañkanimagnānāṃ sarvakāmaprahāṇāya dharmam deśayiṣyāmīti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate ||

3、【訳】その他、童子よ。菩薩は顛倒し、愛欲にとらわれた衆生たちを観察する。彼らは母をも汚し、姉妹をも汚す。そこで、菩薩は次のように考える。ああ！これは卑劣なるものによって集まられていて、悪に満ちていて、無愧に満ちている世間の人々のありさまである。彼らは母の腹の子宮に住して、その母の子宮の出口から出て、一体どうして その母と一緒に愛欲によって接触することを為すのか。一体どうして、一つの子宮の中に育った姉妹に対して淫欲によって一緒に接触することを為すのか。ああ！悪だ！とても悪だ！最悪だ！彼らの衆生たちは貪欲に打ち負かされ、瞋に打ち負かされ、痴に打ち負かされ、無知に打ち負かされ、法から墮落しており、非法に留まっており、危険なる法を実行しており、地獄道の達し得、畜生道の達し得、餓鬼道の達し得、邪道の達し得る。

たとえば、童子よ。屍体の捨て林の端に犬たちによって、追い払われて大断崖に近づいたジャッカルは毎晩、毎晩に大きい声から小さい声まで絶叫して大断崖から落ちる。童子よ。ああ！ジャッカルと同様に彼らの衆生たちはまさしくそれと似ている。たとえば、童子よ。生まれながらの盲目の人が犬たちによって追い払われて大断崖に近づいている。童子よ。ああ！生まれながらの盲目の人と同様にこれらの衆生たちはまさしくそれと似ている。童子よ。たとえば、豚が糞尿に住んで糞尿を食べる。童子よ。ああ！豚と同様に彼らの衆生たちはまさしく、それと似ている。

一体どうして〔彼ら衆生は〕母と姉妹とを妻とするのであろうか。③「諸煩惱に打ち負かされ、諸魔の側を境界とし、諸魔網に縛られ、諸愛欲の泥沼に沈められているという彼ら衆生たちのすべての愛欲を断ずるために、私は法を説こう。」という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

梵文写本 (MS55b6-56a2)²⁸⁸ :

²⁸⁷ 筆者：ここでも、nāmaの直前にkatham hi が略された。

²⁸⁸ 蔵訳 (D Ga52a6-b3, P Wi59a3-8, H145b3-146a2) :

4、④ 梵訳：[諸衆生は]母と姉妹とを妻とするのであろうか。③「諸煩惱に打ち負かされ、諸魔の側を境界とし、諸魔網に縛られ、諸愛欲の泥沼に沈められているという彼ら衆生たちのすべての愛欲を断ずるために、私は法を説こう。」という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

玄奘訳 (T11.236c12-23) :

4、④ 復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生五蓋所覆。欲箭所中。貪著六處。眼見色已。執著像貌不能捨離。如是耳所聞聲。鼻所嗅香。舌所嘗味。身所覺觸。執著形相皆不能捨。是諸衆生多於瞋恚互相怨讐。若得義利稱我善友。得非義利便相加害。是諸衆生多於昏沈及以眠睡羸劣愚鈍。爲無智膜之所覆障。是諸衆生不善掉悔之所纏縛。常爲種種諸惡煩惱染汚其心。是諸衆生疑網纏裹。於甚深法不能決定。童子。菩薩摩訶薩如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令其永斷諸魔蓋故〔。〕

惟淨訳 (T11.820c12-21) :

(MS56a1)pratighabahulā bateme sattvā anyonyāmitrās (l) te (‘)rthasya pratilambhāt* mitrām api na jānanti
anarthapratilambhād anyonyam ghātayanti | styānamiddhabahulā bateme sattvā mandā utsukhā
ajñānapaṭalaparyavanaddhā asantaḥ (l) kaukṛtyaparyavasthi(2)tā bateme sattvā āgāmikaiḥ kleśaiḥ
saṃkṣiptacittāḥ(l) vicikitsāparyavanaddhā bateme sattvā gaṃbhireṣu dharmeṣv anīścayaprāptās (l) teṣāṃ
sarvanivaranaprahāṇāya dharamam deśayiṣyāmīti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate ||

ああ！これらの衆生たちは瞋が多いで相互に仇敵する。彼らは利益を獲得しても友誼〔というもの〕をも知らない、利益を獲得しないことから相互に傷つけ合う。ああ！これらの衆生たちは睡眠が多いで懶惰で愚鈍で、無知の覆いによって覆われで不善である。ああ！これらの衆生たちは悪作（kaukr̥tya）²⁸⁹によって纏われた者たちであり、近づいて来る煩惱によって心が汚された者たちである。ああ！これらの衆生たちは疑によって覆われており、深くて妙なる法に対して確信に到達していない。「彼らの一切の蓋を除くために、私は法を説こう。」という菩薩の衆生たちに對する大悲が起こる。

4、④又復菩薩觀見世間一切衆生。爲五蓋所覆。欲箭所射處處愛著。眼見色已著所愛境。耳聞其聲。鼻嗅其香。舌了其味。身覺其觸。隨諸所愛而生取著。苦哉衆生違害處多。親附惡友互求財利。與彼惡友同其知解。得無義利互爲損惱。多諸昏迷睡眠惡法。懈怠迷悶。無智隨逐起諸惡作。此等衆生爲客塵煩惱。染污其心起諸疑惑。此等衆生不能決定獲得最上甚深佛法。菩薩爲說斷除蓋障等法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心〔。〕

²⁹⁰ 蔵記 (D Ga52b3-7, P Wi59a8-b5, H146a2-b1) :

5、⑤復次童子。菩薩摩訶薩[行大悲時。]觀諸衆生爲慢所害。過慢所害。我慢所害。增上慢所害。邪慢所害。於諸下劣計我爲勝。於彼等者計我最勝。或有衆生計色爲我。或復乃至計識爲我。於所未證計我已證。由恃此故。應可問訊而不問訊。應可禮拜而不禮拜。於諸長宿心無敬順。於尊重師不加祇仰。於聰叡者而不請問。何等爲善何等不善。何等應修何等不修。何等應作何等不作。何等有罪何等無罪。何等爲道。何等爲三摩地。何等爲解脫。如是等法曾未明了。但自計我爲勝爲尊。童子。菩薩摩訶薩如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令其永斷一切憍慢種故[。]

143

5、 ⑤ punar aparaṃ kumārā bodhisattvaḥ sattvān paśyati mānahaṭāṃ atimānahaṭān mānātimānahaṭān
a(3)smimānahaṭān abhimānahaṭān²⁹¹ ūnamānahaṭān mithyāmānahaṭāṃ | hīneṣu śreṣṭhaṃ ātmānaṃ
manyante | sameṣu śreṣṭhataṛo (‘)haṃ ity ātmani paśyanti | te rūpaṃ ātmety upagacchanti | yāvad vijñānaṃ
ātmetyupagacchanti (|) anadhigataṃ adhigataṃ saṃjānanti | te (‘)bhivādanārhaṃ nābhivādayanti |
vandanārhaṃ na vandayanti (|) vṛddhatareṣu²⁹² nāvanamanti (|) gurun na śu(4)śrūṣayanti (|) paṇḍitān na
prcchanti | kiṃ kuśalaṃ kiṃ akuśalaṃ (|) kiṃ sevitavyaṃ kin na sevitavyaṃ (|) kiṃ karaṇīyaṃ kin
na karaṇīyaṃ (|) kiṃ sāvadyaṃ kiṃ anavadyaṃ (|) katamo mārgaḥ (|) katamaḥ samādhiḥ (|) katamā
vimuktir (|) ahaṃ jyeṣṭho (‘)haṃ śreṣṭha ity ātmānaṃ manyante (|) iti hi sarvaṃ mānāvidhiprahāṇāya dharman
deśayīṣyāmīti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pra(5)varttate ||

梵文写本 (MS56a5-6)²⁹³ :

²⁹¹ 校訂では、ati(bhi??)mānahaṭānとある。

²⁹³ 蔵訳 (D Ga52b7-53a2, P Wi59b5-8, H146b1-5) :

玄奘訳 (T11.237a8-16) :

6、⑥ punar aparaṃ kumāra bodhisattvaḥ sattvān paśyati tṛṣṇābandhanabaddhām tṛṣṇādāsām bhāryāputraduhitraparītān anarthaparītān nirarthaparītām samsārārgadaparītām narakatiryagyoniyamalokamārgaparītām bhavabandhanaparītān asvairān asvavaśāms (l) teṣāṃ svairavaśatayā yena kāmam gamanatayā nirvānagamanatāyai dharmam (6)deśayisyāmiti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate ||

6、【訳】⑥その他、童子よ。菩薩は衆生たちを觀察して、〔彼らは〕渴愛という束縛によって縛られたのであり、愛欲の奴婢であり、妻と息子と娘とによって取り囲まれたのであり、無利益によって取り囲まれたのであり、無意味によって取り囲まれたのであり、輪廻という門によって取り囲まれたのであり、地獄と畜生のと餓鬼との道によって取り囲まれたのであり、生存という枷によって取り囲まれたのであり、不自由であり、不自在である。「彼らが自由自在となることによって望みのままのように行くこととなることによって、涅槃に到達するために、私は法を説こう」という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

梵文写本 (MS56a6-7)²⁹⁴ :

7、⑦ punar aparaṃ kumāra bodhisattvaḥ sattvām paśyati kalyāṇamitravirahitām pāpamitropagūdhām (l) te pāpamitrāmitravaśaveśanād akuśalam karmādhyavasyanti | yad idam prānātipātam adattādānam kāmamithyācāraṃ mṛṣāvādaṃ paiśunyaṃ pāruṣyaṃ saṃbhinnapralāpa(7)m abhidhyāṃ vyāpādam mithyādr̥ṣṭim (l) iti hi kalyāṇamitrasaṃgrahāyākuśalakarmavinivarttanatāyai daśakuśalām karmapathām samādāya varttanatāyai dharman deśayisyāmiti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate ||

7、【訳】⑦その他、童子よ。菩薩は善友から離れて悪友に取り隠された衆生たちを觀察して、彼らは悪友の友ないの勢力の作業場から悪の業を選択する。すなわち、殺生と偷盗と邪淫と妄語と兩舌と惡口と綺語と他人の財物を貪り（貪）と他人を損ねり（瞋）と邪見とを選択する。「だから、

6、⑥復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生愛縛所縛。爲愛僮僕妻妾男女所共纏裹。爲無義利之所圍遶。爲諸衰禍之所繫縛。生死關鍵之所遮礙。不能出離地獄傍生焰魔鬼道。爲彼有縛之所拘檢。而不能得縱任自在。童子。菩薩摩訶薩如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令其獲得縱任自在隨欲而行趣涅槃故〔。〕

惟淨訳 (T11.821a5-11) :

6、⑥又復菩薩觀見世間一切衆生。愛繩所縛。所謂愛樂男女妻妾財利等事。以愛著故。是即愛樂生死險難三塗惡趣。三有纏縛拘束身心不得自在。以不自在故造諸罪業。菩薩爲令彼悉趣向涅槃聖道。宣說正法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心〔。〕

²⁹⁴ 藏訳 (D Ga53a2-5, P Wi59b8-60a3, H146b5-147a2) :

7、⑦ གཞན་ལྟ་ གཞན་ཡང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་དགེ་བའི་བཞེས་གཉན་དང་བལ་གྱི་མྱེག་པའི་གྲགས་པས་འཁོར་བ་དེ་དག་མྱེག་པའི་གྲགས་པས་ཐྱན་པས་མི་དགེ་བའི་ལས་ལ་ཆགས་པ་ལ་འདི་ལྟ་མྱེ་མྱེ་གཞན་གཞན་བ་དང་། མ་བྱིན་པར་ལྷན་པ་དང་། འདྲོད་པ་ལ་ལྷག་པར་གཡམས་པ་དང་། བརྟན་དུ་ལྷན་པ་དང་། མ་མ་དང་། དག་རྒྱུ་པོ་དང་། ཆོག་ཀྱལ་བ་དང་། བརྟན་སེམས་དང་། གཞིན་སེམས་དང་། ལྷག་པར་ལྷན་པའི་སེམས་ཅན་མཐོང་ན། འདི་ལྟར་དགེ་བའི་བཞེས་གཉན་བཟུང་དང་། མི་དགེ་བའི་ལས་ལས་བརྟོག་པ། དང་། དགེ་བ་བཟུང་ལས་ཀྱི་ལས་ཡང་དག་པར་བཟང་ཉེ་མྱོད་བར་བྱ་བའི་ཆོས་བརྟན་དོ། །ཞིག་སེམས་ཅན་རྣམས་ལ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་མྱེད་ཇི་ཅེན་པོ་འབྲུག་གོ།

玄奘訳 (T11.237a17-24) :

7、⑦復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生遠離善友爲惡知識之所纏執由彼昵近諸惡友故。耽著一切不善之業。所謂殺生偷盜邪行妄語離間僞續綺語貪恚邪見。諸如是等無量惡業熾然建立。童子。菩薩摩訶薩如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令其爲諸善友所攝捨棄十種不善業道令具受持十善業故〔。〕

惟淨訳 (T11.821a12-17) :

7、⑦又復菩薩觀見世間一切衆生。離善知識近惡知識。以近惡故染著十種不善之法。謂殺生偷盜邪染妄言綺語兩舌惡口貪欲瞋恚邪見。菩薩欲令一切衆生爲善知識之所攝受。息除一切不善之業。積集清淨十善業道。宣說正法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心〔。〕

善友を保つために、悪の業を離れるために、十善業道に従って修習するために、私は法を説こう。」
という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

梵文写本 (MS56a6-b1)²⁹⁵ :

8、⑧punar aparaṃ kumāra bodhisattvaḥ sattvāṃ paśyati mohāvṛtān
avidyāndhakāratamaḥpaṭalaparyavanaddhā(MS56b1)n
ātamasattvajīvajantumanujamānavapurūṣapudgalakārakavedaka-ahamkāramamakārābhiniṣṭāms (||) teṣāṃ
āryaprajñācakṣurviśuddhaye sarvadr̥ṣṭigataprahāṇāya dharman deśayīṣyāmīti bodhisattvasya sattveṣu
mahākaruṇā pravarttate ||

8、【訳】⑧その他、童子よ。菩薩は衆生たちを觀察して、〔彼らは〕愚痴によって覆われであり、
無明という黒闇の暗黒の膜によって覆われであり、自身と有情と命者と生者と人と少年と丈夫と
補特伽羅と作者と受者と我見と我所見を取著している。「彼らの聖なる智慧の眼を清浄化するた
めに、一切の邪見を断ずるために、私は法を説こう。」という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

梵文写本 (MS56b1-2)²⁹⁶ :

9、⑨punar aparaṃ kumāra bodhisattvaḥ sattvān paśyati sansārābhinandanāms (||) teṣāṃ
paṃcaskandhavadha(2)kapramokṣāya sansārāṭṭvāṣamatikramāya sarvatraidhātukaniḥsaraṇāya dharmam
deśayīṣyāmīti bodhisattvasya sattveṣu mahākaruṇā pravarttate ||

9、【訳】⑨その他、童子よ。菩薩は輪廻を樂に求める衆生たちを觀察して、「彼らの五蘊の殺しか
ら解放するために、輪廻の原野から離れるために、諸三界から出離するために、私は法を説こう。」
という菩薩の衆生たちに対する大悲が起こる。

²⁹⁵ 藏訳 (D Ga53a5-7, P Wi60a3-5, H147a2-5) :

8、⑧ 復次童子。菩薩摩訶薩行大悲時。觀諸衆生爲諸愚癡之所覆蔽。無明暗膜之所翳障。顛倒執著。於其自體有
情命者。生者人者。少年丈夫。及數取者。作者受者。我及我所。如是諸見無邊無量堅執不捨。童子。菩薩摩訶薩
如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令聖慧眼得清淨故。又令永斷一切見故。〔。〕

玄奘訳 (T11.237a25-b3) :

8、⑧ 復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生爲諸愚癡之所覆蔽。無明暗膜之所翳障。顛倒執著。於其自體有
情命者。生者人者。少年丈夫。及數取者。作者受者。我及我所。如是諸見無邊無量堅執不捨。童子。菩薩摩訶薩
如是觀已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令聖慧眼得清淨故。又令永斷一切見故。〔。〕

惟淨訳 (T11.821a18-22) :

9、⑨ 又復菩薩觀見世間一切衆生。癡所覆障。無明黑暗而常隨逐。執著我人衆生壽者補特伽羅作者受者我我所等。
菩薩爲令如是一切衆生。慧眼清淨諸見斷滅。宣說正法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心。〔。〕

²⁹⁶ 藏訳 (D Ga53a7-b1, P Wi60a5-7, H147a5-7) :

9、⑨ 復次童子。菩薩摩訶薩行大悲時。觀諸衆生樂著生死流轉不息五蘊麤癡常恒尋逐三界圍圉曾無遠離桎梏枷鎖
不思開釋。菩薩摩訶薩觀見是已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令彼解脫五蘊麤癡。又令越度生死曠野及
以出離三界牢獄諸繫縛故。〔。〕

玄奘訳 (T11.237b4-9) :

9、⑨ 復次童子。〔菩薩摩訶薩行大悲時。〕觀諸衆生樂著生死流轉不息五蘊麤癡常恒尋逐三界圍圉曾無遠離桎梏枷鎖
不思開釋。菩薩摩訶薩觀見是已。於諸衆生發起大悲。我當爲彼說微妙法令彼解脫五蘊麤癡。又令越度生死曠野及
以出離三界牢獄諸繫縛故。〔。〕

惟淨訳 (T11.821a23-26) :

9、⑨ 又復菩薩觀見世間一切衆生。沈沒生死不能解脫。五蘊殺者常所殺害。菩薩爲令解脫五蘊。超越輪回曠野險難。
出離三界。宣說正法。是爲菩薩於諸衆生轉大悲心。〔。〕

起七種慢。以是慢故增長惡法。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說法要。破壞衆生如是憍慢。④四者見諸衆生五蓋所覆。以覆蓋故。心多生疑不解深義。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說法要。爲壞衆生如是五蓋。④五者見諸衆生沈六入海。眼取色相。耳取聲相。鼻取香相。舌取味相。身取觸相。意取法相。是名爲沈。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲拔衆生如是沈沒。⑤六者見諸衆生有七種慢。一者慢。二者大慢。三者慢慢。四者我慢。五者增上慢。六者下慢。七者邪慢。菩薩摩訶薩。於下慢者。自言勝汝。於慢慢者。自言最勝我色勝乃至識勝。於增上慢者。菩薩語言。汝實非聖。不應便起聖人之想。爲邪慢者。宣說正見。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生如是憍慢。⑥七者見諸衆生離於聖道。樂行世道惡道。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生世道惡道。⑥八者見諸衆生造惡道行。屬無明愛妻息所繫不得自在。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生如是繫縛。出離惡道。⑦九者見諸衆生親近惡友遠離善友。其心甘樂造作惡業。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生如是惡業。遠離惡友親近善友。③十者見諸衆生造作慳貪。於無明愛心無厭足爲施智慧。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生如是慳貪無明及愛。施與智慧。②十一者見諸衆生我見斷見。爲施衆生十二因緣眞智慧故。菩薩於此而生悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生我見斷見。施與十二因緣智故。⑧十二者見諸衆生行無明闇。我見衆生見命見士夫見。別異見邪見著見。菩薩爲施智光明故。於此衆生而生悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生如是所見。⑨十三者見諸衆生樂於生死。於五聚陰而生親想。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲斷衆生如是三有。③十四者見諸衆生爲魔所縛。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲壞衆生如是魔網。十五者見諸衆生甘樂快樂。而不能知眞實樂因。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。示諸衆生眞實樂因。⑩十六者見諸衆生求涅槃門不能知處。是故菩薩於此衆生修集悲心。悲因緣故宣說正法。爲此衆生開涅槃門。善男子。菩薩修悲。悉因如是十六因緣。(T13.10a2-c2)

以上が『菩薩藏經』「十種大悲無量」と対応する『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の「修集大悲有十六事」の内容である。一見してわかるように、両者の間には文量の差が見いだせる。すなわち、『菩薩藏經』の下線部のみが、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』と対応しており、逆に下線部を引いていない箇所はいずれも『菩薩藏經』の増加箇所²⁹⁹である。

さて、当該の増加箇所であるが、それらの一部は他の経論に断片的に見出すことができるが、そのほとんどが『菩薩藏經』独自のものである。例えば、前にあげた『菩薩藏經』の「十種大悲無量」のテキストの第3にある、愛欲にとらわれた衆生たちが「母と姉妹を汚す」という例えや、「ジャッカル

²⁹⁹ 増加箇所とみなせる理由としては次の三点である。第一に、ここでの対応している内容はこの両者にしか存在せず、他に関連経典が見いだせない点、第二に、漢訳された年代からみれば、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』(『陀羅尼自在王經』)は、『菩薩藏經』より古く漢訳されている点、第三に、同じ項目を説いている両者は、両者の共通の部分の上に、新しいものを持つのは、一般にその両者中の後来にできたものとみなされやすい点である。以上の三つの理由に基づいて、『菩薩藏經』の「十種大悲無量」のテキストの1から10までの内容中に下線を引いていない内容は、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の「修集大悲有十六事」より増広したものであると判断した。すなわち、『菩薩藏經』は、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』より新しく成立されたものと判断した。

が犬群の追い掛けで大断崖におちる」、「豚が糞尿に住んで糞尿を食べる」といった譬喩は、『受十善戒經』³⁰⁰（後漢の時代〈25-220年〉に訳された）、『佛說出家功德經』³⁰¹（東晋の時代〈317-420年〉に訳された）、『梵網經』³⁰²（鳩摩羅什〈344-413年/350-409年〉訳）、『大方廣三戒經』³⁰³（曇無讖〈385-433年〉訳）、『増一阿含經』³⁰⁴（瞿曇僧伽提婆〈385年に洛陽に来る〉訳）など經典に、断片的にでも認められるものである。しかし、それらの内容を悲無量の問題に関連付けるものとしては見いだせない。従って、この例えや譬喩の内容も『菩薩藏經』の独自のものとみなせよう³⁰⁵。

つまり、当該箇所を検討から、『菩薩藏經』は様々な經典の文言だけによって構成されるパッチワーク的な經典ではなく、要所では『菩薩藏經』の独自性が発揮されているとも言えよう。

第二項、「十種大悲轉相」と「大悲無尽」

先の箇所では『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の「十種大悲無量」の対応関係について検討した。そこで、次は続く「十種大悲轉相」（菩薩は十相によって大悲を起す）の内容について検討してみたい。さて、『菩薩藏經』の「十種大悲轉相」は二回説示される。そのうち、一度目の「十種大悲轉相」は、惟浄訳には十種の大悲相が列挙されているが、玄奘訳、藏訳、梵文写本の三本には九種の大悲相しか列挙されていない。二度目の「十種大悲轉相」は、「十種」と銘打っているが、こちらも十種を挙げない。当該箇所は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』とは対応しないが、『大集經・無尽意菩薩品』「大悲無尽」の内容と対応する。そこで今は二度の「十種大悲轉相」のうち、前者には①～⑨の番号を付け、後者にはa⑥b⑥c⑥という記号を付けて、『大集經・無尽意菩薩品』「大悲無尽」との関係を検討してみたい。まず、『菩薩藏經』の当該箇所は次の通りである。

³⁰⁰ 姪有十過患。何等爲十。一者貪姪之人。雖生天上爲天帝釋受五欲樂。心如餓食狗常醉不醒。沒於五欲駛流河中。二者貪姪之人。（中略）三者貪姪之人。（中略）欲火焚燒不識父母兄弟姊妹。猶如猪狗更相荷擔無復慚愧。（T24.1027a4-12）

³⁰¹ 若有顛倒姪姊妹女。不應姪處強生慳嫉。此中罪報。不可計限。（T16.814c28-29）

³⁰² 若佛子。自姪教人姪。乃至一切女人不得故姪。（中略）而菩薩應生孝順心。救度一切衆生。淨法與人。而反更起一切人姪不擇畜生乃至母女姊妹六親行姪無慈悲心者。是菩薩波羅夷罪。（T24.1004b26-c2）

³⁰³ 聞是等經目不喜見背而捨去。迦葉。猶如有狗馳逐野干。而是野干走趣塚間孔穴深坑。（中略）如是迦葉。未來比丘聞是法已。馳趣還家馳趣色欲馳趣女人。趣於鬪諍趣於醫術趣於斷事。住是諸處設犯禁戒。我說是等喻趣塚間。迦葉。如野干趣於孔穴。（T11.691c24-692a3）

³⁰⁴ 猶如有人受人供養衣被飯食床臥具病瘦醫藥。得已便自食噉起染著之心。生愛欲意不知出要之道。設使不得恒生此想念。彼人得供養已向諸比丘。而自貢高毀蔑他人。我所得衣被飯食床臥具病瘦醫藥。此諸比丘不能得之。猶如大群羊中有一羊。出群已詣大糞聚。此羊飽食屎已還至羊群中。（T2.599c19-26）

ここでは、「羊」が「大糞聚」に詣で、「屎」を「飽食」としているが、『法苑珠林』によれば、この「羊」という語はすべてが「猪」という語として扱っている（「……猶如群猪中有一猪。出群已詣大糞聚。此猪飽食屎已。還至猪群中。」（T53.948c29-949a1）羊は草食の動物であるので、常識上には、ここでは、「猪」という語にしたほうがもっと適当になる。従って、この『増一阿含經』中のすべての「羊」という語は、「猪」という語の誤伝である可能性があるであろう。

³⁰⁵ また、『菩薩藏經』の対応箇所の第5番の慢心に関する説示にある「何が善か何が不善か、何かが為されるべきか何が為されるべきではないか（kim kuśalam kim akuśalam (l) kim karaṇīyam kin na karaṇīyam)」という文言は、實叉難陀（652-710年）訳『大方廣佛華嚴經・離世間品』の「十種慢業」を説く箇所にある、「不肯諮問。何等爲善。何等不善。何等應作。何等不應作」（T10.308c16-17）という言葉と親しいが、対応句が短く、一般的な文であり、この点だけをもって、両經の関係を考察することは難しく、今は詳細に検討は行わない。

iti hi kumāra bodhisattvasya mahākaruṇā ebhir aparaiś ca daśabhir ākāraiḥ pravarttate (l) ④ iti hi kumāra
 ye kecin mahāyānena niryānti sarve te mahākaruṇayā niryānti tenocyate mahākaruṇeti (l) ⑤ dānakaraṇī
 śīlakaṇī kṣāntikaṇī vī(7)ryakaraṇī dhyānakaraṇī prajñākaraṇī mahākaruṇā tenocyate mahākaruṇeti |
 smṛtyupasthānakaraṇī samyakprahānakaraṇī mahākaruṇā
 indriyabalabodhyamgānusmṛtisahadharmaabodhyaṅgamārgaprāmodyamūlakarmānupūrva(MS57al)samāpatti
]daśakuśalakarmapathāḥ (l) sarvānīmāni padāni vistareṇa kartavyāni mahākaruṇā
 svayambhūjñānāhārakaraṇī tenocyate mahākaruṇā (l) svakaraṇī sukṛtakaraṇī avikārakaraṇī
 sarvasattvaḥkaraṇī (l) ⑥ sā cāsyā mahākaruṇā sattvānām yathābhiprāyaparipūraṇī (l) iyam ucyate
 bodhisattvānām mahāsattvānām (2) mahākaruṇā (l) yathā mahākaruṇayā samanvāgato bodhisattvo
 mahāsattvaḥ sattvām paśyati idṛśām avasthāprāptām teṣām cāntike kṛpākaruṇācittam utpādayati ||

【訳】だから、童子よ。衆生の根性を観察する菩薩にはこれらの十相によって大悲が起こる。①彼〔菩薩〕には諂いのない大悲が起こる。深心によって出離されたが故である。②また、彼〔菩薩〕には平等な大悲が起こる。より強い深心によってよく出離されたが故である。③また、彼〔菩薩〕には真実な大悲が起こる。正直なる道によって出離されたが故である。④また、彼〔菩薩〕には正直な大悲が起こる。正直な心によく安住していることによって出離されたが故である。⑤また、彼〔菩薩〕には謙虚なる大悲が起こる。すなわち、一切の衆生に対する高慢することと頭を下げることにによってよく出離されたがゆえである。⑥また、彼〔菩薩〕には他人を保護する大悲が起こる。すなわち、自らの心の完全な浄化によって出離されたが故である。⑦また、彼〔菩薩〕には堅固な誓願（-pratijñā）³⁰⁹を有する大悲が起こる。すなわち、不安定な心から離れてよく安定した心によってよく出離されたが故である。⑧また、彼〔菩薩〕には自らの安樂を捨てる大悲が起こる。すなわち、他人の安樂を与えることによってよく出離されたが故である。⑨また、彼〔菩薩〕には一切の衆生〔を救うという〕重荷を担うために大悲が起こる。堅固な精進によってよく出離されたが故である。

実に、童子よ。また次のようである別な十の相によって菩薩には大悲が起こる。⑩実に、童子よ。大乘によって出離する者の誰でも、彼らのすべては大悲によって出離する。そ〔いうこと〕より、大悲と呼ばれる。⑪大悲は布施を成就するものであり、戒を成就するものであり、忍辱を成就するものであり、精進を成就するものであり、禪定を成就するものであり、智慧を成就するものである。そ〔いうこと〕より、大悲と呼ばれる。大悲は〔四〕念処を成就するものであり、〔四〕正断を成就するものである。〔大悲は〕〔五〕根と〔五〕力と〔七〕覺支と〔六〕隨念と共法覺支（sahadharmaabodhyaṅga）³¹⁰と〔八正〕道と〔九〕歡喜³¹¹と本業〔を成就する〕次第三昧³¹²と十善

³⁰⁹ 玄奘訳と惟浄訳および蔵訳ではすべてが-pratijñāを慧（ज्ञान）と訳しているが、pratijñā (prati-√jñā: 許す、～を約束す、確言す) (f.) は「主張、宣言；漢訳誓言、誓願、弘誓」等の意味もしている。

³¹⁰ sahadharmaabodhyaṅga：玄奘訳では「共法覺支」という訳があるが、蔵訳と惟浄訳では、それと相当する内容はない。『大方廣佛華嚴經・入法界品』（T9.745c29-747a9）には、四十八の「共法」が列挙されている。

³¹¹ 『大集經・菩薩念佛三昧分正觀品第十』には、「九種歡喜」という言葉がある。「親近思惟廣大分別。專精遠離九衆生居。滅九種慢捐棄九惱。常思九種歡喜等法。」（T13.857b15-17）また、法護訳は本經である『佛說大乘

業道と〔という諸もの〕を〔成就するもの〕³¹³であり、敷衍すれば、乃至これら（の如き）の一切句を〔成就するもの〕である。〔また、〕大悲は自然智のもたらしを成就するものである。そ〔いうこと〕より、大悲と呼ばれる。〔大悲は〕自身を成就するものであり、善行を成就するものであり、無変化を成就するものであり、一切の衆生に対して何れも成就するものである。そして、㉔彼〔菩薩〕のその大悲は衆生たちの願望を十分に満足させるものである。これが菩薩摩訶薩の大悲と呼ばれる。そのように大悲によって具足された菩薩摩訶薩はその如き様子である状態によって負わされた衆生たちを觀察して、彼らのところで悲憫心を起こす。

以上が『菩薩藏經』の該当箇所である。では、①～⑨の番号および㉔㉕㉖の記号と対応する『大集經・無尽意菩薩品』（『無尽意所説經』）の「大悲無尽」の内容について見てみたい。表にまとめてみれば次の通りである。

『菩薩藏經・慈悲喜捨品』「悲無量心」の「十種大悲轉相」と『大集經・無尽意菩薩品』「大悲無尽」との近似内容	
十種大悲轉相	大悲無尽
①	如是大悲己心所作出不諂曲。(T13.200a26-27)
②③④⑤	如是大悲種性所作出於直道。如是大悲心無邪曲出生正直。如是大悲無有憍慢出衆生境。(T13.200a27-29)
⑥	如是大悲護眞實法出心清淨。(T13.200b3)
⑦	如是大悲本誓堅固不動心。(T13.200b4-5)
⑧	如是大悲自捨己樂出與他樂。(T13.200b6-7)
⑨	如是大悲能令衆生捨於重擔出堅精進。(T13.200b8-9)
㉔	如是大乘諸悲出於大悲。以是因緣故名大悲。(T13.200b23-24)
㉕	謂大悲者。必定善行布施持戒忍辱精進禪定智慧諸助道法。爲得自然無師智慧。(T13.200b24-26)
㉖	如是大悲出諸衆生如所願成。(T13.200b19-20)

表からみてとれるように、両者には対応関係が認められる。そして両者の関係から、『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」の二つの「十種大悲轉相」の内容は『大集經・無尽意菩薩品』の「大悲無尽」に基づいたものであることが推測できよう。例えば、『菩薩藏經』の「十種大悲轉相」の㉕と当該下線部、と『大集經・無尽意菩薩品』の「大悲無尽」の対応箇所を見てみれば、『大集經・無尽意菩薩品』では、「諸助道法」としか示されていなかった内容が、『菩薩藏經』では、「〔四〕念処、〔四〕正断、五根、五力、乃至十善業道」等の内容からなるとして詳細に描かれている。つまり、『菩薩藏經』は、『大集經・無尽意菩薩品』の内容をわかりやすく説示しなおしていると言えよう。

菩薩藏正法經』「如來不思議品」(T11.811b3-4)に、「九種歡喜」を「觀喜、適悅、輕安、快樂、等持、如實知見、寂靜、離染、解脫」と列挙している。

³¹² 『中阿含經・弟子品第四』第九經には：「入悲三昧成就本業」という言葉がある。「我聲聞中第一比丘。入慈三昧心無恚怒。梵摩達比丘是。入悲三昧成就本業。所謂須深比丘是。」(T1.558b22-24)

³¹³ ここでは、梵文写本の-daśakuśalakarmapathāḥ中の-pathāḥを(Ac. pl. m.)と扱う。(BHS. I. p. 57, § 8.93を参考)

第三項、小結

以上、本節では『菩薩藏經』「慈悲喜捨品」中の悲の内容について分析を行った。その結果。「十種大悲無量」と『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の「修集大悲十六事」との対照、および『菩薩藏經』の「十種大悲轉相」と『大集經・無尽意菩薩品』の「大悲無尽」との対照から、『菩薩藏經』は「悲無量心」を構成する際に、およそ九割ほどの素材を、『陀羅尼自在王經』と『無尽意所説經』という二經から取り入れたこと、および独自性を有するのは一割程度であったことが指摘できよう。

第七節、『菩薩藏經』「如來の不思議品」と他經

『菩薩藏經』「如來の不思議品」に説かれている如來の十不思議中の、「十力」、「四無畏」、「十六大悲」、「十八不共佛法」という四項目は、高崎直道〔1974, p. 50〕によって、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』との対応関係があることが指摘されている。しかし、対応関係の詳細については言及されていない。そこで本節では高崎直道〔1974, p. 50〕の指摘にもとづいて、両者の対応関係について検討してみたい。

さて、高崎直道〔1974, p. 50〕が指摘するように、『菩薩藏經』に説かれている如來の十力不思議、四無畏不思議、十八不共法不思議の三項目の内容は、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』に説かれている「如來が有する三十二業」³¹⁴ (T13.14b27-21c26) の内容と対応し、十六大悲不思議の内容は、『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』の「如來が有する三十二業」の直前に説かれている「十六大悲」(T13.11b17-14b19) の内容と対応する。当該の『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』では「十六大悲・十力³¹⁵・四無畏³¹⁶・十八不共佛法³¹⁷」という四つの項目で如來の功德あるいは仏果を纏める。その一方、『菩薩藏經』では「身・声、智、光明・戒と三摩地・神通・十力・四無畏・十六大悲・十八不共佛法」からなる十不思議という十の項目³¹⁸で如來の功德あるいは仏果を纏める。すなわち、如來の功德あるいは仏果という点に注目すれば、『菩薩藏經』には『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』より「身・声、智、光明・戒と三摩地・神通」という六の項目の増広が認められよう。また、両者に対応が認められる四項目の具体的内容についても、『菩薩藏經』は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』よりも詳しい。

つまり、項目としても内容としても『菩薩藏經』は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』よりも詳細であることから、『菩薩藏經』は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』をもとに拡張して成立したものと考えられよう。つまり、この点からも『菩薩藏經』が『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』より後に成立したことが読み取れよう。

³¹⁴ この如來が有する三十二業とは、「十（力）＋四（無畏）＋十八（不共佛法）＝三十二（業）」という三者の数字を加算してなったのである。

³¹⁵ T13.14b28-18a18.

³¹⁶ T13.18a19-19a20.

³¹⁷ T13.19a21-21c1.

³¹⁸ 佛駄跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經』「佛不思議法品第二十八之一」では、「諸佛刹土不可思議。諸佛淨願不可思議。諸佛種姓不可思議。諸佛出世不可思議。諸佛法身不可思議。諸佛音聲不可思議。諸佛智慧不可思議。諸佛神力自在不可思議。諸佛無礙住不可思議。諸佛解脫不可思議。」(T9.590b15-19) という諸仏の十不可思議の説がある。

また、『菩薩藏經』の「如来の不思議品」については高崎直道〔1974, p. 50〕が指摘した以外にも対応関係が指摘できる。例えば、当該箇所「yā ca śāriputrābhā kṛmeḥ khadyotakasya yā cābhā tailapradīpasveyam ābhātikrāntatārā ca viśiṣṭatārā ca varṇavattarā ca prabhāsvaratārā codāratārā ca (【訳】また、舎利弗よ。蛍光虫の光明と油燈の光明とは、これ〔油燈の光明〕はより超越であり、より殊勝であり、より妙色であり、より明るいであり、より広大である。)」という文言より、「tathāgatābhā tāsām agrā ākhyāyate uttarākhyāyate anuttarākhyāyate (【訳】如来の光明はそれらの最上のものであると知られ、より上のものであると知られ、無上のものであると知られる。)」までの内容³¹⁹は、闍那崛多(523-600?)等訳『起世經』卷第七の「三十三天品第八之二」の内容(T1.345a23-b23)³²⁰とほとんど全面的に一致している。つまり、『起世經』(『起世因本經』)も『菩薩藏經』を構築する資源の一つとなっていると考えられよう。

そのほかにも、十の不思議中の第三である「如来の智不思議」のうち、如来の智を説明するために作った墨(maṣi)の譬喩については、『増一阿含・八難品』第三經に説示している墨の譬喩と近似する³²¹。すなわち、『菩薩藏經』は『増一阿含經』からも影響を受けていることが指摘できよう。

このように幾つかの点では、他の經典との対応関係が見いだせるが、『菩薩藏經』の「十の如来の不思議」のすべてが何らかの經典に基づいたものではない。実に、先に言及した五つ以外の半分、すなわち、如来の身、如来の声、如来の智、如来の戒と三摩地、如来の神通という五つの如来の不思議に関しては、他の經典に完全な対応は見出すことができない。つまり、「如来の不思議品」のすべてが他の經典に基づくパッチワーク的なものではなく、『菩薩藏經』の独自性も見いだせるのである。

以上、本節では如来不思議品と他の經典の関係を高崎の指摘をたよりに検討した。その結果、『菩薩藏經』「如来不思議品」は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』や高崎直道〔1974〕の指摘に含まれていない『起世經』等の様々な經典をもとに展開したものであることが明らかとなった。しかし、構成要素の全てが他の經典からなっているわけではなく、他の經典に対応が見出されない点もあることから、『菩薩藏經』の独自性も認められた。つまり、『菩薩藏經』「如来不思議品」は他の經典を種としつつも、『菩薩藏經』が独自に増高し、構成した品であると言えよう。

第八節、『菩薩藏經』と『四分律』および『増一阿含經』

『菩薩藏經』第十二「大自在天授記品」では、放光(Dīpaṃkara, 燃灯)如来が釈尊の前生として登場し、婆羅門として生まれた雲(Megha, 玄奘訳音写「迷伽」という名前の少年に授記を与えた物

³¹⁹ 梵文写本: MS24b2-25a3; 藏訳: D Ga1a5-2b6, H63b7-65a5; 玄奘訳: T11. 211b23-c20; 法護等訳: T11.798a7-29。

³²⁰ 達摩笈多(590年来華?)等訳『起世因本經』卷第七の「三十三天品中」(T1.400a28-b28)。

³²¹ 今、紹介した墨の譬喩については、次節にて詳細に検討を行う。そちらも参照せよ。

atha khalu bhagavāṃ kimbhīrasya yakṣasyāśayaṃ viditvā tasyāś ca mahato (MS14a1) yakṣaparśadaḥ āśayaṃ viditvā smitaṃ prādurakārṣit* (l) dharmatā khalu punar iyaṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ (l) yadā smitaṃ prāduṣkurvanti tadānekavarṇā nānāvarṇā arcīṣo mukhadvārān niścaranti | tad yathā nīlapītalohitāvadātāmāṃjīṣṭhasphaṭikarajatavarṇās tā anantāparyantaṃ lokadhātum ābhayā (2) spharitvā candrasūryāṇāṃ tejaḥ paryādāya nairayikāṃś ca sattvān yāvad brahmalokam abhyudgamyā punar eva pratinivṛtya bhagavantaṃ saptadhā pradakṣiṇīkṛtya kāścīd bhagavato mūrdhany antardhīyante sma | kāścīd ansayor antardhīyante sma (l) kāsciṇ jānunor antardhīyante sma (l) dharmatā khalu punar iyaṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ (l) yadā nairayikaṃ (3) sattvaṃ vyākurvanti tadārcīṣo (‘)dhaḥ kramayor antardhīyamte (l) yadā tairyaḥgonikāṃ tāṃ sattvāṃ vyākurvanti tadārcīṣaḥ³²⁷ pṛṣṭhato (‘)ntardhīyante (l) yadā yāmalaulikāṃ sattvāṃ vyākurvanti tadārcīṣaḥ purato ntardhīyante (l) yadā manuṣāṃ vyākurvanti tadārcīṣo vāme (‘)ntardhīyante (l) yadā devāṃ vyākurvanti tadārcīṣo dakṣiṇe (‘)ntardhīyante (l) ya(4)dā śrāvakāṃ vyākurvanti tadārcīṣo jānunor antardhīyante | yadā pratyekabuddhāṃ vyākurvanti tadārcīṣo (‘)nsayor antardhīyante (l) yadā buddhā bhagavanto bodhisattvaṃ anuttaryāṃ³²⁸ samyaksaṃbodhau vyākurvanti tadārcīṣa upari mūrdhasandhāv antardhīyante |

【訳】その時、世尊は金毘羅葉叉の深心を知ってから、また、それ多くの葉叉眷属の深心を知ってから、微笑を現わした。実に、これが諸仏・世尊の法性である。微笑を現わす時に、その時に光明の多くの色彩とさまざまな色彩が顔の〔毛〕孔から放つ。例えば、青色であり、黄色であり、赤色であり、白色であり、紫がかった赤色であり、水晶の色であり、銀色である色彩がある。それら〔色彩〕は光によって無量無辺の世界を充滿して月と太陽の威光を乗り越えて、また地獄に属する衆生たち乃至梵天世界に広がってから正に再び戻って世尊を七回に右を廻って若干は世尊のてっぺんに消された、若干は両肩に消失された、若干は両膝に消失された。実に、これも諸仏・世尊の法性である。地獄に属する衆生たちを授記する時に、その時に、光明の据えは両足に消失される。畜生に属する衆生たちを授記する時に、その時に、光明（arciṣaḥ）³²⁹背に消失される。閻摩世界の衆生たちを授記する時に、その時に、光明は前に消失される。人間たちを授記する時に、その時に、光明は左に消失される。天たちを授記する時に、その時に、光明は右に消失される。声聞たちを授記する時に、その時に、光明は両膝に消失される。独覺たちを授記する時に、その時に、光明は両肩に消失される。諸仏・世尊は菩薩を無上正等正菩提に授記する時に、その時に、光明は上のでっぺんの孔に消失される。

爾時世尊。如無怖夜叉及諸夜叉衆深心清淨已。即時放大殊妙光明。法爾已來諸佛世尊所放光明。具無數色及種種色。從口門出。所謂青黃赤白紅紫碧綠。光明普照無邊世界。映蔽日月威光不現。其光照耀下至地獄上至梵世。光相（案：梵文写本のarciṣoによれば、「明」のほうが正しい。）旋還至於佛所。右繞七匝。而彼光明從佛頂隱。或從肩隱。或從膝隱。法爾已來諸佛世尊。若爲地獄衆生授記。光即從佛雙足而隱。若爲傍生授記。光從背隱。若爲餓鬼衆生授記。光從前隱。若爲人趣授記。光從左隱。若爲天趣授記。光從右隱。若爲聲聞授記。光從膝隱。若爲緣覺授記。光從肩隱。若諸佛世尊爲諸菩薩。授阿耨多羅三藐三菩提記。光從頂隱〔。〕

³²⁷ 校訂では、tadārcīṣaḥとある。

³²⁸ 校訂では、anuttarasyaṃとある。

³²⁹ arciṣaḥ：ここではNom. pl.であるとする。下同。

まず、『菩薩藏經』「金毘羅葉叉品」では、釈尊が金毘羅葉叉および彼らの眷属たちに授記前に、微笑され、顔の毛孔からさまざまな色彩の光明が無量無辺の世界を充滿してから再び戻って世尊自身の頂上、肩、両膝に入って消えたとあり、さらに諸仏・世尊の授記前に共通な法性、すなわち、地獄に属する衆生たちを授記する時に、その光明が両足に入って消え、乃至菩薩に成仏の授記をする時に、その光明が頂上に入って消えるという表現をもって授記の行われる前兆を描く。

次に、『増一阿含・八政品』第二經の授記前兆を見てみたい。次の通りである。

『増一阿含・馬血天子問八政品』第二經 (T2.758b12-23) :

是時燈光。知彼梵志心中所念即時便笑。佛世尊常法若授決時世尊笑者。口出五色光明遍照三千大千世界。是時光明已照三千大千世界。日月無復光明。還從頂上入。設如來授決之時光從頂上入。設授辟支佛決時光從口出還入耳中。若授聲聞者光從肩上入。若授生天之決者。是時光明從臂中入。若生人中者。是時光明從兩脇入。若授生餓鬼決者。是時光明從腋入。若授生畜生決者光明從膝入。若授生地獄決者。是時光明從脚底入。

ここでは、燈光如來（燃灯仏）が授記を行うのであるが、ここでの授記前兆は先の『菩薩藏經』の内容と極めて親しいことが確認できよう。つまり、この点から、『菩薩藏經』の作者が『増一阿含經』の知識を持っていることがうかがえよう。

また、この他に、先の「第七節、『菩薩藏經』「如來の不思議品」と他經」ですでに指摘した様に、『菩薩藏經』「如來の不思議品」の十不思議の内、第三の「如來の智不思議」という項目に登場する、墨 (maṣi) の譬喩の内容³³⁰は、『増一阿含・八難品』第三經の「如來智慧力」を説明する墨の譬喩 (T2.750a26-b12) と近似する。この点からも『増一阿含經』が『菩薩藏經』の創作者の知識源の一つであることが確認できる。

以上、本節では、『菩薩藏經』と『四分律』や『増一阿含經』の関係を探った。結果としては、その中、特に、いくつかの説示と表現が『増一阿含經』と極めて親しいことが確認でき、『菩薩藏經』の作者が『増一阿含經』を素材として用いていた可能性を確認することができた。

³³⁰ 梵文写本：MS22b7-23a4; 藏訳：D Kha292a6-b4, P Dsi319a4-b2, H60a4-b6 ; 玄奘訳：T11. 210b25-c8; 法護等訳：T11.797a15-26。

第九節、『菩薩藏經』と『大乘理趣六波羅蜜多經』

既に何度か言及したが³³¹、先行研究が指摘するように『菩薩藏經』第五「慈悲喜捨品」に説かれている四無量心中の慈・喜・捨の三無量心内容は、『大集經・無尽意菩薩品』の慈無尽・喜無尽・捨無尽と緊密な対応関係が存在する。その一方で、玄奘以後に登場した般若によって翻訳された『大乘理趣六波羅蜜多經』「静波羅密多品第九」に説示される四無量心のうち、慈・喜・捨の三つの無量心の内容も同様に一致が認められる³³²。また、『菩薩藏經』第十一「般若波羅蜜多品」に説かれている十善巧中の蘊善巧、處善巧、界善巧、諦善巧、縁起善巧、一切法善巧という六善巧の内容も、『大乘理趣六波羅蜜多經』「般若波羅蜜多品」中の八善巧中の対応する善巧の内容とほとんど一致する。このような対応関係については先行研究が触れることはなかった。そこで、今は、『菩薩藏經』と『大乘理趣六波羅蜜多經』との関係について分析してみたい。

結論から述べれば、両者に直接的な影響関係は存在しないとかんがえられる。何故ならば、『菩薩藏經』と『大乘理趣六波羅蜜多經』とは共に『大集經・無尽意菩薩品』に基づいて制作された經典だからである。『大乘理趣六波羅蜜多經』には、大量の真言が登場する。このような傾向は後期大乘のもの、いわゆる密教の影響を受けてのものであろう。一方で、『大集經・無尽意菩薩品』や『菩薩藏經』にはそのような傾向は認められない。すなわち、このような点から、両者より『大乘理趣六波羅蜜多經』の成立は新しいものと考えられる。

さて、『大乘理趣六波羅蜜多經』の第二「陀羅尼護持國界品」(T8.870a7-871c3)には『大集經・無尽意菩薩品』の序分(T13.184b27-187a25)と近似する箇所が多く認められる。さらに『大乘理趣六波羅蜜多經』も『大集經・無尽意菩薩品』と同様、「無尽法門」を説示する。また『大乘理趣六波羅蜜多經』「静慮波羅密多品」に説かれる慈悲喜捨の四つの無量心のすべて(T8.904a3-905c19)が『大集經・無尽意菩薩品』の慈無尽・悲無尽・喜無尽・捨無尽の四つとほとんど一致する。また、『大乘理趣六波羅蜜多經』は『大集經・無尽意菩薩品』と同じく蘊善巧、處善巧、界善巧、諦善巧、縁起善巧、三世善巧、一切乗善巧、一切法善巧という八善巧³³³を述べ、十善巧を述べない。そして、この八善巧の各善巧の具体的な内容も『大集經・無尽意菩薩品』に説かれるものとほとんど全面的に合致する。以上のことに基づけば、『大乘理趣六波羅蜜多經』は『菩薩藏經』とは直接的に関係がなく、『大集經・無尽意菩薩品』と強い関係を持つ。つまり、『菩薩藏經』も『大乘理趣六波羅蜜多經』もともに『大集經・無尽意菩薩品』に基づくことから、結果として両者が近似したと考えられよう。故に、『菩薩藏經』と『大乘理趣六波羅蜜多經』とは内容が近似するものの、直接的な影響関係にあるものではないと言える。

³³¹ 本章の第三節の第一項や第二項で述べた。また、『大乘理趣六波羅蜜多經』「静波羅密多品第九之一」に説示される悲無量心の冒頭部の内容が、『菩薩藏經』および『大集經・無尽意菩薩品』のそれぞれの悲無量心の冒頭部の内容との対応関係は、本章の第六節・第一項の脚注279にすでに示した。

³³² 『大乘理趣六波羅蜜多經』「静波羅密多品第九之一」に説かれる四無量心中の慈の内容と、『菩薩藏經』第五「慈悲喜捨品」に説かれる慈の内容、および『大集經・無尽意菩薩品』の「慈無尽」の内容との詳しい対応関係は、本稿の付録Ⅱの「内容対応系統Ⅰ」に示した。

³³³ 上文にすでに指摘しているように、『大集經・無尽意菩薩品』では、「八方便」と訳している。

第十節、結び

本章では、『菩薩藏經』の性質を明らかにすべく、高崎直道[1974]等によって関係が指摘されている『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』や『大集經・無尽意菩薩品』等との対応関係をより詳細に分析し、さらには先行研究によって指摘されていない対応經典を調査し、分析を行った。

その結果、『菩薩藏經』では序分に相当する第一「家主品」と第二「金毘羅葉叉品」は独自性が強かったが、正宗分に相当する第三品より第十二品は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』や『大集經・無尽意菩薩品』の内容によるところが多いことが明らかとなった。そして、特に第十一「般若波羅蜜多品」はそれら両經典と対応することも多く密接な関係が見いだせた。そのうえで、『菩薩藏經』と、『大集經・無尽意菩薩品』の構造を比較検討し、後者が漫然とした構造であるのに対して、『菩薩藏經』は修行体系に焦点を当てて体系化が図られていることを確認することができた。そして、このような点等から『大集經・無尽意菩薩品』をもとに『菩薩藏經』が組織されたという前後関係を見出した。また、対応関係を分析する過程で、先のような編纂過程の際に生じたであろう幾つかの不備も発見し、『菩薩藏經』が複数の經典にもとづいてそれらの諸説を再統合することによって作り出されたことを再確認した。また、さきの二經の他にも『増一阿含』や『四分律』や『起世經』や『大乘理趣六波羅蜜多經』との対応関係を新たに見出したが、『大乘理趣六波羅蜜多經』については『菩薩藏經』と直接的な影響関係がなく、『大集經・無尽意菩薩品』に基づくという点で結果的に対応したことも明らかにした。

以上、このような本章の成果に基づけば、『菩薩藏經』は『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』や『大集經・無尽意菩薩品』や『増一阿含』等、様々な經典の情報を編集し、成仏道として体系化するべくして制作された經典であると位置づけることができよう。

また、本章の検討に際して、他の阿含ではなく、『増一阿含』との幾つかの対応関係を見出すことができた。従来、『増一阿含』の大乘性については幾度となく指摘されてきた所ではあるが、本章の検討においてもそのような性質を再確認することができた。このような発見は阿含研究の一助ともなろう。

第五章、漢訳『菩薩藏經』の特徴

第一節、はじめに

『菩薩藏經』の諸本、いわゆる梵文写本、玄奘訳、法護等訳、藏訳の四本の異同に関しては第二章で既に検討した。そこで本章では諸々の訳本すなわち、玄奘訳、法護等訳について分析を行い、それぞれの特徴や問題点を分析してみたい。なお、藏訳については限りなく機械的に直訳が施されており、梵文の内容と大差が認められなかった。そのため、今は漢訳を中心に検討を行いたい。

第二節、玄奘訳の加筆箇所

『菩薩藏經』の梵文写本と玄奘訳を対比してみれば³³⁴、玄奘訳では、梵文原典にあるすべての内容や単語が、藏訳と同様、殆んど漏れ落とすことなく翻訳されていることが推測される³³⁵。しかし、玄奘あるいは潤文者等の者たち³³⁶は慣用的な表現のため、あるいは訳文の理解を助けるため、はたまた彼らの自らの考えにより、玄奘訳では梵文原典に存在しない内容が加筆された箇所も見いだせる。すなわち、玄奘訳は、梵文原典にあるすべての内容を忠実に直訳しつつも、一部では何らかの意図のもと行われた加筆も併存しているのである。そこで、今はそのような梵文写本と対応しない箇所について紹介し、分析してみたい。

まずは、玄奘訳の加筆箇所について見ていきたい。まずは、列举に先立ち一例を示してみたい。以下は第七「持戒波羅蜜多品」の「身語意三妙行」の一部であるが、玄奘訳の下線を施した箇所は梵文

³³⁴ 今は玄奘訳と梵文写本の関係に注目して検討するため、他の訳と玄奘訳の異同については言及しない。

³³⁵ こういう推測は、筆者が本『菩薩藏經』の梵文写本を玄奘訳および宋訳の2本漢訳と藏訳との3本と比較対照しつつ全12品からなる本經全經の梵文より和文に試訳をすでに行い完了したという作業に基づいたものである。

³³⁶ 『大慧普覺禪師書・答孫知縣』によれば、訳場には、「訳語者」、「訳意者」、「潤文者」、「証梵者」、「正義者」、「唐梵相校者」という六種類の「職司」があることが示される。

翻譯場有譯語者。有譯義者。有潤文者。有證梵語者〔。〕有正義者。有唐梵相校者。（T47.940b19-21）

また、徐天池〔2007, pp. 92-93〕によれば、唐代の訳場では、「訳主」、「証義」、「証文（証梵本）」、「度語（書写）」、「筆受」、「綴文」、「参訳」、「刊定」、「潤文」、「梵唄」、「監護大使」という十一種類の「職司」が示される。次の通りである。

例如唐代译场的职司就达11种。一是译主，为全场主脑。精通华梵，深谙佛理，遇有疑难，能判断解决。二是证义，为译主的助手。凡已译的意义与梵文有何差殊，均由他与译主商讨。三是证文，或称证梵本，译主诵梵文时，由他注意原文有无讹误。四是度语，根据梵文字音改记成汉字，又称书写。五是笔受，把记下的梵文字音译成汉文。六是綴文，整理译文，使之符合汉语习惯。七是参译，既校勘原文是否有误，又用译文回证原文有无歧义。八是刊定，因中外文体不同，故每行每节每章须去其芜冗重复。九是润文，从修辞上对译文加以润饰。十是梵唄，译文完成后，用读梵音的法子来唱念，看音调是否协调，便于僧侣诵读。十一是监护大使，钦命大臣监阅译经。

また、『佛祖統紀・諸宗立教志第十三』の「法師道宣。（中略）〔貞觀〕十九年偕〔玄〕奘公翻經弘福〔寺〕。筆受潤文推爲上首。」（T49.296c27-297a14）という記述から、玄奘が『菩薩藏經』を翻訳する際に、道宣律師がその訳場の筆受者と潤文者であることが分かる。ついでに、『釋氏稽古略』の「賢首教 釋法藏號賢首。姓康。康居國人。風度奇正利智絶倫。來長安尋應名僧義學之選。屬玄奘法師譯經始預其間。後因筆受證義潤文見識不同而出譯場。」（T49.821a3-6）という記述から、訳場では、時に論争も存在することが窺える。

写本と対応が認められない。つまり、玄奘あるいは潤文者等の者たちによって、加筆された内容と推測される。次の通りである。

梵文写本 (MS60b8-61a4) ³³⁷ :

tatra katamā bodhisattvānām mahāsattvānām śīlapāramitā yasyām udyuktā bodhisattvaḥ bodhisattvacaryām caranti (|) trīṇīmāni śāriputra bodhisattvānām sucaritāni (|) katamāni trīṇi (|) kāyasucaritaṃ vāksucaritaṃ manaḥsucaritaṃ iti (|) tatra katamat kāyasucaritaṃ (|) iti hi śāriputra bodhisattvaḥ prāṇātipātāt prativirato bhavati (|) adattādānāt prativirato bhavati (|) kāmamithyācārāt prativirato bhavati (|) idam ucyate kāyasucaritaṃ || punar aparaṃ śāriputra bodhisattvo mṛṣāvādāt prativirato bhavati (|) paiśunyaṭ pārūṣyāt sambhinnapralāpāt prativirato bhavati (|) idam ucyate vāksucaritaṃ* || punar aparaṃ śāriputra bodhisattvo nābhidhyo bhavaty (|) avyāpādaḥ samyagdr̥ṣṭir bhavatīdam ucyate manaḥsucaritaṃ (|) tasyaivaṃ bhavati (|) katamat kāyasucaritaṃ (|) katamad vāksucaritaṃ (|) kataman manaḥsucaritaṃ (|) tasyaivaṃ bhavati (|) yat kāyena karma na kṛtaṃ prāṇātipāto vāadattādānaṃ vā kāyamithyācāro vā (|) idam ucyate kāyasucaritaṃ (|) tatra katamadvāksucaritaṃ (|) tasyaivaṃ bhavati (|) yad vācā karma na kṛtaṃ mṛṣāvādo vā paiśunyaṃ vā pārūṣyaṃ vā sambhinnapralāpo vā (|) idam ucyate vāksucaritaṃ* (|) tatra kataman manaḥsucaritaṃ (|) tasyaivaṃ bhavati (|) yan manasā karma na kṛtaṃ abhidhyā vyāpādo mithyādr̥ṣṭir (|) idam ucyate manaḥsucaritaṃ (|)

【訳】その中、菩薩摩訶薩たちの持戒波羅蜜多とは何か。精勤する菩薩たちはそ〔持戒波羅蜜多〕において菩薩行を行ずる。舍利弗よ。菩薩たちの善行は次の三つがある。三つとは何か。〔すなわち、〕身による善行であり、言による善行であり、意による善行であるという。その中、身による善行は何か。舍利弗よ。すなわち、菩薩は殺生から離れた者となり、与えられないものを〔勝手に〕取ることから離れた者となり、邪淫から離れた者となる。これが身による善行と言われる。その他、舍利弗よ。菩薩は妄語から離れた者となり、両舌と悪口と綺語とから離れた者となる。これが言による善行と言われる。その他、舍利弗よ。菩薩は無貪であり、無瞋と正見とである。これが意による善行と言われる。彼〔菩薩〕には次のような〔考えが〕ある。

³³⁷ 蔵訳(P Wi69a3-b3, D Ga61b1-62a1, H159b3-160a7) :

[illegible]

惟淨訳 (T11.824c13-24) :

復次佛告舍利子言。云何名爲諸菩薩摩訶薩修習戒波羅蜜多是即廣修菩薩勝行。舍利子。菩薩有三種法常善所行。何等爲三。謂身語意皆善所行。云何身善所行。而菩薩者遠離殺生偷盜邪染。此名身業善行。又復菩薩遠離妄言綺語兩舌惡口。此名語業善行。又復菩薩無貪無瞋正見。此名意業善行。菩薩作是思惟。云何此身語意常善所行。若身不作業。即無殺生偷盜邪染。此名身善行。若語不作業。即無妄言綺語兩舌惡口。此名語善行。若意不作業。即無貪瞋邪見。此名意善行。

身による善行は何か、言による善行は何か、意による善行は何か。〔さらに〕彼には次のような〔考えも〕ある。身によって殺生あるいは偷盗あるいは邪淫という業が為されたことのないこと、これが身による善行と言われる。その中、言による善行は何か。彼には次のような〔考えが〕ある。言語によって妄語あるいは両舌あるいは悪口あるいは綺語という業が為されたことのないこと、これが言による善行と言われる。その中、意による善行は何か。彼には次のような〔考えが〕ある。意によって貪あるいは瞋あるいは邪見という業が為されたことのないこと、これが意による善行と言われる。

対応する玄奘訳（T11.242a7-28）：

爾時佛告舍利子。云何菩薩摩訶薩。尸羅波羅蜜多。菩薩摩訶薩。爲阿耨多羅三藐三菩提。依此勤修行菩薩行。舍利子。菩薩摩訶薩。行尸羅波羅蜜多故。有三種妙行。何等爲三。一者身妙行。二者語妙行。三者意妙行。舍利子。何等名爲身妙行語妙行意妙行耶。舍利子。所謂菩薩摩訶薩。遠離殺生。離不與取。離欲邪行。是名身妙行。舍利子。菩薩摩訶薩。遠離妄語。遠離離間語。遠離僞惡語。遠離綺語。是名語妙行。舍利子。菩薩摩訶薩。於諸貪著瞋恚邪見。皆無所有。是名意妙行。菩薩摩訶薩。具足如是三妙行故。是名尸羅波羅蜜多。復次舍利子。菩薩摩訶薩。行尸羅波羅蜜多時。如是思惟。云何身妙行語妙行意妙行耶。舍利子。菩薩摩訶薩。如是思惟。若身不造殺生不與取欲邪行業者。是名身妙行。菩薩摩訶薩。如是思惟。若語不造妄語離間僞惡綺語業者。是名語妙行。菩薩摩訶薩。如是思惟。若意不造貪著瞋恚邪見業者。是名意妙行。由具如是正思惟故。是名菩薩摩訶薩行尸羅波羅蜜多。

このように、玄奘訳の下線部の箇所は、梵文原典に存在しない。恐らくは、玄奘らが訳文の一貫性、表現あるいは文義をさらに明確するために、加筆した内容であると考えられよう。すなわち、玄奘訳では、直訳と意識という二種の翻訳方式が併存すると考えられよう³³⁸。

『菩薩藏經』の玄奘訳では、このような加筆箇所がよく登場する。そこで、玄奘訳『菩薩藏經』の各品に現れる、訳者らによって加筆されたと見られる内容を管見の限り抽出して表を用いて整理した。次の通りである。

玄奘訳『菩薩藏經』の訳者等者らからの加筆と推測される内容	
第一「家主品」	①十號具足（T11.195b7）、②歎未曾有（T11.195b22）、③釋氏（T11.196b1、196b19、196c8、196c21、197a13、197b2-3、197b18、197c9、198a4）、④色非寂滅（T11.201c8）
第二「金毘羅藥叉品」	①即於佛前聞佛授記。歡喜踴躍得未曾有（T11.204b24-25）、②時諸大衆歎未曾有。既觀神變倍加恭敬（T11.205a28-29）
第三「菩薩觀察品」	①愚癡（T11.206c29）、②獨覺（T11.207a8-9）、③即以慧力如實能知（T11.207c23）

³³⁸ 例えば呂澂[1953, p. 8]はこの点について次のように述べる。

玄奘的翻譯較之羅什的只存大意可說是直譯，但比义淨那样佶屈聱牙倒又近乎意譯。

【訳】玄奘の翻訳は〔鳩摩〕羅什の大意だけを訳すという翻訳より、直訳であると言える。しかし、〔玄奘の訳文を〕義淨のごつごつして読みづらい訳文と比べたら、〔玄奘の翻訳は、〕却って意識と近く翻訳である〔というイメージが生じる〕。

つまり、氏は玄奘の翻訳は、直訳と意識の間のものであると理解している。

第四「如來の不思議品」	<p>①是則名為不可思議 (T11.210a11)、②復以何等名之為智 (T11.211a14)、③其花芬馥光彩映發見者悅樂 (T11.213c7-8)、④今當知 (T11.213c28)、⑤皆是如來先世業力之所成就 (T11.213c29)、⑥三摩地 (T11.214a8)、⑦如是舍利子。是諸菩薩摩訶薩。聞如來不思議尸羅及三摩地已。信受諦奉清淨無疑。倍復踊躍深生歡喜發希奇想 (T11.214b2-4)、⑧云何如來種種解智力。舍利子 (T11.217c17)、⑨應正等覺以無上智力 (T11.217c18)、⑩舍利子。如來種種根智。不可思議無邊無際與虛空等。若有欲求如來諸根智力邊際者。不異有人求虛空際。諸菩薩摩訶薩聞是根力如虛空已。信受諦奉清淨無疑。倍復踊躍深生歡喜發希奇想 (T11.219b11-15)、⑪入邪見軍教化摧伏 (T11.219c22-23)、⑫又復示現種種觀解 (T11.221a5-6)、⑬由如來成就此無畏故。於大眾中正師子吼轉大梵輪。乃至一切世間所不能轉 (T11.224a16-18)、⑭為欲止息寂靜永斷如是障礙法故。如來為諸有情敷演正法。舍利子 (T11.224c20-22)、⑮我今定當開示令其覺悟。如是清淨無垢無執法故 (T11.228b26-27)、⑯如自所證身無誤失。亦為眾生說如斯法。令其永斷身業誤失 (T11.229b24-25)、⑰如自所證語無誤失。亦為眾生說如是法。令其永斷語業誤失 (T11.229c4-6)、⑱令其永斷散亂之心 (T11.230a18-19)、⑲以如是等無有退沒故。說如來正勤無減 (T11.230c5-6)、⑳舍利子。如來語言隨現而轉不可思議。今當略說 (T11.231c6-7)、㉑舍利子。何以此智名為轉 (T11.232b24、232c17)</p>
第五「慈悲喜捨品」	<p>①又復讚說三世諸佛。童子當知 (T11.235b5)、②大 (T11.235b7、235b8、235b16、237c17、238a21、238a22、238a24、238c13、238c14、238c15、238c16) ③童子。若有菩薩如是修行 (T11.235b9-10)、④所謂菩薩摩訶薩。行菩薩道。為阿耨多羅三藐三菩提故 (T11.235b12-13)、⑤我今更說大慈之相 (T11.235c7-8)、⑥慈力如是 (T11.235c13)、⑦以慈力故 (T11.235c1)、⑧慈為大乘最居前導 (T11.235c23)、⑨如是無量不可思議大慈之相。吾今略說。童子。是名菩薩摩訶薩大慈無量波羅蜜。菩薩摩訶薩。由成就大慈無量故。觀諸眾生常懷慈善。勤求正法無有疲倦 (T11.236a14-17)、⑩無量波羅蜜 (T11.235b12、236a25、237c18、238a21-22、238a25)、⑪為阿耨多羅三藐三菩提故。度諸衆生行於 (T11.236b4-5)、⑫摩訶薩行大悲時 (T11.236b12、236b18、236c12、236c24、237a9、237a17、237a25、237b4、237b10、237b16)、⑬復次童子。菩薩摩訶薩 (T11.237b17)、⑭童子當知 (T11.237c11)、⑮復次精進行童子 (T11.237c17)、⑯摩訶薩 (T11.237c17)、⑰復次精進行童子 (T11.238a24)、⑱摩訶薩大 (T11.238a24)、⑲童子當知。菩薩摩訶薩為衆生故求阿耨多羅三藐三菩提時。修行大喜。如是喜者有無量相。童子當知。菩薩 (T11.237c18-20)、㉑何以故 (T11.237c21、237c25、237c26、237c27、238a1、238a6、238a7、238a9、238a11)、㉒童子當知。菩薩摩訶薩為衆生故。發阿耨多羅三藐三菩提已。當行大捨。當知 (T11.238a25-27)、㉓童子當知。菩薩摩訶薩 (T11.238a28-29)、㉔復次童子 (T11.238b15、238c3)、㉕童子當知。菩薩摩訶薩 (T11.238b15-16)、㉖復次。何等名為護自他捨 (T11.238b23-24)、㉗童子當知。菩薩摩訶薩。具大智慧 (T11.238c3-4)、童子 (T11.238c10)、㉘菩薩摩訶薩 (T11.238c11)、㉙波羅蜜行菩薩行 (T11.238c13-14)、㉚若諸菩薩摩訶薩。安住如是四無量波羅蜜者。當知是則為菩薩藏法門之器。又是諸佛正法之器 (T11.238c16-18)、㉛及諸攝法。令是童子隨順修學。舍利子 (T11.238c21)、㉜廣如後說 (T11.238c22)</p>
第六「布施波羅蜜多品」	<p>①爾時佛告舍利子 (T11.238c25)、②摩訶薩。為阿耨多羅三藐三菩提故 (T11.238c25-26、241c23-24)、③菩薩摩訶薩行菩薩行者 (T11.238c27)、④舍利子 (T11.238c29、239a3、241c22)、⑤菩薩摩訶薩。依如是六波羅蜜多故行菩薩道 (T11.0239a4-5)、⑥菩薩摩訶薩依 (T11.239a6)、⑦行菩薩行 (T11.239a7)、⑧摩訶薩度衆生故。行柁那波羅蜜多時 (T11.239a7-8)、⑨珍異餽膳無不盡施 (T11.239a10)、⑩悉能一切歡喜施與。舍利子。以要言之 (T11.239a17-18)、⑪菩薩摩訶薩行大施故。但見來求 (T11.239a19)、⑫復次舍利子 (T11.239a20)、⑬摩訶薩 (T11.239a20、239a22、239a23、239a24、239a24-25、239a25、239a26、239a27、239a28、239a29、239b1、239b3、239b5、239b7、239b7-8、239b8、239b9、239b10、239b11、239b12、239b13、239b14、239b15、239b16、239b18、239b20、239b20-21、239b21、239b22、239b23、239b24、239b25、239b26、239b27、239b28、239b29、239c2、239c4、239c5、239c5-6、239c7、239c8、239c9、239c10-11、239c12、239c13、239c15、239c18、239c19、239c21、239c22、239c24、239c26、239c27-28、239c29、240a2、240a4、240a6、240a8、240a11、240a13、240a15、240a16、240a19、240a21、240a22、240a24、240a26、240a28、240b1、240b6、240b8-9、240b11、240b12、240b14、240b16、240b17、240b19、240b20-21、240b22-23、240b24、240b29、240c5、240c12)、⑭行柁那波羅蜜多時 (T11.239b5-6、239b18-19、239c2-3、239c15-16、240a11-12、240b7、240b29-240c1)、⑮為欲滿足柁那波羅蜜多故 (T11.239b17、239b29-c1)、⑯皆為滿足柁那波羅蜜多故 (T11.239c14、240a10、240b3、240b4-5、240b28)、⑰以生死財而 (T11.240c3)、⑱以虛偽財而 (T11.240c3-4)、⑲菩薩摩訶薩。行柁那波羅蜜多時。其相無量吾今當說 (T11.241a12-13)、⑳聰慧菩薩摩訶薩。於是布施具足成就。善能修行菩薩妙行。無有疑惑 (T11.241c21-22)、㉑一切衆魔魔民天子。於此菩薩不能燒亂又不為彼異道他論。所能摧屈 (T11.241c25-26)</p>
第七「持戒波羅蜜多品」	<p>①爾時佛告舍利子 (T11.242a7)、②摩訶薩。為阿耨多羅三藐三菩提 (T11.242a8-9)、③菩薩摩訶薩。具足如是三妙行故。是名尸羅波羅蜜多 (T11.242a18-19) ④復次舍利子 (T11.242a20、242a29、249c15、252a11、252b5、253b18、259c19、260a12)、⑤行尸羅波羅蜜多時 (T11.242a20-21、242a29-242b1、243a26-27、243c4、243c8-9、244a18、244a22、244b27、244c2、245a17、245a21-22、246b19-20、247a14、247a18-19、247c19、247c23-24、248c3、248c7-8、249a23、249b7-8、249b28、249c15-16、249c23-24、250a26-27、250b4、250b6-7、250b12-13、250b20-21、250c19、251a9-10、251a24-25、252a12、253b18-19、253b23-24、254a19-20、254b6、254b8-9、254b20-21、254c2、254c4-5、254c17-18、255a2-3、255c21-22、</p>

	<p>256b6、259b24-25)、⑥舍利子 (T11.242a22、242b21、243a28、243b10、245c14、246b16、249c25、251a6、251a22、252a23、252b2、253a2-3、253a15、255c25、256a14、257c21、257c23、257c24、257c28、258a1、258a2-3、258a8、258a11、258a13、258a15、258a22、258a26、258b3、258b6、258b11、258b14、258b20、258b22、258c7、258c13、258c18、258c22、258c23、259a3、259c2-3、260a12-13、260a19、260a24、260a26、260a29、260b2、260b4-5、260b7、260b9、260b11、260b13-14、260b16、260b18、260b20、260b23、260b25、260c5-6)、⑦由具如是正思惟故。是名菩薩摩訶薩行尸羅波羅蜜多 (T11.242a27-28)、⑧摩訶薩 (T11.242a29、242c26-27、243a6、243a26、243c4、243c8、244a18、244a22、244b27、244c1-2、245a17、245a21、245c14、246b16、246b19、247a14、247a18、247c19、247c23、248b6、248c3、248c7、248c21、249a23、249b7、249b20、249b28、249c15、249c23、250a23、250a26、250b4、250b6、250b10、250b12、250b18、250b20、250b29、250c1、250c5、250c6、250c11、250c12、250c17-18、250c19、251a6、251a9、251a22、251a24、251c29、252a12、252a14、253b7、253b11、253b18、253b23、254a19、254a25、254b6、254b8、254b20、254c4、254c15、254c17、254c29、255a2、255c21、256a27、256b1、256b6、257c15、257c20、257c21、259a25、259b24、259b29、259c2、259c12、260a12、260c5)、⑨復次 (T11.242c26)、⑩如是行尸羅波羅蜜多 (T11.242c26)、⑪行菩薩行清淨戒時 (T11.242c27)、⑫何以故。以諸菩薩摩訶薩依此法門 (T11.243a10-11)、⑬阿耨多羅三藐三 (T11.243a11)、⑭菩薩摩訶薩。觀 (T11.243a28)、⑮又是身者 (T11.243b1)、⑯又觀是身 (T11.243b3)、⑰難可愛樂 (T11.243b4)、⑱爾時菩薩復作是念。我此病身雖經此苦。曾不值遇如是福田。我今得值。又復善感如此之身。我當依諸福田長養慧命 (T11.243b4-7)、⑲舍利子。菩薩摩訶薩深自觀身。見是事已復作是念。我於長夜感得如是不堅固身。曾不值遇如是福田。我今得值。又復善感如此之身。我當依諸福田長養慧命 (T11.243c22-26)、⑳乃至施及貯水之器 (T11.243c28)、㉑菩薩摩訶薩。作如是念 (T11.244c9-10)、㉒復作是念。我於往昔雖經此苦 (T11.244c12)、㉓大 (T11.245b13)、㉔及以勝慢 (T11.246c2)、㉕作何等行。令諸佛法及菩薩法。而現在前。舍利子 (T11.246c12-13)、㉖依尸羅波羅蜜多。行菩薩行 (T11.246c14-15、247b14、248b6、248c21)、㉗由是力故 (249b20-21)、㉘皆為滿足尸羅波羅蜜多故 (T11.249c1)、㉙舍利子。如是別劫興起之時 (T11.250a17-18)、㉚行尸羅波羅蜜多故 (T11.250a23-24、250b10-11、250b18-19、254a25-26、254c29-255a1、256a28)、㉛皆為成滿尸羅波羅蜜多故 (T11.250c20、255a14-15)、㉜摩訶薩。行尸羅波羅蜜多時。具清淨心 (T11.250c21-22)、㉝行尸羅波羅蜜多故 (T11.251a6-7、251a22-23、253b8-9、254c2-3、254c15-16、257c15-16、259a25-26、259b29)、㉞摩訶薩初生之時 (T11.251c18-19)、㉟王安住無畏 (T11.251c23)、㊱王有大威德 (T11.251c24)、㊲憂悲 (T11.251c27)、㊳其中衆生聞是聲已 (T11.252a2)、㊴摩訶薩。於過去世。行尸羅波羅蜜多時 (T11.252a9-10)、㊵由於往昔行尸羅波羅蜜多時 (T11.252a25)、㊶摩訶薩。依尸羅波羅蜜多 (T11.252a27-28、256b4-5)、㊷成佛之時 (T11.252a28)、㊸摩訶薩成佛之時。具尸羅故 (T11.252b3)、㊹摩訶薩。依尸羅波羅蜜多。由具如是善根力故。成佛之時 (T11.252b5-6)、㊺舍利子。諸佛如來具尸羅故 (T11.252b17-18)、㊻成就如是善根力故 (T11.252b19)、㊼皆由往昔行尸羅波羅蜜多時。於鄔波陀耶。阿遮利耶諸尊重所。隨順師教 (T11.252b23-26)、㊽復次舍利子。諸佛如來。具足尸羅波羅蜜多已 (T11.252b27-28)、㊾舍利子。是為如來具尸羅故。獲得四種無障礙智 復次舍利子 (T11.252c4-6)、㊿舍利子。如來善知世 (T11.252c9-10)、㉑皆由此風所搖動故 (T11.252c11)、㉒由住尸羅波羅蜜多故 (T11.253a21)、㉓由住尸羅波羅蜜多。敬重法故 (T11.253a25)、㉔具尸羅故 (T11.253a29)、㉕諸佛如來。於是正法尸羅波羅蜜多 (T11.253b2-3)、㉖由成就是善根力故 (T11.253b19)、㉗號為法王處世垂化 (T11.253c2-3)、㉘摩訶薩。作是觀已 (T11.255c25、255c26-27)、㉙何以故 (T11.256b8、257c16-17)、㉚作是觀時 (T11.256b28)、㉛大 (T11.257b22)、㉜我今行尸羅波羅蜜多 (T11.257c18)、㉝妄一切女色 (T11.258a10)、㉞是故智者。於諸過失不應生欲 (T11.258a13-14)、㉟妄女色諸欲 (T11.258a19)、㊱又舍利子 (T11.258a29-258b1、258b17、258c19)、㊲諸女色等 (T11.258b5)、㊳況餘勝事 (T11.258b6)、㊴取要言之 (T11.258b26)、㊵所言婦者名加重擔。何以故 (T11.258c7-8)、㊶復以何緣名之為婦 (T11.258c13)、㊷世間衆生 (T11.258c19-20)、㊸苗稼 (T11.259a21)、㊹舍利子。菩薩摩訶薩。又作是念 (T11.259b11-12)、㊺舍利子。是菩薩摩訶薩。復作是念言 (T11.259b20)、㊻作如是等諸正觀已 (T11.259b25)、㊼應如是學 (T11.259c1)、㊽觀諸有情 (T11.259c3)、㊾有情識者 (T11.259c6)、㊿尸羅波羅蜜多 (T11.259c13-14)、㉑爾時佛告 (T11.260c7)、㉒如是清淨行尸羅波羅蜜多 (T11.260c7-8)、㉓佛告舍利子 (T11.260c23)、㉔行尸羅波羅蜜多故。具足成就無量無邊諸佛正法。舍利子。菩薩摩訶薩由行尸羅波羅蜜多故 (T11.260c23-25)</p>
第八「忍辱波羅蜜多品」	<p>①摩訶薩 (T11.261b24、261b25、261b27、262a9、262b18、262c11、262c12-13、263b10、263b27、263c16、263c17)、②為阿耨多羅三藐三菩提故 (T11.261b25-26、264a28)、③由住如是羼底波羅蜜多故 (T11.261b27-28)、④世尊為 (T11.261c6)、⑤行菩薩行 (T11.261c8)、⑥行羼底波羅蜜多故。制伏其心 (T11.261c10)、⑦但作是念 (T11.261c11)、⑧行羼底波羅蜜多者 (T11.262a9-10)、⑨舍利子 (T11.262a14、262c26、263a8、263a20、263b24、263c25、263c26、264a11、264a19、264a20、264a23-24)、⑩我若起瞋於一有情。不名菩薩攝化之法。誰請於我行菩薩道 (T11.262a25)、⑪為欲滿足羼底波羅蜜多故 (T11.262b23-24)、⑫行羼底波羅蜜多時 (T11.262c11-12、263c17-18)、⑬是菩薩摩訶薩 (T11.262c17)、⑭以堅固力摧忿恚軍 (T11.262c23-24)、⑮菩薩摩訶薩 (T11.262c24、264a20、264a23、264a27)、⑯菩薩摩訶薩。行羼底波羅蜜多時。作如是念 (T11.263a11-12)、⑰說我以為行難行者。又亦不唯於彼作諸利益 (T11.263a23-24)、⑱若我於彼作諸利益。是則說我為難行者</p>

	<p>(T11.263a26-27)、^⑲諸大 (T11.263b1)、^⑳波羅蜜多故 (T11.263b9)、^㉑復次舍利子 (T11.263b10、264a10)、^㉒波羅蜜多 (T11.263b10-11、263b27)、^㉓菩薩摩訶薩。依之修行。具足成滿忍法之相。舍利子。菩薩忍者 (T11.263b11-12)、^㉔摩訶薩行 (T11.263b28)、^㉕波羅蜜多時。應當具足諸忍正行 (T11.263b28-29)、^㉖舍利子。菩薩摩訶薩 (T11.263b29)、^㉗於勝菩提心無退屈 (T11.263c11)、^㉘金剛 (T11.263c13)、^㉙波羅蜜多。應如是學 (T11.263c16)、^㉚諸忍之相。所謂菩薩摩訶薩。修行忍者 (T11.263c18)、^㉛菩薩摩訶薩。行於羼底波羅蜜多時。修行菩薩 (T11.264a10-11)、^㉜如是忍者。是名菩薩畢竟之忍 (T11.264a12-13)、^㉝等相而生 (T11.264a19)、^㉞若有能知此無盡者 (T11.264a22-23)、^㉟圓滿成就。舍利子 (T11.264b1)</p>
第九「精進波羅蜜多品」	<p>①爲阿耨多羅三藐三菩提故 (T11.264b6-7)、②行菩薩行。舍利子 (T11.264b7-8)、③是名菩薩摩訶薩行菩薩行 (T11.264b13-14)、④舍利子 (T11.264b14、279c11、285b1)、⑤摩訶薩 (T11.264b15、264b19、264c4-5、264c8、264c15-16、265a4-5、265a12、265a16、265a21)、⑥行正勤波羅蜜多時 (T11.264b15)、⑦作如是言 (T11.264b16)、⑧雖聞此言曾不入心 (T11.264b19-20)、⑨四 (T11.264b20)、⑩微妙 (T11.264b21、264c7、264c24)、⑪行毘利耶波羅蜜多故 (T11.264c5、278b6)、⑫雖聞此語 (T11.264c5-6)、⑬四種 (T11.264c6)、⑭波羅蜜多故 (T11.264c8-9)、⑮大 (T11.264c10、264c10、264c19、264c19、264c19、264c24)、⑯摩訶薩行正勤波羅蜜多時。具足如是大忍力故 (T11.264c12-13)、⑰行毘利耶波羅蜜多者 (T11.264c23-24)、⑱復次 (T11.265b5、265b22)、⑲大乘大菩薩藏微妙 (T11.265b5)、⑳流布於世 (T11.265b6)、㉑略而言之。能引一切諸佛之法 (T11.265b10)、㉒薄福 (T11.265b13)、㉓差別 (T11.265b29)、㉔起深重心。倍於先來 (T11.265c23-24)、㉕有 (T11.265c27)、㉖菩薩摩訶薩。及餘一切諸有衆生 (T11.266a15)、㉗菩薩摩訶薩修行正勤波羅蜜多故 (T11.266a22)、㉘無上 (T11.266a23)、㉙之法 (T11.266a24)、㉚菩薩摩訶薩 (T11.266a25-26、268b5-6、268b10、268b11、268b15)、㉛修行正勤波羅蜜多 (T11.266a26)、㉜聽聞 (T11.266a27)、㉝書寫 (T11.266a27)、㉞窮尋旨趣 (T11.266a28)、㉟出現世間 (T11.266a29)、㊱受持是經 (T11.266b1)、㊲爾時惡魔。令持經者 (T11.266b7-8、266b23)、㊳便於是經不得建立 (T11.266b12、266b16、266b20)、㊴爲行毘利耶波羅蜜多故 (T11.266c7、267c23)、㊵住大乘者。若被誹謗 (T11.267a1)、㊶具大福相 (T11.268a5)、㊷極等遍持 (T11.268a7-8)、㊸舍利子。是六苾芻恒說非法 (T11.268c5-6)、㊹不說正法 (T11.268c12)、㊺是諸罪人雖受苦痛 (T11.269b16)、㊻手執害具刀鋸矛稍 (T11.269b17)、㊼皆大驚愕 (T11.270a17)、㊽深生敬仰 (T11.270c8)、㊾如來應正等覺十號具足 (T11.271c16-17)、㊿修行毘利耶波羅蜜多時 (T11.272a2-3)、㉑能於是經修行正行 (T11.272a3-4)、㉒度脫無量諸衆生等 (T11.272a5)、㉓舍利子。云何菩薩摩訶薩不倦精進 (T11.272a6-7)、㉔弘誓。則名成就不倦精進 (T11.272a15)、㉕大菩薩藏微妙 (T11.272a21)、㉖門 (T11.272a21)、㉗又舍利子。假使三千大千世界滿中熾火。勇猛正勤菩薩摩訶薩。爲欲宣說大菩薩藏深妙法故。以精進力於是熾火。從中直過而無怯退 (T11.272a25-28)、㉘舍利子。是名菩薩摩訶薩修行毘利耶波羅蜜多勇猛之相 (T11.272b5-7)、㉙乃至劫燒 (T11.272b18)、㉚假使三千大千世界所有衆生一切成就隨法行智。欲以比一第八人智。百分不及一。乃至烏波尼沙陀分不及一。復次舍利子。假使三千大千世界所有衆生一切成就第八人智 (T11.273a6-10)、㉛應如是學 (T11.273b3、273b18)、㉜依毘利耶波羅蜜多故 (T11.273b19-20)、㉝常應如是正勤修學。以修學故 (T11.273b20-21)、㉞舍利子。菩薩摩訶薩。心精進相無量無邊。吾今略說 (T11.273b25-26)、㉟修行毘利耶波羅蜜多故成就五法增進不退 (T11.274a22-23)、㊱舍利子。是名菩薩成就第一損減之法 (T11.274b9-10)、㊲魔梵 (T11.274b13)、㊳舍利子。是名菩薩成就第二損減之法 (T11.274b19-20)、㊴舍利子。是名菩薩成就第三損減之法 (T11.274b25-26)、㊵舍利子。是名菩薩成就第四損減之法 (T11.274c5-6)、㊶舍利子。是名菩薩成就第五損減之法 (T11.274c13)、㊷年在幼稚 (T11.275c17)、㊸發歡喜心嘆未曾有 (T11.275c29)、㊹喜踊內心 (T11.276a1)、㊺高花綺飾 (T11.277a29)、㊻莊嚴備諸影麗 (T11.277a29-30)、㊼舍利子。爾時 (T11.277b9)、㊽哀此童子。受其所獻上勝 (T11.277b9-10)、㊾合掌 (T11.277b22)、㊿佛告舍利子。彼過去世。勝現王如來法中 (T11.277c10-11)、㉑於千歲中未曾起念身心驚怖 (T11.278a5-6)、㉒衆寶莊嚴而爲供養 (T11.278a12)、㉓作是念言。如來出世大慈悲者。覆護衆生同於舍宅。如何一旦速般涅槃。令我等類無依無怙。舍利子 (T11.278b13-15)、㉔心大歡喜 (T11.278b21)、㉕悲感充塞。奉接如來遺身 (T11.279b10-11)、㉖起窣堵波嚴飾 (T11.279b11)、㉗摩訶薩。行毘利耶波羅蜜多故。安住正勤行菩薩道 (T11.279b24-25)、㉘而身恒將遇隨事供擬。或私處隱屏 (T11.279c9-10)、㉙眼視之。或以不實事用 (T11.279c10)、㉚晝夜辛勤初無停息 (T11.279c14)、㉛自能知了諸身相隨入自身眞如法性。自身眞如隨入諸法眞如。諸法眞如隨入自身眞如 (T11.282c24-26)、㉜是無憊亂性。是不相違性 (T11.283a14-15)、㉝奇哉 (T11.284c13、284c14)、㉞爾時衆人皆生疑怪。以其所述同共號之 (T11.284c15-16)、㉟亦 (T11.285a7)、㊱王仙苾芻。化衆生已 (T11.285b1)、㊲以願力故 (T11.285b3)、㊳時法行苾芻。化衆生已 (T11.285b15)、㊴出家聞法 (T11.285b16)、㊵正信出家 (T11.285c2)、100豁然意解 (T11.286a23)、101若諸菩薩摩訶薩精進修行是菩薩行。一切衆魔魔民天子。於此菩薩不能憊亂。又不爲彼異道他論。所能摧屈 (T11.286b24-27)</p>
第十「禪定波羅蜜多品」	<p>①舍利子。菩薩摩訶薩爲衆生故。具足勤修四種靜慮。何謂爲四 (T11.286c8-10)、②是名菩薩摩訶薩依靜慮波羅蜜多故勤修如是四種靜慮 (T11.286c22-23)、③摩訶薩。修行靜慮波羅蜜多故 (T11.287a19-20、287b2-3、287b12-13、287b24-25、287c20-21、288c15-16、290b16-17、291b11-12)、④無學 (T11.287a28)、⑤等若遠若近 (T11.287c24-25)、⑥微細有命之類 (T11.288a6)、⑦或有諸業不善因攝受 (T11.288a10-11)、⑧復次舍利子。菩薩摩</p>

	<p>訶薩。修行靜慮波羅蜜多故 (T11.288a22-23、288b22-23、288c3-4、289b28-29、293a7-8)、 ⑨十方世界 (T11.288a23)、⑩復次舍利子。菩薩摩訶薩 (T11.288b1、289c11)、⑪欲解 (T11.288c28、288c28)、⑫摩訶薩。修行靜慮波羅蜜多時 (T11.289a21-22、289c26-27)、 ⑬舍利子。菩薩摩訶薩 (T11.289a24、293a24)、⑭摩訶薩。以依靜慮波羅蜜多故 (T11.290a15-16、291b18-19、291c8-9、291c29-292a1、292a14-15、292a26、292a28-29、 292c21-22、293b20-21)、⑮依靜慮波羅蜜多故 (T11.292c3-4、293b17-18)、⑯非彼慢力之 所發起 (T11.292c5)、⑰處於世界 (T11.293a13)、⑱舍利子。諸菩薩摩訶薩 (T11.293b16)、 ⑲雖行正勤而心恒遠離 (T11.293b29)、⑳雖淨佛國土而心等虛空 (T11.293c7)、㉑當知修 行靜慮波羅蜜多 (T11.293c15-16)、㉒摩訶薩依靜慮波羅蜜多 (T11.293c17-18)、㉓依靜慮 波羅蜜多 (T11.294a7)、㉔心三摩地。以為前導 (T11.294a12)</p>
第十一「般若波羅蜜多品」	<p>①為阿耨多羅三藐三菩提故 (T11.294c18)、②舍利子 (T11.295a9、295a26、295a28、296a24、 296a25、296a28、296b3、296b7、296b11、296b14、296b17-18、296c14、297b29、297c2、 297c4、297c16、297c19、297c20、297c28、298a3、298a4、298a11、298a12、298a16、298b10、 298b11、298c15、298c19、298c29、299a4、299a5、299a20、299a21、299a23、299b27、 299c6、299c11、299c13、299c15、299c16、299c18、299c19、299c23、299c24、299c28、 300a3、300a4、300a8、300a9、300a13、300a15、300a19、300a21、300a22、300a29、300b12、 300b14、300b17、300c11、300c12、300c14、300c19、300c22、300c29、301a3、301a5、 301a7、301a10、301a17、301a20、301a23、301a26-27、301b11、301b17、301b18、301b19-20、 301b21、301b23、301b26、301b27、301c1、301c2、301c29、302a8、302a13、302a15、302a24、 302b1、302b3、302b10、302b15、302b18-19、302b20、302b26、302c1、302c3、302c7、 302c9、302c11、302c15、302c21、302c29、303a1、303a11、303a13、303a17、303a19、303a19-20、 303b11、303b12、303b23、303b23-24、303b28、303b29、304a2、304a10、304b12、304c11、 304c12、304c18、304c20、304c25、305a3、305a8、305a11、305c18、305c21、306a2、306a23-24、 306b11、306b23、306c10、306c16、306c22、306c28、307a5、307a11、307a18、307a21、 307a25、307b4、307b7、307b26、307c4、307c14、307c21、307c22、308a12、308a13、308a14-15、 308a24、308a25、308b3、308b8、308b11、308b14、308b15、308b18、308b26、308c11、 308c14、308c17、308c20、308c23、308c26、308c28、309a1、309a6、309a18、309a21、309a26-27、 309b23、309b29、311b11、311b15、311b19、311b23、311c2、311c7、311c12、311c17、 311c22-23、311c27、312a1、312a2、312a6、312a12、312a12-13、312a19、312a19-20、312a23、 312a23-24、312a26、312a29、312a29-b1、312b7、312b7-8、312b12-13、312b13、312b18、 312b19、312b23、312b27、312b29-312c1、312c13、312c16、312c24、312c27、313a2、313a7、 313a7、309c13、309c24、309c25、310a1、310a2、310a4、310a7、310a9、310a12、310a14、 310a16、310a17、310a26-27、310a28、310b2、310b5、310b7、310b9、310b11-12、310b14、 310b15、310b17、310b18、310b19、310b20、310c1、310c2、310c5、310c14、310c16、310c19-20、 310c25-26、310c26、311a1-2、311a3-4、311a5、311a5-6、311a10、311a12、311a15-16、 311a17、311a17-18、311a24、311a27、311a28、311b4、311b7、311b9、313a9、313a1、 313a15-16、313a25、313a26、313a29、313b6、313b6-7、313b16、313b21、313b23、313c3、 313c7、313c9、313c13、314a14、314a19、314a20、314b27、314b28、314b29、314c23)、 ③吾今略說四十一種。舍利子。何等為相 (T11.295a29-295b1、④聞慧本相 (T11.296a20)、 ⑤摩訶薩 (T11.296a21、296a25、296b14、296b16、296b18、296c7、296c9、296c12、296c14、 297a2、297a6、297a7-8、297c19、297c20、297c28、298a3、298a4、298a16-17、298a20、 298b7、298c17、298c26-27、298c28、298c29-299a1、299a5、299a6、299a18、299a16、299c3、 300a19、301a3、301a10-11、301b11、301b13、303a18、303a19、303b13、303b23、305a8-9、 305a6、305a7、305a16-17、305a22、305a29、305c16-17、305c18、306a2、307a25、307b4、 307c15、308b16、309a22、309a27、311b12、311b15、311c28、312a2、312b24、313a7、 309c13、310b22、310c11、310c20-21、311a4、311a10、311a12、311a14、311a16、311a17、 311a25、311a28、311a29、311b6、311b7、311b8、311b9、313a9、313b1、313b6、313b16、 313b24、313c7-8、313c13、314a14、314b18、314b19-20、314b21、314b23、314b24-25、 315c1)、⑥大 (T11.296a22、297a4、297b22、298a21、314c21、314c24、315b20)、⑦微妙 (T11.296a22、296c8、297a5、297b25、298a21、299c11、314c21、314c24、315b20)、⑧微 妙法 (T11.296a23-24)、⑨如是舍利子。是名菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時正行之相 (T11.296c16-17)、⑩如是舍利子。是名菩薩摩訶薩般若波羅蜜多正行之相 (T11.297a9-10)、 ⑪於菩薩藏微妙法門 (T11.297a29)、⑫若他觀者名非理觀 (T11.298a2)、⑬舍利子。菩薩 摩訶薩 (T11.298a8-9、298a18、299a3-4、303b6、306a26、306b28-29、307a20)、⑭摩訶 薩為阿耨多羅三藐三菩提故 (T11.298a24-25)、⑮菩薩摩訶薩。欲得如是如理證入。應當 修學般若波羅蜜多故 (T11.298b26-27)、⑯復次舍利子。菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多 時 (T11.298b28-29)、⑰舍利子。菩薩摩訶薩當如是知 (T11.298b29-298c1)、⑱又舍利子。 如理句者 (T11.298c6-7、298c9、298c13-14)、⑲菩薩摩訶薩般若之相應如是學 (T11.299c1-2)、⑳大乘大 (T11.299c3)、㉑舍利子。如是善巧無量無邊。吾今略說十種 善巧。何等為十 (T11.299c7-8)、㉒菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故。而能通達 (T11.300a21-22)、㉓舍利子。菩薩摩訶薩。若於是中如實了知。是則名為界法善巧 (T11.300a27-29)、㉔舍利子。菩薩摩訶薩。若於是中如實了知。是則名為界法善巧。又 舍利子 (T11.300b7-9)、㉕摩訶薩。修行般若波羅蜜多故。而能通達 (T11.300a21-22、 300b20-21、300c11-12)、㉖舍利子。菩薩摩訶薩。復應修學諦法善巧。舍利子。諦善巧者。 謂善通達諸聖諦故。何等名為通達聖諦。舍利子 (T11.301a12-14)、㉗復次舍利子。菩薩 摩訶薩。於是諦法。又應觀知如是四諦。云何苦諦 (T11.301b1-2)、㉘舍利子。菩薩摩訶</p>

	<p>薩。於是諦法善巧通達 (T11.301b15-16)、㉔摩訶薩修行般若波羅蜜多故 (T11.301b26-27、303b24、308b12)、㉕摩訶薩。以具修學般若波羅蜜多故 (T11.301b28)、㉖菩薩摩訶薩 (T11.302a15、302a24、302c16-17、302c20、302c21、303a1、303b11、305a4、306b11、306b14、306b19-20、306b23-24、306b27、306c14、306c26、311b16、311b18-19、311b23、311c2、311c7、311c12、311c17、311c23、312a12、312a19、312a23、312a29、312b7、312b13、312b18、312c13、313a7、310a15、310a27、310b5-6、310b14、310c2、310c14、313c9、313c11-12、314a19、314b27、315c19)、㉗舍利子。菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故 (T11.302a15-16、302c21-22、307b10-11、313c10-11)、㉘當知如是菩薩摩訶薩 (T11.302c16-17)、㉙舍利子。菩薩摩訶薩。具足如是諸勝智故 (T11.302c19-20)、㉚菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故 (T11.303a20-21、307a3-4)、㉛尸羅 (T11.303c12)、㉜舍利子是名菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故。依趣於義不依趣文 (T11.304a4-6)、㉝舍利子。菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多故。善能分別 (T11.304b13-14)、㉞則可依趣。舍利子。是名菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故。依趣丁義不趣不了之義 (T11.304c3-5)、㉟舍利子。當知菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多故。善能通達 (T11.305a12-13)、㊱舍利子。是菩薩摩訶薩 (T11.305a24-25、306a20-21)、㊲舍利子。若菩薩摩訶薩 (T11.305c15-16)、㊳舍利子。是菩薩摩訶薩。修行般若波羅蜜多時 (T11.305c19-20)、㊴舍利子。當知菩薩摩訶薩 (T11.305c22)、㊵舍利子。諸如是相此則名為智德資糧相應正行 (T11.305c29-306a1)、㊶舍利子。正法資糧者。所謂菩薩摩訶薩具修正行故 (T11.306a3-4)、㊷是菩薩摩訶薩 (T11.306a7、308b16、308b18-19、308b26、308c1)、㊸便得成就智德資糧。何等為四 (T11.306a27-28)、㊹一者菩薩摩訶薩 (T11.306a28、306b8、306c4)、㊺二者菩薩摩訶薩 (T11.306a29、306c5)、㊻三者菩薩摩訶薩 (T11.306b1、306c6-7)、㊼四者菩薩摩訶薩 (T11.306b2-3、306c8-9)、㊽舍利子。若有菩薩摩訶薩 (T11.306b4-5)、㊾復次舍利子。菩薩摩訶薩 (T11.306b7、306b13、306b18、306b25、306c2、306c12、306c18、306c24、307a1、307a7、307a13、308c7)、㊿舍利子。是為菩薩摩訶薩四種任持智德資糧 (T11.306b16-17)、㉀菩薩摩訶薩。以依般若波羅蜜多故 (T11.307a9-10)、㉁菩薩摩訶薩以修行般若波羅蜜多故 (T11.307a15-16)、㉂舍利子。所謂菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多故 (T11.307b4-6)、㉃何以故 (T11.307b29、308a7、308b5、308b25)、㉄摩訶薩。由依般若波羅蜜多 (T11.307c4-5)、㉅舍利子。是名菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多故 (T11.307c18-19)、㉆摩訶薩修行般若波羅蜜多時 (T11.307c21-22、308b14-15、309a20-21)、㉇舍利子。是菩薩摩訶薩由依般若波羅蜜多 (T11.308a1-2)、㉈具煩惱故。無有智慧 (T11.308a6)、㉉舍利子。如是菩薩摩訶薩 (T11.308b7)、㉊舍利子。是諸菩薩摩訶薩作如是觀積集之相 (T11.308c8-9)、㉋摩訶薩依般若波羅蜜多故 (T11.309a4)、㉌摩訶薩。又依般若波羅蜜多故 (T11.309a6-7)、㉍摩訶薩依般若波羅蜜多 (T11.309a18)、㉎舉要而言 (T11.309b4)、㉏舍利子。菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多故 (T11.309b7-8)、㉐摩訶薩。修行般若波羅蜜多 (T11.311b11-12、312a1-2)、㉑若諸菩薩通達此者 (T11.311b21)、㉒舍利子。若諸菩薩成就此者 (T11.311b28-29、311c5-6、311c10-11、311c15-16、311c21-22)、㉓若諸菩薩成就此者 (T11.311c26-27、312c12、313a6)、㉔舍利子。若諸菩薩遠離此見 (T11.312a10-11)、㉕舍利子。若有菩薩成就此法 (T11.312a17、312b5-6)、㉖摩訶薩。為欲修行般若波羅蜜多者 (T11.312b24-25)、㉗摩訶薩。以修行般若波羅蜜多故 (T11.312b27-28)、㉘摩訶薩為欲修行般若波羅蜜多故 (T11.313a7-8、310b15-16)、㉙舍利子。菩薩摩訶薩。以修般若波羅蜜多故 (T11.309c14-15)、㉚舍利子。如是四種又亦名為四種正勝 (T11.309c23)、㉛菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多 (T11.310b19-20、310c3、310c5-6、310c11-12)、㉜力 (T11.310c7、310c9、310c13)、㉝摩訶薩以依般若波羅蜜多故 (T11.310c23-24)、㉞舍利子。菩薩摩訶薩 (T11.313c18、313c25、314a1、314a11)、㉟如是慧相我今略說。當知菩薩摩訶薩更有無量無邊諸慧。何以故。舍利子 (T11.314b15-17)、㊱寶 (T11.314c8)、㊲舍利子。是諸善男子善女人等。受持是經殷重聽聞讀誦解義。乃至為他廣說開示 (T11.315a9-10)、㊳舍利子。是善男子善女人等。受持是經殷重聽聞讀誦解義。乃至為他廣分別說 (T11.315a18-19、315a28-29、315b9-10)、㊴若有善男子善女人。能 (T11.315b19-20)、㊵於是經典 (T11.315c18)</p>
第十二「大自在天授記品」	<p>㊶爾時佛告舍利子。往昔過去大蘊如來應正等覺。為精進行童子。廣說如是四無量法。及說六波羅蜜多已。爾時彼佛復告精進行童子 (T11.315c29-316a3)、㊷菩薩摩訶薩 (T11.316a3、316b29)、㊸童子當知 (T11.316a3)、㊹摩訶薩 (T11.316a4、316a5、316b26、319a18)、㊺童子 (T11.316a7、316a13、316a17、316a19、316a23、316a27、316b3、316b7、316b12、316b16、316b20、316b23、316b26、316b29)、㊻拯濟貧乏 (T11.316a24)、㊼大 (T11.316b27、319a19、319b19、319b24、319b29、321c13)、㊽轉輪聖 (T11.316c21)、㊾舍利子 (T11.318a4-5、318a11)、㊿服飾 (318b18)、㉀審如所言我為大利。縱使卿今賣我此身 (T11.318b23-24)、㉁終無異心於施留礙。或復 (T11.318b25)、㉂女人持花授與 (T11.318b27-28)、㉃泥濕 (T11.318c10)、㉄興如是行便蒙授記 (T11.319a17)、㉅微妙 (T11.319a19、319b19、319b24、319b29-319c1、321c13、321c19)、㉆及諸花香供養之具 (T11.320a23)、㉇時長者子。作是奉已歡喜無量 (T11.320b12-13)、㉈莊嚴彫飾窮世瓌異 (T11.320c26-27)、㉉高妙 (T11.320c29)、㉊十號具足 (T11.321a21、321a22-23)、㉋瞻部 (T11.321b8)、㉌大乘大 (T11.321c19)、㉍又證一切波羅蜜多 (T11.321c23)、㉎是故諸菩薩摩訶薩。應當於是大菩薩藏微妙法門。精進修行如我所證 (T11.321c28-322a1)、㉏信受奉行 (T11.322a8)</p>

今掲げた表に基づけば、第五品から第十一品までの各品、すなわち四無量心や六波羅蜜多といった菩薩の実践を述べる品では、加筆箇所が他の品より多くなっていることが窺える。このような傾向は、玄奘らが当該箇所の翻訳に力を入れたことを示していると言えよう。すなわち、玄奘らは『菩薩藏經』の本懐が菩薩の実践にあると見抜き、その点を明瞭に翻訳しようと心がけたのであろう。

また、玄奘訳では、慈悲喜捨、特に梵文原典に「大」という形容詞を付いていない慈・喜・捨の三者の直前に「大」を加筆して翻訳し、梵文原典の「菩薩藏法門」を「大菩薩藏微妙法門」あるいは「大乘大菩薩藏微妙法門」と加筆して翻訳し、また、「菩薩」を「菩薩摩訶薩」と加筆して翻訳しているというようなことが確認できる。この点からは、訳者の玄奘あるいは潤文者らが宗教的な感情を込めて翻訳あるいは潤文などの作業を行っていた様子が推察できよう。

以上、玄奘訳の加筆箇所について管見のかぎり抽出を行い分析を行った。その結果、玄奘訳にはいくらかの加筆が見い出せ、それらを分析すれば、二種の傾向、文意を明確にするための加筆傾向と、宗教的感情に基づく尊重表現のための加筆傾向が見いだせた。

第三節、玄奘訳の誤り――四無量波羅蜜多――

第一項、はじめに

先の検討では玄奘訳に見いだせる加筆箇所について検討を行った。ついで今は玄奘訳の誤りについて分析をしてみたい。

玄奘の翻訳は丁寧であり、その学術的価値は極めて高い。しかし、『菩薩藏經』には翻訳としては不適切な箇所も見いだせる。例えば、第五「四無量品」（他の三本では「慈悲喜捨品」と品名を立てている）では、「maitrīpāramitāsūdyogaḥ」という梵文原文に対して不適切な翻訳、すなわち誤訳が見いだせる³³⁹。そこで本節では、そのような誤訳について分析、検討を行いたい。

³³⁹ いま挙げた点以外にも不適切な翻訳として、第九「精進波羅蜜多品」（玄奘訳では「毘耶耶波羅蜜多品」と品立てている）中の、真如（tathatā）についての説示中にある梵文原文の「vigraha」を、「違諍」と訳す点が挙げられる。辞書（M. Monier-Williams[1899, p. 957b] ; T.W. Rhys Davids and William Stede[1921-1925, p. 615a] ; 水野弘元 [1968, p. 289b] ; 『梵和』 (p. 1204a) ）を用いて vigraha (Pāli : = viggaḥa) の意味を調べれば、「争闘、論争」という意味がある他、「形 (form)」、形態、身、身体」という意味も有する。また、藏訳の「ཉག་ (身/身体/形/残存)」という訳と、法護等訳の「影像/相」という訳から、この二訳本は近似であって、ここの「vigraha」を「形 (form)」、形態、身、身体」と類似している意味で訳したことが分かる。さらに、この第九「精進波羅蜜多品」における真如（tathatā）についての説示の全体内容（MS103b6-104a6）から見れば、その文脈のすべての内容は真如の一性、すなわち不二性を説いているので、この文脈にあるこの「vigraha」という単語を、「形 (form)」、形態」という意味で訳したほうが妥当であると考えられる。従って、もしここに言及している「vigraha」という単語が位置している梵文文章を現代日本語に試訳すれば、次のようになるう。

梵文写本 (MS104a3-5) :

api ca śāriputra tathatocyate tatvaṃ tathātvam ananyathātvam avigatatvaṃ avigrahatvaṃ (||) na tathatāyāṃ kaścid vigrahaḥ (||) avigraha ca tathatā (||) tad ucyate tathāgatavigrahaḥ (||) tasmāt kāraṇāt tathatāyā eva vigrahata ucyate tathāgatavigraha itī evaṃ (||) vigrahaḥ sarvavigrahaś (||) tena bodhisattvaḥ sarvavigrahaṃś ca darśayati na ca tathāgatavigrahaṃ karoty (||) avigrahaḥ avivādaḥ (||) sarvarūpavigrahaṃś ca darśayati na ca tathāgatavigrahaṃ vikopayati (||)

【訳】 また、舍利弗よ。真如と呼ばれるのは、〔すなわち、〕真実であり、如実（tathātva : = tathatva, (BHS. II, p. 248)）であり、不異性であり、無消滅性であり、無形性である。真如には決して形がない。そして、真如が無形であるこそ、如来の形と呼ばれる。何故に、そのように真如が無形であるこそ、如来の形と呼ばれ

第二項、問題の所在

『菩薩藏經』「四無量品」の冒頭では、大蘊如来 (mahāskandha tathāgata) によって、菩薩藏法門の器となった精進行童子 (vīryacarita kumāra) に菩提道が示される³⁴⁰。そして、『菩薩藏經』では「四無量品」冒頭より、菩提道の説示が開始される。さて、この菩提道の内容であるが、その内容に関して、梵漢蔵の四本には異説が存在する。そこで、まず、異説箇所とその問題点を、梵文写本を中心に検討したい。

さて、検討に先立って、問題となる異説箇所の漢訳と蔵訳の文章を検討したい。菩提道の説示内容を示せば、次の表の通りである。

『菩薩藏經』「四無量品」における菩提道内容		
玄奘訳	惟浄訳	蔵訳
云何名爲菩薩道耶。所謂菩薩摩訶薩。於諸有情。精勤修習四無量心。何等爲四。所謂大慈波羅蜜 ³⁴¹ 。大悲波羅蜜。大喜波羅蜜。大捨波羅蜜。又勤精進於諸攝法隨順修學。童子。若有菩薩如是修行。是名開菩薩道。(T11.235b5-10)	此中何名爲菩提道。謂於一切衆生起慈波羅蜜多。隨轉攝法。此即名爲菩提道。(T11.819b22-23)	དེ་ལ་ཕྱང་རྒྱུ་ལྟ་བུ་ཞིན་པའི་དྲི་རྒྱ་ལོ་མཉམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་བྱམས་པ་དང་པལ་འོ་ལ་བྱ་བྱིན་པ་ན་མས་ལ་བརྩོན་པ་དང་པལ་བྱུ་བྱིན་པའི་དངོས་པོ་རྩམས་ཀྱི་རྒྱུ་ལ་འཇུག་པ་གྱུ་དྲི་རྒྱུ་ཕྱང་རྒྱུ་ལམ་ཞིས་བྱའོ། < D Ga49b5-6, P Wi 56b1-2, H141b2-3 >
【訳】いかなるものを菩薩道と言うのか。すなわち、菩薩摩訶薩が、①「諸々の有情に対して、四無量心を精勤に修習すること」である。四とは何か。すなわち、大慈波羅蜜と、大悲波羅蜜と、大喜波羅蜜と、大捨波羅蜜とである。 また、②「諸々の〔四〕摂法に随順して修学することを勤勉に、精進すること」である。 童子よ。もし、菩薩が以上のように、修行するならば、これが菩薩道を開くことという。	【訳】このうち、菩提道とは何か。すなわち、①「一切衆生に対して、慈波羅蜜多を生起すること」であり、②「摂法に随轉すること」である。これが菩提道という。	【訳】そこで、菩提道とは何か。すなわち、①「一切衆生に対する慈」と、②「諸々の波羅蜜多を修行すること」と、③「〔四〕摂事の随轉すること」、〔すなわち〕これが菩提道という。

ここでは菩提道の内容が説示される。しかし、これらの訳では、菩提道の内容について大きな相違が認められる。すなわち、菩提道の内容を二つと見るか、三つと見るかという点である。まず、両漢訳では、菩提道の内容は二点、①慈波羅蜜多³⁴²と、②四摂事であるとする。その一方、蔵訳では三点、①慈と、②諸波羅蜜多と、③四摂事であるとする。このように、以上の三訳本では、菩提道の内容が異なることが分かる。では、何故、「慈波羅蜜多」とする系統と、「慈と波羅蜜多」とする二種類の系統が登場したのであろうか。この問題の原因を探るべく、梵本の内容を見てみたい。梵文写本を直接に起こした内容は次の通りである。

るのか。形は一切形〔を指すのであるから〕である。それ故に、菩薩は一切形を示しても如来の形を作らない。形がない〔ので〕、論争がない。〔故に、菩薩は〕一切種類の形を示しても如来の形を乱さない。

³⁴⁰ 梵文写本：MS54a7-b1；蔵訳：D Ga49b3-5, P Wi56a7-b1, H141a6-b2；玄奘訳：T11.235a29-b4；惟浄訳：T11.819b17-21。その内容の詳細は本稿の第四章・第五節・第四項の脚注276に示している。

³⁴¹ 当該箇所はpāramitāの訳語として「波羅蜜」が用いられている。しかし、通常、玄奘を代表とする新訳では「波羅蜜多」と翻訳される。しかし、「四無量品」を始め『菩薩藏經』では、「波羅蜜」と「波羅蜜多」という訳語が共に存在している。本経典は玄奘がインドから帰国後、最初に梵語より漢訳したものである。おそらく、このような訳語の不統一は、旧訳である「波羅蜜」から、新訳である「波羅蜜多」に伝身しつつある姿ではないだろうか。

なお、本稿では便宜上、pāramitāを指示す語として、統一的に「波羅密多」を使用する。

³⁴² 玄奘訳では、「大慈波羅蜜。大悲波羅蜜。大喜波羅蜜。大捨波羅蜜」という四無量心で示している。

ya di daṃ sa rva sa tve ṣu mai trī pā ra mi tā sū dyo ga ḥ saṃ gra ha va stu ṣva nu va rta na tā a ya mu cya
te bo dhi mā rgaḥ (MS54b1)

当該箇所を整理すれば次のようになる。

tatra katamo bodhimārgaḥ yad idaṃ sarvasat[t]veṣu maitrī pāramitāsūdyogaḥ saṃgrahavastuṣv
anuvarttanatā ayam ucyate bodhimārgaḥ (MS54b1)

ここでは、菩提道の内容が yad idaṃ に続き、列挙されている。ここに登場する maitrī pāramitāsu という単語が恐らくは、漢訳と蔵訳の二系統の読みが生じた根元である。恐らくは、maitrīpāramitāsu として、格限定複合語 (Tp.) と理解したのが玄奘訳や惟浄訳である。それに対して、maitrī pāramitāsu として、maitrī の単数主格と pāramitā の複数処格と、ばらばらの単語で理解したのが蔵訳である。このように分かち書きがされていない写本を読む時の差異によって、二系統の異読が生じたと言えよう。

そして、以上の検討から、次のような問題点が浮かび上がる。すなわち、maitrīpāramitāsu と maitrī pāramitāsu とはどちらが正しいのか、菩提道の内容は三訳本中、どれが正しく伝えているのか、四無量波羅蜜多はインド由来の概念であろうか、といった問題点である。そこで、今から、これらの問題点について、別個に検討していきたい。

第三項、maitrīpāramitāsūdyogaḥ か maitrī pāramitāsūdyogaḥ か

先の検討によって、蔵訳と漢訳における読みの違いは、梵文原文をどこで分かつか、という点に基づくものであった。では、どちらが正しい読みなのであろうか。その点を明らかにするべく、いくつかの視点から検討を行う。

(一)、菩提道の内容について

まず、第一に、菩提道について焦点を当てたい。『菩薩藏經』の第十二章「大自在天授記品」で説かれる菩提道の記述を見てみたい。次の通りである。

梵文写本 (MS141b6-7) ³⁴³ :

³⁴³ 玄奘訳 (T11.321c15-20) :

何以故。若於是經受持讀誦。乃至爲他分別說者。能令三寶永不斷絕。常不遠離四無量行。常勤修習六到彼岸。恒正方便以四攝法攝化衆生。舍利子。如是大乘大菩薩藏微妙法門。當知即是諸菩薩道。

惟浄訳 (T11.885c10-12) :

即得紹隆三寶使不斷絕。得不退轉四無量心。六波羅蜜。四攝事等。饒益有情悉相應故。又舍利子。此菩薩藏正法即菩提道。

蔵訳 (D Ga204b5-7, P Wi 233a5-8, H379b5-380a1) :

【訳】それは何故か。菩薩藏法門を懇懃に聞いて、受け容れて、記憶して、読誦して、熟達して、他人たちのためにも説いて、また他人たちにも詳細に解説して、三宝を途切れさせないために、正行が生じる〔故にである〕。また、四無量と離れなくなり、六波羅蜜多に専心することとなり、四摂事によって衆生たちを摂取するために精勤となる。舍利弗よ。この〔四無量・六波羅蜜多・四摂事の〕菩薩藏法門こそが、菩提道である。

(二)、菩提道と『菩薩藏經』の品立て

以上の二点からは、菩提道の内容については、藏訳の解釈、すなわち①慈と、②諸波羅蜜多と、③四摂事の三種からなるとする解釈が正しいことが窺える。

では何故、四無量と言わず、「慈 (maitrī)」とだけしか述べられなかったのでしょうか。この点については興味深い説示が『大智度論』に説示される。次の通りである。

問曰。慈有五功德。悲喜捨何以不說有功德。答曰。如上譬喻。說一則攝三事此亦如是。若說慈則已說悲喜捨。復次慈是真無量。慈爲如王餘三隨從如人民³⁴⁵。

172

【訳】【問】慈が五功德を有することが説かれたが、なぜ悲喜捨が功德を有することを説かないのか。【答】先の譬喩のように、〔四者の中の〕一つが説かれたことは即ち、〔四者の中の他の〕三つが説かれたことである、ここでもそのようであって、慈が説かれたことは即ち、悲喜捨がすでに説かれたことである。また、慈は真の無量であり、慈は王の如きであって、他の三者は〔慈〕に随従して人民の如きである。

このように『大智度論』では、慈悲喜捨の四無量は時々慈だけが説かれて他の三者である悲喜捨が省略される場合があることを示唆している。そうであれば、慈悲喜捨を説く本「四無量品」の当該箇所でも、*maitrī pāramitāsu* という梵文原文の中の *maitrī* は、慈〔をはじめとする四無量〕あるいは慈〔悲喜捨〕と解釈することが可能であろう。

（四）、波羅蜜多と六波羅蜜多

また、蔵訳の理解を資する用例は「布施波羅蜜多品」の冒頭箇所にも見いだせる。次の通りである。

梵文写本(MS58a2)³⁴⁶：

tatra śāriputra katamaḥ pāramitāsūdyogaḥ (l) etā eva śāriputra ṣaṭpāramitāḥ yāsu pāramitāsūdyuktāḥ bodhisattvā bodhisattvacaryāṃ caranti |

【訳】舍利弗よ。そこで、諸波羅蜜多に精勤することは何か。舍利弗よ。諸波羅蜜多に精勤する菩薩たちが菩薩行を行ずるところのものは六波羅蜜多である。

ここでは、「四無量品」に登場した *pāramitāsūdyogaḥ* とは六波羅蜜多に精勤することであると説明を施している。故に、「四無量品」の原文の *maitrī pāramitāsu* は慈〔を始めとする四無量〕と、〔六〕波羅蜜多に分けられると見なせよう³⁴⁷。

答曰。如上譬喩。説一則攝三事此亦如是。若説慈則已説悲喜捨。復次慈是真無量。慈爲如王餘三隨從如人民。」（『大智度論』卷二十三, T25.211a24-b14。）

Cf. 「次論主伴。如龍樹言。慈爲如王。餘三隨從如民隨王。」（慧遠『大乘義章』卷十一, T44.689b28-9。）

³⁴⁶ 玄奘訳 (T11.238c25-29)：

爾時佛告舍利子。云何菩薩摩訶薩。爲阿耨多羅三藐三菩提故。精勤修習諸波羅蜜多行菩薩行。舍利子。菩薩摩訶薩行菩薩行者。即於如是六波羅蜜多精勤修學。是則名爲行菩薩行。

惟淨訳 (T11.822b10-12)：

復次佛告舍利子。云何名爲於波羅蜜多發勤精進。舍利子。若於六波羅蜜多勤精進者。此說是爲修菩薩行。

蔵訳 (D Ga56a5-6, P Wi63b1-2, H151b2-3)：

དེ་ལ་ཤུ་མི་བླ་མ་རྩལ་ལ་བཞུགས་པ་གང་ཞིན། ཤུ་མི་བླ་མ་རྩལ་ལ་བྱུག་པ་འདི་དག་ཉིད་ཡིན་ཏེ། ཞང་མ་རྩལ་ལ་བྱུག་པ་འདི་དག་ལ་བཞུགས་པའི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བྱུང་པ་ལྟོད་པོ།

³⁴⁷ また、同種の記述が、玄奘訳「四無量品」の末尾にも見いだせる。次のとおりである。

如是舍利子。此薄伽梵大蘊如來。爲精進行童子。廣開示此四無量已。復爲開解六波羅蜜多及諸攝法。令是童子隨順修學。(T11.238c19-21)

【訳】舍利弗よ。そのように、この薄伽梵である大蘊如來は、精進行童子のために、詳細にこの四無量を既に開示した、次は、六波羅蜜多と諸攝法を開示し、解説することであって、この童子を〔その六波羅蜜多と諸攝法に〕随順させ、修学させる。

(五)、小結

以上、いくつかの視点から漢訳系統と蔵訳系統のどちらの解釈が正しいのか分析を行った。その結果、菩提道の内容は、四無量、六波羅蜜多、四摂事の三種十四法とする蔵訳の理解が正しく、漢訳系の理解が誤りであることが明らかとなった。そして、それら漢訳系の誤りは、バラバラの単語として理解すべき梵文原文の *maitrī pāramitāsu* を *maitrīpāramitāsu* という格限定複合語として理解したことに原因があったのであろう。

したがって、梵文写本の正しい読み方は、次のようになる。

tatra katamo bodhimārgaḥ (|) yad idaṃ sarvasattveṣu maitrī (|) pāramitāsūdyogaḥ (|) saṃgrahavastuṣv anuvarttanatā (|) ayam ucyate bodhimārgaḥ (|) (MS54b1)

【訳】では、菩提道とは何か。すなわち、一切有情に対して、慈〔をはじめとする四無量心を起こすこと〕であり、諸波羅蜜多に精勤することであり、〔四〕摂事に随転することである。これが菩提道と呼ばれる。

第四項、四無量波羅蜜多はインド由来の概念であろうか

先の検討では、玄奘訳に登場する四無量波羅蜜多という概念が梵本の誤読により登場した概念である可能性が明らかとなった。では、玄奘訳に登場した四無量波羅蜜多という概念はインドに由来するものであろうか。この点について、大乘仏教以外の資料や、大乘経論の資料を用いて、検討したい。

(一)、大乘経論以外の資料

大乘経論以外の資料として、まずパーリ仏教の資料を見てみたい。パーリ仏教では、十波羅蜜 (*dasa pāramī*) ³⁴⁸が説かれる。例えば、ジャーカタの因縁物語には、「慈波羅蜜」(*mettā-pāramī*) と、「捨波羅蜜」(*upekkhā-pāramī*) が、その十波羅蜜中の第九、第十波羅蜜として説かれている³⁴⁹。故に、南伝仏教では、慈と捨が、それぞれに波羅蜜と称することが分かる。しかしながら、この十波羅蜜中の「慈波羅蜜」と「捨波羅蜜」はそれぞれ、仏陀の有する法（性質）を表現したものであり、四つそろっていないことから、四無量心とは直接的に関係しないものであると見なせよう。

次に、北伝の大乘経論以外の資料を見てみたい。例えば、『大毘婆沙論』中では四波羅蜜多説（布施・持戒・精進・智慧）と六波羅蜜多説（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）が登場し、また別説として、禪定波羅蜜多の代わりに聞波羅蜜多とする説も登場する（T27.892a26-c5）³⁵⁰。しかしながら、

³⁴⁸ 古山健一 [1997, p. 97] によれば、ここでの *pāramī* は、一般に *pāramitā* と同義として扱われている。

³⁴⁹ 『南傳大藏經』第二十八卷, p. 48-50。

³⁵⁰ また、『増一阿含經』（T2.645b1-3）にも六波羅蜜多が登場するが、おそらくこれも、特殊な波羅蜜多を指すのではないだろう。『増一阿含經』「序品第一」には次のようにある。

人尊説六度無極 布施持戒忍精進 禪智慧力如月初 速度無極觀諸法 (T2.550a13-14)
この文言に基づけば、ここで述べられているのは一般的な六波羅蜜多であったと見なせよう。

また、印順 [1981, p. 141] は、一般的な六波羅蜜多を主張していた部派として、法蔵部 (*Dharmaguptāḥ*)、説出世部 (*Lokottaravādināḥ*)、根本説一切有部等を挙げている。

何れにおいても四無量心を波羅蜜多として数えることはない。このように、北伝として伝わる、有部の『大毘婆沙論』に基づけば、四無量心（慈悲喜捨）の何れをも含むような波羅蜜多説は見いだせない。

以上、大乘経論以外に見られる波羅蜜多説を検討した。その結果、いずれにおいても四無量波羅蜜多という概念が見いだせなかったことが確認できた。

（二）、大乘経論の資料

次に大乘経論にみられる四無量波羅蜜多に近い概念を検討していく。大乘経論の内、四無量心である慈・悲・喜・捨を波羅蜜多と称する資料として、『菩薩藏經』の玄奘訳と惟浄訳と、『大般若波羅蜜多經』とが挙げられる³⁵¹。では、これらに見られる四無量波羅蜜多はインド由来の概念なのであるうか。検討してみたい。

³⁵¹ この他にも、四無量波羅蜜多ではなく、「大悲波羅蜜」という語が単独で認められる資料として、後魏の菩提流支（?-527）訳『弥勒菩薩所問經論』（漢訳のみが存する）や、金剛智（669-741）訳『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』（漢訳のみが存する）が挙げられる。しかし何れも四無量波羅蜜多が意識したものであるとは言い難い。

例えば、『弥勒菩薩所問經論』には、「大悲波羅蜜」という語が説かれる箇所は、論者が大海慧菩薩經を引用する箇所である。それは次の通りである。

而聲聞等先不修集慈悲方便。是故無有利益他行。漸斷煩惱後得羅漢。以是義故。大海慧菩薩經中說。菩薩先已修集善根相應煩惱。所謂大悲波羅蜜等。此諸善法名為煩惱。非餘煩惱。依彼煩惱為化衆生住於世間。（T26.238c28-239a4）

ここで、論者が大海慧菩薩經を引用しているのは、大海慧菩薩經の「善根相應煩惱」を説く箇所であろう。また、その「善根相應煩惱」の内容の詳細は、『宝性論』「一切衆生有如來藏品」において「大海慧菩薩經」を引用する箇所（T31.833c9-834b24）の他、曇無讖（385-433）訳「海慧菩薩品」（『大方等大集經』，T13.68a, b）と、惟浄訳『仏説海意菩薩所問浄印法門經』（T13.511b, c）にも見られる（宇井伯寿〔1959, p. 549〕と、中村元〔1967, p. 92, fn. 3〕を参照）。『宝性論』「一切衆生有如來藏品」においては、「大海慧菩薩經」が引用される箇所に、順次に現われる「大悲力」、「常不捨離諸波羅蜜結使」、および「大悲」、「我應修行諸波羅蜜」という事例や、「海慧菩薩品」に順次、説かれる「為衆生修集大悲」、「樂行惠施。具足淨戒。莊嚴忍辱。勤行精進。莊嚴禪支。修集智慧」という修集大悲と六波羅蜜の事例、また『仏説海意菩薩所問浄印法門經』に説かれる「常不棄捨大悲之鎧」、「永不棄捨波羅蜜多勝行」という事例などから、『弥勒菩薩所問經論』に引用され、「大海慧菩薩經」に説かれている菩薩が先に已に修集した「善根相應煩惱」という事例は、大悲と諸（六）波羅蜜だと推測できよう。従って、『弥勒菩薩所問經論』にあるこの「大悲波羅蜜」という語は、「大悲、〔諸〕波羅蜜」、という二つの内容を指しているのであろう。すなわち、それは、「善根相應煩惱」の内容中の「大悲」と「諸（六）波羅蜜」として、説かれていることが推測される。

また、『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』では、「大悲波羅蜜」という語が現われるのは、その第十「一切如來内護摩金剛軌儀品」の冒頭に説かれている偈文中の内容である。それは次の通りである。

金剛手薩埵 此名五種智 如來寂災密 為諸菩薩説 大悲波羅蜜 起四無量心 印明同四佛 亦名佛息災（T18.264b16-19）

『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』では、「四波羅蜜十六大菩薩、四攝、八大供養」のことが説かれている。そして、その中、「四波羅蜜十六大菩薩」は、「四波羅蜜菩薩」（T18.255a18）とも言い、東西南北の各四菩薩を指している。また、権田氏の、その偈文の「大悲波羅蜜 起四無量心」に対する、「大悲波羅蜜は 四無量の心を起す」という訳、および「大悲波羅蜜 四波羅蜜を云ふ」という註から（「金剛手薩埵 此れを五種の智 如來寂災密と名く 諸の菩薩の為に説けり。大悲波羅蜜とは 四無量の心を起す 印と明とは四佛に同じ 亦佛息災と名く。（*大悲波羅蜜：四波羅蜜を云ふ）」（権田雷斧〔1994, p. 43〕）、ここの「大悲波羅蜜」は、四波羅蜜菩薩を指していること、すなわち、「大悲〔である四〕波羅蜜〔菩薩〕」、という意味でしていることが分かるであろう。

1. 『菩薩藏經』について

まず、本経である『菩薩藏經』から検討したい。玄奘訳『菩薩藏經』には、四無量心である慈・悲・喜・捨を波羅蜜多と称するのは二十一の箇所がある。その二十一箇所中、十七箇所は「四無量品」にあり、残る四箇所は「持戒波羅蜜多品」にある。それらの箇所に番号を付けて次の三表で示す。

『菩薩藏經』「四無量心」中の四無量波羅蜜多 (表1a)				
	玄奘訳	惟浄訳	藏訳	梵文写本
1	云何名爲菩薩道耶。所謂菩薩摩訶薩。於諸有情。精勤修習四無量心。何等爲四。 所謂①大慈波羅蜜。②大悲波羅蜜。③大喜波羅蜜。④大捨波羅蜜。又勤精進於諸攝法隨順修學。童子。若有菩薩如是修行。是名開菩薩道。 復次童子。云何菩薩摩訶薩。於諸衆生精勤修學。⑤大慈無量波羅蜜。 (T11.235b5-12)	此中何名爲菩提道。謂於一切衆生起慈波羅蜜多。隨轉攝法。此即名爲菩提道。 復何名爲一切衆生慈波羅蜜多 (T11.819b22-24)	དྲུག་ལྟུང་ལྟུང་གི་ལམ་གང་ ཞེན་ཤིང་ལྟུང་ལྟུང་ལྟུང་ ཐམས་ཅད་ལ་བྱམས་པ་ དང་ཁ་ཚོལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་རྣམས་ ལ་བ་ཚུན་པ་དང་ཁྱེད་ལ་ འདྲེས་པ་རྣམས་ཀྱི་རྒྱུ་ ལྟ་འཇགས་པ་ཟླ་དེ་ནི། བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་ཞེས་བྱའོ། དེ་ལ་མཉམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ ལ་བྱམས་པ་གང་ཞེན། < D Ga49b5-6, P Wi56b1-3, H141b1-4>	tatra katamo bodhimārgaḥ () yad idaṃ sarvasattvceṣu mairī () pāramitāsūdyogaḥ () saṃgrahavastuṣv anuvarttanatā () ayam ucyate bodhimārgaḥ () tatra katamā sarvasattvceṣu mairī () (MS54b1) 【訳】では、菩提道とは何か。すなわち、一切有情に対して、慈〔をはじめめる四無量心を起こすこと〕であり、諸波羅蜜多に精勤することであり、〔四〕摂事に随転することである。これが菩提道と呼ばれる。 その中、すべての衆生に対する慈とは何か。
2	如是無量不可思議大慈之相。吾今略説。童子。是名菩薩摩訶薩⑥大慈無量波羅蜜。菩薩摩訶薩。由成就是大慈無量故。觀諸衆生常懷慈善。勤求正法無有疲倦。(T11.236a14-17)	無し	無し	無し
3	童子當知。衆生緣慈。初發大心菩薩所得。法緣之慈。趣向聖行菩薩所得。無緣之慈。證無生忍菩薩所得。 童子。是名菩薩摩訶薩⑦大慈無量波羅蜜。 若菩薩摩訶薩。安住⑧大慈波羅蜜故。則於一切衆生慈心遍滿。(T11.236a17-23)	又復當知。初發心菩薩行衆生緣慈。修行位菩薩行法緣慈。得忍菩薩行無緣慈。 太子。如是所説皆是菩薩摩訶薩行大慈心。若諸菩薩住慈心者。即能爲諸衆生行廣大慈 (T11.820a15-20)	ཡང་གཞིན་ན། བྱང་ཆུབ་ མཉམས་དཔའ་མཉམས་དང་པོ་ བསྐྱེད་པ་རྣམས་ཀྱི་བྱམས་ པ་ནི། མཉམས་ཅན་ལ་ དམིགས་པ་ཤོ། བྱང་ཆུབ་ མཉམས་དཔའ་ལྟུང་པ་ལ་ ཐམས་ཅད་ལ་བྱམས་པ་ ལྟུང་པ་རྣམས་ཀྱི་བྱམས་ པ་ནི། ཚོས་ལ་དམིགས་ པ་ཤོ། བྱང་ཆུབ་མཉམས་ དཔའ་བཟོད་པ་རབ་ཏུ་ཐོབ་ པ་རྣམས་ཀྱི་བྱམས་པ་ནི། གཞིན་ན། འདི་ནི། བྱང་ ཆུབ་མཉམས་དཔའ་མཉམས་ དཔའ་ཚེན་པོ་རྣམས་ཀྱི་བྱམས་ པ་ཞེས་བྱ་གྱུར་བྱང་ཆུབ་མཉམས་ དཔའ་བྱམས་པ་དེ་ལ་ རབ་ཏུ་གཞན་པ་མཉམས་ ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་བྱམས་པ་ ལྟུང་པ་རྒྱུད་དོ། < D Ga51a5-6, P Wi57b8-58a3, H143b6-144a2>	api ca kumāra sattvārambaṇā mairī prathamacittotpādikānām bodhisattvānām () dharmārambaṇā mairī caryāpratipannānām bodhisattvanāmanārambaṇā mairī () kṣāntipratilabdhanām bodhisattvānām () iyaṃ kumārocyate bodhisattvānām mahāsattvānām mairī () yasyām mairīyaṃ pratiṣṭhito bodhisattvaḥ sarvasattvaṃ mairīya spharati (MS55a5-6) 【訳】また、童子よ。初発心の菩薩たちの慈は衆生を所縁とするものである。〔菩薩〕行を実践している菩薩たちの慈は法を所縁とするものである。〔無生法〕忍を得た菩薩たちの慈は所縁がないものである。童子よ。これが菩薩摩訶薩たちの慈と呼ばれる。以上の慈に安住する菩薩は慈によって、一切の衆生を遍満する。）
4	復次精進行童子。云何名爲菩薩摩訶薩⑨大悲無量波羅蜜。 (T11.236a24-25)	復次大蘊如來。告精進行太子言。云何名爲菩薩大悲之心。 (T11.820b9-10)	དྲུག་ལྟུང་ལྟུང་གི་ལམ་གང་ ཞེན་ཤིང་ལྟུང་ལྟུང་ལྟུང་ ཐམས་ཅད་ལ་བྱམས་པ་ དང་ཁ་ཚོལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་རྣམས་ ལ་བ་ཚུན་པ་དང་ཁྱེད་ལ་ འདྲེས་པ་རྣམས་ཀྱི་རྒྱུ་ ལྟ་འཇགས་པ་ཟླ་དེ་ནི། བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་ཞེས་བྱའོ། དེ་ལ་མཉམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ ལ་བྱམས་པ་གང་ཞེན། < D Ga51a6-7, P Wi58a3, H144a2-3>	tatra kumāra katamā bodhisattvasya mahākaraṇā () (MS55a5) 【訳】童子よ。その中、菩薩の <u>大悲</u> とは何か。

『菩薩藏經』持戒波羅蜜多品		中の四無量波羅蜜多（表2）
玄奘訳	惟浄訳	蔵訳
復次舍利子。菩薩摩訶薩。行尸羅波羅蜜多時。復有十種清淨尸羅。汝今當知。云何爲十。	復次舍利子。菩薩摩訶薩。復有十種清淨圓滿戒行之相。何等爲十。一者菩薩堅持禁戒。於佛信解不生退屈。	<p> 𑖀𑖦𑖡𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴</p>

このうち、惟浄訳にも二例、慈波羅蜜多が確認できる。その中、第一例（表 1 a-1）は、先の章で取り扱った「四無量品」の問題箇所であり、惟浄の誤訳と言えよう³⁵²。また、第二例（表 1 a-1）は第一例を踏襲して加説されたものとして見て問題なかろう。そして、そうであれば、梵漢蔵四本の中、四無量心を波羅蜜多と称するのは、玄奘訳のみであると言えよう。

2. 玄奘訳『大般若波羅蜜多經』について

次に、玄奘訳『大般若波羅蜜多經』の記述を検討していきたい。玄奘訳『大般若波羅蜜多經』第297卷「初分波羅蜜多品第三十八之一」にも、四無量心を波羅蜜多と称する箇所がある。また、山田龍城[1977]「般若經五会諸本内容比較表」³⁵³によると、当該箇所には、その内容と対応する二種の藏訳がある。それは、藏訳『二万五千頌般若經』の第29品と、藏訳『十万頌般若經』の第30品である。それらを対照すれば次の通りである。

³⁵² 惟浄訳には、「慈波羅蜜多」という語が二回にあるが、その原因としては、惟浄が玄奘訳につられた可能があって、梵文原文の *maitrī pāramitāsu* に対する誤読によるという理由を、既に前文において指摘している。

353 山田龍城「1977」に付録として付加された表である。

『大般若波羅蜜多經』「初分波羅蜜多品第三十八之一」中の四無量波羅蜜多		
玄奘訳	藏訳二万五千頌般若経	藏訳十万頌般若経
<p>世尊。如是般若波羅蜜多是佛十力波羅蜜多。佛言。如是達一切法難屈伏故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無所畏波羅蜜多。佛言。如是得道相智無退沒故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無礙解波羅蜜多。佛言。如是得一切相智無滯礙故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大慈波羅蜜多</u>。佛言。如是安樂一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大悲波羅蜜多</u>。佛言。如是利益一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大喜波羅蜜多</u>。佛言。如是不捨一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大捨波羅蜜多</u>。佛言。如是於諸有情心平等故。世尊。如是般若波羅蜜多是十八佛不共法波羅蜜多。佛言。如是超過一切聲聞獨覺法故。</p> <p>(T6.509b7-21) ³⁵⁴</p>	<p>「世尊。如是般若波羅蜜多是佛十力波羅蜜多。佛言。如是達一切法難屈伏故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無所畏波羅蜜多。佛言。如是得道相智無退沒故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無礙解波羅蜜多。佛言。如是得一切相智無滯礙故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大慈波羅蜜多</u>。佛言。如是安樂一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大悲波羅蜜多</u>。佛言。如是利益一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大喜波羅蜜多</u>。佛言。如是不捨一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大捨波羅蜜多</u>。佛言。如是於諸有情心平等故。世尊。如是般若波羅蜜多是十八佛不共法波羅蜜多。佛言。如是超過一切聲聞獨覺法故。」</p> <p>(P Thi8a8-b4)</p>	<p>「世尊。如是般若波羅蜜多是佛十力波羅蜜多。佛言。如是達一切法難屈伏故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無所畏波羅蜜多。佛言。如是得道相智無退沒故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無礙解波羅蜜多。佛言。如是得一切相智無滯礙故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大慈波羅蜜多</u>。佛言。如是安樂一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大悲波羅蜜多</u>。佛言。如是利益一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大喜波羅蜜多</u>。佛言。如是不捨一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是<u>大捨波羅蜜多</u>。佛言。如是於諸有情心平等故。世尊。如是般若波羅蜜多是十八佛不共法波羅蜜多。佛言。如是超過一切聲聞獨覺法故。」</p> <p>(P Gi97b7-98a5)</p>

上表中、玄奘訳には、下線部で示したように、四無量波羅蜜多(大慈波羅蜜多・大悲波羅蜜多・大喜波羅蜜多・大捨波羅蜜多)に関する記述が存在する。しかし、近似する内容を有するはずの、藏訳『二万五千頌般若経』の第29品では四無量波羅蜜多に相当する内容が存在しない。その一方、藏訳『十万頌般若経』の第30品では、位置が少しずれるものの、「大悲波羅蜜多 (ཕྱིང་རྩེ་ཆེན་པོའི་པོ་པོ་ལུ་ཕྱིན་པ་)」の語が見いだせる³⁵⁵。しかし、当該箇所は、あくまで仏の十八不共法を意識した列挙である。そして、このような列挙は、藤田宏達[1975]によって、「十力・四無畏・〔四〕無礙解・大悲³⁵⁶・十八不共法」を

³⁵⁴ また、『大般若波羅蜜多經』第437巻の「第二分不可得品第四十二」の末尾に、それと同じ内容もある。即ち、それは次のようなものである。「世尊。如是般若波羅蜜多是佛十力波羅蜜多。佛言如是。達一切法難屈伏故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無所畏波羅蜜多。佛言如是。得道相智無退沒故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無礙解波羅蜜多。佛言如是。得一切智一切相智無罣礙故。世尊。如是般若波羅蜜多是大慈悲喜捨波羅蜜多。佛言如是。於諸有情不棄捨故。世尊。如是般若波羅蜜多是十八佛不共法波羅蜜多。佛言如是。超諸聲聞獨覺法故。」(T7.203c17-27) このことから、「初分波羅蜜多品第三十八之一」にある「世尊。如是般若波羅蜜多是大慈波羅蜜多。佛言。如是安樂一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大悲波羅蜜多。佛言。如是利益一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大喜波羅蜜多。佛言。如是不捨一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大捨波羅蜜多。佛言。如是於諸有情心平等故」という内容は、「第二分不可得品第四十二」では、「世尊。如是般若波羅蜜多是大慈悲喜捨波羅蜜多。佛言如是。於諸有情不棄捨故」に簡略されたことが分かる。また、山田龍城[1977]「般若経五会諸本内容比較表」によれば、ここの「不可得品」は、梵本二万五千頌の「3 Sarvajñātādhikāracaryaviśeṣa p.」に属するが、『Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā III』(木村高尉[1985, pp.165-185]を検討すると、「不可得品」にあり、上に引用している経文の内容は、梵本二万五千頌にはそれと対応する内容は無いことが分かる。また、玄奘訳「初分波羅蜜多品第三十八之一」には、「世尊。如是般若波羅蜜多是四無量波羅蜜多」(T6.509a15-16)という内容があるが、藏訳十万頌と二万五千頌にはその内容がない。

³⁵⁵ ラサ版では、北京版の、「「世尊。如是般若波羅蜜多是佛十力波羅蜜多。佛言如是。達一切法難屈伏故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無所畏波羅蜜多。佛言如是。得道相智無退沒故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無礙解波羅蜜多。佛言如是。得一切智一切相智無罣礙故。世尊。如是般若波羅蜜多是大慈悲喜捨波羅蜜多。佛言如是。於諸有情不棄捨故。世尊。如是般若波羅蜜多是十八佛不共法波羅蜜多。佛言如是。超諸聲聞獨覺法故。」(T7.203c17-27) このことから、「初分波羅蜜多品第三十八之一」にある「世尊。如是般若波羅蜜多是大慈波羅蜜多。佛言。如是安樂一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大悲波羅蜜多。佛言。如是利益一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大喜波羅蜜多。佛言。如是不捨一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大捨波羅蜜多。佛言。如是於諸有情心平等故」という内容は、「第二分不可得品第四十二」では、「世尊。如是般若波羅蜜多是大慈悲喜捨波羅蜜多。佛言如是。於諸有情不棄捨故」に簡略されたことが分かる。また、山田龍城[1977]「般若経五会諸本内容比較表」によれば、ここの「不可得品」は、梵本二万五千頌の「3 Sarvajñātādhikāracaryaviśeṣa p.」に属するが、『Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā III』(木村高尉[1985, pp.165-185]を検討すると、「不可得品」にあり、上に引用している経文の内容は、梵本二万五千頌にはそれと対応する内容は無いことが分かる。また、玄奘訳「初分波羅蜜多品第三十八之一」には、「世尊。如是般若波羅蜜多是四無量波羅蜜多」(T6.509a15-16)という内容があるが、藏訳十万頌と二万五千頌にはその内容がない。

³⁵⁶ また、大悲という語は『菩薩藏經』「如來不思議品」(梵文写本(MS20b2), 玄奘訳(T11.208b22), 法護等訳(T11.795a26), 藏訳(P Dsi315a2, H53b4))では、如來の十不思議中の第九不思議として説かれている。

また、大悲であるが、雲井昭善[1975, p. 77] は次のように述べている。
「大乘の諸經典において謳歌された仏教の思想は、仏の大慈悲であり、如來の大悲であった。」

併説して列挙することこそが、『大品般若経』の特徴であるとの指摘³⁵⁷とも対応する。ゆえに、恐らく当該箇所は十八不共仏法と関連する大悲が意図されており、四無量心のうちの悲無量が意図されたものではないであろう³⁵⁸。

以上のことから、玄奘訳に登場する四無量波羅蜜多は関連する蔵訳と対応せず、さらには、思想的にも不適切であり、玄奘訳の独自性である可能性が窺える。

(三)、小結

以上、本章では、四無量波羅蜜多という概念の調査を行った。その結果、四無量波羅蜜多という概念は玄奘訳にのみ登場する概念であり、何れの資料においても対応する蔵訳等より回収することはできなかった。このことから、四無量波羅蜜多という概念は玄奘訳により増設された概念である可能性が見いだせた。

第五項、小結

以上、玄奘訳『菩薩藏経』の「四無量品」に登場する四無量波羅蜜多という概念について検討を行った。その結果、玄奘訳『菩薩藏経』に登場する四無量波羅蜜多という概念は、梵文中の *maitrī pāramitāsu* を、*maitrīpāramitāsu* という格限定複合語として誤読に基づくものであることが明らかとなった。また、四無量波羅蜜多という概念は玄奘訳『菩薩藏経』と、『大般若経』にしか見出すことができなかった。さらに、いずれの対応する蔵訳等においても四無量波羅蜜多という概念は存在しなかった。このことから、玄奘訳に登場する四無量波羅蜜多という概念は、『菩薩藏経』の当該箇所での誤読より派生して登場した概念であると言えるのではないだろうか。すなわち、四無量波羅蜜多という概念は、インドに存在しない概念ではないだろうか。

そして、すでに述べられているように、このような玄奘の誤読の背景には、恐らく、『菩薩藏経』が玄奘三蔵が一番最初に梵語より漢訳した作品であったこともあろう。しかし、幾分かの不十分な点があったとしても玄奘訳の学術的価値の高さは時代を経ても変わらないであろう。

³⁵⁷ 藤田宏達 [1975, p. 124] は、次のように述べている。

「『大品般若経』になると、「大慈大悲」は、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法など並説されることがすくぶる多く、仏の徳の代表的なものとなすことが、いっそう明瞭になる。」

³⁵⁸ 十八不共仏法の内容は大乗のものと小乗のものとで大きく異なる。大乗では、「諸仏身無失・口無失・念無失・無異想・無不定心・無不知己捨心・欲無減・精進無減・念無減・慧無減・解脱無減・解脱知見無減・一切身業随智慧行・一切口業随智慧行・一切意業随智慧行・智慧知見過去世無閼無障・智慧知見未来世無閼無障・智慧知見現在世無閼無障」が挙げられる。一方、小乗では「十力・四無畏・三念住・大悲」が挙げられる。ただ、特殊な形のものとして、『文殊師利問経』『囑累品』には、四無量心を含めた「十力・四無畏・大慈大悲大喜大捨」(T14.505a28-29) という形のものも存在する (Cf. 望月信亨 [1949, p. 2362, ジュウb-c])。

第四節、惟浄訳、法護訳の特徴と不適切な点

第一項、惟浄訳の特徴及び不適切な点

『菩薩藏經』の宋訳本、『仏説大乘菩薩藏正法經』は、惟浄と法護との共訳である。『新脩大正大藏經』では各品の冒頭部にどちらが翻訳しているのが明記されている。その記述に基づけば、惟浄によって翻訳されたのは、「無怖夜叉品第二」、「菩薩觀察品第三之一」、「長者賢護品第一之四」、「如來不思議品第四之四」、「如來不思議品第四之五」、「如來不思議品第四之六」、「如來不思議品之余」、「慈悲喜捨品第五」、「布施波羅蜜多品第六」、「持戒波羅蜜多品第七之一」である。それらの以外は、法護によって翻訳されたのである。量から見れば、惟浄訳は全經の四分の一にも及ばない。

先の検討では玄奘訳を分析し、結果、二系統の加筆があることが確認された。一方で、惟浄訳に関しては、梵文写本との比較検討により、加筆が極めて少なく、原典を忠実に翻訳したものであることが確認できる。ただ、梵文写本と合致しない点が無いわけではない。例えば第五「慈悲喜捨品」では次のように一部対応しない箇所が見出される。次の通りである。

惟浄訳 (T11.819a29-b1) :

舍利子。以是緣故。當知住信菩薩是大法器。

対応する梵文写本 (MS53b7-54a2) ³⁵⁹ :

tad anena te śāriputra paryāyeṇaivaṃ veditavyaṃ evaṃ (|) śraddhāpratiṣṭhitasya bodhisattvasya buddhā bhagavanto bhājanam iti viditvā (|) bodhisattvapīṭakasya dharmaparyāyasya bhājanam iti viditvā (|) buddhadharmāṇāṃ bhājanam iti viditvopasaṃkramya bodhisattvamārgaṃ ³⁶⁰ saṃprakāśayanti || ||

【訳】 故に、舍利弗よ。その法門の差別によって、汝にとって、次のように、知られるべきである。諸仏世尊はこのように浄信を確立とした菩薩の器であると知り、菩薩藏という法門の器であると知り、諸仏の法の器であると知って、〔彼菩薩に〕近づいて、菩薩道を説く。

ここでは、惟浄訳では、梵文にある śāriputra, anena paryāyeṇa, veditavyaṃ, śraddhāpratiṣṭhitasya bodhisattvasya, bhājanam 等の幾つかの単語と対応する語が見いだせない。すなわち、極めて一部分ではあるものの、省略箇所と言っても良いであろう。しかし、この点の他には当該箇所で見られたような省略は認められない。つまり、惟浄訳は原典に忠実な翻訳であると言えよう。

³⁵⁹ 藏訳 (D Ga49a2-3, P Wi55b5-6, H140a7-b2) :

དེ་ལྟ་བུ་ནི། ལྷན་གྲངས་འདིས་ཀྱང་དེ་ལྟར་དད་པ་ལ་རབ་ཏུ་གནས་པའི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནི། མངས་བྱས་བཅོམ་ཐུན་འདས་ནམས་ཀྱི་ཕྱོད་དུ་རིག། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཕྱོད་ཀྱི་ཚས་ཀྱི་ནམ་གྲངས་ཀྱི་ཕྱོད་དུ་རིག། མངས་བྱས་ཀྱི་ཚས་ནམས་ཀྱི་ཕྱོད་དུ་རིག་ནས་དཔའི་བྱང་དུ་གཤེགས་ཏེ་བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་ཡང་དག་པར་རབ་ཏུ་ལྷན་པ་དེ་ལྟ་བུ་ལས་བྱུང་། (【訳】 舍利子よ。その故に、法の門のみならず、覚者である婆伽梵たちはこのように信において住む菩薩の器を知り、菩薩の藏の法の門の器を知り、仏の諸法の器を知ってから、彼の近くに行かれて菩提の道を正しく教える。そのように、知られるべきである。)

玄奘訳 (T11.235a9-12) :

舍利子。汝今當知。如是法門差別之相。所謂菩薩摩訶薩。安住淨信。佛薄伽梵。知是菩薩爲菩薩藏法門之器。知是諸佛正法器已。躬往其所。開菩薩道。

³⁶⁰ 校訂では、bodhi{sattva(del.)}mārgaṃとある。

第二項、法護訳の特徴及び不適切な点

先の検討では、惟浄の翻訳上の特徴や、不適切な点について簡単に述べた。そこで、次に法護訳の特徴と適切ではない点についても検討してみたい。

中印度の出身者である法護の翻訳は、加筆することこそ少ないものの、省略的な傾向や、原典に忠実ではないと思われる箇所が見出される。そこで、今は、そのような法護の翻訳上の不適切な箇所についていくつか例を挙げて検討してみたい³⁶¹。

まず、第一「家主品」では、世尊が賢護等の五百在家者に「十の加害からの解脱を欲するか」と尋ねる箇所がある。当該箇所を梵文写本と比較してみれば、法護訳によって一部が省略されて翻訳されていることが見て取れる。次の通りである。

法護訳 (T11.785a10-12) :

又復世間已作現作及彼當作。愛非愛中起無義利。如是十種諸損害事。汝等各欲求解脫邪。

対応する梵文写本 (MS6b5-7) ³⁶² :

punar aparaṃ gr̥hapatayo daśabhya āghātavastubhyo yūyaṃ muktukāmāḥ (I) katamebhyo daśabhyo (I) yad idam ātmano me (‘)narthāḥ kṛta ity utpadyate cetasa āghātāḥ | anartha karotīty utpadyate cetasa āghātāḥ | anartha kariṣyatīty utpadyate cetasa ā(6)ghātāḥ | priyasya me anarthāḥ kṛta ity utpadyate cetasa āghātāḥ | anarthāḥ karotīty utpadyate cetasa āghātāḥ | priyasya me (‘)nartham kariṣyatīty utpadyate cetasa āghātāḥ | apriyasya me (‘)rthāḥ³⁶³ kṛta ity utpadyate cetasa āghātāḥ | apriyasya me artham karotīty utpadyate cetasa āghātāḥ | apriyasya me (‘)rtham kariṣyatīty utpadya(7)te cetasa āghātāḥ | anarthapradoṣa eva daśamaḥ | ebhyo gr̥hapatayo daśabhya āghātavastubhyo yūyaṃ muktukāmāḥ ||

【訳】在家者たちよ。その他、汝らは十の加害事から解脱を欲しますか。十は何か。すなわち、私の自己に対して、不利益を作ったので、心から加害が生じられ、不利益を作るので、心から加害が生じられ、不利益を作りたいので、心から加害生じられる。私の親しい者に対して不利益を作ったので、心から加害が生じられ、私の親しい者に対して不利益を作るので、心から加害が生じられる。私の親しい者に対して不利益を作りたいので、心から加害が生じられる。私の敵に対して利益を作ったので、心から加害が生じられ、私の敵に対して利益を作るので、心から加害が

³⁶¹ 網羅的に取り扱うと冗長になるので、今は特徴的な箇所を中心に紹介を行う。

³⁶² 蔵訳 (D Kha263b6-264a3, P Dsi290a1-5, H15b4-16a3) :

[illegible]

玄奘訳 (T11.198c18-25) :

復次諸長者。世有十惱害事。所謂曾於我身作不饒益。今於我身作不饒益。當於我身作不饒益。於我曾愛作不饒益。於我今愛作不饒益。於我當愛作不饒益。我曾不愛而作饒益。我今不愛而作饒益。我當不愛而作饒益。又於一切不饒益過心生惱害。如是十種惱害之事。汝等今者欲解脫不。

363 校訂では、me 'narthahとある。

生じられ、私の敵に対して利益を作りたいので、心から加害が生じられる。第十は〔私の敵に対して〕正に不利益を憎悪するので、〔心から加害が生じられる。〕在家者たちよ。汝らはこれらの加害事から解脱を欲しますか。

法護訳は、梵文の *daśabya āghātavastubhyo* より *anarthapradoṣa eva daśamaḥ* | までの内容を「已作現作及彼當作。愛非愛中起無義利。」という内容で省略して翻訳している。また、梵文中に二回に登場する「*gr̥hapatayo*」という単語も、翻訳では省略している。

次に第七品では妻が苦の根本であると説く箇所³⁶⁴がある。ここではある一定の傾向のもと、法護の翻訳は原文と相違する。まず、梵文写本では、「*taptāyopalāstrtā bhūmir bhāryā* (I) (【訳】妻は焼いている鉄の花弁が飛び散っている大地である。)」とある点が、対応する法護訳では、「熱鐵地上」(T11.839a3)という訳語が与えられるのみである。つまり、原文に有った *-palāstrtā* と *bhāryā* という単語を法護は省略しているのである。また同品では、梵文写本の「*mithyākarmaprabhāpinī bhāryā* (I) (【訳】妻は邪業を顕現させる者である。)」という内容を、法護は「悉令是人墮落邪道」(T11.839a3-4)として翻訳する。これらを対照してみれば、対応する単語は「邪 (*mithyā*)」という一つの単語だけである。つまり、ここでは、法護が意味を汲み取り、内容的な翻訳が施されていると言えよう。また、梵文写本には「*duḥkhamūlā bhāryā* (I) (【訳】妻は苦の根本である。)」とあるが、それと対応する法護訳では、「諸苦所因。以貪染法爲諸根本。」(T11.838c29-839a1)と翻訳する。さらに、梵文写本には、「*amitrāmūlā bhāryā* (I) (【訳】妻は敵対の根本である。)」という内容があるが、法護訳にはそれと相当する内容は無い。以上、第七品の法護訳を検討してみたが、ここでは一貫して、妻という性質が他のものに言い換えられたり、翻訳を省略される。ゆえに、本来は妻の悪点を述べる箇所であったのが、煩惱の悪点を述べる文章へと思想的変化が加えられているとも見て取れよう。

次に、第八「忍辱波羅蜜多品」の「忍辱とは何か」を説く際に³⁶⁵、法護は次のように翻訳する。

梵文写本 (MS84a4-5) ³⁶⁶

³⁶⁴ 梵文写本：MS78a1-2；藏訳：D Ga90b6-91a1, P Wi101b2-4, H204a4-7；玄奘訳：T11.258c2-7；法護訳：T11.838c29-839a4。文章の詳細は、本稿の第七章・第三節・第二項に示している。

³⁶⁵ 梵文写本：MS83b6-84a6；藏訳：D Ga99b4-100b2, P Wi111b2-112b2, H217a6-218b4；玄奘訳：T11.263b10-c16；法護等訳：T11.842c24-843a20。

藏訳 (D Ga100a5-b2, P Wi112a5-b2, H218a5-b3)：

རང་གི་ཡོན་ཏན་ཡོངས་སུ་རྒྱུགས་པས་དེ་མ་བཟུགས་པ་ལ་ཁོང་ཁོ་བཟུགས་པ་ལ་ཇེས་སུ་ཆགས་པར་མི་ཐེད་དོ། ། དུལ་ཞིང་ནི་བའི་ཕྱིར་རྟོན་པས་དགའ་པར་མི་འགྱུར། མི་རྟོན་པས་བྱམས་པར་མི་འགྱུར། རབ་ཏུ་བརྟགས་པའི་སྒོ་རྒྱ་ཆེ་བའི་ཕྱིར་གྲགས་པས་ངོ་མཚར་དུ་མི་འཛིན། མ་གྲགས་པས་འཁྲུག་པར་མི་འགྱུར། མི་གཡོ་བར་རབ་ཏུ་གནས་པའི་ཕྱིར་སྒྲིད་པས་འདྲད་པར་མི་འགྱུར། བརྟོད་པས་ཁེངས་པར་མི་འགྱུར། མཉམས་ཅན་ལ་སྒྲུབ་པའི་ཕྱིར་སྐྱུག་བཟུལ་གྱིས་ཡོངས་སུ་མི་སྐྱོ། ། འདུས་བྱས་ཀྱི་བདེ་བ་མི་རྟག་པའི་ཕྱིར་བདེ་བ་ལ་དགའ་བ་མེད། མིད་པའི་འགྲོ་བར་སྐྱེ་བ་ཐམས་ཅད་ལ་མི་གནས་པས་འཛིག་རྟེན་གྱི་ཆས་ཀྱིས་མི་གོས། ཡ་ཙམ་ལ་མི་གནོད་པས་བདག་ལ་གནོད་པ་བཟོད། བྱང་རྩལ་གྱི་ཡན་ལག་གི་ཆོགས་ཡོངས་སུ་རྒྱུགས་པས་ཡན་ལག་དང་། ཉིང་ལག་དང་། མག་བཅད་ཀྱང་བཟོད་པས་ཆུས་ཀྱི་སྐྱུ་འདྲོད་པས་ལུག་ཀུ་བཟོད། ལགས་པར་བྱས་པའི་ལས་ཀྱི་རྩོལ་བ་བཟོད་པས་དན་དུ་བྱས་པ་ཐམས་ཅད་བཟོད་དེ།

玄奘訳 (T11.263c3-15)：

若被讚毀終無愛患。善知自身德圓滿故。於得失利不生欣感。調伏其心住寂靜故。不希美稱不犯惡名。善能觀察廣大慧故。毀而不下讚而不高。德善安住不傾動故。於諸苦事曾無厭惡。苦衆生所深懷戀故。於諸樂相曾無欣愛。知有爲樂性無常故。世間八法所不能染。不依一切有趣生故。於諸自苦善能堪忍。終不令他受苦惱故。〔於勝菩提心無退屈。〕覺分資糧善圓滿故。節節支解乃至斬首。善能堪忍。希求如來〔金剛〕身故。屠割身肉善能堪忍。〔爲求如來妙相好故。〕諸變惡事善能堪忍。爲殖一切善業力故。

so (‘)varṇena na pratihanyate varṇena nānūṇiyate svaguṇaparipūrṇatvāt* (।) lābhena na hr̥ṣyate alābhena nāvalīyate dāntaśāntatvāt* (।) yaśasā na vismayate ayaśasā na skhalati sunirīkṣitavistūrṇabuddhitvāt (।) nindayā nāvanamate praśansayā nonnamate susthitāprakampyāt* (।) duḥkheṇa na parikhidyate sattvāpekṣatvāt* (।) sukhena na (5) hr̥ṣṭati saṃskṛtasukhānityāt* (।) sarvabhavagatyupapattyanīśritatvāt* lokadharmair na lipyate (।) svapīḍās utsahamte parānutpīḍanatvāt* | bodhyaṅgasambhāraparipūrṇatvād aṅgapratyaṃgottamāṅgacchedam utsahate (।) buddhakāyābhilaṣitatvāt* kāyavikarttanām utsahate (।) sukr̥takarmabalādhānatvāt* sarvaviprakārā marṣayati (।)

【訳】彼〔菩薩〕は誹謗によって破られなくて、称赞に対して、得ようと努力しない、自分の徳が円満されたからである。得によって、喜ばれない、無所得によって、〔気持ち〕沈まれない。〔心が〕調伏されて寂靜〔の状態〕であるからである。名声されても、慢心しない、侮辱されても、〔心が〕動揺しない。よく観察して広大な理性を持つからである。嘲弄されても、〔心が〕下げられない、喝采されても、〔心が〕揚がらない。よく安住して動揺されるべきがないからである。苦によって、苦しめない、衆生を憐憫するからである。楽によって、喜ばれない、有為の樂が無常であるからである。世間法によって、汚されない、一切の有趣の生まれに頼らないからである。自分の諸々の苦痛を耐える、他人に苦痛を与えないからである。肢体と頭との切断することを耐える、菩提支の資糧が円満されたからである。身体分割することを耐える、仏身が希求されたからである。一切の害を耐える、善行力〔を増長する〕ためである。

法護訳 (T11.843a14-19) :

或有人來種種稱讚。不以爲喜。何以故。菩薩以自分圓滿眞實功德。而爲眷屬。於世間法亦不耽著。於自過失而能悔謝。於他過失不生毀訾。爲能圓滿菩提分法。作大佛事。而復思念。已作罪業悉皆虛假。諸相違行無義利事。悉能棄捨。

これら両者の内容を対照すると、法護訳の内容のうち、梵文写本から回収できるのは、「varṇena」、「hr̥ṣyate」、「svaguṇaparipūrṇatvāt」、「lokadharmair」、「sva-」、「para-」、「bodhyaṅga」、「paripūrṇa」というわずかな単語しかない。すなわち、上に示している法護訳中、「稱讚」、「喜」、「以自分圓滿眞實功德」、「世間法」、「自」、「他」、「菩提分法」、「圓滿」という訳文以外の内容は、梵文写本には、殆んど見いだすことができない。つまり、当該箇所法護訳は多くの点で相違するのである。この点に基づけば、法護が、梵文原文にある相当な部分の単語を正しく読み取ることができなかったのか、長文である梵文原文を法護の裁量で省略していた可能性が見いだせる。

次に、第十一品に、法の資糧に対する精勤修習を説く文章について見てみたい。

梵文写本 (MS125a8-b2) ³⁶⁷ :

tatra katamo dharmasambhārayogaḥ (|) yad idam alpārthatā (|) alpakṛtyatālpabhāṣyatālpasvaratā
pūrvarātrāpararātrajāgarikāyogam anuyuktā | (中 略) samgaṇikāvivekatā |
ekārāmatā 'raṇyasukhamanasikāratā | …

【訳】その中、法の資糧に対する精勤修習とは何か、すなわち、欲求 (-arthatā, 法護訳では、「義」と訳している。)を少なくなるのであり、行動を少なくなるのであり、話しを少なくなるのであり、声を少なくなるのであり、初夜と後夜との時に眠らずに精勤するのであり、(中略) 群居を厭離するのであり、独居を喜ぶのであり、阿蘭若の安樂に作意するのであり、…

対応する法護訳 (T11.875b4-11) :

云何求法相應。謂 [於法師] 得是少義。而於初夜後夜思擇稱量。(中略) 心唯一境。富樂作意。
…

ここでは、法護訳は、梵文写本にある、「alpakṛtyatālpabhāṣyatālpasvaratā (|) (【訳】作務を少なくなるのであり、話しを少なくなるのであり、声を少なくなるのであり、)」と、「samgaṇikāvivekatā (|) (【訳】群居を厭離するのであり、)」と相当する内容を翻訳しない。さらに、梵文原文の ekārāmatā 'raṇyasukhamanasikāratā (|) (【訳】独居を喜ぶのであり、阿蘭若の安樂に作意するのであり、) という箇所について、法護は「心唯一境。富樂作意。」と翻訳する。すなわち、この法護の訳文から、法護は、本来、「ekārāmatā (|) araṇyasukhamanasikāratā (|)」と読むべき箇所を、「ekārāmatā 'raṇya (|) sukhmanasikāratā (|)」というように読んでしまったのであろう。つまり、法護訳では、当該箇所を誤読していた可能性が見出せる。故に、このような箇所からは、法護が本文の省略を行うことや、誤訳も存在することが確認できる。

以上、法護訳の不適切な点について四例挙げて、分析を施した。今は四例にとどめたが、このような箇所は法護訳に決して少なくはない。つまり、法護訳を検討する際には十分な注意が必要であると言えよう。

第五節、結び

本章では諸々の漢訳本すなわち、玄奘訳、宋訳について梵文写本との比較分析を行い、それぞれの特徴や問題点の分析を行った。

³⁶⁷ 蔵訳 (D Ga175a3-6, P Wi198b8-199a3, H332b1-5) :

དེ་ལ་ཚོས་ཀྱི་ཚགས་ལ་བཙོན་པ་གང་ཞེས། འདི་ལྟ་ན། དོན་ལུང་པ་དང་། ལྷ་པ་ལུང་པ་དང་། ལྷ་ལུང་པ་དང་། ལྷ་ལུང་པ་དང་། ལྷ་ལུང་པ་དང་། ལྷ་ལུང་པ་དང་། (中略) འདྲ་འཛི་ལས་དབེན་པ་དང་། གཞིག་ལས་དགའ་པ་དང་། དཀོན་པའི་བདེ་བ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་དང་། …

玄奘訳 (T11.306a2-13) :

復次 [舍利子。] 云何名爲菩薩 [摩訶薩] 正法資糧相應正行。 [舍利子。正法資糧者。所謂菩薩摩訶薩具修正行故。] 嗜欲饕餮善能節儉。事緒緣務善能減約。言說談話善能遠離。於諸音聲善能棄捨。初夜後夜無有睡眠。精勤修習相應正行。(中略) 遠離憤鬧常樂獨處故。宴默思惟、…

まず、玄奘訳であるが、玄奘訳の加筆箇所について管見のかぎり抽出を行い分析を行った。その結果、玄奘訳にはいくらかの加筆が見い出せ、それらを分析すれば、二種の傾向、文意を明確にするための加筆傾向と、宗教的感情に基づく尊重表現のための加筆傾向が見いだせた。

また玄奘訳の検討に基づいて玄奘の誤訳とも思われる点を見出すことができた。玄奘訳『菩薩藏經』には四無量波羅蜜多という概念が登場する。しかしそのような概念は玄奘訳『菩薩藏經』と、『大般若經』にしか見出すことができなかった。さらに、いずれの対応する藏訳等においても四無量波羅蜜多という概念を確認することはできなかった。つまり、玄奘は梵文中の *maitrī pāramitāsu* を、*maitrīpāramitāsu* という格限定複合語として誤読し、そのような誤読にもとづき四無量波羅蜜多という概念を登場させたのであろう。推測の域を出ないが、このような玄奘の誤読の背景には、恐らく、『菩薩藏經』が玄奘三蔵が一番最初に梵語より漢訳した作品であったこともあろう。しかし、幾分かの不十分な点があったとしても玄奘訳の学術的価値の高さは時代を経ても変わらないものといえよう。

次に、『菩薩藏經』の宋訳本は、宋の本土出身の惟浄と中印度出身の法護によって翻訳されたものである。このうち、惟浄訳は、梵文写本と対比して増減が認められる箇所が極めて少なく、梵文原典を忠実に翻訳していることが確認できた。その一方で法護訳には不適切な翻訳、省略や誤訳やが随所に見られた。本稿では四例のみを取り上げたが、それはあくまで一部である。つまり、法護訳を検討するには十分な注意が必要であると言えよう³⁶⁸。また、法護訳の省略に際しては妻という単語を意図的に除去するような思想的傾向が見いだせたが、それがどのようなものか分析するには至らなかったが、注目に値する点であろう。

以上、本章では『菩薩藏經』の漢訳諸本について分析を行ったが、過去の研究では玄奘訳等の漢訳が中心に用いられることが多かったが、玄奘訳は完全無欠の翻訳ではなく、多少の不適切な箇所を保持していることが改めて明らかとなった。故に、今後の研究では梵文写本が発見された以上、梵文写本に基づく批判的な研究が必要であると言えよう。

³⁶⁸ 例えば、J. W. De Jong[1996, p. 181]は次のように法護訳を評価する。

Xuanzang's translation is important for two reasons. Firstly, it is the oldest version available. In the second place, Xuanzang's translations follow closely the Sanskrit originals. In this regard Fahu's translation seems to be much worse so far I am able to judge from comparing it in a few places to that of Xuanzang.

第六章、『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」に見られる施者

第一節、問題の所在

『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」は布施波羅蜜多の内容を述べる品であるが、その内容は六つの節に区分することができる。第一に施物の内容、第二に清浄な布施方法、第三に布施の功德、第四に世間の財物の布施によって無上正等正菩提を証することができること、第五にその証明のためにスートラチュナカ（Sūtracūṇaka）という名前の紡織者が布施によって成仏できる用例をあげることで、最後に全文の内容のまとめである諸偈である。

さて、そのような「布施波羅蜜多品」の冒頭には次のような説示がある。

梵文写本（MS58a3）³⁶⁹：

tatra katamā dānapāramitā (||) iha śāriputra bodhisattvo dāyako bhavati śramaṇabrāhmaṇakṛpaṇānām (||)

【訳】 ここで、布施波羅蜜多は何か。さて、舍利弗よ。菩薩は諸沙門と婆羅門と貧者たちとの（śramaṇabrāhmaṇakṛpaṇānām³⁷⁰）施者である。

この記述からは本品で説かれる布施の施者は菩薩であることがわかる。六波羅蜜は菩薩の實踐徳目であることから、施者が菩薩であることは当然であろう。では、ここで施者として登場する菩薩はどのような特徴を持つ菩薩なのであろうか。『菩薩藏經』における菩薩が在家菩薩なのか出家菩薩なのかといった問題の解決を目的として、本章では、布施波羅蜜品における施者の特徴をその施物の分析を通じて検討してみたい。

第二節、「布施波羅蜜多品」における施物の内容

まずは『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」に説かれている施物の内容について分析してみたい。施物の内容は次の通りである。

梵文写本（MS58a3-5）³⁷¹：

³⁶⁹ 藏訳（D Ga56a7, P Wi63b3, H151b5-6）：

དེ་ལ་ཐུན་པ་འཇམ་ལ་ཁྱེན་པ་གང་ཞིན། གྲོ་འོ་བྱ། འདི་ལ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནི། དགེ་ལྡན་དང་། བཅས་པ་ནམས་ཀྱི་ཐུན་བདག་ཡིན་ཏེ།

玄奘訳（T11.239a6-10）：

復次舍利子。云何名爲〔菩薩摩訶薩依〕陀那波羅蜜多〔行菩薩行〕。舍利子。菩薩〔摩訶薩度衆生故。行陀那波羅蜜多時。〕爲諸衆生而作施主。若沙門婆羅門等。有來求者悉皆施與。

惟淨訳（T11.822b15-16）：

舍利子。諸菩薩摩訶薩。見彼沙門婆羅門貧窮孤露來乞匄者。隨諸所欲而悉施與。

³⁷⁰ śramaṇabrāhmaṇakṛpaṇa であるが、藏訳や惟淨訳では並列複合語として理解している。一方、玄奘訳では-kṛpaṇaに相当する訳語が欠落している。

³⁷¹ 藏訳（D Ga56a7-b3, P Wi63b4-7, H151b6-152a3）：

yad idam annam annārthikebhyaḥ pānaṃ pānārthikebhyaḥ (I)
yānavastragandhamālyavilepanopāśrayapariṣkāraglānabhaiṣajyadīpavādyadāsīdāsasuvarṇamaṇimuktāvai
-ḍūryaśaṅkhaśīlāpravāḍasarvaratnāni (I)
hayagajarathodyānatapovanaputraduhitṛbhāryādhanadhānyakośakoṣṭhāgāraturdvīpasarvarājyaisvarya-
ukhaṃ sarvaratikrīḍākaraḥ caranākaraṇanāsānetrottamāṅgamānsa śoṇitamajjāsthini |

【訳】すなわち、食物①を求める者たちに食物を布施し、飲物②を求める者たちに飲物
を布施する。乗車(yāna-)³⁷²③と、衣服④と、薫香⑤と、花環⑥と、身に塗り香油⑦と、住むと
ころ⑧、及び〔その中に配置する〕器具⑨と、病気を治す薬物⑩と、灯⑪と、音楽⑫と、婢⑬と、
僕(しもべ)⑭と、黄金⑮と、宝石⑯と、真珠⑰と、瑠璃⑱と、法螺貝⑲と、瑪瑙⑳と、珊瑚㉑と
である一切の宝物と、馬㉒と、象㉓と、馬車㉔と、遊園㉕と、苦行林㉖と、息子㉗と、娘㉘と、
妻㉙、及び財産㉚と、穀物を有する貯蔵㉛と、倉庫³⁷³㉜と、四洲を支配する王の一切の富貴・安
楽・一切の享楽・遊戯㉝、及び手㉞と、足㉟と、鼻㊱と、眼㊲と、頭㊳と、肉㊴と、血㊵と、髓㊶
と、骨㊷を〔求める者たちにそれらを布施する〕。

以上が『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」に説かれる施物の内容である。ここで挙げられる施物を分類す
れば、それは二種類しかない。すなわち、内財施と外財施である³⁷⁴。内財施とは「手と、足と、鼻と、
眼と、頭と、肉と、血と、髓と、骨と」である。それ以外の施物はすべて外財施である。つまり、「布
施波羅蜜多品」で説かれている布施は、世間の内外財施であると言えよう。

さて、この施物の内容の傾向について漢訳四阿含との比較検討から探してみたい。そこで四阿含に
登場する施物の内容を整理し、『菩薩藏經』との対応関係を整理して表にまとめた。次の通りである³⁷⁵。

འདི་ལྟ་ན། རས་ཀྱིས་ཡོངས་པ་ལ་ཐས། རྣམ་ཀྱིས་ཡོངས་པ་ལ་རྣམ། བཞེན་པ་དང་ཁོས་དང་། རྣམ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། གནས་དང་། ཡོ་ཐུང་དང་། ར་བའི་གསོས་རྒྱན་དང་། མར་མེ་དང་། སྒྲིམ་རྒྱན་དང་། རྩན་ལོ་དང་།
འཕྲུལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་།
འཕྲུལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་། རྩེ་བ་དང་། རྩལ་པ་དང་།

玄奘訳 (T11.239a10-18) :

須食與食。須飲與飲。〔珍異餽膳無不盡施。〕如是或求車乘。衣服華鬘。塗香末香。或求坐臥依倚。床席敷具。
病藥燈明。音樂奴婢。或求金銀末尼。眞珠琉璃。螺貝璧玉。珊瑚等寶。或求象馬車輅。園林池苑。男女妻妾。財
穀庫藏。或求四大有洲自在之王一切樂具。及諸嬉戲娛樂之物。或有來求手足耳鼻。頭目肉血。骨髓身分。〔菩薩
摩訶薩〕見來求者。〔悉能一切歡喜施與。〕

惟淨訳 (T11.822b16-22) :

或乞飲食衣服塗香花鬘及棲止處。或乞病緣醫藥燈明音樂。妻子奴婢園林臺觀。金銀瑠璃碑礪瑪瑙珊瑚琥珀摩尼眞
珠。及餘妙寶象馬車乘財穀庫藏。乃至四大大洲主輪王富樂嬉戲等事。至于手足耳鼻眼目身分血肉骨髓。

³⁷² 惟淨訳ではyāna-と相当する内容がないようにも見えるが、恐らくはyāna-をその後ろの-ratha-と一緒にあわせて
「車乘」という意味で翻訳しているのであろう。

³⁷³ 『四分律・藥犍度之一』には在家弟子が「溢滿」の「倉庫」を持って布施する用例がある。次の通りである。
時跋提城有大居士、字旻荼、是不蘭迦葉弟子。大富多諸珍寶。多有象馬車乘奴婢僕使食飲。倉庫溢滿、有大
威力。隨意所欲給人。 (T22.872b20-23)

³⁷⁴ 『菩提資糧論』卷第一：「財施亦有二種。(中略)謂内及外。若施自身支節。若全身施。是爲内施。若施男女
妻妾及二足(禽類を指す)四足(畜類を指す)等。是爲外施。」 (T32.519b2-29)

³⁷⁵ 仏教の初期の形態を考察するのであればニカーヤ資料を調査するべきであるが、今は時間の関係上、立ち入る
ことができなかった。そこでニカーヤ資料に関する先行研究の情報をいくつか紹介したい。

まず、杉本卓洲[1988]がNidānakathāに認められる施物について整理を行っている。今、表にまとめれば次の
通りである。

Nidānakathāの内の施者と施物

漢訳四阿含中の施者と施物

經典	施者	施物	『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」の施物との対照
『雜阿含經』卷第二十二・五九二經	給孤獨長者	我當盡壽供養衣、被、飲、食、房舍、床臥、隨病湯藥。(T2.158b4-17)	④②①⑧⑨
『雜阿含經』卷第二十三・六〇四經	阿育王	今當施設供養於僧。(中略)然我今先當供養佛念所覺菩提之樹。香華、幡幢、伎樂；(T2.166b17-26) 香湯、僧衣、四十億萬兩珍寶。(T2.170a28-c20)	⑤⑥⑫④、⑮～⑳
『雜阿含經』卷第三十六・九九九經	悉鞞梨王	歲輸財物應入我者。分半入庫。分其半分。即於彼處惠施作福。(T2.261c24-262a20)	内施と王權施以外の施物
『雜阿含經』卷第四十・一一〇六經	釋提桓因（人としての時）	行於頓施沙門婆羅門、貧窮困苦求生行路乞。飲、食、錢財、穀、帛、華香、嚴具、床臥、燈明、衣、被。(T2.290c23-29)	②①⑮⑳㉑㉒⑥⑤⑨ ①④
『別訳雜阿含經』卷第二・三十五經	帝釋（人としての時）	信心施於貧窮沙門婆羅門等。漿飲食、種種餽饌、種種華鬘、種種諸香、燒香塗香、財帛床榻。(T2.384c14-17)	②①⑥⑤⑦⑮⑳㉑⑨
『雜阿含經』卷第五十・一三二六經	優婆塞	時一優婆塞。以衣布施叔迦羅比丘尼。復有優婆塞。以食供養。(T2.365b8-9)	④①
『佛說長阿含經』卷第三・遊行經第二	善見王	以道開化安慰民庶。園、池、漿、食、衣服、車、馬、香、華、財、寶。(T1.23a16-28)	㉕㉖②①④③㉗㉘ ⑤⑦⑥、⑮～㉑、㉓
『佛說長阿含經』卷第三・遊行經第二後	末羅（釈尊の入滅地末羅国その国の人を称する）	幡蓋、燒香、散花、伎樂供養佛。(T1.27c8-28a2)	⑤⑥⑫
『佛說長阿含經』卷第十八・分世記經・轉輪聖王品第三	轉輪聖王	施諸窮乏、須食與食、須衣與衣、象馬寶乘。(T1.121b21-23)	①②④㉒㉓㉔③
『中阿含經』卷第十四・六七經	尼彌王	施諸窮乏沙門梵志貧窮孤獨遠來乞者。飲、食、衣、被、車乘、華鬘、散華、塗香、屋舍、床、褥、氍毹、綰縵、給使、明燈。(T1.514b11-13)	②①④③㉔⑥⑦⑧ ⑨⑬⑭①
『中阿含經』卷第四十四・鸚鵡經	男子、女人	施與沙門梵志貧窮孤獨遠來乞者。飲、食、衣、被、花鬘、塗香、屋舍、床榻、明燈、給使。(T1.705c23-25)	②①④⑥⑦⑧⑨⑪ ⑬⑭
『增一阿含經』卷第四・護心品第十・(三)	檀越施主	觀檀越主。能施卿等（比丘）衣、被、飲、食、床榻、臥具、病瘦醫藥。是故諸比丘。當有慈心於檀越所。小恩常不	④②①⑨⑩

施者	施物
Suruci (婆羅門)	飲食
Atideva(婆羅門)	上衣
Jatila (大領主)	衣
Uttara (婆羅門青年、後に出家)	蓄えていた八億金
轉輪王	七宝を伴える四大洲の王權
Kassapa (婆羅門青年)	一兆金の財施 僧院を造る
Arindama(王)	大施、宝象
Khema(王、後に出家)	大施、藥物
Pabbata(王、後に出家)	大施、鉢・羊毛・中国産の布

そのほか、袴谷憲昭[2005]は「実際に伝統的仏教教団に莫大な寄進をなした「在家菩薩」は、「善男子 (kula-putra)」 「善女人 (kula-duhitṛ)」と呼ばれた国王や大商人を典型とする新興の社会的優者だったのである」と指摘しており、杉本卓洲[1988, pp.105-106]によってNidānakathāにおいて全ての施者が菩薩と呼ばれる、と指摘されている。この故に、四阿含とNidānakathāに見られた施者は、在家菩薩であることが分かる。そうすると、四阿含やNidānakathāとほとんど同じ施物を施す者であるので、『菩薩藏經』の「布施波羅蜜多品」における菩薩も在家菩薩であることが考えられるであろう。

		忘。況復大者。恒以慈心向彼檀越。 (T2.564a27-b2)	
『増一阿含經』卷 第四・護心品第 十・(四)	阿那伽持長者	諸比丘。隨所須物三衣、鉢、盂、鍼筒、 尼師壇、衣帶、法澡罐。及餘一切沙門 雜物。 復於四城門而廣惠施。須食與食、須漿 與漿、須車乘、妓樂、香熏、瓔珞。 (T2.564c25-565a4)	②①⑨⑩③④⑫⑤
『増一阿含經』卷 第十二・三寶品第 二十一・(一〇)	善男子、善女人	若有善男子善女人常念惠施。與沙門婆 羅門諸貧置者。須食者與食、須漿與漿、 衣被、飲食、床敷、臥具。病瘦醫藥、 舍宅、城郭。(T2.606c16-19)	①②⑨⑩⑧
『増一阿含經』卷 第十九・四意斷品 第二十六之餘・ (三)	毘羅摩(梵志)	眞珠、虎珀、砗、瑪瑙、水精、琉璃、 碎金、碎銀、金銀澡罐、牛、玉女、臥 具、氍毹文繡毼、衣裳、龍象、馬、車、 房舍、飲食、床、病瘦醫藥。 (T2.644c6-20)	⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔ ④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫
『増一阿含經』卷 第一・序品第一	菩薩	菩薩發意趣大乘(中略)諸有勇猛施頭 目、身體血肉無所惜、妻妾國財及男女、 此名檀度不應棄(T2.550a12-16)	㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝ ㉞㉟㊱㊲
『増一阿含經』卷第 十九・四意斷品第 二十六之餘・(五)	菩薩	菩薩惠施佛辟支佛下及凡人皆悉平均 不選擇人。(中略)復次菩薩若惠施之 時。頭、目、髓腦、國財、妻、子。歡 喜惠施不生著想。(T2.645b8-10)	㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝ ㉞㉟㊱㊲

以上、四阿含に登場する施物の内容を整理した。ここでまず注目すべき点は登場する施者である。まず、『増一阿含經』以外の阿含では施者は常に王や長者や善男子といった在家信者が想定されていることは注目すべきであろう。一方で、『増一阿含經』卷第一の「序品第一」と、卷第十九の「四意斷品第二十六之余」第五經では菩薩が様々な布施を行う記述が確認できる。しかし、そこでの菩薩はの妻・妾・子・男女・国財を施物として施す。つまり、ここでの菩薩はの妻・妾・子・男女・国財を有する王や長者が想定されていることが読み取れる。つまり、ここでの菩薩は、出家の菩薩ではなく、在家の菩薩が意図されていることが見て取れよう。その上で、『菩薩藏經』との対応関係をみれば、『菩薩藏經』の菩薩も出家の菩薩ではなく、在家の菩薩が意識されている可能性が見いだせる。

第三節、世間財物を施すことの果報

先の節では、『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」の施物の内容について検討を行った。その結果、そこで述べられた施物は、世間の内外財施であることが明らかとなった。仏教一般では布施は二種類あるとする。即ち財施と法施である³⁷⁶。しかし、『菩薩藏經』の「布施波羅蜜多品」では、財施のみが説か

³⁷⁶ 阿含經点には、布施は財施と法施という二種類しか説かれられない。例えば、『増一阿含經』卷第七・「有無品第十五」第三經では次のように述べられる。

爾時世尊告諸比丘。有此二施。云何爲二。所謂法施、財施。(T2.577b15-16)
このように、ここでは布施を財施と法施の二つであると述べる。また、同趣旨の内容が『増一阿含經』の、卷第九の「慚愧品第十八」第三經や、卷第十九の「四意斷品第二十六之餘」や、卷第二十の「聲聞品第二十八」第一經等にも確認することができる。また、大乘經典では、例えば、『大集經・無尽意菩薩品』で次のように述べられる。

云何布施。施有二種。財施法施。(T13.203b26-27)
また、玄奘訳『菩薩藏經』でも次のように述べられる。
童子。所言施者具有二種。一者財施。二者法施。是爲布施。(T11.316a7-8)
このようにこれらでは財施と法施の二つの布施しか説かれていない。

れている³⁷⁷。つまり、『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」における布施波羅蜜多とは、世間財物の布施であるとも言える。では、何故、『菩薩藏經』では法施ではなく財施のみを述べるのであろうか。本節ではこの点について検討してみたい。

「布施波羅蜜多品」ではあらゆるところで世間財施を強調している。例えば、先に紹介した菩薩の施物の内容の直後に、次のような説示がある。

梵文写本 (MS58a5) ³⁷⁸ :

nāsti sa kaścil laukikāḥ pariṣkāraḥ yaṃ yācanakeṣu na parityajaṃti |

【訳】 乞い求める人たちに対して施さない世間財物は何も存在しない。

ここでは明らかに施物が世間施物に限定していることが見て取れよう。また、「布施波羅蜜多品」では世間財物を布施することが無上正等正菩提を求めて証得することと、あるいは仏果を得ることと直接的に関係するものとして説かれる。例えば次の通りである。

梵文写本 (MS59b1-2) ³⁷⁹ :

一方で、財施、法施、無畏施という三種類の布施が述べられることもある。このような類型を述べるのは鳩摩羅什訳『發菩提心經論・檀波羅蜜品第四』が初めてではないであろうか。具体的内容は次の通りである。

施有三種。一以法施。二無畏施。三財物施。 (T32.511a24-25)

今見てきたように、古層の資料には二施を説き、ある時点以後では三施が登場したと言えよう。

³⁷⁷ 本経「布施波羅蜜多品」では世間財物の布施のみが説かれているが、「布施波羅蜜多品」末尾の偈文では法施が言及される。次の通りである。

brūhenti sada niṣkrāmo dharmadānaṃ dadanti ca |

(MS60b6, 【訳】 常に出離して、そして法の布施を施行することを増大する。)

『菩薩藏經』の偈文は通常、本文の説かれた内容を簡潔にもう一度説べることが多い。しかし、法施に関しては本文中で言及されることはない。では何故、「布施波羅蜜多品」の本文に言及されない法施が偈文に登場するのであろうか。この点については在家菩薩の性質を分析すれば理由が見えてくる。例えば、在家菩薩が財施以外、法施も行ふ事例が存在する。例えば、『大宝積經・優婆塞會第二十四』には次のように説かれている。

在家菩薩。應修二施。何者爲二。一者法施。二者財施。 (T11.515c2-3)

また、『優婆塞戒經・雜品之余』では次のように有る。

善男子。施有二種一者財施。二者法施。 (中略) 云何法施。若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷。能教他人具信戒施多聞智慧。若以紙墨令人書寫。若自書寫如來正典。然後施人令得讀誦。是名法施。 (T24.1059b15-20)

これらを見れば、在家菩薩は出家菩薩と同じように衆生に法施し、教化の責任を担っている。また、『優婆塞戒經・五戒品第二十二』には次のようにもある。

若優婆塞常能出至寺廟僧坊。到已親近諸比丘等。既親近已諮問法味。既問法已當至心聽。聽已受持憶念不忘能分別義。分別義已轉化衆生。是名優婆塞自利利他。 (T24.1064b24-28)

この文言によれば、在家菩薩である優婆塞が衆生教化のために行った法施のその法は、出家菩薩である「諸比丘等」より聞いた法であることが分かる。そしてそのようであれば、在家菩薩が法施を行ってもなんら問題はないであろう。

³⁷⁸ 藏訳 (D Ga56b3, P Wi63b7, H152a3-4) : འཇིག་རྟེན་གྱི་ཡོ་བྱད་གང་ཡང་སྤོང་བ་ལ་ཡོངས་སུ་མི་གཏོང་བ་མེད་དོ།

玄奘訳 (T11. 239a18-20) : [舍利子。以要言之。] 一切世間所須之物。[菩薩摩訶薩行大施故。但見來求] 無不施與 [。]

惟淨訳 (T11.822b22) : 世間所有無不施者 [。]

³⁷⁹ 藏訳 (D Ga59a1-2, P Wi66a6-8, H155b3-5) :

གྲ་མེད་ཀྱི་བྱང་ཆུབ་མེས་པོ་དང་མཉམས་པ་ཐབས་རབ་ཀྱི་སྒྲུང་བ་ནི། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཟང་ཟེང་གིས་ཐུན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་འདོད། བདུད་ཅི་འདོད། ལྷིང་པོ་འདོད། བྱང་ཆུབ་འདོད་དེ། ཡང་གྲ་མེད་ཀྱི་སྒྲུང་ལས་འདོད་པ་ནི། ཐུན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་ལ་གནས་ཏེ། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཟང་ཟེང་ལྷན་ནས་ (中略) མི་གཏོང་བ་གང་ཡང་མེད་དོ།

玄奘訳 (T11. 240b29-c7) :

paṇḍitaḥ śāriputra bodhisattvo gambhiraprajña lokāmiṣenānuttarāṃ samyaksaṃbodhiṃ pratikāṃkṣati (|)
amṛtaṃ pratikāṃkṣati (|) sāraṃ pratikāṃkṣati (|) bodhiṃ pratikāṃkṣati (|) nirvāṇapratikāṃkṣi (|) punaḥ
śāriputra bodhisattvo lokāmiṣaṃ dadan nāsti tato kiñcil laukikaṃ vastu yan na parityajati (|)³⁸⁰

【訳】舍利弗よ。深い智慧を持つ賢い菩薩は、世間財物によって、無上正等正菩提を求め、不死を求め、〔法の〕真髓を求め、完全な悟りを求める。また、舍利弗よ。それより、涅槃を求める菩薩は世間財物を布施して捨さない世俗のものは何も存在しない。

梵文写本 (MS59b3) ³⁸¹

evam eva śāriputra bhavati sakālaḥ sasamayāḥ yad bodhisattvo lokāmiṣaṃ niśrityānuttarāṃ
samyaksaṃbodhiṃ abhisambudhyate |

【訳】舍利弗よ。時のあることと場合のあることが生じて、菩薩はまさしくこのようにその世間財物を頼って無上正等正菩提を証得するであろう。

ここでは、世間財物を施すことによって、無上正等正菩提が獲得できる旨が述べられる。また、次のような説示も認められる。次の通りである。

梵文写本 (MS59b4-7) ³⁸² :

復次舍利子。如是菩薩〔摩訶薩。行陀那波羅蜜多時。〕其性聰叡智慧甚深。無量方便行於布施。以世間財求於無上正等菩提衆聖王財。〔以生死財而〕求甘露不死仙財。〔以虛偽財而〕求堅實賢聖之財。由如是故廣行布施。舍利子。是菩薩〔摩訶薩。〕爲求無上菩提及涅槃故。以世間財物修行施時。一切世間財物（中略）無不盡捨。

惟淨訳 (T11. 823b28-c2) :

舍利子。智者菩薩以其甚深勝慧。不樂世間所樂財物。但爲勤求阿耨多羅三藐三菩提。求甘露法。求大覺智。求寂靜涅槃（「盤」同「槃」）。菩薩於其世間一切所樂之物（中略）。無不捨者。

³⁸⁰ 校訂では、「nā<sti tato kiñcil laukikaṃ vastu yan na parityajati>(sti tato kiñcil laukikaṃ vastu yan na parityajati> is in the lower margin. This sentence does not exist in Tibetan translation.)」とある。

³⁸¹ 蔵訳 (D Ga59a4, P Wi66b1-2, H156a1-2) :

ཤུ་རིེ་གྲ། དེ་བཞིན་དུ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདི་ལྟར་འཛིན་ཏེ་བྱི་ཐང་ཁེང་ལ་གནས་ནས་ཐྲ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་ཚོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་མངོན་པར་ཚོགས་པར་འཛང་བྱ་བར་འགྱུར་བའི་དུས་དང་། ཚོད་ཡོད་དོ། །

玄奘訳 (T11. 240c11-13) : 如是舍利子。菩薩〔摩訶薩。〕有時有分依世間財證覺無上正等菩提亦復如是

惟淨訳 (T11. 823c8-11) : 菩薩〔摩訶薩〕亦復如是。若依時依處。以世間所樂財物行布施者。即能依止阿耨多羅三藐三菩提。

³⁸² 蔵訳 (D Ga59a5-b2, P Wi66b3-8, H156a3-b2) :

ཤུ་རིེ་གྲ། དེ་བཞིན་དུ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདི་ལྟར་མེད་པ་ཡང་དག་པར་ཚོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་ལ་གནས་ཏེ་འཛིན་ཏེ་བྱི་ཐང་ཁེང་བྱི་ཐང་ཁེང་ཡོད་པར་འགྱུར་བའི་དུས་དང་། ཚོད་ཡོད་དོ། ། བུ་བྱི་ཐང་། ཚངས་པ་ཡང་འགྱུར་གྱོ། ། གནས་དེ་གསུམ་ཡོངས་སུ་གྲུབ་ནས་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་འདི་ལྟར་ཡོངས་སུ་འགྱུར་གྱོ། ། དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་སྟོབས་བརྟུང་དང་། མི་འཛིན་པ་བཞི་ཡང་ཡོངས་སུ་འགྱུར་གྱོ། ། ལས་རྒྱུད་གིས་གྲུབ་པའི་སངས་རྒྱལ་གྱི་ཚེས་མ་འདྲེས་པ་བཅོ་བརྒྱད་རྩ་མཁུ་ཀྱང་ཡོངས་སུ་འགྱུར་གྱོ། ། ལས་རྒྱུད་གིས་གྲུབ་པའི་རྩ་མ་པ་དུག་ཅུ་དང་ལྷན་པའི་དབྱངས་ལུན་སུ་ཚོགས་པ་ཡང་ཡོངས་སུ་འགྱུར་གྱོ། ། ལས་བརྒྱུས་གྲུབ་པའི་སྟེན་ཁྱེན་པའི་མཚན་གཅིག་ཡོངས་སུ་འགྱུར་གྱོ། ། ལས་ཀྱིས་བརྒྱུས་གྲུབ་པའི་གཞུག་རྟོན་གྱི་ལོར་འགྱུར་གྱོ། ། རྩ་མ་པ་དང་ཡོན་ཏན་བརྒྱུས་ཡོངས་སུ་ཚོགས་པའི་དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་ཚས་གྱི་དུང་ཆེན་པོ་ཡང་འགྱུར་གྱོ། རྩ་མ་པ་བྱ་བ་དང་། ཡོན་ཏན་བརྒྱུས་ལྷོད་དང་། ལྷན་པའི་ཚེས་གྱི་ཐང་བ་ཐགས་བཟང་བ། ཕྱག་མེད་པ་རྩུམས་ཤིང་དཀར་པ་ཡང་ཡོངས་སུ་འགྱུར་གྱོ།

玄奘訳 (T11. 240c16-25) :

如是舍利子。菩薩摩訶薩。依於無上正等菩提。行世財施隨所樂欲。有能獲得轉輪王報。及獲帝釋梵王勝報。由成就是三種報故。菩薩十地速得圓滿。如來十力四無所畏。因是施故速得圓滿。乃至具足千業所起十八不共佛法。又具千業所起六十種圓滿妙音。又具百業所起一大丈夫相。又具二百業所起無見頂髻相。又過此百倍。圓滿成就如來大法螺相。又過拘胝百千倍。成就如來皓齒齊列。不缺不疎平等之相。

惟淨訳 (T11. 823c13-24) :

菩薩摩訶薩亦復如是。先以世間所樂財物行於布施。即能依止阿耨多羅三藐三菩提。隨所樂欲悉能成辦。或得成彼轉輪聖王。或復成辦三種勝相。謂菩薩十地如來十力四無所畏。又復成辦千種事業。即得十八不共佛法。又復成辦千種事業。得佛六十種清淨妙音。又復成辦百種事業。即得如來一大人相。又復成辦二百種事業。即得如來最上清淨烏瑟膩沙頂相。又復成辦百種功德妙相。即能圓具如來所有大法螺音。又復成辦百種俱胝功德妙相。即得如來鮮白齊密上妙齒相。

evam eva śāriputra bodhisattvo mahāsattvaḥ lokāmiṣaṃ dadāty anuttarāṃ samyaksaṃbodhiṃ niśritya tasyākāmakāreṇa³⁸³ cakravarttirājyaṃ pariniṣpadyate śakratvaṃ brahmatva(59b5)m api niṣpadyate (|) pariniṣpannaiś caibhis tribhiḥ sthānaiḥ daśa bodhisattvabhūmayāḥ pariniṣpadyante (|) daśa tathāgatābālāni catvāri vaiśāradyāni pariniṣpadyante | sahasrakarmābhiniṣpadyante | sahasrakarmābhiniṣpadyante (|) sahasrakarmābhiniṣpadyante ca ṣaṣṭyākāravaroṇaḥ svarasāmpat parini(59b6)ṣpadyate | śatakarmābhiniṣpadyante caikaṃ mahāpuruṣalakṣaṇaṃ pariniṣpadyate | dviśataṃ karmābhiniṣpadyante coṣṭiṣaṃ śirasi niṣpadyate (|) ākāraṇaśataparipūrṇaṃ tathāgatamahādharmaśaṃkhaḥ pariniṣpadyate (|) koṭyākāraśatasahasraṇasamanvāgatākhaṇḍā vivarā samā śvetā daśanā valī pariniṣpa(59b7)dyate |

【訳】舍利弗よ。まさしくそのように無上正等正菩提に依りて世間財物を施物とする菩薩摩訶薩、彼には望まないままに轉輪王位を得、帝釈天性と梵天性も成就するであろう。

そして、成就されたそれらの三つの勝事 (sthāna)³⁸⁴によって、十の菩薩地が成就され、十の如来力と四無所畏が成就され、また、〔その後〕千の業を成して十八不共佛法が成就され、また、〔その後〕千の業を成して六十種類を具足した音の円満が成就され、また、〔その後〕百の業を成して一つの大丈夫相が成就され、また、〔その後〕二百の業を成して頭のとっぺんにある螺髻〔相〕が成就され、〔また、その螺髻〕相の功德の百〔倍〕を具足して如来の大法螺〔相〕が成就され、〔また、その大法螺〕相の千百俱胝〔倍〕の功德を具足して欠けがなくて、隙間がなくて、平で、白い歯の列が成就される。

ここでは、世間財物を施物することによって、十の菩薩地と、如来十力と、四無畏と、十八不共佛法と、六十種類の妙音と、大丈夫相と、螺髻相と、如来大法螺と、如来の歯相である仏果を獲得できる旨が述べられる³⁸⁵。

また、このような説示の後にさらに次のように説いて強調する。

梵文写本 (MS59b8-60a1)³⁸⁶ :

³⁸³ この tasyākāmakāreṇa とその訳については、玄奘訳と惟浄訳の二訳本の「隨（其）所樂欲」という訳から見れば、梵文写本のこの tasyākāmakāreṇa は tasyākāmakāreṇa に直すべきであるが、藏訳の「དེམ་འདོད」 という訳から見れば、梵文写本にある tasyākāmakāreṇa (tasya akāmakāreṇa) の形のままで問題はない。

³⁸⁴ それらの三つの勝事とは、轉輪王位を得、帝釈天性と梵天性も成就するという勝事である。

³⁸⁵ 『増一阿含經・護心品第十』第三經には、「布施成佛道 三十二相具」（T2.564b16）というこれと類似する意味を持つ偈文がある。

³⁸⁶ (D Ga59b5-6, P Wi67a3-5, H156b6-157a2) :

ཤེད་པའི་བླ་མ་ཐུག་མཆོག་གི་འཇིག་པ་དང་། རྒྱ་མཚན་འདོད་པ་དང་། རྒྱ་མཚན་འདོད་པ་ནི། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐང་ཐང་ཐུག་པར་བྱེད་དོ། ཤེད་པའི་བླ་མ་ཐུག་མཆོག་གི་འཇིག་པ་དང་། རྒྱ་མཚན་འདོད་པ་དང་། རྒྱ་མཚན་འདོད་པ་ནི། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐང་ཐང་ཐུག་པར་བྱེད་དོ། ཤེད་པའི་བླ་མ་ཐུག་མཆོག་གི་འཇིག་པ་དང་། རྒྱ་མཚན་འདོད་པ་དང་། རྒྱ་མཚན་འདོད་པ་ནི། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐང་ཐང་ཐུག་པར་བྱེད་དོ།

玄奘訳 (T11. 241a7-11) :

舍利子。是名菩薩摩訶薩行財施時。爲求甘露。爲求堅實。爲求菩提。爲求涅槃。應知如是法門差別。所謂菩薩摩訶薩。依世財施。〔而與陀那波羅蜜多相應。〕證覺阿耨多羅三藐三菩提故。

惟浄訳 (T11. 824a1-6) :

舍利子。〔如是如來所有一切神通事業佛法勝相。皆是菩薩宿修大行。〕以世間〔所樂〕財物。〔奉施如來。以攝受故。〕求甘露法求寂靜涅槃。舍利子。以是緣故〔。〕菩薩摩訶薩。以世間〔所樂〕財物行布施者。即能依止成就阿耨多羅三藐三菩提果。

amṛtapratikāṃkṣī sārāpratikāṃkṣī bodhipratikāṃkṣī nirvāṇapra(60a1)tikāṃkṣī śāriputra bodhisattvo
lokāmiṣaṃ dadāti | tad anena te śāriputra paryāyenaivaṃ veditavyaṃ | yallokāmiṣaṃ niśritya bodhisattvo
(‘)nuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambudhyate ||

【訳】舍利弗よ。不死を求め、〔法の〕真髓を求め(sārāpratikāṃkṣī)³⁸⁷、菩提を求め(bodhipratikāṃkṣī)³⁸⁸、涅槃を求める菩薩は世間財物を布施する。舍利弗よ。故に、このようにして、あなたにとって、次のように知られるべきである。〔すなわち、〕菩薩は世間の財物を頼って無上正等正菩提を証する。

ここにおいても、世間財物の布施によって無上正等正菩提を獲得できることが強調される。以上、いくつかの用例を見てきたが、いずれにおいても世間財物の布施が強調されてきた。つまり、『菩薩藏經』では無上正等正菩提を獲得する大きな要因として世間財物の布施を想定していることが読み取れよう。

さて、『大智度論・積六度品第六十八之余』によれば、在家菩薩は「大富」の故に、諸波羅蜜多の中で、まずは布施を行ずるべきと述べる。それに対して出家菩薩は「無財」³⁸⁹の故に、「財施」を除いた余りの諸波羅蜜多をすべて行ずるべきとある³⁹⁰。つまり財施が除外されたのが出家菩薩であり³⁹¹、在家菩薩は財物の布施が想定されていることが読み取れよう³⁹²。

また、『増一阿含經・慚愧品第十八』第三經にも「比丘當念法施、勿學財施。」(T2.587c27-29)³⁹³と説かれる。

³⁸⁷ このsārāpratikāṃkṣīと相当する内容は、藏訳本にはない、惟浄訳にもない。

³⁸⁸ このbodhipratikāṃkṣīと相当する内容は、惟浄訳にはない。

³⁸⁹ 『大智度論・初品中迴向積論第四十五』に「出家菩薩、守護戒故不畜財物。」(T25.271b14-15)という説きもある。

³⁹⁰ 「在家菩薩、福德因縁故大富。大富故、求佛道因縁。行諸波羅蜜。宜先行布施。何以故。既有財物又知罪福。兼有慈悲心於衆生故。宜先行布施、隨次第因縁、行諸波羅蜜。出家菩薩、以無財故、次第宜持戒、忍辱、禪定。次第所宜故名爲主。除財施、餘波羅蜜皆出家人所宜行。」(T25.628b23-cl)

³⁹¹ 例えば、『優婆塞戒經・悲品第三』では次のように述べられる。

善男子。出家之人唯能具足五波羅蜜。不能具足檀波羅蜜。在家之人則能具足。(T24.1036c12-14)

この文言に基づけば、「無財」の故に、出家菩薩は布施波羅蜜多以外の五波羅蜜多しか「具足」できない。在家菩薩のほうが布施波羅蜜多を含む六波羅蜜多をすべて「具足」できると考えられよう。

³⁹² 仏教には阿含から、出家者は法施をなし、在家者は財施をなすという一般的な形がある。いくつか例示すれば次の通りである。

『増一阿含經・有無品第十五』第三經：

爾時世尊告諸比丘。有此二施。云何爲二。所謂法施、財施。諸比丘。施中之上者、不過法施。是故諸比丘、常當學法施。(T2.577b15-17)

『大智度論・初品中迴向積論第四十五』：

佛法有二種施。法施財施。出家人多應法施。在家者多應財施。(T25.271b10-11)

『大寶積經・郁伽長者會第十九』：

在家財施。出家法施。」(T11.476c19)

³⁹³ 『大智度論・初品中菩薩積論第八』では次のようにも説かれる。

諸菩薩二種。若出家若在家。在家菩薩總説在優婆塞優婆夷中。出家菩薩總在比丘比丘尼中。今何以故別説。

答曰。雖總在四衆中。應當別説何以故。是菩薩必墮四衆中。有四衆不墮菩薩中。何者是。有聲聞人、辟支佛人、有求生天人、有求樂自活人。此四種人不墮菩薩中。何以故。是人不得發心言我當作佛故。(T25.85a23-b2)

この文言に基づけば、「出家菩薩」は聲聞と辟支佛と生天を求める者と生活の享受を求める者との四種を除くものであり、「我當作佛」を発心する比丘と比丘尼のことであることが分かる。同様に、「在家菩薩」は聲聞と辟支佛と生天を求める者と生活の享受を求める者との四種を除くものであり、「我當作佛」を発心する優婆塞と優婆夷のことであることが分かる。

以上、いくつかの点から分析を行ってきたが『菩薩藏經』では法施ではなく財施を強調し、それが仏果に通ずるものであると述べる事が確認できた。これはすなわち、『菩薩藏經』で説示される菩薩が出家菩薩ではなく在家菩薩を指し示すことにほかならないと言えよう³⁹⁴。

第四節、紡織者スートラチュナカ (Sūtracunaka) の説話

本章の最初に述べたように、「布施波羅蜜多品」には、布施による成仏の例示として、紡織者スートラチュナカ（Sūtracūṇaka）の説話が述べられる。そこで本節ではそのようなスートラチュナカの説話について分析をしたい。スートラチュナカの説話は次の通りである。

梵文写本 (MS60a1-7) ³⁹⁵ :

³⁹⁴ 『優婆塞戒經・攝取品』には次のような説示がある。

出家菩薩（中略）設在窮乏有所須者。六物之外有不應惜。病時當爲求覓所須。瞻病之時不應生厭。若自無物應四出求。求不能得貸三寶物。差已依俗十倍償之。（T24. 1046c4-9）

この説示に基づけば、出家菩薩であっても財施を為すことのあることが分かるが、出家者（特に早期の時代の出家者）には所有を許されていたものは極めて限られていたので、彼等が財施をしようとしても布施できるのは、主として数少ないの食物と衣服及び病者の比丘比丘尼の面倒をみることに限られていた（平川彰[1963]や、佐藤達玄[1956]を参照）などの故で、『大智度論』では出家菩薩の財施を無視するであろうか。

³⁹⁵ 蔵訳 (D Ga59b6-60b2, P Wi67a5-68a1, H157a2-158a3) :

སྒྲིལ་བྱེད་པ་འདས་པའི་དུས་ལ་ཕྱེས་པ་ལུངས་མེད་པ། འིན་ཏུ་གངས་མེད་པ། ཆད་མེད་པ། བསམ་གྱིས་འཁྲུག་པ་གང་ལྟར་ཆོད་པའི་དུས་ན་དེ་མེད་ཀྱི་གཤམ་པ་དུས་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པ་རྟོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཆོས་
 མོས་ཁྱེད་ཀྱང་ཕྱག་ལ་དང་ཞབས་སྒྲུབ་ཞུ་ན། དེ་དཔག་གཤེགས་པ། འཇིག་རྟེན་མཐུན་པ། ཕྱེས་པ་འདས་པའི་ཁལ་ལྟར་པ། ལྷ་དང་འིན་ཏུ་གངས་པ་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ཞུ་འདས་འཇིག་རྟེན་དུ་ལྟོད་པ། ཡང་སྒྲིལ་བྱེད་པ།

[illegible]

玄奘訳 (T11. 241a12-b8) :

復次舍利子。〔菩薩摩訶薩。行怛那波羅蜜多時。其相無量吾今當說。〕往昔過去無數廣大。無量不可思議。阿僧企耶劫。於彼時分有佛出世。號旁耆羅私如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵。舍利子。彼佛住世壽十千歲。（中略）舍利子。時彼世中有紡績者。名織紡綫。形貌端正衆所樂觀。彼作業處去佛不遠。每日將晚欲還家時。往詣佛所。常以一縷微綫。奉施如來。因白佛言。願薄伽梵哀愍我故。受此縷綫爲攝受處。以此善根於未來世。得成如來應正等覺能攝一切。時彼世尊便爲納受。如是日施一縷。滿千五百爲善攝受。由此福故。乃經十五拘胝劫中。不墮惡趣。又經千拘胝。反爲轉輪王。又經千拘胝。反爲天帝釋。以此善根柔和微妙欣愛等業。便得奉觀千拘胝佛。於諸佛所供養恭敬尊重讚歎。又以諸花塗香末香。及以香鬘繪蓋幢幡。衣服飲食坐臥之具。病緣醫藥一切衆物奉獻如來。從是已後又經一阿僧企耶劫出現於世。證覺阿耨多羅三藐三菩提。號善攝受如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵。住壽世間經二十拘胝歲。

惟淨訳 (T11. 824a7-b2) :

復次舍利子。我念過去世阿僧祇劫前。復過無量無數不思議劫。爾時有佛出現世間。其名福生如來應供正等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。其佛壽量千歲。(中略)是時有一紡線之人。色相端嚴人所樂見。其所居。去佛世尊遊止方處而復不遠。其人於自舍中營自所業。功力辦已。於日後分常所出時。即出自舍。前詣世尊福生如來所。到佛所已發清淨心。持以一線奉上世尊。作是白言。我今以此一線獻奉世尊。願佛哀愍受我所施。願我以此善根。未來世中獲諸攝受。是時世尊即爲攝受。其紡線人從是已後。乃至成佛。如是次第總以線數五百。而奉世尊。由是十五劫中墮不惡趣。又復以此善根。千俱胝生作轉輪聖王。又此善根千俱胝生作帝釋天主。又此善根當得身分柔軟人相可愛。最初修作勝上事業。親近供養千俱胝佛。尊重恭敬。以香華燈塗飲食衣服幢幡寶蓋醫藥緣具。伸供養已。最後復過阿僧祇劫。當證阿耨多羅三藐三菩提果。名善攝受如來應供正等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。彼佛世尊住壽二十俱胝歲。

paśya śāriputra lokāmiṣaṃ niśritya sarvaṃ pariprāptaṃ bhavati |

【訳】 舍利弗よ。見よ。世間財物に頼って一切の成就が生じる。

以上がスートラチュナカの説話の全貌である。内容について簡単に説明すれば、バーンギーラシ如来が住む場所の近くで仕事をしているスートラチュナカ（Sūtracūṇaka）という名前の紡織者がいた。彼は昼の仕事をしてから夕方に帰る際に、幾度となくバーンギーラシ如来のところに行っていた。そして、如来の前で未来に成仏できるように発願して、一縷の糸を供養していた。このように彼は糸を毎日、一縷ずつ如来に捧げた。そして、千五百縷の糸を捧げたという如来への布施の功德によって、スートラチュナカは十五俱胝劫に悪趣に堕さないという果報を得た。さらには千俱胝に轉輪王位が生じる果報と、千俱胝に諸帝釈天主になる果報と、千俱胝に諸仏に奉仕することができるという果報をも得た。その後、諸阿僧祇耶劫を経て、無上正等正菩提を證得して「善摂受」（Susamgrhita）という名前の仏陀となった。以上がスートラチュナカの説話の全貌である。

ここに登場した、スートラチュナカは紡織という仕事をしていた。故に、家から出て社会生活を営まない出家者ではなく、在家者であることは明白である。そして、彼は布施の功德によって授記を得て、無上正等正菩提を獲得するに至る。つまり、「布施波羅蜜多品」に説かれている布施によって、成仏できる施者は在家者であり、在家菩薩のことであると言えよう⁴⁰⁵。

第五節、結び

以上、本章では、『菩薩藏經』の「布施波羅蜜多品」の分析を通して、『菩薩藏經』に登場する菩薩の属性を検討した。まず、「布施波羅蜜多品」に登場する施物を整理し、四阿含との対応関係から菩薩の属性を検討した。「布施波羅蜜多品」では財施が施物として登場し、その内容には妻・妾・子・男女・国財なども含まれた。そして、四阿含においてはこれらの財施はいずれも長者や王といった在家者が施す施物であった。つまり、「布施波羅蜜多品」での菩薩は、出家の菩薩ではなく、在家の菩薩が意図されていることが見て取れよう。

また、「布施波羅蜜多品」では紡織者スートラチュナカが一縷の糸を繰返し施し、無上正等正菩提を獲得する説話が述べられた。この説話こそは、在家菩薩が法施ではなく財施によって無上正等正菩提の獲得する前例として用いられていることが明らかとなった。

以上のように本章では三つの視点から『菩薩藏經』に登場する菩薩の属性を検討した。その結果、『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」に登場する菩薩は出家菩薩ではなく、在家菩薩であることを確認することができた。

⁴⁰⁵ 布施のみによって、成仏できるかどうかは本稿の考察範囲ではない。但し『菩薩藏經』では、布施によって、成仏できると描くことで布施を強調していると理解できよう。

第七章、『菩薩藏經』に見られる出家主義的性格

第一節、はじめに

先の章では『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」を検討したが、その結果、「布施波羅蜜多品」の内容は在家菩薩を対象としたものであったことが明らかとなった。では、『菩薩藏經』は在家菩薩に向けて説かれた教えなのであろうか。この点について本章では『菩薩藏經』全体を通して検討してみたい。

第二節、序分の検討

まず、序分にあたる『菩薩藏經』の第一「家主品」の性質について紹介したい⁴⁰⁶。第一「家主品」では、世尊が賢護等の五百の在家者に自分の出家の因や目的について述べられる。まず、目的については、「私は無上正等正菩提を完全に証得すべきであって、淨信によって家より家なき状態へ出家した。」⁴⁰⁷という説示に基づけば、無上正等正菩提(anuttarā samyaksaṃbodhi)を完全に証得するために、在家状態より無家状態へと出家したことが読み取れる。では、何故出家しなければならないのか。この点について世尊は在家という状態に十苦患を始めとする様々な過失があることを示し、説明する⁴⁰⁸。そして、そのような世尊の教えを聞いて、賢護等、五百の在家者が世間の俗家より出家する。つまり第一品では、無上正等正菩提を望むのであれば、在家状態には様々な過失があるために、出家しなければならないと述べていると言えよう。つまり、第一「家主品」に基づけば、『菩薩藏經』が出家を推奨していることは明白であろう。

第三節、正宗分の検討

先の検討では序分相当箇所を検討し、第一品では明らかに出家を推奨していたことを確認した。しかし、第一品は解脱道、すなわち、声聞の教えであり、出家を推奨するのは当然であるとも言える。一方で、既に検討した所であるが、本論の正宗分は成仏道である「菩薩藏法門」を説くものである。

⁴⁰⁶ 序分に相当箇所としては第二品も挙げられるが、当該箇所には出家について顕著な記述が見いだせなかったため、いまは取り上げなかった。

⁴⁰⁷ この説示は繰り返し述べられる。登場箇所を列挙すれば次の通りである。一回目：(梵文写本：MS3a7；藏訳：D Kha258b2-3, P Dsi284b4-5, H7a6-7；玄奘訳：T11.196a28-b1；法護訳：T11.782b3-4)、二回目：(梵文写本：MS3b4；藏訳：D Kha259a1, P Dsi285a3-4, H78a2；玄奘訳：T11.196b18-20；法護訳：T11.782b22-23)、三回目：(梵文写本：MS3b7-4a1；藏訳：D Kha259a7, P Dsi285b1-2, H8b4-5；玄奘訳：T11.196c7-8；法護訳：T11.782c13-14)、四回目：(梵文写本：MS4a3；藏訳：D Kha259b4, P Dsi285b5-6, H9a3-4；玄奘訳：T11.196c20-22；法護訳：T11.782c27-28)、五回目：(梵文写本：MS4a7；藏訳：D Kha260a4, P Dsi286a6, H9b7-10a1；玄奘訳：T11.197a12-14；法護訳：T11.783a29-b2)、六回目：(梵文写本：MS4b3；藏訳：D Kha260b2-3, P Dsi286b4, H10b2；玄奘訳：T11.197b1-3；法護訳：T11.783b19-20)、七回目：(梵文写本：MS4b5-6；藏訳：D Kha261b7-26a7, P Dsi287a2, H11a3-4；玄奘訳：T11.197b17-19；法護訳：T11.783c5-6)、八回目：(梵文写本：MS5a1-2；藏訳：D Kha262a7-b1, P Dsi287b1-2, H11b7；玄奘訳：T11.197c8-10；法護訳：T11.783c25-26)。

⁴⁰⁸ 具体的な過失としては、十苦患と、十加害事と、十悪見深淵と、十大箭と、十の貪愛を根本とする法と、十邪性法と、十不善業道と、十雑染と、十の巻き付き等が列挙される。この点については、本稿の第三章・第二節・第二項・(二)に既に示している。そちらを参照せよ。

そこで、本節では『菩薩藏經』正宗分における菩薩の性質について在家菩薩なのか出家菩薩なのか明らかにすべく検討してみたい。

第一項、家と家族について

まずは、『菩薩藏經』における菩薩たちの家や家族に対する扱いについて検討してみたい。例えば、第三「菩薩觀察品」では、次のように説かれている。

梵文写本 (MS19a1-2) ⁴⁰⁹ :

sa ārabdhavīryaḥ sann anarthiko bhavati grhāvāsena (|) anarthiko bhavati putraduḥitṛbhir (|) anarthiko bhavati dāsīdāsakarmakarapauruṣeyair (|) anarthiko bhavati sarvaparigrahoparodhaiḥ (|) sa kṣipram eva jātṛyā 'vikriḍitaḥ kāmair bhadrakena vayasā buddhānām bhagavatām śāsane śraddhayā agārād anagārikām pravrajati (|)

精進を着手するために、彼〔菩薩〕は家に住むことをも惜しみしない (anarthika)、息子と娘たちをも惜しみしない、婢と僕 (しもべ) と職人と日雇い人夫たちをも惜しみしない、すべての家族と保有されているものをも惜しみしない。彼は一生の間に諸淫欲によって遊ばずに好都合な壮年のうちに諸仏・世尊の教えに淨信によって家より家なき状態へ速やかに出家する⁴¹⁰。

ここでは、菩薩にとって家や家族が捨てられるべきものとして述べられる。

また、第七「持戒波羅蜜多品」では多くの表現で家族に否定的な言及が認められる。次のように示される。

梵文写本 (MS77b1-2) ⁴¹¹ :

kin tad ajñānibhiḥ parigrhītaṃ (|) saṃskṛtaṃ (2) parigrhītaṃ (|) putraduḥitṛbhāryāḥ parigrhītaḥ (|) tais tathā parigrhītaḥ (|) yad anyonyaparigrhītaḥ āryamārgenāsamgrhītaḥ (|)

【訳】 諸無智者によって囲まれているのは何か。〔彼らによって〕 囲まれているのは有為である。

〔彼らによって囲まれているのは〕 息子と娘と妻とである。同様に、彼らも〔彼らの息子と娘と

⁴⁰⁹ 蔵訳：D Kha285b7-286a2, P Dsi312a7-b1, H149b7-50a2；玄奘訳：T11.207b23-26；法護訳：T11.794a9-13。蔵訳と二本の漢訳の詳細は、本稿の第三章・第五節・第二項・（三）に示されている。

⁴¹⁰ また、ここでは家族を捨てる時は、精力に溢れる壮年の時が好ましいとも述べられる。このような傾向は本經の第十二「大自在天授記品」でも認められる。次の通りで。

jīrṇāṣasya alpasthāmasya pravrajyā duḥkha mārṣā |
paramaṃ yauvanam tubhyaṃ kālō dhyāvasitasya te || (MS135b7-136a1)

【訳】 諸友よ。老衰の人と〔体が〕衰弱の人にとって出家することは困難である。汝〔の自分〕のために、最上の青春〔の時期〕は汝が〔出家することを〕決心する時である。

(蔵訳：D Ga94b7, P Wi281b1, H1364a3)；玄奘訳：T11.317b15-16；法護訳：T11.882b26-27。)

⁴¹¹ 蔵訳 (D Ga90a1-2, P Wi100b3-4, H202b7-203a1) :

མི་ཤེས་པས་གང་ཡོངས་སུ་བཟུང་ཞེན། འདུས་བྱས་ཡོངས་སུ་བཟུང་ངོ། རྒྱ་དང་། རྒྱ་མི་དང་། རྒྱ་མ་། ཡོངས་སུ་བཟུང་ངོ། རྟོས་དེ་རྒྱ་ཡོངས་སུ་བཟུང་། ལན་ཚུན་དུ་དེ་རྒྱ་ཡོངས་སུ་བཟུང་། འཕགས་པའི་ལམ་གྱིས་ཀུན་ལྟ་མ་བཟུང་གྱེ།
玄奘訳 (T11.258a22-26) : [舍利子。] 諸無智者何所攝受。所謂攝受諸有爲法。攝受妻妾女色諸欲及男女等。彼無智者。又爲妻子諸女色等之所攝受。如是展轉更相攝受。則不攝受於彼聖道。

法護訳 (T11.838b29-c2) : [是故當知顯現非法] 諸有爲法。男女妻妾互相耽著而生愛樂。邪道攝受 [。]

妻とによって〕囲まれている。そのように、互いに囲まれている〔ことがあるので〕、〔彼らは〕
聖道によって摂受されない。

ここでは、家族を囲み、家族に囲まれている者は聖道に摂受されない旨が述べられる。つまり、こ
でも家族に対して否定的に取り扱われていると言えよう。

さらに同品では引き続いて次のようにも述べられる。

梵文写本 (MS77b2-4) ⁴¹² :

putraduḥitṛbhāryāparyavasthānāt tṛṣṇopādānaḥ pravrajyāntarāyaḥ śīlasyāntarāyaḥ dhyānānām antarāyaḥ
svargāntarāyaḥ nirvṛtyāntarāyaḥ | sarveṣāṃ kuśalānān dharmānām antarāyo (|) (中略)
putraduḥitṛbhāryāparigrahaḥ antaśaḥ praṇītabhaktasyāntarāyaḥ buddhadarśanasyāntarāyaḥ|| peyālam*||
dharmaśravaṇasya saṃghopasthānasya buddhadarśanaprasādapratilambhasya
dharmaśrava(4)ṇaprasādapratilambhasya saṃghopasthānaprasādapratilambhasya
kṣaṇasāmpatprasādapratilambhasyāntarāyaḥ || peyālam|| śraddhāadhanasya śīladhanasya śrutadhanasya
prajñāadhanasya tyāgadhanasya hṛidhanasyāpatrāpyadhanapratilambhasyāntarāyaḥ |

【訳】 息子と娘と妻とによって取り囲まれる故に、貪愛による取が生じる。〔また、その取は〕出
家することの障碍になり、持戒の障碍になり、諸静慮の障碍になり、天界〔に生まれること〕の
障碍になり、涅槃の障碍になり、一切の善法の障礙になる。(中略) 息子と娘と妻とを取著するこ
とは、仏を見ることの障碍になり、乃至、最上の食物の〔得の〕障碍さえもになる。〔それを〕広
説すれば、法を聞くことの〔障碍になり〕、僧に奉仕することの〔障碍になり〕、仏を見ることによ
る清浄信の得の〔障碍になり〕、法を聞くことによる清浄信の得の〔障碍になり〕、僧に奉仕す
ることによる清浄信の得の〔障碍になり〕、無難を具足することによる清浄信の得の障碍になり、
乃至、信という財宝の〔得の障碍になり〕、戒という財宝の〔得の障碍になり〕、聞という財宝の
〔得の障碍になり〕、慧という財宝の〔得の障碍になり〕、捨という財宝の〔得の障碍になり〕、慚
という財宝の〔得の障碍になり〕、愧という財宝の得の障碍になる。

⁴¹² 藏訳 (D Ga90a2-7, P Wi100b4-101a2, H203a1-b1) :

བུ་མོ་དང་། བུ་མོ་དང་། རྒྱུ་མ་ལྟན་ལུ་བརྒྱུ་ཅིང་མེད་པ་ཉེ་བར་ལེན་པ་ནི། རབ་ཏུ་འབྱུང་བའི་བར་དུ་གཙོ་དཔོ། རྒྱལ་ཁྲིམས་ཀྱི་བར་དུ་གཙོ་དཔོ། རྒྱ་མཚན་ལས་འདས་པའི་བར་དུ་
གཙོ་དཔོ། བུ་མོ་དང་། རྒྱུ་མ་ལྟན་ལུ་བརྒྱུ་ཅིང་མེད་པ་དང་། བུ་མོ་དང་། རྒྱུ་མ་ལྟན་ལུ་བརྒྱུ་ཅིང་མེད་པ་ནི། དཀོ་བའི་ཆོས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་བར་དུ་གཙོ་དཔོ། (中略) ར་ན་མས་བཟང་པོའི་ཡང་བར་དུ་གཙོ་དཔོ།
མངས་རྒྱུ་མཚོང་བའི་བར་དུ་གཙོ་དཔོ། ཁོང་མ་བཞིན་དུ་ཐུར་ཏེ། ཆོས་མཉན་པ་དང་། དཀོ་འདུན་ལ་བསྐྱེན་བཀྲུར་བྱ་བ་དང་། མངས་རྒྱུ་བསྐྱེན་བར་དང་པ་རྩེད་པ་དང་། ཆོས་མཉན་པར་དང་པ་རྩེད་པ་དང་། དཀོ་འདུན་ལ་བསྐྱེན་
བཀྲུར་བྱ་བར་དང་པ་རྩེད་པ་དང་། དལ་བའི་འཕྱོར་བ་རྩེད་པའི་བར་དུ་གཙོ་དཔོ། ཁོང་མ་བཞིན་དུ་ཐུར་ཏེ་དང་པའི་ནོར་དང་། རྒྱལ་ཁྲིམས་ཀྱི་ནོར་དང་། མེས་པའི་ནོར་དང་། ཤེས་རབ་ཀྱི་ནོར་དང་། ཀའྲོང་བའི་ནོར་དང་། ཁྲིམ་ཡོང་
པའི་ནོར་དང་། ཇོ་ཆ་ཤེས་པའི་ནོར་རྩེད་པའི་བར་དུ་གཙོ་དཔོ།

玄奘訳 (T11.258a26-b11) :

〔舍利子。〕彼無智者。爲於男女妻妾諸女色等所纏縛故。於諸善法多生障礙。何所障礙。所謂障礙出家。障礙尸
羅。障礙靜慮。障礙天道。障礙涅槃。又能障礙諸妙善法。(中略) 又若攝受男女妻妾諸女色等。乃至則於一切美
食。亦能障礙。況餘勝事。〔舍利子。〕如是障礙略而言之。所謂障礙見佛。障礙聞法。障礙奉僧。障礙見佛所得
淨信。障礙聞法所得淨信。障礙奉僧所得淨信。又略而言。障礙獲得具足無難障礙信財。戒財聞財。捨財慧財。慚
財愧財。

法護訳 (T11.838c2-12) :

男女妻妾數數受取。障難出離。障難持戒。障難修定。障難生天。障難涅槃障難一切潔白之法。(中略) 又復攝受
男女妻妾乃至飲食。盡其邊際而爲障難。欲見如來而爲障難。欲聞正法而爲障難。欲近聖衆而爲障難。佛之知見。
清淨潔白之法。一切聖衆。由障難故皆不能見。於時分中欲求成就。而爲障難。求七聖財而爲障難。

ここでは、家族が修行の障礙（antarāya）になることが様々な視点から述べられる。

そして、引き続いて同品では、修行の障礙となる家族がどのようなものに譬えられるのかとして次のように述べる。

梵文写本（MS77b2-6）⁴¹³：

dāsīdāsaparigrahaḥ (3)putraduhitṛbhāryāparigrahaḥ || peyālaṃ || amitraparigrahaḥ
narakatiryagyoniyamalokaparigrahaḥ (l) (中略) āśradhyaparigraho bhāryāputraduhitṛparigrahaḥ | yāvad
dauḥśīlyamātsaryadauṣprajñyāhrikyā(5)napatrāpyaparigraho bhāryāputraparigrahaḥ |
rogagaṇḍaśalyaparigrahaḥ agniskandhaparigrahaḥ | āśviṣaparigraho bhāryāputraduhitṛparigrahaḥ (l) (中
略) api ca śāriputra śīlāsanivarṣāsvādaḥ asidhārāsvādaḥ (6)taptāyasparyāṅkāsvādaḥ
bhāryāputraduhitṛāsvādaḥ | ayasparyāṅkaḥ ayaspiṇḍamālāvarcomūtravilepanāsvādaḥ | (中略)
sarvaduḥkhadaurmanasyopāyāsaparigrahaḥ bhāryāputraduhitṛparigrahaḥ |

【訳】略言すれば、婢と僕（しもべ）（dāsī-dāsa）⁴¹⁴を取著すること、および息子と娘と妻とを取著することは、〔すなわち〕敵を取著することであり、地獄道と傍生道と餓鬼道とを取著することである。（中略）妻と息子と娘とを取著することは、〔すなわち〕信仰のないものを取著することであり、乃至、妻と息子とを取著することは、〔すなわち〕破戒と慳貪と悪慧と無慚と無愧とを取著することであり、病氣と癰と〔毒〕箭とを取著することであり、火の蘊を取著することである。妻と息子とを取著することは、〔すなわち〕毒蛇を取著することである。（中略）また、舍利弗よ。妻と息子と娘とを味わうことは、〔すなわち〕岩と稻妻と激雨とを味わうことであり、刀刃を味わうことであり、燃えている鉄の臥床を味わうことである。（中略）妻と息子と娘とを取著することは、〔すなわち〕一切の苦と憂えと悩みとを取著することである。

⁴¹³ 蔵訳（D Ga90a4-b5, P Wi100b6-101a8, H203a4-204a2）：

སྒྲིལ་མ་བཞིན་དུ་བྱུར་ཏེ། བྱ་མོ་དང་། བྱ་མོ་དང་། རྒྱུ་མ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ནི། དཔྱར་བྱུར་པ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། ཁེམས་ཅན་དུ་ཐུག་པ་དང་། དུང་འགྲེལ་གྱི་གནས་དང་། གཤིན་ཇེའི་འཇིག་རྟེན་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། (中略)
རྒྱུ་མ་དང་། བྱ་མོ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ནི། མ་དང་པ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། རྒྱུ་མ་དང་། བྱ་དང་། བྱ་མོ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ནི། འཆས་པའི་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་། སྤར་རྩ་དང་། འཆས་པའི་ཤིས་རབ་དང་། ཁྲིམ་མེད་དང་། ཇོ་ཚ་མི་
ཤེས་པ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། རྒྱུ་མ་དང་། བྱ་དང་། བྱ་མོ་ (同箇所の梵文写本にはབྱ་མོ་(娘)と相当する内容はない) ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ནི། རྟ་དང་། འབྲས་དང་།
ཐུག་ཏེ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། མེའི་ཕུང་པོ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། ལྷུ་ལ་གདུག་པ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ། (中略) བྱ་དང་། བྱ་མོ་དང་། རྒྱུ་མ་ལ་ཆགས་པ་ནི། ཇིའི་སྤར་བ་འབབ་པ་ལ་ཆགས་པ་ལོ། རལ་གྱི་ཤི་མོ་ལ་ཆགས་པ་ལོ།
ཐུགས་ཀྱི་ཤི་བཞེགས་པ་ལ་ཆགས་པ་ལོ། (中略) རྒྱུ་མ་དང་། བྱ་དང་། བྱ་མོ་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ནི། ཐུག་བཟུལ་དང་། ཡིད་མི་བདེ་བ་དང་། འབྲུག་པ་ཐམས་ཅད་ཡོངས་སུ་འཛིན་པ་ལོ།
玄奘訳（T11.258b1-28）：

〔又舍利子。〕彼無智者。若有攝受男女妻妾〔諸女色等〕。略説則是。攝受怨讐。即爲攝受地獄傍生焰魔鬼趣等。
〔舍利子。〕如是攝受。（中略）〔舍利子。〕若有攝受男女妻妾諸色欲等。即爲攝受不信惡戒邪聞慳悋惡邪之慧
無慚無愧。又復攝受病癰毒箭火聚毒蛇。（中略）又〔舍利子。〕若有衆生味著男女妻妾諸女色欲。當知即是味著
礫石之雹。即是味著利刀之刃。即是味著大熱鐵丸。即是味著坐熱鐵床。即是味著熱鐵机墮。（中略）〔取要言之。〕
若有攝受妻妾男女諸女色欲。當知即是攝受一切衆苦憂愁悲惱之聚。

法護訳（T11.838c4-25）：

又復攝受奴婢眷屬。以要言之。又或攝受惡友。爲地獄餓鬼畜生之所攝受。（中略）於不正信法返生攝受。乃至破
戒慳吝惡慧無慚無愧。皆悉攝受。於非七聖財返生攝受。又復攝受男女妻妾。即彼攝受疾病瘡疼疼痛猛火毒蛇諸苦。

（中略）舍利子。破戒之人諸有惡法。如世霜雹毀一切物。破壞善法亦復如是。又復耽著男女妻妾。如貪味人。舐
於利劍。食熱鐵團諸不淨物。（中略）即是攝受一切苦惱。

⁴¹⁴ dāsī-dāsa：蔵訳と法護訳にはそれと相当する内容があるが、玄奘訳にはない。

このように、ここでは家族や婢と僕⁴¹⁵に執着することが、敵、地獄道、傍生道、餓鬼道、信仰のないもの、破戒、慳貪、愚慧、無慚、無愧、病氣、癰、〔毒〕箭、火蘊、毒蛇、石、稻妻、激雨、刀刃、燃えている鉄の臥床、苦、憂え、悩みに執着するのと同様であると述べる。『菩薩藏經』ではそれほどまでに家族に対して否定的にとらえていると言えよう。

次に同品における家についての記述について見てみたい。例えば次のように説かれる。

梵文写本 (MS77b5-6) ⁴¹⁶ :

śmaśānavāso grhāvāsaḥ śmaśānaṃ grhaṃ kāntāraḥ nirākramādo moṣaṇa ukto mayā sarveṣāṃ śuklādīnāṃ dharmāṇāṃ (||) (中略) ayaskumbhīparigraho grhaparigrahaḥ |

【訳】家に住むことは、〔すなわち〕塚に住むことである。家は塚であり、荒野であり、庇護されないの場所であり、一切の白法の失い〔の場所〕である〔と〕私によって説かれた。(中略) 家を取著することは、〔すなわち熱いの〕鉄の鍋を取著することである (ayaskumbhīparigraho grhaparigrahaḥ) ⁴¹⁷。

ここでは、先程の家族の時と同様に、家に住まうことは塚や荒野などに住まうことと等しく、家に執着することは燃えた鉄鍋に執着するのと同様であるとして、家が否定的に言及される。

以上、本節では、『菩薩藏經』における家や家族の扱いについて検討を行った。その結果、『菩薩藏經』では家や家族を捨てるべき対象として否定的に述べていることが確認できた。つまり、『菩薩藏經』では菩薩に家庭の生活から離れて家から出て出家を促していると言えよう⁴¹⁸。

⁴¹⁵ 婢と僕（しもべ）などの使用人については次のようでもありと同品では述べる。

梵文写本 (MS77b6-7) :

narakaḥpālaparigrahaḥ dāsīdāsakarmakarapauruṣaparigrahaḥ (||) śyāmaśabalaś ca yojanaśatakṣepajanaḥ | ha(7)styasvoṣtragogardabhāvikakukkuṭasūkaraparigrahaḥ |

【訳】婢と僕（しもべ）と職人(karmakara)とを取著することは、〔すなわち〕地獄の卒を取著することである。象と馬と駱駝と牛と驢と羊と鶏と豚とを取著することは、〔すなわち〕黒いの鉄歯を持つ狗 (śyāmaśabala) と百の由旬を動き廻る有情 (yojanaśatakṣepajana) とを取著することである。

(蔵訳 : D Ga90b4-5, P Wi101a6-7, H203b7-204a2 ; 玄奘訳 : T11. 258b23-26 ; 法護訳 : T11. 838c23-25。)

⁴¹⁶ 蔵訳 (D Ga90b2-4, P Wi101a4-6, H203b4-7) :

ཁྱིམ་གྱི་གནས་ནི། དྲུག་ཁྱིམ་དང་ཁྱིམ་ནི། རྩ་ངམ་དགོན་པ། རྩེ་བའི་ས་མེད་པ་སྟེ། ཆོས་དཀར་པོ་ཐམས་ཅད་རྒྱ་བཤོ། །ཞེས་ངས་བཤད་དོ། (中略) ཁྱིམ་ཡོངས་ལུ་འཛིན་པ་ནི། རྩུགས་ཐངས་ཡོངས་ལུ་འཛིན་པ་ལོ།

玄奘訳 (T11.258b14-16) :

〔舍利子。〕若有樂處居家耽嗜不捨。當知即是樂處塚間。是故我說樂處居家。如住塚間。及曠野處無所投告。即爲喪失諸白淨法。(中略)〔舍利子。〕若有攝受居處舍宅。當知攝受大熱鐵瓮。

法護訳 (T11.838c15-18) :

又復攝受男女妻妾所住舍宅。猶如塚間。於其塚間發悲號聲。無諸親友乃至聽受。增長癡迷。是虛幻法。於諸善法而爲障礙。

⁴¹⁷ 法護訳のみ、ayaskumbhīparigraho grhaparigrahaḥ に相当する単語が存在しない。

⁴¹⁸ 佐々木閑 [2009, p. 1] に基づけば、出家する際に最重要な条件が家財産を投げ捨てることである。

第二項、婦人や妻について

本項では、『菩薩藏經』における婦人や妻に対する言及について第七品「持戒波羅蜜多品」の記述を通して分析してみたい。まず、第七品では次のように述べられる。

梵文写本 (MS78a5-6) ⁴¹⁹ :

kena kārāṇenocyate mātṛgrāma iti (|) bahudoṣaḥ anantamāyāḥ (|) māyaiṣā śāriputra tenocyate mātṛgrāma iti (|) ye mātṛgrāmasya vaśagatāḥ te mārasya hastagatā (|) ye mārasya hastagatā te pāpiyato (6)vaśagatā (|) bahudoṣā striyo (‘)nantamāyāḥ laghucittāḥ calacittāḥ capalacittāḥ capalacamaṇcalacittāḥ kopicittāḥ vānaraśāḍṣyāḥ māyānidarśanakovidāḥ (|) tena kārāṇenocyate mātṛgrāma iti (|)

【訳】何故に婦人と呼ばれるのか(kena kārāṇenocyate mātṛgrāma iti) ⁴²⁰。〔婦人は〕多くの過失と無限な幻術とを持つ者である。舍利弗よ。故に、こういう幻術〔を持つので〕、婦人と呼ばれる。婦人の支配下に落ちた者たち、彼らは〔すなわち〕魔の手に落ちた者である。魔の手に落ちた者たち、彼らは〔すなわち〕一層罪惡を有する者の支配下に落ちた者たちである。婦人たちは、多くの過失を持つ者たちであり、無限な幻術を持つ者たちであり、移り気な心を持ち、輕佻な心を持ち、変り易いの心を持ち、輕浮と不安定な心を持ち、ザル〔の心と如き〕の心を持つ者たちであり、類人猿と似ている者たちであり、幻術の示すことに巧みになる者たちである。この故で婦人と呼ばれる。

梵文写本 (MS78a7-b2) ⁴²¹ :

⁴¹⁹ 藏訳 (D Ga91a7-b1, P Wi102a2-4, H204b7-205a3) :

ཅིདི་ཕྱིར་བྱུང་མེད་ཅེས་བྱ་ཞེ་ན། ཉེས་པ་མང་ཞིང་། ལྷ་མཐའ་ཡས་པས་དེདི་ཕྱིར་འདི་ནི། ལྷ་མ་རྟེ། བྱུང་མེད་ཅེས་བྱ་ལོ། །གང་བྱུང་མེད་ཀྱི་ལག་ཁྱ་སྒོང་བ་དེ་དག་བྱུང་བྱུང་གི་ལག་ཁྱ་སྒོང་བའོ། །གང་བྱུང་གི་ལག་ཁྱ་སྒོང་བ་དེ་དག་ཐྱིག་ཅན་གྱི་དབང་དུ་སྒོང་བ་རྟེ། བྱུང་མེད་ནི། ཉེས་པ་མང་བ། ལྷ་མཐའ་ཡས་པ། སེམས་ཡང་བ། སེམས་འབྱུར་བ། སེམས་མེ་བརྟན་པ། སེམས་རབ་ཁྱ་གཡུ་ཞིང་མེ་བརྟན་པ། ལྷ་མ་རྟེ་ལ་ལ་མ་ལས་པ་རྟེ། དེདི་ཕྱིར་བྱུང་མེད་ཅེས་བྱ་ལོ། །

玄奘訳 (T11.258c28-259a7) :

〔舍利子。復〕以何故。世人名婦以爲母衆。舍利子。一切女人生多過失無邊幻誑。故名母衆。若有隨逐母衆自在。當知即墮魔羅手中自在爲惡。如是〔舍利子。〕當知世界一切女人生多過失無邊幻誑。心多輕躁。心多掉動。其心流蕩。傾覆不住。心似山獐。心似猴。善能示現幻誑之術。如是諸相。故名女人以爲母衆。

法護訳 (T11.839a15-21) :

又舍利子。母之種族亦多過失。說此種族無量無邊。幻化等事。有人隨順則生過失。諸有魔事如在掌中。波旬眷屬及諸魔女。種種幻惑多種過失。以輕掉心侮戲心。顛狂心猿猴心。善能顯現如是幻惑。以是因緣故。說名爲母之種族。

⁴²⁰ 同箇所は法護訳には、ここのkena kārāṇenocyate mātṛgrāma itiと相当する内容はない。

⁴²¹ 藏訳 (D Ga91b3-6, P Wi102a6-b3, H205a6-b3) :

འདི་རྩ་རྟེ་ཤུ་རིདི་བྱ་ལྷ་མ་ཕྱེད་པ་ཤིག་ཏུ་བསྐབ་པ་ཞིག་ལྟར་མ་པའི་ནང་དུ་སྒོང་ནས་ལྷ་མ་རྟེ་ལ་ལ་མ་ལས་པ་ལྟར་ཞེ་ན། ཉེས་པ་མང་ཞིང་། ལྷ་མཐའ་ཡས་པས་དེདི་ཕྱིར་འདི་ནི། ལྷ་མ་རྟེ། བྱུང་མེད་ཅེས་བྱ་ལོ། །གང་བྱུང་མེད་ཀྱི་ལག་ཁྱ་སྒོང་བ་དེ་དག་བྱུང་བྱུང་གི་ལག་ཁྱ་སྒོང་བའོ། །གང་བྱུང་གི་ལག་ཁྱ་སྒོང་བ་དེ་དག་ཐྱིག་ཅན་གྱི་དབང་དུ་སྒོང་བ་རྟེ། བྱུང་མེད་ནི། ཉེས་པ་མང་བ། ལྷ་མཐའ་ཡས་པ། སེམས་ཡང་བ། སེམས་འབྱུར་བ། སེམས་མེ་བརྟན་པ། སེམས་རབ་ཁྱ་གཡུ་ཞིང་མེ་བརྟན་པ། ལྷ་མ་རྟེ་ལ་ལ་མ་ལས་པ་རྟེ། དེདི་ཕྱིར་བྱུང་མེད་ཅེས་བྱ་ལོ། །

玄奘訳 (T11.259a12-21) :

舍利子。譬如幻師善學幻術於大衆中示現種種幻誑之事。舍利子。母村亦爾。善學女人幻誑之術。能令丈夫若見若聞若摩若觸皆被繫縛。又諸女人巧知惑媚。由知媚故勢力自在。凡有所作。歌舞戲笑。啼泣往來。若住坐臥。於一切時。能令丈夫不得自在。隨彼女人繫縛驅使。舍利子。譬如世間成熟稻田被大雹雨傷殘滋甚。如是舍利子。是母幻村。猶如大雹墮丈夫田。摧壞一切白法〔苗稼〕。消滅都盡。

法護訳 (T11.839a24-b4) :

舍利子。譬如幻師作幻惑事。而於衆中備諸幻具。廣能顯現種種幻事。女人幻惑亦復如是。舍利子。世間有情見彼女人。而被纏縛。或時聞聲。或時手觸。或時歌舞起心愛著。或時和合起諸幻惑。或時啼泣。行住坐臥於一切處悉

kena kārāṇenocyate bhāryā (|) bhārādeśanatayāḥ (|) bhārotsīdanatayā (|) bhārapratigrahaṇatayā (|)
bhārodvahanatayā (|) bhāraparivahanatayā (|) bhārakleśanatayā (|) bhārapīdanatayā (|) bhārahanyanatayā
(|) anena kārāṇenocyate bhāryā |

【訳】何故に妻と呼ばれるのか。〔妻は夫を〕重荷を負わせる者である故であり、〔妻は〕重荷によって〔夫を〕疲れさせる者である故であり、〔妻は〕重荷によって〔夫を〕占有する者である故であり、〔妻は夫を〕重荷を高く運び上げさせる者である故であり、〔妻は夫を〕重荷を運びまわらせる者である故であり、〔妻は〕重荷によって〔夫を〕困らせる者である故であり、〔妻は〕重荷によって〔夫を〕苦しめる者である故であり、〔妻は〕重荷によって〔夫を〕傷つけさせる者である故である。こういう故で妻と呼ばれる (anena kārāṇenocyate bhāryā) ⁴²⁷。

ここでは妻 (bhāryā, 玄奘訳では「婦人」と訳す) ⁴²⁸は夫に重荷を負わせる者であると説明する。

すなわち、第七品では、〔夫にとって〕妻が事実上の重荷であることを訴えているといえる。

また、妻については次のようにも説かれる。

梵文写本 (MS78a4-5) ⁴²⁹ :

kena kārāṇenocyate purāṇadvitīyā (|) iti hi śāriputra śīlavipattidvītiyā (|) ācāravipattidvītiyā (|)
samyagdr̥ṣṭīvipattidvītiyā (|) khādyapeyadvitīyā (|) narakatiryagyoniyamalokagamanadvitīyā (|)
āryāyā prajñayā (5) antarāyakarī (|) nirvāṇasukhavipakṣakarī (|) sarvaduḥkhasaṃgrahāya dvitīyā (|)
tenocyate purāṇadvitīyā (|)

【訳】何故に旧伴侶と呼ばれるのか (kena kārāṇenocyate purāṇadvitīyā) ⁴³⁰。舍利弗よ。実に、いわゆる〔旧伴侶は、すなわち〕、戒の破壊の伴侶であり、威儀の破壊の伴侶であり、正見の破壊の伴侶であり、飲食の伴侶であり、地獄〔趣〕と傍生〔趣〕と餓鬼〔趣〕とに赴く伴侶であり、聖なる智慧の障碍者であり、涅槃樂の敵手である。伴侶とは、一切苦を集めるための存在である。この故に、旧伴侶と呼ばれる。

以何因縁。說名為妻妻所作爲。如負重擔而能忍受。又甘領納任持重擔。長時不捨受諸苦惱。逼迫身心爲其損害。如是因縁。說名為妻。

⁴²⁷ 玄奘訳には、ここの anena kārāṇenocyate bhāryā と相当する内容は無い。

⁴²⁸ 本經の梵文原文では、purāṇadvitīyā という単語も使っているが、玄奘訳では、それを「故第二」と訳している。

⁴²⁹ 藏訳 (D Ga91a4-7, P Wi101b7-102a2, H204b4-7) :

ཅེད་ལྟར་གྱི་རྒྱུ་རྐྱེན་གྱི་མཛུགས་པ་ཞེས་བྲལ་ཞེ་ན། འདི་ལྟར་ལྟ་རྒྱུ་ལྟ་ཞེ་ན། རྒྱུ་ལྟ་མཛུགས་པ་གཉིས་པ་ལོ། རྒྱུ་ལྟ་མཛུགས་པ་གཉིས་པ་ལོ། ཡང་དག་པའི་ལྷ་བ་ལྟ་མཛུགས་པ་གཉིས་པ་ལོ། བཟའ་བ་དང་བདུང་བ་གཉིས་པ་ལོ། ཁེམས་ཅན་དམྱལ་བ་དང་། དྲོད་འགྲོའི་སྒྲེག་ནས་དང་། གཤིན་ཇེད་འཛིག་རྟེན་དུ་འགྲོ་བ་གཉིས་པ་ལོ། འཕགས་པའི་ཤེས་རབ་ཀྱི་བར་ཆད་ལྟེད་པ་ལོ། ལྷ་དང་ལས་འདས་པའི་བདེ་བ་ལ་མི་མཐུན་པའི་ཕྱོགས་ལྟེད་པ་ལོ། ལྷག་བསྐྱེད་ཐམས་ཅད་ཡང་དག་པར་ལྷག་པ་གཉིས་པ་ལོ། དེའི་ལྟར་གྱི་རྒྱུ་རྐྱེན་གྱི་མཛུགས་པ་ཞེས་བྲལ། །

玄奘訳 (T11.258c23-28) :

〔舍利子。〕復何因縁世人婦爲故第二。舍利子。如是女人。是犯尸羅第二伴故。是犯威儀第二伴故。是犯正見第二伴故。是飲食時第二伴故。是往地獄傍生鬼趣第二伴故。能障聖慧涅槃樂攝一切苦第二伴故。是以名爲故第二也。

法護訳 (T11.839a12-15) :

舍利子。此爲破戒緣。壞正行緣。不正見緣。樂飲食緣。地獄餓鬼畜生緣。作勝慧障。閉涅槃門。以是因縁集一切苦。說此名爲宿因眷屬。

⁴³⁰ 法護訳には、ここの kena kārāṇenocyate purāṇadvitīyā と相当する内容は無い。

ここでは、妻は、戒・威儀・正見の破壊の伴侶であり、悪趣に趣く伴侶であり、聖智の障礙者と涅槃の敵手であると述べる。つまり、妻が修行の伴侶として不適切であることを述べていると言えよう。

さらに同品では次のようにも述べる。

梵文写本 (MS78a1-2) ⁴³¹ :

duḥkhamūlā bhāryā (|) aghamūlā bhāryā (|) āghātamūlā bhāryā (|) bandhanamūlā bhāryā (|) śokamūlā bhāryā (|) amitramūlā bhāryā (|) jātyandhamūlā bhāryā (|) prajñācakṣunirodhamū(2)lā bhāryā (|) taptāyopalāstṛtā bhūmir bhāryā (|) parākramasamā bhāryā (|) mithyākarmaprabhāpinī bhāryā (|)

【訳】妻は苦の根本であり、妻は罪惡の根本であり、妻は殺戮〔を引き起す〕根本であり、妻は束縛の根本であり、妻は苦悩の根本であり、妻は敵対の根本であり、妻は生まれつき盲目の根本であり、妻は慧眼を閉じ込める根本であり、妻は焼いている鉄の花弁が飛び散っている大地であり (taptāyopalāstṛtā bhūmir bhāryā) ⁴³²、妻は相手の人を攻撃しやすい者であり (parākramasamā bhāryā) ⁴³³、妻は邪業を顕現させる者である (mithyākarmaprabhāpinī bhāryā) ⁴³⁴。

ここでは、妻は、苦の根本であり、諸惡の根源となる存在として扱われる。このように第七品では妻を煩惱の如くに敵視するのである。

また、同品では次のようにも説かれる。

梵文写本 (MS77b1) ⁴³⁵ :

⁴³¹ 藏訳 (D Ga90b6-91a1, P Wi101b2-4, H204a4-7) :

ཁྱད་མ་ནི། ལྷག་བཟུང་གི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། ལྷག་པའི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། ལྷན་ནས་མནར་ལེམས་ཀྱི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། འཆིང་བའི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། ལྷ་ངན་གྱི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། དགྲའི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། དལྱུས་ལོང་གི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། ཤེས་རབ་ཀྱི་མེག་དང་མེམ་ལྷན་པའི་རྩ་བའོ། ཁྱད་མ་ནི། ལྷག་དང་རྩོད་པའི་གསལ་བའི་ལོང་། ཁྱད་མ་ནི། ལ་རྩལ་གཞན་ན་པར་བྱེད་པ་དང་འདྲའོ། ཁྱད་མ་ནི། ལྷག་པའི་ལས་ཀྱི་རབ་ཏུ་གཞིར་བའོ། །

玄奘訳 (T11.258c2-7) :

〔舍利子。〕當知婦人是衆苦本。是障礙本。是殺害本。是繫縛本。是憂愁本。是怨對本。是生盲本。當知婦人滅聖慧眼。當知婦人。如熱鐵花。散布於地。足蹈其上。當知婦人於諸邪性流布增長。

法護訳 (T11.838c29-839a4) :

諸苦所因。以貪染法爲諸根本。損害善法根本。憂悲苦惱根本。繫縛善法根本。穢惡根本。生盲根本。而非慧眼潔白根本。如常履踐熱鐵地上。悉令是人墮落邪道。

⁴³² taptāyopalāstṛtā bhūmir bhāryāについて、藏訳では「ཁྱད་མ་ནི། ལྷག་དང་རྩོད་པའི་གསལ་བའི་ལོང་།」(妻は焼いている鉄と石が散在している地である。)) (D Ga90b7-91a1, P Wi101b3, H204a6) とし、玄奘が「當知婦人。如熱鐵花。散布於地。」(T11.258c5-6) と訳するが、法護は「熱鐵地上」(T11.839a3) として異なる翻訳を施す。この点については、第五章第四節第二項で述べたのでそちらを参照せよ。

⁴³³ このparākramasamā bhāryāに相当する箇所では、藏訳では「ཁྱད་མ་ནི། ལ་རྩལ་གཞན་ན་པར་བྱེད་པ་དང་འདྲའོ།」(妻は相手の人に攻撃する者と等しい者である。)(デルゲとラサ版) (D Ga91a1, H204a6, P Wi101b3 (北京版には、(ར་བྱེད་པ་) がない)) と訳すが、玄奘訳では「足蹈其上。」(T11.258c6) と訳し、法護訳では「如常履踐」(T11.839a3) と訳し、それぞれ対応しない。

⁴³⁴ このmithyākarmaprabhāpinī bhāryāについては前註同様に、法護訳のみ異なる。この点については、第五章第四節第二項で述べたのでそちらを参照せよ。

⁴³⁵ 藏訳 (D Ga89b7, P Wi100b1-2, H202b5) :

དེ་ལྟར་ཤུ་ཤིང་ལྷ། ལྷོང་གི་འཛིག་རྟོན་གྱི་ལམས་ལྷ་རབ་ཏུ་བཏགས་ན། ཇི་ལྟར་བཤད་གྱི་ཁྱད་མ་རྩལ་ལྷན་པ་ནི། གཞན་གང་ཡང་མེད་དོ། །

玄奘訳 (T11.258a18-19) :

是故舍利子。我觀一切千世界中。衆生大怨無過妻〔妾女色諸欲。〕

法護訳 (T11.838b25-27) :

舍利子。於千世界次第伺察。遍觀察已。諸惡朋友。無有一人可比於妻。

【訳】 舍利弗よ。故に、千の世界を観察して、自分の妻であるように、このような敵となる者は他の誰でも決していない。

以上、本項では『菩薩藏經』第七品「持戒波羅蜜多品」における婦人や妻に対する言及を分析してきた。その結果、婦人や妻を煩惱や敵と同列に評し、それらが有害であり、厭離すべき対象として説かれていたことが明らかとなった。

まず、『菩薩藏經』第九品「精進波羅蜜多品」に、語られている律儀 (samvara)、律儀住 (samvarasthita) という名前の二菩薩の成仏の物語の一節を見てみたい。次の通りである。

[illegible]

（中略）舍利子。熾然精進如來興世之時。彼住律儀菩薩。爲轉輸王威加四域。福德所被。於熾然精進如來。極起深信。以種種上妙衣服餽飲飲食病緣醫藥什物衆具。供養恭敬尊重讚歎。於三月中。奉獻彼佛及苾芻僧。（中略）舍利子。爾時輪王說伽他已。即於熾然精進佛所。剃除鬚髮服袈裟衣。以淨信心棄捨家法。趣非家道。住空靜處勤修梵行。於時復有六十拘胝百千衆生。聞彼輪王出家學道。亦懷淨信除捨俗相。隨王出家修諸梵行。舍利子。時熾然精進如來。處世垂化久乃涅槃。輪王苾芻見佛滅度。〔悲感充塞。奉接如來遺身〕舍利。〔起窣堵波嚴飾〕供養。其後不久便致命終。生觀世多天。受天報盡。還生瞻部洲中。即於是劫。成阿耨多羅三藐三菩提。名曰妙行如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵。

208

tau ṣoḍaśavarṣasadr̥ṣau jātyā keśaśmaśrūṇy avatārya kāṣāyāṇi vastrāṇi prāvṛtya śraddhayā agārād anagāri(8)kām pravrajya viṃśatiṃ varṣasahasrāṇi brahmacaryam ceratuḥ (I) tatas cyutau punar eva brahmaloke pratyājātau (I) brahmalokāt cyutau punar eva jāmbūdvīpe pratyājātau | tena punaḥ śāriputra samayena varagandho nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho loka udapādi vidyācaraṇasampannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathih śāstā devamanuṣyā(MS99b1)ṇaṃ buddho bhagavān (I) sa tābhyāṃ tathāgata ārāgita⁴³⁷ (I) tau tathāgatasyāntike keśaśmaśrūṇy⁴³⁸ avatārya kāṣāyāṇi vastrāṇi prāvṛtya śraddhayā agārād anagārikām pravrajitau (I) tau pravrajya pūrṇaṃ varṣakoṭiṃ brahmacaryam ceratuḥ (I) anena śāriputra paryāyeṇa daśabuddhasahasrāṇy ārāgitāni (I) sarvatra ca saṃvaro bodhisattvo brahmacaryam acara(2)* (I) ekasmiṃ tathāgatasyāntike samvarasthitabodhisattvena brahmacaryam cīrnam (I) tatra śāriputra yo sau saṃvaro nāma bodhisattvaḥ sa prathamam anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhaḥ uttaptavīryo nāma tathāgato (‘)rhansamyaksambuddho loka udapādi vidyācaraṇasampannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathih śāstā devamanuṣyāṇaṃ (3) buddho bhagavān (I) (中略) tatra śāriputra yo sau samvarasthito nāma bodhisattvaḥ sa tasya bhagavata uttaptavīryasya tathāgatasya bodhiprāptasya rājābhūc cakravartī (I) yena sa tathāgataḥ satkṛto gurukṛto mānito pūjitaḥ cīvarapi(4)ṇḍapātaśayanāsa]naglānapratyayabhaiṣajyapariṣkārais trin māsāṃ sārddham bikkhusaṃghena (I) atha khalu śāriputra sa bhagavān uttaptavīryas tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho rājānam upasaṃkrāntaṃ viditvā rājāś codanarthaṃ tasyāṃ velāyāṃ imā gāthā abhāṣata || (中略) sa imā gāthā bhāṣitvā tasyaiva bhagavato (‘)ntike keśaśmaśrūṇy avatārya kāṣāyāṇi vastrāṇi prāvṛtya śraddhayā agārād anagārikām pravra(2)jitah (I) rājānam niṣkrāntaṃ pravrajitaṃ dṛṣtvā viditvā ṣaṣṭiprāṇakoṭīṇayutaśatasahasrāṇi śraddhayā agārād anagārikām pravrajanti sma | sa tasya bhagavataḥ parinirvṛtasya śarīrapūjāṃ kṛtvā tatas cyutaḥ samānaḥ rājā tuṣiteṣu devanikāyeṣu pratyājātaḥ (I) sa tuṣitebhyo devanikāyebhyāś cyutvā tasminn eva kalpe (‘)nuttarāṃ samyaksambodhim abhisambu(3)ddham sucarito nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho loka udapādi vidyācaraṇasampannaḥ yāvad buddho bhagavān (I)

【訳】彼二人（律儀菩薩と律儀住菩薩と）は、十六歳という適當〔な年齒〕になった時に、髪と鬚を切って、赤褐色の着物（袈裟）を着て、淨信によって家より家なき状態へ出家して、二万年

我昔俱時十六歳 捨家出家求出離 剃除頂（頂＝鬚㊦）髮被法服 於千歲中行梵行 又於是時俱入滅 而復往生 梵世天〔。〕於其梵世復捨壽 生此閻浮勝族中 復次舍利子。彼時復有佛出。名號最上勇猛如來應供正遍知明行 足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊彼二菩薩詣彼佛所。親近供養。尊重讚歎。發淨信心捨家出家。剃除頂 髮而被法服。於俱胝劫修行梵行。舍利子。彼二菩薩於無量世時。已曾值遇百千諸佛親近供養。於一一佛所具修梵 行。尊重讚歎恭敬供養。舍利子。時淨持菩薩過是已後。先成阿耨多羅三藐三菩提。號曰勇猛精進如來應供正遍知 明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。（中略）舍利子。彼時淨住菩薩。於彼勇猛精進如來世時作轉輪 聖王。於彼佛所尊重讚歎。復以上妙衣服飲食臥具醫藥種種供養。於三月中供養彼佛及苾芻衆。（中略）時轉輪聖 王。說是伽陀已。即於彼佛親近供養。發大信敬捨家出家。剃除鬚髮而被法服。王出家已。彼時復有六十百千俱胝 那踰多人。亦復發大信敬捨家出家。彼勇猛精進如來化行已畢。復於是時入般涅槃。時轉輪聖王。見佛滅度悲感懊 惱。收取舍利作供養已。亦復命終上生兜率陀天。彼天沒已。而復下生閻浮提中。於彼時分乃得成佛。號曰善行如 來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。

⁴³⁷ 校訂では、ārāgatasとある。

⁴³⁸ 校訂では、-smaśrūṇyとある。

の梵行を行った。それ故に、彼二人は、死〔後に〕、また梵〔天〕世界に再び生まれた。梵〔天〕世界から死〔後に〕、また瞻部洲に再び生まれた。また、舍利弗よ。かの時に、最勝香氣 (varagandha) という名前の如来・阿羅漢・正等正覚・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天たちと人たちの師・仏・世尊が世に誕生した。彼〔最勝香氣〕如来は彼二人によって奉仕された。彼二人は、〔彼最勝香氣〕如来の前に、髪と鬚を切って赤褐色の着物（袈裟）を着て、浄信によって家より家なき状態へ出家した。彼二人は、出家してから満俱胝年の間に梵行を行った。舍利弗よ。このようにして〔彼二人は〕一万の仏を奉仕した。そして、律儀菩薩は、それらのすべて〔の仏の前〕において梵行を行ったが、律儀住菩薩によって、ひとりしかない如来の前に梵行が行われた (ekasmiṃ tathāgatasyāntike samvarasthitabodhisattvena brahmacaryaṃ cīrṇaṃ)⁴³⁹。そこで、舍利弗よ。二人である者〔の中の〕律儀という名前の菩薩、彼は、より先に無上正等正菩提を完全に目覚めた。彼は、焰精進 (uttaptavīrya) という名前の如来・阿羅漢・正等正覚・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・天たちと人たちの師・仏・世尊として世に誕生した。（中略）舍利弗よ。そこで、彼二人である者〔の中の〕律儀住という名前の菩薩、彼は、菩提に到達している世尊である彼焰精進如来の輶輪王になった。〔彼輶輪王は、〕三ヶ月間に、衣服と食物と座臥の用具と病人に必須の医薬と生活用具とによって、彼如来を尊重し、恭敬し、賛嘆し、供養した。同時に比丘衆〔をも供養した。〕（中略）彼〔輶輪王〕はそれらの諸偈を言ってから、正に彼〔焰精進〕世尊の前に、髪と鬚を切って、赤褐色の着物（袈裟）を着て、浄信によって家より家なき状態へ出家した。〔彼輶輪王の〕〔家より〕出て行って出家したことを見て、知ってから、六十千百那由他俱胝の有情も、浄信によって家より家なき状態へ出家した。彼は、彼〔焰精進〕世尊の入滅後の舍利を供養して、それ故に、死〔後に〕諸兜率天界に同様に王として再び生まれた。彼は、諸兜率天界より死んでから、その同じな劫に、無上正等正菩提を完全に目覚めて妙行 (sucarita) という名前の如来・阿羅漢・正等正覚・明行足・乃至仏・世尊として世に誕生した。

この説話には、出家や出家後の梵行が無上正等正菩提を獲得するために必要な要件として描き出されている箇所が幾つか認められる。

まず、律儀菩薩が、一万の仏のいずれかの仏のもとで、出家し、そして、出家してから満俱胝年もの間、梵行を行ったので、無上正等正菩提を獲得し、焰精進 (uttaptavīrya) という名前の如来になった、という旨が述べられたが、このことは、出家することと、出家後に行われた梵行とが、如来となる因として描かれていることが読み取れる。すなわち、如来となる条件として出家という段階が想定されているのである。また、律儀住菩薩についても輶輪王となるも、焰精進如来の下で、もう一度に出家して、修行を重ねて、妙行 (sucarita) という名前の如来になったとも説かれる。ここでも律儀住菩薩

⁴³⁹ ekasmiṃ tathāgatasyāntike samvarasthitabodhisattvena brahmacaryaṃ cīrṇaṃ という句は蔵訳では完全に合致するものの、玄奘訳では「彼住律儀菩薩。常與其兄同生一處。修諸聖道。唯於一佛不修梵行。」と異なる内容で翻訳され、法護訳では、それと対応する箇所が見いだせない。

は出家してから如来となったと説かれている。つまり、出家が如来となるに不可欠な条件として意識されているのである。

次に、同様に本經の第九品中に説かれている、大精進如来（mahāvīrya tathāgata）の成仏の物語についても分析してみたい。

梵文写本（MS106a3-107b3）⁴⁴⁰：

bhūtapūrvvaṃ śāriputrāṅte dhvany asaṃkhyeyaiḥ kalpair saṃkhyeyatarair vipulair aprameyair yāvantataḥ pareṇa parata(4)reṇa yad āsīt tena kālena tena samayena padmottaro nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho loka udapādi yāvad buddho bhagavān (|) (中略) tena punaḥ śāriputra samayena varṣasataparinirvṛtasya tasya bhagavataḥ padmottarasya tathāgatasyānyo bodhisattvaḥ anyasmāl lokadhātoś cyutvā tasya pravacane jāto bhūt* rājakule (|) (7) sa jātāmātra eva evaṃ vācaṃ bhāṣate (|) adharmakule vyaṃ pratyājātaḥ dharmam eva vyaṃ pariśyāmaḥ (|) tasya dharmacārīti nāmadheyam udapādi (|) atha khalu śāriputra dharmacārī rājakumārāḥ indriyaparipācanānvayaḥ sa viṃśatavarṣasadrśo jātvyā śraddhayāgārād anagārikāṃ pravrajitaḥ (|) sann aranyeṣu vanaprastheṣu prānte(8)śu śayyāsaneṣv adhyāvasat* (|) tasyaikasya rahogatasya pratisamlīnasya devatā upasaṃkramya etam arthaṃ nivedayanti sma (|) tathāgatas tvaṃ bhikṣo bhaviṣyasi vighuṣṭaśabdaḥ sambuddho bodhisattvapiṭake dharmaparyāye bhiyuṣyadhve (|) mā cāpratilabdham* vīryam* (MS106b1) sraṃsayiṣyasi (|) sa tāsāṃ devatānāṃ antikād etad vacanaṃ śrutvā tuṣṭa ⁴⁴¹ udagra āttamanāḥ pramuditaḥ prītisaumanasya jātāḥ (|) grāmanagaranigamarāṣṭrarājadhānīṣu janapadena janapadaṃ bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ yaṃ parimārgayann anvacaran (|) (中略) pūrvasyāṃ diśi daśamāl lokadhāto ratnagarbho nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddha āgatyāṣṭau dharmamukhapadāni saṃprakāśayaty (|) ebhir aṣṭābhīr dharmamukhapadair bodhisattvapiṭako dharmaparyāyo (‘)nugantavyaḥ (|) sa tair aṣṭābhīr dharmamukhapadair acimtyena bāhu(6)śrutyena samanvāgato (‘)bhūt* niruttareṇa (|) tasmāt pṛthivīpradeśād utthāya prākramat* (|) so (‘)sraṃsitavīryapāramitāyāṃ carann imam eva bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ saṃprakāśayan* grāmanagaranigamajanapadarāṣṭrarājadhānīṣv anvacaran* ṣaṣṭiṃ varṣāṇi (|) tena ṣaṣṭyā varṣaiḥ paripūrṇāḥ prāṇakoṭīr devamānuṣī triṣu yāneṣu pratiṣṭhāpi(7)to (‘)bhūt* (|) sa kālaṃkurvaṃ praṇidhānam akarot* (|) tatraiva buddhakṣetre manuṣyāṇāṃ sahabhāvyatāyai upapattaye (|)

sa kālagataḥ san*s tatraiva jāmbūdvīpe pratyājātaḥ anyatarasmim śreṣṭhikule (|) sa jātāmātra evaṃ vācaṃ bhāṣate (|) dharmacārī bhaviṣyāmi dharmacārī bhaviṣyāmīti tasya dharmacārīti pūrvakaṃ nāmadheyam udapādi (|) sa sadvarṣasadr(8)śo jātvyā śraddhayāgārād anagārikāṃ pravrajitaḥ (|) tasyācirapravrajitasya punar eva bodhisattvapiṭako dharmaparyāyaḥ āmukhībhūtaḥ (|) sa bodhisattvapiṭakapraṇiṣṭhitaḥ ṣaṣṭiṃ

⁴⁴⁰ 蔵訳：D Ga140a4-142b4, P Wi158a5-161a4, H277a3-281a1；玄奘訳：T11. 284b29-286a6；法護訳：T11. 861c7-862c4。

⁴⁴¹ 校訂では、tuṣṭa??とある。

varṣāṇi grāmād grāmaṃ nagarād nagaraṃ janapadāj janapadam enam eva bodhisattvapiṭakam* (MS107a1) dharmaparyāyaṃ saṃprakāśayamāno (‘)nvacaran* (l) tena taiḥ śaṣṭhyā varṣair aparāṃ prāṇikoṭīṇ devamānuṣīkāyāḥ prajāyās triṣu yāneṣu paripācitā yad idam śrāvakayāne pratyekabuddhayāne anuttare mahāyāne (l) sa punar eva kālāṃkuryāt taṃ praṇidhānam akarot* manuṣyapratilāmbhāya (l) sa praṇidhānabalena tatraiva jāmbūdvīpe (‘)nyatamasmin rāja(2)kule pratyājātaḥ (l) tasya jātāmātrasya devatayā śabdo niścāritaḥ (l) dharmmottaro batāyaṃ sattvo loka utpannaḥ dharmmottaro batāyaṃ sattvo loka utpanna iti (l) tasya dharmmottaro dharmmottara iti nāmadheyam udapādi (l) sa punar evendriyānāṃ paripākānvayād vimśativarṣasadrśo jātyā śraddhayāgārād anagārikāṃ pravrajitaḥ (l) tasya tathāpravrajita(3)sya dharmmottarasya bhikṣoḥ smṛtibalādhānena prajñābalādhānena punar eva bodhisattvapiṭako dharmaparyāyaḥ āmukhībhūtaḥ (l) iti hi śāriputra dharmmottaro bhikṣur imam eva saṃśayacchedanaṃ bodhisattvapiṭakaṃ dharmmaparyāyaṃ

nānāgrāmanaganiganigamajanapadarāṣṭrarājadhānīṣu saṃprakāśayati paripūrṇāni śaṣṭi varṣasahasrāṇi (l) sa śaṣṭyā varṣa(4)sahasrair aparāṃ prāṇikoṭīṇ devamānuṣāsūryāprajāyā anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau paripācayati (l) sa punar eva kālāṃkurvaṃ praṇidhānam akarot* manuṣyapratilāmbhāya (l)

sa kālāṃkṛtvā tatraiva jāmbūdvīpe pratyājāto (‘)nyatarasmiṃ grhapati mahāsāle kule (l) tasya jātāmātrasyaivānyatarayā devatayā śabdo niścāritaḥ (l) smṛtipratilabdho ba(5)tāyaṃ sattvo loka utpannaḥ smṛtipratilabdho batāyaṃ sattvo loka utpanna iti (l) tasya smṛtipratilabdhaḥ smṛtipratilabdha iti nāmadheyam udapādi⁴⁴² (l) sa indriyaparipācakānvayād vimśativarṣasadrśa eva jātyā śraddhayāgārād anagārikāṃ pravrajitaḥ (l) sann asaṃpramuṣita⁴⁴³ eva smṛtyācīṃtyena niruttareṇa bāhuśrutyena (6) samanvāgato (‘)bhūt* (l) sa śaṣṭim eva varṣāṇi dharmam deśayati gāmanaganiganigamajanapadarāṣṭrarājadhānīṣv anvācaran* (l) yad idam imam eva sarvasaṃśayacchedanaṃ bodhisattvapiṭakaṃ dharmaparyāyaṃ grāmanaganiganigamajanapadarāṣṭrarājadhānīṣu saṃprakāśayati | tena taiḥ śaṣṭyā varṣaiś catasraḥ prāṇakoṭyaḥ sadevamānuṣāsūryāḥ prajā(MS107b1)yāḥ paripācitā abhūvan* s(sic!)triṣu yāneṣu yad idam śrāvakayāne pratyekabuddhayāne (‘)nuttare buddhayāne (l) iti hi śāriputra dharmapratisaraṇo bhikṣus tataś cyutaḥ kālagataḥ san pūrvasyāṃ diśi ratnagarbhasya tathāgatasya buddhakṣetre pratyājātaḥ (l) iti hi śāriputra tena bodhisattvena mahāsattvena paripūrṇāḥ śaṣṭiḥ prāṇakoṭyaḥ (2) devamānuṣāsūryāḥ prajāyāḥ triṣu yāneṣu paripācitā abhūvan* (l) sa punaḥ śāriputra bodhisattvo mahāsattvaḥ samanantarapratyājātas tasmin buddhakṣetre ratnagarbhasya tathāgatasyācīṃtyena niruttareṇa bāhuśrutyena samanvāgato (‘)bhūt* (l) sa tatra yāvad āyur atiṣṭhat* (l) tataś cyutaḥ kālagataḥ sa punar eva tasmin buddhakṣetre pratyā(3)jāto yatra sa bhagavān padmottaras tathāgato (‘)bhūt*(l) tatra lokadhātau rājakule pratyājātaḥ (l)

【訳】 舍利弗よ。遙か大昔、はかりきれなくて、思量もできないほどの長い無数劫の無量阿僧企耶、乃至〔その数を〕超えてより昔の過去世に、その時かの時に、蓮華勝（padmottara）という名

⁴⁴² 校訂では、udapātiとある。

⁴⁴³ 校訂では、asaṃpramucitaとある。

前の如来・阿羅漢・正等正覚・乃至、仏・世尊が世に出現した。(中略) また、舎利弗よ。かの時に、世尊である彼蓮華勝如来の入滅の百年〔の後に〕、或る一人の菩薩は死んでから他の世界から王の家族に生まれた。彼〔極高行如来 (atyuccagāmī tathāgata)〕の語りによれば、王の家族に生まれしばかりの彼〔菩薩〕は、次のように話す。「我々は非法な家族 (adharmakula) に生まれても、正に〔正〕法に従事しましょう」と、〔故に、〕彼には法行 (dharmacārin) という名字が生じられた。舎利弗よ。その時、法行王子は〔諸〕根が次第に成熟して二十歳という適當〔な年齒〕になった時に、彼は清浄信によって家より家なき状態へ出家した。〔出家に〕している間に、彼は諸々の阿蘭若である森の台地の縁を住所として住んでいた。天神たちは彼の一つの離れたのである独居所に近づいて、「比丘よ。あなたは、〔もし〕広く知られる正覚者である如来になりたければ、あなたは菩薩蔵法門に向かって着手してください。そして〔その菩薩蔵法門が〕得られない間に、あなたは精進を懈怠しないべきです。」というこの事を知らせた。彼は彼ら天神の面前から、この話を聞いてから、歡喜になり、喜悅になり、狂喜になり、歡樂になり、快樂と愉快が生起になる。〔彼は、〕村と町と市場と王国と王宮とにおいて、地域から地域までにこの菩薩蔵法門を求めるために行き回っていた。(中略) 阿羅漢であり、正等正覚である宝蔵 (ratnagarbha) という名前の如来は、東方にある第十世界から (daśamāl lokadhāto) ⁴⁴⁴、〔法行比丘の前に〕来る方式で、〔法行比丘の前に来る、来てから、彼は、法行比丘に〕、八法門句 (aṣṭa dharmamukhapada) を開示した。これらの八法門句によって、菩薩蔵法門が通達されるべきである。彼は、これらの八法門句によって、最上且つ不可思議な多聞が成就された。彼は、その場所から立ち上がって遊行した。懈怠のなしに、精進波羅蜜多において行ずている彼は、六十年間に、村と市場と地方と王国と王宮に行き回っていて、正にこの菩薩蔵法門を演説していた。六十年の間に、彼によって、満俱胝〔の数の〕天と人間との有情たちが三乗に安住させられた。彼は、死にながら、誓願を作った。「人間たちの共に修習されるべきもののために、ここの同じな仏土に生まれを」と。

⁴⁴⁴ *daśamāl lokadhāto* : 蔵訳では、それと相当する内容があるが、玄奘訳と法護訳にはない。

と人身を持つ衆生たちは三乗、すなわち声聞乗と独覺乗と無上大乘とにおいて成熟させられた。彼は死をしよう〔とする時に〕、再び、「人身を獲得を」というその誓願を作った。彼は、誓願力によって、そこと同じな瞻部洲の或る王の家に再び生まれた。生まれたばかりの彼に対して、ひとりの天神は声を発した。「ああ！これが法勝 (dharmmottara) という有情は世に生まれた。ああ！これが法勝という有情は世に生まれた。」と、彼に対して法勝〔と称したので、彼には〕法勝という名字が生じられた。諸根の次第に成熟した故に、二十歳という適當〔な年齒〕になった時に、彼は、清浄信によって、再び家より家なき状態へ出家した。同様に、念力の使用と慧力の使用によって、出家した彼法勝比丘には菩薩藏法門が再び目前に現れた。だから、舍利弗よ。法勝比丘は、疑惑を断つのであるこの同じの菩薩藏法門を、さまざまの村と町と市場と地方と王国と王宮とに、満六万年間に (śaṣṭi varṣasahasrāṇi)⁴⁴⁸ 演説した。彼は、六万年間に (śaṣṭyā varṣasahasrair)⁴⁴⁹、他の俱胝の有情である天と人と阿修羅 (asura)⁴⁵⁰ とという衆生たちを、無上正等正菩提において成熟させた。彼は、死んでいる〔時に〕、再び、「人身を獲得を」という誓願を作った。

彼は、死んでから、そこと同じな瞻部洲の或る大沙羅樹 (mahāsāla) 長者の家に再び生まれた。生まれたばかりの彼に対して、或るひとりの天神は声を発した。「ああ！これが得念 (smṛtipratilabdha) という有情は世に生まれた。ああ！これが得念という有情は世に生まれた。」と、彼に対して得念〔と称したので、彼には〕得念という名字が生じられた。彼は〔諸〕根が次第に成熟した故に、丁度二十歳という適當〔な年齒〕になった時に、清浄信によって、家より家なき状態へ出家した。忘失していないこそ、念によって、彼は不可思議且つ無上な多聞を成就した。彼は、六十年の間に (śaṣṭim varṣāṇi)⁴⁵¹、村と町と市場 (nigama)⁴⁵² と地方と王国と王宮とに行き回っていて法を演説した。すなわち、一切疑惑を断つのであるこの同じの菩薩藏法門を、村と町と市場と地方と王国と王宮とにおいて、演説した。それらの六十年間に (śaṣṭyā varṣais)⁴⁵³、彼によって、四俱胝 (catasraḥ -koṭyaḥ)⁴⁵⁴ の有情である天と人間と阿修羅 (asura)⁴⁵⁵ とという衆生たちが、三乗すなわち声聞乗と独覺乗と無上仏乗 ((a)nuttare buddhayāne)⁴⁵⁶ において成熟させられた。従って、舍利弗よ。法を抛り処としている (dharmapratisaraṇo)⁴⁵⁷〔彼得念〕比丘は、これ

⁴⁴⁸ ここでは、法護訳と梵文写本ともに「六万年」とあるが、玄奘訳では「六十年中」とする、蔵訳では「ཆོད་ཆོད་དུ་གསུང་བ་ (六千万年)」とする。

⁴⁴⁹ ここでは、法護訳と梵文写本ともに「六万年」とあるが、玄奘訳では「六十歳」とする、蔵訳では「ཆོད་ཆོད་དུ་གསུང་བ་ (六千万年)」とする。

⁴⁵⁰ ここでは、法護訳と梵文写本ともに「阿脩羅」とあるが、玄奘訳と蔵訳にはそのような内容は無い。

⁴⁵¹ ここでは、梵文写本、玄奘訳、法護訳の三本ともに「六十年間に」とするが、蔵訳では、「ཆོད་ཆོད་ཆོད་ཆོད་ (六十年の間に)」とする。

⁴⁵² 蔵訳では、ここの「-nigama- (市場)」に対応する内容は無い。

⁴⁵³ ここでは、梵文写本と玄奘訳と法護訳の三本ともに「六十年中」とするが、蔵訳では「ཆོད་ཆོད་ཆོད་ཆོད་ (六万年の間に)」とする。

⁴⁵⁴ ここでは、梵文写本と蔵訳と法護訳の三本ともに「四俱胝」とするが、玄奘訳では「(滿) 一拘胝」とする。

⁴⁵⁵ ここでは、法護訳と梵文写本ではともに「阿脩羅」とあるが、玄奘訳と蔵訳には、そのような内容は無い。

⁴⁵⁶ ここでは、梵文写本では (a)nuttare buddhayāne (無上仏乗) とあるが、蔵訳では「མངའ་བྱུང་གི་ཐུགས་ཀྱི་ཐུགས་ཀྱི་ཐུགས་ (仏の無上乘)」と訳している、法護訳では「無上智佛乗」と訳している、玄奘訳では「無上佛智」と訳している。

⁴⁵⁷ ここでは、梵文写本では「dharmapratisaraṇo (法を抛り処としている)」とあるが、蔵訳では「ཆོས་ཀྱི་ཐུགས་ (法を示す演説する)」とある。

より死にして、死んだ後に、東方にいる宝蔵如来の仏土に再び生まれた。従って、舎利弗よ。彼菩薩摩訶薩によって、満六十俱胝の有情 (śaṣṭiḥ prānakotyah) ⁴⁵⁸である天と人と阿修羅 (asura) ⁴⁵⁹とという衆生たちが、三乗において成熟させられた。また、舎利弗よ。彼菩薩摩訶薩は、間断なしに、宝蔵如来のその仏土に再び生まれた。〔そして〕不可思議かつ無上な多聞を成就した。彼はそこに寿である限りに住した。それより死にして、死んで後に、彼は、再び世尊である蓮華勝如来がいるところ、その仏土に再び生まれた。その世界では、王の家に再び生まれた。

ここでは、説話の主人公であり、菩薩蔵法門の求法者にして弘法者である菩薩は、如来となる前に、少なくとも八回は人間として世に生まれたことが示される。そして、生まれてから、適当な年齢となった際には、王家や裕福な家を離れ、家なき状態へと出家にする。ここで注目すべき点は、彼菩薩は如来となるべく、必ず出家している点である。この点は、菩薩蔵法門において、出家の重要さと必要性を示唆していることと言えよう。そして、菩薩蔵法門の求法者と弘法者が出家者に限られていることを示唆していることも指摘できよう。

また、出家の必要性を述べるものとして次のような説話も認められる。次の通りである

梵文写本 (MS107b3-108a3) ⁴⁶⁰ :

tena punaḥ samayena tasmin buddhakṣetre atyuccagāmī nāma tathāgato loka udapādi arhaṃ samyaksambuddhaḥ (I) (中略) tena punaḥ samayena bodhisattvaḥ śūradatto nāma rājakumāro (‘)bhūt* (I) (中略) atha khalu śāriputra sa bhagavān atyuccagāmī tathāgatas tasya śūradattasya kumārasya(7)dhyāśayaṃ viditvā pūrvayogapratisamyuktāṃ kathāṃ samprakāśitavān* (I) atha khalu śāriputra sa śūradatto rājakumāras tāṃ pūrvayogaṃ pratisamyuktāṃ kathāṃ śrutvā prasādaṃ pratilabdhavān* (I) sa prasannacetāḥ sārddham (MS108a1) tābhir aṣṭābhiḥ prānakotībhiḥ śraddhayāgārād anagārikāṃ pravrajitah (I) sa tatra yāvad āyuh brahmacāryam acarad (I) bodhiṃ prārthayamānaḥ sa tena bhagavatātyuccagāminā (2) tathāgatena vyākṛtaḥ ayaṃ bhikṣavaḥ śūradatto bodhisattvo mahāsattvo mamānantaram anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambhotsyate mahāvīryo nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho loka bhaviṣyati yāvad buddho bhagavān (I) sa tasya bhagavato (‘)tyuccagāminas tathāgatasya parinirvṛtasya śārīrapūjaṃ kṛtvā saddharmam ca sandhārya paścime kāle (3) (‘)nuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhaḥ mahāvīryo nāma tathāgato (‘)bhūt* (I)

【訳】また、舎利弗よ。かの時に、その仏土には極高行 (atyuccagāmī) という名前の如来は世に誕生した。(中略) かの時に、勇施 (śūradatta) という名前の菩薩である王子もいった。(中略) 舎利弗よ。その時、世尊である極高行如来は、彼勇施童子の深心を知ってから、〔彼の〕宿世の行為

⁴⁵⁸ ここでは、「有情」の数については、法護訳と梵文写本ではともに「六十俱胝」とあるが、玄奘訳では「六十八拘胝」となり、対応しない。

⁴⁵⁹ ここでは、法護訳と梵文写本では一致で「阿脩羅」という内容があるが、玄奘訳と藏訳では、そのような内容はない。

⁴⁶⁰ 藏訳 (D Ga142b5-143a7, P Wi161a4-162a1, H281a1-282a3) ; 玄奘訳 (T11.286a8-b7) ; 法護訳 (T11.862c6-25)

と関係のある物語を示した。舍利弗よ。その時、彼勇施王子は、その宿世の行為と関係のある物語を聞いてから清浄信を得た。清浄心を持つ彼は、それらの八俱胝の有情 (aṣṭābhiḥ prāṇakoṭībhiḥ)⁴⁶¹とともに、清浄信によって家より家なき状態へ出家した。其時に、彼は、寿命がある限りに、〔その限りに〕梵行を行った。菩提を求めている彼は、世尊である彼極高行如来によって、「比丘たちよ。この勇施菩薩摩訶薩は、私の後直ちに、無上正等正菩提を完全に目覚めて大精進という名前の如来・阿羅漢・正等正覺・乃至、仏・世尊として世に現われるであろう。」と授記された。彼は、世尊である彼極高如来の入滅〔後〕の舍利に対する供養を為して、そして、正法を担って、後時に無上正等正菩提を完全に目覚めて大精進という名前の如来になった。

ここでは、勇施という菩薩が世に生まれ、出家して梵行を行い、極高行如来 (atyuccagāmī tathāgata) の入滅後に、如来になったと描かれる。つまり、ここでも出家と出家後の梵行が如来となる必要条件であることが読み取れる。

また『菩薩藏經』第十二品の説話にも出家の必要性が述べられる。次の通りである。

梵文写本 (MS136a1-2) ⁴⁶² :

atha khalu śāriputra dīpaṃkaro bodhisattvo mahāsattvaḥ śuddhāvāsakāyikair devaiś coditas san* śraddhayā agārād anagarikāṃ pravrajitaḥ (1) tasyām eva rātryām anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhas (1) tasyām eva ca velāyāṃ eva (2) saṃpad udāraḥ kalyāṇaḥ kīrtiśabdaśloko bhyudgata iti hi sa bhagavāṃ dīpaṃkaras tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho yāvad buddho bhagavān (1)

【訳】舍利弗よ。その時、放光菩薩摩訶薩は、諸々の浄居〔天〕に属する天たちによって励まされて (codita) ⁴⁶³いて、浄信によって家より家なき状態へ出家した。〔彼は、〕正にその〔出家した〕夜に、無上正等正菩提を完全に目覚めた。そして、即時に、最も善い名称と名聞が具足されて広げられる。すなわち、彼は、放光〔という名前の〕如来・世尊・阿羅漢・正等正覺・乃至、仏・婆伽梵になる。

ここでは、放光菩薩が、出家してから無上正等正菩提を証得して、如来となった旨が記されている。このことから、出家が成仏の前提であることがはっきりと窺える。

梵文写本 (MS138a4-5) ⁴⁶⁴ :

⁴⁶¹ aṣṭābhiḥ prāṇakoṭībhiḥ (八俱胝有情) : 玄奘訳では「六十八拘胝眷屬」と訳している。藏訳と法護訳では、「有情 (眷屬) 八十俱胝」と訳している。

⁴⁶² 藏訳 (D Ga195a1-3, P Wi221b3-5, H364a4-b1) ; 玄奘訳 (T11.317b19-23) ; 法護訳 (T11.882c1-5)。

⁴⁶³ coditas : ここでは、玄奘訳では、「開悟」と訳している、法護訳では、「警覺開示」と訳している。藏訳では、「བསྐྱེད་པ་ (激励)」と訳している。

⁴⁶⁴ 藏訳 : D Ga198b5-6, P Wi226a-5, H370a5-7; 玄奘訳 : T11.319a11-13; 法護訳 : T11.883c21-24。

iti hi śāriputra vyākaraṇapratilabdho meghe māṇava āśvāsaprāptas tasmād gaganatalād avatīrya bhagavato dīpaṃkarasya tathāgatasyāntike śraddhayāgārād anagārikāṃ pravrajya brahmaca(5)ryam acarat* (|)

【訳】 舍利弗よ。だから、授記を得た少年の雲は、慰めを得てその虚空から世尊である放光如来の面前に〔空中から〕降りて、淨信によって家より家なき状態へ出家して梵行を行う。

ここでは、雲（megha）という名前の少年婆羅門（菩薩である時の釈尊）が、淨信によって家より家なき状態へ出家して梵行を行うことが示される。まさにこれは如来となるためには出家が必要であることを意味しているといえよう⁴⁶⁵。

また、本經の第十一「般若波羅蜜多品」に説かれている、「菩薩藏法門」を受持してから十種の功德利益を獲得するという文脈中にある、「pravrajyābhirataś ca bodhicittotpādam pratilabhate (|)」（【訳】 また、菩提心を発すること（bodhicittotpādam）⁴⁶⁶を得て出家することを喜ぶ。）⁴⁶⁷」という説示も、出家を肯定的にとらえている箇所と言えよう。

以上、『菩薩藏經』のいくつかの品の散文箇所を検討してきたが、いたるところで如来となる条件として出家と梵行が想定されていることが見て取れた。そこで、次に、『菩薩藏經』の韻文箇所についても見てみたい。ここでも出家の必要性を述べる箇所が認められる。

まず、この他にも第九品において、律儀住菩薩が、超越如来（abhyudgata tathāgata）に宣言する箇所にそのような趣旨の内容が述べられる。次の通りである。

梵文写本（MS97b3）⁴⁶⁸：

karitva vipulāṃ pūjāṃ hitāya sarvaprāṇināṃ |

⁴⁶⁵ また、本説話と近似する形で出家の必要性が述べられる箇所が幾つか存在する。例えば、第七品に説かれる、サーラ王如来が菩薩である時の成仏の物語が次の通りである。

so tenāntareṇa saptabuddhasahasrāṇy ārāgitavān* sarveśāṃ ca mahat pūjopasthānam akarod (|) anuttarāṃ samyaksambodhiṃ prārthayamānaḥ sarvatra ca brahmacāryam acarān (|) sa paścime kalpe paścime samucchraye paścime ātamabhāvapratilambhe svakuśalamūlaiḥ saṃcoditāḥ (|) sālārājo nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho loka udapādi vidyācārāṇasampannah sugato lokavid anuttarāḥ puruṣadamyasārathih śāstā devamanuṣyānāṃ buddho bhagavān* (|) (MS76b3-5, 【訳】 彼（得念菩薩）は、その〔二十俱胝劫の〕間に、七千⁴⁶⁵の仏を奉仕して〔彼らの〕全員に大きな供養を為した。そして、無上正等菩提を求めぬにすべての時処において梵行を行っていた。彼は、最後の劫の最後の輪廻中に、最後の人身を獲得した時に、自らの諸善根によって、開悟した。〔従って、彼は、〕サーラ王（sālārāja）という名前の如来・阿羅漢・正等覺・明行足・善逝・世間解・無上調御丈夫・諸天と諸人間の師・仏・世尊として世に誕生した。）（蔵訳：D Ga88b1-4, P Wi99a1-4, H200b4-7; 玄奘訳：T11.257b13-20; 法護訳：T11.838a5-11。）

⁴⁶⁶ bodhicittotpādam: ここでは、玄奘訳では「發勝心」、法護訳では「發淨信心」、蔵訳では「ཐོག་མཐོང་བྱུང་པ་ (発心)」と訳している。

⁴⁶⁷ ここでは、玄奘訳と法護訳とはほぼ一致でそれぞれに「恒發勝心樂欲出家。」(T11.315a15-16)、「發淨信心常樂出家。」(T11.880c13)と訳しているが、蔵訳では、その二漢訳とは少し違って「ཐོག་མཐོང་བྱུང་པ་ལ་དཀའ་བར་ཞེས་པ་བྱུང་པ་འཛིན་པ་དང་།」(D Ga190a6, P Wi216a4, H356b6)と訳している。おそらく、蔵訳が漢訳と異なる訳をしているのは、蔵訳は単に梵文原文の単語をそのままの順序で翻訳した結果であろう。

⁴⁶⁸ 蔵訳 (D Ga125a4-5, P Wi141a2-3, H254b7)：

ཐོག་མཐོང་བྱུང་པ་ལ་དཀའ་བར་ཞེས་པ་བྱུང་པ་འཛིན་པ་དང་། ཐོག་མཐོང་བྱུང་པ་ལ་དཀའ་བར་ཞེས་པ་བྱུང་པ་འཛིན་པ་དང་། |

玄奘訳 (T11.277a15-16)：

廣行如是供養已 利益無量諸群生 我於爾時便出家 精勵勤修於梵行

法護訳 (T11.855b23-24)：

作是廣大供養已 於佛如來求出家 爲利一切諸有情 誓行一切清淨行

tatraiva pravrajitvā ca brahmacaryaṃ cari ahaṃ ||

【訳】一切有情の利益のために沢山の供養してから、
ここでこそ、私は出家して梵行を行いたい（cari）⁴⁶⁹。

梵文写本（MS97b3）⁴⁷⁰：

karitva pūjāṃ vividhāṃ anekāṃ nānāprakārābahukalpakoṭīyo |

prahāya kāmāṃ laghu pravrajitvā careya nityaṃ ahu brahmacaryaṃ ||

【訳】無数の俱胝劫の間に、多種多様であり、多くであり、様々の種類のである
供養をして、
食欲を断って速やかに出家して私は常に梵行を行いたい。

これら二偈で、菩薩は自らの出家と梵行を決意表明する。この点からも如来となるためには出家と梵行が必要であることが見て取れる。

また菩薩は自らの出家を決意表明するだけでなく、家族乃至他の一切衆生たちにも出家を推奨している。次の通りである。

梵文写本（MS95b1）⁴⁷¹：

mātā pitā ca dharmesmiṃ niyojeti punaḥ punaḥ |

pravrajyāṃ sarvasattvāna kṣipraṃ eva samādade ||

【訳】屢々父と母（mātā pitā）⁴⁷²を法に（dharmesmiṃ）⁴⁷³専念させる（niyojeti）⁴⁷⁴。
早速に一切衆生に（sarvasattvāna）⁴⁷⁵出家することを勧めた。

以上、いくつかの韻文も確認してみたが、これらでは菩薩たちに、出家を推奨しているとみて問題ないであろう。

⁴⁶⁹ cari: √Car, Opt. 1pers. sg. (BHS. I . p. 141, §29.9)

⁴⁷⁰ 蔵訳 (D Ga125b1, P Wi141a7-8, H255a4-5)：

ལྟགས་པ་བྱེ་མང་ནས་པ་རྣམས་ཀྱི། མཚན་པ་ཞེན་པོ་དག་ནི་བཞིན་སྐྱོར་ནས། རྒྱུ་དུ་འདོད་པ་མངས་ཏེ་རབ་བྱངས། ཚངས་པར་བྱུང་པ་བདག་ནི་བྱུང་པར་སྟོ།

玄奘訳 (T11.277a25-26)：

如是廣修諸供養 乃經無量拘胝劫 永斷欲法捨居家 精勤奉修清淨行

法護訳 (T11.855c4-5)：

願於俱胝多劫中 常作廣大供養事 出家遠離諸欲境 當行一切清淨行

⁴⁷¹ 蔵訳 (D Ga121a5, P Wi136b1, H249a2-3)：

མ་དང་མཉེན་མཉེས་འདི། ཡང་དང་ཡང་དུ་རྒྱུ་བ་དང་། རིམ་མཉེན་མཉེས་པ་འབྱུང་བར། རྒྱུ་པ་ཉིད་དུ་ཞེན་དུ་བཞག།

玄奘訳 (T11.275a6-7)：

父母妻子眷屬等 恒樂安勤正法中 衆生厭世求出家 讚美勸助令其果

法護訳 (T11.853b19-20)：

所有父母并眷屬 及餘一切有情類 數數引導令出家 速能攝受歸正道

⁴⁷² mātā, pitā : mātṛ, pitṛのAcc. sg. (BHS. I . p. 90, § 13. 10)

⁴⁷³ dharmesmiṃ: Loc. sg. (BHS. I . p. 54, § 8. 70)

⁴⁷⁴ niyojeti: ni-√Yuj, pres. caus. 3pers. sg. (Presents in eti BHS. I . p. 139, § 28. 46)

⁴⁷⁵ sattvāna: sattvaのGen. pl. (BHS. I . p. 59, § 8. 117)

以上、本項では、散文箇所と韻文箇所の両者を検討し、それぞれにおいて如来となる条件として出家と梵行が想定されていることを確認した。つまり成仏道を歩むのであれば、出家することが絶対に必要なのである。

第四項、阿蘭若住について

さきの項では出家について検討したが、『菩薩藏經』では出家を述べる箇所の近辺で阿蘭若住についても言及されることが認められる。そこで本項では阿蘭若住について検討を加えてみたい。

まず、第八品で、魔業とは何かという説示では出家と阿蘭若について述べられる。次の通りである。

梵文写本 (MS82b3-4) ⁴⁷⁶ :

tatra katarāṇi mārakarmāṇi (|) yad idaṃ pātragaṭaṃ cittaṃ mārakarma (|) cīvaragaṭaṃ cittaṃ mārakarma |
(中略) pravrajyāvicchandanam mārakarma | (中略) aranyavāsavicchandanam mārakarma |
a(4)nuttarāyāḥ samyaksaṃbodher vicchandanam mārakarma | …

【訳】そこで、諸魔業とは何か。すなわち、鉢に附着する心は魔業である。衣に附着する心は魔業である。(中略) 出家することを厭離するのは魔業である。(中略) 阿蘭若に住することを厭離するのは魔業である。無上の正等菩提を厭離するのは魔業である。…

ここでは、出家することあるいは阿蘭若に住することを厭離とするのは、すなわち魔業であると述べ、出家と阿蘭若処住を推奨していると言えよう。

次に、本經の第九品では、轉輪王になった律儀住 (samvarasthita) 菩薩が、兄であった焰精進如来 (uttaptavīrya tathāgata) の面前で決意表明を行う。そこでも阿蘭若住が登場する。次の通りである。

梵文写本 (MS99b7) ⁴⁷⁷ :

śoṣiṣye ātmamānsāni gṛhaṃ sarvaṃ jahāmi ca '

raṇye⁴⁷⁸ gatvā mariṣyāmi buddhabodhīyakāraṇaṃ ||

【訳】仏菩提が生じるために、私は、家とすべてのものを捨てる、そして、自分の肉を枯れるべきであり、阿蘭若に行って〔そこで〕死ぬべきである。

⁴⁷⁶ 藏訳 (D Ga98b4-7, P Wi110a8-b2, H215b6-216a3) ; 玄奘訳 (T11.262c28-263a4) ; 法護訳 (T11.842b21-27)。

⁴⁷⁷ 藏訳 (P Wi145b4-5, D Ga129a5, H260b6-7) :

མངས་སྤྱོད་ཀྱི་ཉེ་བས་ཉེ། བདག་གི་ཤ་ཡང་བསྐྱུར་བར་བཞི། རྒྱལ་ཁུན་ཀྱང་ནི་ཐང་བར་བཞི། འགོད་པར་མཆིས་ནས་འཁྱུག་བར་བཞི།

玄奘訳 (T11.279a21-22) :

我當悉捨於家國 要往空閑至命終 寧使肌肉並乾枯 爲佛菩提因緣故

法護訳 (T11.857b14-15) :

假使身肉皆枯竭 至於殞滅曠野中 誓捨國邑諸宮殿 希求最上佛菩提

⁴⁷⁸ 筆者：藏訳の「དགོན་པར」、玄奘訳の「空閑（処）」、法護訳の「曠野中」という訳から、ここのraṇyeは、偈文の韻律のために、aranye（阿蘭若に）という単語がその最初のaが消されてなったのはずである。

ここでは阿蘭若住がまとめの中で列挙されることから成仏道の重要な項目であったことが窺える。

以上、本項では、『菩薩藏經』における阿蘭若住の記述を検討してきた。その結果、阿蘭若住はいずれも肯定的に用いられ、そして推奨されていることが確認できた。阿蘭若に住まうということは家には住まわないということである。つまり、この点からも『菩薩藏經』は出家を推奨する傾向があると言える。

第四節、結び

以上、本章では『菩薩藏經』の序分と正宗分、すなわち、解脱道と成仏道の二点を検討し、本經の菩薩の性質が出家菩薩なのか在家菩薩なのかを検討してきた。

まず、序分の検討では、無上正等正菩提を獲得するためには出家が必要であるという点や、在家には様々な過失が存在することが述べられていたことを確認した。このことから序分では出家を推奨しているとみなせよう。

次に正宗分の検討では四つの視点から菩薩の性質を検討した。まず、第一項では『菩薩藏經』における家や家族についての否定的な見解を確認した。つづく第二項では『菩薩藏經』において妻や婦人たちが有害な性質であると述べていることを確認した。そして第三項で如来となるため、正等覺を獲得するためには、出家して梵行することが想定されていることを確認した。最後に第四項では、家ではなく阿蘭若に住まうことが説かれていることを確認した。つまり、第一項や第二項で確認した家や家族や妻や婦人に対する否定的な態度、それは、在家菩薩を、妻あるいは婦人から遠ざからせ、女性に対する愛染心を断たせること、すなわち、出家を推奨する傾向にほかならない。さらにまた、婦人あるいは妻に対して敵視的な姿勢を取っている諸説示は、出家後の梵行の推奨の伏線とも言えるであろう。そして『菩薩藏經』では第三項で確認したように、成仏の必須条件として出家と梵行を想定する。また、第四項では阿蘭若住に関する記述を確認したが、阿蘭若に住むためには家を出る必要があり、この点は出家を推奨する傍証となりえよう。

以上、『菩薩藏經』の全体を通して、菩薩の性質を明らかにすべく、出家の取扱を検討してきた。その結果、『菩薩藏經』は成仏の条件として出家を想定し、成仏道を歩む菩薩には出家を推奨していることが明らかとなった。

先の章の『菩薩藏經』「布施波羅蜜多品」の検討では、財施を強調することから在家菩薩に対する説示であった可能性を確認したが、本章の検討を踏まえれば、『菩薩藏經』は在家菩薩を対象とするも、成仏を目指すためには出家することが必要であることから、在家菩薩の出家を促すための教えであると位置づけられよう⁴⁸⁶。

⁴⁸⁶ 相馬一意 [1978, p. 164] は「一般に、出家主義的傾向は大乘仏教としては後期のものとして考えられている。」と述べるが、この点から出家主義的性格を有する『菩薩藏經』が大乘仏教として後期のものかどうかについては判断することは難しいであろう。しかし、第四章で検討した結果、Ulrich Pagel [1995, p. 326] が述べるように大

乗仏教の初期に出来たものとも位置づけがたい。『菩薩藏經』の成立時期についてはさらなる『菩薩藏經』の分析や様々な經論との比較研究によって慎重に精査する必要があると言えよう。

結 論

本稿では七つの章を通して、『菩薩藏經』という經典の性格を明らかにすべく、多角的に検討を行った。そこで、それぞれの章で明らかになった点を整理しつつ、『菩薩藏經』の性格について本稿の結論を述べてみたい。

まず、第一章では、『菩薩藏經』という經典名に焦点を当てて幾つかの角度から検討を行った。その結果、第一に『菩薩藏經』の梵文原典としての經典名は、*Bodhisattvapiṭaka-sūtrānta*あるいは、*Bodhisattvapiṭaka-dharmaparyāya*が適切であり、両者ともに「まとめたもの」という意味合いを持つこと、第二に『菩薩藏經』は菩薩藏を説くことを主眼としていること、第三に菩薩藏は様々な性質があるが、まとめれば仏を目指す菩薩が所依とするべき教えといえること、第四に、經典名に「大」や「聖なる」といった形容詞が次第に付加されていき、神聖化していったこと、以上の点が明らかとなった。

次に第二章では四本の品立てを表で示して、四本それぞれが異なる品立てを有することを明らかにした。次に、梵文写本にのみ存在する内容と、前四品および後二品に見られる相違点から、四本が別本であることが判明した。さらに、第十二品における四摂法の布施の異同から、玄奘訳を除く三本は近い系統に属するものであることが推測されるが、玄奘訳が使った梵文原典は、ポタラ宮の梵文写本、さらに宋訳が用いた梵文原典、藏訳が用いた梵文原典の三本より古層に属するものであることも明らかになった。同時に「慈悲喜捨品」の中で、梵文写本、宋訳にのみ存在する内容があることから、ポタラ宮の梵文写本と宋訳が用いた梵文原典は他の二訳が使った梵文原典より新層に属するものであることも判明した。また「菩薩觀察品」等の五品にのみ存在する内容があることから、ポタラ宮の梵文写本は、宋訳が用いた原典よりさらに新層に属するものであるとも判明した。

第三章では『菩薩藏經』全体の構造についての分析を行った。その結果、本經は、序分、正宗分、流通分という三つに分けることができ、さらにそれらは修道論の視点から、世尊が本經で説く教えを「解脱の道」と「成仏の道」に分類できることを指摘した。すなわち、序分の一部である第一「家主品」で賢護を始めとする五百の在家者たちに説かれる教えは「解脱の道」であり、正宗分である第三「菩薩觀察品」から第十二「大自在天授記品」（ただし流通分の内容を除く）までで説かれる「菩薩藏法門」の内容は「成仏の道」である。また、このうち序分に関しては、第一「家主品」で説かれている「解脱の道」の仏法を四諦の視点からまとめた。同時に、正宗分で説かれてる「成仏の道」の教えを「願」（菩提心を発して菩薩になること）「信」（仏果を信じること）「行」（四無量・六度・四摂法を行ずること）「果」（成仏の授記を得ること）という四項にまとめた。さらに本章では、本經に現れる「虚妄分別（*abhūtaparikalpa*）」の意味を分析して、それと非如理作意および十二縁起の関係を明らかにした。

第四章では『菩薩藏經』の形成過程を明らかにすべく、高崎直道[1974]等によって関係が指摘されている『大集經・陀羅尼自在王菩薩品』や『大集經・無尽意菩薩品』等との対応関係をより詳細に分

析し、さらには高崎直道[1974]等によって対応が指摘されていなかった『増一阿含』や『四分律』や『起世経』や『大乘理趣六波羅蜜多经』との対応を明らかにした。その結果、『菩薩藏经』は『大集经・陀羅尼自在王菩薩品』や『大集经・無尽意菩薩品』や『増一阿含』や『起世経』や『四分律』等、様々な經典の情報を編集し、成仏道として体系化するべくして制作された經典であると位置づけることができることを指摘した。

第五章では漢訳された『菩薩藏经』の性質を明らかにするべく梵文写本と漢訳諸本の比較研究を行った。結果、玄奘訳は完全無欠の翻訳ではなく、多少の不適切な箇所を保持していることが改めて明らかとなり、法護訳にも作爲的な編纂箇所が存在することが明らかとなった。一方で惟浄訳は原典に忠実に翻訳していることが明らかとなった。過去の研究では玄奘訳に準拠した物が多かったが、今後の研究では梵文写本が発見された以上、梵文写本に基づく批判的な研究が必要であることを指摘した。

第六章では、『菩薩藏经』の「布施波羅蜜多品」の分析を通して、『菩薩藏经』に登場する菩薩の属性を検討した。その結果、「布施波羅蜜多品」では財施が施物として登場し、その内容には妻・妾・子・男女・国財なども含まれた。そして、四阿含においてはこれらの財施はいずれも長者や王といった在家者が施す施物であった。このことから「布施波羅蜜多品」での菩薩は、出家の菩薩ではなく、在家の菩薩が意図されていることを指摘した。

第七章では『菩薩藏经』の菩薩の性質が出家菩薩なのか在家菩薩なのかを明らかにすべく検討を行った。その結果、『菩薩藏经』序分となる解脱道では在家の過失を述べて出家を推奨していることを明らかにした。そして『菩薩藏经』正宗分では家や家族や妻や婦人に否定的な点、如来となる必要条件として出家と梵行を想定する点、家ではなく阿蘭若に住まうことが推奨される点を確認した。このことから『菩薩藏经』が全体を通して、成仏の条件として出家を想定し、成仏道を歩む菩薩には出家を推奨していることを指摘した。

以上が本稿の検討によって明らかになった点の大綱である。次に、これらの検討結果にもとづき、『菩薩藏经』の性格を六つの視点から述べてみたい。

一、編纂された經典としての『菩薩藏经』

第一章では検討の結果、『菩薩藏经』の梵文写本の経題は、Bodhisattvapīṭaka-sūtraであるが、經典の内容に基づけば、Bodhisattvapīṭaka-sūtrāntaあるいはBodhisattvapīṭaka-dharmaparyāya が適切であること、またsūtrāntaとdharmaparyāya の両者はともに、「纏めたもの」という意味を持つことを指摘した。また、第一章では、比丘たちはこの経を聞いてから大衆の面前にこの経が捏造からなかったものであり、仏によって説かれたものではないのであると本経に対する誹謗に対する反論があることをも紹介した。このように、『菩薩藏经』は編纂されたもの、まとめたものという性質が確認された。

また、本稿の第四章では『菩薩藏经』と他経との関係を検討し、『菩薩藏经』は『無尽意所説经』、『陀羅尼自在王经』の諸説を大量に取り入れ、『四分律』、『増一阿含经』等の諸経律から素材を取り入れ編纂されたものであることが確認された。この点からも『菩薩藏经』は「まとめたもの」という性質が

傍証されよう。しかし『菩薩藏經』の全てが他の經典に由来を持つものではない。例えば、本經の序分の内容や、本經の第四「如來の不思議品」に説かれている如來の身、如來の聲、如來の智、如來の戒と三摩地、如來の神通という五つの如來の不思議の内容等は、『菩薩藏經』の材料となった經典にはない記述である。すなわち、これらは『菩薩藏經』が創作した内容であると考えられる。すなわち、これらの証拠に基づけば、『菩薩藏經』とは、様々な教えを編纂して作り出された經典であるが、全てが他の經典に由来を持つものではなく、一部は創作されており、その点に『菩薩藏經』の特徴があると言えよう。

二、菩薩藏の一切法化

第一章・第三節の検討の結果、菩薩藏は十二分教中の本生あるいは方広を指すほどであった。しかしそれが時代を経て、十二分教の「方広」・「希法」・「縁起」・「譬喩」・「本事」・「本生」・「論議」の七種となる。さらに『文殊師利普超三昧經』では菩薩藏とは一切經典、一切法を示すまでに至ることが明らかとなった。

では、この『菩薩藏經』はどうであろうか。第三章では『菩薩藏經』の構造について検討し、第一品では、四諦の内容を通して、苦と輪廻より解脱し、阿羅漢になるという解脱道、すなわち声聞乗が説かれることを指摘した。また、第三品より十品では菩薩藏法門として、願、信、行、果の四つの段階から、自利利他の成仏道、すなわち菩薩乗が説かれることを指摘した。この構造からは、『菩薩藏經』の「大小乗兼顧」、「回小向大」の性格が窺える。つまり、菩薩藏法門としては菩薩乗だけであるが、『菩薩藏經』という点では声聞乗と菩薩乗が菩薩藏に収められるのである。畢竟すれば『菩薩藏經』も菩薩藏として一切法を包括しようとしていると言えよう。

では、どうして菩薩藏は一切法を包括しなければならないのか。この点は菩薩が行うべき特質である「上求下化」⁴⁸⁷が関係すると考えられる。すなわち、菩薩は「上に正等正菩提を求める、下に一切衆生を救う」という「自利と利他との円満」を目指すのであるが、そのために、菩薩は一切法を学ばなければならない⁴⁸⁸。すなわち、菩薩藏に含まれない教えはないという性質は、菩薩の「上求下化」・「自利利他」という特質に基づくのである。そして『菩薩藏經』もそのような性格を持つのである。

三、時機に応じて変化する教え

本論の第二章をはじめ幾つかの章で、『菩薩藏經』の諸本間の法体系の異なりが見いだせた。例えば、四摂事中の布施を玄奘は財施と法施の二布施とするが、他の三本では無畏施が増え、財施・法施・無畏施の三布施となっている点、あるいは、道善巧の説示の順序が藏訳や宋訳や梵文写本では無作為と

⁴⁸⁷ 『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』卷第九十：「謂上求下化名爲菩薩。」(T36.695b18-19)

⁴⁸⁸ 例えば、菩薩は正等正菩提を証得するために、一切法を学ばなければならないことについて、『大宝積經・富樓那會・菩薩行品第一』には、「諸菩薩學一切法。然後得道。」(T11.435b3-4)という説示がある。また、『大智度論・釈般若相義第三十』には、「菩薩求佛道。應當學一切法。」(T25.191a14)という説示もある。さらに、菩薩は一切衆生を救うために、一切道を知るべきであることについては、『摩訶般若波羅蜜經』では、「一切道、菩薩摩訶薩應知。若聲聞道、辟支佛道。菩薩道、應具足知。亦應用是道度衆生。亦不作實際證。」(T8.375c3-5)というように説示している。

も見えたが、玄奘訳では三十七菩提分法に順ずる形に整備されている点、梵文写本にのみ認められる記述が存在する点、菩薩道が菩提道へと変化していく点など様々な加筆点や編集点が確認された。これらの点は『菩薩藏經』という經典が玄奘によって中国にもたらされた時より、チベットにもたらされるまでの間にも、徐々に変化してきたことを表している。すなわち、法というのは、常住不変のものではなく、時代と現実の需要に応じて変化することが可能なもの、すなわち「法無定法」（法に定まった法が無い）なのである。つまり、『菩薩藏經』は常に進化し続けてきたと言えよう。

四、『菩薩藏經』の翻訳から見えること

本稿の第一章の検討で『菩薩藏經』の經典名は時代を経て、藏訳（འཕགས་པ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཐེ་རྒྱུད་ཅེས་བྱ་བ་ཆེན་པོའི་མདོ།）と宋訳（『佛說大乘菩薩藏正法經』）の両經名には、梵文原典と玄奘訳の經名より、それぞれに「聖なる（འཕགས་པ་）」と「大乘（ཆེན་པོ་ཆེན་པོ་）」、および「佛說」と「大乘」と「正法」という単語が加えられたことがあった⁴⁸⁹。つまり、藏訳の訳者らと宋訳の訳者らは、經名に上述の単語を加えることによって、『菩薩藏經』を、大乘の經典としての正統性を強調する一方、神聖化していたことが窺われる。また第五章第二節の検討では玄奘訳の加筆箇所を検討し、それらの加筆箇所は宗教的感情に基づく尊重表現を目的としたものであることが明らかとなった。つまり、翻訳という作業にあたっては、各々の信仰心が翻訳上の様々な文言として登場することが明らかとなり、經典に対する翻訳者の熱い心持が窺えた。

五、玄奘訳『菩薩藏經』から見えること

第五章では『菩薩藏經』の梵文写本と諸漢訳の比較研究を行った。その際に、玄奘訳にはいくつか特徴的な点が確認できた。その際に、玄奘訳の加筆箇所を網羅的にとりあつかった。『菩薩藏經』全体の加筆箇所を確認すれば、ある傾向に気がつく。それは、前三品では加筆の内容は極めて少なく、第四品から加筆の内容が次第に多くなるのである。『菩薩藏經』は玄奘三蔵の最初の翻訳である。そこで玄奘は『菩薩藏經』の翻訳に着手する際に、当初は、梵文原典の内容を増減することなく、あるがままの形で翻訳しようと試みたものと思われる。しかし、梵語と漢語という両言語の文法や表現方法の違い等によって、直訳が文意を損なわれることに気がつき、梵文の一一単語から漢文の一一単語に翻訳する直訳方式の翻訳を取りやめ、第四品からは、多少の文言を加筆することによって文意を伝えようと努力したのであろう。その結果、加筆の内容が第四品より増加するのであろう。『菩薩藏經』の玄奘訳には、一部であるが誤読も存在する。例えば、第五品にある「maitrīpāramitāsūdyogah」に対する誤読などがそれである。このように玄奘訳『菩薩藏經』からは、玄奘が梵文の翻訳という一大事業に対して行った試行錯誤が読み取れるのである。すなわち、『菩薩藏經』は仏教の思想的研究の貴重な資料であるだけでなく、漢訳事業を研究する際にも貴重な情報を数多く有する貴重な資料であると位置づけることができよう。

⁴⁸⁹ 『菩薩藏經』の經典名は玄奘は当初、『菩薩藏經』と直訳したが、後に「大」が加えられ『大菩薩藏經』となったが、この点については玄奘以前に翻訳された二本の短い『菩薩藏經』と区別するためかもしれない。

六、在家菩薩から出家菩薩へ

菩薩には二つの種類がある。一つは在家菩薩、有名な維摩居士の様に、家に住まい仏道を行ずる菩薩である。もう一つは出家菩薩、家を離れ阿蘭若に住まい、修行に邁進する菩薩である。

では、『菩薩藏經』に登場する菩薩はいずれの菩薩なのであろうか。そして『菩薩藏經』はいずれの人たちを対象とする教えなのであろうか。

第三章で確認したように、『菩薩藏經』の第一品と第二品は『菩薩藏經』の序分に相当する。第一品では声聞の教え、解脱道が説かれ、五百人の長者たちが出家し阿羅漢となる。そのような阿羅漢達と金毘羅夜叉達を対象として『菩薩藏經』の正宗分である「菩薩藏法門」は説示される。この点だけを見れば、『菩薩藏經』は出家者が対象となっているかのように見えよう。

しかし、第六章で検討したように『菩薩藏經』の「布施波羅蜜多品」では財施が施物として登場し、その内容には妻・妾・子・男女・国財なども含まれた。そして、四阿含においてはこれらの財施はいずれも長者や王といった在家者が施す施物であった。このことから「布施波羅蜜多品」での菩薩は、出家の菩薩ではなく、在家の菩薩が意識されているように見えよう。

また一方で、第七章で検討したように、『菩薩藏經』では一貫して如来となる条件として出家と出家後の梵行を設けており、出家菩薩が対象となる教えのようにも見える。

一見、矛盾するようなこれらの記述であるが、これらは、在家菩薩に出家を促す教えという点に融和点を見出すことができる。在家の時には布施を初めとする様々な善業を在家菩薩として積み、時期がくれば、出家し、出家菩薩として阿蘭若に住まい修行を行うのである。つまり、在家者には出家を促し、出家者には出家後の修行を説示する。『菩薩藏經』は在家菩薩に出家を進め成仏を目指す教えを説く經典であると言えよう。

付録 I

『菩薩藏經』梵漢藏四本の前四品、第十一品、第十二品の異同表

本論の第二章第二節第三項「前四品、第十一品、第十二品における異同」にて、それぞれの品における『菩薩藏經』諸本の異同について検討したが、その際には、煩雑になることを避け、簡略な表を掲示して、それぞれの品より一例ずつとりあげて示すにとどめた。そこで附録として本論で取り上げなかった前四品、第十一品、第十二品における諸本の相違点を全て挙げたい。なお、それぞれの相違点において、何らかの所見がある箇所については（案：）として思う所を述べた。

第一「家主品」異同表：

第一「家主品」梵漢藏四本の内容的相異			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
1. om namaḥ sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ nama āryamañjuśrīye kumārabhūtāya （オム（om）！一切仏・菩薩に帰命します！ 文殊師利（mañju-śrī）童子に帰命します！） （MS1b1）	無し	無し	མངས་ཐུས་དང་། ཐུང་ཐུབ་སེམས་དཔའ་ ཐམས་ཅད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། （一切仏・菩薩に敬礼し ます！） < D kha255b2, P Dsi281b4, H1b3> （案：蔵訳では、梵文写 本にある nama āryamañjuśrīye kumārabhūtāya に相当す る内容はない。）
2. bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikābhī （比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）（MS1b1）	四部衆。 （T11.195a25-26）	苾芻苾芻尼 優婆 塞 優 婆 夷 （T11.781a10-11）	དག་ཐོང་དང་། དག་ཐོང་མ་དང་། དག་བསྟན་དང་། དག་བསྟན་མ་དང་། < D kha255b4, P Dsi281b6, H2a3>
3. pūrvāvaropitakuśālamūlah pūrva(6)buddhakṛtājñādhikāraḥ ādhyo mahādhanō mahābhogaḥ prabhūtasvāpateyaḥ prabhūtavittopakaraṇaḥ prabhūtajātarūparajataḥ prabhūtanadhañāyakośakoṣṭhāgāraḥ prabhūtanamuktāvaiddūryaśaṃkhaśīlāpravāḍ aḥ prabhūtahastyāśvoṣṭragaveḍakaḥ prabhūtaśāsīdāsakarmakarapauruṣeyaḥ （〔彼は〕過去に植えた善根を持ち、過去仏 に対して仏陀にふさわしい供養を行ったり、 富であり、多くの金銭を持ち、大財を持ち、 多くの自己の財産を持ち、多くの財物と資具 を持ち、多くの黄金と銀を持ち、多くの金銭 と穀物に富んでいる貯蔵室と倉庫とを持ち、 多くの摩尼と真珠と瑠璃と磲磲と水晶と珊瑚 とを持ち、多くの象と馬と駱駝と牛と羊と を持ち、多くの婢と僕と作業人を持つ。） （MS1b5-6）	已曾親觀過去諸 佛宿殖善根。福感 通被大族大富。資 產財寶無不具足。 （T11.195b2-b4） （案：ここでは、 玄奘は略訳を行 ったであろう。）	宿植善本於先佛 所廣作佛事。具大 財富廣多主宰受 用之物。積以金銀 財穀庫藏。增集摩 尼真珠磲磲珊瑚 吠瑠璃等。及諸象 馬牛羊奴婢侍從 并 營 作 人 。 （T11.781a25-28） （案：ここでは梵 文写本と一致し ている。）	ཐོན་དག་བའི་ཆ་བ་བསྟན་པ། ཐོན་ཐུ་མངས་ཐུས་ལ་བྱ་བ་བྱས་པ། ཕྱག་ཐོང་ནོར་མང་གི་ཡོངས་སྟོན་ཆེ་བ། བདག་དབང་བ་མང་གི་ནོར་དང་ཡོ་ བྱང་མང་གི་གཞིར་དང་དཔུལ་མང་གི་ ནོར་དང་འབྲས་ཡོངས་སྟོན་པའི་མཛོད་དང་། བར་བ་མང་གི་ནོར་བྱ་དང་། ཐུ་ཉིག་དང་། བི་རྒྱུ་དང་། དྲེད་དང་། མན་ཤེལ་དང་། བྱི་བ་མང་གི་ཐྱང་པ་ཆེ་དང་། ཉ་དང་། བ་ལང་དང་། ལྷག་མང་གི་ཐན་ལོ་དང་། ཐན་ལོ་དང་། ལས་བྱེད་པ་ དང་། ཞོ་ཤས་འཚོ་བ་མང་གི་ < D Kha256a2-5, P Dsi282a5-7, H3a5-b2> （案：ここでは、梵文写 本と一致している。）
4. koṭīśatasahasrapatreṣu（百千俱胝の花弁を 有し）（MS2a5）	百千億葉 （T11.195b19）	千俱胝葉 （T11.781b21）	འདད་མ་བྱ་བ་བརྒྱ་ཕྱུར་ཐོང་ཡོད་པ་ < D Kha256b7, P Dsi283a1, H4b3>
5. naradevadeva（人と神の神）（MS2b7）	現人中勝天中天 （T11.195c27）	無し	མི་དང་ལྷ་ལྷ་མོ་（人と天の天） < D Kha257b6, P Dsi283b8, H6a4>
6. śārdūla-（虎-）（MS3a4）	師子王 （T11.196a15）	師子王 （T11.782a19）	སྟག་（虎） < D Kha258a5, P Dsi284a7, H6b6>
7. amanuṣyā（非人たち）（MS3a5）	天仙龍神 （T11.196a18）	非人 （T11.782a21）	མི་མ་ལགས་པ་རྣམས་（非人たち） < D Kha258a5, P Dsi284a8, H6b6>

8. ime dṛṣā adbhutaprātihāryāḥ (MS3a5)	無し	此佛神通希有相 (T11.782a21)	ཚོའཕུལ་འདི་འདྲ་འདི་དག་མཆད་དུ་བྱུང་། < D Kha258a6, P Dsi284a8-b1, H6b7-7a1>
9. dveṣaśalyena (瞋の箭) (MS4a2)	過失毒箭 (T11.196c17)	瞋箭 (T11.782c24)	ཞེ་ཐུང་ (瞋) ཞི་ཟུག་རྩེ་ < D Kha259b3, P Dsi285b7, H9a5>
10. iyam atra dharmatā tatredam ucyate (MS4a8)	爾時世尊。欲重宣 此義而說頌曰 (T11.197a14)	爾時世尊。重說偈 言 (T11.783b3)	འདི་ལ་ཚས་ཉིད་ནི། འདི་ཡིན་ཏེ། དེ་ལ་འདི་མཛད་ཅས་བྱལ། < D Kha259b3, P Dsi285b7, H10a> (案：ここでは梵文写本と一致している。)
11. 無し	何等爲十。一者奪 命。二者不與取。 三者邪姪。四者妄 語。五者離間語。 六者僞語。七者綺 語。八者貪著。九 者瞋恚。十者邪 見。長者。(我見 衆生)由是十種不 善業故。 (T11.197b12-16)	何等爲十。一者殺 生。二者偷盜。三 者邪染。四者妄 言。五者綺語。六 者兩舌。七者惡 口。八者貪。九者 瞋。十者邪見。如 是十種不善業道。 (T11.783c1-c4)	བསུ་གང་ཞེ་ན། འདི་ལྷ་ཟླ་ཤིག་གཙོད་པ་དང་། མ་བྱིན་པར་ལེན་པ་དང་། འདོད་པས་ལོག་པར་ གཡམས་པ་དང་། བཟུན། ། དུ་སྒྲུབ་དང་། ལྷ་མ་ཐེར་ བ་དང་། ངག་ཟུབ་པོ་དང་། ཚིག་ཀྱིས་བ་དང་། བརྒྱབ་སེམས་དང་། གཞོད་སེམས་དང་། ལོག་པར་རྒྱ་བ་དང་བསུ་ཟླ་བྱིས་བདག་། མི་དགེ་བ་བསུ་འཕེལ་གྱི་ལམ་རྒྱུས་ཀྱིས་ < D Kha257b6-7, P Dsi286b7-287a1, H10b7-11a2>
12. trāyaṇārthāya (救済されるために) (MS4b7)	拔濟 (T11.197b29)	無し	བསྐྱབ་པའི་ཕྱིར་ (救済のために) < D Kha262a4, P Dsi287a5, H11b1>
13. bhava iti kim* yad idaṃ kāmabhavo rūpabhavaḥ ārūpyabhavaś ca ayam ucyate bhavaḥ (有とは何か。すなわち、欲 [界] の有であり、色 [界] の有であり、無色 [界] の有である。これが有と呼ばれる。) (MS8b4)	云何爲有。所謂欲 有色有。及無色 有。福及非福不動 業等。是名爲有。 (T11.199c29- 200a2) (案：玄 奘訳の「福及非福 不動業等。」とい う内容は梵文写 本、法護訳、藏訳 にはない。)	何名爲有。謂欲有 有色無色有。此名 有。 (T11.786a26-27)	སྲིད་པ་ཞེས་བྱ་བ་གང་ཞེ་ན། འདི་ལྷ་ཟླ་ འདོད་པའི་སྲིད་པ་དང་། ཀུན་གསལ་གྱི་སྲིད་པ་དང་། ཀུན་གསལ་མེད་པའི་སྲིད་པ་སྟེ། དེ་ནི། སྲིད་པ་ཞེས་བྱལ། < D Kha267b3, P Dsi293a5-6, H21a1-2>
14. 無し	數取 (分別)。 (T11.200b16)	無し	無し
15. 無し	諸法不可開闡。 離相波浪故。諸法 不可顯示。無相無 形。無有光影。離 諸行故。諸法非我 所有。離我所故。 諸法不可分別。離 心意識故。 (T11.200c21-24)	一切法無言説。 離語言波 浪故。 一切法無色相。離 形顯色及對礙所 行故。一切法無 等。離我相故。一 切法無所了知。離 心意識故。 (T11.787b1-4)	ཁྱིམ་བདག་རྒྱུ་སྟེ། བརྒྱུ་དང་བྱུ་བའི་ཕྱིར་ ཚོས་ཐམས་ཅད་ནི། བརྒྱུ་དང་མེད་པའོ། ཁྱིམ་བདག་རྒྱུ་སྟེ། མཚན་མ་མེད་དུ་བྱིབས་ མེད་པ་ལ་སྦྱང་བ་ལྟ་དང་བྱུ་བའི་ཕྱིར་ཚོས་ ཐམས་ཅད་ནི། ལ་དག་མེད་པའོ། ཁྱིམ་བདག་ རྒྱུ་སྟེ། ང་ཡིར་འཛིན་པ་དང་བྱུ་བའི་ཕྱིར་ ཚོས་ཐམས་ཅད་ནི། ང་ཡི་བ་མེད་པའོ། ཁྱིམ་བདག་རྒྱུ་སྟེ། བསུམ་དང་། ཡིད་དང་། རྒྱུ་པར་ཤེས་པ་དང་བྱུ་བའི་ཕྱིར་ཚོས་ཐམས་ཅད་ ནི། ཤེས་པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པའོ། < D Kha269b5-6, P Dsi296b1-3, H25a6-b1>
16. 無し	異生愚夫不知妄 欲故。謂此地界。 謂此水界。火風空 識亦復如是。 (T11.201a21-22)	諸愚夫異空 ⁴⁹⁰ 。… 地界水界火界風 界空界識界。此等 法中所欲愛著。 (T11.787c10-16)	འདི་ལྷ་ཟླ་ཁྱིམ་བདག་རྒྱུ་སྟེ། མའི་ཁམས་འདི་ནི། ཁྱིམ་པ་མ་མའི་སྐྱེ་བོ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་འདོད་པ་ཙམ་མོ། ། འདི་ལྷ་ཟླ་ཁྱིམ་བདག་རྒྱུ་སྟེ། ཟུའི་ཁམས་དང་། མའི་ཁམས་དང་། རྒྱང་གི་ཁམས་འདི་ནི། ཁྱིམ་པ་ མ་མའི་སྐྱེ་བོ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་འདོད་པ་ཙམ་མོ། ། < D Kha270b7, P Dsi297a4-5, H27a 3-4>
17. 無し	家宅 (T11.201a26)	舍宅 (T11.787c18)	無し
18. tat kasya hetor upādānato hi gr̥hapatayo bhavo bhavati anupādāne nāsti bhavaḥ (MS11a8)	何以故。若有取著 則有怖畏。若無取 著則無怖畏 (T11.201c5-6) (案：ここでは、	諸長者。…何以 故。若有所取即生 怖畏 (T11.788a28-29)	དེ་ཅིའི་ཕྱིར་ཞེ་ན། ཁྱིམ་བདག་རྒྱུ་སྟེ། ལེན་པས་ནི། སྲིད་པར་འབྱུར་རོ། མ་ལེན་པས་ནི། སྲིད་པ་མེད་དོ། < D Kha272a4-5, P Dsi298b1, H29a3-4> (案：ここでは、藏訳は梵 文写本とは一致してい

⁴⁹⁰ 「空」は「生」の誤写である。

	切苦處而得除遣。汝諸長者。若求出離。勿於一法而生取著。何以故。若有取著則有怖畏。若無著者則無怖畏。 (T11.201c7-27)		
20. tat kasya hetor upādānato hi gr̥hapatayo bhavo bhavati nānupādānataḥ (MS11b5)	何以故。若有取著則有怖畏。若無著者則無怖畏。 (T11.201c26-27)	無し	དེ་ཅིའི་ཕྱིར་ཞིན། ཁྱིམ་པདག་ནུས་ལེན་པས་ནི། མིང་པར་འགྱུར་གྱི་མ་ལེན་པས་ནི། མ་ཡིན་ནོ། < D Kha272b6, P Dsi99a2-3, H30a2-3 >

第二「金毘羅葉叉品」異同表：

第二「金毘羅葉叉品」梵漢藏四本の内容的相異			
梵文写本	玄奘訳	惟浄訳	藏訳
1. 無し	即於佛前聞佛授記。歡喜踊躍得未曾有。 (T11.204b24-25)	無し	無し
2. 無し	我當復應於如來所殖少善根。 (T11.204b26)	我今宜應於世尊所少植善根。 (T11.791a1)	བདག་གིས་བཅོམ་ཐུན་འདས་ལ་དག་བའི་ཙ་བ་རྒྱ་ཚན་པོ་ཞིག་བསྐྱེད་དོ། < D Kha278b2-3, P Dsi304b7, H38b5-6 >
3. ākāśam (虚空) (MS15a4)	於虚空中 (T11.204c05)	無し	無し
4. 無し	鉢特摩花 (T11.204c8)	無し	無し
5. (a)samacittāḥ (不平等心/平等心) (MS15a6)	無等心無等等心。 (T11.204c-16)	無等等心。 (T11.791b2)	མི་མཉམ་པ་དང་མཉམ་པའི་སེམས་དང་། < D Kha279a3, P Dsi305a7-8, H39b3 >
6. 無し	金毘羅子 (T11.205a15)	無し	ཅི་འཛིགས་ཀྱི་བྱ་ < D Kha279b5, P Dsi306a2, H40b3 >
7. -rākṣasa (羅刹) (MS15b4)	羅刹 (T11.205a22)	無し	ཁྱིན་པོ་(羅刹) < D Kha280a1, P Dsi306a5, H40b6 >

第三「菩薩觀察品」異同表：

第三「菩薩觀察品」梵漢藏四本の内容的相異			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏訳
1. anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair (世間諸法によって汚されたことのない者となる。)(MS16b5)	無し	無し	無し
2. nīrantaram (不断) (MS17b1)	無有間斷。 (T11.206b17-18)	無上。 (T11.793a10)	ཁྲ་ན་མེད་པ།(無上)< D Kha283a3, P Dsi309b1, H45b4 > (案：ここでは、藏訳は法護訳とは一致している。)
3. anāvaraṇaṃ tac cittam asaṅgañānasampreṣitaṃ sarvatrānugataṃ tac cittam mahākaruṇāvyavacchinnavāt* (MS17b2)	菩提心者無有障礙。令無礙智遍行一切無緣大悲不斷絕故。 (T11.206b23-25)	彼心無障礙。觀無礙智故。彼心於一切處隨應了知。大悲無斷故。 (T11.793a14-15)	སེམས་དེ་ནི།ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡི་ཤེས་ལ་བཏང་བའི་ཕྱིར་ ཁྱེད་པ་མེད་པའོ། ཁེམས་དེ་ནི། རྒྱུང་ཇི་ཚུན་པོ་མ་བཅད་པའི་ ཕྱིར་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རྒྱུ་ལྷ་སྣང་པའོ། < D Kha283a5, P Dsi309b4, H45b6-7 >
4. 無し	愚癡。(T11.206c29)	無し	無し
5. guṇavanto peśālāḥ (MS18a3)	具德~,其心純淨	清淨	無し

	(T11.207a2)	(T11.793b15)	
6. buddhaśrāvākāś (MS18a5)	聲聞 (T11.207a8)	無し	無し
7. 無し	獨覺(T11.207a8-9)	無し	無し
8. yad utāsmīn satīdaṃ bhavaty asya nirodhād idaṃ nirudhyate (MS18b4)	又此無故彼無。此滅故彼滅。 (T11.207b5-6)	以不有故。即無所生。無生即滅。 (T11.793c16-17)	འདི་ལྟ་སྟེ། འདི་མེད་ན་འདི་མི་འབྱུང་། འདི་འགགས་པས་འདི་འགག་སྟེ། < D Kha285a6, P Dsi311b6, H49a >
9. śūnyatā- (空性) (MS20a5)	無し	空 (T11.795a5)	སྟོང་པ་ཉིད་ཀྱི་(空性の) < D Kha287b7, P Dsi314b1, H52b7 >

第四「如来の不思議品」異同表：

第四「如来の不思議品」梵漢藏四本の内容的相異			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
1. 無し	如來身者不可以生求 (T11.209a24)	非生可觀。 (T11.795c20)	སྟོང་པ་ཉིད་ཀྱི་པ་མ་ཡིན། སྟོང་པ་རབ་ཏུ་བྱ་བ་མ་ཡིན། < D Kha289b5, P Dsi316b2, H55b7-56a1>
2. -svapna- (夢) (MS21b1)	無し	無し	སྐུ་ལམ་(夢) < P Dsi 316b6, D Kha 290a2, H56a7>
3. daśabalanām (十力) (MS22a2)	十方 (T11.209c18)	十力 (T11.796b3)	སྟོབས་བརྒྱ་རྩ་མས་ལ་ (諸十力に) < D Kha290b5, P Dsi 317b3, H57b4>
4. upāsakaparṣadi (優婆夷衆に) (MS22a4)	鄔波索迦衆 (T11.210a2)	優婆塞 (T11.796b16)	無し
5. 無し	鄔波斯迦衆。 (T11.210a2)	優婆夷 (T11.796b16)	དགེ་བསྐྱེན་མའི་འཁོར་ལ་(優婆夷衆に) < D Kha291a2-3, P Dsi317b8, H58a4>
6. jñeyaś ca vijñeyaś ca (MS22a7)	易解聲。易識聲。 (T11.210a16)	分明解 (T11.796b28)	ཀླན་ཤེས་པར་བྱེད་པ་དང་། < D Kha 291b1, P Dsi 318a6, H58b6>
7. eva daśadīśāsū lokadhātūsu pānsu (I) sarvu (5) raju karitvā darśayeyyā jīnasya (II) sarvu tada gaṇeyyā nāsti kāmṅkṣān asaṃgo (I) eḍḍīsu sugatānām jñāna ākāśatulyo (MS24a4-5)	如是十方界 塵水示如來 佛智等虚空 遍曉無疑滯 (T11.211b10-11)	無し	འདི་ལྟར་ཚྭ་གས་བརྒྱ་དག་གི་འཛིན་རྟེན་ལམས་ཀྱི་དྲུལ་། ཐམས་ཅད་དྲུལ་དུ་བྱས་ནས་རྒྱལ་བ་རྩ་མས་སྟོན་ཏི། དེ་དག་ཐམས་ཅད་བགང་ཡང་ཆགས་མེད་ཐེ་ཚོམ་མེད། དེ་ལྟར་བདེ་བར་གསེགས་ཀྱི་ཡི་ཤེས་རྩ་མ་ལའང་བཞིན། < D Kha2914a5-6, P Dsi321a4-5, H63a6-7>
8. ābhā kṛmeḥ khadyotakasya (螢光虫の光) (MS24b2)	螢火光 (T11.211b24)	無し	མིན་བྱ་མེ་ལྷར་གྱི་འོད་ (螢光虫の光) < D Ga a5-2a1, P Wi2a1-2, H63b7>
9. ābhā mahataḥ kuḍyasya (大きな壁の光) (MS24b2)	燭炬之耀 (T11.211b25)	無し	ཆེག་པ་ཆེན་པོའི་འོད་ (大きな壁の光) < D Ga2a2, P Wi2a3, H64a2 >
10. 無し	大輪圍山。 (T11.212a15)	無し	ཁོར་ལུག་ཆེན་པོ་[大輪圍 [山]) < D Ga3a6, P Wi3b4, H66a3>
11. yāvād ābhākaṇiṣṭhānām kalān nārghanti ṣoḍaśīm* (それ程多くの光明は諸々の色究竟天の〔光明の〕十六分の一にも及ばない。) (MS25b5)	乃至色究竟 無光等佛者 (T11.212b5)	乃至色究竟天 光而悉不及佛 光相 (T11.798c5)	འོག་མེན་བར་གྱི་འོད་རྩ་མས་ཀྱིས། བརྒྱ་དྲུག་རྩ་ལྔ་མེ་མེད་དོ། (色究竟天の諸 光明によって十六の一にも及 ばない。) < D Ga3b5, P Wi4a4, H66b5>
12. icchasi tvam śāriputra tathāgataśīlasamādhipāramitāyā(如来の戒と三摩地の波羅蜜多) upamā mātrakam śrotuṃ (MS26a6)	舍利子。汝今欲 聞佛說如來尸 羅波羅蜜多譬 喻不。 (T11.212c9-10) (案：玄奘訳では梵文写本にあるsamādhi (三摩地) という内容がない。)	舍利子。我今復 說譬喻以明斯 義。 (T11.799a6) (案：この法 護訳の「斯」は前文の「戒定波 羅蜜多」 (T11.799a5)を 指している。	ཤེད་པོ་ལ། ཁྱེད་དེ་བཞིན་གསེགས་པའི་ཚུལ་ཞུས་དང་། ཉིད་ཅེ་འཛིན་ཚད་མེད་པའི་ (如来の無限の 戒と三摩地) དཔེ་ཅས་ཉན། པར་འདོད་དཔ། < D Ga4b1-2, H67b7-68a1> (案：蔵訳のデルゲ版とラサ 版では梵文写本にある 「pāramitāyā(波羅蜜多)」とい う内容はない。その代わりに 「ཚད་མེད་པའི་」(無限の) という内 容がある。しかし、蔵訳の北 京版 (P Wi6a4-5) では、「波羅 蜜多」という内容があるが、 「無限の」という内容がない。
13. 無し	若無想	若無想。	འདྲ་ཤེས་མེད་པའམ།(無想) < D Ga4b5, H68a7>

14. 無し	(T11.212c19) 如是舍利子。是諸菩薩摩訶薩。聞如來不思議尸羅及三摩地已。信受諦奉清淨無疑。倍復踊躍深生歡喜發希奇想。 (T11.214b2-4)	(T11.799a24) 無し	無し
15. karmaphala- (業の果) (MS28a6)	業果 (T11.214b8)	業果報 (T11.800b18)	རྟུགས་དང་འབྲས་བུ་(通達と果) < D Ga8a1-2, H68b3 > (案：しかし、北京版 (P Wi9b3) では、この内容は、梵文写本、漢訳二本にあるのとは一致していない。)
16. saṃhātā- (完全に壊滅) (MS29a3)	僧伽多 (T11.215a2)	毘藍婆 (T11.801a11) (案：法護訳の「毘藍婆」は vairambha の音写であるので、それは梵文写本の saṃhātā とは一致していない。)	ཀུན་ཏུ་འཇོམས་པ་ (完全に壊滅) < D Ga9b3, H76a4 > (案：北京版 (P Wi11b1) では、རབ་ཏུ་འཇོམས་པ་ とある。)
17. dvetrīṇicatvāripañcayojanasahasrāṇy (二・三・四・五千の由旬) (MS29a4)	或高三千四千踰繕那 (T11.215a11-2)	無し	དཔག་ཚད་ཉིས་རྟེན་དང་། ལྷན་རྟེན་དང་། བཞེ་རྟེན་དང་། རྩ་རྟེན་དུ་ (二千と三千と四千と五千の由旬) < D Ga9b6, P Wi11a5, H76b3 >
18. peyālam amī trayah kuśalās cākuśalās ca karmapathā uddiṣṭāḥ tathā sarve daśakuśalāḥ karmapathāḥ karttavyāḥ (以上、それら三善と三不善の業道について説かれた。同様に、一切の不善の道業が敷衍されるべきである。) (MS30b7)	如是一切善不善業道是處非處。今當略說顯示其要。 (T11.216a21-22) (案：ここでは、玄奘訳は梵文写本の内容とは一致していない。)	無し	གོང་མ་བཞིན་ཏུ་སྒྱུར་ཏེ། དགེ་བ་དང་། མི་དགེ་བའི་ལས་ཀྱི་ལས་གསུམ་པ་དེ་དག་བསྒྱུར་བ་དེ་བཞིན་ཏུ་ མི་དགེ་བ་བསྒྲིབ་ལས་ཀྱི་ལས་ཐམས་ཅད་ལའང་བྱུང་། < D Ga 12b2-3, P Wi 14a7-8, H81a3-4 > (案：ここでは、藏訳は梵文写本とは一致している。)
19. 無し	若不聞者斯有是處。 (T11.216a29-b1)	若其聞者斯有是處。又非處者。 (T11.802b10)	གང་ཡིད་དུ་འོང་བ་ཐོབ་པར་འགྱུར་བ་དེ་ནི། གནས་སོ། < D Ga12b5, P Wi14b3, H81b1 >
20. asthānaṃ yat paryādāsyataś cittāc cittaprasrabdhin nānuprāpnuyāt* sthānaṃ yat prāpnuyāt (〔煩惱が〕滅尽されている心から、心の輕安を得ることできないならば、〔これは〕非處である。〔〔煩惱が〕滅尽されている心から、心の輕安を〕得ることできるならば、〔これは〕處である。) (MS31a6)	若繫心者不得心安。無有是處。若能得者斯有是處。 (T11.216b19-20)	無し	གང་ཀུན་ཏུ་དཀྱིལ་ཏེ་འདྲག་པའི་ལེམས་ལས་ལེམས་ཤིན་ཏུ་བྱང་བར་འགྱུར་བ་ནི། གནས་མ་ཡིན་ནོ། །གང་འགྱུར་བ་ནི། གནས་སོ། < D Ga13a5-6, P Wi15a5, H82a7 >
21. brāhmaṇaṃ cakraṃ (梵輪) (MS32a4)	梵輪 (T11.217a15)	梵輪 (T11.803b3)	ཚོས་ཀྱི་འཁོར་མོ་ (法の輪) < D Ga 4b5-6, P Wi17a2, H85a3 >
22. 無し	無し	無し	གཞན་མ་ཡིན་པ་དང་། < D Ga15b3, P Wi18a1, H86b2 >
23. ākāśacintyatayā (MS33a2)	無し	無し	ནམ་མཁའ་ལྗུ་བར་བསམ་ཀྱིས་མི་ཁྱབ་པའི་ཕྱིར་ < D Ga15b6, P Wi18a5, H87a1 >
24. anantaraṃ (無間) (MS33a5)	無上 (T11.217c6)	無上 (T11.803c24)	ལྷ་མེད་ (無上) < D Ga16a3, P Wi18b2, H87a7, >
25. samyaktvāniyatādhimuktim	正定種。	於正定聚。而起	ཡང་དག་པ་ཉིད་དུ་དེས་པའི་ཁམས་

(正定に対する信解) (MS33b3)	(T11.217c29)	信解 (T11.804b23)	(正定の界/種) < D Ga16b5, H88b1 >
26. 無し	若由此解當殖 正定解脫種者。 是亦如來如實 了知 (T11.217c29-21 8a2)	若諸衆生於正 定聚取彼解脫。 如來悉如實知。 (T11.804b24-25)	མིས་པ་གང་གིས་ཡང་དག་པ་ཉིད་དུ་ངེས་པའི་ ནུས་པར་གྲོལ་བ་འཛེབ་པར་འགྱུར་བ་དྲ་དག་ ཀྱང་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་ཡང་དག་པ་ཇི་ ལྟ་བུ་བཞིན་དུ་རབ་དུ་མཐུན་ནི། < D Ga16b6-7, P Wi19a5, H88b2-3 > (案：ここでは、蔵訳は玄奘 訳および法護訳とは一致して いる。)
27. yat tathāgatasya nānādhimuktinānādhātujñānabalam tad anantāparyantam ākāśena samam (如来の種々の信解と種々の界を知る力 は虚空と等しく無辺無際である。) (MS33b6) (案：ここでは、梵文写本の tathāgatasya nānādhimuktinānādhātujñānabalam という 内容は三訳本とは一致していない。)	如來非一解種 種解智力。不可 思議無邊無際 與虚空等。 (T11.218a10-12)	此是如來信解 智力。無有邊際 與虚空等。 (T11.804c9-10)	དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་མིས་པ་ལྷ་ཚྭགས་མཐུན་པའི་སྟོབས་ (如来の種々信解を知る力) གང་ཡིན་པ་དེ་ནི། མཐའ་ཡས་སྟ་མེད་དེ། ནུས་མཁའ་དང་མཚུངས་ཤིང་མཉམ་མི། < D Ga17a4-5, P Wi19b3, H89a5 >
28. tathāgatasya nānādhimuktinānādhātujñānabalam śrutvā- (如来の種々の信解と種々の界と を知る力を聞いてから) (MS33b6)	聞如來種種解 智力~已。 (T11.218a12-13)	於佛如來種種 信解最勝智力。 聞已 (T11.804c10-11)	དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་མིས་པ་ལྷ་ཚྭགས་མཐུན་པའི་སྟོབས་དེ་ནི་ ས་ནས་ (それ如来の種々の信解を 知る力を聞いてから) < D Ga17a4-5, P Wi19b3, H89a6 >
29. -nidhyapto (MS33a7)	起熾然 (T11.218b23)	寂定 (T11.805a21)	ངེས་པར་ལེས་པ་ (決定的に思量) < D Ga18a7, P Wi20b6, H91a1 >
30. tathāgatasyānekādhimuktinānādhimuktijñānabalam (如来の無数の信解と種々の信解を知る力) (MS34b1)	如來種種界智 力 (T11.218b29-c1)	佛如來如是智 力 (T11.805a24-25)	དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཁམས་དུ་མ་དང་། ཁམས་ལྷ་ཚྭགས་མཐུན་པའི་སྟོབས་ (如来の無数 の界と種々の界を知る力) < D Ga18b1, P Wi20b8, H91a3 >
31. nānādhimukti- (種々の信解) (MS34b4)	諸界 (T11.218c21)	種種信解 (T11.805b16)	མིས་པ་ལྷ་ཚྭགས་ (種々の信解) < D Ga18b7, P Wi21a7, H91b4 >
32. -vikurvitaṃ (神変) (MS34b4)	變異 (T11.218c21)	解脫 (T11.805b16)	རབ་སྒྱལ་བ་ (十分な変化) < D Ga18b7, P Wi21a7, H91b4 >
33. nānādhimukti (種々の信解) (MS34b5)	種種界 (T11.218c22)	信解 (T11.805b17)	མིས་པ་ལྷ་ཚྭགས་ (種々の信解) < D Ga18b7, P Wi21a7, H91b4 >
34. tathāgata indriyabalavīryavimātratājñānabalena (MS34b5)	如來應正等覺。 以無上智力故 (T11.218c29)	如來根勝劣智 力(?) (T11.805b21)	དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་དབང་པོ་དང་། བརྩོན་འགྲུས་ཀྱི་རིམ་པ་མཐུན་པའི་སྟོབས་ཀྱིས་ < D Ga19a2, P Wi21b1, H91b6-7 > (如来の根と精進の次第とを 知る力によって)
35. indriyabalavīryavimātratām (MS34b5-6)	種種諸根差別 之相。 (T11.219a1-2)	根性若勝若劣 (T11.805b22)	དབང་པོ་དང་། བརྩོན་འགྲུས་ཀྱི་རིམ་པ་ < D Ga19a2, P Wi21b1-2, H91b6 > (根と精進の次第)
36. pelavā (軽い) (MS34b7)	微薄 (T11.219a7)	少分 (T11.805b28)	無し
37. pratyekabuddhayānaprayogas (独覺 乘に加行/方便する) (MS35a8)	修二乘智方便 (T11.219b1-2)	修聲聞緣覺乘 行 (T11.805c27-28)	རང་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཐེག་པ་ལ་སྦྱར་བ་ (独覺乘に加 行する) < D Ga20a5-6, P Wi22b6, H93b4 >
38. pratyavarendriyaṃ (より一層低い根 を持つ) (MS35a8)	下劣根 (T11.219b2)	具最上乘根性 (T11.805c29)	ཐ་མའི་དབང་པོ་ཅན་ཡིན་ལ། (卑下の根を有 するであるが。) < D Ga20a6, P Wi22b7, H93b5 >
39. pratyavarendriyakathām kathayati (より一層低い根に対する教を演説 する。)(MS35a8-35b1)	說二乘 (T11.219b3)	宣說最上乘法 (T11.806a1-2)	དབང་པོ་ཐ་མའི་གཏམ་སྟོན་ (卑下の根に対 する教を示す。) < D Ga20a6, P Wi22b7, H93b6 >
40. 無し	舍利子。如來種 種根智。不可思 議無邊無際與 虚空等。若有欲 求如來諸根智 力邊際者。不異 有人求虚空際。	無し	無し

	諸菩薩摩訶薩 聞是根力如虛 空已。信受諦奉 清淨無疑。倍復 踊躍深生歡喜 發希奇想。 (T11.219b11-15)		
41. -akuśalāni ca bhonti indriyā tathejyāni cakṣur yāvan manaś ca indriyā parijñātvā indriyaduḥkhadaurmanasya tā bhaṇi dharmaṃ (MS35b4)	無し	或具不善諸根 者眼耳鼻舌身 意根苦樂憂喜 捨根性 (T11.806a17-18)	མི་དགོ་བ་ཡི་དབང་པོར་ཡུར་བ་རྣམས་ཀྱང་དྲ་བཞིན་མཁྱེན། མིག་ནས་བཟང་ལྟ་ཡིད་ཀྱི་བར་ཁྱེད་དབང་པོ་དང་། ཡིད་མི་བདེ་དང་སྡུག་བསྔལ་དབང་མཁྱེན་ཚས་ཀྱང་སྟོན། < D Ga20b6-7, P Wi23a7-8, H94b1-3>
42. 無し	或有諸行語業 清淨非由身心。 (T11.220a13-14)	無し	ངག་སྦྱོང་ལ་ལྟས་ལ་མ་ཡིན་ཞེས་ལ་མ་ཡིན་པའི་ལམ་ཡང་ཡོད། (語を清めても身も〔清め〕 なくて心も〔清め〕ない道/行 もある。) <D Ga22a5, P Wi24b8, H96b3-4>
43. 無し	舍利子。由不稱 理作意爲因無 明爲緣。令諸有 情發起雜染。 (T11.220b23-24)	謂即一切衆生 諸雜染中。不如 理作意是因。無 明是緣。 (T11.807a21-22)	ཞེས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཀྱན་ནས་ཉན་མངས་པའི་སྒྱུ་ནི། ཚུལ་བཞིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པའོ། ཞེས་ཅན་ཐ མས་ཅད་ཀྱི་ཀྱན་ནས་ཉན་མངས་པའི་སྒྱུ་ནི། མ་རིག་པའོ། < D Ga23a5-6, P Wi26a1-2, H98a3-4> (案：ここでは、蔵訳は玄奘 訳、法護訳とは一致してい る。)
44. aparau dvau hetū dvau pratyayau kṣayajñānaṃ cānutpādajñānaṃ ca (I) (次の 二つの因と二つの縁とは滅尽智と無生 智である。) (MS37a7)	無し	又二因二縁者。 謂盡智無生智。 (T11.807b7-8)	གཞན་ཡང་སྒྱུ་གཉིས་དང་། སྒྱུ་གཉིས་ཏེ་ཟད་པ་ཤེས་པ་དང་། མི་སྦྱོང་ཤེས་པའོ། < D Ga23b5, P Wi26a8-b1, H98b5-6> (案：ここでは、蔵訳は、梵 文写本および法護訳とは一致 している。)
45. 無し	聞…已。 (T11.221a24-25)	聞已 (T11.804c11)	ཐོས་ནས་ (聞いてから) < D Ga26a5, P Wi29a6, H100b2>
46. asapatnā asaṃkaṭāḥ (無敵であり、無 窮境である。) (MS38a3)	究竟無怨無毒 刺(T11.221b17)	無し	དག་དང་བཅས་མེད་དྲག་པ་མེད། < D Ga 25a5, P Wi 28a4, H101a2-3>
47. ekāṃ vā jātīm dve vā tisro vā catasro vā pañca vā viṃśatir vā trīṇśataṃ vā catvāriṇśataṃ vā jātiśataṃ vā jātiśahasraṃ vā yāvad asaṃ[khyān]y api jātikoṭīnayutaśatasahasrāny anusmarati (一つの生あるいは二つ〔の生〕あるい は三つ〔の生〕あるいは四つ〔の生〕あ るいは五つ〔の生〕あるいは二十〔の生〕 あるいは三十〔の生〕あるいは四十〔の 生〕あるいは百〔の生〕あるいは千〔の 生〕あるいは乃至数え難い千百の那由他 の俱胝の生を追憶する。) (MS38a5)	或念一生十生 百生千生。乃至 無量拘胝那庾 多百千生。悉皆 隨念而能知之。 (T11.221b25-27)	若一生若二生。 三四五生。若十 二十三四五十。 百生千生及百 千生。乃至無數 俱胝那庾多百 千生事。隨念悉 知。 (T11.808a4-6)	སྒྱུ་བ་གཅིག་གསུམ་གཉིས་སམ། གསུམ་མཁུ་བ་ཞེས་ཀྱ ལྟམ་བསྟུངས། ཉི་ལྟམ་སྟུངས། བཞི་བསྟུངས། ལྔ་བསྟུངས། སྒྱུ་བ་བསྟུངས། སྒྱུ་བ་ ལྟོང་དམ་སྒྱུ་བ་བསྟུངས་ནས་སྒྱུ་བ་བྱེ་བ་ཐོག་ཁྱིག་བསྟུངས་གི་བ ར་དུ་ཆོས་སྟུངས་ནོ། < D Ga25b1-2, P Wi28a7-8, H101a7-101b1> (案：ここでは、蔵訳にある བསྟུངས། (十) ལྔ་བསྟུངས། (五十) と いう内容が梵文写本にはな い。)
48. mohamadāni (諸々の愚痴と傲慢) (MS39a2)	解脱所依處 (T11.222a23)	解脱道 (T11.808b20)	ཐར་པའི་གནས་ལས་ (解脱処から) <D Ga26b4, H103a5> (案：ここの内容 は北京版にはない。)
49. 無し	慧解脱 (T11.222c27)	慧善解脱 (T11.809a19)	無し
50. svayam abhijñayā (MS39b7)	自然通慧 (T11.222c27)	證自通已 (T11.809a19)	རང་གི་མངོན་པར་ཤེས་པ་ལྟ་ (自分の五神通) <H105b3> (案：ラサ版のみに「ལྟ་」 が入っている。)
51. 無し	清淨無垢光潔 圓照 (T11.222c29-22 3a1)	清淨明亮 (T11.809a21)	無し
52. (na) -kāraḥ (作者が〔ない〕) (MS40b3)	作受者 (T11.223b08)	作者受者悉皆 無(T11.809b23)	བྱེད་པ་པོ་ཡང་མེད། (作者もない) < D Ga29a3, P Wi32b1, H106b7>
53. 無し	由如來成就此 無畏故。於大衆	無し	無し

	中正師子吼轉 大梵輪。乃至一 切世間所不能 轉。 (T11.224a16-18)		
54. pratisamṣtare (MS42a5)	建立施設 (T11.224c11-12)	修頭陀行者 (T11.810c17)	གཏོང་བ་ལ་ < D Ga32a1, P Wi33b4, H111a5>
55. ayoniśaśānta (不如理な寂靜) (MS44a1)	不如理思惟 (T11.225c27)	深固作意 (T11.811c27)	ཚུལ་མེན་ཞེས་ (如理ではない寂靜) < D Ga35a1, P Wi39a2, H115b7>
56. trimaṇḍala pariśuddhācchinnā (三輪 が清淨と断ちを持つ) (MS45a5)	三相輪斷。 (T11.226c13) (案：ここ では、梵文写本に あpariśuddhā- (清淨-)に相当 する内容がない。 い。)	三輪清淨。 (T11.813a7) (案：ここ では梵文写本に あるcchinnā- (断 ち)に相当する 内容がない。)	འཁོར་གསུམ་ཡོངས་སུ་ཆད་པ་ལོ། (三輪をすべ てに断つ) < D Ga36b1, P Wi40b6, H118b1> (案：ここでは、玄奘訳と一 致し、梵文写本にある pariśuddhā- (清淨-)に相当す る内容もない。)
57. -aśarīrā- (無身/無自体) (MS45a5)	無性 (T11.226c20)	無し (訳がな い。)	ལུས་མེད་པ། (無身) < D Ga36b5, P Wi41a4, H118b4>
58. 無し	舍利子。知無爲 性當覺有爲。何 以故。諸法自性 即是無性。夫無 性者即體無二。 (T11.226c23-25)	然於有爲之法 亦悉了知。何以 故。一切法自性 彼即無性。無性 即無二。無爲之 法。亦非身證。 (T11.813a16-18)	འདུས་མ་བྱས་ཇི་ལྟ་བུར་འདུས་བྱས་ཡུང་དེ་ལྟར་ཁོང་དུ་ཆད་པ་ ར་བུ་ལོ། ། དེ་ཅིའི་ལྟར་ཞེ་ན། གང་ཚོས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རང་བཞིན་ དེ་ནི། དངོས་སོ་མེད་པ་ལོ། ། གང་དངོས་སོ་མེད་པ་དེ་ལ་གཞིས་ སྟུང་དེ། ལུས་མེད་པ། མངོན་པར་འདུས་མ་བྱས་པ་དེ་ < D Ga 36b5, P Wi 41a3-4, H118b6-119a1>
59. yāvan manañparijñā agrāhyatā dharmānupalabdhitā anālayatā (MS45b5)	無し	乃至了知意故 名爲無取。法無 所得名無含藏。 (T11.813b17-18)	ཡིད་ཀྱི་བར་དུ་ཡོངས་སུ་ཐོས་པ་ནི། གཞུང་བ་མེད་པ་ལོ། ། ཚོས་མི་དམིགས་པ་ནི། ལུས་གཞི་མེད་པ་སྟེ། < D Ga37b1, P Wi41b8, H120a2-3>
60. tad ucyate (MS46a5)	故説 (T11.227c7)	無し	無し
61. etat katamad yathāvatpadaṃ (MS46a6)	何等名爲如句 之相。 (T11.227c11-12)	何名如所説句。 (T11.813c26)	無し
62. 無し	無し	無し	མིང་ཅས་དུ་ཐད་དེ། < H121b8> (案：デルゲ版 (D Ga 38b1-2) で は、འདེམས་དུ་ཐད་དེ་とある。
63. 無し	如是入行非行 法故。 (T11.228a7-8)	無し	無し
64. bhavopādānavigatatvam (有に対する 取から離れる性) (MS46b5)	離有取性 (T11.228a13)	離我語取 (T11.814a22)	མིད་པའི་ལེན་པ་དང་བྱས་པ་དང་། (有の取と離 れる) < D Ga39a3, P Wi43b5, H122b4-5>
65. 無し	我今定當開示 令其覺悟。如是 清淨無垢無執 法故 (T11.228b26-2 7)	無し	無し
66. ākāśacintyatayā (虚空の如く不思議 である故に) (MS47b2)	無し	無し	ནམ་མཁའ་ལྟ་བུར་བསམ་གྱིས་མི་ཁྱབ་པའི་ཕྱིར་ < D Ga40a5, P Wi45a2-3, H124b5>
67. 無し	佛知一切法 眞如及實性 清淨等虚空 證成眞解脱 諸衆生不知 如是淨妙法	了知諸法如實 性 廓然明照等虚 空 如佛所説諸世 間 不知最上清淨	དེ་བཞིན་ཉིད་ལྟར་དེ་བཞིན་ཉིད་དུ་ཚོས་ནམས་ཐམས་ཅད་ནི། ནམ་མཁའ་མཚུངས་འདྲ་དེ་དག་མ་བཅེངས་མ་གྲོལ་རབ་མཁུན་ ཏི། འགྲོ་བ། ། དག་ཅིང་བཟང་བའི་ཚོས་ནམས་མི་ཤེས་གཞིགས་ ནས་སྟུ། ། དེ་དག་ལ་ཡང་མངས་བྱས་ཀྱི་ནི་ལྷིང་རྗེ་མི་བཟད་འཇུག་ ། < D Ga41a1-2, P Wi45a6-7, H125b7-126a1>

	如來見彼已 興猛厲大悲 (T11.229a16-19)	法 (T11.815a18-19)	
68. 無し	如自所證身無 誤失。亦爲衆生 說如斯法。令其 永斷身業誤失。 (T11.229b24-25)	無し	無し
69. 無し	如自所證語無 誤失。亦爲衆生 說如是法。令其 永斷語業誤失。 (T11.229c5-6)	無し	無し
70. 無し	令其永斷散亂 之心。 (T11.230a18-19)	無し	無し
71. -akṣaya- (無尽) (MS49a5)	無し	無し	ཟད་པའི་ (無尽の) < D Ga42b4, P Wi47b6, H128b4 >
72. 無し	於一切無諸異 想(T11.230a22)	無し	無し
73. nāsti tathāgatasya mahāmaitrīcchandasya hāniḥ (如來には、大慈に対する志欲の減少す ることが存在しない。) (MS49b3-4)	如來大慈志欲 無減 (T11.230b23-24)	如來大慈心欲 無減。 (T11.816b8-9)	དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་བྱམས་པ་ (慈) ལ་འདུན་པ་ཉམས་པ་ མེད་པ། < D Ga43b1, P Wi48b3, H130a1 >
74. 無し	以如是等無 有退沒故。說如 來正勤無減。 (T11.230c5-6)	無し	無し
75. samāhita (三摩呬多/等定) (MS50a5)	等定 (T11.231a7)	三摩呬多 (T11.816c11)	མཉམ་པ་ (平等) < D Ga44a7, P Wi49b2, H131b1 >
76. 無し	三摩地無有退 減(T11.231a20)	無し	無し
77. advayaṣaṃvitkaṣṭyāñānam (不 二である無礙解と善巧の智) (MS50b2)	無盡善巧無礙 解智 (T11.231a23-2 4)	無盡無礙解善 巧之智。 (T11.816c26)	སོ་སོ་ཡང་དག་པར་རིག་པ་མི་ཟད་པ་ལ་ (無尽に) མཉམས་པའི་ནམས་པའོ། < D Ga44b5, H132a4 >
78. sarvamānavidhisamatikrāntaṃ (一切 の慢心を生じる儀式より去った。) (MS51b4)	超諸慢種。 (T11.232a18)	無し	ད་རྒྱལ་གྱི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ལས་ཤིན་ཏུ་འདས་པའོ། < D Ga46b1-2, P Wi51b7-8, H135a1-2 >
79. saṃbhūtāni (成/生) (MS51b5)	若成若壞 (T11.232a28)	若成若壞 (T11.817c19)	བྱུང་བ་དང་མ་བྱུང་བ་ (生と不生) < D Ga46b4, P Wi52a3, H135a6 >
80. 無し	或獨覺乘已調 伏者。 (T11.232b8-9)	或有衆生以緣 覺法得化度者。 (T11.817c26)	ཇི་ཞིག་རང་ལངས་རྒྱལ་གྱི་ཐོག་པས་བསྐྱེད་པ་ཡང་ < D Ga46b7, P Wi52a6, H135b2-3 >
81. 無し	或於大乘已調 伏者。 (T11.232b9)	或有衆生以大 乘法得化度者。 (T11.817c26-2 7)	無し
82. 無し	苾芻僧衆壽量 (T11.232b10)	諸苾芻衆廣大。 壽量廣大。 (T11.817c27-2 8)	དགེ་སྤྱོད་གོ་དགོ་འདུན་རྣམས་པར་བྱ་བ་དང་། ཚད་ཚད་རྣམས་པར་བྱ་བ་ཡང་རབ་ཏུ་མཐུན་ཏོ། < D Ga46b7, P Wi52a6, H135b3-4 >
83. viprakṛtās (變異) (MS52a4)	遠 (T11.232c12)	任持 (T11.818a21)	བསྐྱེད་པ་ < D Ga47b3, P Wi53a2, H136b3 >
84. rūpadhātum (色界) (MS52b1)	色處 (T11.232c27)	百種相狀 (T11.818b4)	གཟུགས་ཀྱི་ཁམས་ (色の界) < D Ga47b7, P Wi53a8, H137a4 >
85. vividhaṃ (種々) (MS52b1)	三種 (T11.233a1)	三種 (T11. 818b7)	རྣམས་པ་གསུམ་ (三種) < D Ga48a1, P Wi53a8, H137a6 >

86. cyutihetuṃ prajānāti (MS52b3) (墮ちる因を完全に知る)	終歿因 (T11.233a5)	所滅因 (T11.818b12)	無し
87. cyutihetuṃ prajānāti (墮ちる因を完全に知る) (MS52b4)	終歿因 (T11.233a6)	所滅因 (T11.818b13)	無し

第十一「般若波羅蜜多品」異同表：

第十一「般若波羅蜜多品」の梵漢藏四本の内容的相異			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏訳本
1. yasyāpramāṇakathāṃ śrutvā (〔四〕無量についての説きを聞いて) (MS116a6)	無し	聞四無量已 (T11.868c27-28)	聞四無量已 (〔四〕無量の言論を聞いてから) < D Ga159a4, P Wi180a2, H307a3 >
2. 無し	若有菩薩聞諸法中不輕蔑行 (T11.296a3)	無し	無し
3. akuśaleṣu- (不善) (MS116a7)	不善 (T11.296a5)	不善處 (T11.868c29)	不善處 (不喜) < D Ga159a5, P Wi180a2, H307a3 >
4. 無し	復應爲他如法廣説。 (T11.298a22-23)	爲他人説。 (T11.870c10)	無し
5. 無し	身觸身識性無依住句。意法意識性無依住句。 (T11.298c12-13)	不住身界觸界身識界是道。不住意界法界意識界是道。 (T11.871a8-9)	不住身界觸界身識界是道。不住意界法界意識界是道。 (T11.871a8-9) < D Ga163b6-7, P Wi185b2, H314a7-b1 >
6. 無し	舍利子。如是般若。若不與蘊界處法而共同止。乃至不與一切所緣作意而共同止。 (T11.299a27-28)	五蘊十二處十八界。乃至一切攀緣。悉不共住。 (T11.871b6-7)	無し
7. yāvad eva viṃśatyā (二十) upakleśaiḥ sārddham na saṃasati (MS119b1-2)	乃至不與隨煩惱等二十一法而共同止。 (T11.299b1)	乃至二十隨煩惱 (T11.871b8)	乃至二十隨煩惱 (二十) 隨煩惱 < D Ga164b4, P Wi186b2, H315b5 >
8. 無し	如是般若。若不與業障同止。不與煩惱障法障見障報障智障同止。乃至不與一切隨俗習氣而共同止。 (T11.299b10-12)	悉不共住。又於業障煩惱障法障見障報障智障。乃至一切相續習氣。悉不共住。 (T11.871b14-15)	悉不共住。又於業障煩惱障法障見障報障智障。乃至一切相續習氣。悉不共住。 (T11.871b14-15) < D Ga164b6-7, P Wi186b5-6, H315a2-3 >
9. vijñānājñānakauśalaṃ (MS119b7)	無し	智識善巧。 (T11.871c3-4)	智識善巧。 (T11.871c3-4) < D Ga165b1, P Wi187a1-2, H317a2 >
10. bodhyaṅgakuśalaṃ (MS119b7)	無し	菩提分善巧。 (T11.871c4)	菩提分善巧。 (T11.871c4) < D Ga165b1, P Wi187a2, H317a2 >
11. 無し	或復證入方便	無し	無し

	食行。 (T11.302a26)		
12. 無し	或復證入營求 食行。 (T11.302a27-28)	無し	無し
13. pūrvarāgacariteṣv (MS122a1)	或復〔證入〕宿 世食行。 (T11.302a28)	過去食行。 (T11.873a24)	無し
14. 無し	阿素洛言詞。揭 路茶言詞。 (T11.0302c25-26)	阿脩羅聲。迦樓羅聲。 (T11.873b9)	བཟོད་པའི་ཚིག་ཤེས། <D Ga170a2, H324b1, 北京版にはない。>
15. 無し	(又能了知~) 是好名言。 (T11.303a8)	~巧妙説。(~皆悉了 知。) (T11.873b13)	無し
16. vyaṃjanam ucyate sarvasattvāparityāgade śanā (MS123a2)	所言文者宣銳 ⁴⁹⁶ 捨離諸所有 法。 (T11.303c8-9)	此説爲文。於諸有情 開演布施。 (T11.873c19-20)	ཚིག་འབྲུ་ཞེས་བྱ་བ་ནི། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་མི་གཏོང་བར་བསྐྱར་པ་ནི། < D Ga171a3, P Wi194a7, H326ba3> (案：ここでは、蔵訳は梵文写本とは一致する。)
17. tatra katamāni neyārthāni sūtrāṇi yad uktam* vyaṃjanam yathānirdiṣṭam* vistareṇa boddhavyaṃ imāny ucyante neyārthāni sūtrāṇi tatra katamāni nītārthāni sūtrāṇi yad ukto rtho yathānirdiṣṭo vi(MS123b1); stareṇāv agantavyaḥ imāny ucyante nītārthāni sūtrāṇi tat kathaṃ dharmaṃ pratisarati na pudgalaṃ yo neyārthaḥ sa pudgalārthaḥ tan niḥsaraṇaṃ yo nītārthaḥ ⁴⁹⁷ sa yathāvad dharmatā tat pratisaraṇaṃ imāni bodhisattvānāṃ catvāripratisaraṇāni iti hi pratisaraṇakuśalo bodhisattvo mahāsattvaś carati prajñāpāramitāyāṃ (MS123a8-b1)	無し	云何不了義經。謂所 説文如其所説。廣大 了知。此説是爲不了 義經。云何了義經。 謂所説義如其所説廣 大通達。此説是爲了 義經。又説隨順補特 伽羅無能出離。是不 了義。如所説法即能 出離。是爲了義。如 是菩薩摩訶薩。於勝 慧波羅蜜多之行。得 隨順善巧。 (T11.874a14-20)	དེ་ལ་དང་བའི་དོན་གྱི་མདོ་ལྡན་གང་ཞེན་གང་ཚིག་འབྲུ་བཤད་པ་ ཇི་ལྟར་བསྐྱར་པ་བཞིན་དུ་རྒྱ་ཆེར་ཁོང་དུ་རྒྱ་པར་བྱ་སྟེ་འདི་དག་ནི། དང་བའི་དོན་གྱི་མདོ་ལྡན་གྱི་ངག་གོ་ངེས་པའི་དོན་གྱི་མདོ་ལྡན་གང་ཞེན་ དོན་གང་བཤད་པ་ཇི་ལྟར་བསྐྱར་པ་བཞིན་དུ་རྒྱ་ཆེར་ཁོང་དུ་རྒྱ་པར་ བྱ་སྟེ། དེ་དག་ནི། དེས་པའི་དོན་གྱི་མདོ་ལྡན་གྱི་དག་གོ་དང་ཇི་ལྟར་ན། ཆོས་ལ་རྟོན་གྱི་གང་ཟག་ལ་མ་ཡིན་ཞེན། གང་དང་བའི་དོན་དེ་ནི། གང་ཟག་གི་དོན་ཡིན་པས་དེ་ལ་མི་རྟོན་གྱི། གང་དེས་པའི་དོན་དེ་ནི། ཆོས་ཤིང་ཇི་ལྟར་བཞིན་པས་དེ་ལ་རྟོན་པ་སྟེ། འདི་དག་ནི། བྱང་ཆུབ་ སེམས་དཔའི་རྟོན་པ་བཞིན། །དེ་ལྟར་ན། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་སེམས་དཔའ་ཆེན་པོ་རྟོན་པ་ལ་ མཁས་པ་ཤེས་རབ་གྱི་ལ་རོལ་བྱ་བྱེད་པ་ལ་སྦྱང་དོ། ། < D Ga171b6-172a1, P Wi195a3-6, H327a5-b2 >
18. tatra katamad bodhisattvānāṃ vyaṃjanakauśalam (MS123b1-2)	無し	云何菩薩文句善巧。 (T11.0874a20-21)	དེ་ལ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྩམས་གྱི་ཚིག་འབྲུ་ལ་མཁས་པ་གང་ཞེན། < D Ga172a1, P Wi195a6, H327b2>
19. 無し	復次舍利子。云 何菩薩摩訶薩。 依趣於智不依 趣識。舍利子。	無し	無し

⁴⁹⁶ 「鋭」は「説」の誤写である。

⁴⁹⁷ 梵文校訂ではnītārthaḥとある、蔵訳ではངེས་པའི་དོན་とある。

	<p>菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多故。善巧了知諸有言教數取趣義。是名爲識此不應依。諸有言教如法性義。即是於智此應依趣。</p> <p>(T11.304a6-10)</p>		
<p>20. tatra katamat* jñānaṃ yā pañcasūpādānaskandh eṣv apratiṣṭhitatā jñānaskandhaparijñēda m ucyate jñānaṃ (MS123b3)</p>	<p>所言智者。於五取蘊。識不安住。諸蘊遍智。是名爲智此應依趣。</p> <p>(T11.304a16-18)</p>	<p>何者以智。謂若了知所取五蘊。此說爲智。</p> <p>(T11.874a25-26)</p>	<p>དེ་ལ་ཡི་ཤེས་གང་ཞིན། གང་ལེན་པའི་ཕུང་པོ་ལྔ་རྒྱམས་ལ་གནས་པ་རྣམ་པར་ ཤེས་པའི་ཕུང་པོ་ཡོངས་སུ་ཤེས་པ་དེ་ནི། ཡི་ཤེས་ཞེས་བྱའོ། ། < D Ga172a4, P Wi195b2, H327b6></p>
<p>21. 無し</p>	<p>復次舍利子。云何名爲菩薩摩訶薩。不依趣不了義經。依趣了義經。舍利子。諸菩薩等善能通達。即如先說所有廣文。是則名爲不了義經。如是廣文不應依趣。即如先說所有廣義。是則名爲了義經際。如是廣義則可依趣。</p> <p>(T11.304b7-11)</p>	<p>無し</p>	<p>無し</p>
<p>22. yāni sūtrāṇi alpapaḍavyaṃjanāni cittanidhyaptikarāṇīmā ny ucyante nītārthāni (MS124a2)</p>	<p>若有宣說文句及心皆同灰燼。</p> <p>(T11.304b25-26)</p>	<p>於少文句而生決定。是爲了義。</p> <p>(T11.874b14)</p>	<p>མདོ་ཐཱ་གང་དག་ཚེག་དང་། ཚེག་འབྱུ་ཁུང་ལ་ངས་པར་རྟོགས་པར་བྱེད་པ་ དེ་དག་ནི། རེས་པའི་དོན་གྱི། ། < D Ga172b7, P Wi196a7-8, H329a1-2></p>
<p>23. 無し</p>	<p>養者</p> <p>(T11.304b27)</p>	<p>無し</p>	<p>無し</p>
<p>24. 無し</p>	<p>無養者</p> <p>(T11.304c2)</p>	<p>無し</p>	<p>無し</p>
<p>25. 無し</p>	<p>復次舍利子。云何名爲菩薩摩訶薩。依趣於法不依趣數取者。舍利子。菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多故。於諸經教善能分別諸有宣說。不了義經。即爲補特伽羅義。如是言教不應依趣。諸有了義即如性法義。如是言教此應依趣。</p>	<p>無し</p>	<p>無し</p>

	(T11.304c6-11)		
26. janmacyutipari(3)śuddhiḥ sarvakleśānupalabdhityā (MS125a2-3)	爲欲淨除生死法故。不染一切諸業煩惱。 (T11.305b26-27)	業惑清淨得無生滅。 ~ (T11.875a15)	ལྷན་དང་ཉོན་མོངས་པ་མི་དམིགས་པས་ཚད་ཤི་འཕྱེད་པ་ལྟ་བུ་དཀ་པ་དང་། < D Ga174b2, P Wi198a5-6, H331b2-3>
27. alpārthatā ' alpakṛtyatālpabhāṣyātā lpasvaratā (MS125a8)	嗜欲饕餮善能節儉。事緒緣務善能減約。言說談話善能遠離。於諸音聲善能棄捨。 (T11.306a4-6)	(謂於法師得是) 少義。(案：ここでは、梵文写本にある alpakṛtyatālpabhāṣyātālpasvaratāに相当する内容がない。) (T11.875b5)	དོན་ཅུང་བ་དང་། བྱ་བ་ཅུང་བ་དང་། ཟུ་ཅུང་བ་དང་། < D Ga175a3, P Wi198b8, H332b1> (案：ここでは、梵文写本にある - alpasvaratāに相当する内容がない。)
28. pratyayair jñānānugamaḥ (MS125b3)	無し	開導勝縁。 (T11.875b13)	ཁྱེན་ལ་ཡི་ཤིས་ཀྱི་ཆོས་ལྟ་བུ་དཀ་པ་དང་། < D Ga175a7, P Wi199a5, H332b7> (案：ここでは、藏訳は梵文写本とは一致している。)
29. bhūrjā (MS125b5)	葉紙 (T11.306a29)	樺皮紙 (T11.875b19)	無し
30. 無し	無し	無し	ཆོས་རྒྱ་བ་ལ་འགྲོ་བ་དང་། < D Ga175b3, P Wi199b1, H333a5>
31. jñānābhijñāparyeṣṭiḥ (MS126a2)	常樂尋求神通靜慮。 (T11.306c21-22) (案：ここでは、梵文写本にあるjñānaに相当する内容がない。)	入神通定。 (T11.875c10-11) (案：ここでも、梵文写本にあるjñānaに相当する内容がない。)	ཡི་ཤིས་དང་། མཛོན་པར་ཤིས་པ་ཆོས་བ་དང་། < D Ga176a6, P Wi200a5, H334a6> (案：ここでは、梵文写本にある jñānaに相当する内容がある。)
32. sarvasattvānugamaḥ kṣetrānugamaḥ (MS126a3)	隨遍入於一切行處。 (T11.307a21) (ここでは、梵文写本にある sarvasattvaと kṣetraとに相当する内容がないが、その代わりに、「行處」という訳がある。)	而復隨順一切有情一切刹土。 (T11.875c21)	གང་སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཆོས་སྤྱོད་ལྟ་བུ་དང་། ཞིང་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཆོས་སྤྱོད་ལྟ་བུ་ལྟེ། < D Ga176b4, P Wi200b4, H334b7>
33. kāyāparāntatām ca pratyavekṣate kāyapratyutpannatām ca pratyavekṣate (MS126b2)	無し	觀身後際。觀身現在。 (T11.876a3)	ལུས་ཀྱི་ཕྱི་མཐའ་མཐའ་ལ་ཡང་སོ་སོར་རྟོག་། ལུས་ཀྱི་དྲ་ཁྱར་ཕྱང་བ་ལ་ཡང་སོ་སོར་རྟོག་ཟེ། < D Ga177a3, P Wi201a3-4, H335b2>
34. 無し	即於一切善道衆生。起大慈心。 (T11.307c26-27)	無し	無し
35. abhāvanirmukto (MS128a6)	無し	無性解脫。 (T11.877a25)	དངོས་པོ་མེད་པར་མ་གཏོགས་པ་ < D Ga180a5, P Wi204b4, H340b2>
36. 無し	斷見常見。 (T11.309b2-3)	常見斷見。 (T11.877a28-29)	ཆད་པར་ལྟ་བུ་དང་། ཉག་པར་ལྟ་བུ་དང་། < D Ga180a7, P Wi204b7, H340b5-6>
37. 無し	無し	無し	དང་བའི་དོན་ཀྱང་དང་བའི་དོན་དུ།

			< D Ga181b2, P Wi206a4, H342b4>
38. 無し	於諸法中起無願見。 (T11.312c27)	無相無願而無別異。 (T11.878b3-4)	མེན་པ་མེད་པ་མཐོང་བའོ། < D Ga183b7, P Wi208b8, H346a6-7>
39. yair hetubhir yair ārambanair (諸因と諸所縁) (MS130b2)	依止於因縁所縁境。 (T11.310a19)	因攀縁生。 (T11.878b28)	རྒྱ་དང་ཐྱེབ་པ་(因と障) < D Ga184b6, P Wi210a1, H347b6>
40. bodhisattvena (菩薩) (MS130b4)	菩薩摩訶薩 (T11.310b1)	菩薩 (T11.878c4)	བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་སེམས་དཔའ་ཆོན་པོས་ (菩薩摩訶薩) < D Ga185a2, P Wi210a4, H348a6>
41. satya(諦)vyavacāraṃ śūnyatānimittalakṣaṇā n sarvvaḍharmām śraddadhāti (MS130b8)	一切諸法無我無有情。但是言說之所假立。唯空無相無願之相。由此信故。 (T11.310b26-27)	發生正解。於有情行。信一切法空無相相。 (T11.878c22-23)	སེམས་ཅན་(衆生) ལ་ནམ་པར་བྱྱེད་པ་དང་། རྟོང་པ་ཉིད་དང་། མཚན་མ་མེད་པའི་མཚན་ཉིད་ཀྱི་ཆོས་ཐམས་ཅད་ལ་དད་ < D Ga185b2, P Wi210b5-6, H349a1>
42. 無し	無願 (T11.310b27)	無し	無し
43. āsureṇa (MS131b2)	無し	阿脩羅 (T11.879b3)	無し
44. akuśalahetukā (MS131b7)	無し	惡因 (T11.879c7)	མི་དགེ་བའི་རྒྱ་ལས་བྱུང་བ་དང་། < D Ga187b1, P Wi213a1, H352a5>
45. anīṃjyahetukāḥ (MS131b7)	不動爲因。 (T11.313b18)	無記因。 (T11.879c7-8)	མི་གཞི་བའི་རྒྱ་ལས་བྱུང་བ་ < D Ga187b1, P Wi213a1, H352a5>
46. nirvāṇahetukāḥ (MS131b7)	涅槃爲因。 (T11.313b18-19)	無し	རྒྱ་དང་ལས་འདས་པའི་རྒྱ་ལས་བྱུང་བ་ < D Ga187b1, P Wi213a1-2, H352a5>
47. iti hi pratītyasamutpāḍakuśa lo bodhisattvaś carati prajñāpāramitāyāṃ (MS132a3)	是諸菩薩摩訶薩。爲欲修行般若波羅蜜多故。修習如是縁起善巧。 (T11.313c7-9)	應妙觀察。於無盡滅攝化有情。舍利子菩薩 摩訶薩於勝慧波羅蜜多。獲得如是縁生善巧 (T11.879c20-22)	無し
prā(3)modyakarī prajñā dharmārāmaratyāramba ṇām vyavacchedatvāt* (MS132b2-3)	是歡喜慧。縁法喜樂無斷絶故。 (T11.314a25)	斷諸攀縁得大法樂。是名勝慧。 (T11.880a22-23)	ཤེས་རབ་ནི། ཆོས་ཀྱི་དགའ་བ་ལ་དམིགས་པ་ནམ་པར་མི་གཙོད་པའི་ཕྱིར་རབ་ཏུ་དགའ་ བར་བྱེད་པའོ། <D Ga188b6, P Wi214b1, H354a6-7> (案：ここでは、他の三本と異なつて、 མི་གཙོད་པ་(断たない)と訳している。)
48. anāśray (無依) (MS132b5)	無漏 (T11.314b10)	無漏 (T11.880b6)	ཐག་པ་མེད་པ་(無漏) < D Ga189a5, P Wi214b7, H355a1>
49. satya- (真実、諦) (MS132b5)	(大) 聖諦 (T11.314b11)	眞實 (T11.880b7)	དཔེན་པ་(寂靜所) < D Ga189a5, P Wi 214b7, H355a1>
50. asaṃsrṣṭā prajñā sarvakleśaiḥ asaṃvāsā prajñā sarvāvarāṇiyair dharmaīḥ sārḍhaṃ na saṃvasati (般若とは、一切煩惱 と混ぜないのである。 般若とは、同住しない のである。〔すなわ ち、〕一切障礙法と共 に住まないのであ る。)(MS132b6)	是不離處慧。不與一切煩惱障法而同止故。 (T11.314b14-15)	離諸煩惱及障礙法。悉不共住。是名勝慧。 (T11.880b10-11)	ཤེས་རབ་ནི། ཐྱིབ་པར་བྱེད་པའི་ཕྱིར་ཆོས་ཐམས་ཅད་ དང་ཉན་ཅིག་ཏུ་མི་གནས་པས་མ་འདྲེས་པའོ། < D Ga189a6, P Wi 214b7-8, H355a4>
51. yaiva prajñā sa eva pāramitārthaḥ (MS132b8)	無し	謂是勝慧…。名波羅蜜多。 (T11.880b16-17)	ཤེས་རབ་གང་ཡིན་པ་ལ་རྟོག་ཏུ་བྱེན་པའི་དོན་ཀྱང་དེ་ཡིན་ཏེ། < D Ga189b2, P Wi215a5, H355b1-2>
52. 無し	一切諸法有能	無し	無し

	開悟不覺者義。 當知皆是到彼 義。 (T11.314c6-7)		
53. -kauśalya- (善巧) (MS133a2)	…善巧… (T11.314c11)	…善巧。… (T11.880b24)	無し
54. bodhisattvena (菩薩) (MS133a5)	大菩提心 (T11.315a7)	菩提心 (T11.880c8)	ཐུང་ཚུབ་ཀྱི་སེམས་ (菩提の心) < D Ga190a4, P Wi216a2, H356b3>
55. bodhicittotpādaṃ (發菩提心) (MS133a6)	發勝心 (T11.315a15)	發淨信心 (T11.880c13)	སེམས་བསྐྱེད་པ་ (發心) < D Ga190a6, P Wi216a4, H356b6>
56. nirvedhaprajñah (厭離慧) (MS133b1)	通達慧 (T11.315b4)	決擇勝慧 (T11.880c21-22)	ཤེས་རབ་ངེས་པར་འབྱེད་པ་(決択慧) <D Ga190b3, H357a6> (北京版では、 <u>ཤེས་རབ་དེས་པར་རྟོག་པ་དང་</u> <P Wi216b1> とある。)
57. niṣkramya- (MS133b7)	出詣 (T11.315c13)	無し	མངོན་པར་བྱུང་སྟེ་ <D Ga191b1, H358b3> (案：北京版では、 <u>ཁྱིམ་ནས་བྱུང་སྟེ་</u> <P Wi 217a8> とある。)
58. sadā bhoti atandrito (MS133b7)	於彼昏沈常遠 離 (T11.315c13)	無し	རྟག་ཏུ་གཡེལ་བ་མེད་པ་དང་། <D Ga191b1, H358b3> (案：北京版では、 <u>རྟག་ཏུ་སྟོམ་པ་མེད་པ་དང་།</u> <P Wi217a8> とある。)

第十二「大自在天授記品」異同表：

第十二「大自在天授記品」梵漢藏諸本の内容的相異			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵訳
1. tatra katamad dānaṃ yad idam āmiśadānaṃ (財施) abhayadānaṃ (無畏施) dharma {dha} dānaṃ (法施) idam ucyate dānaṃ (MS134a1)	云何名爲如是攝法。童子所言施者具有二種。一者財施。二者法施。是爲布施。(T11.316a7-8)	云何布施。謂財施法施及無畏施。(T11.881a28-29)	དེ་ལ་བྱིན་པ་གང་ཞིན། འདི་ན་གྱི་ཐང་ཞིང་བྱིན་པ་དང་། (財施) མེ་འཇིགས་པ་བྱིན་པ་དང་། (無畏施) རྣམ་བྱིན་པ་གྱེ། (法施) དེ་ནི། བྱིན་པ་ལོ། < D Ga191b4, P Wi217b4-5, H358b7-359a1>
2. tatra samānārthatā yatraiva yānaguṇasaṃjñī tatraiva ca yāne dharmāmāṣapratigrahakān sattvān pratiṣṭhāpayati (その中、同事とは、もしある乗の中に功德があると意識するならば、正にその乗の中に法を美味として受ける衆生たちを安住させることである。) (MS134a2)	言同事者。隨己所有智及功德爲他。演說攝受建立一切衆生。令其安住若智若法。(T11.316a11-13) (案：ここでは、下線をする部分は梵文写本にはその内容がない。)	云何同事。謂於是智起功德想。攝受有情安住是法。(T11.881b1-2) (案：ここでは、下線をする部分は梵文写本にはその内容がない。)	དོན་མཐུན་པ་ནི། ཐེག་པ་གང་ལ་ཡོན་ཏན་དུ་འདུ་ཤེས་པའི་ཐེག་པ་དང་། རྣམ་དེ་དག་ལ་འཇོན་པར་བྱེད་པའི་སེམས་ཅན་རྣམས་གཞིག་པ་ལོ། < D Ga191b5, P Wi217b6, H359a2-3>
3. yad yācanakeṣūpasthānaṃ arthakriyā yena yenārtho yācanakānām taṃ taṃ arthaṃ pariṣrāpayati samānārthatā yad yācanakeṣu samānārthatā punar aparaṃ dānaṃ (MS134a3)	於來乞求諸衆生所。善言安慰。言利行者。隨諸衆生所有義利。皆令成熟。言同事者。於來乞求諸衆生所。行平等心成其義利。復次童子。言布施者 (T11.316a14-17)	無	གང་སྟོང་པ་ན་མས་ལ་རིམ་གྱི་བྱིན་པ་ལོ། འདི་ན་བྱིན་པ་ནི། གང་གིས་སྟོང་པ་ན་མས་ཀྱི་དོན་དུ་འགྱུར་བའི་དོན་དེ་ཡོངས་ཁྱ་ཐོབ་པར་བྱེད་པ་ལོ། འདི་ན་མཚུངས་པ་ནི། གང་སྟོང་པ་ལ་དོན་མཚུངས་པ་ལོ། གཞན་ཡང་བྱིན་པ་ནི། <D Ga191b6-7, P Wi217b7-8, H359a4-5>
4. tatra priyavadyatā yad dūram api gatvā (遠くても行って) saddharmaparakāśanatā (その中、愛語とは、遠くても行って正法を開示するのである。) (MS134a7)	言愛語者。以微妙音開示正法。(T11.316b8-9)	愛語者。遠至他方演說諸法。(T11.881b19)	དེ་ལ་སྟོན་པར་སྐྱེ། བ་ནི། གང་རྒྱང་རིང་ལོང་ཡང་སོང་གྱེ། (遠方にも行って) དམ་པའི་རྣམ་སྟོན་པ་ལོ། <D Ga192a6, P Wi218a7, H359b7-360a1>
5. iti hi ime cāparimāṇā imās	童子如是攝法無量無邊。	於此復有無量	དེ་ན་བས་ན། རྒྱུད་མེད་པ་དེ་དག་དང་། མ་ཐོལ་ཏུ་བྱིན་པ་དེ་

cāpramāṇā imās ca pāramitā imāni ca saṃgrahavastūny ucyante bodhimārgaḥ (だから、これら〔摂事〕が無量であり、無辺である。そして、諸波羅蜜多とこれらの摂事とは菩提の道と呼ばれる。) (MS134b5)	皆説名爲菩提之道 (T11.316b29-c1) (案：ここでは、梵文写本にあるpāramitā に相当する内容がない。)	無邊諸攝事等 (T1.881c6) (案：ここでは、梵文写本にあるpāramitā と bodhimārgaḥ とに相当する内容がない。)	དག་དང་བཟུ་བའི་དངོས་པོ་དེ་དག་ནི་བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་ཞེས་བྱའོ། <D Ga192b5, P Wi 219a1-2, H360b4-5> (案：ここでは、梵文写本にある二つの aparimāṇa の中の一つだけに対する訳がある。)
6. 無し	無し	無し	འོད་འཛམྲི་ (放光の) <D Ga193a6, P Wi 219b3, H361b2>
7. ratnāmgo (宝支/肢) (MS135a2)	寶性 (T11.316c16)	寶身 (T11.882a3)	དཀོན་མཆོག་ཡན་ལག་ (宝支/肢) <D Ga193a6, P Wi219b4, H361b3>
8. iti hi śāriputra tasya bhagavato mahāskandhasyārvāg asaṃkhyeyaiḥ kalpai ratnāmgo nāma tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho loka udapādi yāvad buddho bhagavām (だから、彼大蘊世尊の後の阿僧企耶劫の間に、宝肢という名前の如来が世に誕生した。彼は阿羅漢であり、正等正覺であり、乃至、仏であり、世尊である。) (MS135a2) (案：ここでは、玄奘訳にある「明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師」に相当する内容、および法護訳にある「明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師」に相当する内容は、yāvadで省略されたのであろうか。)	舍利子。從大蘊如來滅度之後。經阿僧企耶劫。爾時有佛出興于世。名曰寶性如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛薄伽梵。 (T11.316c14-8)	過阿僧祇劫當得作佛。號曰寶身如來應供正遍知明行。足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。 (T11.882a3-5)	ཐུ་མེད་ལྷ་ དེ་ལྷ་བས་ན། བཅོམ་ཐུན་འདས་འོད་འཛམྲི་ལྷ་པོ་ཆེན་པོ་དེ་ཚུན་ཆད་བསྐལ་པ་གངས་མེད་པ་ན་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྒྱགས་པའི་སངས་རྒྱས་དཀོན་མཆོག་ཡན་ལག་ཅས་བྱ་བ་འཇིག་རྟེན་ཏུ་བྱུང་གྱེ་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ཐུན་འདས་ཀྱི་བར་དུ་ལོ། <D Ga193a5-6, P Wi219b3-4, H361b2-3> (案：ここでは、蔵訳にあるའོད་འཛམྲི་に相当する内容は梵文写本にない。)
9. tad yathā cakraratnam yāvat parīṇāyakaratnam eva saptamam (MS135a4)	所謂成就金輪乃至主將兵寶。 (T11.316c22-23)	所謂輪寶象寶馬寶摩尼寶女寶主兵寶主藏寶。 (T11.882a9-11)	འདི་རྩ་གྱེ་ འཁོར་ལོ་མེན་པོ་ཆེན་པོ་ཞེས་ཐོག་པོ་ཆེད་བར་དུ་བྱུན་ཏེ། < D Ga193b1-2, P Wi219b7, H361b7>
10. arddharājyam adāt (半分の領土を賜った。) (MS135b4)	割所王國四分之一。賜～ (T11.317a25 -26)	即以半國委付其政。 (T11.882b11)	རྒྱལ་མིང་མེད་ཕྱིན་ (半分の国務を賜る) < D Ga194b1, P Wi 221a2, H363b1>
11. tasyām eva ca velāyām eva sampad udārah kalyāṇaḥ kīrtiśabdaśloko bhyudgata iti hi sa bhagavām dīpaṃkaras tathāgato (‘)rhan samyaksambuddho yāvad buddho bhagavān aśrauśīd rājā jitaśatruḥ rājñah punar dīpapatēḥ putreṇā' nanuśikṣy anuttarā samyaksambodhir abhisambuddhā tasyāyam evam udārah kalyāṇaḥ kīrtiśabdaśloko bhyudgataḥ iti hi yāvad vistareṇa buddho bhagavān (そして、正にその時点、最も善い名称と名聞が具足されて広がる。すなわち、彼放光は世尊であり、阿羅漢であり、正	釋多羅三藐三菩提。時彼世尊。便以如是廣大名稱。出現世間。號曰放光如來。十號具足爲諸天人之所讚頌。爲諸天人之所讚頌。時勝怨王。聞光主王子出家修行證得無上正等菩提。名曰放光。 (T11.317b21-24)	多羅三藐三菩提。具大威德名稱遠聞。時彼太子既授其教。於佛法中精勤信解。隨順修學阿耨多羅三藐三菩提法。舍利子。爾時具足燈王。聞是太子捨家出家得阿耨多羅三藐三菩提已。 (T11.882c3-7)	དེ་ཉིད་ཀྱི་རྒྱལ་མོང་མེད་ཐུན་འདས་མར་མེ་མཛད་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྒྱགས་པའི་བྱང་ཆུབ་ཏུ་མངོན་པར་རྒྱགས་པར་སངས་རྒྱས་ནས་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ཐུན་འདས་ཀྱི་བར་དུ་གྲུར་པའི་ཆེ་བ་དང་། དཀོན་པར་གཤེགས་པའི་སྤྱི་དང་། ཆོགས་སྤྱི་བཅད་པ་མངོན་པར་བྱུང་ནས་རྒྱལ་པོ་དག་ལྷལ་གྱིས་རྒྱལ་པོ་མར་མེད་བདག་གི་བྱས་མ་བསྐལ་པར་སླ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྒྱགས་པའི་བྱང་ཆུབ་མངོན་པར་སངས་རྒྱས་ནས་དེ་ཉིད་ཀྱི་རྒྱལ་མོང་ཐུ་ཆེར་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ཐུན་འདས་སྤྱི་གྲུར་པའི་བར་དུ་ཆེ་བ་དང་། དཀོན་པར་གཤེགས་པའི་སྤྱི་དང་། ཆོགས་སྤྱི་བཅད་པ་མོས་སོ། <D Ga195a2-4, P Wi 221b4-7, H364a6-b2>

ダタは七の妻と七の息子と七の娘と七の婢と七の僕と共に) (MS141a1)		19)	ている。)
44. viṇśatikalpakoṭīśahasrasyātyayena (二十の千の俱胝の劫の後に (を経て)) (MS141a2)	過是劫已 (T11.321a11) (案: この「是劫」は 前文の「千拘胝劫」 (T11.321a10) を指して いる。)	過是劫已。 (T11.885a20) (案: この 「是劫」は前 文の「千拘胝 劫」 (T11.885a19) を指してい る。)	བསྐལ་པ་བྱེ་བ་སྟོང་ཕྲག་བརྒྱ་འདས་ནས་ (百千の俱胝劫を経てから) <D Ga203a6, P Wi231b1, H377a8>
45. viṇśatiḥ kalpakoti (二十俱胝劫) (MS141a2)	經二十拘胝劫 (T11.321a14-15)	於二十五俱胝 劫 (T11.885a21- 22)	བསྐལ་པ་ཉི་ཤུར་ (二十劫に) <D Ga203a8, P Wi231b3, H377b2>
46. yā etā naradattasya śreṣṭhiputrasya saptaprajāpatyaḥ saptaduhitarah saptadāsyah (長者の息子であるナラダタ のそれらの七の妻と七の娘と 七の婢である者たち) (MS141a2)	是長者子七婦七女及以 七婢。 (T11.321a15-16)	是七妻等 (T11.885a22)	ཆོང་དོན་གྱི་བུ་མིལ་བྱིན་གྱི་ཆུང་མ་བདུན་དང་། (七 の妻と) རྒྱུ་བདུན་དང་། (七の息子と) བུ་མོ་བདུན་དང་། (七の婢と) བུ་མོ་བདུན་དང་། (七の僕と) བུ་མོ་བདུན་ (七の婢) གང་ཡིན་པ་དག་ནི། <D Ga203a8-204a1, P Wi231b3, H377b2-3> (案: ここでは、藏 訳にあるརྒྱུ་བདུན་དང་། (七の息子 と) とབུ་མོ་བདུན་དང་། (七の僕 (し もべ)) とに相当する内容は梵 文写本にない。)
47. (a)nyonyanāmakās (各々の名号を持つ) (MS141a3)	皆同一號阿若末若 (T11.321a22)	轉次授記 (T11.885a25)	མིང་ཐ་དད་པར་འབྱུང་ནི། (名は各々にな る) < D Ga203b3, P Wi231b6-7, H377b6>
48. catvāri prāṇīśatāni (四百の有情たち) (MS141a5)	四百人 (T11.321a29)	無し	སྟོག་ཆགས་བཞི་བརྒྱ་ནི། (四百の有情たち は) < D Ga203b5, P Wi232a2, H378a3>
49. ṣaṣṭibhyah prāṇīśahasrebhyah (六十の千の有情たちから) (MS141a6)	是六萬衆中 (T11.321b06)	彼阿闍世王與 具足燈婆羅門 (T11.885b4- 5)	སྟོག་ཆགས་དུག་སྟོང་ལྔ་དྲེད་དག་ལས་ (それらの六 千の有情から) < D Ga204a1, P Wi232a5, H378a8>
50. [daśa]sahasrāṇi pratyekabuddhānām (十の千の独覺たち) (MS141a6)	八萬獨覺 (T11.321b8)	千辟支佛 (T11.885b7)	རང་སངས་རྒྱལ་བ་བརྒྱུད་ཀྱི་ (八万の独覺) <D Ga204a1-2, P Wi232a6-7, H378b2> (案: ここでは藏訳は玄奘訳 とは一致している。)
51. viṇśatikalpakoṭīnayutāni (二十那由他の俱胝の劫の間) (MS141a7)	經二十五拘胝那庾多劫 (T11.321b10-11)	於二十五俱胝 那庾多劫 (T11.885b9)	བསྐལ་པ་བྱེ་བ་ཕྲག་ཞིག་ཉི་ཤུར་(二十那由他 俱胝劫に) <D Ga204a3, P Wi232b1, H378b4>
52. daśānām prāṇīśasrānām (十の千の有情たちの) (MS141b1)	於此衆中有十千人。 (T11.321b13)	無し	སྟོག་ཆགས་ཁྲི་ལྔ་ལས་ (万の有情から) <D Ga204a5, P Wi232b2, H378b5>
53. ṣaṣṭīnām devanayutānām (六十那由他の天たち) (MS141b1)	復有六十那庾多諸天子 等。 (T11.321b15)	時六十那庾多 天人。 (T11.885b11 -12)	ཆུང་ལྔ་ཞིག་ཕྱག་ལུ་ནི། (六十万の天の子 たち) < D Ga204a4, P Wi232b3, H378b6>
54. bodhisattvapiṭakam dharmaparyāyam atyarthaṃ śrutvodgrhya dhārayitvā vācayitvā paryavāpya parebhyo py ārocya parebhyas ca vistareṇa samprakāśya (菩薩藏法門を懇懃に聞いて 受け容れて記憶して読誦して	若於是經受持讀誦。乃至 爲他分別說者。 (T11.321c15-16)	無し	བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ལྷོ་མོ་དྲུ་ཆོས་ཀྱི་ནམ་གངས་ཤིན་ཏུ་ མཉན་ཏམ་ཞུས་པས། བཞུང་ངམ། ཀུན་ཆུབ་པར་བྱས་པས། གཞན་དག་ལ་བཟོད་དམ། གཞན་དག་ལ་བྱ་ཆེར་ཡང་དག་ པར་རབ་ཏུ་བསྐྱར་ན། <D Ga204b5-6, P Wi233a5-6, H379b5-6> (案: ここでは、藏 訳では梵文写本にある vācayitvā (読誦) に相当する 内容がない。)

熟達して他人たちのためにも 説いて、また他人たちにも詳細 に解説してから) (MS141b6)			
無し	又證一切波羅蜜多。 (T11.321c23)	無し	ཕ་རོལ་ཁུ་ཕྱིན་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཕ་རོལ་ཁུ་ཕྱིན་པ་ཡང་ཆེས་སུ་ ཐོབ་པོ། <D Ga205a2, P Wi233b4, H380a4>
55. kâḥ punaḥ sarvapāramitāḥ (また、一切の波羅蜜多とは何 か。) (MS141b6)	無し	無し	ཕ་རོལ་ཁུ་ཕྱིན་པ་ཐམས་ཅད་གང་ཞེ་ན། (一切の彼 岸に到達するとは何か。) <D Ga205a3-5, P Wi233b5, H380a4>
56. tathāgata ^{kāyapratiprasabdhaḥ} sarvakāryair apamāṇabhūm[i]m anuprāptaḥ (MS142a1)	如來於一切所作皆已靜 息。如來於無量諸地皆已 證得。 (T11.321c25-26)	(如來) 於無 量地。隨得如 來一切輕安。 乃至隨得如來 之地。 (T11.885c17-1 8)	དེ་བཞིན་གཤམས་པའི་མཛད་པ་རྒྱུན་མ་བཅད་པ། རྒྱུན་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཚད་མའད་པའི་ཆེས་སུ་ཐོབ་པ། དེ་བཞིན་གཤམས་པས་དབག་ཁུ་མའད་པ་ཆེས་སུ་ཐོབ་པ། <D Ga205a2; P Wi233b4, H380a5-6>
57. 無し	又復更證無邊之地。 (T11.321c26-27)	無し	རྒྱུན་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཚད་མའད་པའི་ཆེས་སུ་ཐོབ་པ། <D Ga205a3, P Wi233b4, H380a6>
58 無し	無し	諸大菩薩摩訶 薩。 (T11.885c25-2 6)	無し
59. vajra vaga śrī bhāḍa postakaṃ me phug* bandhe yi spacha lag*s* mod* (MS142a3)	無し	無し	無し
60. namaḥ sarvajñāya namo bhagavate vītarāgāya namaḥ sarvabuddhabodhisa[...] (一切智のために、帰命する。 離欲者である世尊のために、帰 命する。一切仏・菩薩 [...のた めに]、帰命する。) (MS142a3)	無し	無し	無し

『菩薩藏經』「菩薩藏法門」、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」との対応例

『菩薩藏經』「菩薩藏法門」、『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の内容対応系統Ⅰ

両法門の内容対応系統Ⅰの一例として、『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の第五「慈悲喜捨品」の「慈」の内容と、『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の「慈無尽」の内容との対応関係について示してみたい。また、同時に、両經の「慈」、「慈無尽」とも対応する、『大乘理趣六波羅蜜多經』『靜波羅蜜多品第九之一』の慈無量心内の「慈」の内容も脚注に記載した。

1、(MS54b1-6)⁴⁹⁹

251

tatra katamā sarvasattveṣu maitrī iha kumāra bodhisattvo yāvān sattvadhātus tāvan maitryā spharati
kiyāṃ sattvadhātuḥ (1) yāvān ākāśadhātus tāvān sattvadhātuḥ |
tadyathā kumārānenākāśadhātunā nāsti tad yan na sphuṭaṃ bhavaty evaṃ eva kumārānāyā
bodhisattvamaitryā nāsti sa kaścit sattvas sattvanikāye saṃvidyate yo na sphuṭo bhavati (1)
tadyathā kumārāprameyaḥ sattvadhātuḥ evaṃ eva kumāra bodhisattvasyāprameyā maitribhāvanā (1)
iti hi kumārākāśānamtyatayā sattvānantatā (1) sattvānantata(3)yā maitryānantatā (1)
api tu khalu kumāra bahutaraḥ sattvadhātur na prthivīdhātur nābdhātur na tejodhātur na vāyudhātur(1)
api tu kumāropamāṃ te kariṣyāmy asyaivārthasya vijñaptaye (1) yāvad apramāṇaḥ sattvadhātus (1)
tadyathā kumāra pūrveṇa gaṃgānadivālikāsamā lokadhātavar dakṣiṇeṇa paścimenottareṇa evaṃ vidikṣv
adha-ūrdhvaṃ evaṃ sama(4)ntād daśasu dikṣv adha-ūrdhvaṃ (1) evaṃ samantād daśasu dikṣu
gaṃgānadivālikāsamā lokadhātavas te sarve eko mahāsamudro bhavet * paripūrṇa-udakenaikāṇavenātāḥ
parikalpam upādāya (1)
tatra gaṃgānadivālikāsamāḥ sattvāḥ sannipatya śatadhābhinnayā vālāgrakotyā ekam udakabindum
utkṣipeyur⁵⁰⁰ apare gaṃgānadivālikāsa(5) māḥsattvāḥ sannipatya śatadhābhinnayā vālāgrakotyā tṛtiyam
udakabindun abhyutkṣipeyuh parikalpam upādāya (1) kṣiyeta sa kumāra mahān udakaskandhas tenopāyena
na sarva sattvadhātoḥ pramāṇaṃ vā paryanto vā’ sti | evaṃ aprameyaḥ kumāra sattvadhātuḥ evaṃ
aparyantas taṃ bodhisattvaḥ sarvaṃ maitryā spharati |
tat kiṃ manyase (6) kumāra yasyaivam aprameyaṃ maitribhāvanākuśalamūlaṃ śakyaṃ tasya pramāṇam
udgrahitum | āha no hidaṃ bhagavan no hidaṃ sugata | āha evaṃ aprameyaṃ kumāra bodhisattvānāṃ
mahāsattvānāṃ mahāmaitribhāvanākuśalamūlaṃ bhavati (1)

【訳】:

1、また、童子よ。〔その中〕すべての衆生に対する慈とは何か。菩薩は衆生界がある限りに慈によつて〔その衆生界を〕遍満する。衆生界は何れほどあるか。虚空界がある限りに、衆生界もある。童子よ。知られるべきである。たとえば、この虚空界によって、満たされないようなものは存在しない、同様に、童子よ。衆生類の中に、菩薩の慈によって、満たされない如何なる有情も存在しない。童子よ。たとえば、衆生界が無量であるのとまさしく同じように、童子よ。菩薩の慈の修習も無量である。だから、実に、童子よ。虚空の無辺性があることによって、衆生の無辺性もある。衆生の無辺性であることによって、慈の無辺性もある。また、童子よ。衆生界がより多いもので、地界でもなく、水界でもなく、火界でもなく、風界でもないである。さらに、童子よ。衆生界が無量である限りに、それと同じ意味を知らしめるために、私は喩えをあなたに出しましょう。童子よ。たとえば、東にガンジス川の砂と等しい〔数の〕世界がある。同様に、南、西、北に、ガンジス川の砂と等しい〔数の〕世界がある。同様に、四維、上下に、ガンジス川の砂と等しい〔数の〕世界がある。即ち、東、南、西、北とそれらの間〔四維〕と、上、下とを合わせて十の方位に、ガンジス川の砂と等しい

復有如上殞伽河沙等衆生。同共集會。析一毛端爲百五十分。共以一分霑取海中第一滴水。復有餘殞伽河沙等衆生。如前同會。取一分毛霑取海中第二滴水。復有餘殞伽河沙等衆生。如前同會。取一分毛霑取海中第三滴水。童子當知。假使以是毛滴方便尚可霑盡此大海水。而衆生性邊量無盡。是故當知衆生之性無量無邊不可思議。而菩薩慈悉皆遍滿。

童子。於汝意云何。如是無量無邊修慈善根。頗有能得其邊際不。精進行童子白佛言。不也世尊。佛言。如是如是。

童子。菩薩摩訶薩亦復如是。修慈善根遍衆生界爲無限量。

惟淨訳：(T11.819b24-c18)

復何名爲一切衆生慈〔波羅蜜多〕。太子〔。〕所謂菩薩於衆生界。行廣大慈。彼衆生界如虚空界。

譬如虚空寥廓廣大。菩薩慈心亦復如是。於衆生界及衆生聚中。無不廣大慈心周遍。

太子當知。如衆生界無有限量。菩薩慈觀亦復無量。又如虚空無邊際故。而衆生界亦無邊際。以其衆生無邊際故。

慈心亦復無其邊際。

太子當知。彼衆生界其數廣多。非同地界水火風界。今說譬喩以明斯義。顯衆生界廣多無量。

太子。譬如東方殞伽沙數等諸世界。南西北方四維上下。周遍十方殞伽沙數等諸世界。而彼一切同一大海。大水充滿同一源流。

以彼如是十方一切殞伽沙等諸世界中諸衆生聚。破爲百分。乃至如彼一毛端量舉一水滴。次復如前以其殞伽沙等衆生數量。爲半百分。乃至如彼一毛端量舉一水滴。次復如前以其殞伽沙等衆生數量。復破半百。乃至如彼一毛端量。

太子。如前所說彼大水蘊。以其算數方便。不能比等衆生界數無量無邊。而衆生界無量無邊故。菩薩慈心亦復如是。

太子。於汝意云何。所有菩薩慈觀善根汝可知其量不。太子白言。不也世尊。不也善逝。佛言太子。菩薩摩訶薩慈觀善根無量無邊亦復如是。

⁵⁰⁰ 藏訳にのみならず、玄奘訳と惟淨訳にもあることから、梵本では、utkṣipeyur の直後にgaṃgānadivālikāsamāḥ sattvāḥ sannipatya śatadhābhinnayā vālāgrakotyā dvitīyam udakabindum utkṣipeyurという部分が略されたことが推測されるであろう。

〔数の〕世界がある。想像によって、すべての方位からの十の方位にあるそれらのガンジス川の砂と等しい〔数〕である世界はすべてが同一の海の水によって満たされた一つの大海となるとしよう。

想像してみましよう、そこに、ガンジスの河の砂と等しい〔数の〕衆生は集まって、百重に分けられた一つのしっぽの毛の先端を持って、一つの水滴を取り出すとしよう、別なガンジスの河の砂と等しい〔数の〕衆生は集まって、百通りに分けられた一つのしっぽの毛の先端を持って、第三の水滴を取り出すとしよう。

童子よ。その方法によって、その大きな水の集まりは尽くされるであろう、しかし、衆生界の量あるいは衆生界の辺はないである。

それと同様に、童子よ。衆生界は測ることができない、同様に、衆生界の辺はない。菩薩の慈によって、そのすべて〔の衆生界〕を充滿する。

童子よ。あなたはそれをどう考えますか。あの〔菩薩には〕このように無量の慈の修習による善根がある。

その〔善根の〕量は把握することが可能ですか。

「世尊よ。これができません。善逝よ。これができません」と精進行童子は答えた。

「童子よ。このように、菩薩摩訶薩たちには無量の偉大なる慈の修習による善根があるのである」と大蘊如来は説いた。

※『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：

1、(T13.199b22-c16)

爾時無盡意菩薩復語舍利弗。菩薩修慈亦不可盡。何以故。菩薩之慈無量無邊。是修慈者無有齊限等衆生界。菩薩修慈發心普覆。舍利弗。譬如虛空無不普覆。是菩薩慈亦復如是。一切衆生無不覆者。舍利弗。如衆生界無量無邊不可窮盡。菩薩修慈亦復如是。無量無邊無有窮盡虛空無盡故衆生無盡。衆生無盡故菩薩修慈亦不可盡。是謂大士所修慈心不可得盡。舍利弗言。善男子。齊幾名衆生界。無盡意言。所有地界水火風界其量無邊。而猶不多於衆生界。舍利弗言。唯善男子。頗可得說譬喻比不。無盡意言可說。但不得以小事爲喻。舍利弗。東方去此盡一恒沙佛之世界。南西北方四維上下。皆一恒沙佛世界。作一大海其水滿溢。使一恒河沙等諸衆生聚集。共以一毛破爲百分以一分毛滌取一滌。如是一恒河沙共取一滌。二恒河沙共取二滌。如是展轉乃至盡此滿大海水盡。是衆生界猶不可盡。菩薩慈心悉能遍覆如是衆生。舍利弗。於意云何。是修慈善根豈可盡耶。舍利弗言。實不可盡。唯善男子。是虛空性尚可得盡。菩薩慈心不可盡也。若有菩薩聞作是說不生驚怖。當知是人得無盡慈。⁵⁰¹

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：

梵文写本：

2、(MS54b6-55a1)⁵⁰²

⁵⁰¹ 『大乘理趣六波羅蜜多經』『靜波羅密多品第九之一』：

1、(T8.903c20-904a14)

以是因緣菩薩摩訶薩。應修梵行四無量心。起無緣慈普遍法界。何以故菩薩大慈無有齊限。不可思量無邊際故。一切有情遍十方界。菩薩大慈亦復如是。譬如虛空無有邊際。菩薩大慈亦復如是。以是當知有情無盡。菩薩大慈心亦無盡。眞空無盡慈亦無盡。以是因緣菩薩大慈眞實無盡〔。〕爾時慈氏菩薩白佛言。世尊菩薩普於如是有情起大慈悲。頗有譬喻得宣說者願爲開示。爾時薄伽梵。告慈氏菩薩摩訶薩言。善男子不可以少因緣譬喻而得宣說。慈氏當知譬如東方有殑伽沙等世界。南西北方四維上下亦復如是。如是十方殑伽沙數世界。合爲一海滿中海水。如是十方殑伽沙數世界。滿中有情一一有情。各持一毛取大海水。滴於餘處。至滿一劫。是海有竭。彼諸有情尚未窮盡。善男子如是有情。遍於十方殑伽沙數世界。菩薩於彼一一有情起大慈心。善男子於意云何。如是慈心有邊際不。慈氏菩薩白佛言。世尊假使虛空尚可測量。此大慈心不可窮盡〔。〕佛告慈氏若菩薩摩訶薩。聞是慈心無邊無盡不驚怖者。當知是人亦得如是慈心無盡。

⁵⁰² 藏訳：

2、(D Ga50b1-3, P Wi57a5-7, H142b3-6)

གཞན་ནུ། དེའི་བླ་མ་པ་ནི། བདག་སྤང་བ་ཡིན། གཞན་ལ་ཕན་པར་གནས་པ་ཡིན།
མཚལ་ཏུ་གཞན་ལོ་མས་མེད་པ། ཁྱོད་པ་དང་གཞན་ལོ་མས་ཀྱི་མ་པ་དང་བྱམ་པ།
ཉེ་བར་འཛོམས་པ། རྒྱུ་ལྷན་ཆགས་པའི་ཀླན་ནས་ཐང་བ་དང་བྱམ་པ།
དྲོད་པ་ཀླན་ཏུ་ཐྱོན་པ། འཁྱམ་པ་ཐམས་ཅད་ལ་ཉེས་པར་སྒྲ་བ།
ཡོངས་སུ་གཏུང་བ་མེད་པ། ལུས་དང་དག་དང་སེམས་བདེ་བ་རྒྱུད་པ།
གཞན་གྱི་གཞན་དཔར་བྱ་བ་ཐམས་ཅད་ཏུ་མ་སྤང་བ། འཇིགས་པ་ཐམས་ཅད་དང་བྱམ་པ།

玄奘訳：

2、(T11.235c7-14)

復次童子。〔我今更說大慈之相。〕童子當知。此慈無量能護自身。此慈如是發起他利。

於無諍論慈最第一。慈能除斷忿恚根栽。

慈能永滅一切過失。慈能遠離諸有愛纏。

此慈如是。但見衆生清淨勝德。而不見彼有諸愆犯⁵⁰²。

sā cāsyā kumāra maitrī ātmā(7)nurakṣikā bhavati (I) parahitapratyutthānā (I)
avyāpāda paramā vyāpādakhilakrodhāpagatā |
doṣanirghātānī anunayaparyutthānavigatā |
prasādasandarśanī sarvaskhalitadoṣasaṃdarśanī |
niṣparidāhakāya(MS55a1)vākcittasukhasaṃjananī (I)
sarvaparopakramāpatitā sarvabhayavigatā (I)

【訳】：

2、童子よ。彼〔菩薩〕の慈は自分を守るものである。〔慈は〕他人の利益を将来するものである。

〔慈は〕不瞋を最高とするものである。〔慈は〕瞋を不生とし、忿を消滅するものである。

〔慈は〕過失を断じるものであり、随貪である纏(paryutthāna)から離れるものである。

〔慈は〕淨信を見るものであり、すべての誤った過失を見るものである。

〔慈は〕苦悩のない身と語と心の樂を生ずるものである。

〔慈は〕すべての他人を害することに陥らないものであり、すべての恐怖を離れるものである。

※『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：

2、(T13.199c16-21)

舍利弗。是慈能自擁護己身。是慈亦能利益他人。

是慈無諍。

是慈能斷一切瞋恚荒穢繫縛。是慈能離諸結及使。

是慈歡喜。是慈不見一切衆生破戒之過。

是慈無熱身心受樂。

是慈遠離一切惱害。是慈能離一切怖畏。⁵⁰³

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：

梵文写本：

3、(MS55a1)⁵⁰⁴

āryapathānukūlā(I)

【訳】：

3、〔慈は〕聖なる道に従うものである。

※『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：

慈能超越熱惱所侵。慈能生長身語心樂。

慈力如是。不爲一切他所惱害。慈性安隱離諸怖畏。

惟淨訳：

2、(T11.819c19-22)

復次太子。菩薩慈心能自隨護。作他利益。

以慈心故於他無瞋亦無懈倦。

離諸忿恚息諸過失。

不見違順。表示清淨〔。〕

滅諸垢穢。於身語心常生妙樂。

蠲除雜染息諸怖畏。

⁵⁰³ 『大乘理趣六波羅蜜多經』『靜波羅蜜多品第九之一』：

2、(T8.904a14-16)

其慈心者能護自他。（『大乘理趣六波羅蜜多經』『靜波羅蜜多品第九之一』では、parahitapratyutthānāに相当する内容はない。）

滅除一切諍訟諸惡。

能覆有情所有過失。

令諸衆生三業調善。

常得安樂離諸怨怖〔。〕

⁵⁰⁴ 藏訳：

3、འཕགས་པའི་ལམ་དང་མཐུན་པ། (D Ga50b3, P Wi57a7, H142b6)

玄奘訳：

3、慈善根力隨順聖道。（T11.235c14-15）

惟淨訳：

3、無し。

3、是慈能順衆聖人道。（T13.199c21）⁵⁰⁵

※『菩薩藏經』「菩薩藏法門」の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：

梵文写本：

4、(MS55al)⁵⁰⁶

ruṣṭaduṣṭaprasādasamjananī (l)

sarvasaṃgrāmottāraṇī (l)

adaṇḍāśāstrapariṅhītā (l)

【訳】：

4、〔慈は〕粗暴な人たちと悪漢たちを清浄信を生じさせるものである。

〔慈は〕すべての戦争⁵⁰⁷から救うものである。

〔慈は〕棒を持たないことと武器を持たないことによって収められるものである。

※『大集經・無尽意菩薩品』「無尽法門」の慈無尽の内容：

4、（T13.199c22）⁵⁰⁸

是慈能令瞋者歡喜。

是慈能勝一切鬪諍。⁵⁰⁹

※『菩薩藏經』「菩薩藏法門」の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：

梵文写本：

5、(MS55al)⁵¹⁰

nirāmiṣapunyaṣaṃbhāropacitā (l)

【訳】：

5、〔慈は〕肉欲がなく、福德の集積によって積み重ねたものである。

⁵⁰⁵ 『大乘理趣六波羅蜜多經』「静波羅蜜多品第九之一」：

3、無し。

⁵⁰⁶ 藏訳：

4、（D Ga50b3, P Wi57a7, H142b6-7）

གཤིན་པ་དང་། རྒྱལ་པ་ལ་དང་བ་རྒྱུད་པ།

གཡུལ་ཐམས་ཅད་ལས་རྒྱལ་བ།

དཔྱིག་པ་དང་མཚན་ཆ་མི་ཐོགས་པ།

玄奘訳：

4、（T11.235c15-17）

慈能令彼多瞋暴惡不忍衆生發清淨信。

慈能濟拔諸衆生聚。

以慈力故。於彼刀杖性無執持。

惟淨訳：

4、（T11.819c22-23）

善護恚惡起清淨意。

滅諸鬪戰〔。〕

不執刀杖。

⁵⁰⁷ samgrāmaは玄奘訳では「衆生聚」と訳しているが、藏訳と惟淨訳ではそれぞれに「གྲུབ་（戦争）」、「鬪戰」と訳している。

⁵⁰⁸ 『大集經・無尽意品』では、『菩薩藏經』にある「adaṇḍāśāstrapariṅhītā」という内容はない。

⁵⁰⁹ 『大乘理趣六波羅蜜多經・静波羅蜜多品』第九之一：

4、（T8.904a14-17）

多瞋恨者令其慈忍。

息諸戰陣刀兵等苦。悉能救護一切有情。

⁵¹⁰ 藏訳：

5、無し

玄奘訳：

5、無し

惟淨訳：

5、無し

※『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：
5、無し⁵¹¹

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：
梵文写本：

6、(MS55al)⁵¹²
sattvapramokṣānunitā sarvapratighāpagatā (I)
sarvakuhanalapanavaṃcananiṣpeṣāpagatā (I)

【訳】：

6、〔慈は〕衆生の解脱に導くものである。〔慈は〕一切の怒りを離れるものである。
〔慈は〕一切の偽善とお世辞と矯飾と諂求と⁵¹³から離れるものである。

※『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：
6、無し⁵¹⁴

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：
梵文写本：

7、(MS55al-5)⁵¹⁵

⁵¹¹ 『大乘理趣六波羅蜜多經』『静波羅密多品第九之一』：

5、無し

⁵¹² 藏訳：

6、(D Ga50b3-4, P Wi57a7-8, H142b7-143a1)

མཉམས་ཅན་རབ་ཏུ་ཐར་པར་བྱ་བ་ལ་དགའ་བ། ཁོང་གྲོ་བ་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ།
ཚུལ་འཚམས་པ་དང་། ལ་གསལ་ག་དང་། འདྲིད་པ་དང་། གཞིགས། རྫོང་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ།
玄奘訳：

6、(T11.235c17-19)

慈能將導一切衆生趣於解脱。是慈能滅諸惡瞋恚。
是慈遠離詐現威儀諛諂諂諂誨誨求索。

惟淨訳：

6、(T11.819c23-25)

向解脱門 離諸損害。

所有一切諂曲心意。雜亂詞句虛假語言。皆悉遠離。

⁵¹³ niṣpeṣa：玄奘訳では「遍切求索」と訳しているが、藏訳では「གཞིགས་རྫོང」⁵¹³と訳している。（གཞིགས་རྫོང：作賛欲得。五邪命之一。想得到別人的財物而赞叹其人的東西。（【訳】他人の財物を得ようとするために、他人のものを賛嘆する。）（『藏漢大辞典』下册, p. 2431）

⁵¹⁴ 『大乘理趣六波羅蜜多經』『静波羅密多品第九之一』：

6、無し

⁵¹⁵ 藏訳：

7、(D Ga50b4-51a4, P Wi57a7-b8, H143a1-b5)

རང་གི་རྣམ་པ་དང་། བཀྲར་སྒྲིབ་དང་། ཚེགས་ལུ་བཅད་པས་ཉེ་བར་འཛིན་བ།
བརྒྱ་བྱིན་དང་། ཚངས་པས་ལྷག་བྱས་པ།
རང་གི་གཟེ་བཟེད་ཀྱིས་བརྒྱན་པ།
མཉམས་པས་བརྟེན་པ།
བྱིས་པ་ཐམས་ཅད་རྒྱུ་ལྟར་བ།
ཚངས་པའི་ལམ་དང་མཐུན་པ། འདྲིད་པའི་ལམ་ལ་མ་འདྲེས་པ།
ཐར་པའི་ལམ་གྱི་གཙོ་བོར་གྱུར་པ།
ཐེག་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཡང་དག་པར་བཟུང་བ།
ཟང་ཟེང་མེད་པའི་བསོད་ནམས་ཀྱི་ཚེགས་བསགས་པ། རྒྱུ་ལྟར་བའི་བསོད་ནམས་བྱ་བའི་དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ཟེམ་ཀྱིས་མི་ནོན་པ།
མཚན་ལུ་མ་ཚུ་ཅུ་གཉིས་དང་། དཔེ་བྱ་བཟང་པོས་ཡང་དག་པར་བརྒྱན་པ།
དབང་པོ་ཉམས་ཤིང་མ་ཚང་བ་ཐམས་ཅད་ལྷུངས་པ།
བདེ་འགྲོ་དང་། ལྷ་དན་ལས་འདའ་བའི་ལམ་ཐམས་ཅད་དུ་འགྲོ་བ།
ངན་སོང་ཐམས་ཅད་དང་། མི་སྐུ་པ་བརྒྱད་ལས་རྫོགས་པ།
ཚེས་ཀྱི་ཀུན་དགའ་ལ་དགའ་ཞིང་མོས་པ།
འདྲིད་པའི་ལོངས་སྤྱོད་ཐམས་ཅད་དང་། དབང་པོ་དང་། ལྷ་ལ་མེད་པར་མི་དགའ་བ་དང་།
མཉམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་མཉམས་པའི་སྐུ་བྱིན་པ་རབ་ཏུ་རྒྱུར་བ།
ཐ་དང་པའི་འདུ་ཤེས་དང་བྲལ་བ།
ཚུལ་ཁྲིམས་དང་བསྐྱབ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སྒྲོ་དང་ལམ།
ཚུལ་ཁྲིམས་འཆལ་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སྐྱབས།

བཟོད་པའི་སྒྲིབས་ཀྱི་ཉེ་མོན་པ།
ང་རྒྱལ་དང་། རྒྱལ་པ་དང་། རྒྱལ་པ་མཉམ་ཅད་དང་ཐུམ་བ།
མི་འཇུགས་པའི་བཙོན་འགྲུལ་རྩིས་པ།
ཡང་དག་པར་སྦྱར་བའི་བྱ་བ་སྒྲིལ་བ།
བསམ་གཏན་དང་། རྣམ་པར་ཐར་པ་དང་། ཉིང་དེ་འཛིན་དང་། རྣམས་པར་འཇུག་པའི་ཅ་བ།
ཉན་མོངས་པ་ལས་བྱང་བ། ལེམས་ངེས་པར་ཉྱལ་བ།
ཐོས་པ་འཛིན་པ་ཤེས་རབ་ཀྱི་རྒྱ་སྒྲིབ་པའི་བྱམས་པ་དང་། བདག་གི་ཚྭགས་དང་གཞན་གྱི་ཚྭགས་འཛོམས་པ།
བདད་དང་ཉན་མོངས་པའི་ཚྭགས་ལེལ་བ།
འགྲིགས་ན་བདེ་བ།
ཐང་བ་དང་། སྒོང་བ་དང་། འདུག་པ་དང་། ཉལ་བའི་སྦྱོད་ལམ་སྤང་བར་བྱེད་པ།
སྒྲིབ་པའི་རང་བཞིན་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་ཐམས་ཅད་ལེལ་བ།
དེ་ཞིས་པོས་བྱུགས་པ། ཁྲེལ་ཡོད་པ་དང་། ཇོ་ཚ་ཤེས་པས་བྱུགས་པ།
མི་ལོས་པ་དང་། ཉན་མོངས་པ་དང་། ངན་འགྲོ་ཐམས་ཅད་ལེལ་བའི་བྱམས་པ། འགྲོ་བ་ཐམས་ཅད་སྦྱོབ་པའི་བྱམས་པ་ཆེན་པོ།
བདག་གི་བདེ་བ་བཏང་བ་དང་། ལེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་བདེ་བ་རབ་ཏུ་བྱིན་པ་སྟེ།

玄奘訳:

7、(T11.235c19-236a14)

而能增長利養恭敬名譽等事。

梵釋天王之所禮敬。

以慈嚴身所有威德。

行慈之人。爲聰慧者所共稱讚。

慈能防護一切愚夫。

是慈力故超過欲界。順梵天道

開解脫路。[慈爲大乘最居前導。]

慈能攝御一切諸乘。

慈能積集無染福聚。慈善之力一切有依。諸福業事所不能及。

慈能莊嚴三十二相。及隨顯相。

慈能離彼鄙賤下劣不具諸根。

慈爲坦路善道涅槃歸趣之所。

是慈能遠一切惡道及諸八難。

是慈力故喜樂法樂。

不貪一切富貴王位受用樂具。

是慈力故。於諸衆生等心行施。

是慈能離種種妄想。

慈爲門路。一切尸羅學之所由。

慈能救濟諸犯禁者。

是慈能現忍辱之力。

慈能遠離一切憍慢矜伐自大。

慈能發起無動精進。

慈能令修方便行速疾究竟。

慈能爲諸靜慮解脫及三摩地三摩鉢底之所根本。

慈能令心出離煩惱諸有熾然。

慈爲一切智慧生因。由慈無量能開持故。自他諸品皆悉決定。

慈能除遣順魔煩惱。

是慈力故同住安樂。

慈能令人起住坐臥密護威儀。

慈能損減諸掉性欲。

是慈猶如妙香塗身。是慈能塗慚愧衣服。

是慈能遣一切諸難煩惱惡趣。

慈能濟拔一切衆生。大慈無量捐捨自樂。能與一切衆生安隱快樂。

惟淨訳：

7、(T11.819c25-820a14)

順善財利資養身命。帝釋梵王常所恭敬。威德莊嚴智者稱讚。護諸愚者。護持梵行不著欲界。解脫道等一切出生。

而善攝受。

非所愛樂諸有福行。亦不積集一切勝上諸有福行。而常增長。

三十二相八十種好。以爲莊嚴。

一切下劣殘缺諸根。亦悉遣除。

順向善趣涅槃正道。

一切惡趣剎那止息。

一切法愛而自喜樂。

諸欲受用大富王位。增上適悅悉無愛著。

於諸衆生起平等心。而行布施〔。〕

離諸異想。

svalābhasatkāraślokapajī(2)vyā (|)
 śakrabrahmanamaskṛtā (|)
 svatejolaṃkṛtā (|)
 vidvatpraśastā (|)
 sarvabālānurakṣikā (|)
 brahmapathānukūlā kāmādhātvasaṃsrṣṭā (|)
 mokṣapathapramukhā (|)
 sarvayānasamgrhītā (|)
 sarvopadhipuṇyakriyāvastvanabhibhūtā (|)
 dvātrīṃśallakṣaṇānuvyamaṃjasamalamkṛtā (|)
 sarvahīnavikalendriyāpakarṣitā (|)
 sarvasugatīnirvāṇapathagamanā (|)
 sarvā(3)pāyāṣṭākṣaṇavinivṛttā (|)
 dharmārāmaratiratā (|)
 sarvakāmabhogaiśvaryarājyānabhinandinī (|)
 sarvasattvasamacittadānaprayogā (|)
 nānātvasaṃjñāvigatā (|)
 sarvaśīlaśikṣāmukhapathā (|)
 sarvaduḥśīlaparitrāṇā (|)
 kṣāntibalasandarśanī (|)
 sarvamānamadadarpavigatā (|)
 akopyavīryārambhā (|)
 samyakprayogakāryottārāṇī (|)
 dhyānavimokṣasa(4)mādhīsamāpattimūlā (|)
 kleśaniḥsaraṇacittanidhyaptiḥ (|)
 prajñāhetusaṃjananī maitrī śrutadhāraṇatayā svapakṣaparapakṣanirghātānī (|)
 mārakleśapakṣāpanītā (|)
 sukhasaṃvāsā utthānapratyutthānaniṣadyāśayyeryāpathaguptikarāṇī (|)
 sarvaudhatyaprakṛtīmanasikārāpakarṣitā (|)
 sugandhānulepanī hryapatrāpyānulepanī (|)
 sarvā(5)kṣaṇakleśadurgatyapakarṣitā (|)
 maitrī sarvajagattrāyaṇī mahāmaitrī (|)
 ātmasukhotsrṣṭā savrasattvasukhānupradāyikā (|)

【訳】：

- 7、〔慈は〕利養と恭敬と名誉とを増やすべきものである。
 〔慈は〕釈梵天王によって、敬礼されるものである。
 〔慈は〕自身の栄光によって、飾られるものである。
 〔慈は〕知者によって、称賛されるものである。
 〔慈は〕一切の愚者たちを保護するものである。
 〔慈は〕欲界によって、厭離されて、梵天の道に従うものである。
 〔慈は〕解脱の道に向かうものである。
 〔慈は〕〔三〕乗のすべてによって、含まれるものである。
 〔慈は〕諸々の〔善行によって〕集まった福業事を及ばざるとするものである。
 〔慈は〕三十二相と〔八十〕随好とをみごとに飾るものである。
 〔慈は〕すべての劣った不健全な根を取り除いたものである。

一切戒學順向修習。
 諸毀戒者善爲作護。
 現忍辱力〔。〕
 遠離惡魔憍慢等事。發勤精進
 出離正行。
 於禪定解脫等持等至。根本煩惱以決定心而求出離。
 勝慧淨因。出生一切慈聞總持。自分他分悉無違害。
 息除一切魔煩惱分。
 行住坐臥增長一切妙樂和合。
 除蕩一切不善自性及諸作意。
 慚愧妙香而常塗飾。
 消滅一切惡趣障難及煩惱等。
 常起慈心救護世間。以大慈心棄捨己樂。隨與他樂。

〔慈は〕すべての善趣と涅槃の道に赴くものである。
 〔慈は〕すべての悪趣と八難とから離れるものである。
 〔慈は〕法の喜びと楽しみによって、楽しまれるものである。
 〔慈は〕すべての愛欲の享受と富と王権によって、喜ばれないものである。
 〔慈は〕一切の衆生に対する平等な心によって、布施を実行するものである。
 〔慈は〕差別性のある種々の想を離れるものである。
 〔慈は〕すべての戒学に向かう道を有するものである。
 〔慈は〕すべての悪い習慣（戒）を持っている人を救済するものである。
 〔慈は〕忍辱力を見せるものである。
 〔慈は〕すべての自慢と矯慢と尊大とから離れるものである。
 〔慈は〕不動な精進を行うものである。
 〔慈は〕正しい加行を為して、救済されるものである。
 〔慈は〕静慮と解脱とサマーディ（samādhi）とサンマパッティ（samāpatti）とを根本とするものである。
 〔慈は〕煩惱の出離によって、心を専念させるものである。
 智慧の因を生じさせるものである慈は聞いたこと（仏陀の教え）を記憶することによって、自らの側と他人からの側を取り去るものである。
 〔慈は〕悪魔による煩惱品を離れるものである。
 〔慈は〕安楽に住するものであり、行・住・座・臥の威儀の護りを生じるものである。
 〔慈は〕すべての掉舉性と作意とを取り除くものである。
 〔慈は〕よい香りを塗るものである〔ように〕、慚と愧を塗るものである。
 〔慈は〕すべての難と煩惱と悪趣を取り除くものである。
 すべての衆生を救うのである慈は偉大な慈である。
 〔偉大な慈は〕自らの安楽を捨てて一切の衆生に安楽を与えるものである。

※『大集經・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：

7、(T13.199c22-200a13)

是慈能生利養稱歎。是慈莊嚴釋梵威德。是慈常爲智人所讚。是慈常護凡夫愚人。是慈常能隨順梵道。是慈不雜遠離欲界。是慈能向解脫法門。是慈能攝一切諸乘。是慈能攝非財功德。是慈長養一切功德。是慈過諸無作功德。是慈悉能莊嚴相好。是慈能離下劣鈍根。是慈能開天人涅槃諸善正道。是慈能離三惡八難。是慈愛樂諸善法等。是慈如願一切所欲成就自在。是慈平等於諸衆生。是慈發行離諸異相。是慈正向持戒之門。是慈能護諸犯禁者。是慈能成無上忍力。是慈能離諸慢放逸。是慈發起無諍精進入於正道。是慈根本入聖禪定。是慈善能分別於心離諸煩惱。是慈因慧而生總持語言文字。是慈定伴離魔結伴。是慈常與歡喜同止。是慈善爲心之所使。是慈堅持威儀戒法。是慈能離諸掉動等。是慈能滅種種諸相。是慈善香慚愧塗身。是慈能除煩惱臭氣。舍利弗。夫修慈者。悉能擁護一切衆生。能捨己樂與他衆生。⁵¹⁶

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「慈悲喜捨品」の慈無量心の内容（四本）：

梵文写本：

8、(MS55a5-6)⁵¹⁷

⁵¹⁶ 『大乘理趣六波羅蜜多經』『静波羅密多品第九之一』：

7、(T8.904a18-b2)

離諸欺誑名聞十方。釋梵四王恭敬供養。慈心瓔珞以自莊嚴。爲諸有情解脫導首。能令二乘迴心向大。積集一切菩提資糧。不爲世福之所屈伏。恒以相好莊嚴其身。能除一切諸根殘缺。捨離八難得生人天。行八聖道涅槃正路。菩薩修慈不貪五欲。但於有情起平等心。行布施時心無分別。護淨尸羅救犯禁者。示安忍力令離瞋恚。所行精進皆順正法。住三摩地慈救一切。發大智慧出離世間。煩惱菩提無有二相。無緣大慈降魔軍衆。而能安樂一切有情。此生來生常不捨離。行住坐臥恒勸修持。我慢銷除離諸放逸。又慈心者慚愧衣服淨戒塗香。能斷世間煩惱習氣。饒益有情施一切樂。

⁵¹⁷ 藏訳：

8、(D Ga51a4-6, P Wi57b8-58a3, H143b5-144a2)

གཞིན་ནུ། ཉན་ཐོས་ནམས་ཀྱི་བྱམས་པ་ནི། བདག་སྐྱོབ་པ་ལོ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནམས་ཀྱི་བྱམས་པ་ནི། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་སྐྱོབ་པ་ལོ། །
 ཡང་གཞིན་ནུ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་སེམས་དང་པོ་བསྐྱེད་པ་ནམས་ཀྱི་བྱམས་པ་ནི། སེམས་ཅན་ལ་དམིགས་པ་ལོ། །
 བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་སྐྱོད་པ་ལ་ཞུགས་པ་ནམས་ཀྱི་བྱམས་པ་ནི། ཚོས་ལ་དམིགས་པ་ལོ། །
 བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་བཟོད་པ་རབ་ཏུ་ཐོབ་པ་ནམས་ཀྱི་བྱམས་པ་ནི། དམིགས་པ་མེད་པ་ལོ། །

śrāvakānāṃ kumāra maitrī svatrāyaṇī (|)
bodhisattvānāṃ punaḥ sarvasattvatrāyaṇī maitrī (|)
api ca kumāra sattvāraṃbaṇā maitrī prathamacittotpādikānāṃ bodhisattvānāṃ (|)
dharmāraṃbaṇā maitrī caryāpratipannānāṃ bodhisattva(6)nāṃ (|)
anāraṃbaṇā maitrī kṣāntipratilabdhanāṃ bodhisattvānāṃ (|)
iyaṃ kumārocyate bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ maitrī (|)
yasyāṃ maitryāṃ pratiṣṭhito bodhisattvaḥ sarvasattvāṃ maitryā spharati |

【訳】：

8、童子よ。声聞たちの慈は自らを救うものである。
〔一方、〕菩薩たちの慈は一切の衆生を救うものである。
また、童子よ。初発心の菩薩たちの慈は衆生を所縁とするものである。
〔菩薩〕行を实践している菩薩たちの慈は法を所縁とするものである。
〔無生法〕忍を得た菩薩たちの慈は所縁がないものである。
童子よ。これが菩薩摩訶薩たちの慈と呼ばれる。
以上の慈に安住する菩薩は慈によって、一切の衆生を遍満する。

※『大集経・無尽意菩薩品』『無尽法門』の慈無尽の内容：

8、(T13.200a13-18)

聲聞修慈齊爲己身。菩薩之慈悉爲一切無量衆生。舍利弗。夫修慈者能度諸流。慈所及處有縁衆生。
又縁於法又無所縁。縁衆生者初發心也。縁法縁者已習行也。縁無縁者得深法忍也。舍利弗。是名
菩薩修行大慈而不可盡。⁵¹⁸

གཞན་ཀྱི་འདི་ནི། རྒྱུ་རྒྱུ་ལེན་པ་དང་ལེན་པ་དང་ཆེན་པོ་རྒྱལ་གྱི་བྱམས་པ་ཞེས་བྱ་གྱེ།
རྒྱུ་རྒྱུ་ལེན་པ་དང་བྱམས་པ་དེ་ལ་རབ་ཏུ་གནས་པ་སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་བྱམས་པ་སྤྱི་བར་བྱེད་དོ།

玄奘訳：

8、(T11.236a14-23)

〔如は無量不可思議大慈之相。吾今略説。童子。是名菩薩摩訶薩大慈無量波羅蜜。菩薩摩訶薩。由成就是大慈無量故。觀諸衆生常懷慈善。勤求正法無有疲倦。〕

童子當知。諸聲聞慈唯能自救。諸菩薩慈畢竟度脱一切衆生。

童子當知。衆生縁慈。初發大心菩薩所得。

法縁之慈。趣向聖行菩薩所得。

無縁之慈。證無生忍菩薩所得。

童子。是名菩薩摩訶薩大慈無量波羅蜜。

若菩薩摩訶薩。安住大慈波羅蜜故。則於一切衆生慈心遍満。

惟淨訳：

8、(T11.820a15-20)

復次太子。諸聲聞人所起慈心但唯自利。菩薩慈心。而常利益一切衆生。

又復當知。初發心菩薩行衆生縁慈。

修行位菩薩行法縁慈。

得忍菩薩行無縁慈。

太子。如是所説皆是菩薩摩訶薩行大慈心。

若諸菩薩住慈心者。即能爲諸衆生行廣大慈〔。〕

⁵¹⁸ 『大乘理趣六波羅蜜多經』『静波羅密多品第九之一』：

8、(T8.904b2-9)

聲聞慈心唯求自利。菩薩大慈救護一切復次慈氏慈有三種。一衆生縁慈。二法縁慈。三無縁慈。云何衆生縁慈。若初發心遍觀有情起大慈心。云何法縁慈。若修行時。觀一切法。名法縁慈。云何無縁慈。得無生忍。無有二相名無縁慈。慈氏當知此即菩薩摩訶薩。住眞法界大慈心也〔。〕

『菩薩藏經』「菩薩藏法門」、『大集經・無盡意菩薩品』「無盡法門」の内容対応系統Ⅱ

―布施波羅蜜多と布施無尽の内容対応の例―

両法門の内容対応系統Ⅱの一例として、『菩薩藏經』の第六「布施波羅蜜多品」における十数四組によって清浄な布施を説く内容、および十数三組によって布施功德を説く内容と、『大集經・無盡意菩薩品』における「布施無尽」の内容との対応関係を示してみたい。なお、本系統では順序は不一致であるため、両者の対応箇所については番号を付してわかりやすく表示した。

※『菩薩藏經』「菩薩藏法門」の「布施波羅蜜多品」の清浄施（四本）：

梵文写本：

1、(MS58a5-7)⁵¹⁹

519 藏訳：

1、(D Ga56b3-7, P Wi63b7-64a3, H152a4-b2)

ཐུན་པ་དེ་ནས་པ་བཅུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱུང་བར་བྱེད་དེ། བཅུ་གང་ཞེ་ན།

① བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་ཡོངས་སུ་ཚོལ་ཞིང་བྱུང་བ་མེད།

② བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་གནོད་པའི་བྱུང་བ་མེད།

③ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་འཇིགས་ཤིང་སྐྱེ་ནས་བྱུང་བ་མེད།

④ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་ཡོངས་སུ་མ་བཏང་བ་ལ་མགོན་དུ་གཉེན་པའི་བྱུང་བ་མེད།

⑤ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་གདོང་དུ་བརྟ་ཞིང་བྱུང་བ་མེད།

⑥ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་ཅན་ལ་ཐ་དང་པར་བྱུང་བ་མེད།

⑦ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་མཛའ་བས་བྱུང་བ་མེད།

⑧ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་ཐུང་བས་བྱུང་བ་མེད།

⑨ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་ཚིང་ཚིང་ཞིང་བྱུང་བ་མེད།

⑩ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་མེ་མཐུན་པའི་ཅན་ལ་ཐུན་གནས་མ་ཡིན་ཞེས་བརྟེན་ཤིང་བྱུང་བ་མེད།

གྲ་མེད་ལ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནས་པ་དེ་ནས་པ་དེ་བཅུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱུང་བར་བྱེད་དེ།

玄奘訳：

1、(T11.239a20-b4)

[復次舍利子。] 菩薩〔摩訶薩〕行陀那波羅蜜多故。復有十種清浄施法。何等爲十。

[一者] ① 菩薩〔摩訶薩。〕無有不正求財而行布施。

[二者] ② 菩薩〔摩訶薩。〕不逼迫衆生而行布施。

[三者] ③ 菩薩〔摩訶薩。〕不以恐怖而行布施。

[四者] ④ 菩薩〔摩訶薩。〕不棄捨邀請而行布施。

[五者] ⑤ 菩薩〔摩訶薩。〕不觀顔面而行布施。

[六者] ⑥ 菩薩〔摩訶薩。〕於諸衆生情無異想而行布施。

[七者] ⑦ 菩薩〔摩訶薩。〕無貪愛心而行布施。

[八者] ⑧ 菩薩〔摩訶薩。〕無起瞋恚而行布施。

[九者] ⑨ 菩薩〔摩訶薩。〕不求利土而行布施。

[十者] ⑩ 菩薩〔摩訶薩。〕於諸衆生起福田想。不以輕蔑而行布施。

舍利子。是名菩薩〔摩訶薩〕行於十種清浄之施。爲滿陀那波羅蜜多故惟淨訳：

3、(T11.822b23-c2)

[復次舍利子。] 有十種法。菩薩若能具足清浄。當行布施。何等爲十。

[一者] ① 菩薩不求艱難受用施。

[二者] ② 菩薩不逼迫衆生施。

[三者] ③ 菩薩不驚怖他施。

[四者] ④ 菩薩無不捨所請施。

[五者] ⑤ 菩薩無現相施。

[六者] ⑥ 菩薩於諸衆生無異想施。

daśabhir ākāraiḥ pariśuddhaṃ tad dānaṃ dadāti (I) katamair daśabhir (I)
 ① nāsti bodhisattvānāṃ viśamabhogaparyeṣṭidānaṃ |
 ② nāsti bodhisattvānāṃ sattvotpīdanadānaṃ* |
 ③ nāsti bodhisattvānāṃ bhayaatrāsadānaṃ |
 ④ nāsti bodhisattvānāṃ aprityaktanimantraṇadā(MS58a6)naṃ |
 ⑤ nāsti bodhisattvānāṃ mukhadarśanadānaṃ |
 ⑥ nāsti bodhisattvānāṃ sattvanānātvadānaṃ (I)
 ⑦ nāsti bodhisattvānāṃ anunayadānaṃ* | ⁵²⁰
 ⑧ nāsti bodhisattvānāṃ pratighadānaṃ |
 ⑨ nāsti bodhisattvānāṃ kṣetraparimārgaṇadānaṃ |
 ⑩ nāsti bodhisattvānāṃ sarvasattveṣv adakṣiṇīyāvamanyanadānaṃ |
 ebhiḥ śāriputra daśabhi(MS58a7)r ākārair bodhisattvaḥ pariśuddhaṃ dānaṃ dadāti ||
 【訳】：

- 1、菩薩は十の相によって、清浄な布施を施行する。十とは何か。
 ①菩薩たちには不正の利益を求める布施が存在しない。
 ②菩薩たちには衆生を圧迫する布施が存在しない。
 ③菩薩たちには恐怖と威嚇をする布施が存在しない。
 ④菩薩たちには招請を断る布施が存在しない。
 ⑤菩薩たちには〔衆生の〕顔を認識しながら布施することが存在しない。
 ⑥菩薩たちには衆生を区別する布施が存在しない。
 ⑦菩薩たちには貪愛による布施が存在しない。
 ⑧菩薩たちには嗔恚による布施が存在しない。
 ⑨菩薩たちには地域を（差別に）求めて布施することが存在しない。
 ⑩菩薩たちには一切衆生に対して、福田ではないという思いで輕蔑しながら布施することが存在しない。
 舍利弗よ。菩薩はそれら十の相によって、清浄な布施を施行する。

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「布施波羅蜜多品」の清浄施（四本）：
 梵文写本：

2、(MS58a7-b2)⁵²¹

- [七者] ⑦菩薩無損害施。
 [八者] ⑧菩薩無境土差別施。
 [九者] ⑨菩薩所施衆生而無作意。（⑩少第十法梵本元闕）

舍利子。如是十種法。菩薩若能清浄。當行布施。

⁵²⁰ 筆者：惟浄訳ではnāsti bodhisattvānāṃ anunayadānaṃに相当する内容はない。

⁵²¹ 蔵訳：

2、(D Ga56b7-57a3, P Wi64a3-7, H152b2-7)

གཞན་ཡང་ཤུ་འདི་ལ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ལྷན་པ་དེ་གཞན་རྣམ་པ་བསུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱིན་པར་བྱེད་དེ། བསུ་གང་ཞེ་ན།

- ① བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་ལས་ཀྱི་རྣམ་པར་མྱེན་པ་འདྲིད་ཅིང་བྱིན་པ་མེད།
 ② བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་བསམ་པ་ཡོག་པར་བྱིན་པ་མེད།
 ③ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་ཡོངས་སུ་སྒྲིབ་པའི་བྱིན་པ་མེད།
 ④ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་ཉེ་བར་བཞུན་ནས་བྱིན་པ་མེད།
 ⑤ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་ཆོས་སུ་མི་དགའ་བའི་བྱིན་པ་མེད།
 ⑥ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་འཁྱོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
 ⑦ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་སྤྱོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
 ⑧ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་སྤྱོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
 ⑨ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་སྤྱོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
 ⑩ བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་སྤྱོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
 ཤུ་འདི་ལ། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ལྷན་པ་དེ་རྣམ་པ་བསུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱིན་པར་བྱེད་དོ།

玄奘訳：

2、(T11.239b5-17)

復次舍利子。菩薩〔摩訶薩。行陀那波羅蜜多時。〕復有十種清浄行施。何等爲十。

- [一者] ①菩薩〔摩訶薩。〕不毀業報而行布施。
 [二者] ②菩薩〔摩訶薩。〕不以邪意而行布施。

punar aparaṃ śāriputrāparair daśabhir ākāraiḥ paṇiuddhaṃ tad dānaṃ bodhisattvo dadāti (I)
katamair daśabhiḥ |

- ⑪ na bodhisattvānāṃ karmavipākoddhuradānaṃ |
- ⑫ na bodhisattvānāṃ mithyāśayadānaṃ* (I) (MS58b1)
- ⑬ na bodhisattvānāṃ anadhimuktidānaṃ |
- ⑭ na bodhisattvānāṃ parikhedadānaṃ⁵²² |
- ⑮ na bodhisattvānāṃ upadarśanadānaṃ |
- ⑯ na bodhisattvānāṃ anutapyanadānaṃ |
- ⑰ na bodhisattvānāṃ vipratīṣāradānaṃ |
- ⑱ na bodhisattvānāṃ śīlavatsūnnāṃanādānaṃ |
- ⑲ na duḥśīleṣv avanāmanādānaṃ |
- ⑳ na bodhisattvānāṃ*(MS58b2) vipākapatikāṃkṣaṇadānaṃ* |

ebhiḥ śāriputra daśabhir ākāraiḥ paṇiuddhaṃ bodhisattvas tad dānaṃ dadāti ||

【訳】:

2、その他、舎利弗よ。次の十の相によって、菩薩は清浄な布施を施行する。
十とは何か。

- ⑪ 菩薩たちには業報を捨て置く布施がない。
 - ⑫ 菩薩たちには偽る意向を持つ布施がない。
 - ⑬ 菩薩たちには信樂のない布施がない。
 - ⑭ 菩薩たちには倦怠する布施がない。
 - ⑮ 菩薩たちには〔自分の顔を衆生の〕 目前に現して布施することがない。
 - ⑯ 菩薩たちには悩ます布施がない。
 - ⑰ 菩薩たちには後悔する布施がない。
 - ⑱ 菩薩たちには諸持戒者に対して〔意気が〕 昂る布施がない。
 - ⑲ 菩薩たちには諸破戒者に対して〔意気が〕 落ち込む布施がない。
 - ⑳ 菩薩たちには果報を期待する布施がない。
- 舎利弗よ。菩薩はそれらの十の相によって、清浄な布施を施行する。

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「布施波羅蜜多品」の清浄施（四本）:

[三者] ⑬菩薩 [摩訶薩。] 無不信解而行布施。
[四者] ⑭菩薩 [摩訶薩。] 無有厭倦而行布施。
[五者] ⑮菩薩 [摩訶薩。] 無有現相而行布施。
[六者] ⑯菩薩 [摩訶薩。] 勇勵熾然而行布施。
[七者] ⑰菩薩 [摩訶薩。] 無有變悔而行布施。
[八者] ⑱菩薩 [摩訶薩。] 於持戒者不以偏敬而行布施。
[九者] ⑲菩薩 [摩訶薩。] 於犯戒所不以輕鄙而行布施。
[十者] ⑳菩薩 [摩訶薩。] 不希果報而行布施。
舍利子。是名菩薩 [摩訶薩] 行於十種清浄之施。〔爲欲満足陀那波羅蜜多故〕
惟淨訳:

2、(T11.822c3-10)

復有十法。菩薩若能具足清浄。當行布施。何等爲十。

- [一者] ⑪菩薩不違業報施。
- [二者] ⑫菩薩無邪意樂施。
- [三者] ⑬菩薩無不勝解施。
- [四者] ⑭菩薩無懈怠施。
- [五者] ⑮菩薩無見面施。
- [六者] ⑯菩薩無惱害施。
- [七者] ⑰菩薩無退屈施。
- [八者] ⑱菩薩無讚譽持戒施。
- [九者] ⑲菩薩無輕慢毀戒施。
- [十者] ⑳菩薩不求果報施。

如是十種法。菩薩若能清浄。當行布施。

⁵²² 藏訳では、na bodhisattvānāṃ parikhedadānaṃと相当する内容はない。

梵文写本：

3、(MS58b2-3)⁵²³

punar aparaṃ śāriputrāparair daśabhir ākāraiḥ pariśuddhaṃ bodhitatvas tad dānaṃ dadāti (I)
katamair daśabhiḥ |

②① na bodhisattvānāṃ kutsanādānaṃ |

②② na bodhisattvānāṃ parāṇmukhadānaṃ |

②③ na bodhisattvānāṃ apaviddhadānaṃ* |

②④ ②⑤ ②⑥ na krodherśyāvyāpā(MS58b3)daśaṃdarśanādānaṃ |

②⑦ nāsatkrtyadānaṃ |

②⑧ nāsvahastadānaṃ |

②⑨ na yathāpravārite ūnadānaṃ |

③⑩ nāsti bodhisattvānāṃ upapatyabhilāṣadānaṃ |

ebhiḥ śāriputra daśabhir ākārais pariśuddhaṃ bodhisattvas tad dānaṃ dadāti ||

【訳】：

3、舎利弗よ。その他、次の十の相によって菩薩は清浄な布施を施行する。十とは何か。

⁵²³ 藏訳：

3、(D Ga57a3-6, P Wi64a7-b2, H152b7-153a4)

གཞན་ཡང་ཤུ་རིའི་བྱ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྒྱན་པ་དེ་གཞན་རྣམ་པ་བརྩམས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱིན་པར་བྱེད་དེ། བསུ་གང་ཞེན།

②① བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྒྱན་པ་ལ་སྒྲོད་ནས་བྱིན་པ་མེད།

②② བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྒྱན་པ་ལ་གཞན་དུ་ཚྭ་གས་ནས་བྱིན་པ་མེད།

②③ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྒྱན་པ་ལ་ཉོན་མོངས་ཤིང་བྱིན་པ་མེད།

②④ རྩ་བ་དང་།

②⑤ ཐུག་དོག་དང་།

②⑥ གནོད་སེམས་སྒྲོན་ཅིང་བྱིན་པ་མེད།

②⑦ རི་མོར་མེ་བྱེད་པར་བྱིན་པ་མེད།

②⑧ རང་གི་ལག་ནས་མ་ཡིན་པར་བྱིན་པ་མེད།

②⑨ ཅི་ཙམ་དཔགས་པ་ལས་དཔེ་ཞིང་བྱིན་པ་མེད།

③⑩ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྒྱན་པ་ལ་འདོད་ཅིང་བྱིན་པ་མེད་དེ།

ཤུ་རིའི་བྱ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྒྱན་པ་དེ་རྣམ་པ་དེ་བརྩམས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱིན་པར་བྱེད་དོ།

玄奘訳：

3、(T11.239b18-c1)

復次舍利子。菩薩〔摩訶薩。行陀那波羅蜜多時。〕復有十種行清淨施。何等爲十。

〔一者〕②①菩薩〔摩訶薩。〕不以毀訾而行布施。

〔二者〕②②菩薩〔摩訶薩。〕不以背面而行布施。

〔三者〕②③菩薩〔摩訶薩。〕無不清淨而行布施。

〔四者〕②④菩薩〔摩訶薩。〕不現忿相而行布施。

〔五者〕②⑤菩薩〔摩訶薩。〕不現嫉相而行布施。

〔六者〕②⑥菩薩〔摩訶薩。〕不現恚相而行布施。

〔七者〕②⑦菩薩〔摩訶薩。〕無不殷重而行布施。

〔八者〕②⑧菩薩〔摩訶薩。〕無不自手而行布施。

〔九者〕②⑨菩薩〔摩訶薩。〕不以許多後便與少而行布施。

〔十者〕③⑩菩薩〔摩訶薩。〕不求來生而行布施。

舍利子。是名菩薩〔摩訶薩〕行於十種清淨之施。〔爲欲滿足陀那波羅蜜多故。〕

惟淨訳：

3、(T11.822c11-18)

復有十法。菩薩若能具足清淨。當行布施。何等爲十。

〔一者〕②①菩薩無毀謗施。

〔二者〕②②菩薩無違背施。

〔三者〕②③菩薩無瑕疵施。

〔四者〕②④菩薩無忿怒施。

〔五者〕②⑤菩薩無憎嫉施。

〔六者〕②⑥菩薩無瞋恚施。

〔七者〕②⑦菩薩無不恭敬施。

〔八者〕②⑧菩薩無不自手施。

〔九者〕②⑨菩薩隨應止其下劣心施。

〔十者〕③⑩菩薩於所生處無悵望施。

如是十種法。菩薩若能清淨。當行布施

- ② 菩薩たちには〔他人或は法を〕誹謗する布施がない。
 - ③ 菩薩たちには〔衆生の〕顔を背ける布施がない。
 - ④ 菩薩たちには〔衆生を〕見捨てる布施がない。
 - ⑤ 菩薩たちには〔現しながら布施することがない〕、
 - ⑥ 〔菩薩たちには〕嫉妬を〔現しながら布施することがない〕、
 - ⑦ 〔菩薩たちには〕嗔恚を現しながら布施することがない。
 - ⑧ 〔菩薩たちには〕〔衆生を〕尊重しない布施がない。
 - ⑨ 〔菩薩たちには〕自分の手とするのではない布施がない。
 - ⑩ 〔菩薩たちには〕乞われたことにおいて、それに応じて疎かにする布施がない。
 - ⑪ 菩薩たちには〔来世の善い〕生まれを希求するために布施することが存在しない。
- 舍利弗よ。菩薩はそれら十の相によって、清浄な布施を施行する。

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「布施波羅蜜多品」の清浄施（四本）：
梵文写本：
4、(MS58b3-5)⁵²⁴

⁵²⁴ 藏訳：

4、(D Ga57a6-b2, P Wi64b2-6, H153a4-b2)

གཞན་ཡང་ཤུ་རིའི་བླ་ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ལྷན་པ་དེ་གཞན་རྒྱལ་པ་བསུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱིན་པར་བྱེད་དེ། བསུ་གང་ཞེ་ན།

- ① བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྒྱལ་པ་མེ་བཏན་པར་བྱིན་པ་མེད།
- ② བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྒྱལ་པ་མེ་ཚད་འཛིན་ཅིང་བྱིན་པ་མེད།
- ③ ཡོངས་སུ་ཆད་པར་བྱིན་པ་མེད།
- ④ གཞན་གྱི་དྲིང་འཛིན་ཉེ་བྱིན་པ་མེད།
- ⑤ ཉུང་ཞེས་སུ་ཟད་ཅས་བྱིན་པ་མེད།
- ⑥ གཞན་གས་དང་། ཡོངས་སུ་དྲིང་དང་། དབང་ལྷན་ལ་མཛོན་པར་དགའ་བའི་བྱིན་པ་མེད།
- ⑦ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྒྱལ་པ་ལ་ཉན་བྱིན་དང་། ཚངས་པ་དང་། འཛིན་ཉེན་སྤྱོད་བ་དང་། ལྷན་སྤྱོད་ལ་ཐམས་ཅད་འདོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
- ⑧ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྒྱལ་པ་ལ་ཉན་ཅོས་དང་། རང་ལངས་སྤྱོད་ལ་ཉན་ཅོས་ལྷན་བྱིན་པ་མེད།
- ⑨ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྒྱལ་པ་ལ་མཐས་པས་སྤྱོད་པའི་བྱིན་པ་མེད།
- ⑩ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྒྱལ་པ་ལ་ཐམས་ཅད་མཆོད་པར་མ་བཞོས་པའི་བྱིན་པ་མེད་དེ།

ཤུ་རིའི་བླ་ བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ལྷན་པ་དེ་བསུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱིན་པར་བྱེད་དོ། །

玄奘訳：

4、(T11.239c2-14)

復次舍利子。菩薩〔摩訶薩。行陀那波羅蜜多時。〕復有十種行清浄施。何等爲十。

- 〔一者〕 ① 菩薩〔摩訶薩。〕無不常施。
- 〔二者〕 ② 菩薩〔摩訶薩。〕無繫屬施。
- 〔三者〕 ③ 菩薩〔摩訶薩。〕無差別施。
- 〔四者〕 ④ 菩薩〔摩訶薩。〕無他縁施。
- 〔五者〕 ⑤ 菩薩〔摩訶薩。〕無微劣施。
- 〔六者〕 ⑥ 菩薩〔摩訶薩。〕不希財色及以自在。而行布施。
- 〔七者〕 ⑦ 菩薩〔摩訶薩。〕無求生於釋梵護世諸大天故。而行布施。
- 〔八者〕 ⑧ 菩薩〔摩訶薩。〕無有迴向聲聞獨覺地故。而行布施。
- 〔九者〕 ⑨ 菩薩〔摩訶薩。〕無爲聰慧所譏訶故。而行布施。
- 〔十者〕 ⑩ 菩薩〔摩訶薩。〕無不迴向薩伐若故。而行布施。

舍利子。是名菩薩〔摩訶薩〕行於十種清浄之施。〔皆爲満足陀那波羅蜜多故〕

惟浄訳：

4、(T11.822c19-27)

復有十法。菩薩若能具足清浄。當行布施。何等爲十。

- 〔一者〕 ① 菩薩無不堅牢施。
- 〔二者〕 ② 菩薩無邊際施。
- 〔三者〕 ③ 菩薩無分段施。
- 〔四者〕 ④ 菩薩無他信施。
- 〔五者〕 ⑤ 菩薩不著下劣心施。
- 〔六者〕 ⑥ 菩薩不求色相受用富貴歡喜施。
- 〔七者〕 ⑦ 菩薩不求梵王帝釋護世諸天等施。
- 〔八者〕 ⑧ 菩薩不求聲聞縁覺地施。

punar aparaṃ śāriputrāparair daśabhir ākāraiḥ paṇiśuddhaṃ bodhitatvas tad dānaṃ dadāti (||) katamair daśabhiḥ (||)

- ①nāsti bodhisattvānāṃ adhru(MS58b4)vadānaṃ* |
 - ②nāsti bodhisattvānāṃ paryāpannadānaṃ |
 - ③nāsti bodhisattvānāṃ paricchadadānaṃ |
 - ④nāsti parapratyayadānaṃ |
 - ⑤nāsti paritṭe ūnadānaṃ |
 - ⑥na rūpabhogaiśvaryābhinandanādānaṃ |
 - ⑦nāsti bodhisattvānāṃ śakrabrahmalokapālasarvadevopapattisprhaṇadānaṃ |
 - ⑧nāsti bodhisattvānāṃ śrāvakaṇḍikabuddhabhūmipariṇāmanādānaṃ |
 - ⑨nāsti bodhisattvānāṃ vi(MS58b5)dvaḍgarhitadānaṃ* (||)
 - ⑩nāsti bodhisattvānāṃ aparīṇāmitaṃ sarvajñatādānaṃ |
- ebhiḥ śāriputra daśabhir ākāraiḥ paṇiśuddhaṃ bodhisattvas tad dānaṃ dadāti ||

【訳】：

4、その他、舍利弗よ。次の十の相によって、菩薩は清浄な布施を施行する。十とは何か。

- ①菩薩たちには堅固ではない布施が存在しない。
 - ②菩薩たちには制限された布施が存在しない。
 - ③菩薩たちには差別による布施が存在しない。
 - ④〔菩薩たちには〕他人を依頼する布施が存在しない。
 - ⑤〔菩薩たちには〕ささいなことに対しても疎かにする布施が存在しない。
 - ⑥〔菩薩たちには〕美色と富と権勢とを喜ぶ布施が存在しない。
 - ⑦菩薩たちには帝釈天と梵天と世界の守護者という諸天への生まれを渴望する布施が存在しない。
 - ⑧〔菩薩たちには〕声聞地と縁覺地に回向する布施が存在しない。
 - ⑨菩薩たちには学識ある者によって非難される布施が存在しない。
 - ⑩菩薩たちには〔功德を〕一切の智慧に回向しない布施が存在しない。
- 舍利弗よ。菩薩はそれらの十の相によって、清浄な布施を施行する。

※『菩薩藏經』『菩薩藏法門』の「布施波羅蜜多品」の布施所獲功德（四本）：

梵文写本：

5、(MS58b5-59a2)⁵²⁵

[九者] ③菩薩不毀謗智者施。

[十者] ⑩菩薩所作善利無不迴向一切智施。

如是十種法。菩薩若能清淨。當行布施。

⁵²⁵ 藏訳：

5、(D Ga57b2-58a1, P Wi64b6-65a5, H153b2-154a4)

གཞན་ཡང་གྲ་འདི་གྲ་བྱ་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ལྷན་པ་དེ་གཞན་ནས་པ་བསུས་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱེད་དེ། བསུ་གང་ཞེ་ན། ཅི་ཙམ་འདྲམ་བྱས་ལས་ངེས་པར་འབྲུང་བ་དང་།

འདྲམ་མ་བྱས་ཐོབ་པར་བྱ་བའི་བྱ་རྒྱུ་ལྟར་བྱེད་པ་བྱེད་ན། གྲ་འདི་གྲ་བྱ་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ལྷན་པའི་ཕན་ཡོན་བསུ་འཛོལ་པར་འབྱུར་ནི། བསུ་གང་ཞེ་ན།

④1 བཟའ་བ་བྱེད་པས་ཆོད་དང་། གློབས་པ་དང་། བདེ་བ་དང་། ལྷོབས་དང་། ཁ་དོག་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④2 བཏུང་བ་བྱེད་པས་ཉན་མོངས་པ་དང་། གླེང་བ་ཐམས་ཅད་བསམ་པ་བསུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④3 བཞེན་པ་བྱེད་པས་བདེ་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དངོས་དོ་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④4 བགོ་བ་བྱེད་པས་ཁྲེལ་ཡོང་བ་དང་། ངོ་ཚ་ཤེས་པ་དང་། གསེར་ལྷ་ཁ་དོག་ཡོངས་སུ་དག་པར་བྱེད་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④5 གློབས་དང་། གླེང་བ་བྱེད་པས་ལྷོས་ཀྱི་ཐོས་དང་། སྤྲོས་དང་། སྤྲོས་ཀྱི་དྲི་དང་། ལྷོག་པ་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④6 ཇི་རབ་ཏུ་ཞེས་པའི་གློབས་དང་། བྱེ་མ་དང་། ལྷོག་པ་བྱེད་པས་ལྷོས་ཀྱི་ནན་ཏན་གྱི་དྲི་ཞེས་པོ་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④7 རོ་བྱེད་པས་རོ་བྱེད་པའི་ནང་ན་མཚན་གྱི་རོ་བྱེད་པའི་སྤྲུལ་ལྷོས་ཀྱི་ཐོས་ཆོན་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④8 གཞན་བྱེད་པས་སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གཞན་དང་། ཉན་དང་། གློང་དང་། གློབས་དང་། དཔུང་གཉན་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

④9 ནད་པ་ལ་སྤྲུལ་བྱེད་པས་མི་ན། མི་འཆེ། ཤྱི་བ་མེད་པའི་བདེ་བ་ཡོངས་སུ་ལྷོགས་པ་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གོ།

⑤0 ཡོ་བྱ་བྱ་ཆོགས་བྱེད་པས་བྱ་ཆུབ་ཀྱི་ཚྭ་གྱི་ཡོ་བྱ་ཡོངས་སུ་ལྷོགས་པ་ལུན་སྤྲུལ་ཆོགས་པ་རབ་ཏུ་འཛོལ་གྱེ།

གྲ་འདི་གྲ་བྱ་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ལྷན་པའི་ཕན་ཡོན་ལས་དེ་ལྟར་བྱེད་པ་བྱེད་ན། བྱེད་པའི་ཕན་ཡོན་བསུ་འཛོལ་དེ་དག་ཡོངས་སུ་བཟང་བར་འབྱུར་ནི།

玄奘訳：

5、(T11.239c15-240a10)

復次舍利子。菩薩〔摩訶薩。行陀那波羅蜜多時。〕復有十種行清淨施。何等爲十。謂如前說十種法中。出離有爲證得無爲。又舍利子。菩薩〔摩訶薩。〕如是行施能得十種稱讚利益上妙功德。何等爲十。

〔一者〕 ④菩薩〔摩訶薩。〕由施食故。獲得長壽才辯。安樂妙色。雄力勇健。無不具足。

aparaiḥ śāriputra daśabhir ākārāiḥ pariśuddhaṃ bodhisattvas tad dānaṃ dadāti (l) katamair daśabhir (l) yāvad eva saṃskṛtaniḥsaraṇatayā asaṃskṛtasya prāptaye evaṃ dadan śāriputra bodhisattvo dānaṃ daśānuśānsān pratilabhate | katamāṃ daśa |

④ annadānēnāyuhpratibhānasukhabalavarṇasāmpadaṃ pratilabhate |

⑤ pānadānēna sarvakleśātṛṣṇāpanayanasaṃpadaṃ pratilabhate |

⑥ yānadānēna sarvasukhavastusaṃpadaṃ pratilabhate |

⑦ vstradānēna hṛyapatrāpyasuvarṇavarṇacchavipariśuddhisāmpadaṃ pratilabhate |

⑧ gandhamā(MS58b7)lyapradānēna śīlaśrutasamādhigandhānulepanasaṃpadaṃ pratilabhate |

⑨ sugandhagandhacūrṇānulepanapradānēna gātrasugandhagandhapratipatsāmpadaṃ pratilabhate |

⑩ rasapradānēna rasarasāgratāmahāpuruṣalakṣaṇa (MS59a1)sāmpadaṃ pratilabhate |

⑪ pratisrayadānēna sarvasattvānāṃ layanatrāṇadvīpaśaraṇaparāyaṇasaṃpadaṃ pratilabhate |

⑫ glānabhaiśajyapradānēnājarāmarāmṛtasukhapariṇipūrisāmpadaṃ pratilabhate |

⑬ nānāparīṣkārapradānēna bodhiparīṣkārapakṣikadharmapariṇipūrisāmpadaṃ pratilabhate |

evaṃ datvā śāriputra bodhisattvena(MS59a2) dānaṃ bodhipratikāṃkṣiṇā ime daśānuśānsāḥ parigṛhītā bhavanti ||

【訳】：

5、舍利弗よ。菩薩は他の十の相によって清浄な布施を行う。十とは何か。有為法からの出離性によって、無為法の獲得する間に、舍利弗よ。菩薩は次のような布施を行って十の功徳を得る。十とは何か。

④ 食物の布施によって、長寿と弁才と安楽と力とよい色を持つ外貌の具足を得る。

⑤ 飲物の布施によって、一切の煩惱と愛欲との除きの具足を得る。

⑥ 乗り物の布施によって一切の安楽の事の具足を得る。

⑦ 着物の布施によって、慚と愧と美しい色を持つ外貌と皮膚の完全無欠になることの具足を得る。

⑧ 香気のある花環の布施によって、戒と聞と三摩地との香気を塗ることの具足を得る。

⑨ 芳香のある抹香と塗香の布施によって、身体の香気のあることと香気を持つ威儀との具足を得る。

⑩ 美味の布施によって、上味相である大丈夫相の具足を得る。

⑪ 庇護所の布施によって、衆生たちの安眠〔処となり〕、保護〔者となり〕、救済〔者となり〕、帰依〔者となること〕の具足を得る。

⑫ 病気を治す薬の布施によって不老不死の甘露と安楽の円満の具足を得る。

〔二者〕 ④菩薩〔摩訶薩。〕由施飲故。獲得永離一切煩惱渴愛。無不具足。

〔三者〕 ⑤菩薩〔摩訶薩。〕由施諸乘故。獲得一切利益安樂衆事。無不具足。

〔四者〕 ⑥菩薩〔摩訶薩。〕由施衣服故。獲得成就慚愧。皮膚清淨猶如金色。無不具足。

〔五者〕 ⑦菩薩〔摩訶薩。〕由施香鬘故。獲得淨戒多聞諸三摩地。塗香聖行。無不具足。

〔六者〕 ⑧菩薩〔摩訶薩。〕由以末香塗香施故。當得遍體香潔。妙香聖行。無不具足。

〔七者〕 ⑨菩薩〔摩訶薩。〕由施上味故。獲得甘露上味。大丈夫相。無不具足。

〔八者〕 ⑩菩薩〔摩訶薩。〕由以舍宅房宇施故。當得與諸衆生。爲舍爲宅。爲救爲洲。爲歸爲趣。無不具足。

〔九者〕 ⑪菩薩〔摩訶薩。〕由愍病者施醫藥故。當得無老病死。圓滿甘露不死妙藥。無不具足。

〔十者〕 ⑫菩薩〔摩訶薩。〕由以種種資生衆具施故。感得一切圓滿衆具。菩提分法。無不具足。

舍利子。是名菩薩〔摩訶薩〕爲得菩提。修行是施。獲得如是十種稱讚利益上妙功徳。〔皆爲滿於陀那波羅蜜多故〕惟淨訳：

5、(T11.823a9-24)

復次舍利子。有十種稱讚之法。菩薩若能具足清淨。當行布施。此稱讚法者。謂即有爲出離故得有爲果。菩薩應當如是布施。即得十種稱讚之法。

何等爲十。

〔一者〕 ④施食。獲得長壽。

〔二者〕 ⑤施飲。息除一切渴愛煩惱。

〔三者〕 ⑥施諸乘輿。即能獲得諸利樂事。

〔四者〕 ⑦施妙衣服。即起慚愧之心如獲金蓋。

〔五者〕 ⑧施諸塗香華鬘。即得戒聞等持妙香塗飾。

〔六者〕 ⑨施諸妙香末香。即得身支柔軟妙香馥郁。

〔七者〕 ⑩施諸美味。即得味中上味。及能圓具人中妙相。

〔八者〕 ⑪施依止處。即能當與一切衆生爲舍爲洲爲救爲歸爲所趣向。

〔九者〕 ⑫施諸病緣醫藥。即得不老不死甘露妙樂圓滿具足。

〔十者〕 ⑬若施種種資具。即得菩提分法勝妙資具圓滿具足。

如是十種布施稱讚之法。菩薩求菩提時。當得一切稱讚攝受

55 hayagajarathapradānena vipulavistīrṇamahāsampadam pratilabhate |
 56 udyānatapovanapradānena dhyānavimokṣasamādhisamāpa(MS59a4)ttiparipūrisampadam pratilabhate |
 57 dhanadhānyakośakoṣṭhāgarapradānena sarvadharmaratnakoṣaparipūrisampadam pratilabhate |
 58 dāsīdāsakarmakarapauruṣyapradānena svairasvavaśasvayambhujñānaparipūrisampadam pratilabhate |
 59 putraduhitṛpradānena priyeṣṭakāntānuttarasamyaksambodhiparipūrisampadam pratilabhate |
 60 caturdvīpa(MS59a5)sarvarājyaīśvryapradānena bodhisattvaḥ sarvākāravaropetasarvajñajñānasampadam
 pratilabhate |
 amī śāriputra daśānuśānsāḥ parigrhītā bhavanti |

evaṃ dadan* śāriputra bodhisattvo dānam bodhipratikāṃkṣī aparāṃ daśānuśānsāṃ pratilabhate | katamāṃ daśa (|)

⑥¹ paṃcakāmaguṇapradānena

śīlasamādhiprajñāvimuktivimuktijñāna(MS59a6)darśanaskandhapariśuddhisampadam pratilabhate |

⑥² sarvaratikriḍāparityāgadānena saddharmaratikriḍāpariśuddhisampadam pratilabhate |

⑥³ caraṇapradānena dharmārthacaraṇabodhimaṇḍākramaṇaparipūrisampadam pratilabhate |

⑥⁴ karapradānena sarvasattvadharmahastānupradānaparipūrisampadam pratilabhate |

⑥⁵ karṇanāsāpradānena vika(MS59a7)lendriyaparipūrisampadam pratilabhate |

⑥⁶ aṃgapratyaṅgadānenānavadyāṃgavarāṃgabuddhakāyaparipūrisampadam⁵²⁹ pratilabhate |

⑥⁷ netrapradānena sarvasattvānāvaraṇadharmacakṣuḥpariśuddhisampadam pratilabhate |

⑥⁸ mānsaśoṇitapradānena⁵³⁰ sarvasattvakāyajīvitāsārādānopajīvanārthakauśālasampadam pratilabhate |

⑥⁹ majjapra(MS59a8)dānenābhedyavajrasamakāyapratilābhasampadam⁵³¹ pratilabhate |

⑦⁰ uttamāṃgaśiraḥpradānena bodhisattvo mahāsattvas trailokyaprativiśiṣṭāṃ anuttarāṃ niruttarāṃ sarvajñajñānādhigamaparipūrisampadam pratilabhate |

evan datvā dānam śāriputra bodhisattvena bodhi(MS59b1)pratikāṃkṣiṇā ima evaṃrūpā buddhadharmaparipūryanuśānsāḥ pariḡrhitā bhavanti ||

【訳】:

7、舍利弗よ。菩提を求める菩薩はこのように布施を行って他の十の功徳を得る。十は何か。

⑥¹ 五つの感覚的享樂の布施によって、戒と定と慧の解脱と解脱智見蘊の清浄の具足を得る。

⑥² 一切戯れを捨てることの布施によって、正法を楽しむことの清浄の具足を得る。

⑥³ 足の布施によって、法義の足と菩提の座に到達することの成就の具足を得る。

⑥⁴ 手の布施によって、一切衆生を法の手で救済することの成就の具足を得る。

⑥⁵ 耳と鼻の布施によって、欠陥ある根が円満になることの具足を得る。

⑥⁶ 肢体の布施によって、無過失な男根と女陰とを持つ仏身の清浄の具足を得る。

⑥⁷ 眼の布施によって、一切衆生〔を見に〕障礙ないの法眼の清浄の具足を得る。

⑥⁸ 肉と血の布施によって、一切衆生の身と命とが有する堅固さを獲得することおよび生計のための善巧の具足を得る。

⑥⁹ 髓の布施によって、破壊されないの金剛と等しいの身を獲得することの具足を得る。

⑦⁰ 身体之最も重要な部分である頭の布施によって、菩薩摩訶薩は三界之最勝・無上・最上無比の一切知智の證得の成就の具足を得る。

舍利弗よ。そのように布施を行って、菩提を求める菩薩によって、この種類なこれら仏法を円

[六者菩薩摩訶薩。] ⑥⁶ 以支節施故。獲得清淨無染威嚴佛身。無不具足。

[七者菩薩摩訶薩。] ⑥⁷ 以目施故。獲得觀視一切衆生清淨法眼。無有障礙。無不具足。

[八者菩薩摩訶薩。] ⑥⁸ 以血肉施故。獲得堅固身命。攝持長養一切衆生貞（「貞＝眞◎」）實善權。無不具足。

[九者菩薩摩訶薩。] ⑥⁹ 以髓腦施故。獲得圓滿不可破壞等金剛身。無不具足。

[十者] 菩薩摩訶薩。⑦⁰ 以頭施故。證得圓滿超過三界。無上最上一切智智之首。無不具足。

舍利子。菩薩[摩訶薩。] 爲得菩提行如是施。攝受如是相貌。圓滿佛法稱讚利益上妙功徳。〔皆爲滿足陀那波羅蜜多故〕

惟淨訳:

7、(T11.823b12-27)

復有十種稱讚之法。菩薩若能清淨。當行布施。何等爲十。

[一者] ⑥¹ 若施五欲妙樂。即得戒定慧解脫解脫知見諸蘊清淨。及於一切嬉戲娛樂等事悉得如意。

[二者] ⑥² 若施雙足。即得法義足圓具詣菩提場。

[三者] ⑥³ 若施二手。即得法手常授於他圓滿具足。

[四者] ⑥⁴ 若施其耳。即得諸根圓具無所缺壞。

[五者] ⑥⁵ 若施其鼻。亦得諸根圓具。

[六者] ⑥⁶ 若施身諸支分。即得無過失身如佛身清淨。

[七者] ⑥⁷ 若施其眼。即得法眼清淨。

[八者] ⑥⁸ 若施血肉。即得一切衆生眞實身命眞實布施善資其命。

[九者] ⑥⁹ 若施其髓。即得金剛堅固不壞之身。

[十者] ⑦⁰ 若施上分頭頂菩薩摩訶薩。即得安住三界最勝無上。現證一切智智圓滿具足。

舍利子。菩薩摩訶薩求菩提時。應如是布施。如是等諸相乃能圓滿一切佛法。稱讚攝受

⁵²⁹ 筆者: ここの梵文写本にある-aṃgavarāṃga- (男根と女陰) という内容は、三訳本ではそれに対する訳がない。

⁵³⁰ 筆者: 蔵訳ではmānsa- (肉) に相当する内容がない。

⁵³¹ 筆者: majja- (髓): 玄奘訳では「髓腦」と訳している。

満する功德が収めとられる。

以上、①から㊟までという番号をつけている『菩薩藏經』「菩薩藏法門」の「布施波羅蜜多品」の内容は、『大集經・無盡意菩薩品』「無盡法門」の「布施無盡」の内容中に、ほとんど見出される。この『大集經・無盡意菩薩品』「無盡法門」の「布施無盡」のすべての内容は、次の通りに示す。

※『大集經・無盡意菩薩品』「無盡法門」の布施無盡の内容（T13.189a16-c23）：

爾時舍利弗。語無盡意菩薩摩訶薩言。唯善男子。頗復更有無盡法不。無盡意言有。菩薩修行檀波羅蜜不可窮盡。何以故。菩薩摩訶薩行施無量。所謂④須食與食具足命辯色力樂故。④須飲與飲離渴愛故。④須衣與衣具清淨色除無慚愧故。④須乘與乘得一切樂具神通故。⑤須燈與燈具足佛眼清淨故。⑤須音樂者施與音樂具足天耳清徹故。④須香與香身出具足微妙香故。④須鬘與鬘具陀羅尼七覺華故。④須塗香末香悉施與之。具戒定慧熏塗身故。④須種種味隨意與之。味相成就故。④無依止者施與依止。能爲衆生具足救護爲歸依故。須敷具者悉施與之。具足究竟斷除陰蓋。成就梵天賢聖諸佛妙床座故。須座與座具足三千大千世界以爲道場。金剛座處悉成就故。⑤隨其所須悉能與之。成就菩提諸所須故。④隨病施藥得無老死。甘露法藥悉成就故。⑤須僕使者皆給與之。自在智慧得具足故。⑤若以金銀琉璃頗梨眞珠珂貝璧玉珊瑚種種諸珍用惠施者。具足大人三十二相故。④能以種種瓔珞施者。具足八十隨形好故。⑤若以象馬車乘施者。具足大乘故。⑤若持園林以布施者。具諸禪支故。⑤若持妻子以布施者。具足無上道法愛故。⑤若以倉庫穀財施者。具足諸善法寶藏故。⑥以閻浮提若四天下隨意施者。具足法王得自在故。⑥以諸樂具持用施者。具足無量法樂樂故。⑥若持脚足以布施者。法足具成進至道場故。⑥若以手施。具足法手安撫衆生令得樂故。⑥若以耳鼻用施與者。具足諸根悉通利故。⑥若以眼目持用施者。爲欲具足無礙法眼故。⑦若以頭施。於三界中具足殊勝一切智慧故。⑥若以血肉持用施者。諸不堅牢具堅牢故。⑥若以髓腦持用施者。具金剛身得不壞故。①菩薩不以邪命求財而行布施。②不逼衆生強求他物轉以施人。③無恐怖施。無羞恥施。⑦無慳惜施。②如其所許無損減施。無不愛施。畢竟常施。無不畢竟施。無諛諂施。⑫無姦詐施。⑪不疑業報施。無邪命施。無愚癡施。⑬無不信施。⑬無不解施。⑭無疲難施。⑭無依著施。⑥⑬無選擇施。⑥⑬無異相施。不求受者施。⑬⑭無有衆生不堪受者持戒犯戒無增減施。於受者所不望報施。不求名施。⑭不毀譽施。無慢非慢施。⑭無熱惱施。⑭不悔心施。不自讚施。⑭無雜穢施。⑭不望業報施。⑨無定處施。⑧⑭⑯無有瞋怒垢愛等施。有來乞者不惱害施。無輕易施。⑭不顯面施。不撩擲施。無不故施。⑭無手不與施。⑮無不常施。無斷絕施。⑮無嫉慢施。⑮無齊限施。⑮如其所許不貿易施。無有堪任不堪任施。⑮無非福田施。⑮不輕小施。不讚多施。無衰耗施。⑮不求後生施。⑮不求自在得財寶施。⑮不求釋梵護世天王轉輪聖王諸果報施。⑮不願聲聞緣覺乘施。不求王子得自在施。不爲一世故施。無厭足施。⑯無不迴向一切智施。無不淨施。無不時施。無刀毒施。無惱衆生施。菩薩行施。⑯不爲智者之所輕笑。何以故。觀空寂行施。是故無盡。無作所熏施。是故無盡。出三有相施。是故無盡。⑯不取處施。是故無盡。爲解脫果是施無盡。爲伏衆魔是施無盡。爲斷結愛是施無盡。爲增上施是故無盡。善分別施是故無盡。助菩提施是故無盡。正迴向施是故無盡。莊嚴道場解脫果施是故無盡。是施無邊是故無盡。是施無壞是故無盡。是施不斷是故無盡。是施廣大是故無盡。是施無住是故無盡。是施無伏是故無盡。無等等施是故無盡。是施進趣一切種智是故無盡。唯、舍利弗。是名菩薩修行布施而不可盡。

略 号

D : sDe dge ed. (チベット大蔵経デルゲ版)

P : Peking ed. (チベット大蔵経北京版)

H : Lhasa ed. (チベット大蔵経ラサ版)

BHS. I. : Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Vol. I : Grammar

BHS. II. : Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Vol. II : Dictionary

T : 『大正新脩大蔵経』

『梵和』 : 『漢訳対照梵和大辞典』

男 : 男性

中 : 中性

形 : 形容詞

m. masculine 男性

nt./n. neuter 中性

f. : feminine 女性

sg. : singular 単数

pl. : plural 複数

pers. : person, 人称

Nom. : nominative 主格

Ac. : accusative 目的格

Gen. : genitive 属格

Abl. : ablative 従格

Loc. : locative, 処格

Voc. : vocative 呼格

Pres. : present 現在

opt. : optative 願望法

Ipv. : imperative 命令法

caus. : causative, 使役活用

fn. : footnote.

参考文献

<一次文献>

1、梵文テキスト

イエンス・ブローホルビック(Jens Braarvig), 松田和信他校訂

Bodhisattvapiṭaka-sūtra, 未出版.

木村高尉校訂

[1985]*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā II・III*, 日本東京：山喜房佛書林.

2、大蔵経

①漢文大蔵経（ピンイン順）：

安法欽 訳：

『佛説道神足無極变化経』（T17, no.816）

般若 訳：

『大乘理趣六波羅蜜多経』（T8, no.261）

『大乘本生心地観経』『波羅蜜多品第八』（T3, no.159）

般若・牟尼室利 訳：

『守護國界主陀羅尼経』『入如來不思議甚深事業品第五之一』（T19, no.997）

毘目智仙等 訳：

『三具足経憂波提舍』（T26, no.1534）

菩提流支 訳：

『大薩遮尼乾子所説経』『如來無過功德品第八之三』（T9, no.272）

『弥勒菩薩所問経論』（T26, no.1525）

菩提流志 訳：

『大寶積経』『優波離会第二十四』（T11, no.310）

『大寶積経』『功德寶花敷菩薩会第三十四』（T11, no.310）

『大寶積経』『不動如來会第六之二菩薩衆品第四』（T11, no.310）

曼陀羅仙・僧伽婆羅 訳：

『大乘寶雲経』『安樂行品第五』（T16, no.659）

弥勒 説, 玄奘 訳：

『瑜伽師地論』『攝決擇分中菩薩地之三』（T30, no.1579）

『瑜伽師地論』『本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處力種姓品第八』（同上）

『瑜伽師地論』「本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處菩薩功德品第十八」（同上）

『瑜伽師地論』「本地分中菩薩地第十五第三持究竟瑜伽處・建立品第五之二」（同上）

『瑜伽師地論』「本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處菩提分品第十七之三」（同上）

『瑜伽師地論』卷三、第二十七、三十四、四十五（同上）

明佺等 撰：

『大周刊定衆經目錄』卷第五（T55, no.2153）

法護等 訳：

『佛說大乘菩薩藏正法經』（T11, no.316）

法天 訳：

『佛說未曾有正法經』卷第四（T15, no.628）

法賢 訳：

『佛說四品法門經』（T17, no.776）

佛陀耶舍・竺佛念 訳：

『長阿含經』「遊行經第二中」（T1, no.1）

『長阿含經』「遊行經第二後」（同上）

『長阿含經』「世記經・轉輪聖王品第三」（同上）

『四分律』「受戒犍度之一」（T22, no.1428）

佛馱跋陀羅 訳：

『大方廣佛華嚴經』「明法品第十四」（T9, no.278）

『大方廣佛華嚴經』「佛不思議法品第二十八之一」（同上）

『大方廣佛華嚴經』「離世間品第三十三之七」（同上）

『大方廣佛華嚴經』「入法界品第三十四之七」（同上）

法藏 述：

『華嚴經探玄記』卷第十三・「盡第七地」（T35, no.1733）

達摩流支（菩提流志） 訳：

『佛說寶雨經』卷第二（T16, no.660）

達摩笈多 訳：

『起世因本經』「三十三天品中」（T1, no.25）

『大集經』「菩薩念佛三昧分正觀品第十」（T13, no.415）

大目乾連 造，玄奘 訳：

『阿毘達磨法蘊足論』「多界品第二十之一」（T26, no.1537）

道宣 撰：

『大唐內典錄』卷第六、卷第九（T55, no.2149）

『續高僧傳』卷第四（T50, no.2060）

道誠 集：

『釈氏要覽』卷中 (T54, no.2127)

地婆訶羅 訳：

『方廣大莊嚴經』「轉法輪品第二十六之一」 (T3, no.187)

曇無讖 訳：

『大方廣三戒經』卷中 (T11, no.311)

『大方等無想經』卷第六 (T12, no.387)

『大集經』「虚空藏菩薩品第八之四」 (T13, no.397)

『大集經』「海慧菩薩品第五之四」 (T13, no.397)

『大集經』「陀羅尼自在王菩薩品」 (T13, no.397)

『優婆塞戒經』「悲品第三」 (T24, no.1488)

『優婆塞戒經』「雜品之余」 (同上)

『優婆塞戒經』「五戒品第二十二」 (同上)

『優婆塞戒經』「攝取品第十三」 (同上)

『菩薩地持經』「菩薩地持方便處成熟品第六」 (T30, no.1581)

『菩薩地持經』「菩薩地持方便處力種性品第八」 (同上)

『菩薩地持經』「菩薩地持畢竟方便處行品第四」 (同上)

曇摩流支 訳：

『如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經』卷下 (T12, no.357)

瞿曇僧伽提婆 訳：

『增一阿含經』「序品第一」 (T2, no.125)

『增一阿含經』「弟子品第四」第9經 (同上)

『增一阿含經』「護心品第十」第3, 4經 (同上)

『增一阿含經』「有無品第十五」第3經 (同上)

『增一阿含經』「慚愧品第十八」第3經 (同上)

『增一阿含經』「三寶品第二十一」第10經 (同上)

『增一阿含經』「四意斷品第二十六之餘」 (同上)

『增一阿含經』「聲聞品第二十八」第1經 (同上)

『增一阿含經』「八難品第四十二之一」 (同上)

『增一阿含經』「馬血天子問八政品第四十三」 (同上)

那連提耶舍 訳：

『大悲經』「持正法品第六」 (T12, no.380)

『月燈三昧經』卷七、卷十 (T15, no.639)

龍樹 造, 鳩摩羅什 訳：

『大智度論』「初品中菩薩積論第八」 (T25, no.1509)

『大智度論』「積初品中四無量義第三十三」 (同上)

『大智度論』「積大莊嚴品第十五」 (同上)

『大智度論』「積大莊嚴品第十五」 (同上)

『大智度論』「積初品大慈大悲義第四十二」 (同上)

『大智度論』「初品中迴向積論第四十五」 (同上)

『大智度論』「積六度品第六十八之余」 (同上)

『十住毘婆沙論』「入寺品第十七」 (T26, no.1521)

『十住毘婆沙論』「四法品第十九」 (同上)

龍樹 本, 比丘自在 積, 達磨笈多 訳 :

『菩提資糧論』卷第一、二 (T32, no.1660)

聶承遠 訳 :

『佛説超日明三昧經』 (T15, no.638)

勒那摩提 訳 :

『究竟一乘寶性論』「一切衆生有如來藏品第五」 (T31, no.1611)

劉謐 撰:

『三教平心論』卷下 (T52, no.2117)

康僧鎧 訳

『大寶積經』「郁伽長者會第十九」 (T11, no.310)

窺基 撰 :

『瑜伽師地論略纂』卷第二 (T43, no.1829)

『成唯識論述記』卷第八末 (T43, no.1830)

『辯中邊論述記』「辯真實品第三」 (T44, no.1835)

慧遠 述 :

『大乘義章』卷第十一・「四無量義八門分別」 (T44, no.1851)

慧立 本, 彥悰 箋:

『大唐大慈恩寺三藏法師傳』卷第三、卷第六 (T50, no.2053)

迦旃延子 造, 五百羅漢 積, 浮陀跋摩・道泰等 訳 :

『阿毘曇毘婆沙論』「雜犍度世第一法品之三」 (T28, no.1546)

吉藏 撰 :

『法華義疏』「安樂行品第十四」 (T34, no.1721)

基辨 撰 :

『大乘法苑義林章師子頻伸鈔』卷第十六 (T71, no.2323)

鳩摩羅什 訳 :

『小品般若波羅蜜經』「深心求菩提品第二十」(T8, no.227)

『摩訶般若波羅蜜經』「三慧品第七十」(同上)

『摩訶般若波羅蜜經』「方便品第六十九」(同上)

『摩訶般若波羅蜜經』「兩過品第四十七」(同上)

『梵網經』卷下(T24, no.1484)

『菩薩藏經』(=『大宝積經・富樓那會』)(T11, no.310)

『持世經』「初品第一」(T14, no.482)

『持世經』「囑累品第十二」(同上)

『持世經』「本事品第十一」(同上)

『佛說華手經』「網明品第三」、「如相品第四」(T16, no.657)

金剛智 訳：

『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』(T18, no.867)

静泰 撰：

『衆經目錄』卷第一(T55, no.2148)

靖邁 撰：

『古今訳経図記』卷第四(T55, no.2151)

覺岸 編：

『釈氏稽古略』(T49, no.2037)

求那跋摩 訳：

『優婆塞五戒威儀經』(T24, no.1503)

『菩薩善戒經』「菩薩地功德品第二十」、「畢竟地住品第六」(T30, no.1582)

求那跋陀羅 訳：

『雜阿含經』第334經、592經、604經、999經、1106經、1326經(T2, no.99)

『大方廣寶篋經』卷下(T14, no.462)

瞿曇僧伽提婆 訳：

『中阿含經』第67經、152經、181經(T1, no.26)

玄奘 訳：

『大宝積經』「菩薩藏會」(T11, no.310)

『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』(T49, no.2030)

『大般若波羅蜜多經』「第十六般若波羅蜜多分之二」(T7, no.220)

玄奘 撰：

『寺沙門玄奘上表記』「進經論等表」(T52, no.2119)

玄則 製：

『大般若波羅蜜多經』「初會序」(T5, no.220)

湛慧 撰：

『成唯識論述記集成編』卷第四 (T67, no.2266)

智嚴・宝雲 訳：

『大集經』 「無盡意菩薩品」 (T13, no.316)

支謙 訳：

『梵摩渝經』 (T1, no.76)

『佛說維摩詰經』 (T14, no.474)

支婁迦讖 訳：

『佛說阿闍世王經』卷下 (T15, no.626)

智昇 撰：

『開元積教錄』卷第八、卷第九 (T55, no.2154)

志磐 撰：

『佛祖統紀』 「諸宗立教志第十三」 (T50, no.2035)

知礼 述：

『金光明經玄義拾遺記』卷第六 (T39, no.1784)

智旭 撰：

『閱藏知津』卷三 (『明版嘉興大藏經』,徑山藏版,vol.31,台北,新文豐出版公司,1987年)

竺法護 訳：

『度世品經』卷第三、第五 (T10, no.292)

『文殊師利佛土嚴淨經』卷下 (T11, no.318)

『等集衆德三昧經』 (T12, no.381)

『大哀經』 「道慧品第八」 (T13, no.398)

『阿差末菩薩經』卷七 (T13, no.403)

『宝女所問經』 「十八不共法品第八」 (T13, no.399)

『賢劫經』 「法師品第四」 (T14, no.425)

『持人菩薩經』 「囑累品第十五」 (T14, no.481)

『文殊師利普超三昧經』 「三藏品第七」 (T15, no.627)

『佛說魔逆經』 (T15, no.589)

竺佛念 訳：

『菩薩處胎經』 「出經品第三十八」 (T12, no.384)

澄觀 述：

『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』卷第九十 (T36, no.1736)

澄禪 撰：

『三論玄義檢幽集』卷第六 (T70, no.2300)

實叉難陀 訳：

『大方廣佛華嚴經』 「十地品第二十六之四」 (T9, no.279)

『大方廣佛華嚴經』 「佛不思議法品第三十三之一」 (同上)

『大方廣佛華嚴經』 「離世間品第三十八之五」 (同上)

施護 訳：

『佛說大迦葉問大寶積正法經』 卷第一 (T12, no.352)

世親 造, 鳩摩羅什 訳：

『發菩提心經論』 「檀波羅蜜品第四」 (T32, no.1659)

世親 造, 眞諦 訳：

『中辺分別論』 「真實品第三」 (T31, no.1599)

『攝大乘論釈』 「無等聖教章第一」 (T31, no.1595)

闍那崛多 訳：

『起世經』 「三十三天品第八之二」 (T1, no.24)

『四童子三昧經』 (T12, no.379)

『大集經』 ・ 「賢護分・思惟品第一」 (T13, no.416)

『佛說諸法本無經』 卷中 (T15, no.651)

『大威德陀羅尼經』 (T21, no.1341)

僧伽婆羅 訳：

『度一切諸佛境界智嚴經』 (T12, no.358)

『文殊師利問經』 「囑累品第十七」 (T14, no.468)

『菩薩藏經』 (T24, no.1491)

義淨 訳：

『根本說一切有部毘奈耶破僧事』 卷第十八 (T24, no.1450)

蘊聞 編：

『大慧普覺禪師書』 「答孫知縣」 (T47, no.1998A)

無著 造, 玄奘 訳：

『顯揚聖教論』 卷第十四、卷第十六 (T3, no.1602)

『大乘阿毘達磨集論』 「決擇分中法品第二」 (T31, no.1605)

無著 造, 波羅頗蜜多羅 訳：

『大乘莊嚴經論』 「述求品第十二之一」 (T31, no.1604)

五百大阿羅漢等 造, 玄奘 訳：

『阿毘達磨大毘婆沙論』 「雜蘊第一中補特伽羅納息第三之二」 (T27, no.1545)

『阿毘達磨大毘婆沙論』 「雜蘊第一中世第一法納息第一之五」 (同上)

『阿毘達磨大毘婆沙論』 「定蘊第七中不還納息第四之五」 (同上)

無性 造, 玄奘 訳 :

『撰大乘論釈』 「増上戒學分第七」 (T31, no.1595)

惟淨等 訳 :

『佛説海意菩薩所問淨印法門經』 卷第十一 (T13, no.400)

(翻訳者や著者が不明確なもの)

『別訳雑阿含經』 第35經 (T2, no.100)

『佛説菩薩本行經』 卷中 (T3, no.155)

『佛説摩訶衍寶嚴經』 (T12, no.351)

『受十善戒經』 「十惡業品第一」 (T24, no.1486)

『佛説出家功德經』 (T16, no.707)

『分別功德論』 卷第一、卷第二 (T25, no.1507)

②藏文大藏經:

འཕགས་པ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ལྷན་པོས་བྲིས་པའི་ཆེན་པོའི་མདོ། (『菩薩藏經』), 宝積部, デルゲ版 No.56, 北京版 No.760, ラサ版 No.56.

འཕགས་པ་སྤྱོད་སྤྱོད་མེད་དཔལ་བསྟན་པ་ཞེས་བྲིས་པའི་ཆེན་པོའི་མདོ། (『無尽意所説經』), 北京版 No.842.

ཤེས་རབ་ཀྱི་པ་རོལ་དུ་བྱེད་པ་སྟོང་ཕྱག་ཉི་ལྔ་པ། (『二万五千頌般若經』) 第29品, 般若部, 北京版 No.731.

ཤེས་རབ་ཀྱི་པ་རོལ་དུ་བྱེད་པ་སྟོང་ཕྱག་བཅུ། (『十万頌般若經』) 第30品, 般若部, 北京版 No.730, ラサ版 No.9.

③和訳『南傳大藏經』:

立花俊道訳「小部・本生經・因縁物語」(和訳『南傳大藏經』第28卷,大正新脩大藏經刊行会, 1942年再刊發行, pp. 38-51)

<二次文献>

①和文(五十音順):

伊藤瑞叡

[1967] 「十地經における dharma-paryāya なる成語の用例について」『鈴木学術財団研究年報』通号4, 日本東京: 鈴木学術財団, pp. 140-144.

宇井伯寿

[1959] 『實性論研究』, 日本東京: 岩波書店.

[1966] 『印度哲学研究』第4卷, 日本東京: 岩波書店.

榎本文雄

[1980] 「Udānavarga 諸本と雑阿含,別訳阿含經,中阿含經の部派帰属」『印度学仏教学研究』通

号56, 日本東京:日本印度学仏教学会, pp. 55-57.

小川一乗

[1986] 「菩薩の大悲について—チャンドラキールティの菩薩観—」『菩薩観』日本仏教学会編, 日本京都:平楽寺書店, pp. 143-155.

小野田俊蔵・上田千年

[1999] 『蔵訳無量寿経異本校合表(稿本)・解説』, 「浄土教の総合的研究」研究班編, 日本京都: 佛教大学総合研究所, pp. 3-9.

川越英真

[2005] 「『パンタン目録』の研究」『日本西蔵学会會報』通号51, 日本東京:日本西蔵学会, pp. 115-131.

香川真二

[2005] 「教化者としての在家菩薩」『印度学仏教学研究』通号106, 日本東京:日本印度学仏教学会, pp. 632-635.

加藤純一郎

[2002] 「布施の変容について」『インド哲学仏教学研究』通号9, 日本東京:東京大学大学院人文社会系研究科・文学部インド哲学仏教学研究室, pp. 41-52.

雲井昭善

[1975] 「原始仏教に現れた愛の観念」『仏教思想Ⅰ愛』, 日本京都:平楽寺書店, pp. 37-93.

権田雷斧

[1994] 『権田雷斧著作集』, 日本新潟県:うしお書店.

桜部建

[1972] 「*karuṇā, mahākaruṇā*, 大悲」『佐藤博士古稀記念仏教思想論叢』, 日本東京:山喜房仏書林, pp.123-129.

佐藤達玄

[1956] 「律蔵に現れた僧伽の財物所有について」『印度学仏教学研究』通号7, 日本東京:日本印度学仏教学会, pp.110-111.

佐々木閑

[1991] 「『宝性論』の煩惱生起説」『印度学仏教学研究』通号40, 日本東京:日本印度学仏教学会, pp. 389-383.

[2009] 『出家とはなにか』, 日本東京:大蔵出版.

島義厚

[2007] 「四無量心と廻向」『日本仏教学会年報』通号72, 日本京都:日本仏教学会西部事務所, pp. 43-55.

杉本卓洲

[1988] 「パーリ仏典に見られる菩薩」『パーリ学仏教文化』, 創刊号, 日本愛知県:パーリ学

仏教文化学会, pp. 97-120.

相馬一意

[1978] 「遺日摩尼經について」『印度学佛教学研究』第27卷, 日本東京: 日本印度学仏教学会, pp. 164-165.

高崎直道

[1974] 「〈菩薩藏經〉について—玄奘訳『大菩薩藏經』を中心に—」『印度学佛教学研究』通号22, 日本東京: 日本印度学仏教学会, pp. 46-54.

種村隆元

[2016] 「Ratnarakṣita著Padminī第22章前半—Preliminary Editionおよび訳註—」『現代密教』27, 日本東京: 智山伝法院, pp. 73-91.

台東区立書道博物館 編

[2015] 『台東区立書道博物館図録』, 日本東京: 台東区芸術文化財団.

中村瑞隆

[1967] 『藏和对訳究竟一乗宝性論研究』, 日本東京: 鈴木学術財団.

長尾雅人

[1940] 「異門 (paryāya) といふことば」『宗教研究』通号106, 日本東京: 日本宗教学会, pp. 324-331.

早島理

[1991] 「善巧kauśalyaということ」『印度学佛教学研究』通号40, 日本東京: 日本印度学仏教学会, pp. 146-153.

袴谷憲昭

[2005] 「出家菩薩と在家菩薩」『大乘仏教思想の研究: 村中祐生先生古稀記念論文集』, 日本東京: 山喜房仏書林, pp. 3-18.

平川彰

[1963] 「出家者の財施」『印度学仏教学研究』通号22, 日本東京: 日本印度学仏教学会, pp. 737-742.

[1971] 「菩薩藏經と宝積經」『宗教研究』, 日本東京: 日本宗教学会, pp. 1-25.

[1991] 「初期大乘仏教における在家と出家」『仏教学』通号31, 日本東京: 山喜房仏書林, pp. 1-39.

藤田宏達

[1975] 「初期大乘經典にあらわれた愛」『仏教思想 I 愛』, 日本京都: 平楽寺書店, pp. 97-135.

古山健一

[1997] 「パーリ十波羅蜜について」『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』通号30, 日本東京: 駒澤大学大学院仏教学研究會, pp. 81-103.

前田恵学

[1957] 「パーリ聖典に見られるパリヤーヤの性格とその種々相」『仏教史学』第6巻, 第3号, 日本東京: 仏教史学会, pp. 29-46.

[1964] 『原始仏教聖典の成立史研究』, 日本東京: 山喜房佛書林.

松田和信

[2016] 「菩薩藏經の虚妄分別」(レジュメ), 日本京都: 佛教大学仏教学専攻中間発表会, 全3頁.

村上真完

[1998] 「大乘經典の創作 (sūtrāntābhinirhāra, 能演諸經, 能說諸經)」 『論集』 通号25, 仙台: 印度学宗教学会, pp. 1-20.

室寺義仁

[2004] 「経部—初期Sautrānta—」 『高野山大学論叢』 通号39, 日本高野山: 高野山大学, pp. 1-24.

[2011] 「「經典」‘sūtrānta’—‘sūtrānta’の玄奘訳語「經典」を巡って—」 『日本佛教學會年報』 通号76, 日本京都: 日本仏教学会西部事務所, pp. 147-165.

山田龍城

[1977] 『梵語佛典の諸文献』, 日本京都: 平樂寺書店.

芳村修基

[1974] 『インド大乘仏教思想研究』, 日本京都: 百華苑.

②英文 (アルファベット順)

Jonathan A. Silk

[2014] *Talking the Vimalakīrtinirdeśa Seriously*, Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2013, Volume XVII, Tokyo, Japan: The international Research Institute for Advanced Buddhology Soka University, pp. 157-188.

J. W. De Jong

[1996] *Ulrich Pagel, The Bodhisattvapīṭaka*, Indo-Iranian Journal, Vol.39, No.2, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers. pp. 176-182.

Jens Braarvig

[2014] *Akṣayamatīrdeśa*, “Note on the *Bodhisattvapīṭaka* (Bspt) and the *Akṣayamatīrdeśa* (Aks)”, <https://www2.hf.uio.no/polyglotta/index.php?page=volume&vid=424>.

Milan Shakyas

[2010] *Essentials of Sautrāntika Philosophy*, Light of Wisdom, Vol. I, No.1, Hong Kong, China: Rangjung Yeshe Publications, pp. 46-61.

Miyazaki Tensho:

[2010] *Defilement (kleśa) Originating from Erroneous Judgment (ayoniśomanasikāra) According to the Mahāyāna Sūtras*, Journal of Indian and Buddhist Studies Vol. 58, No.3, Tokyo, Japan: Japanese Association of Indian and Buddhist Studies, pp. 76-81.

Paul G. Hackett :

[2012] *A Catalogue of the Comparative Kangyur (bka'gyur dpe bsdur ma)*, The American Institute of Buddhist Studies Columbia University Center for Buddhist Studies and Tibet House, New York, US..
Ulrich Pagel:

[1995] *The Bodhisattvapiṭaka*, The Institute of Buddhist Studies, Tring, UK..

③現代漢語（ピンイン順）：

杜 繼文

[2008] 『漢訳佛教經典哲学』（下册），中国江苏：江蘇人民出版社。

呂 澂

[1953] 「慈恩宗（上）」『現代佛学』，9月号，中国北京：现代佛学社，pp.6-10.

徐 天池

[2007] 「论佛经翻译的译场」『四川師範大学学报（社会科学版）』，第34卷，第4期，中国四川：四川師範大学，pp.91-95.

印 順

[1981] 『初期大乘佛教之起源與開展』，中国台湾：正聞出版社。

<辞書、文法書>（年代順）：

Monier Monier-Williams

[1899] *A Sanskrit-English Dictionary*, Motilal Banarsidass Pub., Delhi, India, Reprint, 2011.

Chandra Das

[1902] *Tibetan-English Dictionary*, RINSEN BOOK CO., Kyoto, Japan, 10th reprinting compact edition, 2012.

T.W. Rhys Davids and William Stede

[1921-1925] *Pāli-English Dictionary*, Motilal Banarsidass Pub., Delhi, India, 4th Reprint, 2015.

望月信享

[1933] 『望月仏教大辞典』第三卷、第四卷，日本東京：世界聖典刊行協會，増訂版，1958.

Franklin Edgerton

[1953] *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Vol. I . II.*, Motilal Banarsidass Pub., Delhi, India, Reprint, 2004.

水野弘元

[1968] 『パーリ語辞典』，日本東京：春秋社，増補改訂版，2013.

張 怡荪 主編

[1985] 『藏漢大辞典』，中国北京：民族出版社，第14次印刷，2013.

鈴木學術財団 編

[1986] 『漢訳対照梵和大辞典』，日本東京：山喜房佛書林，新訂版，2012.

あとがき

2010年9月に中国佛教協会・中国佛学院から交流協定に基づく留学生として佛教大学に派遣され、7年を京都で過ごしました。この間、浄土宗と佛教大学から、住居の提供、奨学金の給付、学費の免除などの多大な援助を受けることができました。これにより、生活面には何の憂いもなく、研究に取り組むことができました。7年間の研究の成果を学位請求論文にまとめることができたのも、まず何より私の研究生活を支えていただいた浄土宗と佛教大学のお蔭であったと深く感謝しております。

佛教大学に留学し、客員研究員を経て2013年4月に博士後期課程に入学した後、研究活動全般にわたり格別なる御指導とご高配を賜りました松田和信先生に心より感謝申し上げます。指導を受けている学生・院生に対して、特に私と同じ留学生に対して、まるで自分の子供のように愛情をもって接しておられる松田先生に7年間の長きにわたり指導を受けることができたことは私には望外の幸せでした。さらに、佛教大学において様々な御教示を賜りました福原隆善元学長先生、山極伸之前学長先生、田中典彦現学長先生、小野田俊蔵先生、並川孝儀先生に心より感謝申し上げます。

本研究の対象となった「宝積部」第12経の『菩薩藏經』について、西藏自治区ラサのポタラ宮に保存されている梵文写本より作成された未出版のサンスクリット語テキストを提供していただいたオスロ大学教授（ノルウェー学士院会員）のイエンス・ブロールビック (Jens Braarvig) 先生と松田和信先生に心より感謝申し上げます。

本論文を予定通り提出することができたのは、指導教授の松田和信先生からご指導を頂いたほか、同じゼミの田中裕成さんに本論文全体に目を通していただいて、詳細かつ重要な指摘をいただいたことによります。さらに院生として日常の研究活動中に、田中裕成さんには様々お世話になりました。ここに心より感謝申し上げます。佛教大学国際交流課の松村公栄さん、京都松月院の加藤弘孝博士、無量光庵の番地章夫上人、さらに同じゼミ生であった平原崇雄さんにもお世話になりました。ここに心より感謝申し上げます。

感謝申し上げたい方々の名前はまだ沢山ありますが、ここには一々挙げられません。長きにわたり、浄土宗と佛教大学の多くの方々が提供して下さった友好的な雰囲気の中で私が留学生活を送ることができたことはいくら感謝しても感謝しきれません。

最後に、仏教を通して中日間の友好交流に大きな貢献をなされた故水谷幸正先生に敬意を表したいと思います。そして中日間の仏教の友好交流に努力されている方々にも敬意を表したいと思います。

2017年11月21日

象 本

菩薩藏經の梵漢藏四本対照研究 正誤表

本文の部分			
頁	行	誤	正
6	20-21	三訳本	漢訳本
19	15	このような〔經 (sūtra) のまとめ的な教説〕	このような經 (sūtra) のまとめ的な教説
35	19	菩薩藏斷一切衆生疑	菩薩藏斷一切衆生疑
49	30	藏文訳	藏訳
75	3	世尊の前から	世尊の前で
75	4	善逝の前から	善逝の前で
79	25	[2017, p. 3]	[2016, p. 3]
90	16	破壊されないべきものであるから	破壊されないべきものであるから
101	27	注視	重視
128	表下 3	当該箇所が『菩薩藏經』の道善巧と同様に、	当該箇所が玄奘訳『菩薩藏經』の道善巧と同様に、
139	1	一致しているものの	一致しているものの
146	9	覆われており	覆われており
146	10	覆われており	覆われており
156	23	光明 (arciṣah) ³²⁹ 背に消失される。	光明 (arciṣah) ³²⁹ は背に消失される。
178	表下 1	先の章で	前項で
181	23	と対応する語が見いだせない	と対応する語がしか見いだせない
187	13	六波羅蜜	六波羅蜜多
187	16	布施波羅蜜品	布施波羅蜜多品
190	表下 4	そこでの菩薩はの妻・	そこでの菩薩は妻・
190	表下 5	ここでの菩薩はの妻・	ここでの菩薩は妻・
211	10	jāto bhūṭ*	jāto (‘)bhūṭ*
227	8	夜叉	藥叉
275	22	菩提流志 訳：	菩提流志 (達摩流支) 訳：
276	4	『瑜伽師地論』卷三、第二十七、三十四、	『瑜伽師地論』卷第三、二十七、三十四、
276	25	達摩流支 訳：	達摩流支 (菩提流志) 訳：
脚注の部分			
頁	行		
2	4	Scriptural	Scriptural
2	5	Elaven	Eleven
3	6	perfectongs,	perfections,
9	1	Kumbhīrayakṣa のことであろうか。	Kumbhīrayakṣa のことであろうか。
9	8-9	བཞུགས་ནས་བཅོམ་ཐོན་འདས་ཀྱིས་སྒྲིབ་པ་བྱ་བ་ལྟེན་ནས་ལ་ཚེགས་ལུ་བཅད་པ་འདྲི་དག་གསུངས་པ།	བཞུགས་ནས་བཅོམ་ཐོན་འདས་ཀྱིས་སྒྲིབ་པ་བྱ་བ་ལྟེན་ནས་ལ་ཚེགས་ལུ་བཅད་པ་འདྲི་དག་གསུངས་པ།
25	14	三つのバージョンの成立の年代につて、	三つのバージョンの成立の年代について、
63	32	而不今 ¹³⁵ 作諸損害事。	而不今作諸損害事。
64	50	མིང་པའི་ ¹³⁶ རྩ་བ་ལས་བྱུང་བའི་ཚས་བསྟན་པ་	མིང་པའི་རྩ་བ་ལས་བྱུང་བའི་ཚས་བསྟན་པ་
65	6	〔九者〕執取縁故即不防護 ¹³⁸ 。	〔九者〕執取縁故即不防護。
66	34	〔七者〕無聞 ¹⁴¹ 垢雜	〔七者〕無聞垢雜
69	8	諸長者若 ¹⁴⁶ 如是學。	諸長者若如是學。
69	9	無餘依清淨涅槃	無餘依清淨涅槃 [。]
70	21	決定無智離智 ¹⁴⁶ 所生。	決定無智離智所生。
79	2	[2017, p. 2]	[2016, p. 2]
81	1	[2017, p. 3]	[2016, p. 3]
85	13	列樹幢旛 ¹⁷¹ 懸諸寶蓋。	列樹幢旛懸諸寶蓋。
85	22	復 ¹⁷¹ 置殊	復置殊
108	8	yad ākāśakṣetrajñānāvataranatedam ²⁰⁴ ucyate	yad ākāśakṣetrajñānāvataranatedam ucyate
109	4	本稿の第四章で述べてい。	本稿の第四章で述べてい。
110	7	(‘)dhvani tathāgato rhan	(‘)dhvani tathāgato (‘)rhan
134	32	皆依正 ²⁷¹ 智。	皆依正智。
150	31	無愛著 ³⁰⁶ 出離故。	無愛著出離故。
183	5	藏訳 (D Ga100a5-b2, P Wi112a5-b2, H218a5-b3) :	366 藏訳 (D Ga100a5-b2, P Wi112a5-b2, H218a5-b3) :
190	1	阿含經点には、	阿含經典には、
208	17	於 ⁴³⁶ 瞻部洲有佛出世。	於瞻部洲有佛出世。
217	7	七千 ⁴⁶⁵ の仏を奉仕して	七千の仏を奉仕して
255	21	『大乘理趣六波羅蜜多經・静波羅密多品』第九之一	『大乘理趣六波羅蜜多經』『静波羅密多品第九之一』